

福 岡 市

柏 原 遺 跡 群 I

— 縄文時代遺跡F遺跡の調査 —
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第90集

1 9 8 3

福岡市教育委員会

福 岡 市

柏 原 遺 跡 群 I

—縄文時代遺跡F遺跡の調査—
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第90集



1 9 8 3

福岡市教育委員会

序 文

住宅・都市整備公団は、福岡市南区柏原地区に68haにおよぶ開発事業を計画し、福岡市教育委員会に予定地内の埋蔵文化財の調査を依頼する運びとなりました。

委託を受けた福岡市教育委員会では、数度の現地踏査の上、昭和54年5月から発掘調査を開始し、現在も継続しています。

本書は、昭和55年に調査を実施したF地点の縄文時代の遺構と、出土遺物を、収録したものです。

調査によって、縄文時代開始期の住居址など、これまで出上例の少なかった貴重な資料が検出され、その中の石組みの炉址は、保存処理を行ない、福岡市埋蔵文化財センターで公開しています。

本書が、埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となるとともに、合わせ研究資料としても活用いただければ幸いです。

発掘調査から出土資料の整理に至るまで、住宅・都市整備公団、調査指導委員の先生をはじめ、多くの人々の御協力に対し、深甚の謝意を表するものです。

昭和58年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 西津茂美

例 言

1. 本書は住宅・都市整備公団が計画した柏原地区の団地建設に伴う事前調査として、福岡市教育委員会文化部文化課が1979年から発掘調査を進めている柏原遺跡群の調査報告書の第1集である。
2. 本書の内容は柏原遺跡群の中でF遺跡とした縄文時代遺跡の報告であり、F遺跡に存在する古墳については後の古墳の報告にゆずる。
3. 本書の執筆には山崎純男、小畑弘己があたり、各文担は文末に銘記した。
4. 本書に使用した図の作成は山崎、小畑、西谷大、盛本鮎、豊崎晃一、米倉秀紀、吉武学、入江久成、谷口武範、坂田和弘、平川祐介、宮田昌之、福岡大学歴史研究部考古学班があたった。
5. 本書の図の製図は山崎、小畑、平川、西谷があたった。
6. 本書に使用した写真は山崎、松村道博、小畑によるものである。
7. 本書に使用した方位はすべて磁北である。
8. 整理の関係で本書に収録できなかった遺物、考察は、第2集以降の報告書に収録する予定である。
9. 本書の編集は山崎がこれにあたった。

本文目次

第1章 序説	1
1. はじめに	1
2. 調査の体制	1
第2章 遺跡の位置と歴史的環境	3
1. 遺跡の位置	3
2. 開発地域内の遺跡群の立地と概要	3
3. F遺跡の立地	8
4. 周辺遺跡	9
第3章 調査の概要	10
第4章 調査の記録	11
1. 発掘区の設定	11
2. 層序	11
3. IV層の遺構と遺物	17
(1) 遺構	17
(2) 遺物	17
4. III層の遺構と遺物	18
(1) 遺構の位置と遺構	18
(2) 土器の出土状況と土器	21
(3) 石器の出土状況と石器	48
(4) 小結	58
5. II層の遺構と遺物	65
(1) 遺構の位置と遺構	65
(2) 土器の出土状況と土器	84
(3) 石器の出土状況と石器	138
(4) 小結	184
6. I層の遺構と遺物	191
(1) 遺構の位置と遺構	191
(2) 土器の出土状況と土器	195
(3) 石器の出土状況と石器	218
(4) 小結	238

7. その他の石器	243
第5章 遺構、遺物の分析	247
1. 土器の編年的検討	247
2. 剥片剥離と石鏃の分析	251
3. 石器の接合とその分布	265
4. 各時期の遺構・遺物の分布と生活空間	288
第6章 まとめ	293

挿 図 目 次

第1図	柏原遺跡の位置と周辺の縄文時代遺跡	4
第2図	柏原遺跡群の立地と遺跡の分布	5
第3図	F遺跡の地形と発掘区	7
第4図	発掘区の設定と土層断面の位置	12
第5図	土層断面図Ⅰ	13
第6図	土層断面図Ⅱ(折り込み)	15
第7図	Ⅳ層の遺構分布	16
第8図	炉実測図	17
第9図	ナイフ形石器実測図	18
第10図	Ⅲ層の遺構分布	19
第11図	遺構実測図	20
第12図	燃系土器出土分布図	22
第13図	燃系土器実測図	23
第14図	刺突文土器Ⅰの出土分布図	24
第15図	刺突文土器Ⅰ実測図	25
第16図	刺突文土器Ⅱの出土分布図	27
第17図	刺突文土器Ⅲの出土分布図	28
第18図	刺突文土器Ⅳ～Ⅴの出土分布図	29
第19図	刺突文土器Ⅱ～Ⅴ実測図	30
第20図	刺突文土器Ⅵの出土分布図	32
第21図	刺突文土器Ⅵ実測図	33

第 22 図	条痕文土器Ⅰの出土分布図	34
第 23 図	条痕文土器Ⅰ実測図Ⅰ	35
第 24 図	条痕文土器Ⅰ実測図Ⅱ	36
第 25 図	条痕文土器Ⅱの出土分布図	38
第 26 図	条痕文土器Ⅱ実測図	39
第 27 図	条痕文土器Ⅲの出土分布図	40
第 28 図	条痕文土器Ⅲ実測図	41
第 29 図	条痕文土器Ⅳの出土分布図	42
第 30 図	条痕文土器Ⅳ実測図	43
第 31 図	条痕文土器Ⅴの出土分布図	44
第 32 図	条痕文土器Ⅴ実測図	45
第 33 図	条痕文土器Ⅵの出土分布図	46
第 34 図	条痕文土器Ⅵ実測図	47
第 35 図	Ⅲ層の石器出土分布図	48~49
第 36 図	第1・2・3ブロック出土石器実測図	51
第 37 図	第4ブロック出土石器実測図	52
第 38 図	第5ブロック出土石器実測図Ⅰ	54
第 39 図	第5ブロック出土石器実測図Ⅱ	55
第 40 図	第5ブロック出土石器実測図Ⅲ	57
第 41 図	Ⅲ層出土土器の分布図	59
第 42 図	Ⅲ層出土土器の垂直分布図	61
第 43 図	Ⅱ層の遺構の分布	66
第 44 図	崖崩れの範囲	67
第 45 図	第1号炉址実測図	68
第 46 図	第2号炉址実測図	69
第 47 図	第3号炉址実測図	70
第 48 図	第4号炉址実測図	71
第 49 図	第5号炉址実測図	72
第 50 図	第6号炉址実測図	73
第 51 図	第7号炉址実測図	74
第 52 図	第8号炉址実測図	75
第 53 図	第9号炉址実測図	76
第 54 図	第10号炉址実測図	77

第 55 図	第11号炉址実測図	78
第 56 図	第12号炉址実測図 I	80
第 57 図	第12号炉址実測図 II	81
第 58 図	第13・14号炉址実測図	82
第 59 図	第15号炉址実測図	83
第 60 図	押型文土器 I の出土分布図	86
第 61 図	押型文土器 I 実測図	87
第 62 図	押型文土器 II の出土分布図	88
第 63 図	押型文土器 II 実測図	89
第 64 図	押型文土器 III の出土分布図	90
第 65 図	押型文土器 III 実測図	91
第 66 図	押型文土器 IV の出土分布図	92
第 67 図	押型文土器 IV 実測図	93
第 68 図	押型文土器 V の出土分布図	94
第 69 図	押型文土器 V 実測図	95
第 70 図	押型文土器 VI の出土分布図	96
第 71 図	押型文土器 VI 実測図	97
第 72 図	押型文土器 VII の出土分布図	98
第 73 図	押型文土器 VII 実測図	99
第 74 図	押型文土器 VIII の出土分布図	100
第 75 図	押型文土器 VIII 実測図	101
第 76 図	押型文土器 IX の出土分布図	102
第 77 図	押型文土器 IX 実測図	103
第 78 図	押型文土器 X の出土分布図	104
第 79 図	押型文土器 X 実測図	105
第 80 図	押型文土器 XI の出土分布図	106
第 81 図	押型文土器 XI 実測図	107
第 82 図	押型文土器 XII の出土分布図	108
第 83 図	押型文土器 XII 実測図	109
第 84 図	押型文土器 XIII の出土分布図	110
第 85 図	押型文土器 XIII 実測図	111
第 86 図	押型文土器 XIV の出土分布図	112
第 87 図	押型文土器 XIV 実測図	113

第 88 図	押型文土器 IV の出土分布図	114
第 89 図	押型文土器 IV 実測図	115
第 90 図	押型文土器 VII の出土分布図	116
第 91 図	押型文土器 VII 実測図	117
第 92 図	木葉文土器の出土分布図	118
第 93 図	木葉文土器実測図	119
第 94 図	無文土器 I の出土分布図	120
第 95 図	無文土器 I 実測図	121
第 96 図	無文土器 II の出土分布図	122
第 97 図	無文土器 II 実測図	123
第 98 図	無文土器 III の出土分布図	124
第 99 図	無文土器 III 実測図	125
第 100 図	無文土器 IV の出土分布図	126
第 101 図	無文土器 IV 実測図	127
第 102 図	無文土器 V の出土分布図	128
第 103 図	無文土器 V 実測図	129
第 104 図	無文土器 VI (底部) の出土分布図	130
第 105 図	無文土器 VI (底部) 実測図	131
第 106 図	条痕文土器 I の出土分布図	132
第 107 図	条痕文土器 I 実測図	133
第 108 図	条痕文土器 II の出土分布図	134
第 109 図	条痕文土器 II 実測図	135
第 110 図	条痕文土器 III の出土分布図	136
第 111 図	条痕文土器 III 実測図	137
第 112 図	II 層の石器出土分布図	138~139
第 113 図	第 1 ブロック出土石器実測図 I	140
第 114 図	第 1 ブロック出土石器実測図 II	141
第 115 図	第 1 ブロック出土石器実測図 III	142
第 116 図	第 1 ブロック出土石器実測図 IV	143
第 117 図	第 1 ブロック出土石器実測図 V	145
第 118 図	第 1 ブロック出土石器実測図 VI	146
第 119 図	第 1 ブロック出土石器実測図 VII	147
第 120 図	第 1 ブロック出土石器実測図 VIII	148

第121図	第1ブロック出土石器実測図Ⅸ	149
第122図	第2ブロック出土石器実測図Ⅰ	151
第123図	第2ブロック出土石器実測図Ⅱ	152
第124図	第2ブロック出土石器実測図Ⅲ	153
第125図	第2ブロック出土石器実測図Ⅳ	154
第126図	第2ブロック出土石器実測図Ⅴ	155
第127図	第2ブロック出土石器実測図Ⅵ	156
第128図	第2ブロック出土石器実測図Ⅶ	157
第129図	第3ブロック出土石器実測図Ⅰ	160
第130図	第3ブロック出土石器実測図Ⅱ	161
第131図	第3ブロック出土石器実測図Ⅲ	162
第132図	第3ブロック出土石器実測図Ⅳ	163
第133図	第3ブロック出土石器実測図Ⅴ	164
第134図	第3ブロック出土石器実測図Ⅵ	165
第135図	第3ブロック出土石器実測図Ⅶ	167
第136図	第3ブロック出土石器実測図Ⅷ	168
第137図	第3ブロック出土石器実測図Ⅸ	169
第138図	第3ブロック出土石器実測図Ⅹ	170
第139図	第4ブロック出土石器実測図	172
第140図	第5ブロック出土石器実測図Ⅰ	174
第141図	第5ブロック出土石器実測図Ⅱ	175
第142図	第5ブロック出土石器実測図Ⅲ	176
第143図	第5ブロック出土石器実測図Ⅳ	177
第144図	第6ブロック出土石器実測図Ⅰ	179
第145図	第6ブロック出土石器実測図Ⅱ	180
第146図	第6ブロック出土石器実測図Ⅲ	181
第147図	第7ブロック出土石器実測図	182
第148図	Ⅱ層出土石器の分布図	186
第149図	Ⅰ層の遺構分布	192
第150図	Ⅰ層の遺構実測図Ⅰ	193
第151図	Ⅰ層の遺構実測図Ⅱ	194
第152図	燃糸文土器Ⅰの出土分布図	196
第153図	燃糸文土器Ⅰ実測図	197

第154図	撫糸文土器Ⅱの出土分布図	198
第155図	撫糸文土器Ⅱ実測図Ⅰ	199
第156図	撫糸文土器Ⅱ実測図Ⅱ	200
第157図	撫糸文土器Ⅲの出土分布図	202
第158図	撫糸文土器Ⅲ実測図	203
第159図	撫糸文土器ⅠⅦの出土分布図	204
第160図	撫糸文土器ⅠⅦ実測図	205
第161図	押型文土器Ⅰの出土分布図	206
第162図	押型文土器Ⅰ実測図	207
第163図	平椀式土器の出土分布図	208
第164図	平椀式土器実測図	209
第165図	沈線文土器の出土分布図	210
第166図	沈線文土器実測図	211
第167図	条痕文土器Ⅰの出土分布図	212
第168図	条痕文土器Ⅰ実測図	213
第169図	条痕文土器Ⅱの出土分布図	214
第170図	条痕文土器Ⅱ実測図	215
第171図	無文土器の出土分布図	216
第172図	無文土器実測図	217
第173図	I層の石器出土分布図	218~219
第174図	I層出土石器実測図Ⅰ	220
第175図	I層出土石器実測図Ⅱ	221
第176図	I層出土石器実測図Ⅲ	222
第177図	I層出土石器実測図Ⅳ	223
第178図	I層出土石器実測図Ⅴ	224
第179図	I層出土石器実測図Ⅵ	225
第180図	I層出土石器実測図Ⅶ	226
第181図	I層出土石器実測図Ⅷ	228
第182図	I層出土石器実測図Ⅸ	229
第183図	I層出土石器実測図Ⅹ	230
第184図	I層出土石器実測図Ⅺ	231
第185図	I層出土石器実測図Ⅻ	232
第186図	I層出土石器実測図Ⅼ	234

第 187 図	I 層出土石器実測図 XIV	235
第 188 図	I 層出土石器実測図 XV	236
第 189 図	I 層出土石器実測図 XVI	237
第 190 図	I 層出土土器の分布図	239
第 191 図	その他の石器実測図 I	244
第 192 図	その他の石器実測図 II	245
第 193 図	その他の石器実測図 III	246
第 194 図	F 遺跡出土の土器編年図	248
第 195 図	石核の剥離方向と切り合い関係図 I	252
第 196 図	石核の剥離方向と切り合い関係図 II	253
第 197 図	石核の剥離方向と切り合い関係図 III	254
第 198 図	石鏃の分析図	262
第 199 図	石鏃の層位別形態変遷図	263
第 200 図	I 層石器接合関係図	266
第 201 図	II 層石器接合関係図	267
第 202 図	III 層石器接合関係図	268
第 203 図	石器接合関係実測図 I	269
第 204 図	石器接合関係実測図 II	270
第 205 図	石器接合関係実測図 III	271
第 206 図	石器接合関係実測図 IV	272
第 207 図	石器接合関係実測図 V	273
第 208 図	石器接合関係実測図 VI	275
第 209 図	石器接合関係実測図 VII	276
第 210 図	石器接合関係実測図 VIII	277
第 211 図	石器接合関係実測図 IX	277
第 212 図	石器接合関係実測図 X	277
第 213 図	石器接合関係実測図 XI	280
第 214 図	石器接合関係実測図 XII	281
第 215 図	石器接合関係実測図 XIII	282
第 216 図	石器接合関係実測図 XIV	284
第 217 図	石器接合関係実測図 XV	285
第 218 図	各時期の遺構・遺物の分布と生活空間関係図 I	289
第 219 図	各時期の遺構・遺物の分布と生活空間関係図 II	290

図版目次

- 図版1-(1) 調査前の遺跡全景(北から)
- (2) 調査前の遺跡全景(東から)
- 図版2-(1) 調査後の遺跡全景(西から)
- (2) 調査後の遺跡全景(西から)
- 図版3-(1) 第1凹部近景(南から)
- (2) 第1凹部近景(北から)
- 図版4-(1) 第2凹部近景(東から)
- (2) 第2凹部近景(北から)
- 図版5-(1) 遺跡全景(北から)
- (2) 土層断面
- 図版6-(1) 第2凹部L列西側土層断面
- (2) 第2凹部J列西側土層断面
- 図版7-(1) 29列北側土層断面
- (2) 7列南側土層断面
- 図版8-(1) 第1号竪穴
- (2) 第2号竪穴
- 図版9-(1) 8号炉址
- (2) 2号炉址
- 図版10-(1) 9号炉址
- (2) 3号炉址
- 図版11-(1) 4号炉址(検出状況)
- (2) 4号炉址(投棄際除却後)
- 図版12-(1) 6号炉址
- (2) 5号炉址(検出状況)
- 図版13-(1) 11号炉址(上面より)

- (2) 11号炉址 (側面より)
- 図版14—(1) 11・12号炉址
 - (2)—12号炉址
- 図版15—(1) 13号炉址
 - (2) 14号炉址
- 図版16—(1) 遺物 (土器) 出土状況 I
 - (2) 遺物 (土器) 出土状況 II
- 図版17—(1) 遺物 (石器) 出土状況 I
 - (2) 遺物 (石器) 出土状況 II
- 図版18—(1) 遺物 (石器) 出土状況 III
 - (2) 遺物 (石器) 出土状況 IV
 - (3) 遺物 (石器) 出土状況 V
- 図版19—(1) 撚糸文土器
 - (2) 刺突文土器 II—X
- 図版20—(1) 刺突文土器 I
 - (2) 条痕文土器
- 図版21—(1) 条痕文土器
 - (2) 条痕文土器
- 図版22—(1) 押型文土器
 - (2) 押型文土器
 - (3) 押型文土器
- 図版23—(1) 押型文土器
 - (2) 押型文土器
- 図版24—(1)(2) 押型文土器
 - (3)(4) 無文土器
- 図版25—(1) 押型文土器
 - (2) 撚糸文土器
- 図版26—(1) 平椀式土器
 - (2) 撚糸文土器

- 図版27-(1) ナイフ形石器およびⅢ層出土石鏃・スクレイパー・UF・石核
-(2) Ⅲ層出土砥石・磨石
- 図版28-(1) Ⅱ層出土石鏃(I)
-(2) Ⅱ層出土石鏃(II)
- 図版29-(1) Ⅱ層出土石鏃・スクレイパー・石錘・異形局部磨製石器
-(2) Ⅱ層出土石匙・スクレイパー
- 図版30-(1) Ⅱ層出土スクレイパー
-(2) Ⅱ層出土石核(I)
- 図版31-(1) Ⅱ層出土石核(II)
-(2) Ⅱ層出土石斧・環状石斧未製品
- 図版32-(1) Ⅱ層出土原石
-(2) Ⅱ層出土磨石(I)
- 図版33-(1) Ⅱ層出土磨石(II)
-(2) Ⅱ層出土磨石・石皿
- 図版34-(1) Ⅱ層出土剝片
-(2) I層出土石鏃
- 図版35-(1) I層出土石匙・スクレイパー
-(2) I層出土スクレイパー・石核・原石・UF
- 図版36-(1) I層出土磨石
-(2) I層出土磨石・石斧
- 図版37-(1) I層出土石斧・環状石斧
-(2) I層出土石皿

第1章 序 説

1. はじめに

1974年、住宅・都市整備公団による柏原地区の広大な面積の開発計画が、市に提出された。この時点で、福岡市教育委員会文化部文化課は、計画地内における埋蔵文化財の分布調査を数回にわたって実施した。当時はまだ計画段階であり、山野には雑木、雑草がおい繁り、また、予定地内が約68万㎡と広大であり踏査には困難をきわめた。数回におよぶ現地踏査で、同地内に古墳20数基を確認した。周辺の遺跡分布の状況からみて、雑木、雑草の伐採によって、古墳等の遺跡がさらに増加することは疑いなく、文化課では同地内の開発計画をやめるべき進言したが、諸般の事情から住宅・都市整備公団では計画が着々と進められ、1979年より開発が具体化し、文化課では造成工事に先立って発掘調査を実施することを余儀なくされ、おりからの緊急調査の急増から文化課では充分の体制を整える間もなく発掘調査に突入した。遺跡の分布は調査段階の分布をはるかに上まわり、特に大規模な縄文時代遺跡が数ヶ所と中世の居館址などの発見があり、現在なお発掘調査は継続中である。調査にあたっては、住宅・都市整備公団をはじめ、地元各位の多大な御協力をたまわった。記して感謝の意を表する。

2. 調査体制

調査体制としては以下に示す組織であるが相次ぐ緊急調査で充分なる体制を組むことはできなかったが、関係各位の協力と調査補助員諸氏の多大な協力でその進捗が進められてきたことを明示しておきたい。

調査地区	福岡市南区柏原字荒谷（F区）
調査期日	1980年1月～1981年7月
調査委託者	住宅・都市整備公団
調査主体	福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第1係 教育長 西津茂美 教育次長 佐藤孝安（前） 志鶴幸弘（現） 文化部長 志鶴幸弘（前） 中田 宏（現）文化課長 井上剛紀（先） 甲能貞行（前） 生田征生（現） 埋蔵文化財第1係長 三宅安吉（前） 柳田純孝（現）
調査指導協力	森貞次郎（九州産業大学教授） 坪井清足（奈良文化財研究所所長） 岡崎 敬

第1章 序 説

横山浩一（九州大学教授） 賀川光夫（別府大学教授） 三島 格（前福岡市歴史資料館館長） 佐原 真（奈良文化財研究所） 石野博信（橿原考古学研究所）
渡辺誠（名古屋大学助教授） 西谷 正（九州大学助教授） 後藤 直（福岡市歴史資料館） 甲元真之（熊本大学助教授） 橘 昌信（別府大学助教授） 藤田憲二（倉敷考古館） 岡本東三（文化庁調査官） 麻生 優（千葉大学教授） 乙益重隆（国学院大学教授） 小林達雄（国学院大学助教授） 下條信行（平安博物館助教授） 渡辺正気（前九州歴史資料館参事） 片岡 肇（平安博物館助教授）

調査担当者 山崎純男（福岡市教育委員会文化課）

事務担当 岡島洋一 古藤国生

調査補助員 盛本 勲（名古屋大学） 豊崎晃一（熊本県城南町城育委員会） 谷口武範，熊谷智徳，辻満久，小畑弘己，米倉秀紀，吉武学，西谷大，入江久成，坂田和弘，（熊本大学）木下尚子，市橋重喜，横大路俊明，寺師雄三（九州大学）妹尾周三，植田 広，宮坂孝宏，船井尚洋，日置 （別府大学）白土義実，其畑真二，難波真吾，米嶋久雄，片山重明，倉田浩一，熊崎農夫博，千々和謙策，平川祐介，堀川亮二，丸山 隆，宮田昌之，沖 一郎，中野治寿，小口幸雄，小井田佳代，高木裕之，高瀬広之，仲田善則，堤 孝二，鎌田次夫，角 浩行，丸山明宏（福岡大学歴史研究部）

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡群の位置

福岡市は地形的に大きく、東の福岡平野と西の早良平野に大別される。この境界をなすのが背振山系の支脈である油山（標高 569.4m）より派生した平尾丘陵（最高位は鴻ノ巣山の標高 100.5m）や長尾、飯倉の低丘陵である。この低丘陵は、油山、片縄山（標高 292.6m）に源を発する樋井川、一本松川、鼠ヶ原川、片江川によって開折された狭小な沖積地を形成する。この小沖積地は歴史的には一定のまとまりのある地域として把握され、古代には和名類聚抄に記載される早良郡毘伊郷に比定されることは諸氏の認めるところである。

柏原遺跡群はこの低丘陵を解析する小河川の一つである樋井川の上流域一帯に分布する遺跡群である。

樋井川の水源地帯上流域は、油山東斜面と油山の支脈である片縄山の北斜面が接する地域にあたる。この一帯は樋井川の支流が枝状に分岐し、花崗岩の山塊を深く開折し、舌状にのびるやせ尾根の丘陵を数多くつくり出し、複雑な微地形を形成している。今回、調査対象となった造成範囲は片縄山の山間部から樋井川の流域に形成された狭い沖積地を含む、東西約0.6~0.7km、南北約1kmの約68万㎡である。

なお、調査地区の中心は、国土地理院発行の五万分の一の地形図の南から5cm、東から19.6cmで、福岡市の中心に所在する市役所から南へ約7kmの位置にあたる。

2. 開発地域内の遺跡群の立地と概要（第2図）

約68万㎡におよぶ開発地域内には当初の予想をはるかにうわまわる、旧石器時代~中世までの各時期にわたる遺跡を確認した。現在I, M, N地区を残すすべての発掘を終了している。以下、各遺跡の立地とその概要を簡略にまとめると次のようになる。

なお、この遺跡の呼称は、調査開始時に古墳の存在のみが確認されていたことに起因している。開発地域内の古墳群の諸関係より小支群をA~J支群として把握し、古墳の調査中、あるいは試掘調査によって確認した遺跡は古墳の小支群と呼称を合せ、A遺跡、B遺跡等の呼名とした。新たな遺跡はK以降のアルファベットを使用し、また同一地区で近接する他の遺跡は、支群のアルファベットの後にさらに1, 2の数字を与えた。また地域内を流れる樋井川の支流には名称が存在しないので、東より第1支流、第2支流の呼称で表現する。（山崎）



第1図 柏原遺跡の位置と周辺の縄文時代遺跡



第2圖 柏原遺跡群の立地と遺跡の分布

A-1遺跡 片繩山の山麓部に位置し、第1支流の左岸の小さな河岸段丘上に位置する。両袖単室の横穴式石室を内部主体とする径20mの円墳1基。その墳丘基部にわずかに残った縄文時代早期の包含層がある。周囲は、耕作、水害のために削平が著しい。隣接するA-2遺跡と包含層が続いていた可能性もあるが明らかでない。

A-2遺跡 A-1遺跡に対峙した位置にあり第1支流右岸に立地する。丘陵部を解析したかっの河道上に営まれた縄文早期、晩期の遺跡と、両袖単室の横穴式石室を内部主体とする長さ約40mと推定される前方後円墳1基よりなる。

B遺跡 第1支流左岸、A-1遺跡の西にのびる舌状の丘陵上、東斜面に立地。両袖単室の横穴式石室を内部主体とする径10mの円墳と片袖単室の横穴式石室を内部主体とする径10mの円墳各1基よりなる。古墳の周辺からは石鎌、剥片、チップが検出できたが、明瞭な包含層、遺構等は確認できなかった。

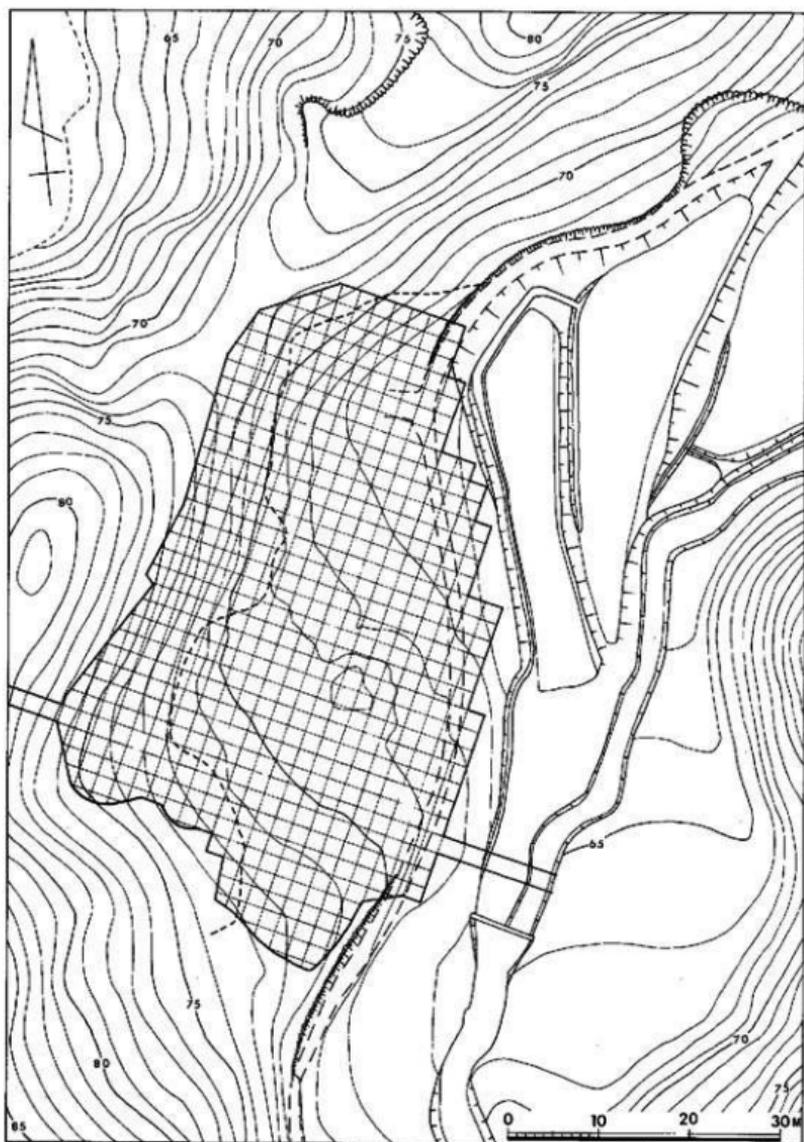
C遺跡 第1支流左岸、B遺跡と同一丘陵の上流域にありB遺跡とは約50m離れている。南斜面が谷に向かって張り出し、かなりの広さの平坦面を形成する。古墳9基が群集し、1号墳は両袖単室を内部主体とする径8mの円墳。2号墳は片袖単室の横穴式石室を内部主体とする径8mの円墳。3号墳は無袖の小規模の横穴式石室を内部主体とする径5mの円墳。4号墳は片袖単室を内部主体とする径10mの円墳。5号墳は両袖単室を内部主体とする径8mの円墳。6号墳は片袖単室の小規模の横穴式石室を内部主体とする径5mの円墳。7号墳は両袖単室の横穴式石室を内部主体とする径10mの円墳。8号墳は両袖単室の横穴式石室を内部主体とする長さ20m、短径15mの楕円形墳。9号墳は両袖単室の横穴式石室を内部主体とする径10mの円墳。古墳周辺には石鎌、剥片、チップが検出できトレンチによって古墳の基盤層になっている赤黄色の粘質土層を掘り下げた結果、上部に縄文時代の薄い包含層（土器はほとんどない）下層に台形石器を包含する旧石器時代の包含層を確認した。条件の良い部分を拡張したが遺物の広がりには狭く、石器の数も極めて少い。

D-1遺跡 第2支流右岸、B、C遺跡をのせる舌状丘陵の西斜面に位置する。両袖単室の横穴式石室を内部主体とする径10mの円墳1基。周囲より縄文時代前期の轟B式土器、石匙を検出したが、明瞭な包含層はない。丘陵上よりの流れこみか。

D-2遺跡 D-1遺跡のやや上流の西斜面で斜面を削り階段状に造成した部分に古墳時代後期の掘建柱の建物群と炉址を検出した。集落地としての性格は薄く、その使用目的が注目される。

E遺跡 第2支流左岸、D-1遺跡と対峙した位置に存在する。丘陵先端部から、連続する小規模な河岸段丘に立地する。両袖単室の横穴式石室を内部主体とする径18mの円墳1基と、縄文時代早期遺跡よりなる。縄文時代早期遺跡では多数の竪穴、土壌を検出した。

F遺跡 第2支流左岸、E遺跡の上流の丘陵東斜面に位置する。F-1遺跡は両袖単室の横穴



第3図 F遺跡の地形と発掘区

式石室を内部主体とする径8mの円墳1基よりなり、F-2遺跡は両袖単室の横穴式石室を内部主体とする基底部が径18mの多角形（五角形）で上部が径10mの円形をなす古墳一基と、箱式石棺1基、縄文時代遺跡よりなる。縄文時代遺跡は本報告に収録するもので、立地については次節で詳述する。

G遺跡 第3支流右岸、E、F遺跡をのせる同一丘陵の先端西北斜面に位置する。両袖単室の横穴式石室を内部主体とする径10mの円墳1基よりなる。

H遺跡 第3支流右岸、E、F、G遺跡をのせる丘陵のさらに西に派生した丘陵西側斜面に位置する。両袖単室の横穴式石室を内部主体とした径10m、径8mの円墳2基よりなる。周辺より石炭、剥片、チップ等を検出したが明確な包含層、遺構は認められなかった。丘陵上の平坦面にも試掘を入れたが遺跡の存在はない。

I遺跡 第3支流左岸、H遺跡と対峙した丘陵南斜面に位置する。両袖単室の横穴式石室を内部主体とする径18m、径8m、径7mの円墳3基よりなる。

J遺跡 第4支流左岸の丘陵南斜面に位置する。両袖単室の横穴式石室を内部主体とする径10mの円墳1基と、丘陵斜面下に形成された河岸段丘上に縄文時代の遺物包含層の存在が認められるが、その状態は良好でない。

K遺跡 樋井川の右岸の河岸段丘に位置する。本地区内で最も大規模な遺跡で約14,000㎡の広さを有する。上層に中世の居館址（弘安の役の恩償として拝受した居館址で惣検校屋敷と六郎屋敷と呼ばれた屋敷の跡と推定される）下層に縄文時代遺跡が広がり、旧石器、縄文時代早、前、中、晩期の遺物があり、堅穴、土壌を多数検出した。

L遺跡 樋井川左岸に位置する沖積地で、古墳時代水田址、および中世の水田址を確認した。中世の水田は弘安の役の恩償地として渋谷氏が拝領したものである。

M遺跡 L遺跡の北側に隣接する丘陵の麓部に遺跡が存在する。広大な広がりがあり、6世紀～平安時代までの遺物が出土している。

N遺跡 樋井川の左岸の台地上、M遺跡の北側にあり表面採集資料として、台形様石器、細石核、細石刃がある。

（山崎）

3. F遺跡の立地

F遺跡は第2支流に解析された小さな谷の沖積地が最も奥まった部分の左岸に位置する。地区内で最も奥部の高位置（標高65～80m）に占地し直下に小川が流れる。段丘と川の比高差は約3mをはかる。同一流域に存在するE遺跡はF遺跡の downstream 400mに存在する。

地形は発掘前段階では、わずかなテラス部分を有する丘陵東斜面であったが、発掘の結果は当初の見かけの立地と大きく異っていた。

4. 周辺遺跡

発掘の所見から、本遺跡の地形形成の過程をみとめる。

第2支流が、現在のように深く谷を解析する以前の段階で川の蛇行によってF遺跡の部分の岩盤を大きく侵蝕してえぐり込み凹部をつくり出す(凹部は本来は洞穴状あるいは岩陰状にえぐり込まれたものと考えられる。しかし、岩盤が花崗岩であるためであろうと考えるが犬井部を形成する岩が崩落し、基底の凹部のみが残ったと推定される)。この凹部の形成は連続的に川の蛇行の進展に伴い移動し、F遺跡の場合は南より順に3つの凹部を作り出している。この凹部の形成後は、谷が深く解析され、凹部との間に比高差約3~4mを有するが、その後は凹部前面に礫層、砂層が互層をなして堆積し、小規模な河岸段丘を形成する。この凹部とその前面に平坦面を有する地形が完成された段階で、はじめて人間との関りが発生し、その後は丘陵部からの流土、崖崩れによって凹部が厚く埋没し、現在の地形にいたったものと思われる。このような地形形成は洞穴あるいは、岩陰の形成の一種の変形とみることができ、ここでは適切な語句が見い出せないで、侵蝕によってできた凹部を本報告書では、北側より第1凹部、第2凹部、第3凹部として説明を進めていく。

第1凹部は間口が約35m奥行きが最も深いところで約14m。第2凹部は間口が約19m、奥行きが約7m、第3凹部はその存在を確認したのみで、保存のため未発掘である。前面のテラス(段丘部)は長さ70m+ α 、幅が最も広いところで25m、狭いところで5m前後である。

以上のように本遺跡は地形の形成あるいは後述する遺跡の性格は共に洞穴、岩陰遺跡との共通性が強いという大きな特徴があることに注意しておきたい。

(山崎)

4. 周辺遺跡

柏原遺跡群を取り囲む歴史的環境は各遺跡の報告において順次のべていくこととし、ここでは、柏原周辺の縄文時代遺跡について簡単にふれてみたい。(第1図) 2は笹栗遺跡。晚期土器および石器が発掘されているが、量は極めて少い。3は井手遺跡。石匙が表面採集されているが時期については不明。4は羽黒神社遺跡で、羽黒神社の新築移転に伴い遺跡を発見した。押型文土器、石鏝、刃器、剥片、チップが出土するが量的には少い。5は大牟田遺跡、条痕文土器、石器類が調査されているが報告書未完。大牟田古墳群の墳丘中より球状耳飾が出土している。6は箱ノ池遺跡、押型文土器、石鏝、石斧が採集されている。

以上はいずれも、発掘調査で偶然発見されたか、あるいは採集されたもので、量的には少いが、前述した柏原遺跡群の遺跡を考えた場合、この地域には縄文時代遺跡、特に早期遺跡が密集した地域といえ、今後の調査研究では遺跡間の関係、あるいは一定の集団のまとまりを把握できる可能性があり注目される地域である。

(山崎)

第3章 調査の概要

発掘調査は1980年1月から1981年7月までの約10ヶ月を要した。その間、調査員の不足、あるいは度重なる雨や、工事の都合による調査区の移動で、調査に困難を極めたが、多くの人々の指導と激励によって多大な成果を得てF遺跡の調査を無事終了することができた。調査は先ず、同地内にあるF-1号墳より開始し、墳丘の断面調査のために設定したトレンチに縄文式土器(押型文土器)を検出したことによって、古墳時代の地山而下に縄文時代遺跡の存在を推測したことに始まる。

古墳の周囲にはかなりの平坦面が存在し、古墳調査に平行して古墳北側の一部にトレンチを設定し、掘削を開始した。発掘区は、古墳時代の地山が古墳築造のためやや削平された状態で明黄褐色土層が顔をみせていたが、この層より縄文時代遺物が出土し、当初は予想しなかった縄文時代遺跡を確認し、縄文時代遺跡として本格的な調査を開始した。古墳の調査と平行するために、古墳とは直接関係しない先に設定したトレンチを中心として古墳北側(第1凹部)にグリットを設定し、調査を続行した結果、この地点では包含層が厚い所で約1mに達し、層位的には上・下2層があり、礎層に接しても遺物が出土することを確認した。また、遺構として石囲いの炉址一基を確認した。I層の遺物は無文土器、捺糸文土器、押型文土器が主で、その大部分は早期に属する遺物である。II層からは、押型文土器、無文土器が主体をなし、基盤の礎層に接して、条痕文土器、刺突文土器、ナイフ形石器が出土し、早期土器の層位関係を把握すると共に、旧石器時代の文化層の存在も推定できる収穫を得た。古墳調査の終了と共に、グリットを南側の古墳の基底面および遺跡の広がり予想される平坦面すべてに拡張して発掘を続行した結果、さらにその結果は良好な状況を示し、包含層は最も厚い所で2.5mを測り、層序も南(高レベル)にいくにしたがい増え、次第でのべるように、大別して3層の遺物包含層が確認でき、早期土器の掘削に寄与する大きな成果を得た。I層は先のグリットで得た土器に加え、沈線文土器、平格式、条痕文土器を加えた。II層は、層自体も厚くなり、1m前後を有する部分もあり、検出される遺構(主に炉址)のレベル差からII層中の押型文土器の細別が可能となった。また共伴する石器類も豊富でそのセット関係が把握できる状態である。III層は上、下2枚に細別が可能で、上からは条痕文土器が主体となって出土し、下からは刺突文土器が主体となり、それより下面に細片化した捺糸文土器を検出した。III層の土器は押型文より先行する土器としては北部九州では極めて珍らしく、新形式土器であることは、草創期と早期を続く土器群として特筆できるものであった。しかし、遺跡のひろがりはこのグリットの拡張でも把握できず、さらに丘陵頂部に向かってようやくに確認でき、先述の第1～第3凹部の確認にいたった。この凹部の性格は一種の居住の場としてとらえられるものである。本遺跡で確認した遺構はIII層に炉址3、II層に炉址1基、I層に竪穴3+a、土壇4+aである。(山崎)

第4章 調査の記録

1. 発掘区の設定

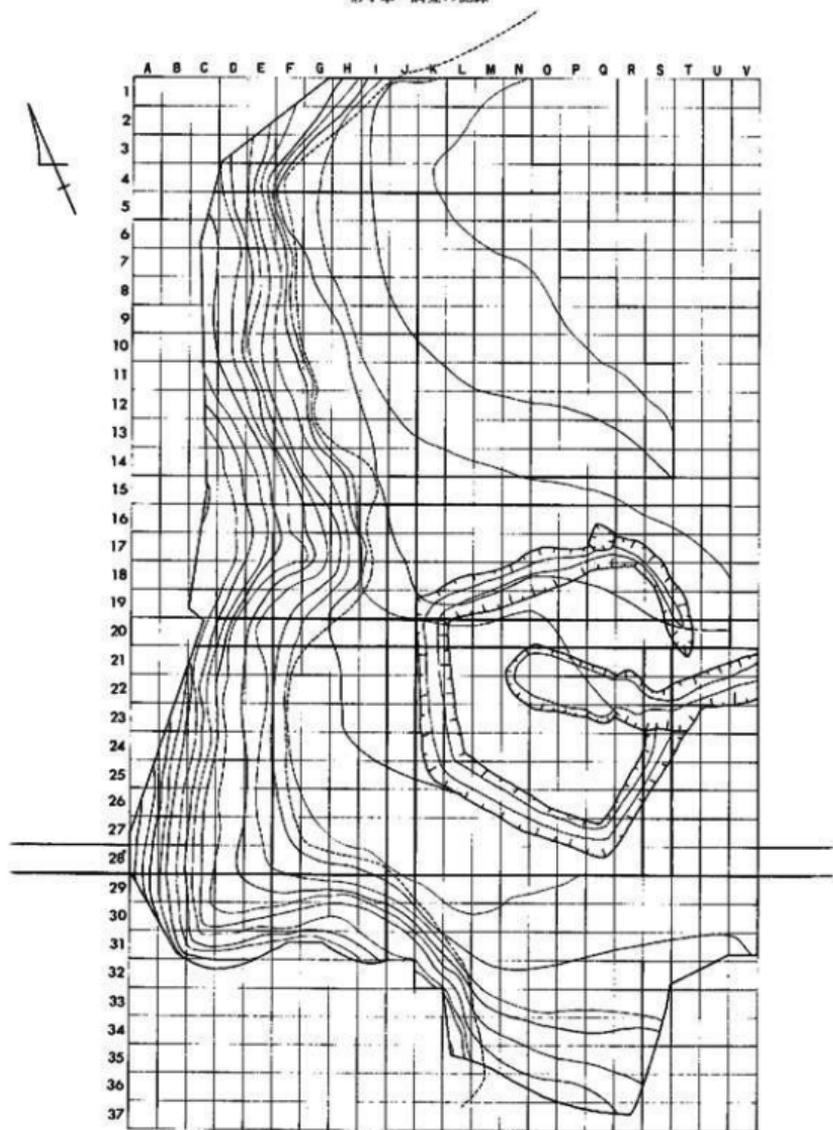
発掘区の設定は、調査に先立って、調査方針を各遺物の位置およびエレベーションを正確に記録すると同時に押型文土器の層位的把握、および生活空間、居住のあり方と遺跡の性格を把握するために遺跡の完掘を目的とすることをきめ、遺跡全面にグリットを設定できるように配慮し、順次その拡張を行った。グリットは平坦面を大きく囲む形で、東西にA～V列、南1～37の2m方眼のものとして設定した。

発掘はまず古墳調査に影響のない古墳北部K-O-5～14, P-Q-8～14, R-9～14, S-11～14(調査区の東は段丘の崖となっていて、礫層が露出している。)を発掘し、順次、K-U-16～19区, K-R-21～28区, T-U-21～28区, K-N-1～3区, J-30・31, K-30～32, L・M-30～35, N・O-30～36, P-R-30～37, S-V-30・31区を発掘しK-O-4列, K-U-15列, K-U-20列, K-V-28列, S-21～28列にそれぞれベルトを残した。断面図の作成はK-O-5列の北壁, K-T-15列の北、南壁, K-T-20列の南北壁, S-21～28列の東西壁, K-V-28列の南壁, R-32～36列の東壁, K-5～14, 16～19, 21～28の西壁で行った。ベルトの除去を進めながらさらに丘陵の奥へ発掘区を拡張し, A-24～30, B-21～31, C-4～32, D-3～32, F-J-1～31区までを完掘し、発掘区の北側に第1凹部、南側に第2凹部を確認した。断面図はC-J-5列の北壁, J-15北壁, G-J-15列南壁, F-17～31列の西壁, J-16～32列の西壁, D-J-20列の南北壁, A-J-28列南壁で作成し、特に28列ではさらに丘陵側は頂部まで、谷側は第2支流まで達するトレンチを延長させ、部分的に基盤の岩盤まで達する土層断面をつくり、この遺跡の地形形成の観察につとめた。なお、土層断面の作成部分は第4図に太線で示している。

また、調査グリットと遺跡上に築造された古墳との関係は第4図に示すとおりであるが、古墳の周溝、墓壇、墓道は包含層を深く切り込んでいて、この部分の遺物は墳丘中に存在するか、あるいは失われたものがかなりあったと思われる。(山崎)

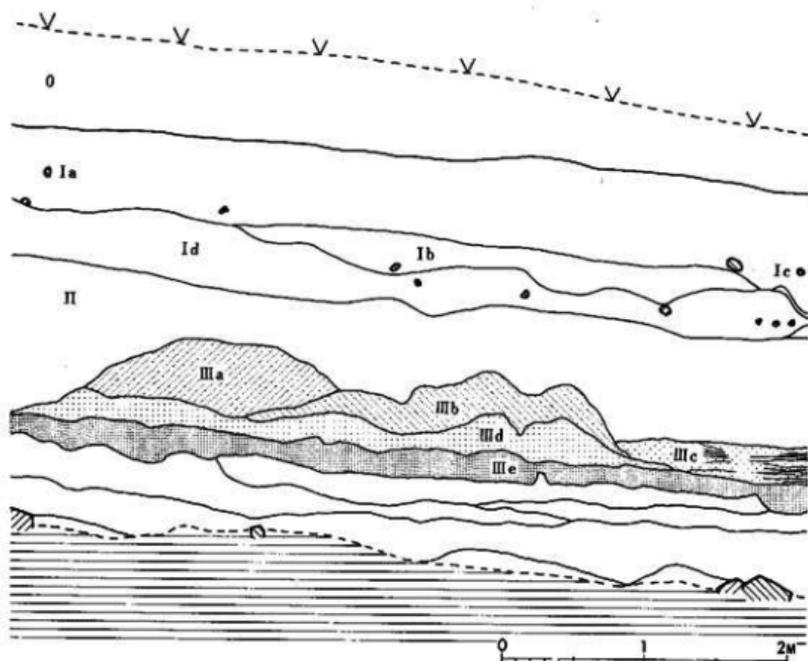
2. 層序(第5・6図)

前節で述べたように土層は遺跡の各所で実測、図化した。地点のそれぞれによって若干の差異がある。層自体の堆積は主に自然堆積で人為的な堆積は確認が困難であった。層は丘陵部



第4図 発掘区の設定と土層断面の位置

標高72.00m



第5図 土層断面図I

側(西)より谷に向う傾斜と第3凹部→第2凹部→第1凹部の傾斜がある。遺物包含層の基本層位はI層～III層で、最も厚い第2凹部で2.5m、最も薄い第1凹部で30cm前後である。

第5図はJ-25-28の内壁断面で上より0層、表上層で厚さ40～60cm、黒褐色の腐蝕土層。0層とI層の間には部分的に黒色土層(古墳時代後期の土層で古墳の周溝、墓道はこれによって埋没している。)が介在している。I層は100cm前後の厚さを有する。細い色のちがいでa～eに細別できる。Ia層は白味をおびた暗黄褐色で粘性はあまりない。風化した花崗岩を含んでいる。厚さ60cm前後。Ib層はIa層よりやや茶色味をおびた暗黄褐色土層、厚さ10～30cm。Ic層は部分的に薄く存在し、暗茶褐色土層で粘質である。厚さ5cm。Id層は明黄褐色土層。粘性が

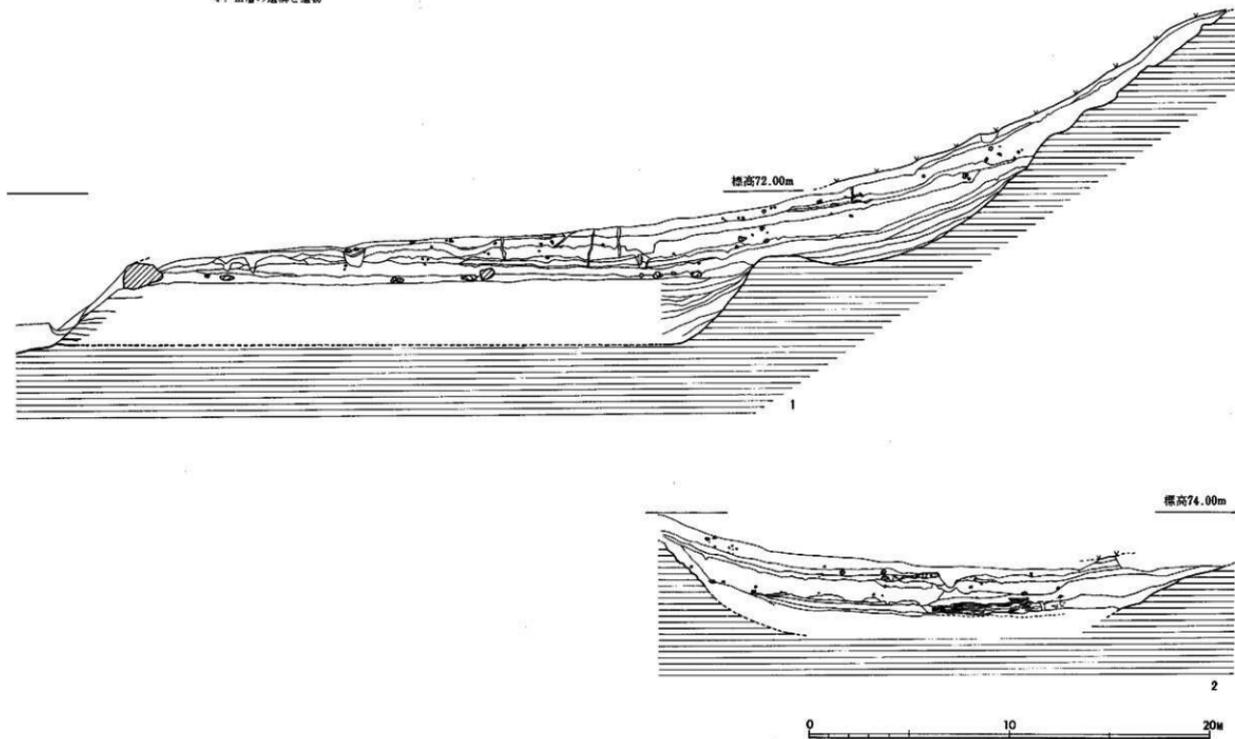
ややあり、風化した花崗岩礫を含む。Ie層は明赤褐色土層、赤褐色粘土塊を含む。厚さ20~40cm。II層は20~100cmの厚さを有する。暗灰赤褐色混礫土層で3~5mmの風化した花崗岩の小石を含む。この層は土層の色調では区別は困難であるが、遺物、遺構のあり方から生活面としての細分が可能である。III層は30~80cmの厚さを有する。全体に黒色土層であるが、色の違いでa~eに細分できる。IIIa層、部分的な土層で灰褐色の混砂土層で3~5mmの風化した花崗岩の小石を含む。厚さ40cm前後。IIIb層、IIIa層同様に部分的な土層堆積で褐色混砂土層。厚さ30cm前後。IIIc層は暗褐色土層と灰色砂層の互層堆積でIII層の中に生じた流路の可能性が強く、土層の条件からIII層の再堆積層の可能性が有る。厚さ20~30cm。第2凹部の北部に部分的に広がる。IIId層、暗褐色混砂土層、厚さ20cm前後。IIIe層、黒色混砂土層。厚さ20cm前後。IV層は厚さ50~60cmで粘性の強い赤褐色土層であるが、部分的に砂層を含み、その違いからa~cに細別できる。IVa層は暗黄褐色混礫層で径3~5mmの花崗岩の小石を含む。厚さ15~20cm。IVb層は灰色混礫層で径3~5mmの花崗岩の小石を多量に含む。厚さ10cm前後。IVc層、暗褐色混礫砂質土層、厚さ10~30cm。

第6図1は第2凹部縦断面、すなわちA~V-28グリットおよびその延長トレンチの断面で、丘陵頂部から谷間の種井川の第2支流までの断面である。丘陵頂部から現在の川との比高は15m、段丘と川との比高は4mである。岩盤の線は、頂部から第2凹部にかけては約40度の傾斜角をもち、12m下り第2凹部平坦部にいたる。第2凹部の平坦部は侵蝕によってやや凹み、その前面でやや高まりをみせる。第2凹部の出口J-28グリット付近で急激に約50度の角度をもって4mおち、平坦面に移行する。この平坦面は川床の岩盤とほぼ高さが同じである。岩盤上に堆積する土層は第2凹部で約4.5m、第2凹部前面で約6mである。V層までの状況は前述したとおりであるが、部分的な層が介在する。V層以下は前面の段丘を形成する基盤層である。凹部前面ではV層以下、白色微砂層、褐色砂礫層、白色砂層、黒色微砂層、白色砂層、褐色砂層、粘質土層、礫層となり、段丘前面ではV層以下が、粒子のやや大きい白灰色砂層、拳大~人頭大の礫を含んだ白黄色粘砂層、白灰色砂層、黄褐色粘質砂層、淡赤褐色粘土層、礫層、白灰色~赤褐色砂層、鉄分の沈殿が強い砂層、礫層となっていて共に礫層と砂層の互層からなっている。

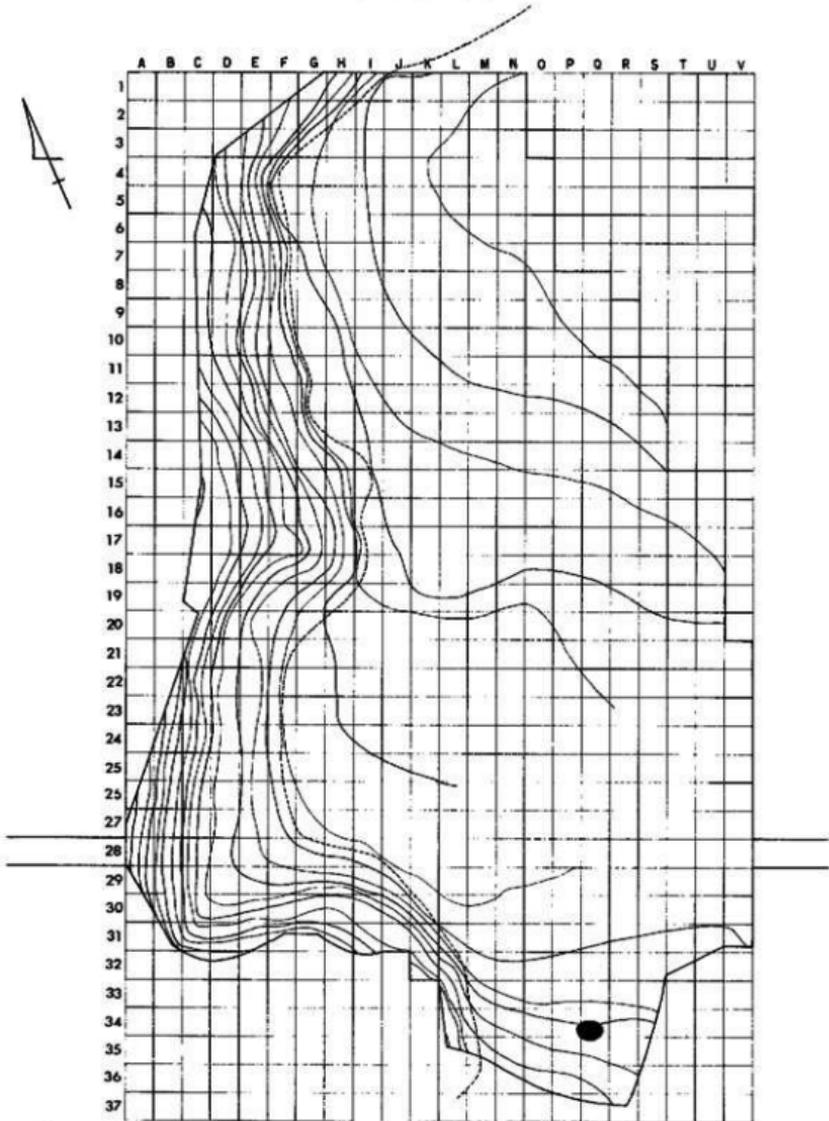
第6図2は第2凹部横断面、すなわちF-17~31グリット西壁の断面である。南北の両端部に岩盤を確認したが、第2凹部の中心部に向って、北側壁が約30度の傾斜で、南側壁が約40度の傾斜でさがっている。凹部の中央部岩盤は確認していないが、この部分が最も深くなるものと考えられる。土層の堆積は両端が薄く、中央部に向って順次厚くなる状態を示している。IV層以下は褐色粘質土層、黒色粘質土層、砂層となっているが、いずれも無遺物層である。

(山崎)

4. III層の遺構と遺物



第6図 土層断面図II



第7図 IV層の遺構分布

3. 第4層の遺構と遺物

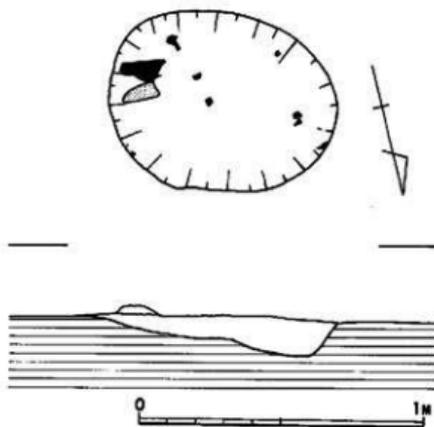
(1) 遺構

Ⅳ層中における遺物の出土は明確なものはない。後に述べるL-8、I-5グリットの最下部（礫層直上）で出土したナイフ形石器の本米の包含層を判明させるべく、最も条件のよい第2凹部前面、K-U-16~28グリットのⅣ層を発掘し、特にK-21~27グリットは礫層まで発掘したが、小さな炭以外に遺物の出土はみられなかった。しかし、調査の終了時に第3凹部前面のⅣ層に機械力でトレンチを入れた結果、あとで述べるがを検出した。炉の周囲を丁寧に調査したが、ここでも炉以外は何も検出することはできなかった。調査ではついにナイフ形石器の出土層位を把握することはできなかった。炉の検出からナイフ形石器はⅣ層に含まれる可能性が高い。保存のために未発掘である第3凹部にその包含層があるとみることできる。

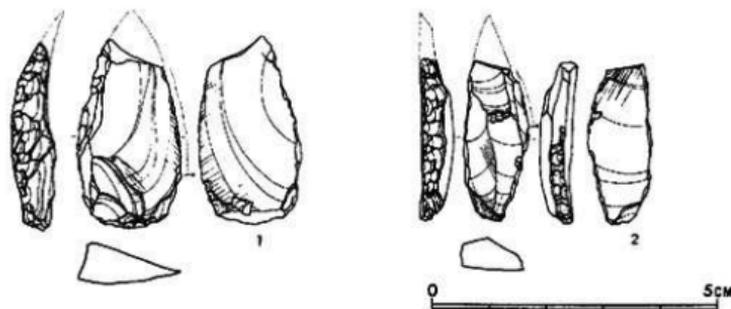
炉址 P-34, 35, Q-34, 35グリットにわたって検出した地床炉で、位置的には第3凹部前面の平坦地にあたる。炉は長径1.6m×1.25mの楕円形プランを有し、25cm前後掘り凹めただけのもので、中に焼土塊、炭化物がつかまっている。また、周囲にも炭化物の広がりがみられる。炉の周囲には特別の配慮はなく、また固くしまった面も存在しない。（山崎）

(2) 遺物

1は青灰色黒曜石製の横長剥片を素材としたもので、素材剥片のバルブ側に主要剥離面からブランディング加工を施し整形したナイフ形石器である。また右側辺（刃部側）の基部にも素材剥片の背面から数回の平坦剥離を加えている。先端部は、発掘中のガジリによって欠損している。残存長3.35cm、幅1.85cm、厚さ0.80cmを測る。刃部の背面側には細かい刃こぼれが観察される。2は縞文様の入った黒曜石製の縦長剥片を素材としたナイフ形石器である。左側辺の全辺と右側辺の基部よりのほぼ均等にブランディング加工を施している。



第8図 炉実測図



第9図 ナイフ形石器実測図

先端部を欠損する。刃部には表裏面とも細かい刃こぼれが観察される。全長2.90cm、幅1.15cm、厚さ0.50cmをはかる。基部表面に僅かに素材の自然面を留めている。

これら二点のナイフ形石器の素材は、パティネーションを被った鈍い光沢をもつ黒曜石であり、これに類する薄片、碎片も若干存在するが、出土状況よりそれらを当該期のものとするには確証を得なかった。

1はL-8グリット、2はI-5グリットの出土である。

(小畑)

4. III層の遺構と遺物

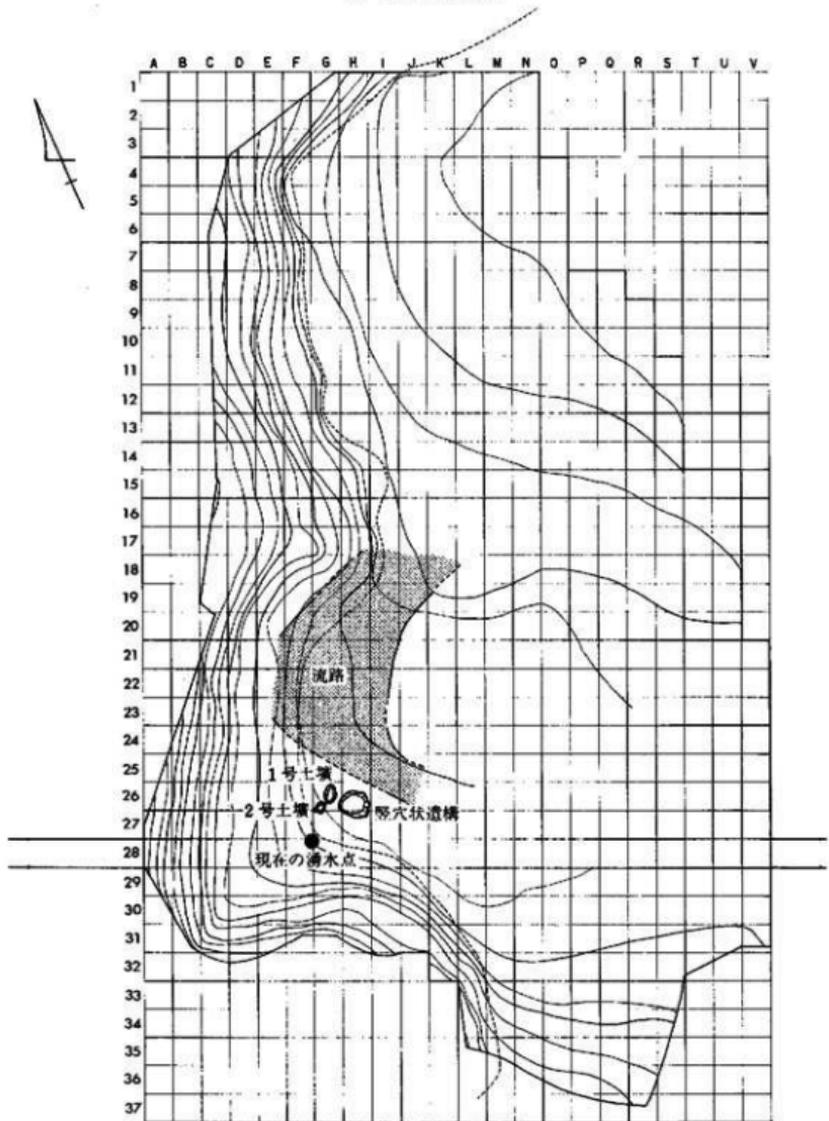
(1) 遺構の位置と遺構(第10・11図)

III層の広がりには先述したように第2凹部からその前面に顕著であり、遺構、遺物もこの地域に集中する。遺構としては竪穴1基、土壇2基がある。その他遺構ではないが、自然流路と考えられる粘土層と砂層の互層の広がりがある。

遺構は第2凹部南西隅、F-26・27、G-26・27グリットに集中して存在する。竪穴と第1土壇は20cm、第2土壇は70cm離れ、第1・2土壇はほとんど接する状態にある。なお、遺構の存在する南西隅には発掘中に湧水点があることを確認したが、当時もこの部分に湧水があったかどうかは明らかでない。

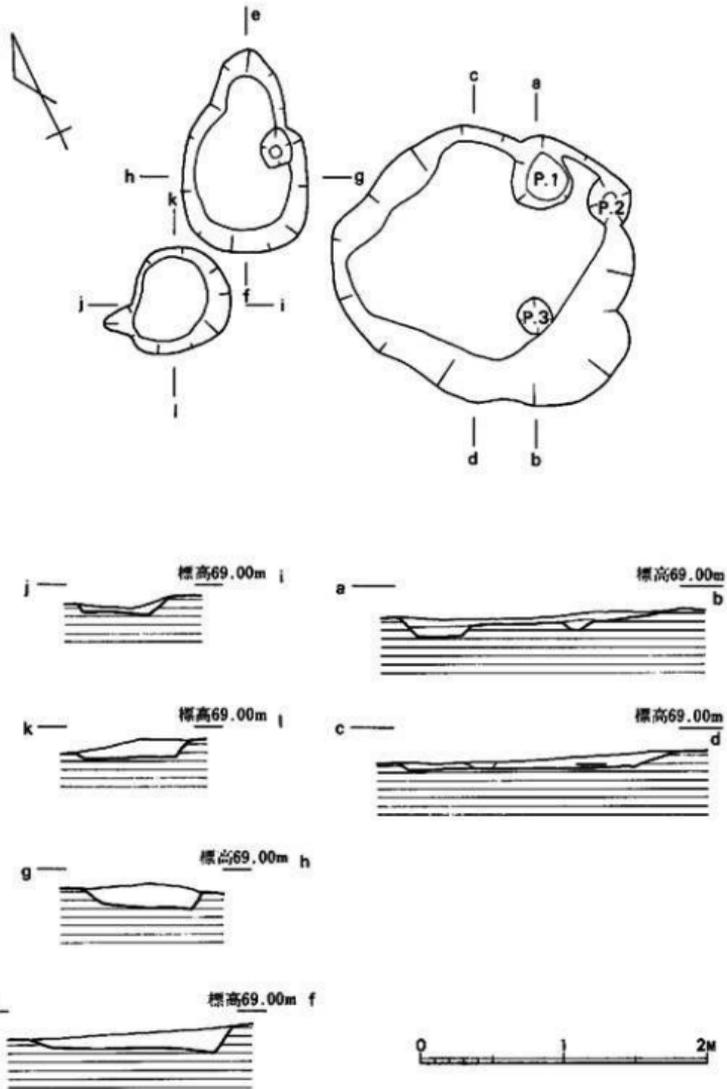
竪穴 IIIe層黒色混砂土層の下部において検出した遺構で、内部はIIIe層と同じ上で埋っていた。長径2.15m、短径1.9mの不整楕円形プランを有する。掘り方は浅く、最も深い部分で10cm、浅い部分で5cmをはかる。壁はたちあがりなだらかになっている。竪穴内はフラットである。中に浅いビット状のものが3ヶ所にあり、P₁、P₂は約10cm離れていて近接する。P₁、P₂とP₃は60

4. III層の遺構と遺物



第10図 III層の遺構分布

第4章 調査の記録



第11図 遺構尖測図

4. III層の遺構と遺物

cm, 70cmとやや離れて存在するが、いずれのピットも東側に片寄った部分に位置する。P₁は掘り方が壁と接し径40cm, 深さは壁から15cm, 床から10cm。P₂も同様に壁と接し, 径30cm, 深さは壁から15cm, 床から10cm。P₃は床面にあり径20cm, 深さ5cmである。

第1号土壇 竪穴同様にIII層, 黒色混砂土層の下部において検出し, 内部はIII層と同じ土で埋っていた。長径1.44m, 短径0.76mの不整楕円形プランを有する。掘り方は浅く, 最も深い部分で15cm, 浅い部分で5cmを測る。底はフラットである。土壇東側壁中央部にピット状のものが1ヶ所ある。径20cm, 深さ5cm。

第2号土壇 他と同様にIII層, 黒色混砂土層の下部において検出したもので, 内部はIII層と同じ土で埋まる。長径0.75m, 短径0.7mの不整楕円形プランを有し, 西側に小さなはり出し部がある。掘り方は浅く13cm前後。底はフラットである。

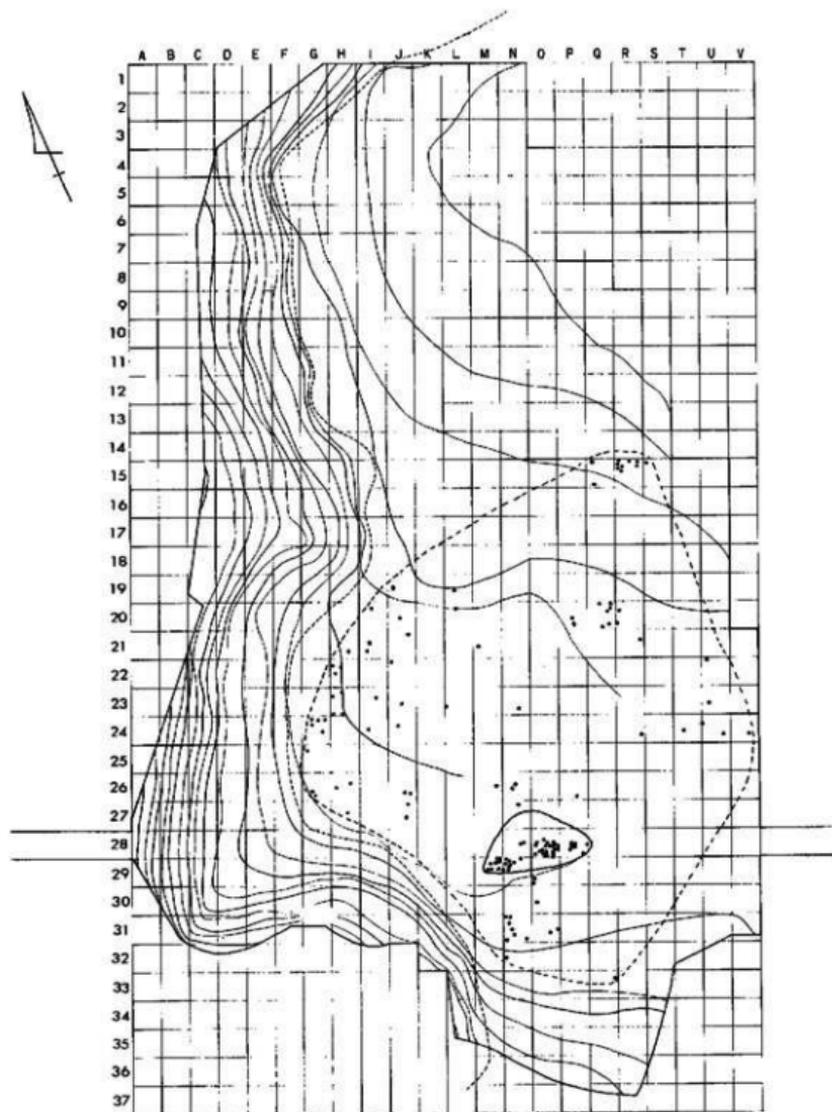
自然流路 粘質土層と砂層の互層からなる自然流路と考えられる土層堆積は遺構として発掘することは技術的に不可能であったが, その分布はほぼ把握できる。この土層の広がりには主に第2凹部北側に顕著である。この層の成因は凹部の上の丘陵から流水が度々あったことに起因したものと思え, そのはじめはF-20-23グリットの範囲からはじまり, 下方に向けて広がり, 凹部出口で2本に分かれている。一本は凹部の中よりやや南によったJ-25・26グリットに5mの範囲で下方に流れ, 他の一本は凹部の北壁にそってG~K-19グリットの範囲で幅8mで第1凹部の方に向う流れであるが, その下方部分については明瞭でない。流れの範囲からみて, 後者がより普通の流れであったものと考ええる。(山崎)

(2) 土器の出土状況と土器

III層の全体的な土器の出土状況は第2凹部前面を中心とする分布と第1凹部前面を中心とする分布があるが, 前者がより集中していることが確認できる。本報告では各土器について胎土, 色調, 施文原体, 文様, 接合関係等を検討し, 確実な同一個体を選別し, 各土器について分布状況を把握した。よって, 報告の仕方として, 最初に同一個体の土器の分布を発掘区の地形図にあらわし, その後にその土器の説明を加える方法を採用している。ただし, 無文の小破片については判別が困難で, この中より除外しているものがある。今後, 後続の報告で補うことにするが, 本報告には有文土器および無文土器でも個体識別可能なものはすべて収録している。なお, III層出土土器についての全体的なまとめは本節の終りで小結としてまとめる。以下, 各土器についてみていく。

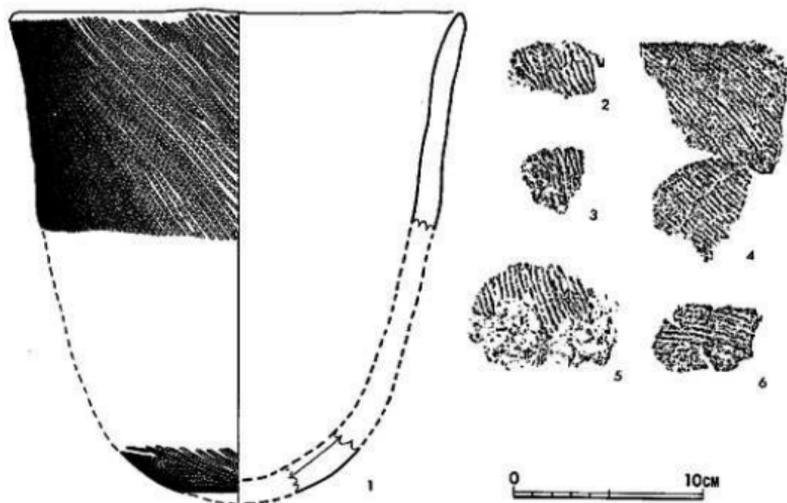
① 燃糸土器 (第12, 13図)

主にIII層下面に含まれる土器で, 本遺跡で最も古く位置づけられる土器である。同一個体と考える土器片の分布は第2凹部からその前面, すなわち, G-24-26, H-20-27, I-20-24, J-19-27, K-19-23, M-21-29, N-23-32, O-27-31, P-20-28, Q-15-



第12図 弥生文土器出土分布図

4. III層の遺構と遺物

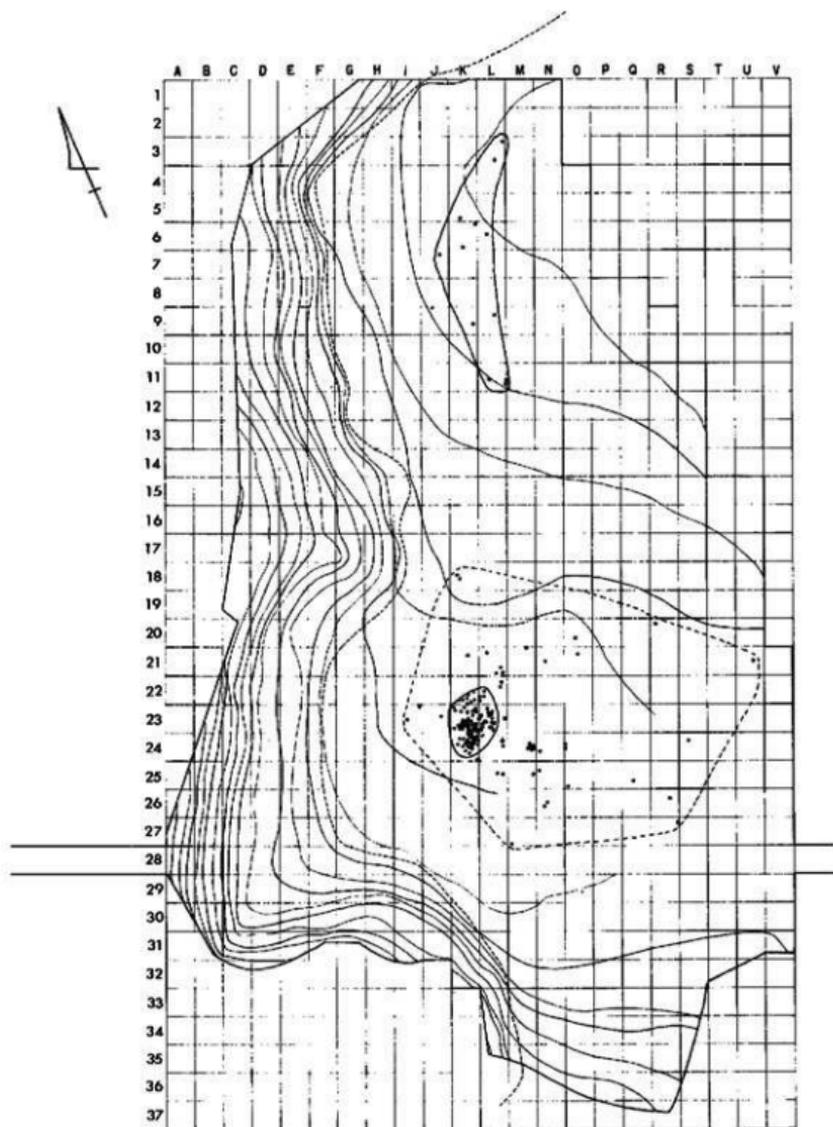


第13図 捺糸文土器実測図

29, R-15-24, T-24, U-22-24, U-24グリットにわたってみられ、特にM-28・29, N-27-29, O-27-29, P-27-29グリットに集中している（N, O 27グリットは上層に存在する第12号炉址の取り上げ作業によって土器のドットが落せなかった）。集中区およびその拡散状況、あるいは土器片がいずれも細片化して（径1cm前後のものが多い）いることから、この土器が破損、廃棄されてから、かなりの時間露出していたことが想定される。同じ層位から出土する刺突文土器の破片が大きく、かつ集中度合いが強いことを考えれば、この土器は刺突文土器に先行するものとしてとることができる。

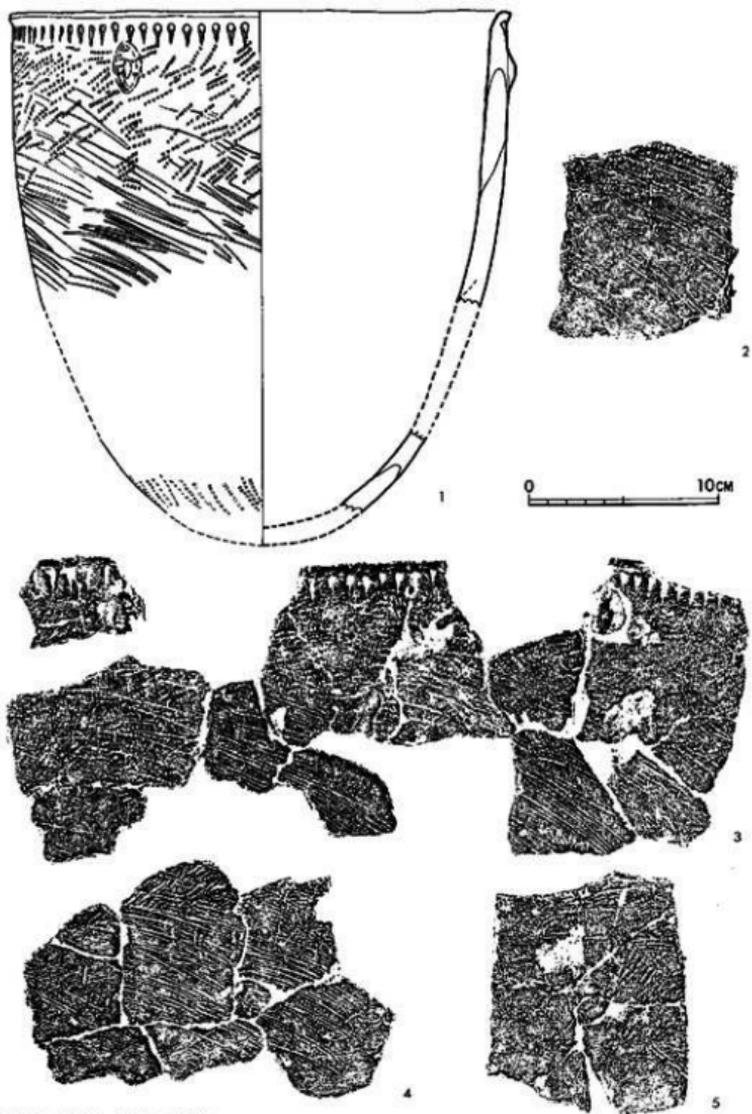
土器破片総数は136点であるが、いずれも1cm前後の小破片で占める。やや無理とは考えたが、次の刺突文土器との関係を知るために比較的大きな破片（第13図4・5）より作図復原したのが第13図の1である。大型の深鉢形土器で、復原口径24cm、推定器高26.3cm、円筒形の胴部で丸底の底部をなす器形で、口縁部は直口し、端部は尖り気味に丸くおさめる。胴上半部から口縁部にかけて多量のスガが付着している。外面はR-段捺の捺糸文を左上方から右下方に斜に全面施文したものであるが、器壁の凹凸が著しいため文様が薄い部分がある。捺糸文の間隔は密接してまかれており1-2mm前後である。底部は捺糸が横方向になる。内面はナデによって丁寧に仕上げられるが、器壁の凹凸が著しい。器壁は1.3cm前後で非常に厚く、胎土中には径2-5

第4章 調査の記録



第14図 刺突文土器 I の出土分布図

4. 田層の遺構と遺物



第15図 刺突文土器 1 実測図

mmの石英、長石、金雲母、その他の粒子および花崗岩の小石を多量に含み良質ではない。焼成も不良である。器壁が縦に剥離する特徴があり、色調は外面はススのため黒色であるが、ススの付着しない部分は赤褐色、内面も赤褐色である。

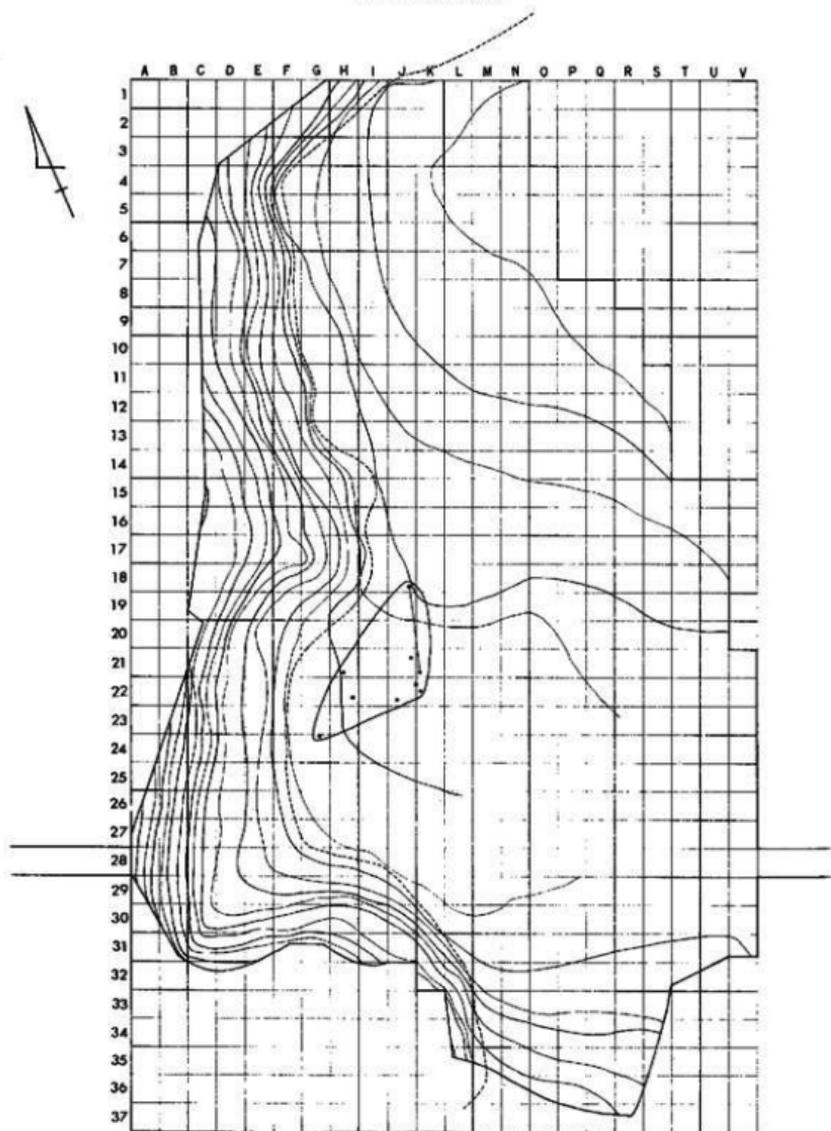
② 刺突文土器 I (第14, 15図)

第2凹部前面に分布する(第14図)土器個体で、その分布はI-23, J-23, K-18-24, L-21-25, M-21-27, N-21-26, O-20-25, Q-25, R-20-27, S-24, T-21グリットにわたっており、特にK-22-24, L-22-24グリットに集中がみられ、他はその拡散とみることができる。また、全く同じ特徴をもつ土器で別個体と考えられる土器の分布が第1凹部前面、すなわちJ-7, K-5-9, L-3-11グリットに存在するが、この分布は土器片も極めて少く、集中部もみられない。

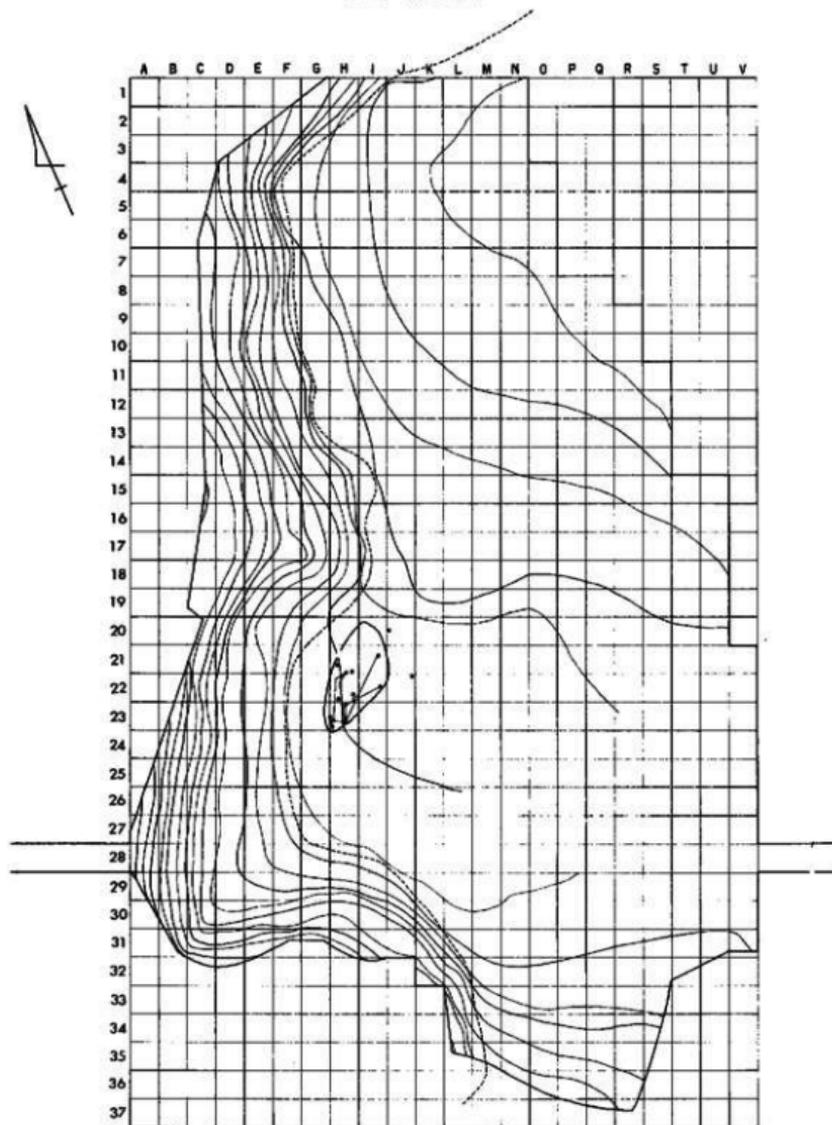
第2凹部前面の土器は胴下半部と底部の一部を残して接合し、ほぼ完形に復原することができた。大型の深鉢形土器で口径26.5cm、推定器高25.8cm。底部は丸底で円筒状胴部から口縁は直口するが端部がやや外反する。外面は全面にへら状のもので良く研磨した後に細い横あるいは左⇄右の斜方向の条痕を施しているが、この条痕は、貝あるいはその他の単位を有するものの条痕ではなく、1本1本の擦過痕である可能性が高い。条痕は胴上半には希薄で、下半部が顕著であるが、底部にはみられない。胴上半部でこの条痕の上にさらに2-1cmの単位を有する櫛歯状の押圧を斜方向に施す。この文様は貝殻腹縁、あるいは一部押圧縄文にみえる部分もあるが、その原体をいまだ明らかにしえていない。底部も同様の圧痕を縦位に施文している。口縁部直下には一列の刺突文が並ぶが、この刺突文は径0.4cmの棒状の工具で施文されたものである。その施文にあたっては、先ず下方より工具で上方に向かって刺突し、(この段階で口唇部が押され、結果として口縁端部が若干外反する。)その後この工具をやや力を入れながら下方に引くために、刺突文は下方に線のあと引きが残る。いわゆる押し引きの手法をとっている。刺突文の間隔は0.4-0.5cmである。また、この刺突文の下方に、径2.8cm×1.5cm、高さ0.5cmのコブ状のハリ付けが3ヶ所にみられる。このコブ状のハリ付けは縦位に行われ表面にも櫛歯状の押圧がみられるので、このコブのハリ付けは少くとも土器文様の施文以前であることがわかる。

器壁は底部付近で1cm、胴上半部で1.3cm前後と非常に厚い。底部および口縁下方に擬口縁がみられ、その形状は下方が凸レンズ状、上方が凹レンズ状をなす。口縁部の下方の擬口縁下には内傾の粘土接分が7cm、5cmの間隔で認められる。胎土には径2-5mmの石英、長石、金雲母、その他の鉱物粒子および花崗岩の小石を多量に含み良質ではない。前述した燃系土器と非常に良く似た胎土、器壁の厚さ、器形を有しており、時間的にはきわめて近い関係のあることが推測される。焼成はよくない。色調は外面は黄褐色-赤褐色で一部黒斑がある。内面は黄褐色-赤褐色である。胴下半部の破片はほとんどなく、火熱を受けた結果剥離したものである。

4. III層の遺構と遺物

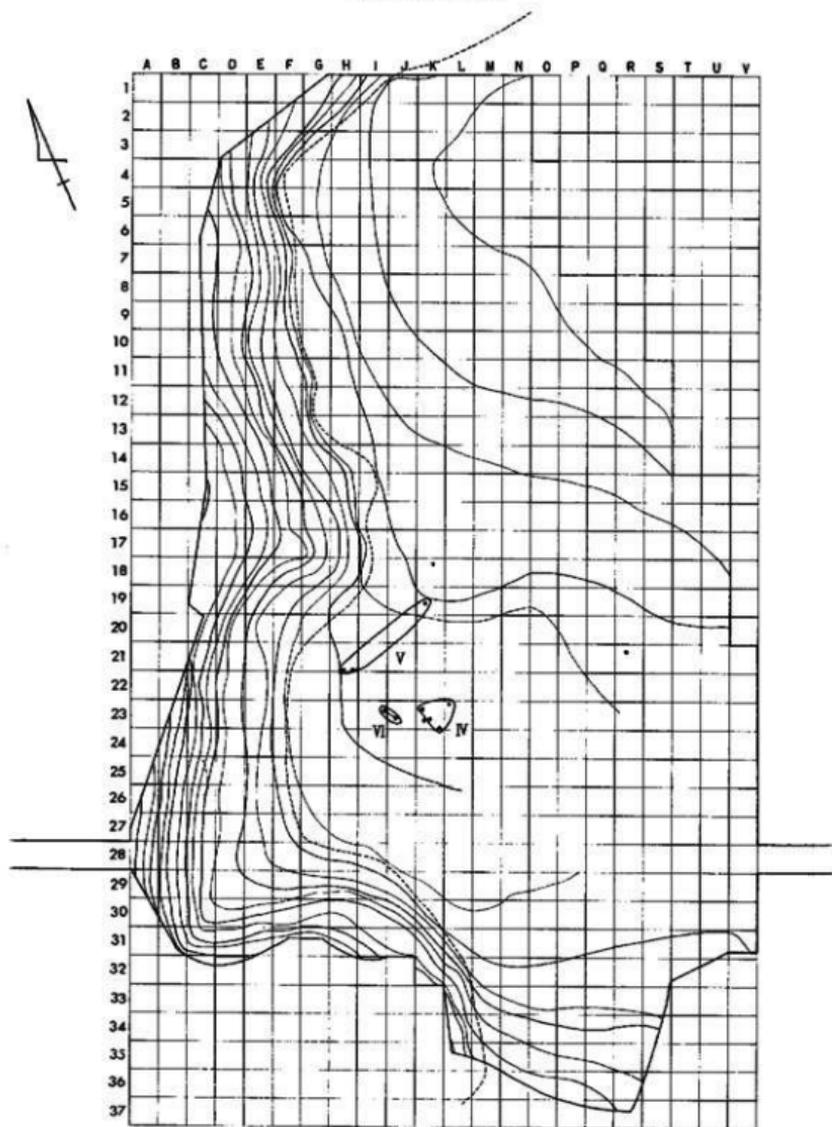


第16図 刺突文土器IIの出土分布図

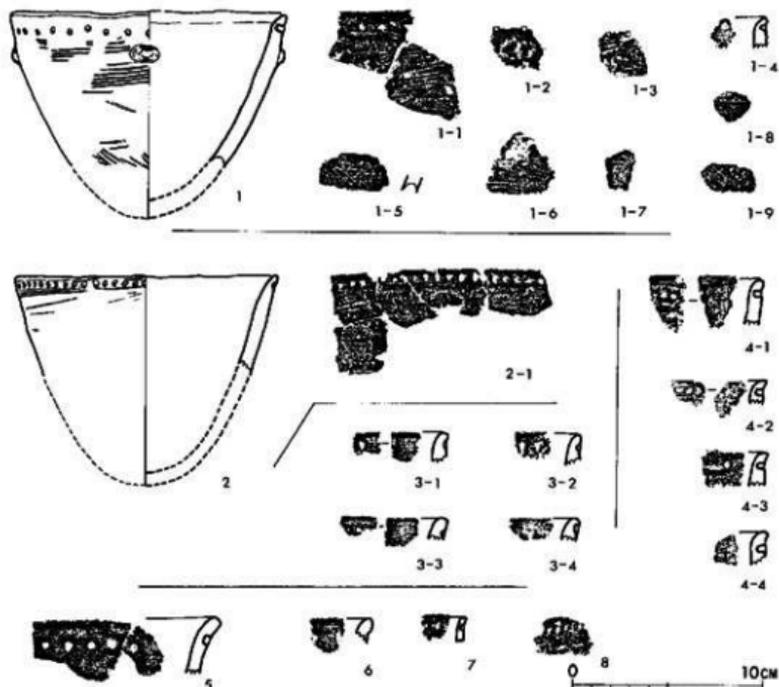


第17図 刺突文土器IIIの出土分布図

4. III層の遺構と遺物



第18図 刺突文土器Ⅳ～Ⅴの出土分布図



第19図 刺突文土器Ⅱ～Ⅸ実測図

第1凹部出土の土器は破片が少く全形等知ることができないが、特徴的には全く同じ土器である。

③ 刺突文土器Ⅱ（第16、19図1）

第2凹部北半部、G-24、H-21・22、J-18～22、K-21・22グリットに分布し、特別な集中区はない（第16図）。J-18グリットとK-21グリットの土器が6m離れて接合している。

土器は小型の深鉢形土器（第19図1）で復原口径14.5cm、推定器高11cm。底部破片は存在しないが、他の大型深鉢形土器からみて丸底になると考えられる。口縁部は直口し、内面が外側に向ってつまみあげられるため部分的にやや外反する部分がある。外面は口縁下から胴下半部にかけて刷毛目状の細い条痕が横あるいは斜方向で施され、口縁部直下（0.5cm）に1列の刺突文をめぐらす。刺突文は径0.3cmの丸い棒状のもので真横から突き刺し貫通はしないが、内面と

4. 田層の遺構と遺物

の間が2mm前後となり、内部に若干コブ状の高まりをみせる。刺突間は約1cmの間隔がある。刺突の直下には刺突文土器Ⅰと同様のコブがはり付けられる。Ⅰと異なり横位をしめし何個あったかは不明。コブは1.5cm×0.9cmで高さは不明。器壁は0.8cmで小型品のわりには厚い。表面は凹凸が著しい。胎土には石英、長石、花崗岩の粒子を多量に含む。焼成は良い。色調は外面が黄褐色～黒褐色、内面が黒褐色をなす。

④ 刺突文土器Ⅲ（第17・19図2）

第2凹部北半部H-21～23、I-21・22、J-20・22グリットに分布し、特にH-21～23に集中する（第17図）。H-23グリットの土器とH-21、I-21、I-22グリットの土器との接合関係があり、最も離れているのが約5.5mである。

土器は小型の深鉢形土器で器形は刺突文土器Ⅲに極めて近い。胴下半部を欠失するが他から復原すると丸底をなすものと考え。復原口径14cm、推定器高11.1cm、口縁はやや外傾しながら直口し、端部がやや外反し、丸くおさめる。外面は口縁部にわずかに横方向の細い条痕がある。胴下半は無文、口縁直下に一列の刺突文がめぐる。刺突文は径0.3cmの竹管状のもの（刺突文の底にその圧痕が明瞭に残る。）で横ないしは下方より突き刺したもので、下方からの刺突文は刺突文Ⅰでみたような押しき状になる。刺突文の間隔は狭く0.2～0.4cmである。内面は指による調整で凹凸が著しい。器壁は0.7cm前後。胎土には石英、長石、花崗岩の粒子を多量に含む、胎土の状態、色調は前四者と類似している。色調は外面が黄褐色、内面は黒褐色である。

⑤ 刺突文土器Ⅳ（第18図、19図3-1～3・4）

第2凹部中央部前面、K-23、L-23グリットに分布する。（第18図Ⅳ）

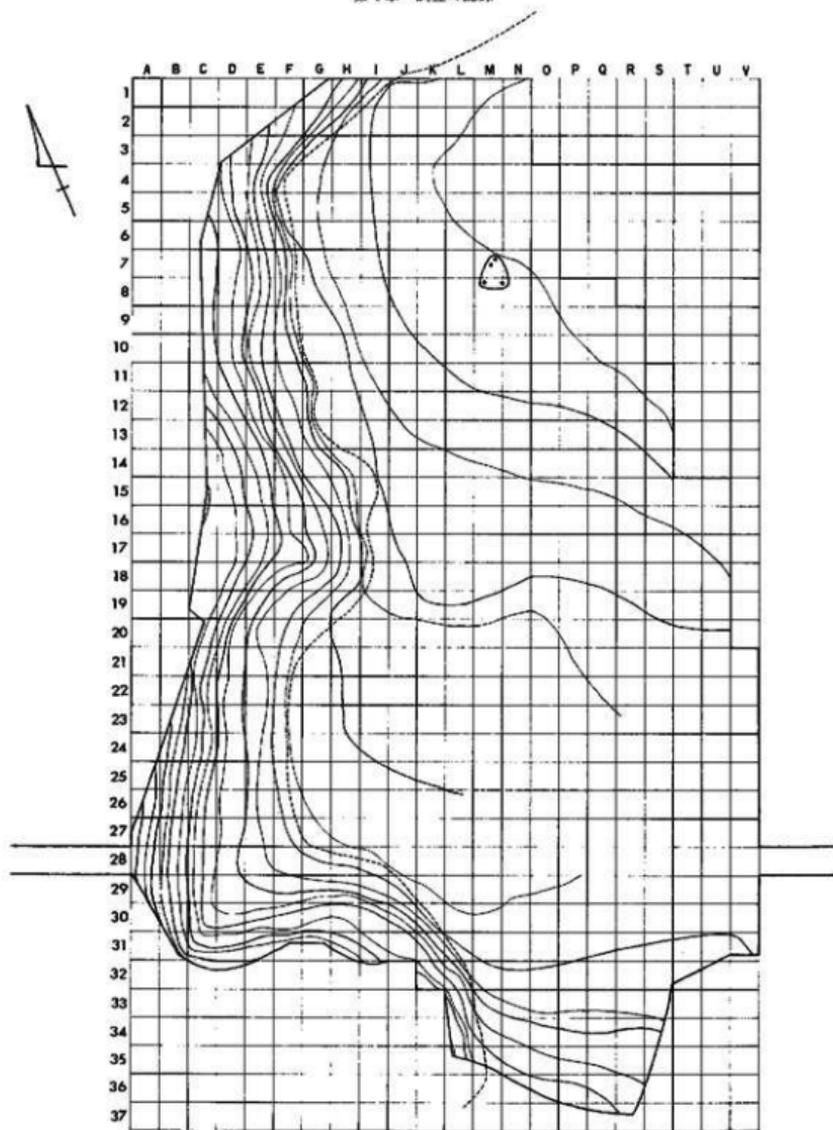
土器（第19図3-1～3・4）はいずれも口縁部の小片で4点ある。口縁端部がやや外反する。小型の深鉢形土器になるものである。口縁部直下（0.3cm）に刺突文一列をめぐらす。刺突文は先端の尖った径0.3cmの棒状工具を用いて下方より刺突し、引き抜く時下方にその痕跡を残した、いわゆる押しきによっている。刺突文の間隔は約0.5cmである。器壁の厚さは0.7cm前後。胎土に石英、長石、花崗岩の粒子を多量に含む。焼成は良くなく、黒褐色をなす。

⑥ 刺突文土器Ⅴ（第18図Ⅴ、19図4-1～4・4）

第2凹部北半部、H-21、K-19グリットに分布する。（第18図Ⅴ）

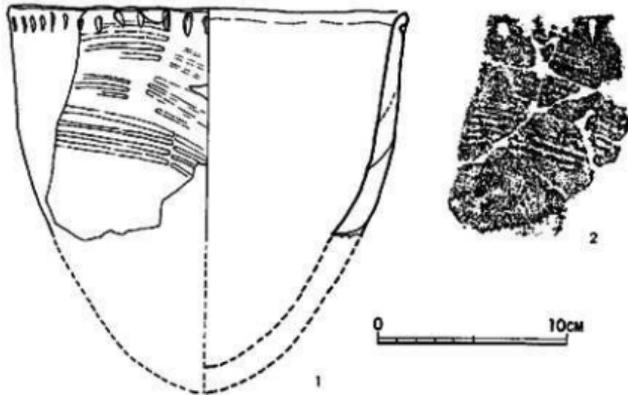
土器（第19図4-1～4・4）は4点で、いずれも口縁部の小破片である。小型の深鉢形土器になるものである。口縁直下を凹め、口縁部はやや外反する。口縁直下の凹んだ部分に刺突文一列をめぐらす。刺突文は径0.3cmの棒状工具を用いて真横から刺突したもので深さ0.3～0.5cmである。刺突文の間隔は0.7cm前後である。内外面共に、ヘラおよび指による横ナデで調整している。器壁の厚さは0.7cm前後である。胎土には石英、長石の細かい粒子を多量に含む。焼成は良好でなく、色調は黒褐色～黄褐色をなす。

⑦ 刺突文土器Ⅵ（第18図Ⅵ、19図5）



第20図 刺突文土器Xの出土分布図

4. 田層の遺構と遺物



第21図 刺突文土器Ⅹ実測図

第2凹部前面1-23, J-23グリットに分布する(第18図Ⅵ)

土器(第19図5)は2点で口縁部破片である。やや大型の深鉢形土器になるものである。口縁部が外反し、口縁下1cmのところに刺突文一列をめぐらす。刺突文は径0.4cmの先端が斜に削られた棒状工具を用い真横から深さ0.4cm前後突刺したもので、その間隔は0.6~0.8cmである。胎土には花崗岩の小石を多量に混入している。焼成は良く、色調は明るい黄褐色をなす。

⑧ 刺突文土器Ⅶ~Ⅸ(第18図, 19図7~9)

第2凹部前面に分布するが、いずれも口縁部小破片があるのみである。第19図6~7はいずれも別個体である。

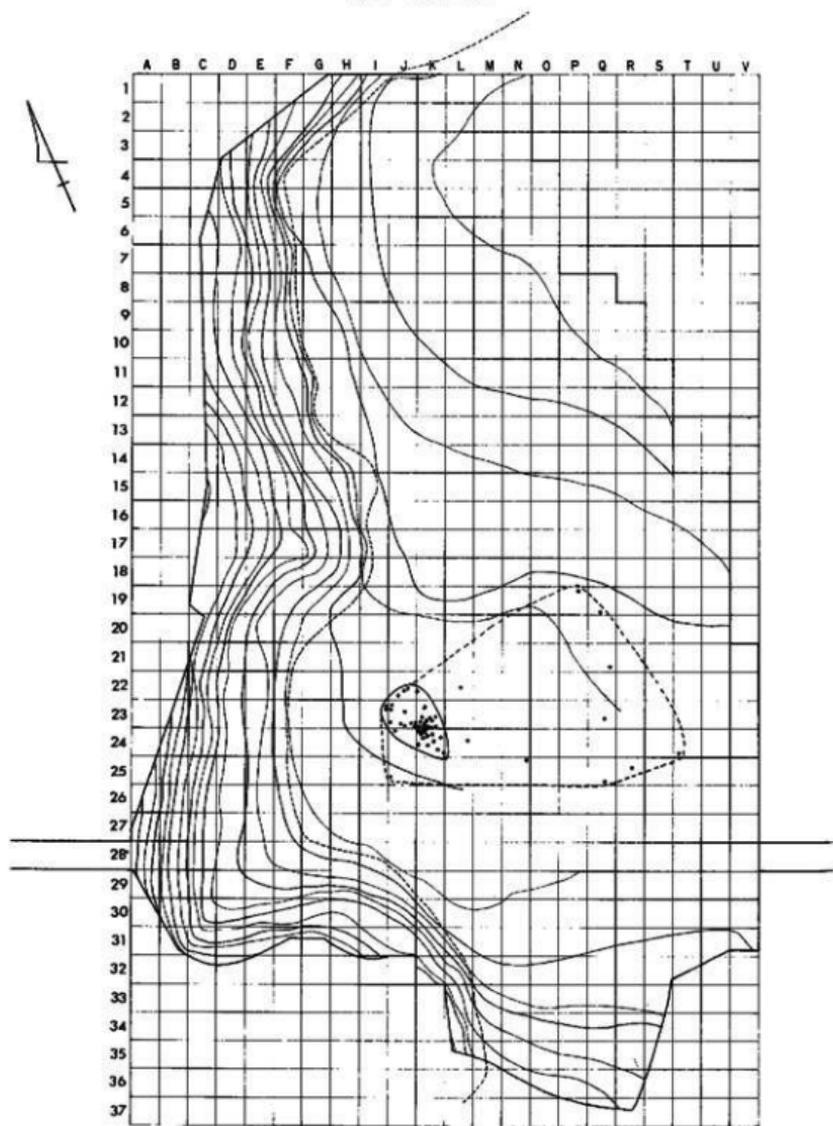
6は口唇部が外反し、その直下に刺突文を施す。刺突の間隔は1cm前後。器壁の厚さは0.7cm、胎土に石英、長石粒を多く含む。焼成はよく、内外面共に褐色をなす。

7は口縁部が直口し、口縁下0.3cmに刺突文一列をめぐらす。刺突文は0.2~0.3cmの菱形の棒状工具を用い真横から突刺したもので、刺突の間隔は0.3cmである。器壁の厚さは0.3cmときわめて薄い。胎土には石英、長石粒を多量に含む。焼成は良く、色調は内外面共に黒褐色をなす。

8は口縁直下を凹め、口縁部がやや外反する。凹めた部分に刺突文を密(0.2cmの間隔で)に一列めぐらす。刺突文は長径0.3cmの楕円形の棒状工具で横から突き刺している。器壁の厚さは0.6cm、胎土には石英、長石粒を多量に含む。焼成は良い。色調は内外面共に赤褐色をなす。

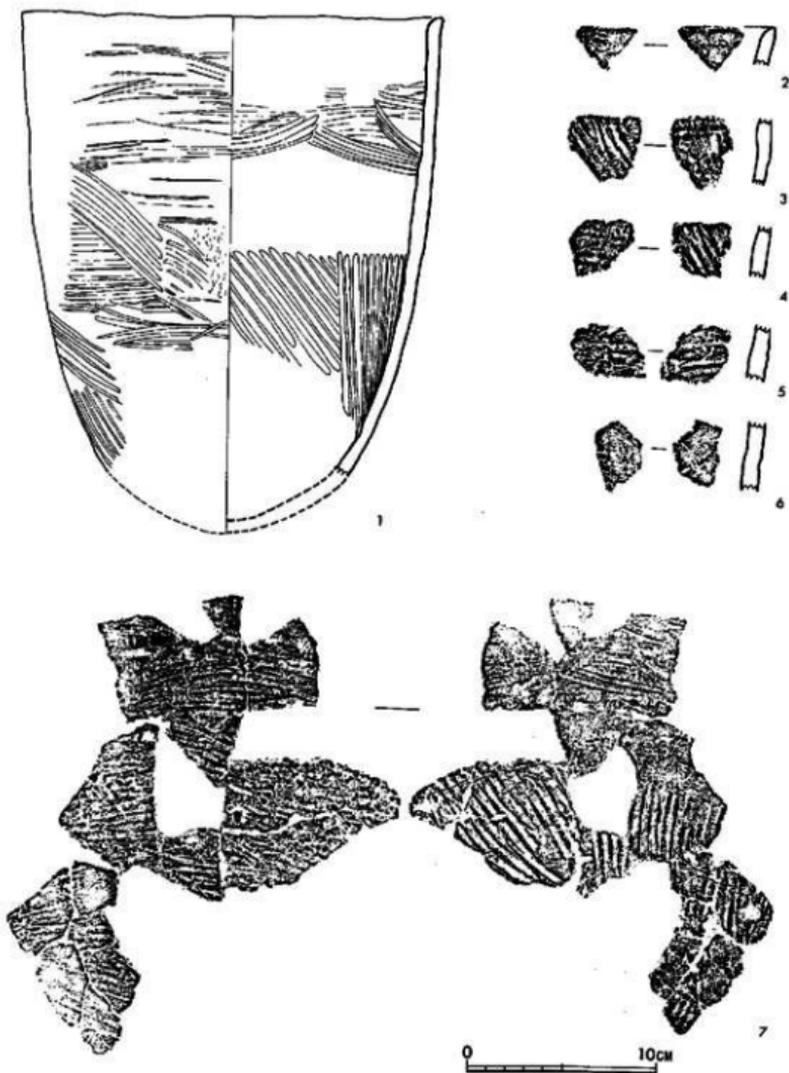
⑨ 刺突文土器Ⅹ(第20, 21図)

第1凹部中央部前面, M-7, M-8グリットに分布する。同一個体の破片は4点で少いが、大きな破片があるのでその全形を知ることができる。

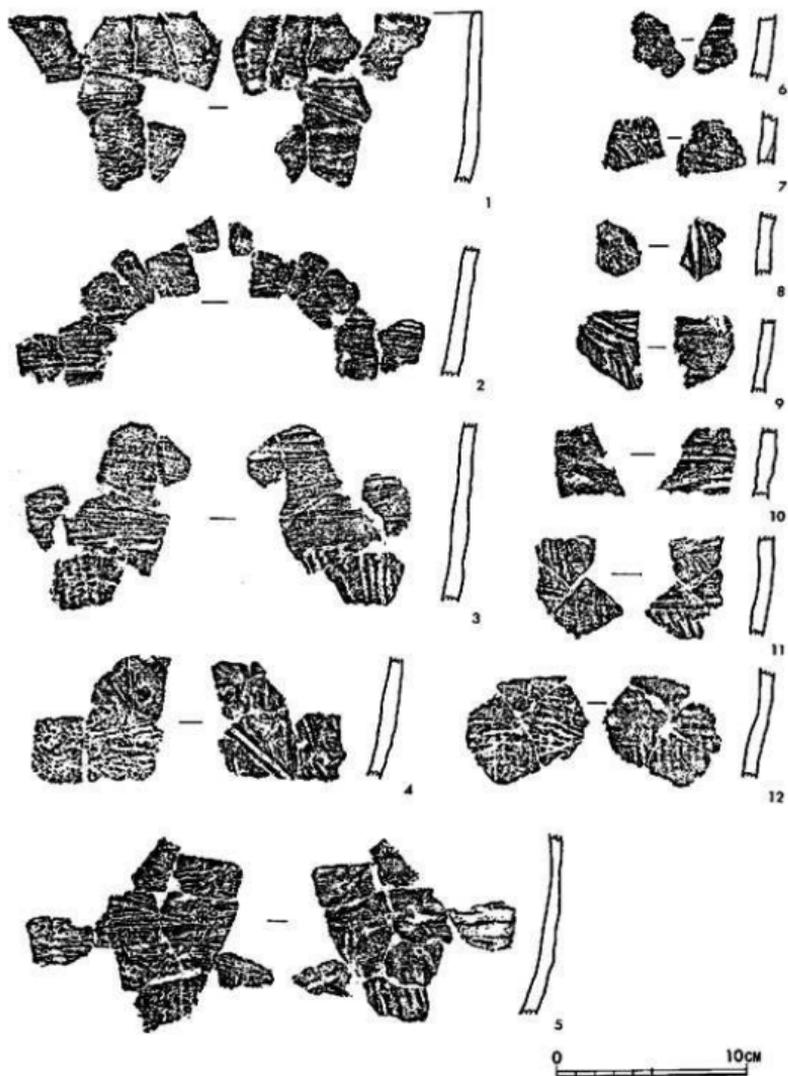


第22図 条痕文土器Ⅰの出土分布図

4. 田層の選構と遺物



第23圖 条痕文土器Ⅰ実測図Ⅰ



第24圖 条痕文上器Ⅰ実測図Ⅱ

4. Ⅲ層の遺構と遺物

土器は中製の深鉢形土器で、復原口径21.1cm、推定器高20.4cm前後である。底部破片がないので底部の形状は明らかでないが、尖り気味の丸底になると思われる。外面は横方向の貝殻条痕で器面調整をしている。口縁直下に刺突文一列をめぐらす。刺突文は径0.3cmの棒状工具を用いて下方から刺突したもので、引き抜きのときのあとびきがあり、1cm前後の刺突文となるいわゆる押し引きの手法をとっている。刺突の間隔は0.8cm前後である。内面は指によるナデ調整で凹凸がある。焦げつきの炭化物が付着する。器壁は0.9cm前後で口縁にむかって薄くなる。胎土には石英、長石、雲母粒を多量に含む。焼成は不良でもろい。色調は外面口縁部付近が黄褐色、胴下半部は二次的加熱のため、赤褐色をなし、内面は黒褐色をなす。

⑨ 条痕文土器Ⅰ（第22～24図）

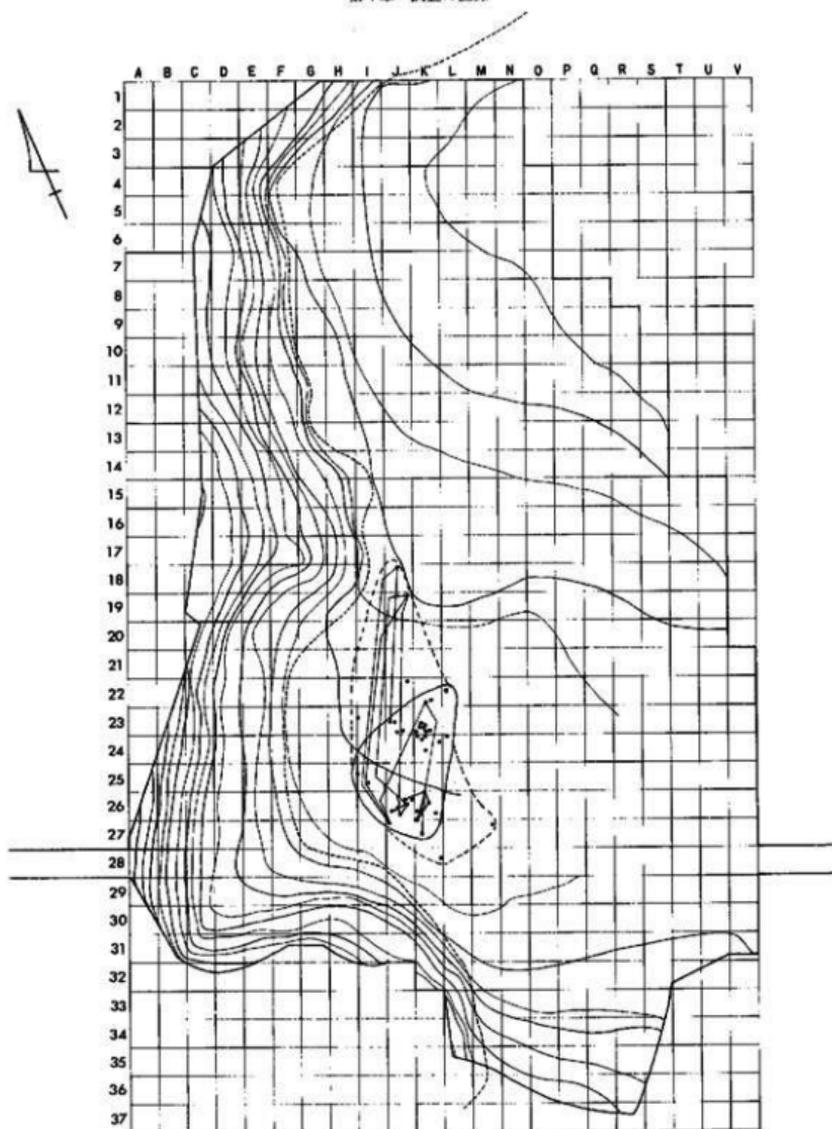
第2四部中央部前面14m×21mの範囲にわたって分布する（第22図）。すなわち、I-2, J-22-25, K-22-24, L-22, 24, N-25, P-19, Q-19・21・23・25, R-25, T-24グリットに分布し、特にI-23, J-22-23, K-22-23グリットに集中する。他は各グリットに1片づつくらいのもので集中部分から拡散状況を示していると考えられる。

土器片総数54点で破片も大きく、接合関係も良い。底部を欠損するがほぼ全形が復原できる。土器は大型の深鉢形をなし、復原口径22.1cm、推定器高27.4cmを測る。底部は破片の状況から丸底をなすと考えられ、体部は円筒状の胴の長い器形を有し、口縁は直口し、端部がやや外反する。外面の調整は胴上半部が横方向の条痕（施文具は明らかにできないが、胴下半部と同じものか）を薄く施し、胴中位から下半部にかけて荒々しい貝殻条痕（？）を横位あるいは斜位に施し、あるいは交差し、荒れた感じの器表面を形成している。底部周辺は幅の広い（0.4cm前後）貝殻条痕（？）を斜位に施す。内面の調整は胴上半部が横方向の貝殻条痕（？）を横位に浅く施すが、下半部は上半部と異なり幅太い条痕を深く左→右上方に引きあげた斜位の条痕を右まわりに施している。器壁は凹凸が著しく厚さは0.8cm前後で底部がやや薄くなる。胎土には石英、長石、赤い色をした砂粒を混入するが良質で、焼成は良い。色調は外面が黄褐色、一部黒灰がある。内面は黒褐色をなす。

⑩ 条痕文土器Ⅱ（第25、26図）

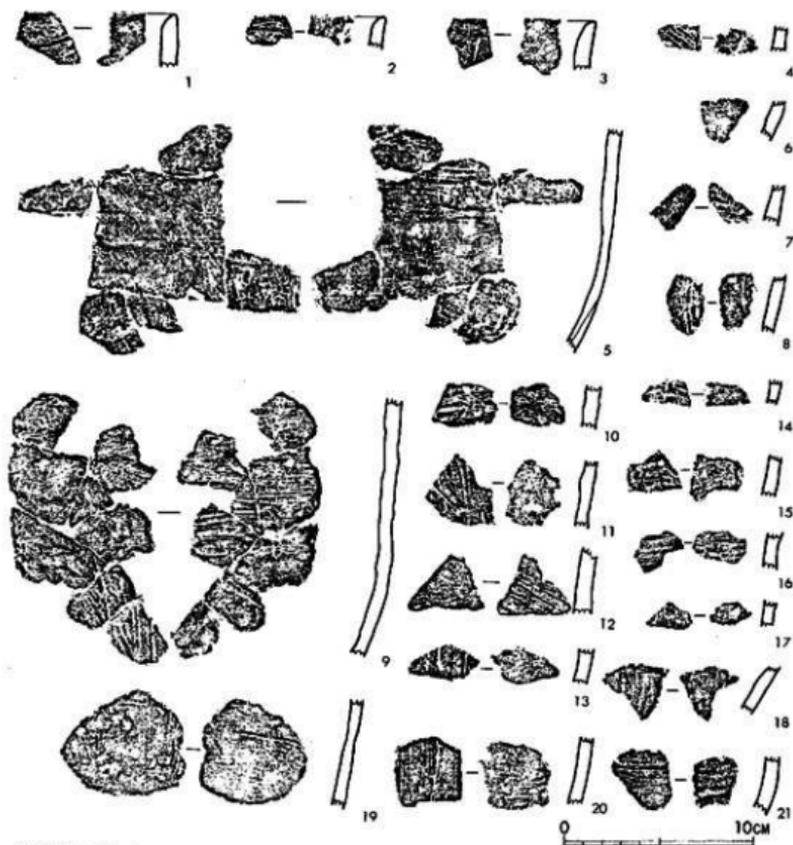
第2四部中央部前面、I-23・25, J-18・19・22・23・26・27, K-22・23・26-28, L-22, 24, M-27グリットに分布し、特にI-25, J-23, K-22・24, L-22・24グリットとJ-26・27, K-26・27グリットの2ヶ所に集中部分がみられる。J-18・19・26・27, K-22, 26・27グリットの出土土器との間に接合関係があり、最もはなれて接合するのが18m離れている。拡散状況は南北にみられる。

土器片総数は40点である。土器は条痕文土器Ⅰと非常に良く似ていて大きさや器形も同様のものと考えられるが、条痕文土器Ⅰよりも条痕が荒々しくなく、器面がみががれている。I-3は口縁部破片で、内面をナデあげて傾斜させる。外面は部分的に横方向の貝殻条痕を施す。



第25図 条痕文土器の出土分布図

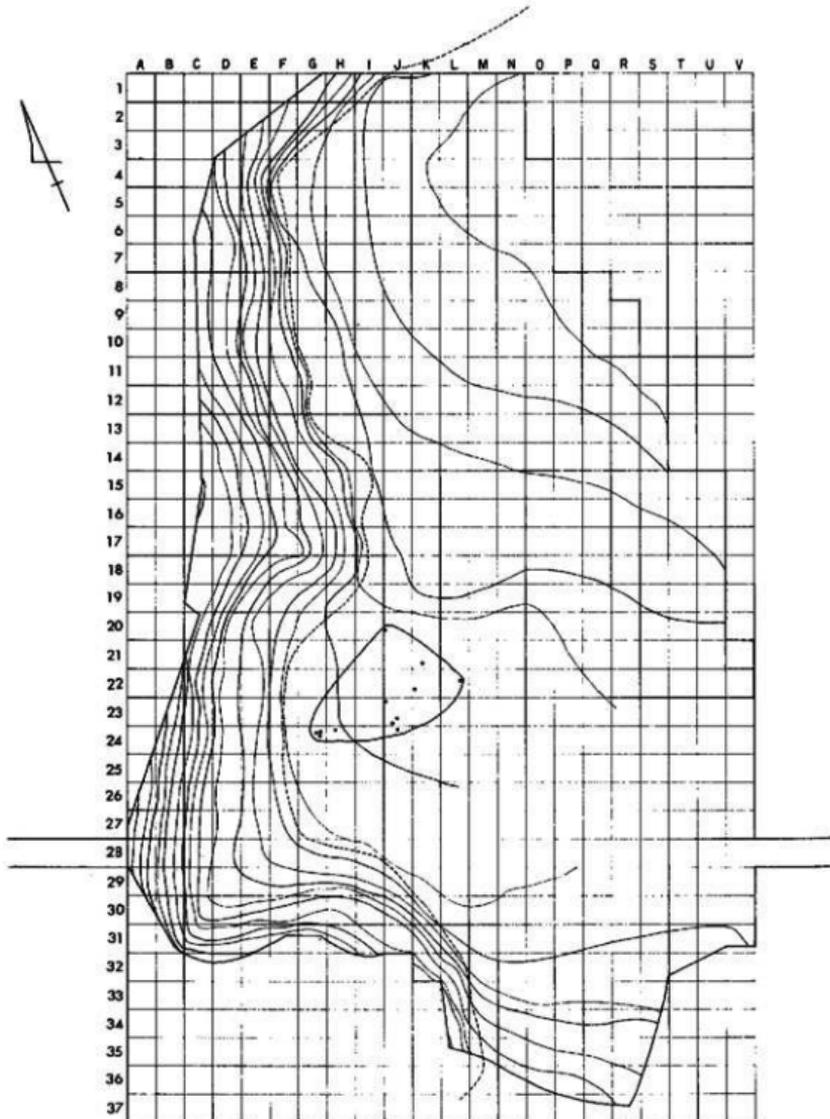
4. 田層の遺構と遺物



第26図 条痕土器Ⅱ実測図

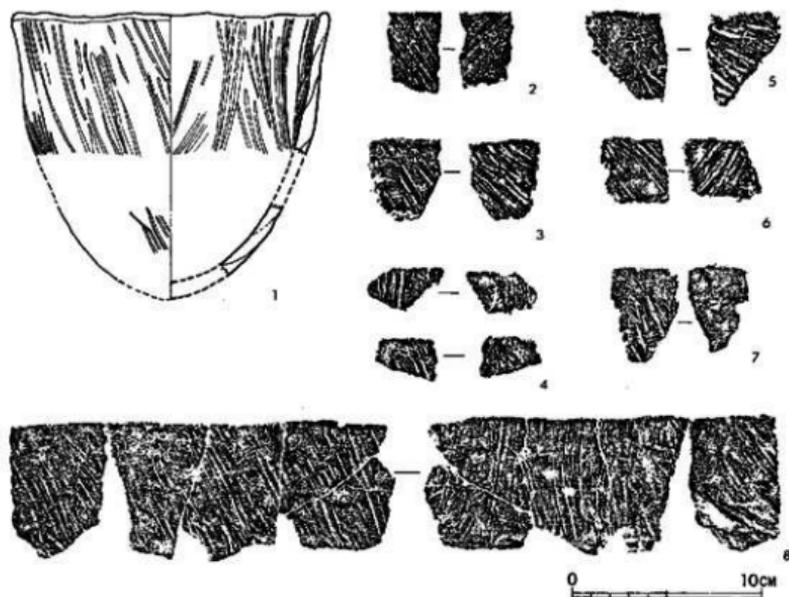
4～21は胴部破片である。やや大きい破片である5、9によって器面調整を観察してみよう。5は外面は上半部が横方向の条痕を施した上をナデ消している。下半部は縦方向の貝殻条痕を施した上をナデ消すが、上部ほど丁寧でなく、かすかに条痕が観察できる。内面は上部に横、斜位の貝殻条痕を施す。下部は条痕の上を丁寧にナデ消し、わずかに横方向の条痕が残る。器壁は条痕を施しているにもかかわらず、凹凸が著しい。内傾の粘土接合面が観察できる。9は外面が横方向の条痕の上を丁寧にナデ消しているがわずかに条線が残っている。ススの付着がわずかに

第4章 調査の記録



第27図 条城文土器田の出上分布図

4. 田舎の遺構と遺物



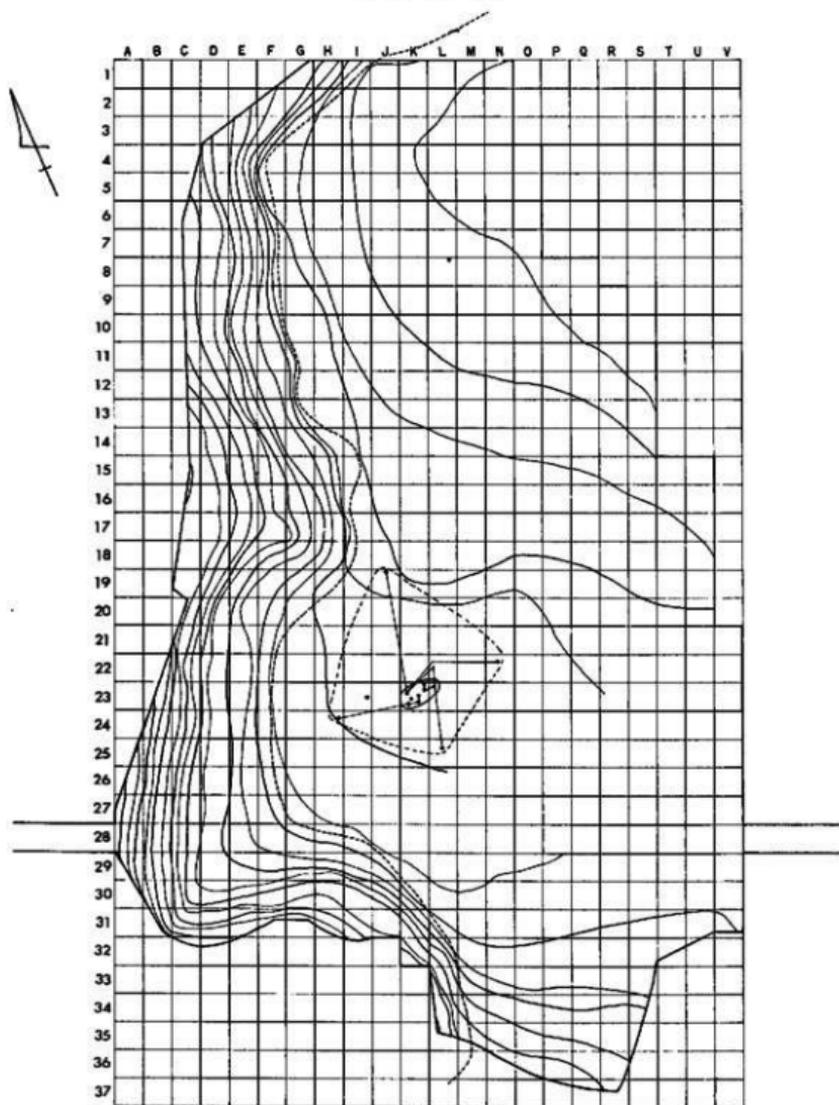
第28図 条痕文土器Ⅲ実測図

認められる。一部黒斑がある。内面は上半部に横斜方向の貝殻条痕を施し、下半部は丁寧にナデ消している。この破片も5同様に器壁の凹凸が著しい。器壁の厚さは0.8cm前後で、胎土には石英、金雲母の砂粒を含むが良質である。胎土中には気孔が目立つ。焼成は良い。色調は内外共に褐色～黒褐色をなす。

⑫ 条痕文土器Ⅲ (第27, 28図)

第2凹部北半部とその前面12m×10mの範囲、すなわちG-24, H-24, J-20・23・24, K-21・22, L-22に分布する。特別に集中する部分はみられない。出土土器は互いに接合関係にあり、土器はほぼ全形を知りうる。

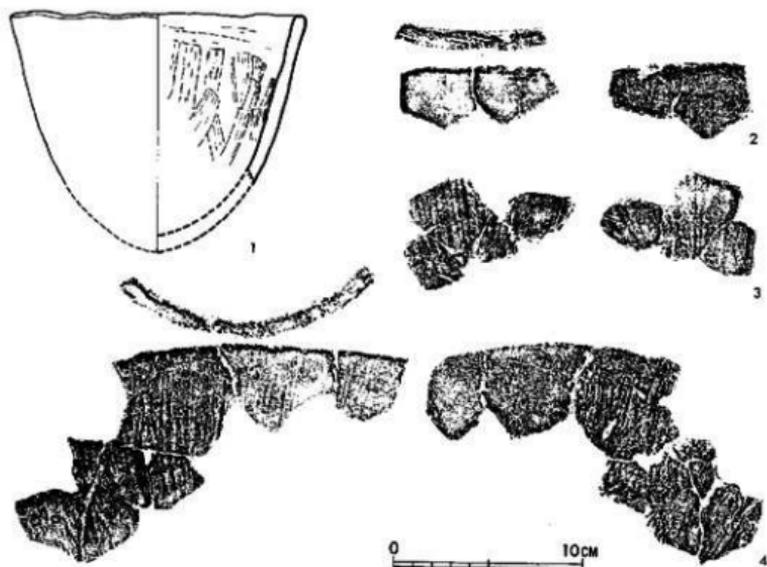
上器片総数12点である。小型の深鉢形土器で復原口径16.7cm、推定器高15cmをはかる。底部破片は欠損するが、底部付近の破片から丸底が想定される。体部は底部からゆるやかに外方に向かってたちあがり、胴中位でやや屈曲して口縁付近ではほぼ垂直に近いたちあがりを見せる。口縁は直口し、端部は丸くおさめるが、条痕文土器の大形品と異なり内傾の削りがなく、上部をナデで平坦面を形成する。口縁は水平でなく凹凸が著しい。外面には縦位の条痕を施すが、この



第29図 条痕文土器Ⅳの出土分布図

0 10M

4. 田層の遺構と遺物



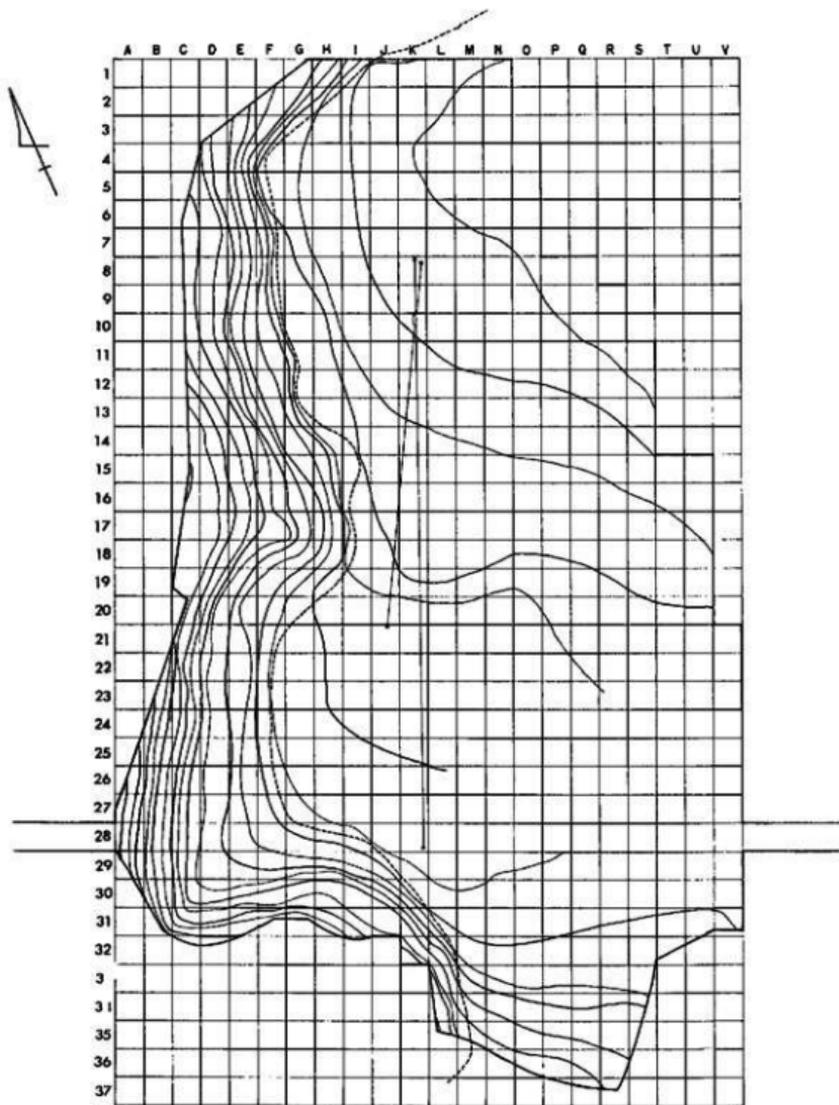
第30図 条痕文土器Ⅳ実測図

条痕は貝殻条痕等のように単位がなく棒状の工具で一本一本下よりかきあげた沈線状の擦過痕である。内面も外面と同様の条痕を縦、斜りに施文するが、剩下半部から底部にはおよんでいない。また上半部も条痕の上にナデが認められる。外面剩下半部にススの付着が認められる。器壁の厚さは1.5～0.8cmで器表面は凹凸が著しい。器壁の断面観察では約3cmの間隔で内傾の粘土帯の接合痕跡が認められる。胎土には石英、長石等の砂粒を含む。焼成は堅緻である。色調は外面が黒褐色、内面が黄褐色をなす。

⑬ 条痕文土器Ⅳ (第29, 30図)

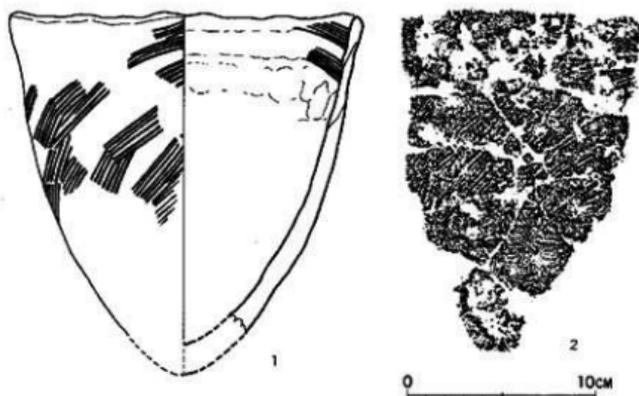
第2凹部中央部からその前面14m×14mの範囲、すなわちH-24, I-23, J-19, K-23, L-23, 25, N-22グリットにかけて分布する(第29図)。特にK-23, L-23グリットにかけて集中部分のみられる。K-23, L-23, H-24, J-19, L-25, N-22グリットの出土土器は互いに接合関係にある。接合例で最も離れている場合で8.5mをはかる。

土器片総数は13点で、底部を除いてほぼ全形を知ることができる。小型の深鉢形土器で、復原口径15.6cm、推定器高12.7cmである。底部破片は欠損するが、他よりみて丸底をなすと考えられる。(ただし、Ⅱ層土器で説明をかえる第105図3の底部がこの土器のものである可能性も



第31図 条痕文土器Vの出上分布図

4. Ⅲ層の遺構と遺物



第32図 条痕文土器V実測図

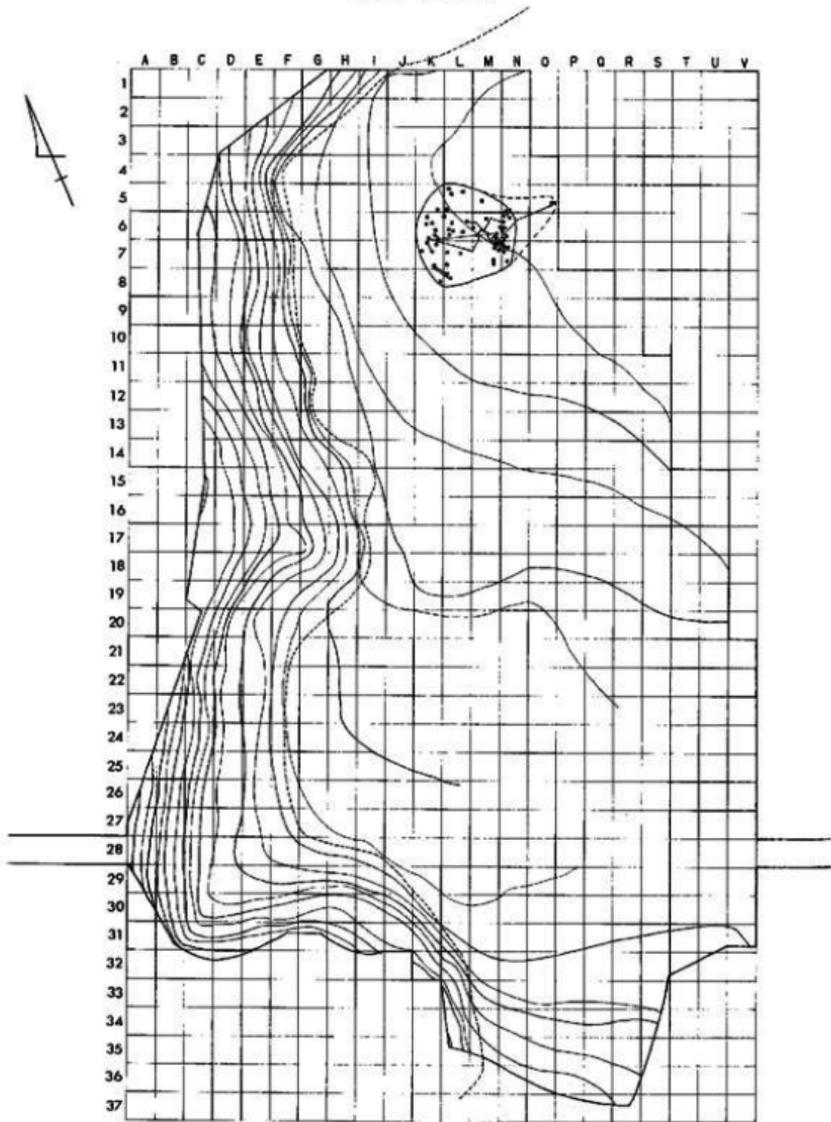
ある。この底部はいわゆる乳房状を示す底部である。)体部は外方に直線的にのびて口縁にいたる。口縁は条痕文土器Ⅲと同様に九くおさめる。外面の調整は縦位の条痕がかすかに観察できるが、この条痕も只穀条痕ではなく、条痕文土器Ⅲと同様に棒状工具で施した一本一本の擦過痕である可能性が高い。この条痕の上に縦位のナデを加え条痕を消している。ナデはへら状工具で行われたもので、口縁部付近は横方向のナデである。口唇部には門周に平行ないしはやや斜に条痕を施文し、文様効果を表わしている。内面はへら状工具によって、へら削り状のへらナデが縦位に施され一部は刷毛目状をなす。口縁部付近は横方向のナデである。外面の胴上半部にはススが付着し、下半部は二次加熱によって赤変している。内面にも焦げつきが認められる。器壁の厚さは0.7cm前後で凹凸がある。胎土には石英、長石、雲母の砂粒を多量に混入しているが良質で、焼成は堅緻、色調は外面が黄褐色～黒褐色、内面が灰褐色をなす。

⑭ 条痕文土器V (第31, 32図)

第2凹部前面および第1凹部前面に分布するが、この土器の分布は極めて特異である。(第31図)出土グリットはJ-21, K-8, K-28, L-23グリットである。J-21グリットとK-8グリット, K-8グリットとK-28グリット出上の土器の接合関係があるが共にその距離は26mと42.5m離れていてその要因が注目されるが石器にも同様の動きがあることに注意しておきたい。

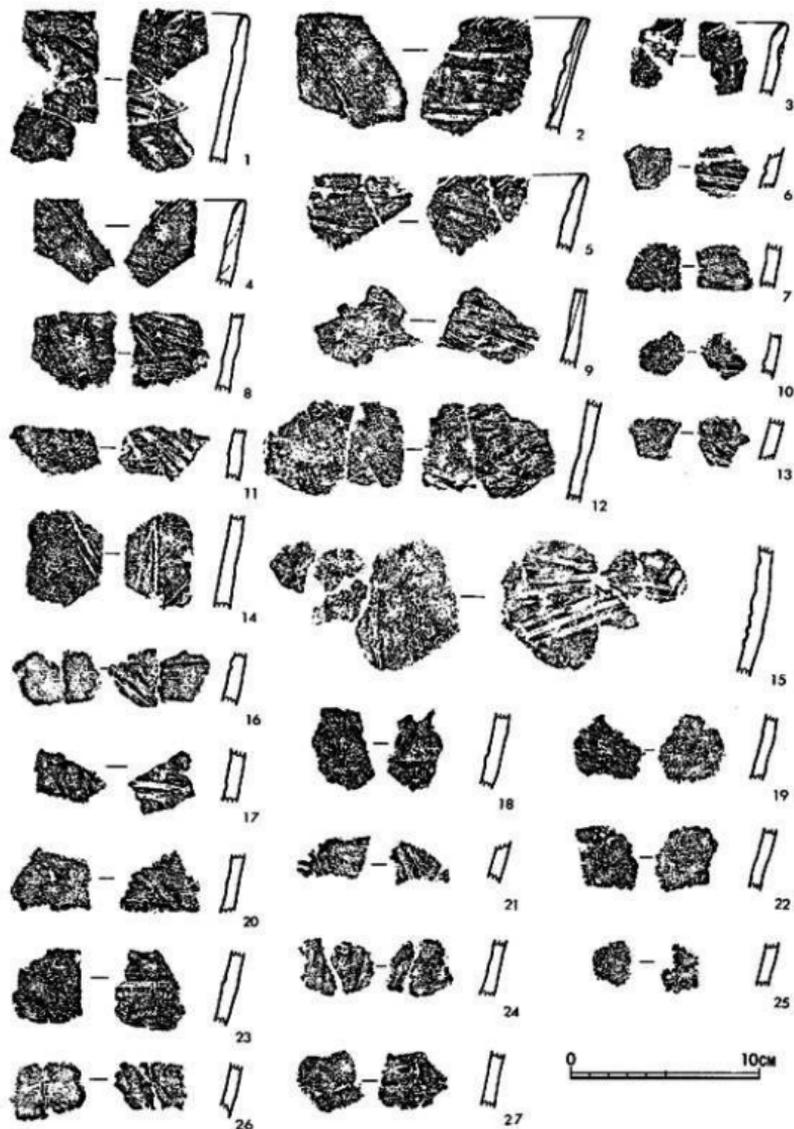
土器片は6点であるが、約半を残すので、底部を除いてほぼ全形を知ることができる。復原口径13.5cm, 推定器高14cmの小型の深鉢形土器である。底部は器形からみて尖底になると思われ、体部は外側に開いて直口する器形を有する。器面は粗い調整のため凹凸が著しい。外面は

第4章 調査の記録



第33図 条痕文上層VIの出十分布図

4. 田層の遺構と遺物



第34圖 条紋文土器VI実測図

斜位の貝殻条痕が口縁部から胴上半部にかけて部分的に施される。内面は口縁部付近に横位の貝殻条痕が部分的に認められる。また口縁部から6cmの間は2段にわたって製作時の指の押圧が明瞭に残っていて凹凸が激しい。外面の胴上半部に一部ススの付着が認められ、下半部は二次加熱のため赤変している。内面の胴下半部は焦げつきが著しい。胎土には石英、長石等の粒子と花崗岩の小石（径0.4cm）を多量に含み、焼成は不良、色調は外面が黄褐色～黒褐色、内面が黒褐色をなす。

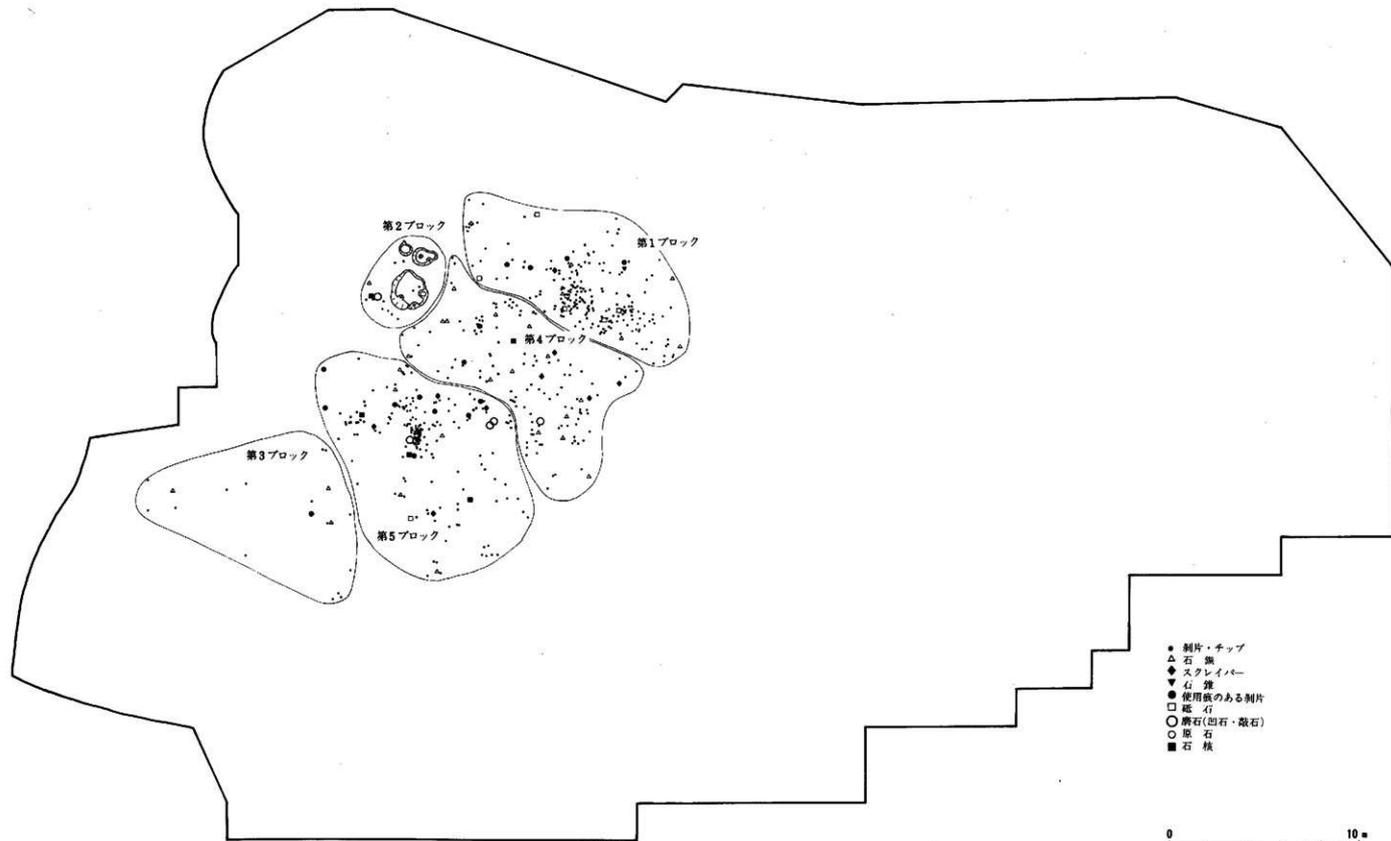
⑮ 条痕文土器Ⅵ（第33、34図）

第1凹部前面の10m×8mの範囲、すなわちK-5～8、L-5～8、H-5～7、N-5～7、O-5グリッドに分布し、O-5グリッドの1点を除いて他は集中している。（第33図）土器片は総数54点である。深鉢形土器であるが、接合関係がうまくいかず、その全形を知ることではできなかった。第34図に主な破片を示した。1～5は口縁部破片である。直口する口縁で端部は丸くおさめるが、上がやや平坦である。口径をだせる破片はないが、カーブからみてかなりの大型品であることがわかる。外面の調整は幅1cmで2条よりなる工具（竹管ないし貝殻）で2本単位の条痕を斜方向に部分的に施している。外面にはススの付着が認められる。内面は口縁下2cm前後のところから外面と同様の工具で横方向に条痕を施すが、外面よりやや密である。口縁内側には幅0.3cmの2本単位の条線（竹管か？）を斜位に0.6～1cm間隔で施し、文様効果をねらっている。6～27は胴部破片である。口縁部破片同様に外面調整は斜位方向の条痕であるが、施文されるのは部分的である。内面は横方向の条痕で外面よりやや密である。底部破片は存在しないが、尖底あるいは丸底になるものであろう。器面は条痕を施している割には凹凸が著しい。器壁の厚さは0.6cm前後で大型品のわりには薄い。胎土には石英、長石、花崗岩小石を多量に混入しているが、刺突文土器等の胎土に比較すれば良質である。焼成は堅緻。色調は内外面共に黄褐色～灰色をなす。（山崎）

（3）石器の出土状況と石器

Ⅲ層より出土した石器は、その出土状況から大きく5つの群に分けることができる。順に第1ブロック、第2ブロック、第3ブロック、第4ブロック、第5ブロックと称する。ブロック認定にあたっては、視覚的な分布のかたより、石器の石材、接合資料の分布のあり方など考慮して決定した。時間的都合により剥片・破片の個体識別による分析を行っていないので、若干の変更、ブロックの細分化の可能性もあるが、現在のところ便宜的にこの方法でブロックを認定しておく。これより各ブロックの境界については石器を中心に考え、石片類については明確でない。以下Ⅱ層、Ⅰ層についても同じである。また石器（剥片石器及び石核、原石）の石材は、次の13に分類して、記述をすすめる。本遺跡で認められる石材は、黒曜石、安山岩、チャートを主体としたもので、前二者が圧倒的に優位である。

黒曜石A（以下、ob-Aと記載）—光沢のある漆黒色不透明の黒曜石で、そのうち角礫状を



第35図 III層の石器出土分布図

4. III層の遺構と遺物

呈するものは佐賀県伊万里市の腰岳産の黒曜石と思われる。気泡、外表面の特徴、色調から数種の母岩に分けられると思われるが、碎片、自然面をもたない剥片については識別が困難であり、一応一括して取り扱う。

黒曜石B (ob-B) — 透明度のある黒曜石で、黒色の帯が縞状に入り込み、光沢をもつ。腰岳産と思われる。

黒曜石C (ob-C) — 青味を帯びた黒曜石で、バティナにより、光沢を失っている。色調や粒子の特徴や分布のあり方などから数種の母岩別に分類できそうである。ただし、この青い色調はバティネーションの結果であり、本来は黒色を呈していたものと思われる。原産地は推定不能。

黒曜石D (ob-D) — 胎色を呈し、縞状節理と細かい白色の斑点が入る黒曜石。原石の形状は、5 cm程の扁平礫で、2～3個体が存在すると思われる。原産地不明。

黒曜石E (ob-E) — 暗灰色を呈し、透明感のない粘性をもつ黒曜石。石器を含め10数点の出土であるが、すべて同一母岩であるかは断定できない。原産地不明。

黒曜石F (ob-F) — 一般に姫島産と呼ばれる乳灰色の粘性の少ない黒曜石で、剥片3点のみの出土である。同一母岩と思われる。

古銅輝石安山岩 (以下、安山岩もしくはandと記載) — 縞の入り方、自然面や色調の違いから数種の母岩に分類可能である。

青灰色チャート — 灰色と暗青色の帯が縞状に入るチャートである。石鏃1点(第177図392)と異形局部磨製石器2点(第130図213, 214)のみで、3点とも別個の母岩から製作されている。

淡緑色チャート — 淡い緑色を呈するチャートで石鏃1点(第37図26)のみである。

橙白色チャート — 白みを帯びた橙色のチャートで石鏃1点(第36図16)のみである。

茶色チャート — 濃い銜色のチャートで碎片のみの出土である。

硅化木 — この石材を用いたものは石核1点(第124図177)のみで、その他の石器、剥片、碎片は得られていない。

頁岩 — 黄褐色の風化した頁岩で、第111図112の使用痕のある剥片1点のみである。以下、石器の記述にあたってはこの分類に従ずる。なお、III層より出土した石器・石片の総数は567点で、うち石器が66点である。

第1ブロック

第1凹部の北よりの最深部に集中した分布をもつ。また、中央部右よりにとくに石片の密集した部分がある。石器の内訳は、石鏃5点、スクレイパー1点、石錐1点、使用痕のある剥片(以下UFと表示)4点、砥石6点である。接合資料2つを含む。

石鏃 [第36図3～7] 3の石鏃を除いてすべて黒曜石製である。個体の大きさにはバラエティーがあるが、3以外は凹基の形状を有している。5は本遺跡出土の石鏃の完形品中最小の

ものである。長さ8.0mm, 幅7.8mm, 厚さ2.8mmを測る。4はob-C製の局部磨製石鏃で、両脚部、先端部を欠損している。

ここでⅢ層出土の全ての石鏃の特徴について述べておく。Ⅲ層出土の石鏃29点のうち完形品13点(44.8%)、欠損品16点(55.2%)で、やや欠損品が完形品を上回っている。石材別ではob-A-5点(17.2%)、ob-B-10点(34.6%)、ob-C-4点(13.8%)、安山岩-8点(27.5%)、淡緑色チャート-1点(3.4%)、橙白色チャート-1点(3.4%)である。黒曜石、安山岩、チャートの割合は65.6%、27.5%、6.4%と黒曜石が約6%を占める。その黒曜石の中でもob-B製石鏃が19点中10点で略半数以上に昇る。

復原形の大きさは、その形態が復原できたもの22点(黒曜石製12点、安山岩製8点、チャート製2点)と比較すると、黒曜製石鏃が平均1.98cm×1.42cm、安山岩製石鏃が20.0cm×1.44cm、チャート製石鏃が2.00cm×1.35cmで、ほぼ同じ値を示す。全体的にみて1.5~2.0cm×1.0~1.5cmにピークがある。長幅指数(長さ/幅)は、黒曜石製石鏃が平均1.47、安山岩製石鏃が1.52、チャート製石鏃が1.52と黒曜石がやや細身であるが、すべての石材でほぼ長さと幅が3:2の値を示している。しかし黒曜石製石鏃内で比べてみると、ob-Aが平均1.31であるのに対しob-Bが1.60、ob-Cが1.56のようにob-Aが他に比べてすづまりの形態をとることが窺える。

欠損箇所別の頻度は、欠損した石鏃16点の欠損箇所総数27のうち、先端部が6(22.2%)、脚部21(77.8%)と、極めて脚部の欠損率が高い。

石鏃〔第36図8〕、背面に自然面をもつob-C製の剥片を利用したもので、鋒刃部のみを両面からの押圧剝離によって加工している。長さ1.7cm, 幅0.8cm, 厚さ0.2cmである。刃の断面はレンズ状を呈する。

砥石〔第36図12~14, 第40図62, 第139図285〕全部で6点の出土であるが、すべて破損している。285はⅡ層出土品(1点)と接合した例である。全て砂岩製で扁平な板状の体形をもつ。12, 14, 285は赤褐色、13, 62は黄褐色の砂岩である。12, 13は表面に砥磨作業による平坦面をもつのみであるが、14, 285はほぼ中央部に浅い凹部を有している。14の凹部は幅1.5cm以上で本来は下半部へ伸びた楕円形の凹部であったと思われる。285は大きな凹部の中にさらに深い長楕円形状の凹部を有している。その幅は約2.5cmである。第40図62も14, 285と同じく黄褐色砂岩製の板状砥石の破片である。裏面は剝落しているが表面、側面は平坦な砥磨面である。凹部は幅約1.5cm。全て周辺及び裏面も砥磨による滑らかな面で構成されている。

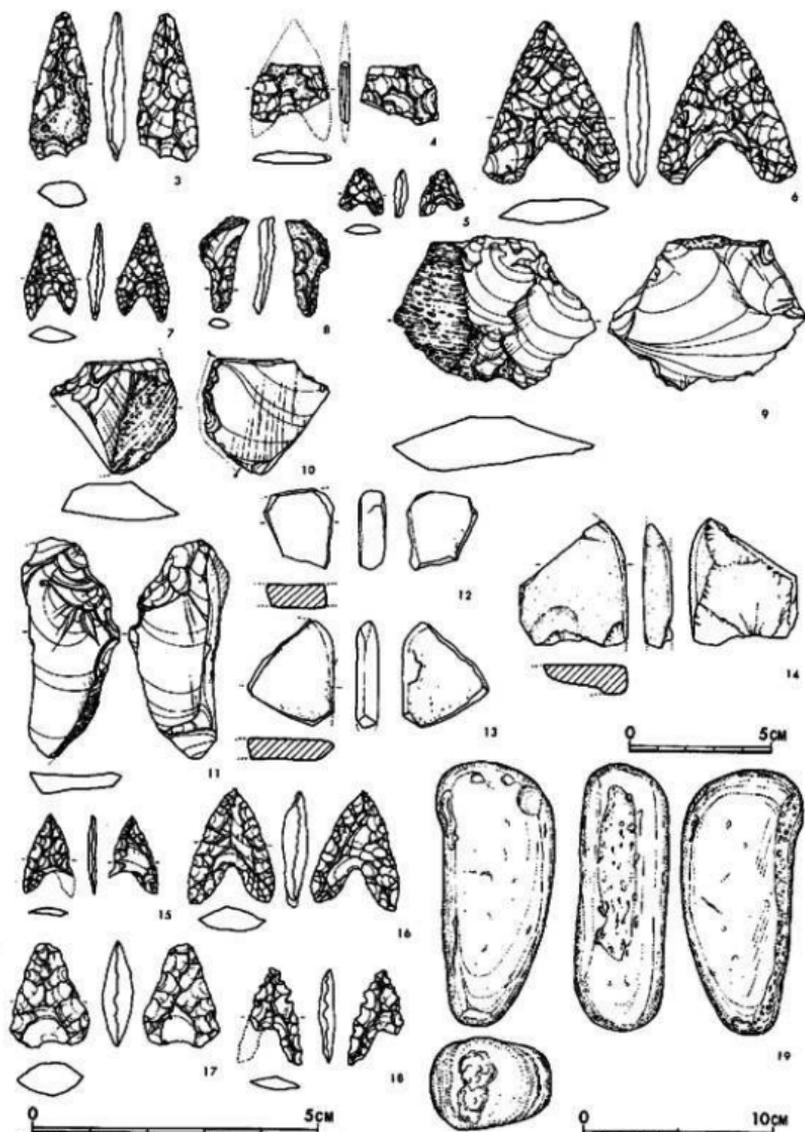
使用痕のある剥片〔第36図10〕ob-A製の切断剥片を使用したものである。この他に6点ある。

第36図9, 11はob-A製の剥片である。

第2ブロック

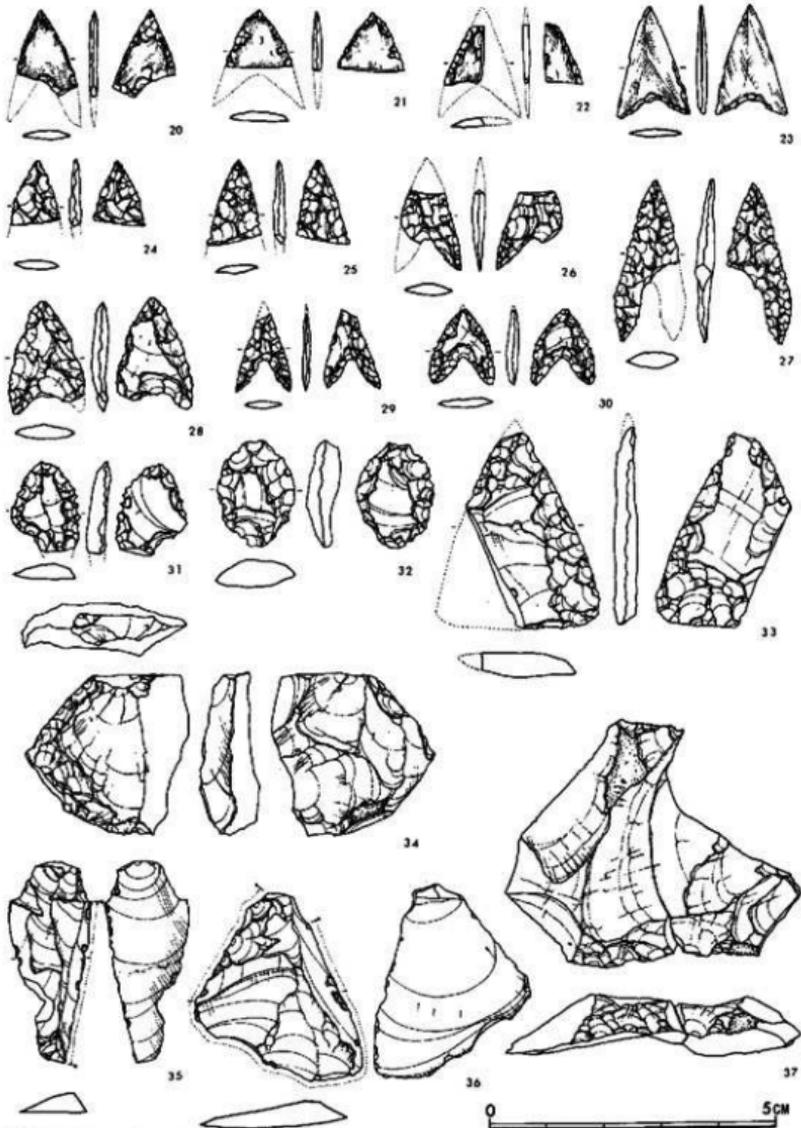
第1号竪穴遺構の南側に位置する。石鏃1点、石核1点、磨石1点のみの出土である。

4. 田層の遺構と遺物



第36図 第1・2・3ブロック出土石器実測図

第4章 調査の記録



第37図 第4ブロック出土石器実測図

4. 田層の遺構と遺物

石鏃〔第36図16〕 橙白色チャート製の剥片を素材とした凹基の石鏃の完形品である。背面の一部に素材剥片の背面の剥離面を残している。この石鏃の素材となっている橙白色のチャートを用いたものは、本遺跡では石核、剥片、破片のいずれも得られていない。よって遺跡外で製作され、本遺跡へ持ち込まれた資料と考えられる。

磨石〔第36図19〕 花崗岩製の円柱状の礫を利用したもので、主に平坦な表表面を使用している。下部端は敲痕が観察され、敲石としても使用されたと思われる。長さ14cm、幅5.9cm、厚さ4.5cmを測る。

石核は図示していないが、安山岩製の剥片を素材とした扁平な石核で、分割面を打面として数回の剥片剥離を施している。ただし、最終剥離面の大きさは1.2×1.5cmで、小形の剥片しか得られていない。

第3ブロック

石器の分布域の南東隅に位置するもので、際立った密集域をもたず、散漫な状態で分布している。石鏃3点とUF1点を含むのみである。石鏃15は他の石器3点より南へ7m離れているが一括した。

石鏃〔第36図15, 17, 18〕 15, 18がob-B製の凹基の石鏃で、17が平基に近い安山岩製の石鏃である。15は非常に薄手で小形であり、素材剥片の主要剥離面が裏面に残っている。18は鋸歯状の側面をもつ。両者とも片翳を欠損している。17は全面白色の被膜を帯び先端も鈍い。

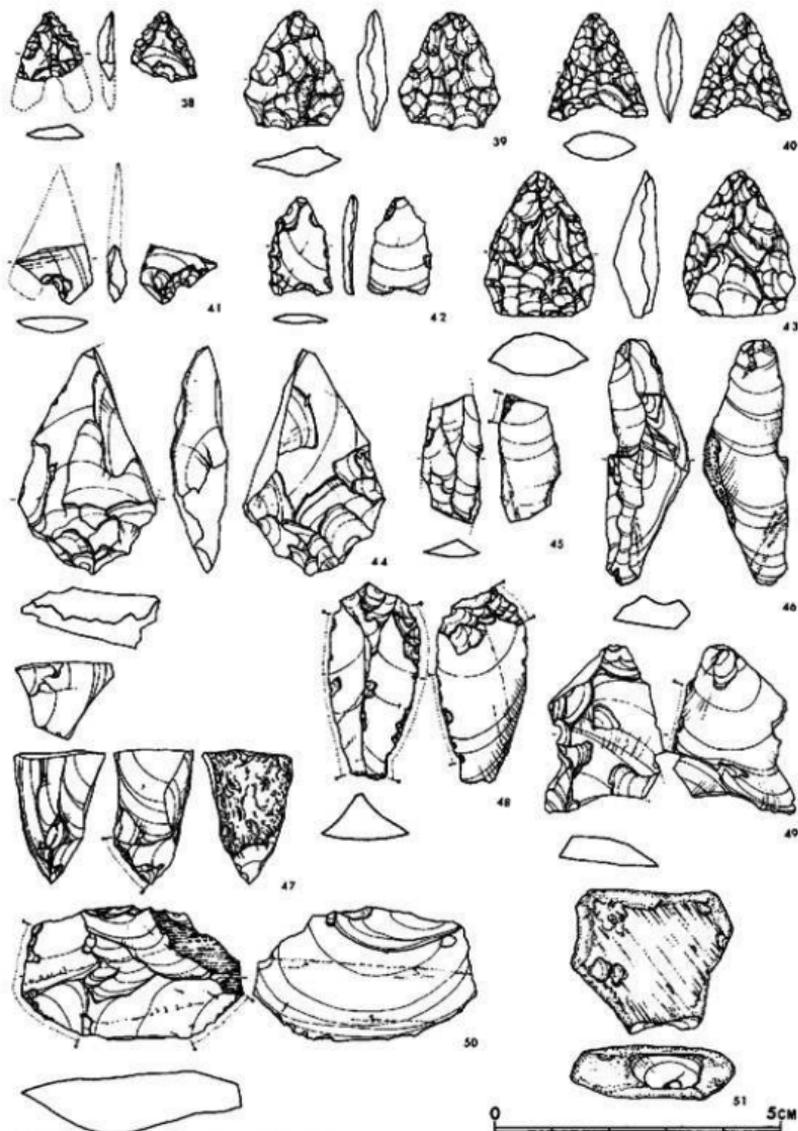
第4ブロック

第1ブロックと第5ブロックの間に位置するブロックで、石器として、石鏃13点、スクレイパー3点、UF2点、磨石1点、石核1点が含まれている。

石鏃〔第37図20~31, 33, 第174図354〕 20~23はob-B製の局部磨製石鏃で、23を除いて全て欠損品であるが、23と同様の体形をとるものと考えられる。これらの石鏃はほぼブロックの中心に分布している。23のように全て全面を研磨している。24, 25は基部を欠損し全体形は不明であるが非常に似たタイプの石鏃で、両者ともパティナをうけて灰白色化している。33の大形三角鏃以外は、ほぼ凹基かもしくは鏃形の体形にまとめられる。26は淡緑色のチャート製剥片を素材としたもので、先端部と片翳を欠損している。この石材による資料は本遺跡では得られておらず、第2ブロックの16と同じく、他から持ち込まれた資料である。354はob-B製の石鏃が半割して出土したもので大きい破片が本ブロックより、小破片がI層中より出土した(接合資料No9)。素材剥片の打面側を基部に用いて周辺及び脚部にリタッチを加えた凹基の石鏃である。

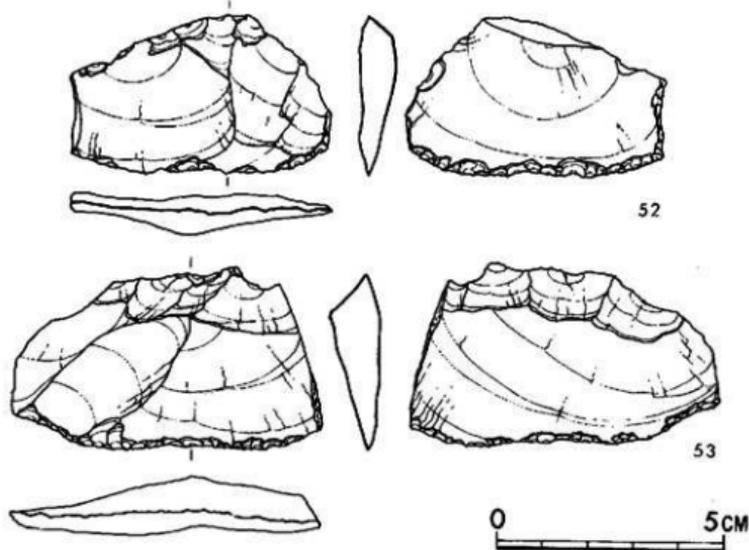
スクレイパー〔第37図32, 37〕 32はob-A製の拇指状のスクレイパーで、長さ1.80cm、幅1.32cm、厚さ0.51cmを測る。素材の主要剥離面及び背面の剥離面を留め、打面は自然面である。37は安山岩製のスクレイパーで、素材剥片の左側辺部に、主要剥離面側からの数回の剥離によ

第4章 調査の記録



第38図 第5ブロック出土石器実測図I

4. Ⅲ層の遺構と遺物



第39図 第5ブロック出土石器実測図Ⅱ

って刃部を形成している。3点ほどに分割したと思われるが、2点のみの接合で、他の一点は不明である。約1.5mほど離れて接合した。(接合資料No35)

第37図35, 36はob-B製のUFである。他に花崗岩製の長楕円形をした磨石がある。

石核(第37図34) 安山岩製の剥片を素材にした扁平な板状の石核である。石核の中心に向かって求心的に剥片剥離を行なっている。打面は平坦打面である。左側辺に細かな二次加工のような剥離痕が認められる。途中で分割されている。2.85cm×2.80cm×0.75cm。

第5ブロック

第2凹部の左隅の前面に顕著な密集域をもつブロックで、石器としては石鏃7点、スクレイパー4点、UF9点、砥石1点、磨石3点、原石1点、石核3点を含む。接合資料3点がある。ブロック中央部の密集域は、第1ブロック中央部のそれとともに、Ⅲ層内においてとくに著しい集中区をなしている。また、第1ブロックとの接合例(剥片と剥片、第213図32)がある。

石鏃(第38図38~43) 本ブロック出土の石鏃は38, 41の黒曜石製のものを除いて他は安山岩製で、それらは全て完形品である。黒曜石製品はいずれも欠損している。38はob-C製の円基の石鏃で、右側辺を鋸歯状に作出している。素材剥片の主要剥離面を表面に大きく残してい

る。石材より第4ブロックに入る資料かもしれない。41はob-B製の石製の脚部である。素材剥片の打面が脚部末端に、背面及び主要剥離面がそれぞれ表裏面に残っており、基部整形（挟り）を行っただけの剥片である。安山岩製の石製は、黒曜石製石製に比べて厚味があり、整形加工も粗い。体形としては平基（39, 42, 43）と凹基（40）の両方がある。42は剥片に僅かな周辺の二次加工を施しただけのもので、その先端部分が素材剥片の打面側にあたる。

スクレイパー〔第38図44, 第39図52, 53〕 44は安山岩製の不定形剥片を素材としたスクレイパーで、約半分を欠失する。刃部は両面からの二次加工によって作出される。現存長3.95cm, 幅2.43cm, 厚さ0.85cmを測る。52は安山岩製の横長剥片を素材としたスクレイパーで、その端部を中心に両面から二次加工を施し刃部を形成したものである。刃部作り出しの二次加工は主に素材剥片の主要剥離面からの細かい剥離によってなされており、背面からの加工は僅かである。素材となった剥片打面は平坦打面が無調整である。長さ3.65cm, 幅5.75cm, 厚さ0.87cmを測る。53も52と同じく安山岩製の横長剥片を素材としたスクレイパーで、両面から細かい剥離の二次加工を施して刃部を形成している。素材剥片の打面の状態は、その部分に粗い剥離が施されているため不明である。右側辺部に素材の礫面を留めている。長さ40.5cm, 幅6.80cm, 厚さ1.20cmを測る。52と53は素材の形状、形態、二次加工の部位も類似したもので、両者は約6m離れて出土した。

UF〔第38図45, 47~50〕 使用痕のある剥片は全部で9点出土しているが、特に密集したところはなく、散漫な分布状況を示している。48はob-B製の剥片を用いたものであるが、特に右側辺に使用痕が著しい。最下層の撚糸文土器に伴出した。

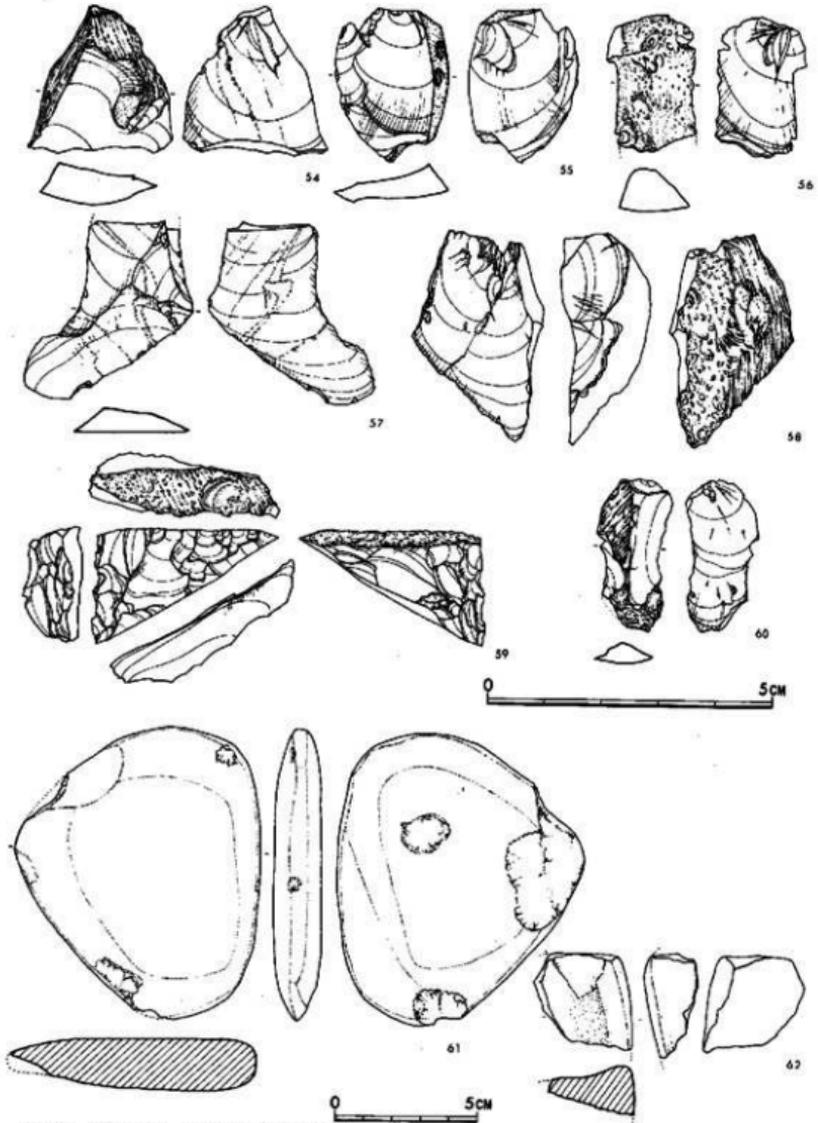
砥石〔第40図61〕 61は隅丸の略三角形を呈する淡黄色砂岩製の砥石で、2ヶ所程僅かに欠けているがほぼ完形である。凹部はもたず全面砥磨による平坦な面をもっている。周辺もすべて砥磨による面取りが行なわれている。

石核〔第40図58, 59〕 58はob-A製の石核で、径5cm内外の円礫素材であったと思われる。側面図にみられるように水平方向の2回の後、打面を移動して最終剥離に及んでいる。打面は礫の自然面を使用している。最終的に得られた剥離は厚味のある石核を半割したような形状であったと考えられる。ブロック北東隅の出土である。3.50cm×2.20cm×1.25cm。59はob-A製の剥片を素材とした扁平な板状の石核で、ブロック中央部の剥片密集部分から出土した。右側にある自然面を打面して求心的に剥片剥離を進めた後分割されている。正面図左上部に素材剥片の主要剥離面が観察される。現存長3.25cm, 幅2.05cm, 厚さ0.95cmを測る。他ブロック出土の石核と同タイプのものである。

原石〔第38図51〕 ブロック中央の密集区より出土した。石材はOb-Dで扁平な板状の体形をしている。側面的一端に剥離痕をもっており、石質を観察したものと考えられる。

剥片として図示したものは、第38図46（ob-B）、第40図54（ob-B）、55（ob-B）、56（ob-B）

4. Ⅲ層の遺構と遺物



第40図 第5ブロック出土石器実測図Ⅲ

A), 57 (ob-A), 60 (ob-B) である。

磨石は図示していないが、近接して2点出土している。1点は花崗岩製の正面観が隅丸長方形の石蝕型の磨石で上下端の一部が剥落している。現存長9.90cm, 幅6.55cm, 厚さ3.35cmを測る。全面を使用したと考えられる。もう一点は石英質に富んだ花崗岩の円礫を使用したもので、側面部に使用の痕がある。長さ11.95cm, 幅8.05cm, 厚さ5.52cmを測る。(小畑)

(4) 小結

以上、前節においてⅢ層の遺構および出土遺物である土器、石器の出土分布と遺物について詳述した。ここでⅢ層についての若干のまとめをしておきたい。

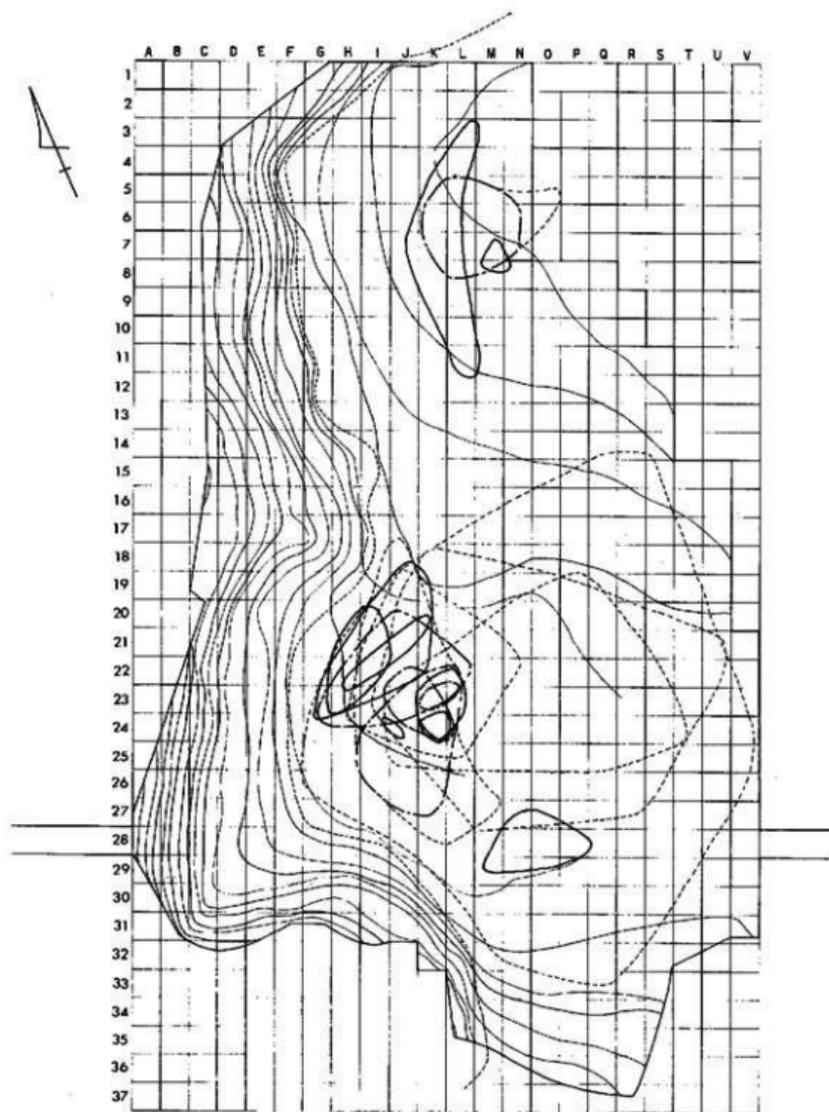
①遺構

Ⅲ層の遺構は第2凹部南隅に検出した竪穴状遺構1基とそれに近接した土壇2基で、その数はきわめて少い。ただし、このⅢ層の段階では第1凹部、第2凹部、(第3凹部)ははっきりとした形を残し、天井部のない洞穴状の凹部をなしている。その空間が生活の拠点として使用されていたことが推測される。このことは検出遺構が第2凹部の南隅であることもこのことを補強しているといえよう。また、第2凹部北半部において確認した自然の流路についても考えてみたい。

竪穴状遺構は径2.15mで不整の円形をして、内部は平坦で、壁および内部に柱穴をもつが掘り込みは浅く、土壇2基も全く同じ要素であり、その機能・用途については明らかにしがたい。竪穴状遺構については住居址の可能性をもとめることもできるが積極的要素はない。ただし、これらの遺構が位置する第2凹部の南隅は第41図に示したⅢ層上層の上器分布の重複部から明らかにはずれて、一つの空間を作り出していることに注意する必要がある。このことは、石器・石片の分布状態をみても全く同様の状況が看取できるのである。このことは、竪穴状遺構が住居址でないにしても、これらの竪穴状遺構および土壇が居住空間の中にあつて何らかの使用目的のもとに作られたことを容易に想定することができよう。現在、これらの遺構についての解釈はないが、今後の類例の増加をまちたいと思う。

なお、発掘調査中に、この第2凹部の南隅に湧水点があり、雨が降って数日間はかなりの水のしみ出しがあつたが、過去もそうであつた確証はないが、当時の湧水点を知る手がかりとして、第2凹部北半部に広がる粘質土層と砂層の互層からなる自然流路の広がりがある。この流路は平面的には検出が不可能であつたが、各断面では明瞭に判別でき、最も厚い部分で60cmの深さで16回に及ぶ互層が認められ、この凹部の土層堆積に伴つてこの流路も堆積が進行し、この流路に遺物が多いことを考慮すれば、この堆積の上部、第2凹部の北隅部に当時の湧水点があり、第2凹部の北半部は湿つた状態の時が多く、そのためもあり、この時期居住区が、第2凹部の南半部に限定されたと推測することができる。(山崎)

4. Ⅲ層の遺構と遺物



第41図 Ⅲ層出土土器の分布区

②土器について

A. 土器の分布(第41図)

Ⅲ層出土の各個体の土器分布を重ね合わせたのが第41図である。この土器分布から、Ⅲ層における遺跡利用のあり方をみていこう。

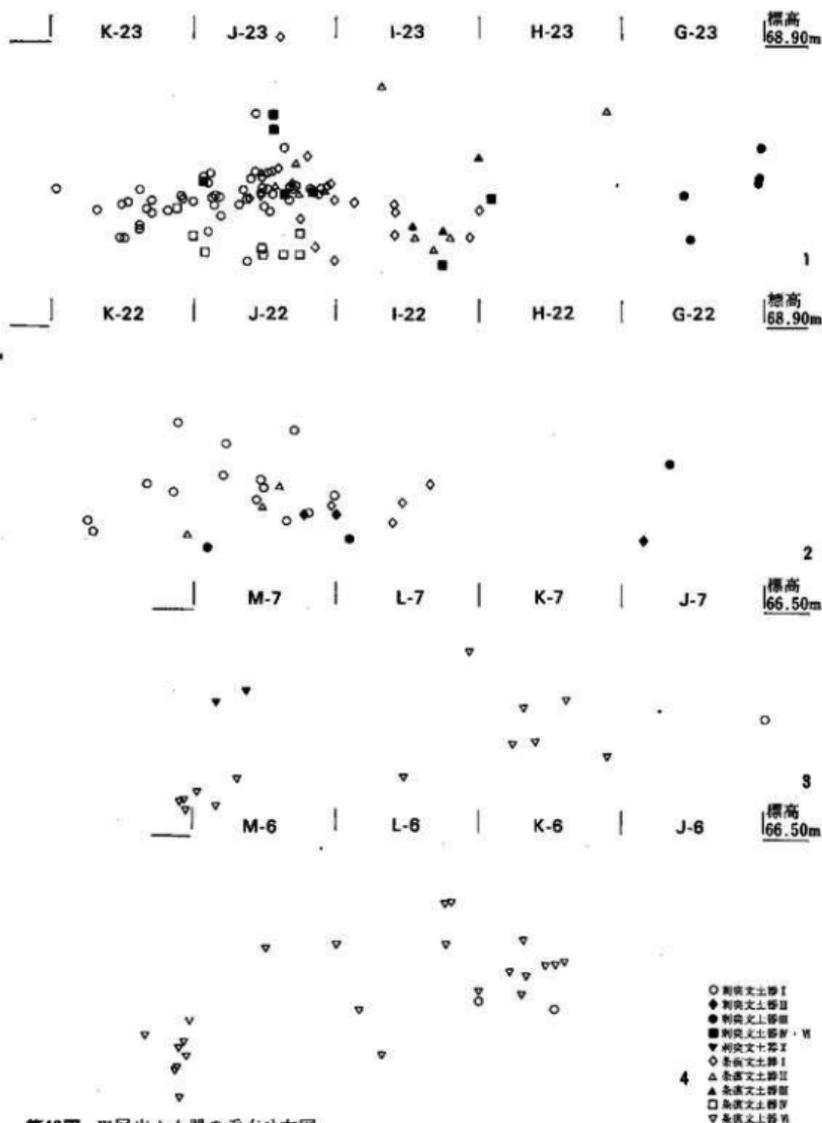
まず、土器の分布は大きくは3つのグループに分けることができる。第1グループは、第1凹部前面であり、4個体以上の土器分布の重なりがある。第2グループは第2凹部北半部から、その前面にかけて、13個体以上の土器の集中区が重なり合う。第3グループは第2凹部南端部前面、第3凹部との境付近に1個体以上(?)の土器の集中がみられる。この3つのグループの中で最も土器分布の重なりがあるのは第2グループであり、Ⅲ層の中での中心となるグループである。以下、第1グループからその問題点を整理しておこう。

第1グループは、刺突文土器2個体、条痕文土器2個体、図示しない小破片土器よりなる。条痕文土器の土器点数と集中区を除いて他の土器は集中区もまばらで、点数が少く、小破片が多い。また、これらの土器が出土する層位は、Ⅲ層の基本層となる黒色土層とは異なり、Ⅲ層の黒色土が流失、再堆積したと考えられる薄い灰褐色土層中で、礫層中に混入した状況を示している。この礫層は第2凹部ではⅤ層の下部・Ⅵ層の礫層の続きであることは発掘所見から明らかである。このことから考えられるのは、第2凹部とその前面にⅣ層が堆積し、その上部にⅢ層が堆積する2段階でも、第1凹部およびその前面は土層堆積がみられず、凹凸の激しい礫層が露出して、居住するには不適当な場所であったことが想定される。

以上のことから、第1グループの土器群は第2凹部前面からの流失したものが再堆積した可能性も強く、また、条痕文土器にみられるように、約42.5mの距離で接合する土器や石器の接合関係が認められることは、このことを傍証するものである。しかし、土器が上記の条痕文土器を除いて、第2凹部との接合関係が認められず、第2凹部に同一個体が存在しないことや、条痕文土器の集中から見て、この場所で廃棄・堆積したものである可能性もあるが、きわめて稀薄で、第1凹部に本格的な居住が開始されるのはⅡ層の堆積が開始される押型文土器の段階である。

第2グループは刺突文土器9個体、条痕文土器4個以上の土器個体の重なり合いがあり、Ⅲ層段階での居住の拠点となっている。土器の分布は第2凹部北半部からその前面にかけて分布し、南半部が居住区であったことは先に指摘した。土器の集中区の流れは南から北東部への移動がうかがえ、いずれの土器もほぼ同様の傾向を示している。このことは、第2凹部北半部にある自然流路との関係で解決される。刺突文土器と条痕文土器は、ほぼ重なりあうが、傾向として、刺突文土器が凹部前面に分布するのに対し、条痕文土器は凹部内部の上方に分布する。このことは、凹部が上方からの流土で埋まり、凹部が上方へ移動するのとは無関係でなく、平面的土器の分布によっても土器の編年的関係を把握することができる。集中区からの土器の拡散

4. Ⅲ層の遺構と遺物



第42図 Ⅲ層出土土器の垂直分布図

は第2凹部前面の段丘端まで認められるが、その数は少ない。

第3グループは、燃糸文土器1個体以上よりなるグループであるが、この土器の集中区は第2凹部南端前面と第3凹部前面にあたるが、いずれも細片化していることが特徴としてあげられ、その拡散分布は第2凹部からその全面におよび、層位的関係でもⅢ層下部にあたり、Ⅲ層の中で最も先行する土器としての把握ができる。しかし、この段階は、土器数も少く、長期の居住を意味するものでない。この土器が廃棄されてから埋まる以前に、第2凹部の使用開始が始まることは燃糸文土器の拡散状況からもうかがい知ることができる。

B. 土器の層位関係(第42図)

Ⅲ層中に出土した土器には燃糸文土器、刺突文土器、条痕文土器がある。燃糸文土器以外はそれぞれほぼ重複する分布が把握され、その先後関係が想定される。以下、各土器の重複部分において、土器の垂直分布をみて、その先後関係の概略をみていきたい。第42図1はG、H、I、J、K-23グリットの土器の垂直分布、2はG、H、I、J、K-22グリット、3はJ、K、L、M、N-7グリット、4はJ、K、L、M、N-6グリットの土器の垂直分布を示したものである。1・2は第2凹部における土器、3・4は第1凹部におけるものである。なお、第42図は横軸に対し、縦軸を2倍にして、その層位における重なりを見やすいようにしている。

1・2より第2凹部におけるⅢ層出土土器をみると、1・2では共に刺突文土器と条痕文土器が混在する状況を示しているが、これにⅠ層の地積状況を加味するとその先関係は明確に把握できる。すなわち、1・2ではE-23グリットからK-23グリットに向けて土層が傾斜し、1から2への傾斜もある。また、両者が混在するG、H、I-22・23グリットは先に指摘した自然流路部分にあたり、自然の攪乱を受けていることが判明し、Ⅲ層の安定した層を切り込んでいる。この流路部を除いた安定した層位中には刺突文土器のみが出土している。これをみると、より安定した層位に刺突文土器が存在し、自然流路中に刺突文土器と条痕文土器が混在した状況が把握され、この自然流路の形成が条痕文土器の時期にあたり、刺突文土器はその中へ混入したことがうかがえる。第2凹部での土器の先後関係は、刺突文土器が条痕文土器より古く位置づけられる。なお、燃糸文土器との関係はその分布が異なり正確に上下関係ではつかめなかったが、燃糸文土器はⅢ層下部に出土し、いずれもが細片となり広く拡散していることを考えれば最も先行する土器として把握される。よって、第2凹部Ⅲ層出土土器は燃糸文土器→刺突文土器→条痕文土器の序列がつかめる。

第1凹部での関係、3・4は出土土器も少く、土器が本来的にこの場所を原位置とするか否かに問題があることは先に指摘したとおりであり、この部分での先後関係の把握は困難である。
(山崎)

4. III層の遺構と遺物

③石器について

III層は燃糸土器、刺突文土器・条痕文土器に該当する時期であるが、それぞれ1, 10, 6個体の土器が出土している。これに対し石器・石片の数は総計567点で、石器は石鏃29点、スクレイパー8点、石錐1点、使用痕のある剥片16点、砥石6点、磨石6点が出土した。この他石核5点、原石1点の出土がある。石器・石片の分布は、第2凹部およびその前面に集中し、土器の分布域とはほぼ一致している。ただし土器の分布は第1凹部付近にもあり、それに伴う石器・石片も存在する可能性がある。このような偏在的な石器・石片の分布状況は、III層（黒色土層）を良好な堆積の分布域に限定したための結果である。

第1ブロックと第5ブロックにはそれぞれ接合資料No.38と接合資料No.34No.37No.39を含む石器・石片の密集域がある。接合の種類が全て剥片と剥片、石核と剥片の剥離面接合（I類—第5章第3節参照）であること、その密集域付近の石鏃が完形品であること、碎片が多いことなどから、これらの密集域は石器製作の場であった可能性が高い。その他の部分の場の規定については厳密な判断を下し難い。

石器組成に関してはブロック別に比較することができないのでIII層全体をまとめて考察してみたい。出土した石器・石片中に占める石器の割合は11.6%、石核が0.8%、原石0.2%である。石器の中でも一番多いのが石鏃（43.9%）で次いで使用痕のある剥片（24.2%）が多い。これらを狩猟用具、植物性食物加工用具、生活用具（道具製作工具を含む）に分けると、43.9%、9.1%、47%となる。第一次生産用具間の比率を求めると、磨石1個あたり石鏃が約5個の割合である。

III層における土器型式の分期は3つである。これをその分布状態から検討してみると、発掘区北側の分布域は土器片の分布が散漫で個数も少ないことから除外して考え、3つの時期は全て第2凹部付近に生活域があることが判る。これにより1つの時期に1つのグループが存在したことを想定することができる。この1グループごとの石器数を算定してみると、石鏃9.6個、スクレイパー2.7点、石錐0.33点、使用痕のある剥片5.3点、砥石2点、磨石2点、石核1.6点、剥片・チップ165点となる。この数値はIII層における各時期（燃糸土器、刺突文土器、条痕文土器の三期）のグループが遺跡に残っていた石器の平均値である。よって、この数値を検討する際は、遺跡に残された石器の解釈に関して(1)使用頻度（消耗率）の違い (2)遺跡に残される頻度の違い（より運搬性の強いものか否かの違い）、(3)文化層がより細かい時期に分けられるための時期（グループ）ごとの本来的な組成の違いを考慮しなければならない。例えば、石錐のグループごとの個体数が1に満たない理由としては(1)、(3)が考えられるし、使用痕のある剥片と石斧を比較する場合は、前者が遺跡内でその目的を完結するのに対し、後者は常に携帯され遺跡に残される状況が少ないという(2)の条件を考慮に入れなければならない。また後述する石匙や特殊な石器である異形局部磨製石器、環状石斧などについては、時期が限定されそう

なので(3)の条件を考える必要がある。ただし、層位ごとの比較を行なう際は(3)の条件以外は無視してよいであろう。Ⅰ～Ⅲの各層ごとの数値の違いについては第6節で後述するが、各層に基本的なセットである石鏝、スクレイパー、使用痕のある刮片、磨石の比率については各層ともよく似た状況を示している。

Ⅲ層（撚糸文・刺突文・条痕文土器の時期）において欠如する石器に石斧、石皿、彫器、石匙がある。石皿の存在は磨石の存在によって裏付けられ、石斧、彫器は先行文化期より存在が確認されており、本来的に石器組成の一員をなしていたことはほぼ疑いを入れない。ただし石匙については、その初現の時期が明確にされていないことから、積極的にその存在を推察することはできない。石匙は石鏝・石斧と合わせて縄文時代を代表する石器とされているが、その出現の様相については明確にされていない。九州における縄文時代早期の多層遺跡をみると、早期の古い段階に石匙が伴出する例は存在しない⁽¹⁾。本遺跡Ⅲ層における石匙の欠落、Ⅱ・Ⅰ層での出現の現象は「石匙は縄文時代早期前葉から出現するが、一般的な存在となるのは早期末葉からである。」というこれまでの見解⁽²⁾を追証するものと考えたい。 (小畑)

<註>

註1 長崎県岩下洞穴ではⅤ層より横型の石匙が出土しているがそれ以前の文化層には認められない。大分県二日市洞穴でもその存在は知られておらず、早期全般を通して少ない傾向にある。福岡県深原遺跡では早木台式～田村式の押型文の時期に横型の石匙が出土している。

註2 鈴木道之助 『石器の基礎知識Ⅲ 縄文』1981

II層の遺構と遺物

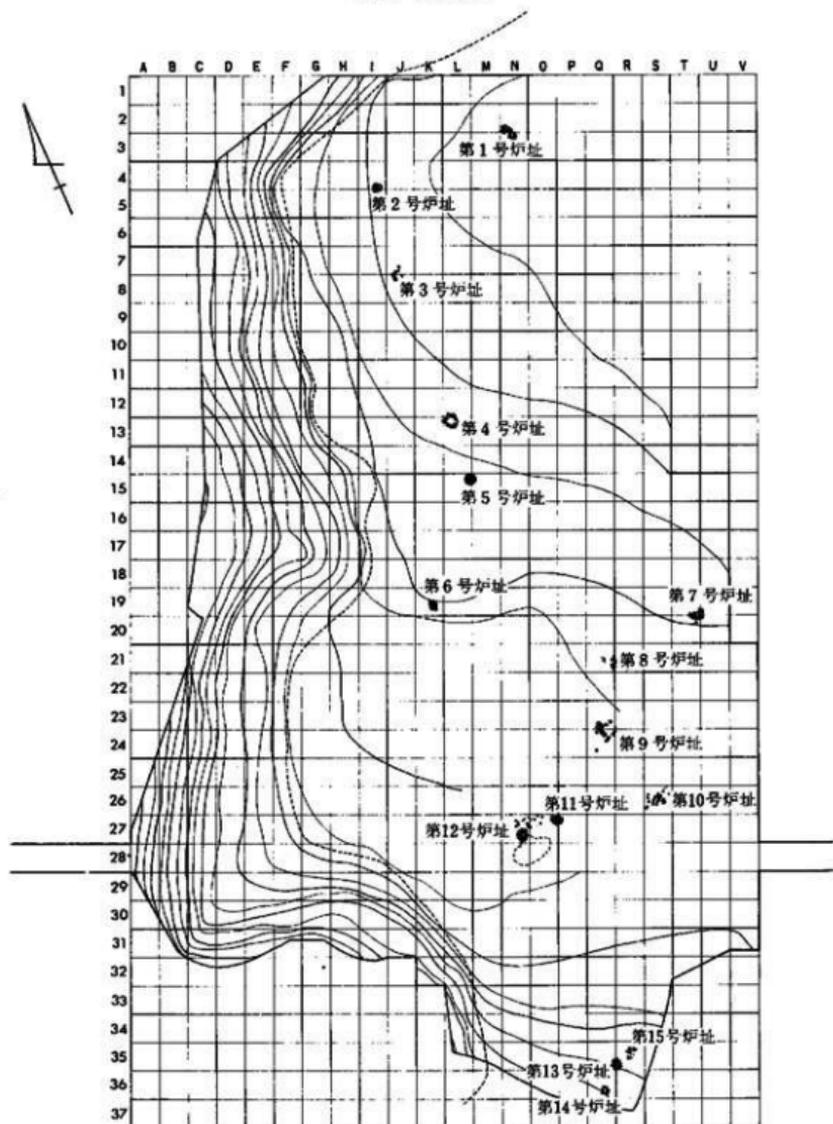
(1) 遺構の位置と遺構

①遺構の位置 (第43図)

II層は遺跡全面に広がり、最も厚く堆積する層である。そのためか検出した遺構の数もこの層が最も多い。遺構は第2凹部が上層の堆積で埋まり前段階での凹部の利用価値が半減するような状況になるために、この第2凹部とは関係のない分布を示し、その前面の段丘に広がる。第1凹部では前段階での利用に比べその利用価値を深め、この時期の遺構の分布は第1凹部を中心として広がり、結果的にこの時期の遺構の分布は第1凹部から第2凹部前面、第3凹部前面にそってほぼ並列した状況で検出した。遺構はすべてが炉址で、2～3基集中する傾向がみられる。また、炉址の検出面がそれぞれ段差をもっていて、炉址間で明らかに時間差を有していることがわかる。このことはここに居住した縄文人の単位およびその人数を推定するのに好資料を提供するものであるが、このことについては、小結あるいは第5章遺構・遺物の分析のところで詳細に述べたい。

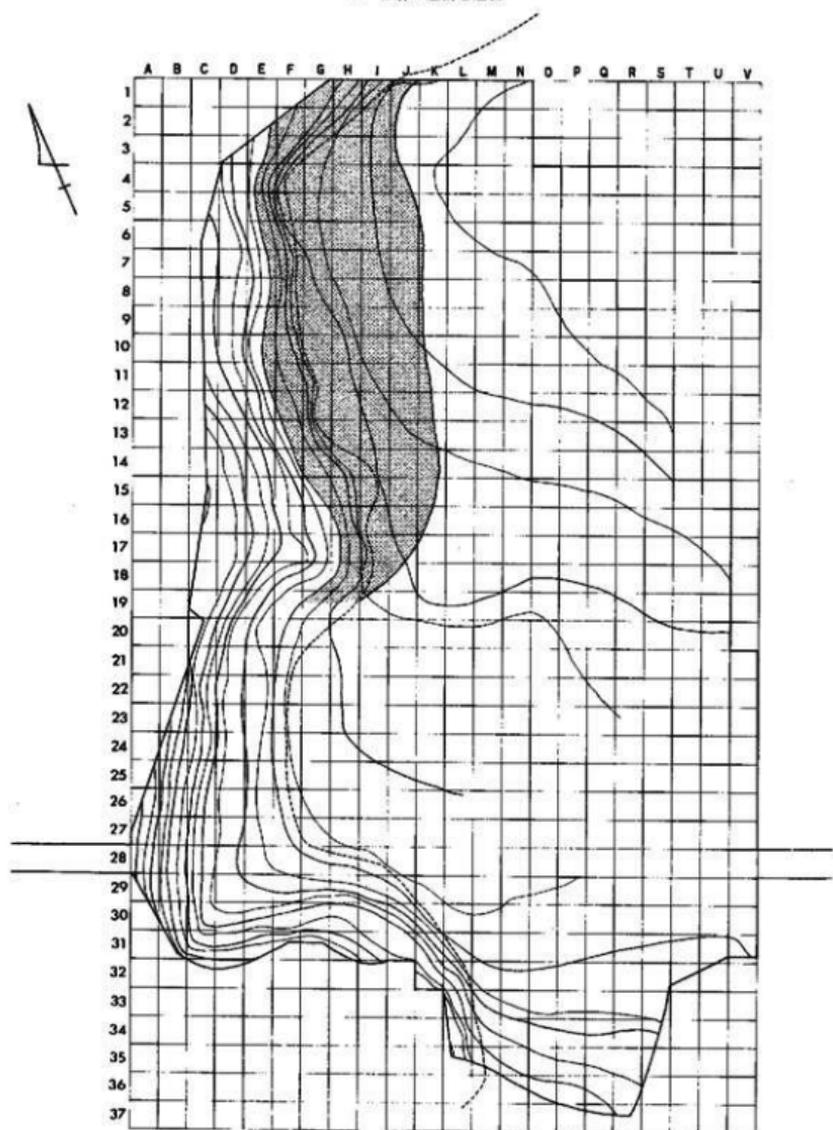
検出した遺構は石囲い炉(一般に集石炉とされるものであるが、完全に残るものは石囲いになっているため、本書では石囲い炉として使用する。)とその崩壊過程を示すもので計15基を確認した。石囲い炉は北より順次番号を付した。第1号炉址は第1凹部前面N-2, 3グリット、第2号炉址は第1凹部前面I-4, 5グリット、第3号炉址は第1凹部前面J-7, 8グリット、第4号炉址は第1凹部前面I-12, 13グリット、第5号炉址は第1凹部前面L-15グリット、第6号炉址は第2凹部前面K-19グリット、第7号炉址は第2凹部前面T, U-19, 20グリット、第8号炉址は第2凹部前面Q, R-21グリット、第9号炉址は第2凹部前面Q, R-23, 24グリット、第10号炉址は第2凹部前面S-26グリット、第11号炉址は第2凹部前面O, P-27グリット、第12号址は第2凹部前面N, O-27, 28グリット、第13号炉址は第3凹部前面Q, R-35グリット、第14号炉址は第3凹部前面O-36グリット、第15号炉址はR-35グリットに検出した。

また、第1凹部にII層堆積途中において上部の丘陵が崖崩れをおこし土砂の崩落した部分が見られる。その範囲は第1凹部全域と第2凹部の北端におよんでいる。すなわち、E-2～12, F-1～14, G-1～16, 18, 19, H-1～19, I-1～19, J-1～18, K-6～17グリットの範囲で第44図でアミ目で示した範囲である。この崖崩れによって、この部分ではII層が下層と上層に分離できる。しかし、崩落土の勢いが強かったためか、この崩落土の上下の遺物はかなりの攪乱がみられる。



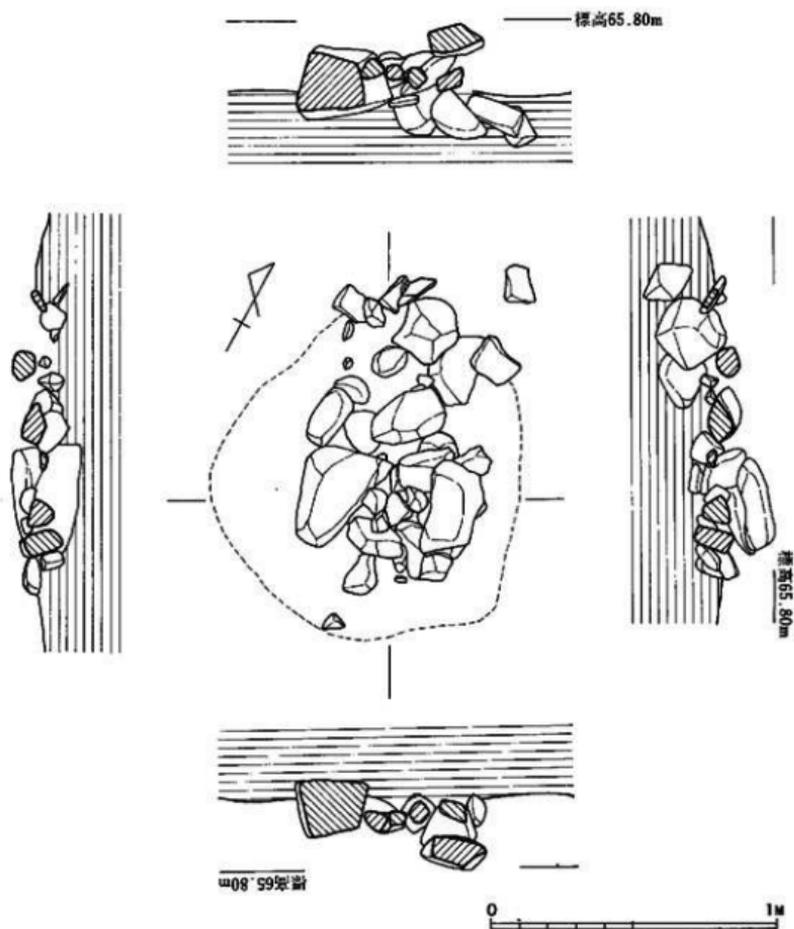
第43図 II層の遺構の分布

5. II層の遺構と遺物



第44図 産崩れの範囲

第4章 調査の記録



第45図 第1号炉址実測図

②第1号炉址 (第45図)

第1凹部前面，発掘区北端，N-2，3グリットのII層下面，礫層直上に検出した炉址であ

5. II層の遺構と遺物

る。第2号炉址と9m、第3号炉址と11.5m離れている。残存状態は良くないが、石の集石および木炭混じりの灰層の広がりから、かろうじて炉址と確認できた。集石の広がりにはこの炉を構築するための特別の掘り込み等は認められない。集石は人頭大~拳大の石30数個を使用しているが、その一部は下層の礫層の石が表面に露出しているのを利用したものである。集石部の南半部に人頭大の石を25cm×30cmの方形に組み、その内部に礫を入れている状態がうかがえるが、原位置を保っているものは少い。木炭、灰の広がりには、この集石を中心として1.1m×1.7mの範囲に認められる。この炉址の年代を示す直接的な遺物の出土はみられなかった。

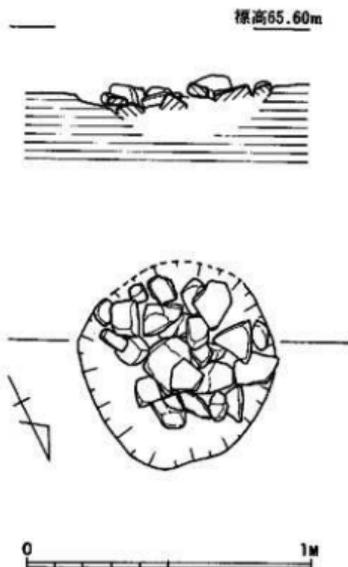
③第2号炉址（第46図）

第1凹部中央部、I-4、5グリットの崩落土の下に検出した炉址である。第1号炉址と約9m、第3号炉址と約5m離れている。炉址の残存状態はきわめて良好である。炉の本体は径0.7mの円形プランを有する皿状の掘り込み内に構築されていて、径5~20cmの比較的小さい川原石約30個を使用している。石材はすべて花崗岩である。この炉址は一見して、集石のごとくみえるが、これはこの炉が廃棄される時に炉の中に周辺の小石を投げ込んだためであり、この下部には比較的大きめの石を敷きつめて、花卉状に石を配置している。その大きさは南北径が0.6m、東西径が0.5mである。数石あるいは上部の石は火を受けて赤変している。内部に木炭、灰がわずかに認められたが、周辺には灰等の広がりはない。炉の中から遺物の出土はない。

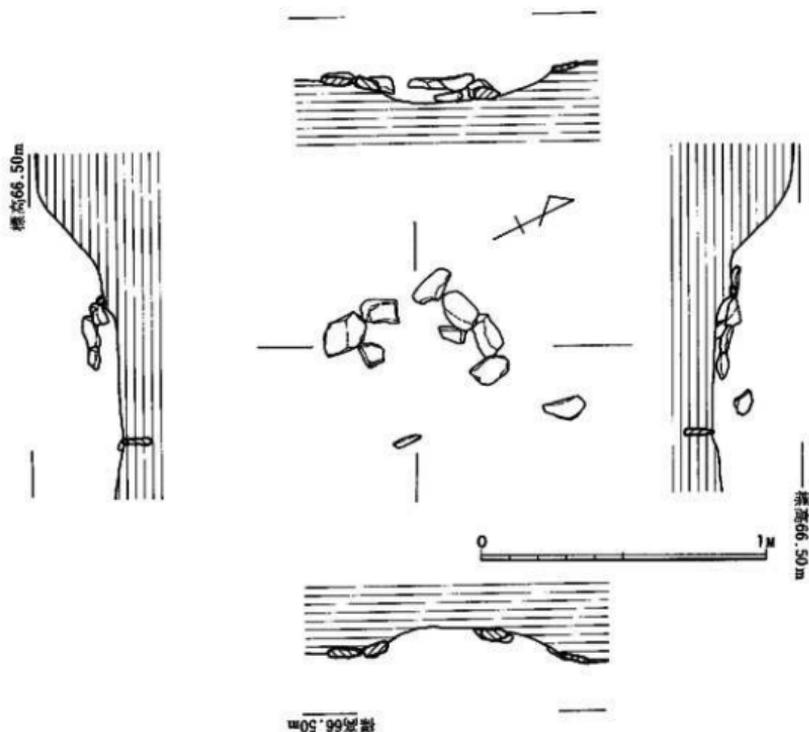
図面が不完全であるが、これはこの炉を現状のまま切り取り、保有するようにしたためである。

④第3号炉址（第47図）

第1凹部中央部、J-7、8グリットの崩落土上面に検出した炉址である。第2号炉址と約5m、第4号炉址と約10m離れている。残存状態は不良で、径10cm前後の花崗岩の川原石9個を使用して径0.6mの半円状の配置が認められるが、本来の姿を保っているとは考えられない。内部および周囲よりわずかな木炭片を検出した。石は火を受けた痕跡はあまり顕著でない。炉の



第46図 第2号炉址実測図



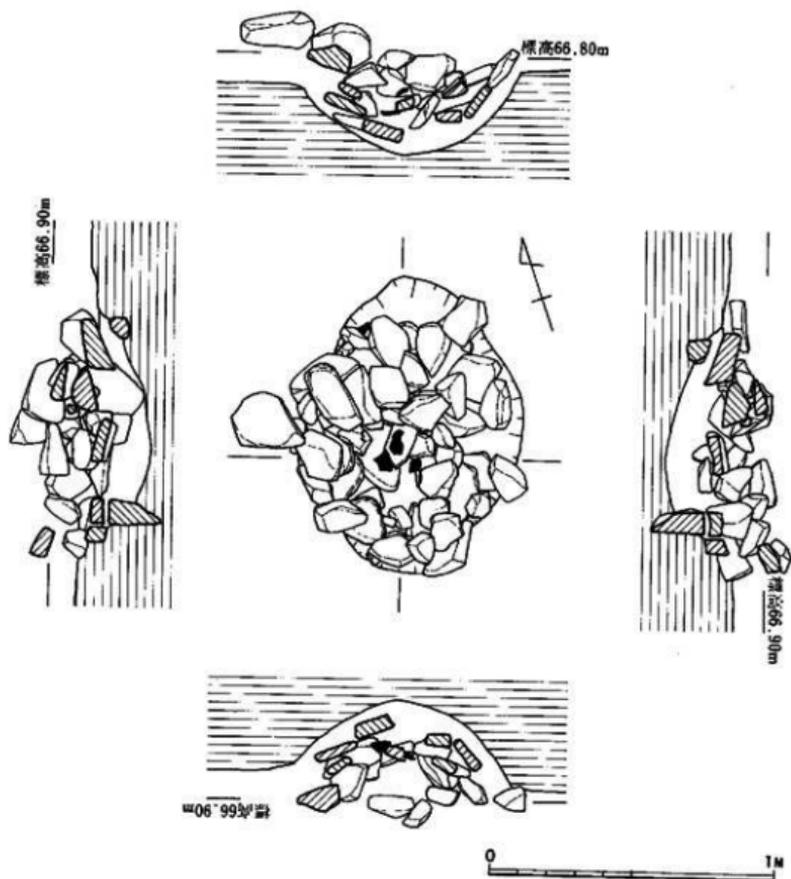
第47図 第3号炉址実測図

周囲には掘り込みはみられないが、内部はやや凹んでいる。崩落土の直上に構築されている。約1m離れて出上している黒曜石があるが、これはこの炉と何らかの関係があるものと思われる。炉の内部から遺物の出土はないが、炉の南側に遺物の集中区が認められる。

⑤第4号炉址（第48図）

第1凹部南端部前面、L-11、12グリットに検出した炉址で第3号炉址と約5m、第5号炉址と約3m離れている。II層上部に存在する。残存状態は良好である。南北径1.05m、東西径0.8mの楕円形プランで深さ25～30cmの皿状の掘り込みに構築される。径5～20cmの花崗岩の川原石約50個を使用して一見、築石のごとくみえるが、これは第2号炉址と同様で廃棄される時にその内部に石が投げ込まれるためである。これら後の石を取りのぞくと、炉が本来使用

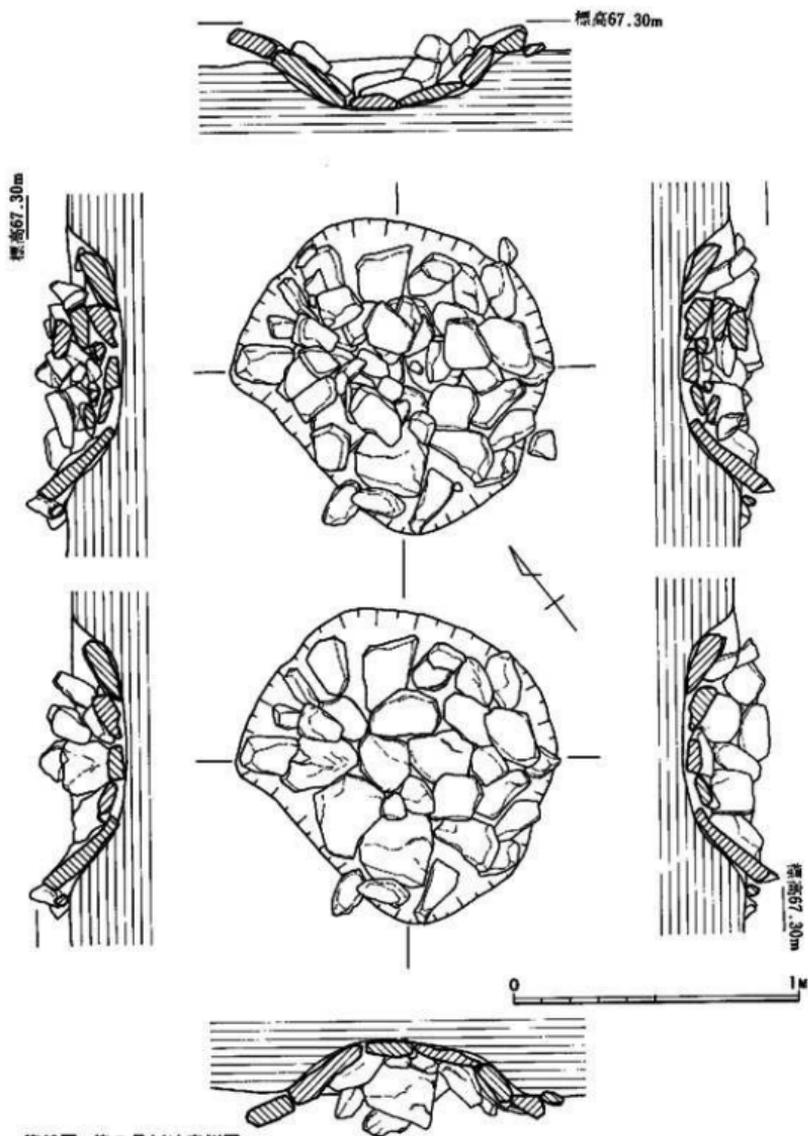
5. II層の遺構と遺物



第48図 第4号炉址実測図

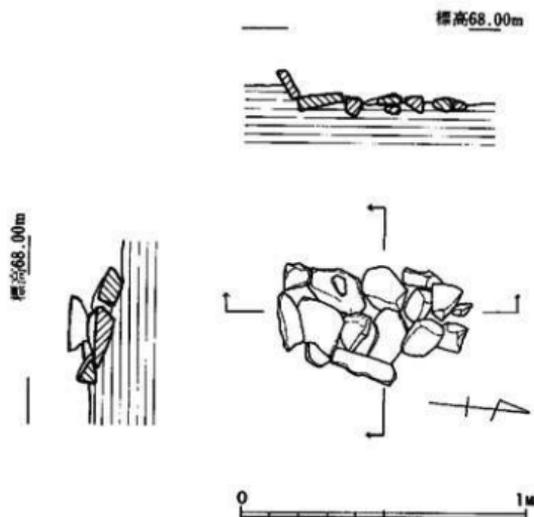
された時の状態を示すが、この炉はややくずれていた。図面にはその状態では示していないが、掘り方の縁にそって径20cmの扁平な石17個をたてて囲むが、部分的に石が欠落している。これは廃棄時期に囲んでいる石もその内部に落ち込んだ可能性があり本来はきれいに1周する囲いがあったものであろう。底には敷石はなく、土層のままである。炉体の石あるいは投げ込まれている石は火を受けて赤変している。炉の内部には木炭片を含んだ灰で埋っていたが、周

第4章 調査の記録



第49図 第5号址実測図

5. II層の遺構と遺物



第50図 第6号炉址実測図

辺には灰・木炭はあまりみられない。炉内部からは、押型文土器（第91図）と底部に木炭痕をもつ上器が出土し、周辺の土器との接合関係があり、当時の生活面の把握ができる。

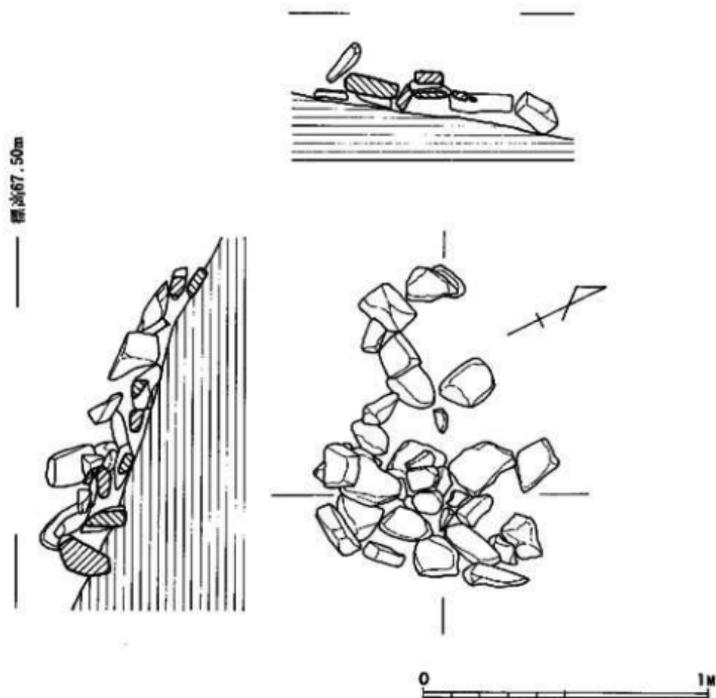
⑥第5号炉址（第49図）

第1四部と第2四部の境の前面部、L、M-15グリットのII層上部に検出した炉址である。

第4号炉址と約3m、第6号炉址と約8.5m離れている。残存状態はきわめて良好である。南北径1.11m、東西径0.97mの不整楕円形プランをなす深さ20cm（遺構を確認した時点ではやや掘り過ぎた状態であり、実測図で上部の石が浮く状態である。実際は炉の上部（石の所より掘り込まれたと考えられるので、深さは30cm前後となろう）の皿状の掘り方の中に構築されている。この炉址も第2、4号炉址同様に炉の内部に石が投棄されているため一見して集石の状態を示している。炉址の内部は投棄された石および木炭まじりの灰で埋まる。石は径10～15cmの扁平な花崗岩の川原石21個で、すべて焼けて赤変している。周辺部には灰あるいは木炭の広がりは見られない。炉体は掘り方の壁に密接させてやや大きめの扁平な花崗岩川原石（径25～30cm）を下軍に敷き詰め、その間にやや小さめの石で補っている。30個の石を使用している。

形状は掘り方に密接して敷石をしているので掘り方同様に浅い皿状をなしている。敷石は火を受けて赤変しているが、その状態は内部ほど強く、上部の石にはさほど赤変していない石も部分的に認められる。上部はやや石がまばらになる部分があり、本来はさらに上部に石を置き完全なものであったのが、この炉の廃棄時に上部に使用した石を炉の内部に投棄したものと考えることができる。第2、4号炉址の炉内にある石も同様の結果によるものであり、このことも最も完全な姿で残っている12号炉址から推測することができる。炉内よりの出土遺物はない。

⑦第6号炉址（第50図）

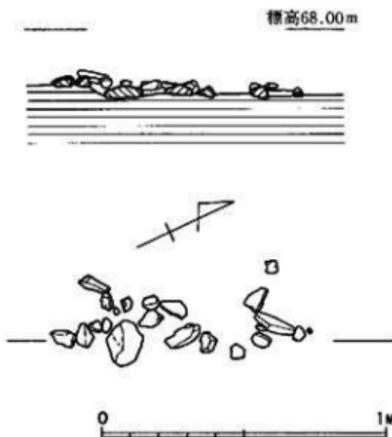


第51図 第7号炉址実測図

第2凹部北端部前面、K-19グリットのII層下部に検出した炉址である。第5号炉址と約8.5m、第8号炉址と約12m離れている。残存状態は良好でない。南北0.65m、東西0.4mの小さな方形プランに敷石もしている炉で、周囲に掘り方はみられない。炉の上部および周辺部から木炭片を若干検出したが、灰の堆積はみられない。炉は花崗岩の径5～20cmの扁平な川原石を使用している。石は数個は火を受けて赤変しているが、他はあまり赤変していない。

この炉址は形態的に他の炉址と異なり敷石面が平坦であり、かつ小型である。残存状態の良好な炉址にみられる皿状、あるいは垂直に立ちあがる壁の形成がみられない。また炉が崩壊・拉散状況を示していないことは敷石の状態から明確である。このことはこの炉を一つの形態として把握すべきか、あるいは本来皿状に構築されたものが何らかの理由により削平され底のみが残ったと考えれば小型であること、敷石が平坦であること、掘り方がないこと等理解できる

5. II層の遺構と遺物



第52図 第8号炉址実測図

が、大部分は赤変していない。石材は比較的多いがすべての石が原位置を保っているものはない。炉の近くから沈線土器、条痕土器が出土しているが、この炉址の年代を正確に示すものではない。この炉は自然に崩壊拡散したのではなく人為的に破壊集石されたものである。本来炉の構成された場所であったかどうかについては明確にできない。

⑨第8号炉址（第52図）

第2凹部前面、F-1号古墳の墓墳の掘り方の北側に近接して検出した。Q-21、F-21グリットにわたっていて、検出面はII層上部である。第7号炉址と約6m、第9号炉址と約3m離れている。炉としての積極的な根拠はないが、人為的な集石であることは疑いない。南北約0.9m、東西0.3mの範囲に径5cm~10cmの比較的小さな花崗岩の川原石を20個集めている。集石のまわりには掘り込みもみられず、石も肉眼的に見て火を受けた痕跡はない。炉址以外の目的で集石されたものである可能性が強いが、ここでは一応、炉の中に入れておく。集石中よりスクレイパー1点と土器の細片が出土している。

⑩第9号炉址（第53図）

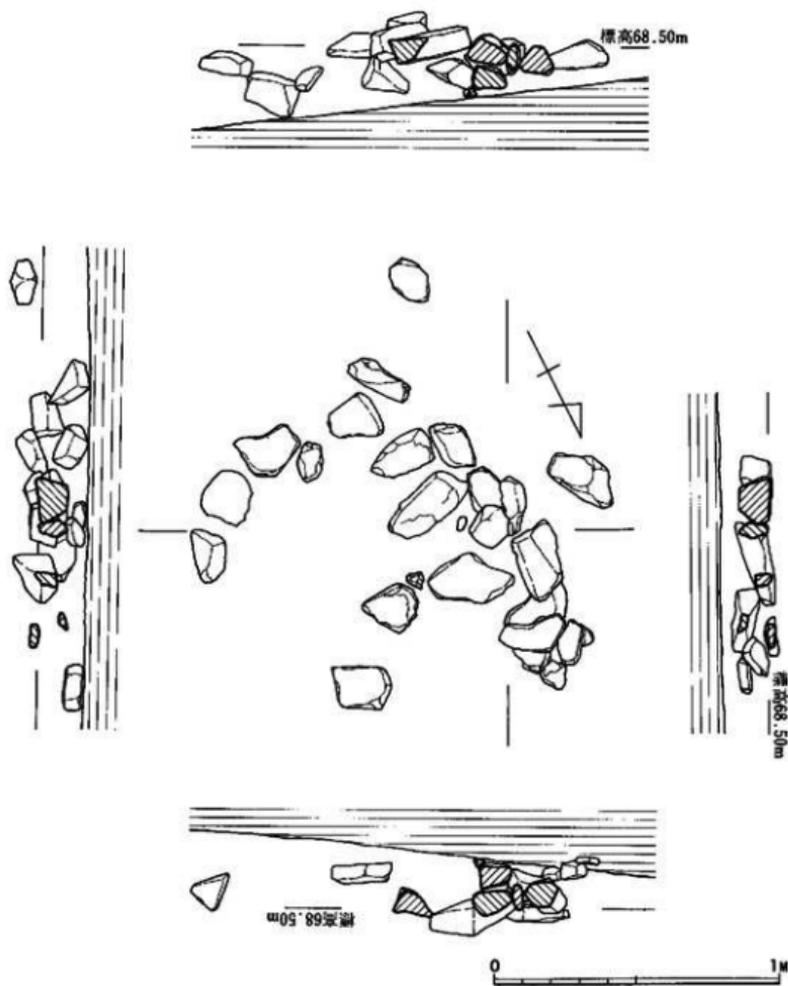
第2凹部中央部の前面、F-1号古墳の墓墳掘り方の南側、II層上位に検出した炉址である。第8号炉址と約3m、第10号炉址と約4m、第11号炉址と約6mと離れた位置にある。残存状態は悪く、炉が崩壊拡散した状態を示している。径10cm~30cmの扁平な花崗岩の川原石25個を使用したもので、南北1.5m、東西1.3mの範囲にあり、平面的には径約1.5mの半円状をなすが、原位置を動いていることは明確である。石はそのほとんどが火を受けて赤変していて、周囲からは木炭片が多く検出できる。炉の自然崩壊による拡散とみるのがより可能性が高い。ただし、

が、発掘時の所見ではそれらを証明するものは得ることができなかった。

⑪第7号炉址（第51図）

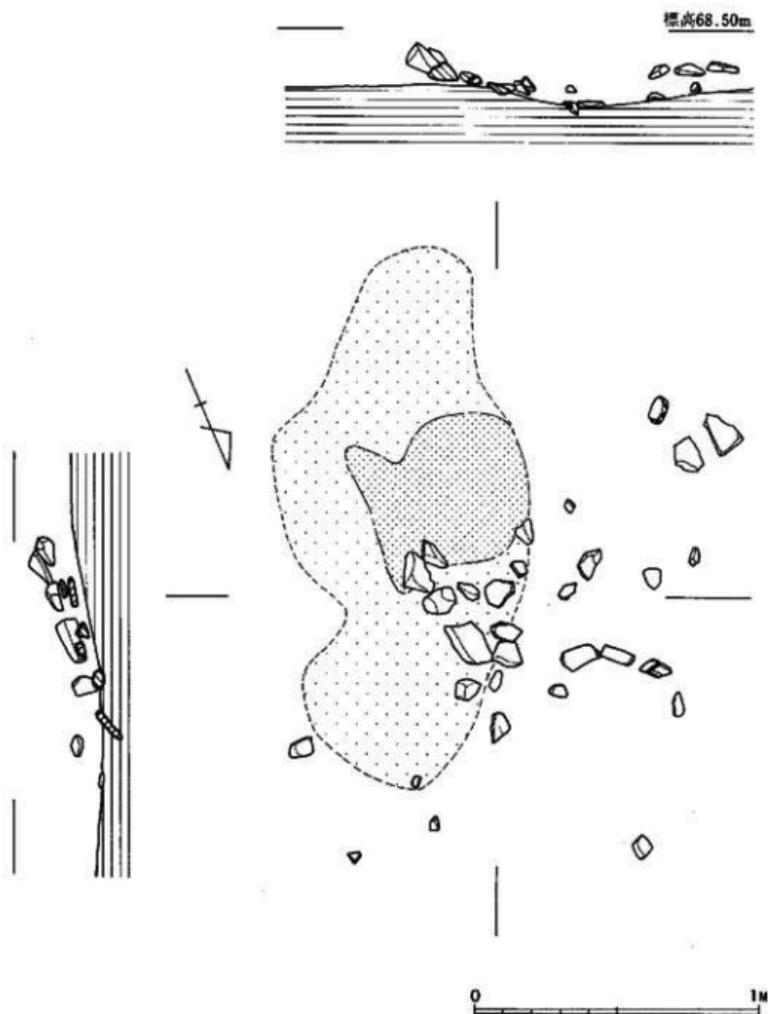
第2凹部前面で段丘の端に近い位置、すなわち、T-19、20、U-19、20グリットにわたって存在し、II層上部~I層にわたって検出した炉址である。第6号炉址と約17m、第8号炉址と約6m離れている。しかし、第7号炉址は炉としての形状は残してなく、完全に崩壊し、集石状態を示しているにすぎない。南北約0.9m、東西約1.1mの範囲に径5cm~20cmの扁平な花崗岩の川原石35個を集石したものである。石の中には火を受けて赤変したものも含んでいる

第4章 調査の記録



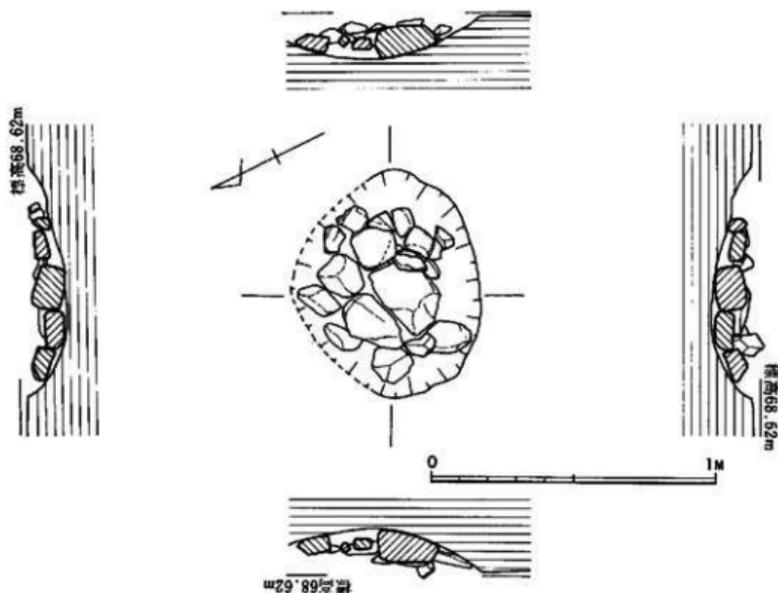
第53図 第9号炉址実測図

5. II層の遺構と遺物



第54図 第10号が址実測図

第4章 調査の記録



第55図 第11号炉址実測図

この炉址の西側には黒曜石剥片，チップが多く，黒曜石間に接合関係がある場所に近接しているので他の要素を考慮する必要がある。

⑪第10号炉址（第54図）

第II段部の前面，段丘の端に近い部分，S-26，27グリットにわたって位置し，II層の中位に検出した炉址である。第9号炉址と約4m，第11号炉址と約6m離れている。炉の残存状態はきわめて不良で拡散状態が激しい。集石は約1.8m×1.5mの範囲に点々と散布したような状況である。径5cm～20cmの比較的小さい花崗岩の扁平な川原石31個を使用している。火を受けて赤変している石は14個で，ほぼ半分の石が焼けている。集石の東側に接して，灰をかき出したのではないかと思われる部分が南北1.9m，東西0.9mの楕円形状の範囲で認められる。（アミ目部分）Iの部分は暗褐色土で骸体のやや大きい炭が混入し，IIは淡褐色土でわずかに小さい灰がまじる。Iは灰のかき出しによる灰の堆積，IIはその拡散とみられる。この炉は石材の拡散が激しいものの炉の原位置を大きくは動いていないものと考えられる。この炉は自然崩壊による可能性が強い。なお集石の中に石皿片（第145図334）1点と磨石（第145図333）1点があり，石

皿片は下面に火を受けた痕跡があった。

⑫第11号炉址 (第55図)

第2凹部南端の前面、O-27、P-27グリットでII層下位において検出した炉である。第10号炉址と約6m、第9号炉址と約6m、第12号炉址と約2m離れている。炉の残存状態は良好で、隣接して存在する第12号炉址とは明確な面をもってレベルに段差があり、この炉址が第12号炉よりも古いことが判明した。南北径約0.6m、東西径約0.8mの楕円形プランで深さ15cmの浅い皿状の掘り込みにつくられた炉で比較的小型である。炉体は径5~25cm×20cmのやや大きめの石を中心に置き、その周囲に径5~20cmのやや小さめの石18個を配したもので、第4号炉址と同様に平坦な敷石となる。石材はすべてが花崗岩の扁平な川原石を使用している。石の表面は火を受けて赤変する。この炉の覆土は炭まじりの灰層で、中より炭化したドングリの実(?) 1点も検出した。周囲には炭、灰のひろがりはみられない。

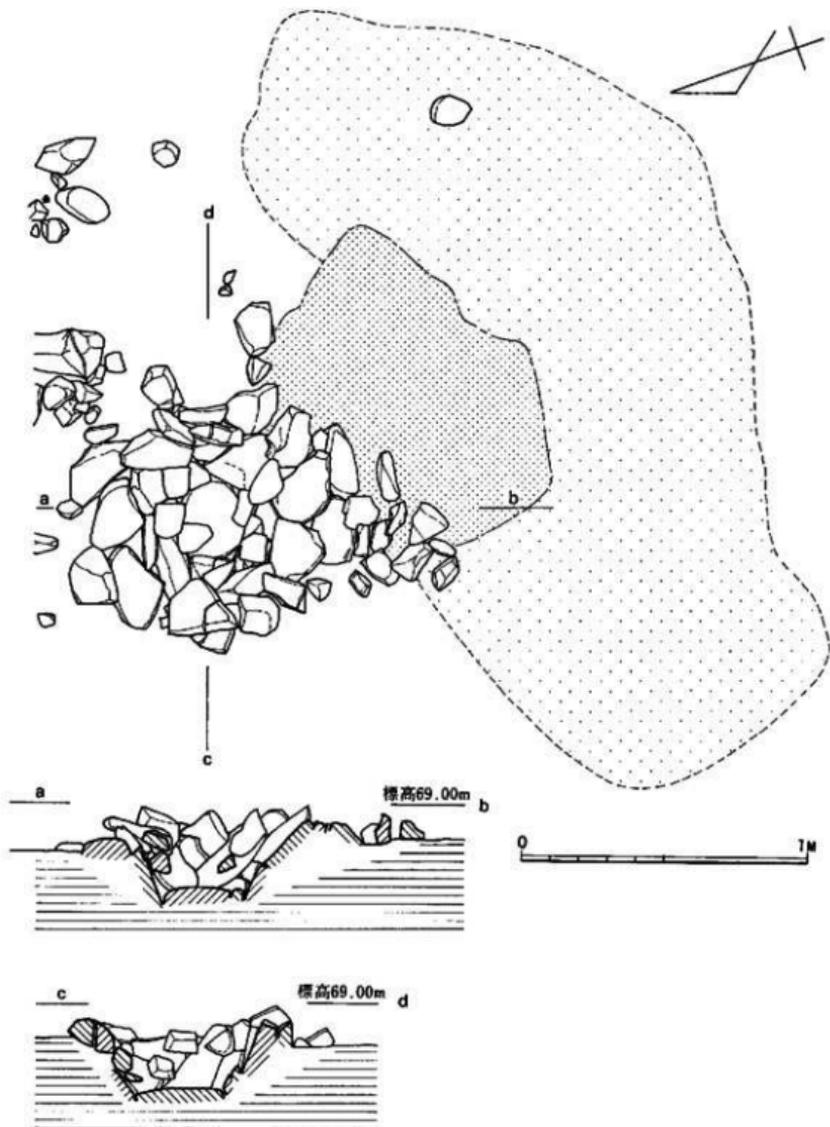
⑬第12号炉址 (第56、57図)

第2凹部南端前面、N-27、28、O-27、28グリットにわたって広がりをもつ炉址で、II層中位に検出した。第11号炉址とは近接しており約2m離れ他の炉とは8m以上離れている。残存状態はきわめて良好で、本遺跡の中では最も完全な姿を残している。炉は本体部とその周囲を固める敷石部、灰のかき出しとその拡散部よりなっている。この炉は切り取り保存の処置をしたので炉の掘り込み部分の調査を実施していないが、少くとも径1m前後、深さ30cm以上の掘り方があったことは炉の構造より明らかである。炉体は径20cm~25cmの扁平な川原石を30個以上使用している。炉はまず塚の中心部下面に30cm×25cmの大きめの石を配し、その周囲、掘り方にそって扁平な大きめの石を立てて囲み、さらにその上段に最初の立石の表側にはめ込むように立てて炉の壁体をつくりだし、各石の隙間はやや小さめの石で完全なまでに塞いでいる。炉体部は0.6m×0.5mの隅丸の方形プランで、深さ25cmを有している。次に炉の補強のためか、炉の周囲に扁平な石を敷きならべて、一辺1mの方形で仕上げている。内部は炭まじりの灰と径10cm前後の川原石で埋まっていた。炉内部の石材の表面および炉内の石は火を受けて赤変している。内部の石はこの炉の廃棄時に投げ込まれたであろうことは先にのべたとおりである。

また、この炉の南側と北東部に径10cm前後の小石が多くみられる。いずれも火を受けたもので赤変しているが、南側のものは10個で明らかに人為的に炉の横に集石したものであり、この炉の使用方法に関しての示唆を与えるものである。北東部の石はやや大きめの扁平な石も含んでいて、あり方も比較的集中する部分もあるが、散在するものも多く、レベル的に、この炉の本体より若干下にあり、他の炉が自然崩壊し拡散したものとみることができるとは取らねがたこともあり明確にすることはできなかった。

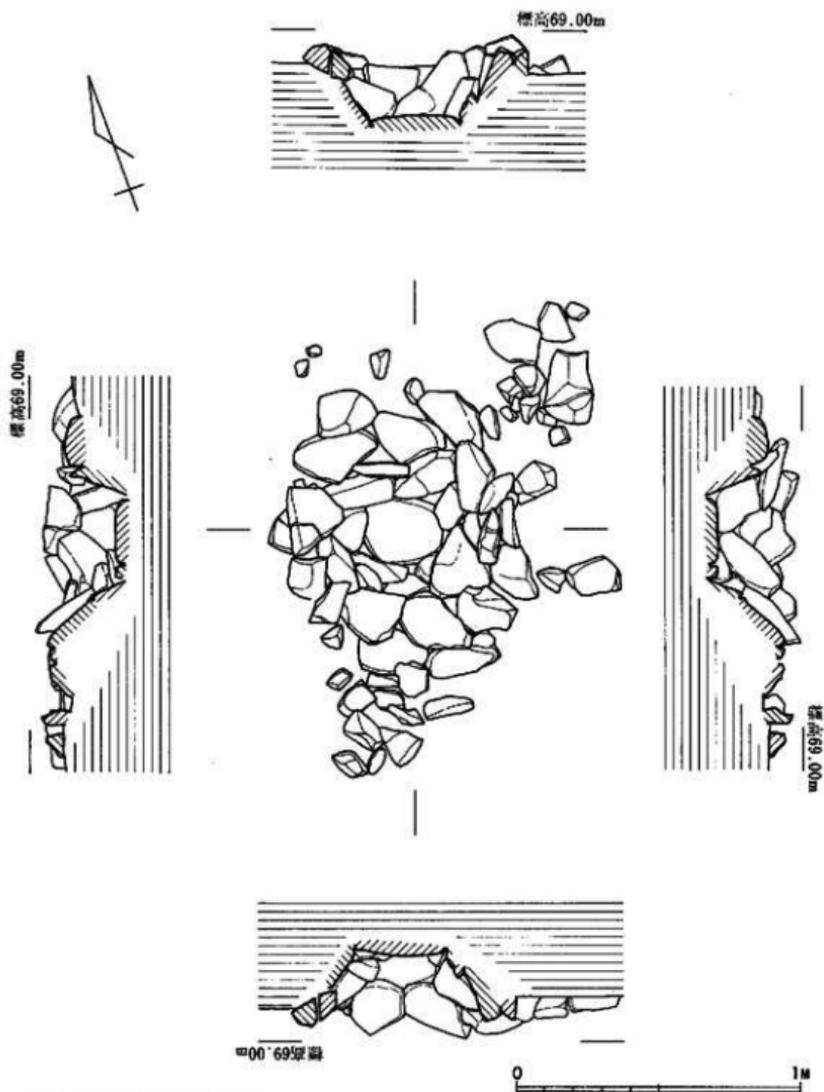
炉の南側に灰のかき出しがあり、炉の南東部に接して1.1m×0.7mの範囲に灰が多量に混在する灰層の堆積があり、その周囲3m×1.5mの範囲にはその拡散部と思われる炭混じりの薄い

第4章 調査の記録



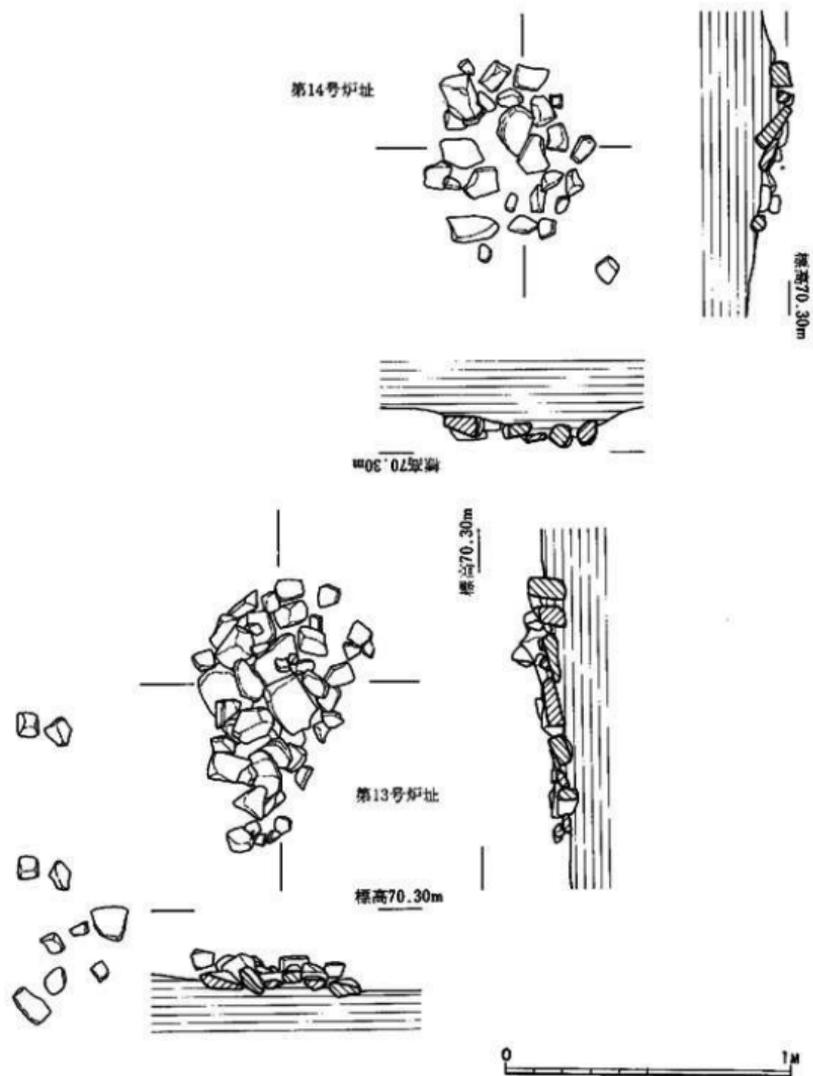
第56図 第12号址実測図 I

5. II層の遺構と遺物

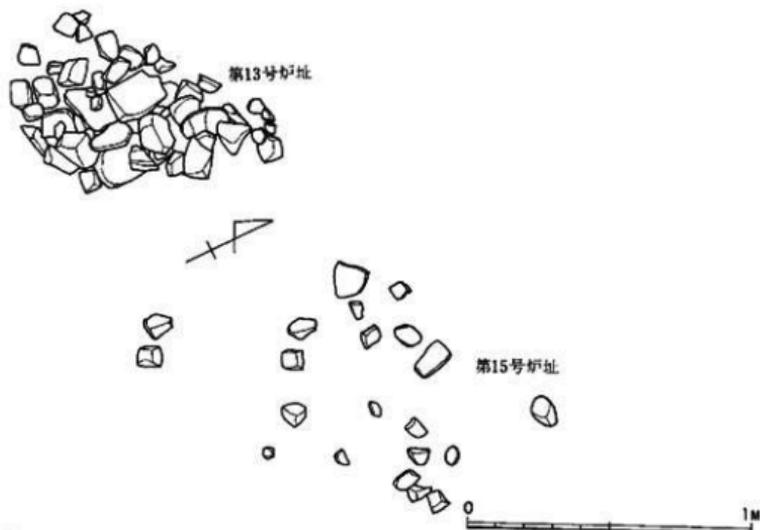


第57図 第12号炉址実測図II

第4章 調査の記録



第58図 第13・14号炉址実測図



第59図 第15号炉址実測図

灰の地積がある。周辺および灰層から遺物が若干出土しているが、いずれも細片で年代を決定するまでにはいたっていない。

⑭第13号炉址（第58図）

第3凹部北端部前面Q-35、Q-36グリットのII層上部に検出した炉址である。第14号炉址第15号炉址とはきわめて近接し、第14号炉址と約1m、第15号炉址と約1m離れる。第12号炉址とは約17m離れている。残存状態は良好でなく、破壊された集石状態を呈している。集石は南北0.75m、東西0.65mの範囲にあるが、その状態は下部に径20cm前後の扁平な花崗岩の川原石を敷き、その上部に径10cm前後の花崗岩の川原石を積んでおり、花弁状に敷石し、断面が浅い皿状をなす炉（第5号炉址）が半壊した状況である。石材8個を使用する。石の大部分は火を受けて赤変している。集石のまわりには掘り込みはみられない。集石内および周辺に炭が散布する。

⑮第14号炉址（第58図）

第3凹部北端部前面、Q-36グリットのII層上位に検出した炉址である。残存状態は不良で、第13号炉址同様に集石状態を示している。集石は径0.6mの円形状をなしていて、石は径5~15cmの花崗岩の扁平な川原石28個よりなる。石はそのほとんどが火を受けて赤変している。破壊の状況は第13号炉址よりさらに進んでいて、敷石も原位置を保っているものは少ないと思われ

る。集石内および周辺には灰が散布する。

⑩第15号炉址（第59図）

第3凹部北端前面、R-35グリットのII層上位に検出した炉址である。第13号炉址とはきわめて近接するが、第13号炉址よりやや下位にある。残存状態は不良で、第14号炉址よりさらに拡散された状態にある。集石は南北1.5m、東西0.9mの範囲に径5cm～10cmの花崗岩の扁平な川原石21個が散在した状態であり、原位置を保つものはない。石はそのほとんどが火を受けて赤変している。集石の間には炭が検出できるがその数は少ない。

以上、II層より検出した遺構（炉址）について詳述したが、ここで若干の整理をしておきたい。15基の炉址の中で確実に炉址として比較的残存状態の良い炉は第2号、第4号、第5号、第6号、第11号、第12号、第13号の7基である。また、確実に炉が崩壊し拡散状態にあるものとして、第1号、第9号、第10号、第14号、第15号の5基である。残りの第3号、第7号、第8号の3基は炉址と考えるよりむしろ、他の目的のために集石された可能性の強いものである。号数は付していないが、第11号炉址と第12号炉址の間にある石の散在は炉が崩壊拡散した可能性の強いものである。

確実な炉址および炉址が破壊拡散したものについて時期の検討が必要であるが、炉址に確実に土器が伴うのは第4号炉址のみでありそれ以外は土器細片あるいは検出面が判明しているのみである。このことは後に炉址のタイプ分類と合わせて考察を加えることとする。（山崎）

(2) 土器の出土状況と土器

II層の上土器は押型文土器が主体を占めそれに無文土器、条痕文土器がわずかに伴出するが、II層自体の層の厚さ、あるいは遺構との関係を知るために同一個体を識別、III層同様各個体ごとにその出土状況、土器について説明を加える。

①押型文土器 I（第60、61図）

II層下部より出土する山形文を施文する押型文土器で第2凹部の前面、F-1号古墳前面の段丘端部に近い、P-20、Q-17、21、23、27、R-21、22、S-21、22、24、U-22グリット、および古墳墳丘中に分布する。特にQ-21、R-21、22グリットに集中区がみられるが、古墳の墓壇に接している。集中区の大部分が古墳の墓壇によって破壊されていることは、古墳の墳丘中よりかなりの破片が出土していることから肯首できる。

同一個体と考える破片は総数25点である。いずれも破片となって接合関係が少ないが、各部の破片から復原したのが1である。小型の深鉢形土器で復原口径17.4cm、推定器高17cm、胴部がやや丸味をもって尖底の底部にいたると考えられるが、底部破片を欠失するために底部の形状は不明。胎土は上質で焼成は良い。色調は暗褐色をなす。器壁は薄く、口縁部で0.5cm、底部付

5. II層の遺構と遺物

近で0.9cmを有する。外面には拓影にみる山形文を横走させるが口縁部2.8cmの間は無文帯として放置している。また、口縁部内面にも帯状に外面と同一原体による山形文を横走施文している。口縁部は原体で押さえ、平坦にして山形文が施文される特徴がある。1～25の破片を観察すると押型文原体の復原が可能である。いずれの破片でも文様の反復は2単位ごとに認められ、その長さは1.4cm前後で各破片による差はない。この2単位(1.4cm)は原体の一周の長さであり、これより割り出した原体の直径は約0.45cmである。原体長については、原体端部を無視し、重複関係にみられる間隔幅を抽出すると1.4cm～3.9cmの長さが求められるが、いずれも原体両端部を残すものではなく、先に抽出した間隔幅よりも実際は長いものであることは明らかである。2～9の破片より口縁内面の文様帯を5.5cmと割り出せるが、この文様帯に重複関係が見られない場合は5.5cmよりやや長い長さが求められる。また重複がみられる場合でも重複部の間隔幅3.9cm以上の原体長が求められる。以上よりこの土器に使用された施文原体は直径0.45cm、長さ3.9～5.5cm以上、15～20条2単位のものだと推定できる。

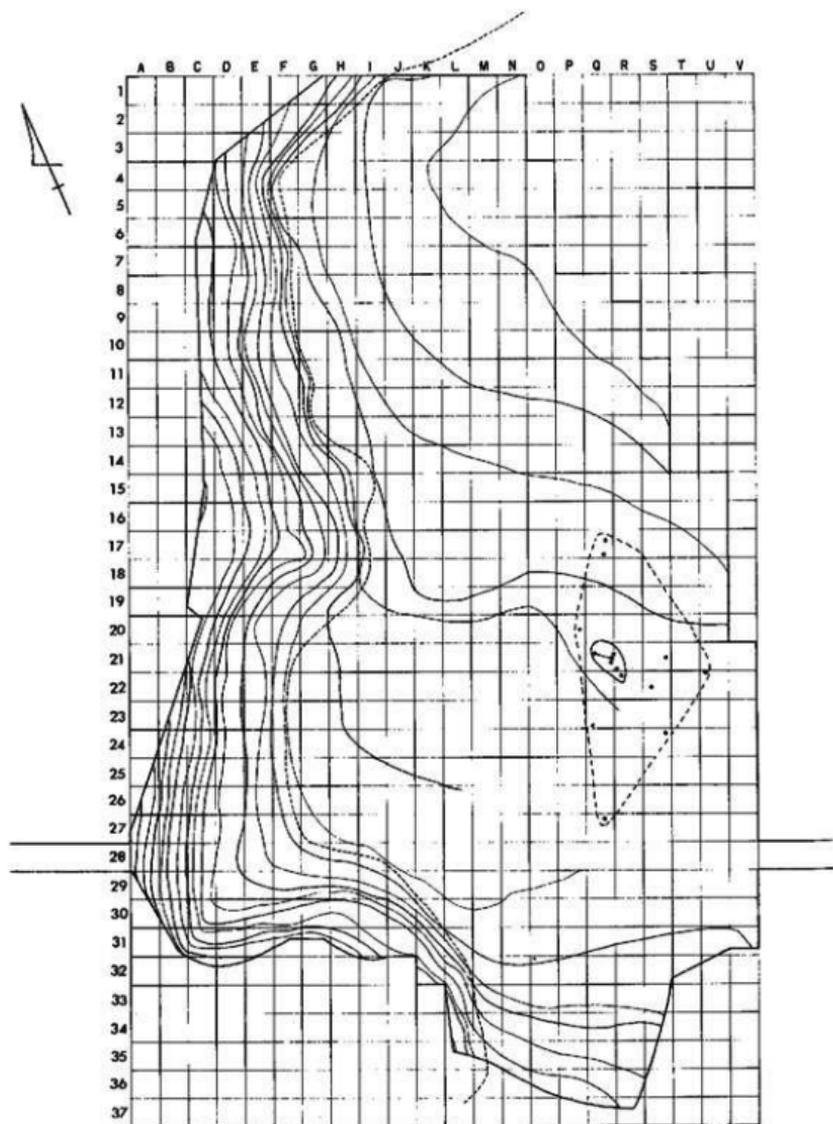
施文法は横刻原体で山形文を横走施文(一部斜方向がある)したものである。施文順序は、内面文様帯と口縁端部の関係は2の破片から明瞭であるが、外面との関係は明らかでない。しかし、後に述べる外面の施文順序と口縁端部との関係からみれば、口縁端部の施文文様に乱れない点から、口縁端部と外面との施文順序は外面の施文が先である可能性が高い。これを土器全体でみた場合、その作業手順のスムーズさからみて、まず、外面の施文からはじめ、内面、口縁部の順序をとったと考えられる。外面の施文は、土器整形後、口縁部から胴部にかけて一段ずつ左から右(?)へ移動させながら施文し、ついで、土器を倒立させ、底部を中心に放射状に一段ずつ右まわりに施文したと思われる。この時、先に施文した口縁からの施文文様と重複関係が生じたと思われる。この間の事情を示すのが10にみられた施文文様の重複関係である。内面および口縁端部の施文は右まわりに移動されたと思われる。

②押型文土器Ⅱ(第62, 63図)

第1凹部中央部前面の9m×3mの範囲、すなわち、J-5, 6, K-5, 6, L-5, 6, M-6, N-5グリットに分布し、N-5グリットの1点を除いて、すべての土器片が集中している。II層下部に多く出土するが、接合関係はみられない。

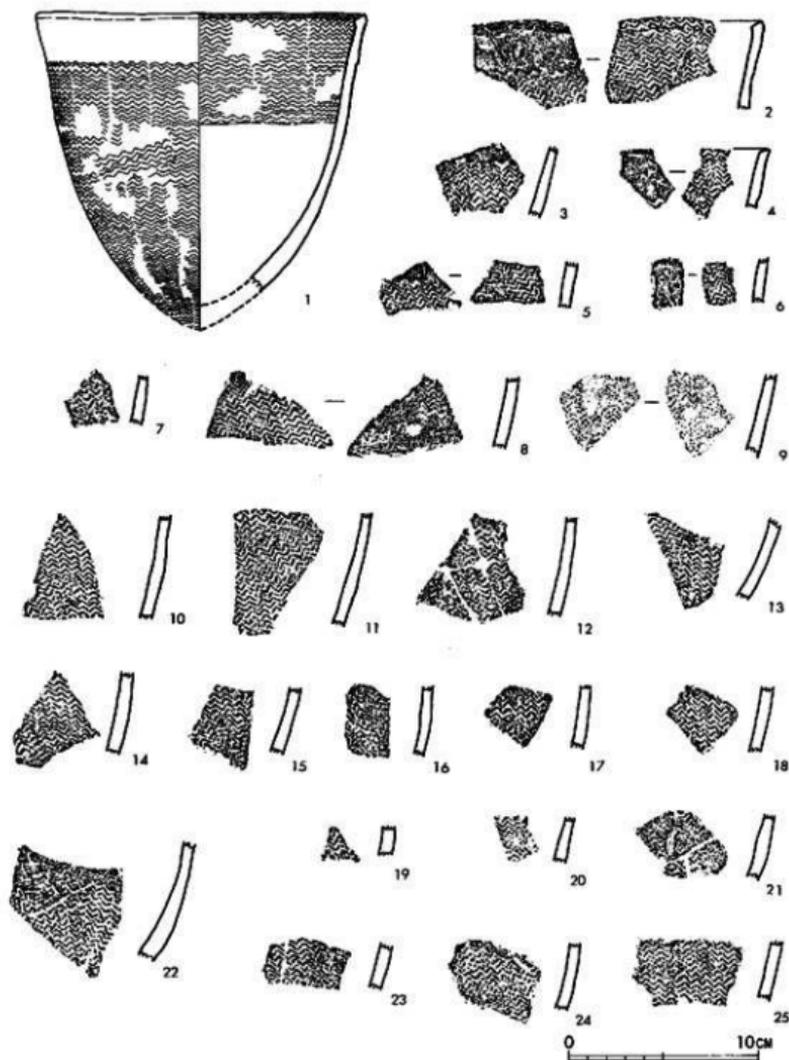
土器は山形文を施文する押型文土器で、同一個体と考える土器片総数は36点であるが、いずれも小破片でその全形を知ることはできないが、大型の深鉢形土器になるもので、器形的には押型文土器Ⅰと類似するものであろう。第63図の1, 2は口縁部破片、4～7, 9～11は口縁部付近の破片、8, 12～29は胴部破片である。外面には拓影にみるように山形文を横走施文するが、口縁部に2cm以上の無文帯をつくり、口縁部内面に帯状に外面と同一原体による山形文を横走施文している。口唇部は原体で押さえ平坦にして山形文が施文される特徴があるがこれは、押型文土器Ⅰと全く同じ特徴である。

第4章 調査の記録



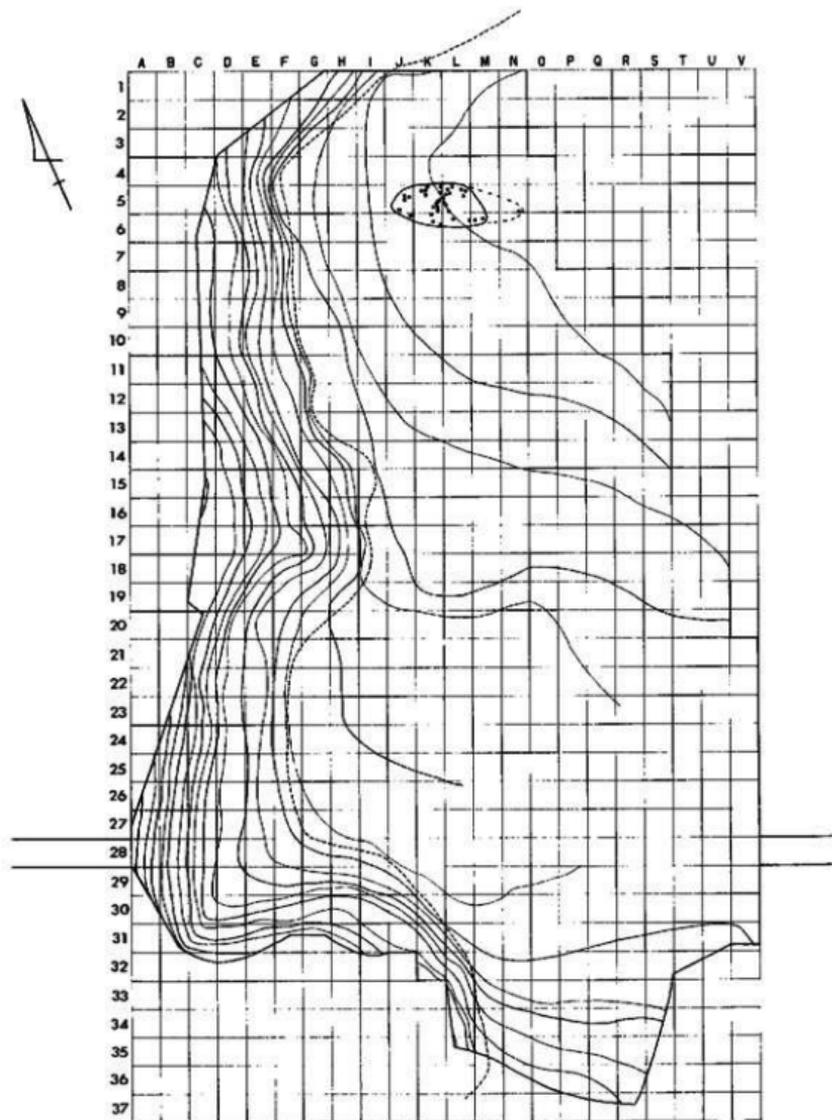
第60図 押型文土器Ⅰの出土分布図

5. II層の遺構と遺物



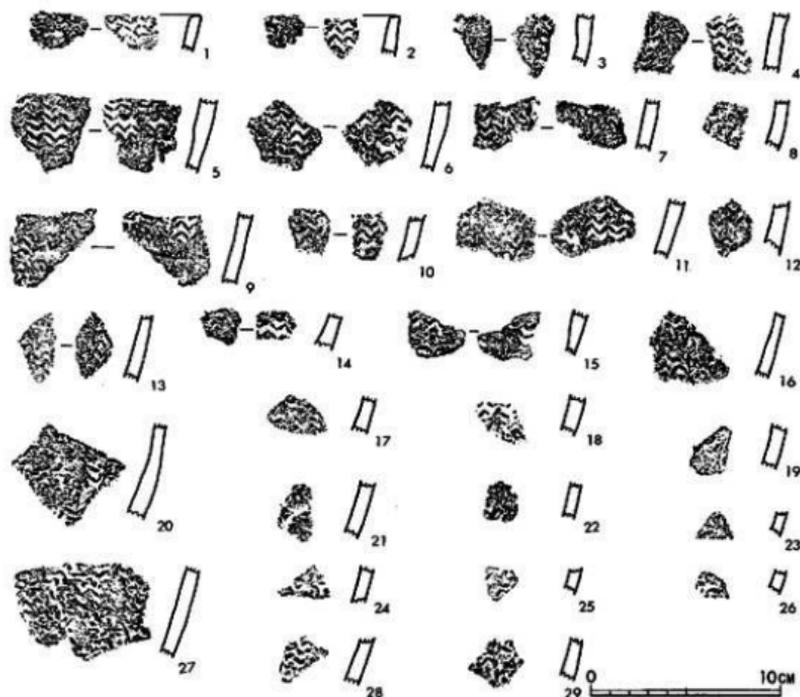
第61図 押型文土器I実測図

第4章 調査の記録



第62図 押型文土器Ⅱの出土分布図

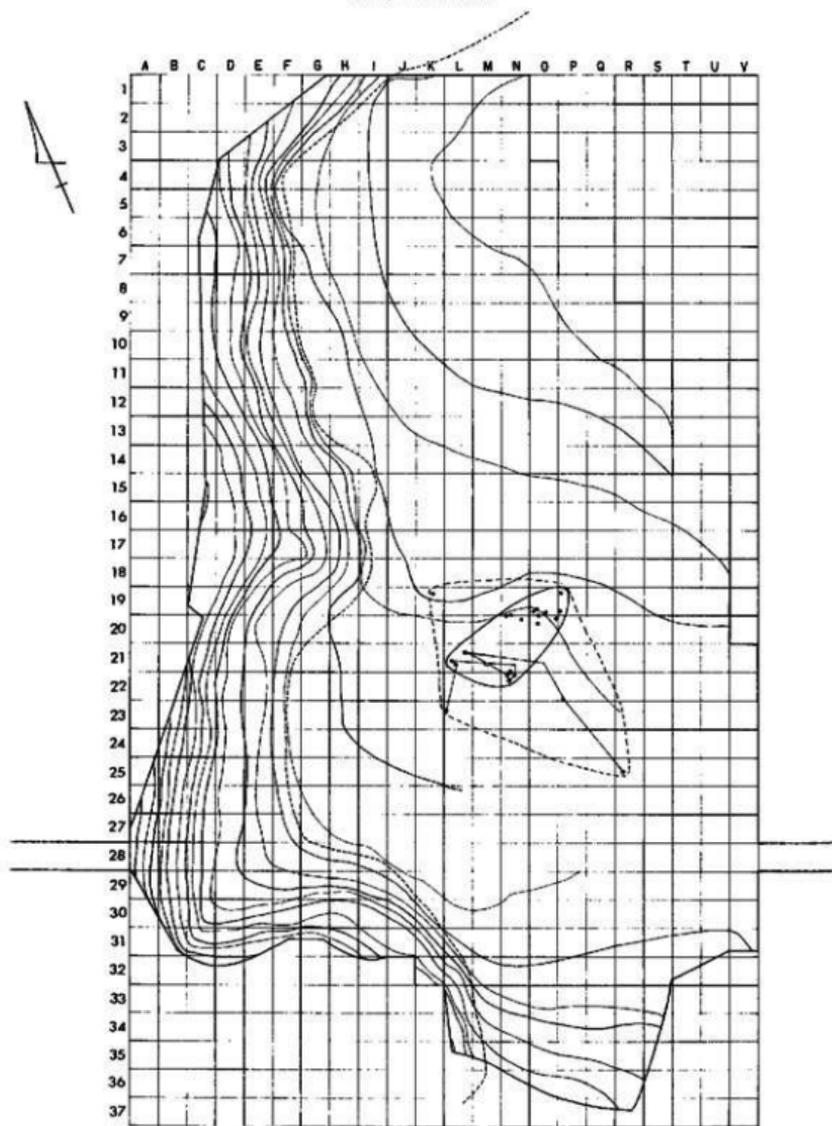
5. II層の遺構と遺物



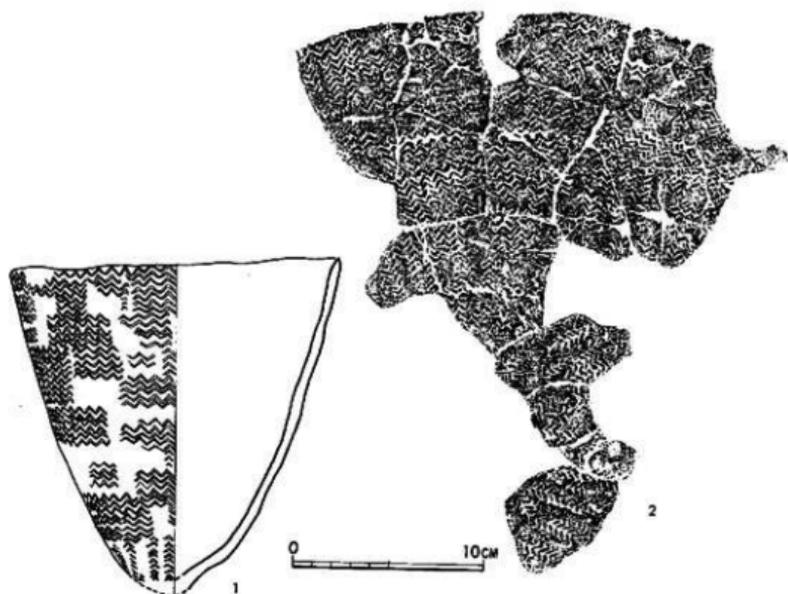
第63図 押型文土器II実測図

破片の観察から押型文原体の復原をこころみると、いずれの破片においても文様の反復は2単位ごとに認められ、その長さは1.8cm前後で各破片による差はない。この2単位一周分の軌跡から、原体の直径は0.57cm前後が求められる。原体長は両端部を残す破片がないため正確につかめないが、施文の重復関係から、その間隔はそれぞれ3.1cm, 2.3cm, 3.5cm 以上であることから、少くとも3.5cm以上のものであったことがわかる。以上より、この土器に使用された施文原体は直径0.57cm、長さ3.5cm以上、6条2単位のものと同様と推定される。施文法、施文順序は破片であるため把握しづらいが、特徴的に押型文土器Iと同様と考えられる。

器壁は0.6~0.8cmの厚さで、胎土には石英、長石、雲母の砂粒を多量に含むが良質で、焼成は良いが保存状態が悪い。色調は赤褐色をなす。外面にススの付着がわずかに認められる。



第64図 押型文土器田の出土分布図



第65図 押型文土器Ⅲ実測図

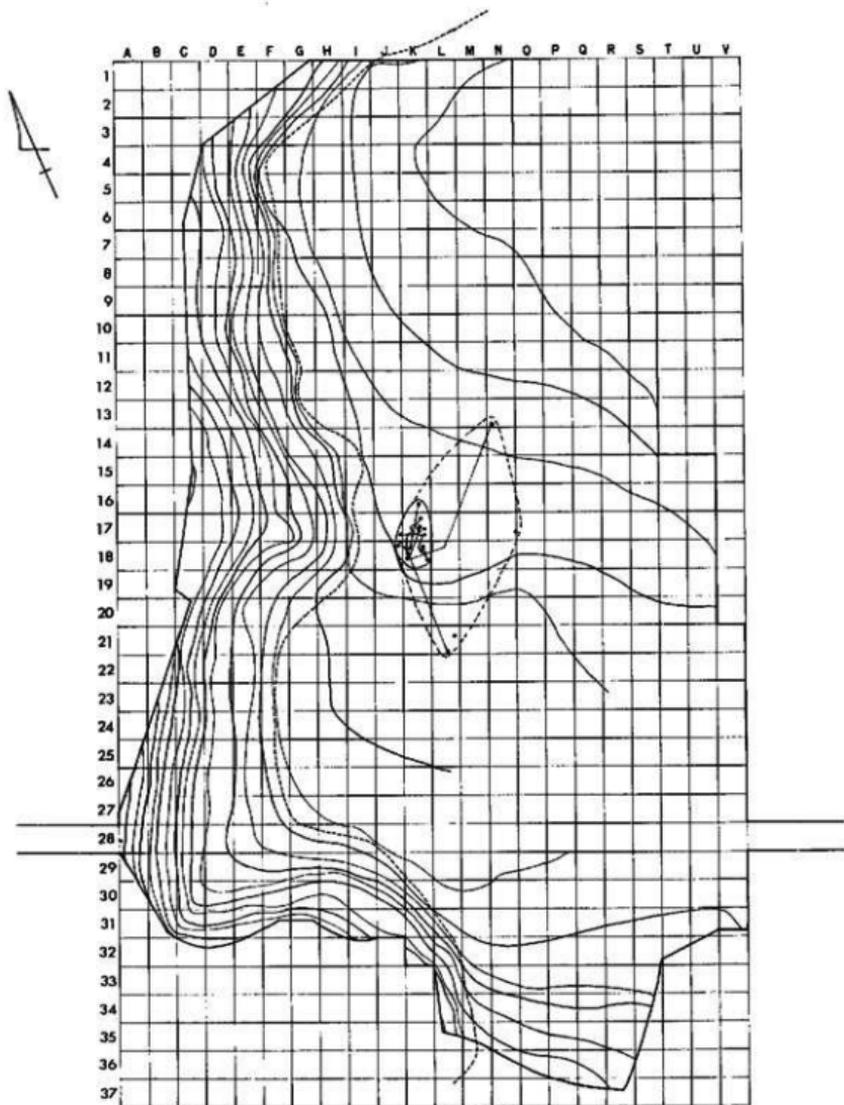
③押型文土器Ⅲ (第64, 65図)

第2凹部北半部前面の13m×12mの範囲、K-19, L-21, 23, N-19, 20, 21, 22, O-19, 20, P-19, 22, R-25グリットに分布し、L-21, N-19~21, O-19, 20, P-19, 20グリットの10m×5mの範囲に集中部が存在する。土器はII層下部に多く出土し、接合関係は最も離れたもので7.5mである。

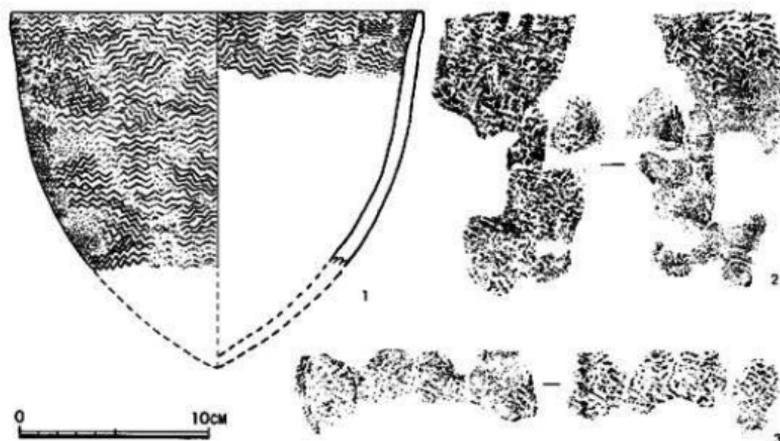
土器は山形文を施文する押型文土器で、土器片総数22点である。接合が良く、全体の形が現存し、全形を知ることができる。器形は第65図1に示したように小型の尖底深鉢形土器になる。口径17.4cm、推定器高17.4cm、胴部は張らずに、底部から直線的に口縁部にいたる。口縁部は直口し、端部は丸くおさめる。底部は欠失するが、ほぼ通常のものと同大差ないものとする。底部のやや上方にひずんだ段が存在するが、これは底部が特異な形状を示すものでなく、粘土接合の際生じた段とみた方がよいものである。器壁は薄く、最も薄い部分で0.4cm、厚い部分で0.8cmをはかる。胎土は上質で焼成は良い。色調は内外共に赤褐色をなす。外面にススの付着が著しい。外面全面に山形文を横走施文するが、内面には文様はない。

この土器に使用された施文原体は一種類であることは文様から明らかである。原体直径は文

第4章 調査の記録



第66図 押型文土器Ⅳの出土分布図



第67図 押型文土器Ⅳ実測図

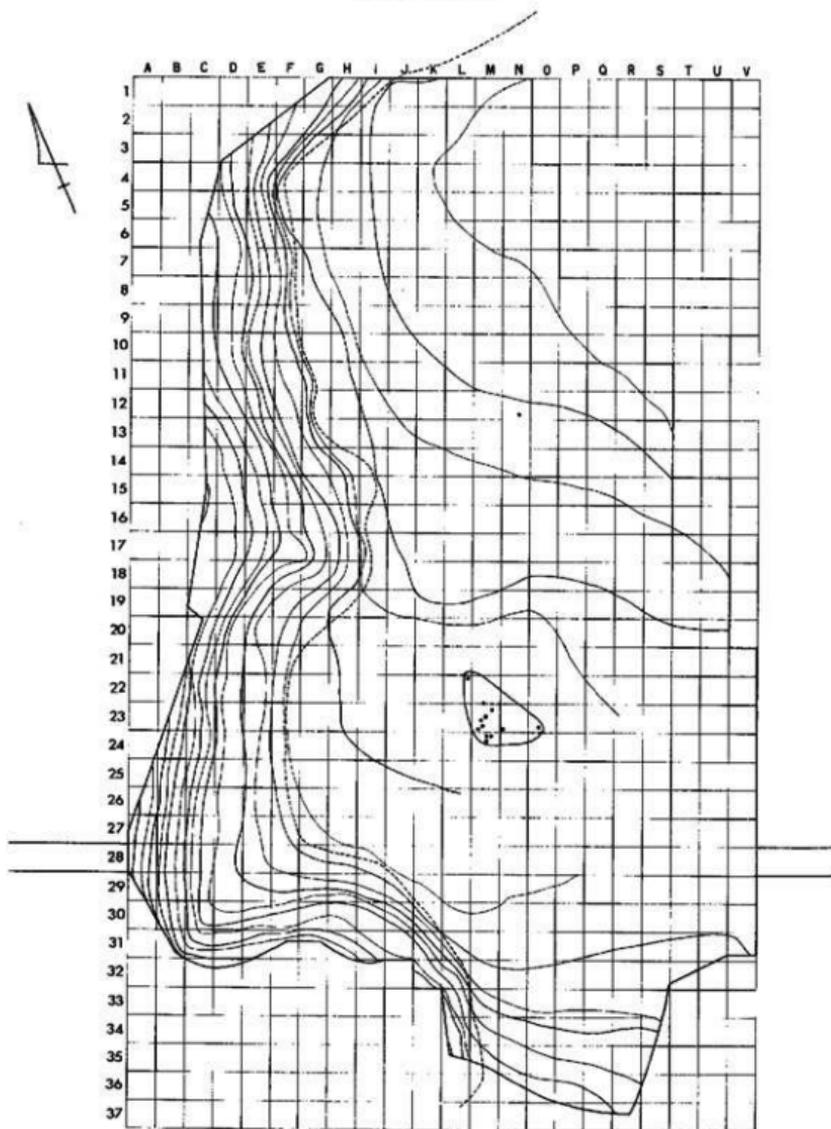
様の反復が2単位ごとに認められ、その一周の軌跡が1.1cm前後であることから、0.35cmが求められ、原体長は原体両端部が存在する部分がないために正確につかめないが、原体の重複部分との間隔幅が1.8cm～3.6cmの間にあり少くとも原体は3.6cm以上あったと考えられる。以上より施文原体は直径0.5cm、長さ3.6cm以上、11条以上、2単位のものとして推定できる。

施文法は施文文様の切り合いから、先ず土器の整形後、口縁部に1～2段左まわりに横走施文し、次に土器を倒立させて、底部より口縁に向かって5～6段の横走施文を右まわりに行っている。この時、底部に近い部分は、底部を中心に放射状の施文となり、原体は回転せず、半回転していた。その部分に段を生じる。

④押型文土器Ⅳ（第66、67図）

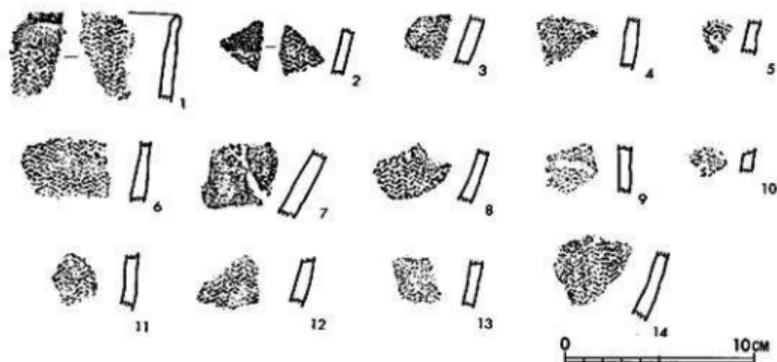
第1凹部と第2凹部の境の突出部前面の17m×8mの範囲、J-17、18、K-16～18、L-21、N-13、17グリットに分布する。特にJ-17、18、K-16～18グリットに集中し、集中区内では良く接合し、最も離れて接合するのはK-18グリットとN-13グリット間で約11m離れている。

土器は山彩文を施文する押型文土器で、同一個体と考える土器片総数は18点である。底部がないが、ほぼ全形を知ることができる。器形は第67図1に示したように中型の尖底深鉢形土器になると考えられる。復原口径22cm、推定器高19cm、底部から外方に張り出し、胴部がやや張る。口縁は直口し、端部は丸くおさめる。底部は欠失するが普通の尖底になると考えられる。器壁は比較的薄く0.6cm～0.8cmをはかる。胎土には石英、長石、その他の砂粒を混入するが良



第68図 押型文土器Ⅴの出土分布図

5. 土層の遺構と遺物



第69図 押型文土器V実測図

質で、焼成は良い。色調は外面が灰褐色～赤褐色、内面は褐色～黄褐色をなす。外面の胴上半部～口縁にスガが付着し、胴下半部は二次加熱のため赤変している。内面の胴下半部には焦げつきの炭化物が付着する。外面は全面に横走の山形文を施文し、口縁部内面にも帯状に同一個体で横走施文している。

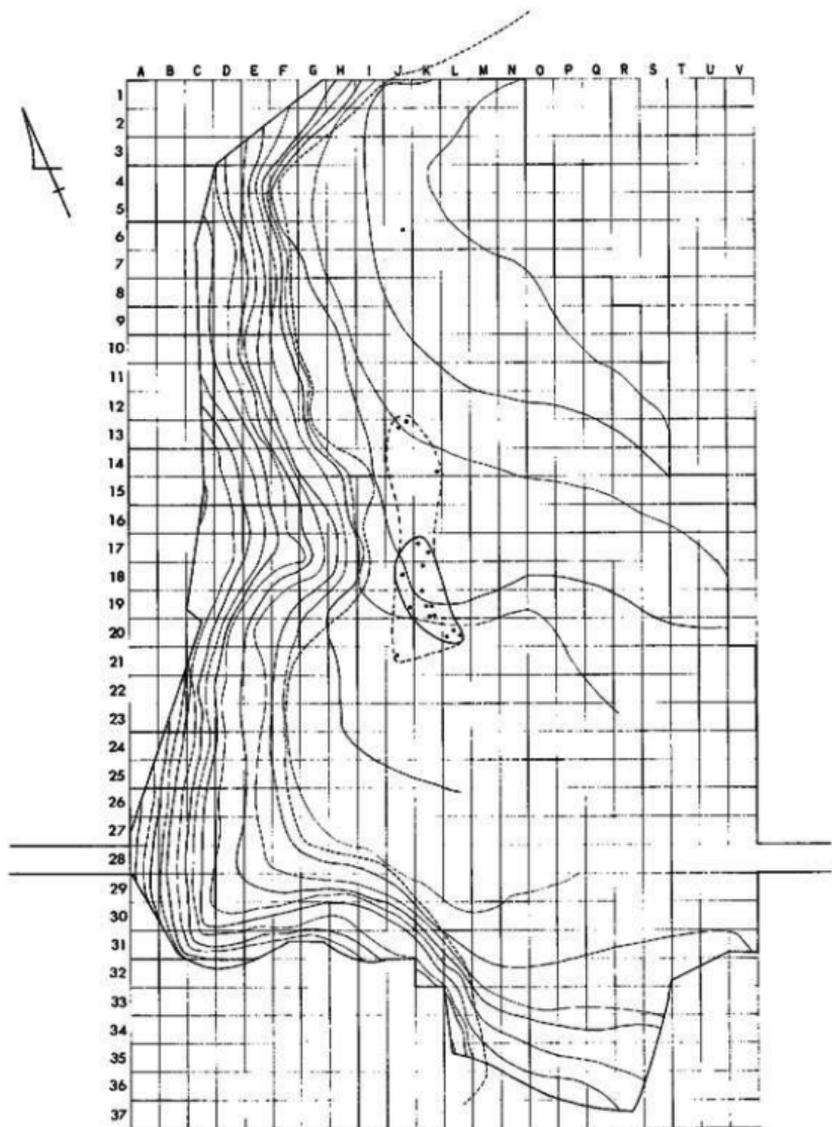
この土器に使用された施文原体は一種類である。原体直径は文様の反復が2単位ごとで認められ、その一回の軌跡が1.8cm前後であることから、0.57cmが求められる。原体長は原体両端部を残す施文がないため正確にはつかめないが、内面の帯状施文から2.8cm以上であったことが知れる。以上より、この土器の施文原体は直径0.57cm、長さ2.8cm以上、7条以上、2単位のものと推定される。

施文法は横走施文である以外は、表面観察は不可能である。

⑤押型文土器V (第68, 69図)

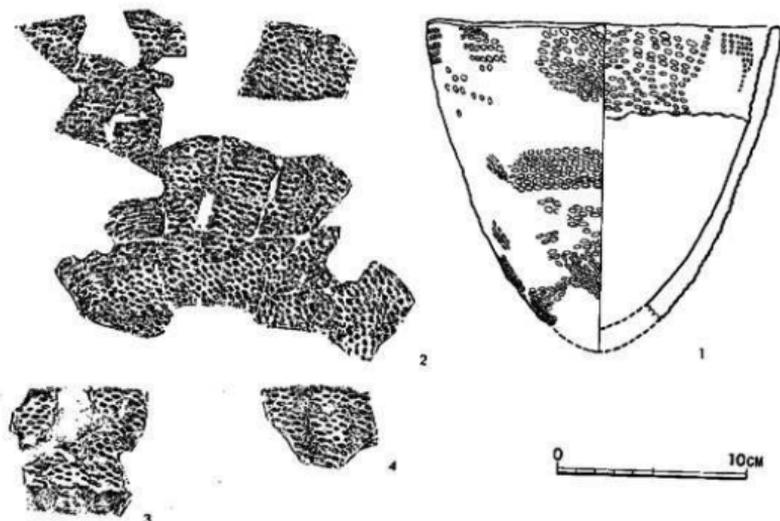
第2四部中央部前面の7m×4mの範囲、L-22, M-22~24, N-23, O-23グリットに分布する。接合関係は認められない。

土器は山形文を施文する押型文土器で、同一個体と考える土器片総数は14点である。いずれも小破片でその全形を知ることはできないが、中型の尖底深鉢形土器になると考えられる。第69図1は口縁部、2は口縁部付近、3~14は胴部破片である。1の口縁部破片は排土中よりの出土である。口縁部は丸くおさめ、わずかに外反させる。外面の口縁下1.9cmは無文帯として施文がみられない。無文帯以下は横走施文。口縁部内面にも帯状に横走施文があるが、長さは不明。2の破片からも同様のことがわかる。胴部破片はいずれも外面に横走施文したものである。器壁は0.7cm前後で比較的薄い。胎土には石英、長石の他、花崗岩の小石を多量に混入して良質でない。焼成は良好。内外共赤褐色をなす。



第70図 押型文土器Ⅵの出上分布図

5. II層の遺構と遺物



第71図 押型文土器VI実測図

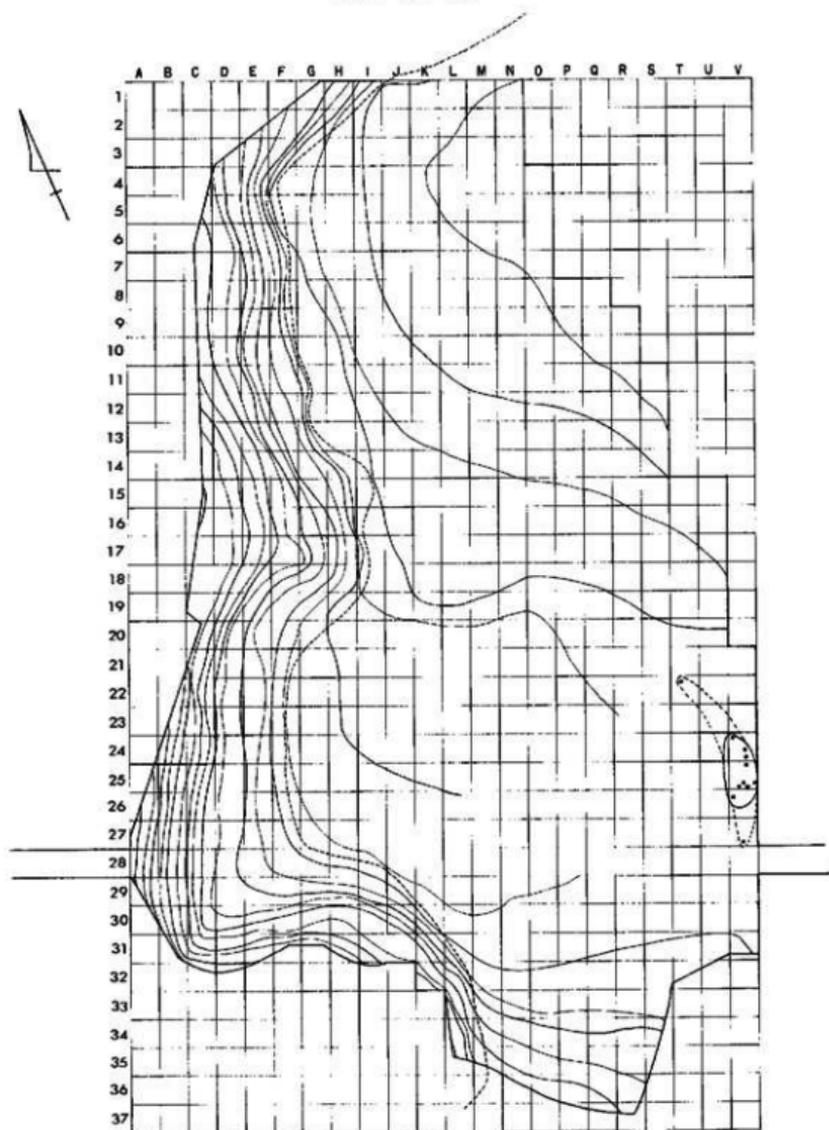
この土器に使用された原体は一種類である。原体直径は文様の反復が2単位ごとに認められ、その一周の軌跡が1.4cmであることから、0.45cmが求められる。原体長は原体の間隔あるいは重複部が判然としないので明らかにできない。

⑧押型文土器VI (第70, 71図)

第2凹部北半部から第1凹部の境の17m×4mの範囲、J-6, 13, 18, 21, K-14, 17~19, L-20グリットに分布し、J-18, 19, K-17~19, L-20にかけて集中区がみられる。やや拡散があり、J-6は第1凹部中央部まで広がっている。

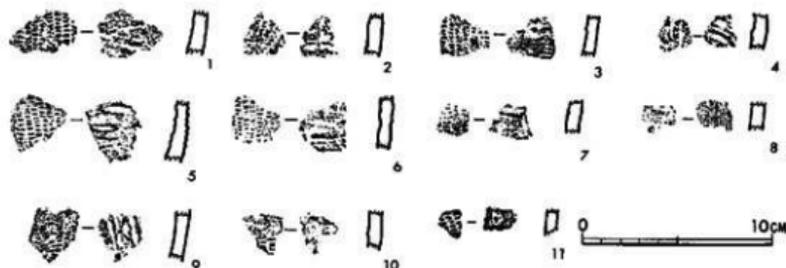
土器は楕円文を施文する押型文土器で、同一個体と考える土器片の総数は18点である。接合関係が良く、約1/3が現存し、底部を欠かれば全形を知ることができる。器形は第71図1に示したように小型の尖底深鉢形土器である。復原口径18.7cm、推定器高18.4cm、口縁部は直口し、端部は丸くおさめる。器壁は小型のわりにやや厚く、0.9cmをはかる。胎上は良質で焼成は良い。色調は暗灰黄色をなす。外面には楕円文を全面に横走施文し、口縁部内面にも幅9.4cmで帯状に外面と同一原体で横走施文している。それ以下は板状の工具で削るような調整がみられ、その方向は内底部で縦方向、胴部で右下がりの斜方向である。

この土器施文原体は一種類で、原体端部は片側から削った片刃状をなしていることが推定で



第72図 埴形文土器の出土分布図

5. II層の遺構と遺物



第73図 押型文土器Ⅶ実測図

き、文様の反復は2単位ごとにみられ、その長さは1.3cm前後である。原体直径は0.41cmである。原体長は正確に抽出できないが、内部文様帯より5.4cm以上の長さが推測できる。以上より、この土器の施文原体は直径0.41cm、長さ5.4cm以上、7条以上2単位のものとして推定できる。なお原体の刻みは斜方向の刻みである。

施文法については、その施文順序の詳細について明らかにできなかった。

⑦押型文土器Ⅶ（第72、73図）

第2四部中央部前面、段丘端部12m×2mの範囲、すなわち、T-22、V-24～27グリットに分布し、V-24～26に集中区がみられる。接合例はない。

土器は楕円文を施文する押型文土器で、同一個体と考える上器片の総数は11点である。いずれも小破片で器形を知ることはできないが、破片からみて小型の尖底鉢形になるものであろう。器壁は薄く0.5～0.6cm前後で底部にむかってやや厚さを増す。胎土には石英、長石、雲母を含み、部分的に花崗岩の小石を含んでいるが、良質である。焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、内面が黄褐色である。外面にはススの付着が認められる。

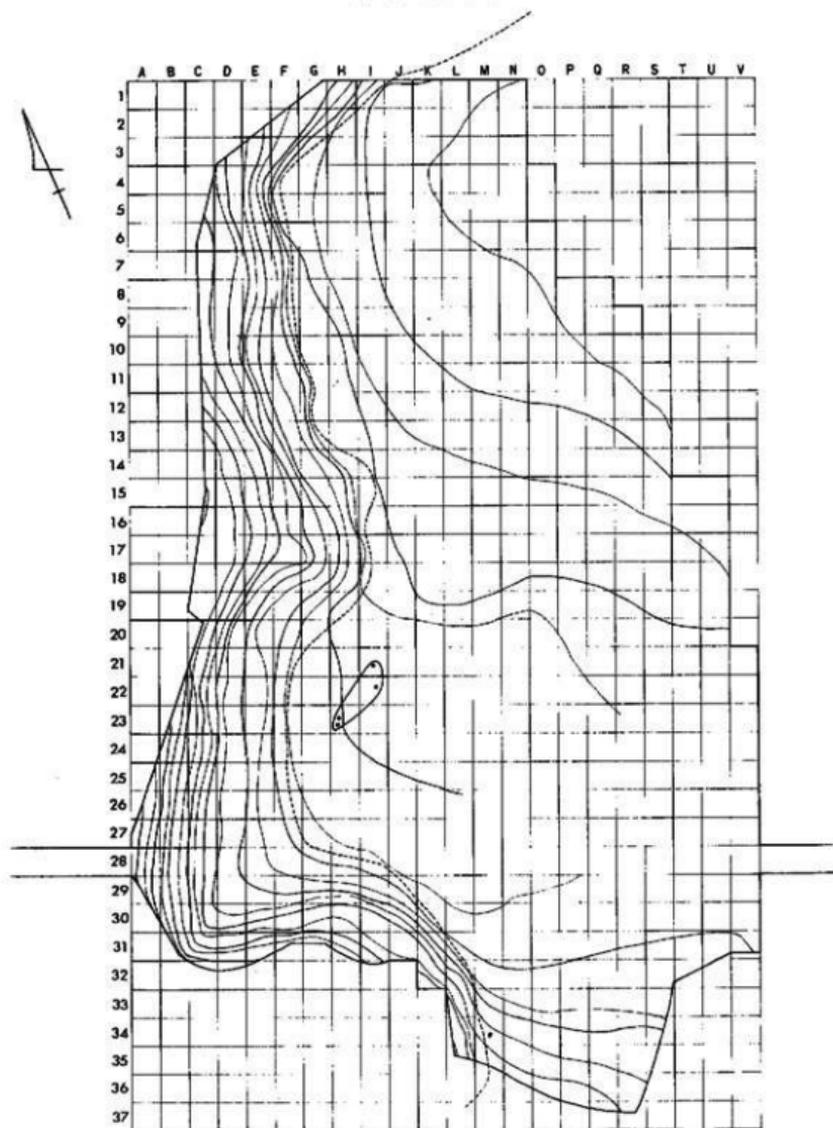
胴部破片のみで口縁部、底部と欠いているが外面には全面に横走する小さな楕円文が施文されたものであろう。内面は1、3、8、10、11がへら状工具で荒くへら削りがみられ、2、4～7、9は幅0.3cm前後の条痕状の凹線を横位ないしは縦位に施している。

施文は一種の原体を使用したものである。各破片の観察から、文様の反復は3単位ごとに認められ、その一周の軌跡が1.2cm前後であることから、直径0.38cmが求められる。原体長は、破片が小さく求め難いが、文様の重複からみれば2cm以上が求められる。以上よりこの土器の施文原体は直径0.38cm、長さ2cm以上、9条以上3単位のものとして推定できる。施文方法については明らかにできない。

⑧押型文土器Ⅷ（第74、75図）

第2四部北半部、H-23、I-21、22グリットのII層下位に検出した土器である。

第4章 調査の記録



第74図 押型文土器壺の出土分布図

5. II層の遺構と遺物

同一個体と考えられる上器破片は4点ときわめて少い。いずれも胴部破片で、外面に楕円押型文を横走施文し、内面には条痕を横位ないしは縦位に施している。器形は不明であるが、破片からみて大型の尖底深鉢形土器であろう。器壁の厚さは0.6cm前後で比較的薄い。胎土には石英、長石の砂粒を含むが良質。焼成は良好で、色調は内外面共に黄褐色をなす。



第75図 押型文土器器壁実測図

外面は全面に楕円文を横走施文したものと考えられる。施文原体は一種類である。原体の直径は文様の反復が2単位ごとに認められ、その一周の軌跡が1.1cm前後であることから、0.35cmが求められる。原体長は1より、その一端の痕跡から1.6cm以上が求められる。以上より施文原体は直径0.33cm、長さ1.6cm以上、4条2単位のものとして推定できる。

施文法については破片が小さいため不明。

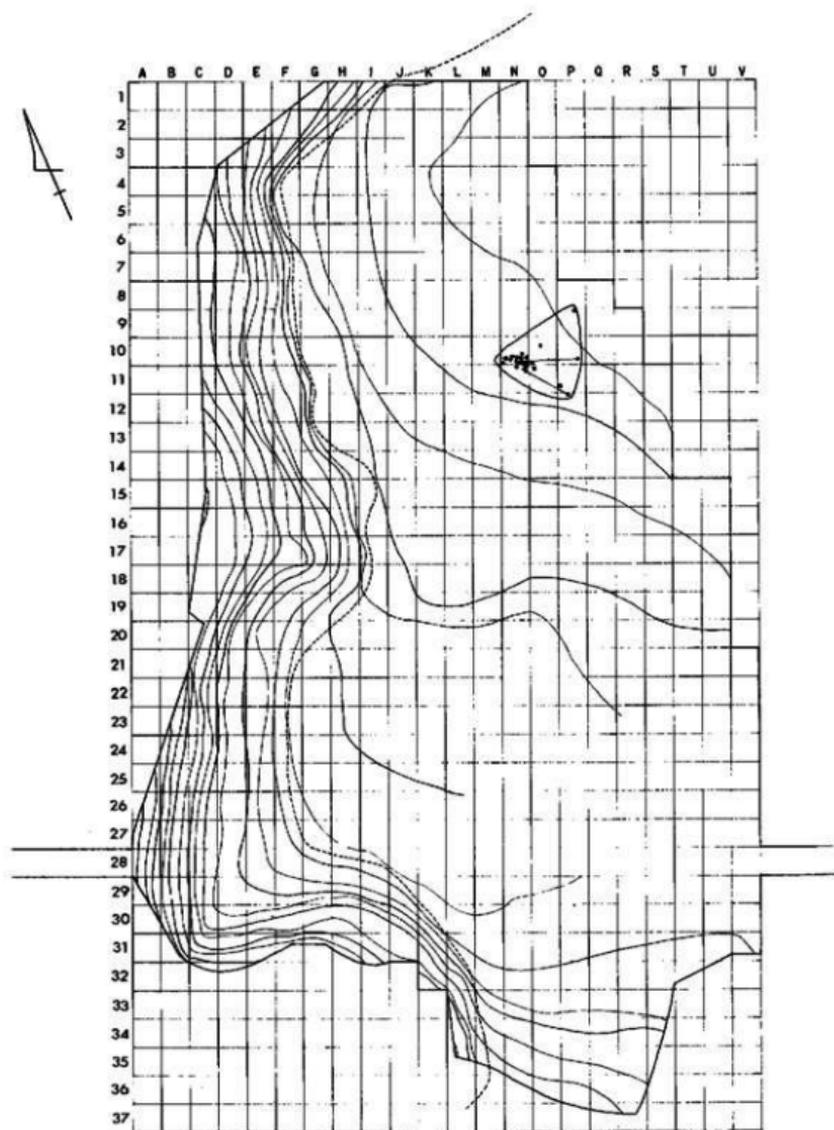
⑨押型文土器Ⅸ(第76, 77図)

第1四部南半部前面の7m×6mの範囲、すなわち、N-10・11、O-10・11、P-9~11グリットに集中して分布する。接合関係は多くなく、4mの距離で接合される。

土器は山形文を施文する押型文土器で、土器片数は22点である。第77図1~7と8~10、11~13までの3個体があるが、三者共に良く似ていてその識別は困難である。また、その分布範囲も全く一致している。1~7をⅨa、8~10をⅨb、11~13をⅨcとして説明していく。第76図の分布図中、Ⅸaは円形のドット、Ⅸbは三角形のドット、Ⅸcは方形のドットで示した。

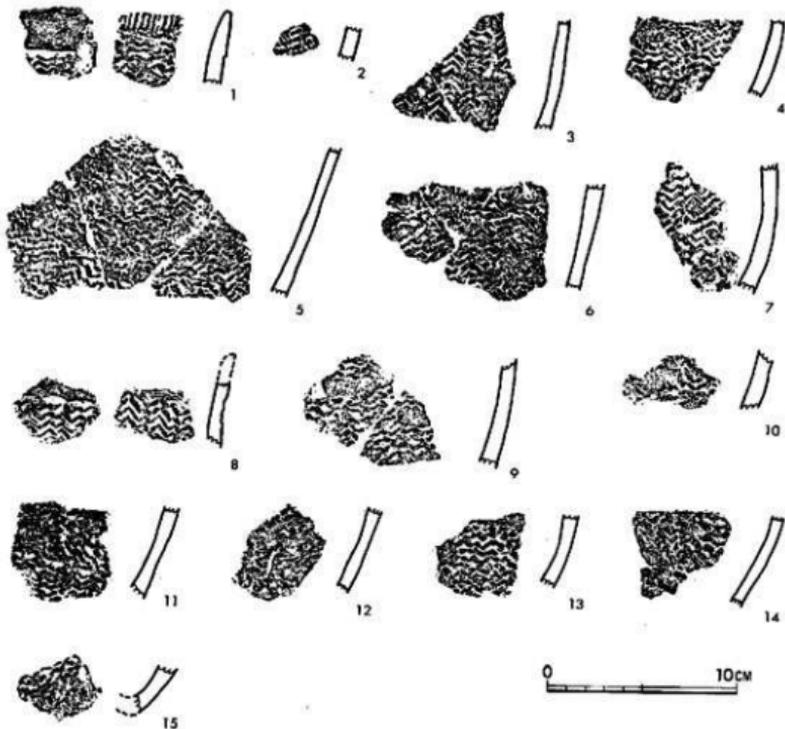
Ⅸa土器は11点があり、山形文を施文する押型文土器である。破片から器形をみても、かなり大型の尖底深鉢形土器になろう。1は口縁部破片、他は胴部破片である。1は口縁部がわずかに外反し幅2.5cmの無文帯を残し、その下方から山形文を横走施文し、内面は口縁部に1.5cm幅で縦位の沈線(原体条痕)を入れ、その下方に山形文を帯状に横走施文している。他の胴部破片は全面に横走ないしは斜走する山形文を施文するが、基本的には横走施文である。外面にはススの付着が顕著に認められる。器壁は厚さ0.6~0.8cmで大型品としてはきわめて薄い。胎土には石英・長石等の砂粒を含むが良質である。焼成は良好で、色調は外面が褐色~赤褐色、内面は黄褐色をなす。

この土器に使用された施文原体は一種類である。原体直径は文様の反復が2単位ごとに認められ、その一周の軌跡が1.8cm前後であることから0.57cmが求められる。原体長は、重複のみられない文様幅で2.7cm以上が考えられる。以上より施文原体は直径0.57cm、長さ2.7cm以上、6条以上2単位と推定できる。



第76図 埴形文土器区の出上分布図

5. II層の遺構と遺物



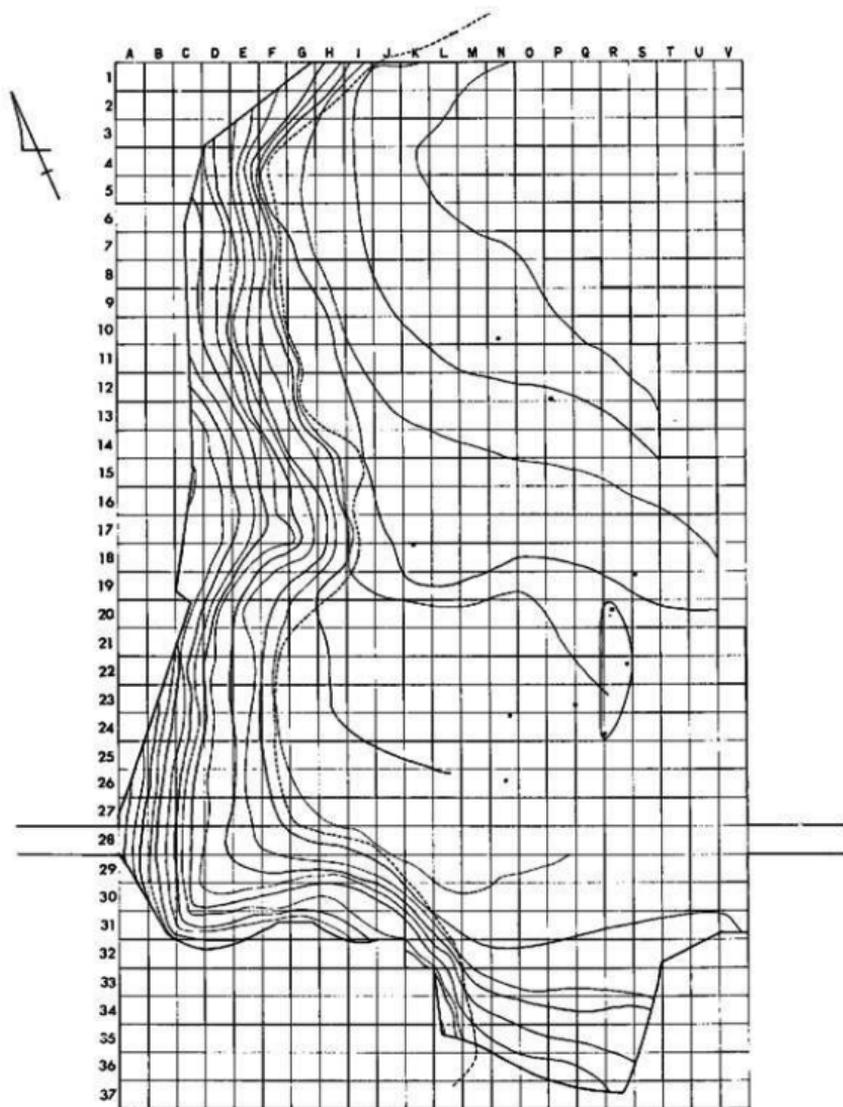
第77図 押型文土器Ⅸ実測図

施文法については口縁部内側の帯状施文→口縁の沈線（原体条痕）→外面の施文（重複関係が複雑でその順序は明らかにしがたい。）となる。

Ⅸb土器は4点あり、2点が接合する。山形文を施文する押型文土器である。8は口縁部付近の破片、他は胴部破片である。器形は明らかでないが大型の尖底深鉢形土器にならう。8は口縁外面下に幅は不明であるが無文帯を有し、その下方から山形文を横走施文し、内面には同一原体による施文帯がある。口縁部の縦位の沈線（原体条痕）の有無は口縁を失うため不明。胴部は全面に山形文を横走施文する。器壁の厚さ0.7cm前後、胎土には石英、長石の砂粒を多量に混入する。焼成は良い。色調は外面が黒褐色、内面が褐色～赤褐色をなす。

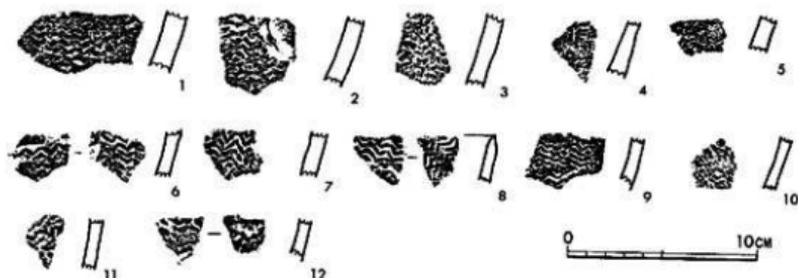
この土器の施文原体は、端部がゆるやかな弧を描き、やや片刃状に形成されていることがわ

第4章 調査の記録



第78図 埴型文土器Ⅹの出土分布図

5. II層の遺構と遺物



第79図 押型文土器X実測図

かる。直径は、文様の反復が2単位ごと、1.6cm前後であることから、0.51cmが求められる。長さには重複部が複雑であるが8の破片より2.6cm以上が考えられる。以上よりこの土器の施文原体は直径0.51cm、長さ2.6cm以上、4条以上2単位のものとして推定できる。

施文法は明らかでないが8の施文では原体の一周ごとに停止していることがわかる。

Ⅱc土器は5点がある。山形文を施文する押型文土器である。11～14は胴部破片、15は底部破片である。外面全面に山形文を横走施文する。器形は明らかにできないが中型の尖底深鉢形土器となろう。器壁の厚さ0.7cm前後、胎土に石英・長石の砂粒を多量に含む。焼成は良好、色調は外面が黄褐色、内面が赤褐色となる。

この土器の施文原体は、文様の反復が1.7cmごとに認められることから、直径は0.54cmが求められる。原体長は文様が不鮮明で、かつ重複関係が複雑であるために明らかでないが少なくとも1.7cm以上であることは間違いない。以上により、この土器の施文原体は直径0.54cm、長さ1.7cm以上、4条以上2単位のものとして推定できる。

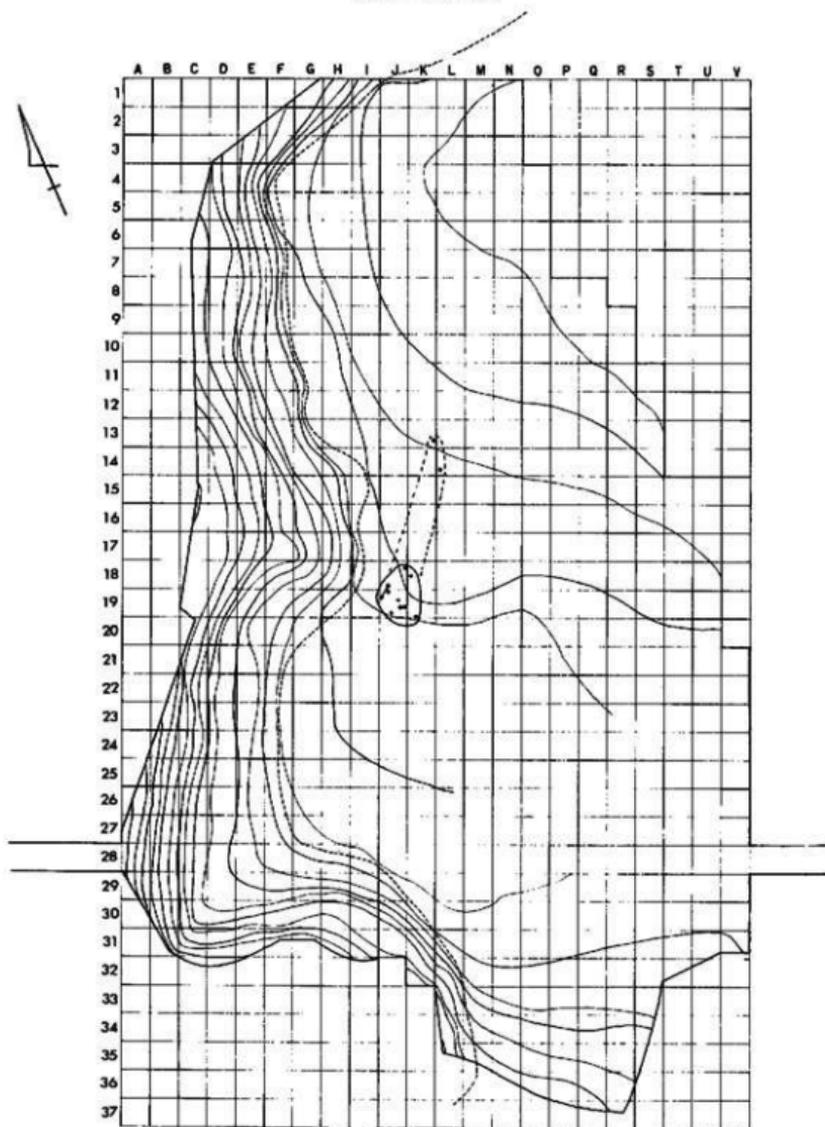
①押型文土器X（第78、79図）

第1、2門部の前面に散発的に分布する土器で、1～5の土器の同一個体のみがR-20、22、24グリットに集中している。土器片が少ないのは古墳の崩平によるもので3点が古墳墳丘中より出土している。

第79図1～5は同一個体の破片で他に1点がある。いずれも胴部の小破片である。山形文を横走施文する押型文土器である。器形については明らかにできないが、大型の尖底深鉢形土器になろう。器壁は1cm前後でやや厚い。胎土には石英・長石・雲母等の砂粒を含むが良質で、焼成は良い。色調は内外両面共に黄褐色をなす。外面にススの付着が著しい。

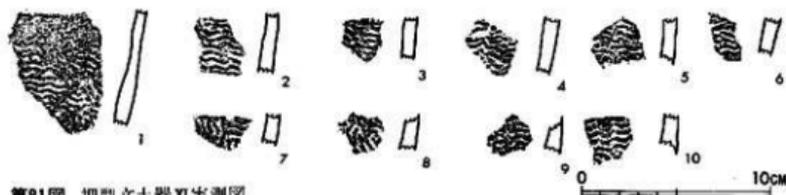
この土器の施文原体は、文様の反復が2単位ごと1.7cm前後で認められることから、直径0.54cmが求められる。原体長についてはその重複関係から1.9cm以上の長さが求められる。よって、施文原体は直径0.54cm、長さ1.9cm以上、5条以上、2単位のものとして推定できる。

6～12は、6・7が同一個体である以外はほとんどが別個体の破片である。



第80図 押型文土器Ⅱの出土分布図

5. II層の遺構と遺物



第81図 押型文土器Ⅺ実測図

6・7は同一個体と考えられ、6は口縁部付近、7は胴部破片である。6は口縁外面に無文帯（幅不明）があり、それ以下に山形文を施文し、内面にも同一原体で山形文を横走施文する施文帯がある。上部部を欠くために口縁端の縦位の沈線（原体条痕）の有無は不明。7は外面に山形文を横走施文する。小型の深鉢形土器であろう。器壁は0.6～0.7cmで底部にむかって厚くなる。

施文原体は、文様の反復が2単位ごと1.8cm前後であることから、直径0.57cmが求められ、原体長は重複の関係から2cm以上が求められる。すなわち、原体は直径0.57cm、長さ2cm以上、6条以上、2単位のものとして推定できる。

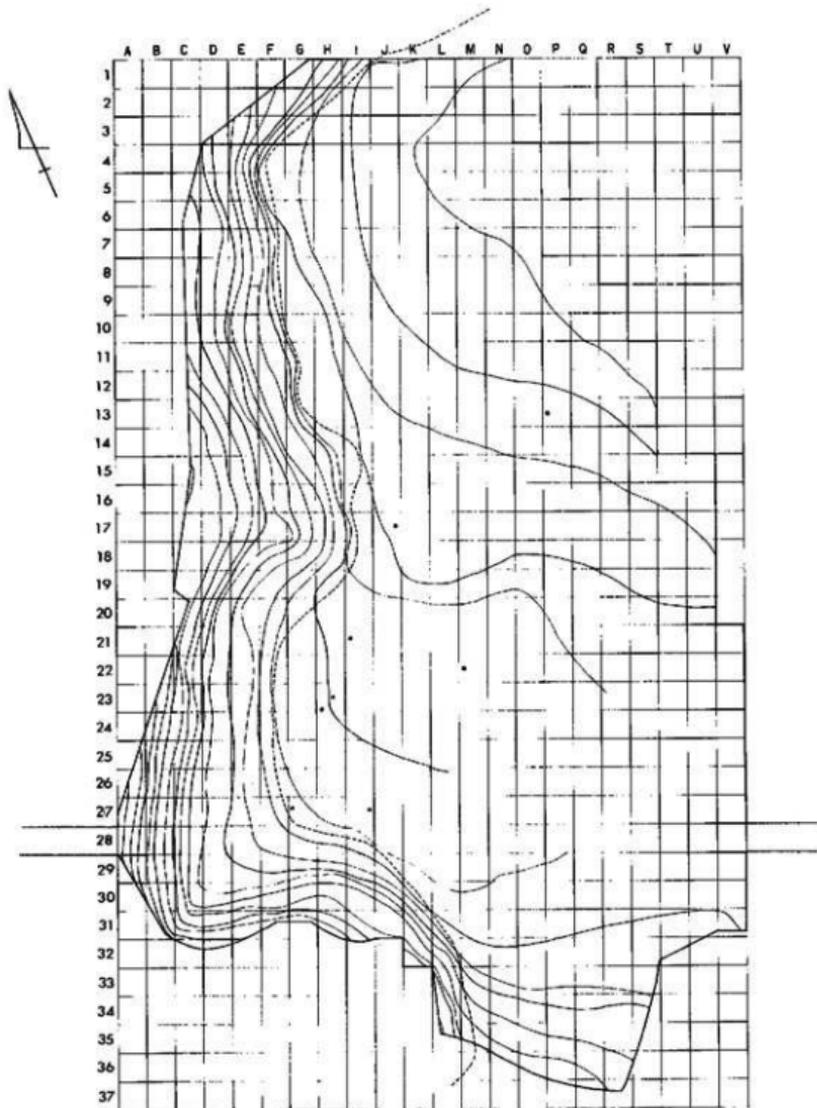
8は小型の深鉢形土器の口縁部小破片である。口縁部はやや尖り気味におさめる。内外面にやや斜め方向の山形文を施文する。施文原体は文様の反復が不明であるために割り出せないが、他例同様に2単位の反復であれば、直径0.57cmが求められる。原体長は1.8cm以上である。器壁は0.6cmの厚さで、胎土には石英・長石の砂粒を混入するが良質で、焼成は良い。明るい黄褐色をなす。

9は小型の深鉢形土器の胴部破片である。外面に山形文を横走施文する。施文原体は文様の反復が2単位、1.9cmごとに認められ、直径は0.61cmが求められる。原体長は重複関係より1.4cm以上が求められる。よって、この土器の施文原体は直径0.61cm、原体長1.4cm、4条以上、2単位のものとして推定できる。器壁の厚さ0.6cm前後で、胎土には石英・長石の砂粒を混入し、焼成は良い。色調は内外共に黄褐色をなす。

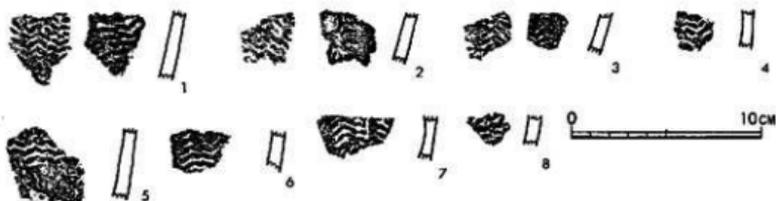
10は深鉢形土器の胴部破片で、外面に山形文を横走施文する。文様が不鮮明で施文原体は推定不可能である。器壁の厚さは0.5cm前後、胎土に石英・長石・花崗岩の小石を多量に含む。焼成は良好。色調は内外面共に赤褐色をなす。

11も同様に深鉢形土器の胴部破片である。外面に山形文を横走施文する。小破片で施文原体は明らかにできない。器壁の厚さは0.7cm前後で、胎土には石英・長石の砂粒を含む。焼成は良好で、色調は赤褐色をなす。

12は口縁部付近の破片である。外面にやや大きめの山形文を横走施文する。小破片で原体は明らかにできない。器壁の厚さは0.7cm前後で、胎土には石英・長石の砂粒を含む。焼成は良く赤褐色をなす。



第82図 押型文土器の出土分布図



第83図 押型文土器Ⅱ実測図

⑪押型文土器Ⅱ (第80, 81図)

第1凹部と第2凹部の境、岩盤の突出部前面の14m×3mの範囲、すなわちJ-18, 19, K-13, 18, 19, L-14グリットに分布し、特にJ-18, 19, K-18, 19グリットに集中している。K-13, L-14グリットの土器は流れたものであろう。

土器はゆるやかな山形文を施したもので、同一個体と考える破片12点がある。器形は明らかでないが、小型の深鉢形土器になると考える。器壁の凹凸が著しく、器壁の厚さは0.5cm～0.8cmである。胎土に石英・長石の砂粒を混入するが良質で、焼成は良好。色調は外面が黄褐色、内面が黒褐色をなす。内面はへら状のもので調整している。

施文原体は文様の反復が2単位、1.9cmごとに認められ、それから直径0.61cmが求められ、また原体長についてはその重複関係の間隔から少くとも3.1cm以上が求められる。よって、原体は直径0.61cm、原体長3.1cm以上、9条以上、2単位のものとして推定される。

⑫押型文土器Ⅲ (第82, 83図)

第2凹部から第1凹部南半部前面に散発的に分布し、一定のまとまりをもたない。G-27, H-23, I-21, 27, J-17, M-22, P-13グリットに分布する。

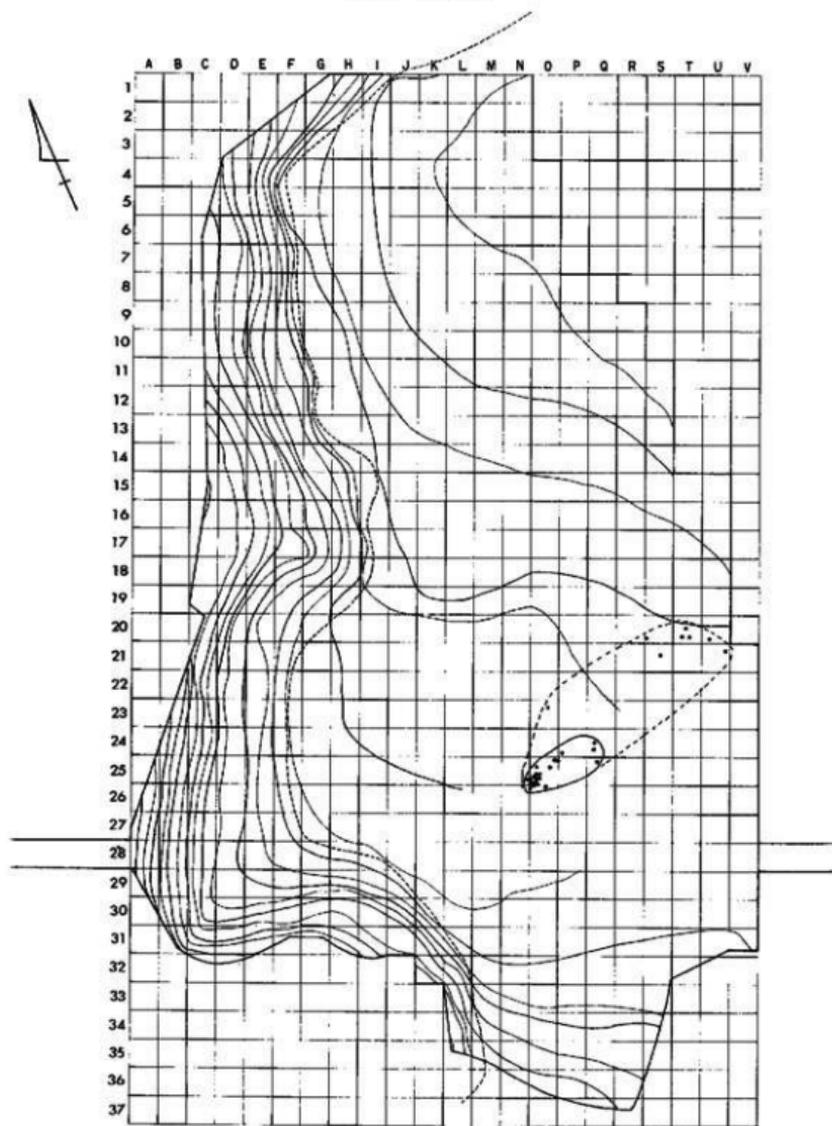
1～3, 6は口縁部破片、4, 5, 8は胴部破片で外面にややための山形文を横走施文する。口縁内部にも同一原体で施文帯がある。器壁は厚さ0.7cm前後で、胎土には石英・長石の砂粒を含む。焼成は良く、色調は赤褐色をなす。

施文原体は、文様の反復が2単位ごと1.8cm前後で認められることから、直径0.57cmが求められる。原体長は正確に把握できる部分がないが、少くとも2.2cm以上であることは施文の重複関係から割り出せる。よって、原体は5条以上、2単位のものとして推定できる。

⑬押型文土器Ⅳ (第84, 85図)

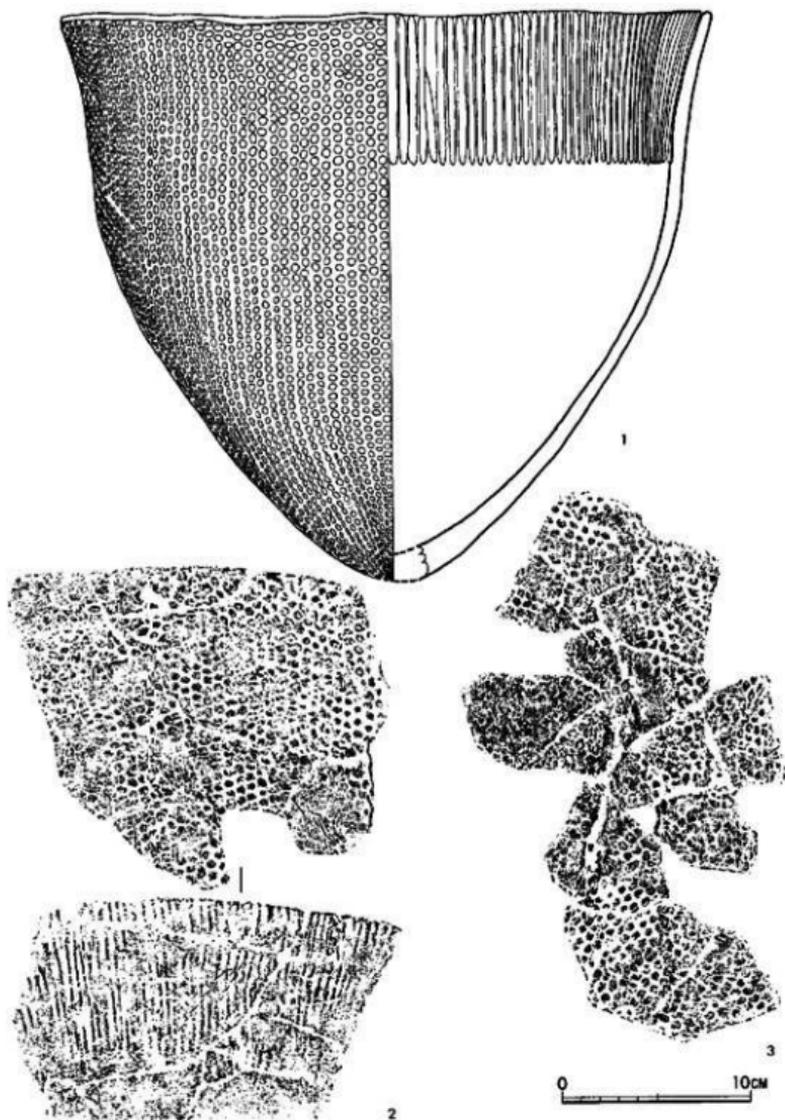
第2凹部前面18m×6mの範囲、すなわちN-25, O-23, 25, 26, P-24, 25, Q-24, 25, S-20, 21, T-20, U-20, 21グリットに分布し、特にN-25, O-25, 26, P-24, Q-24, 25グリットの6m×3mの範囲に集中がみられる。

土器は大型の尖底深鉢形土器で、約1/2が現存する。砲弾形をなし、口縁部がわずかに外反す

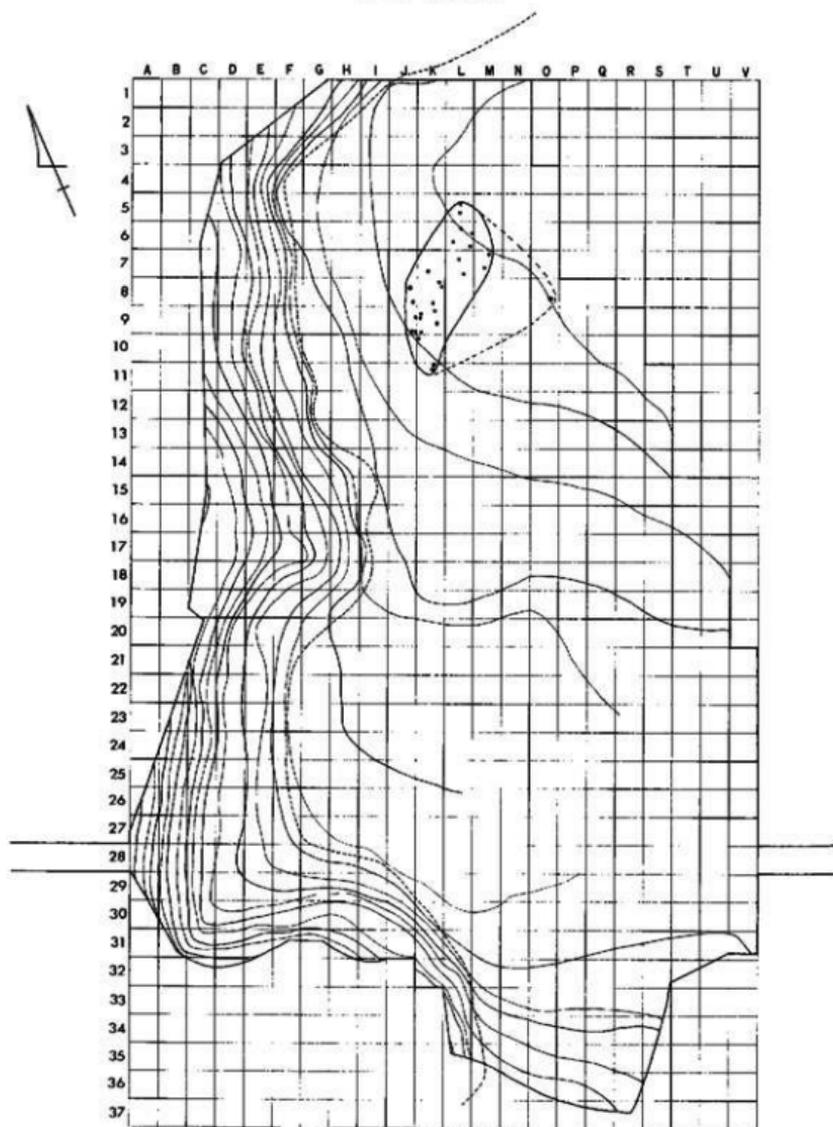


第84図 押型文七器ⅫⅢの出土分布図

5. 皿層の遺構と遺物

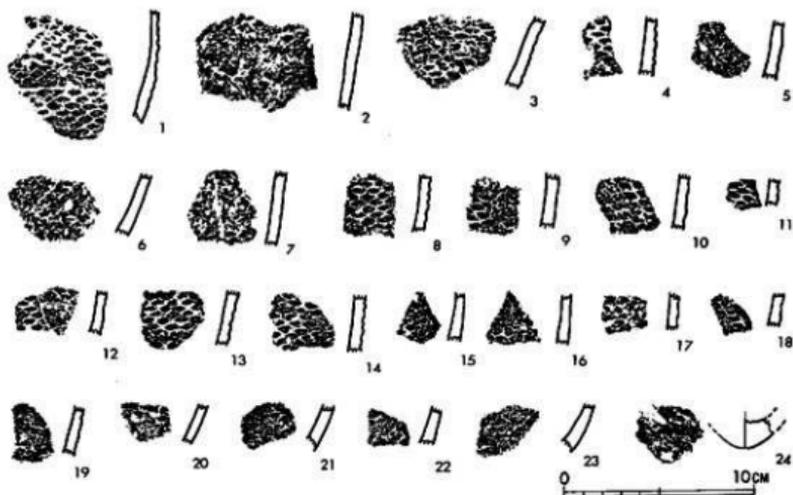


第85図 押型文土器 XIII 実測図



第86図 埴型文土器 KIN の出土分布図

5. II層の遺構と遺物



第87図 押型文土器 XIV 実測図

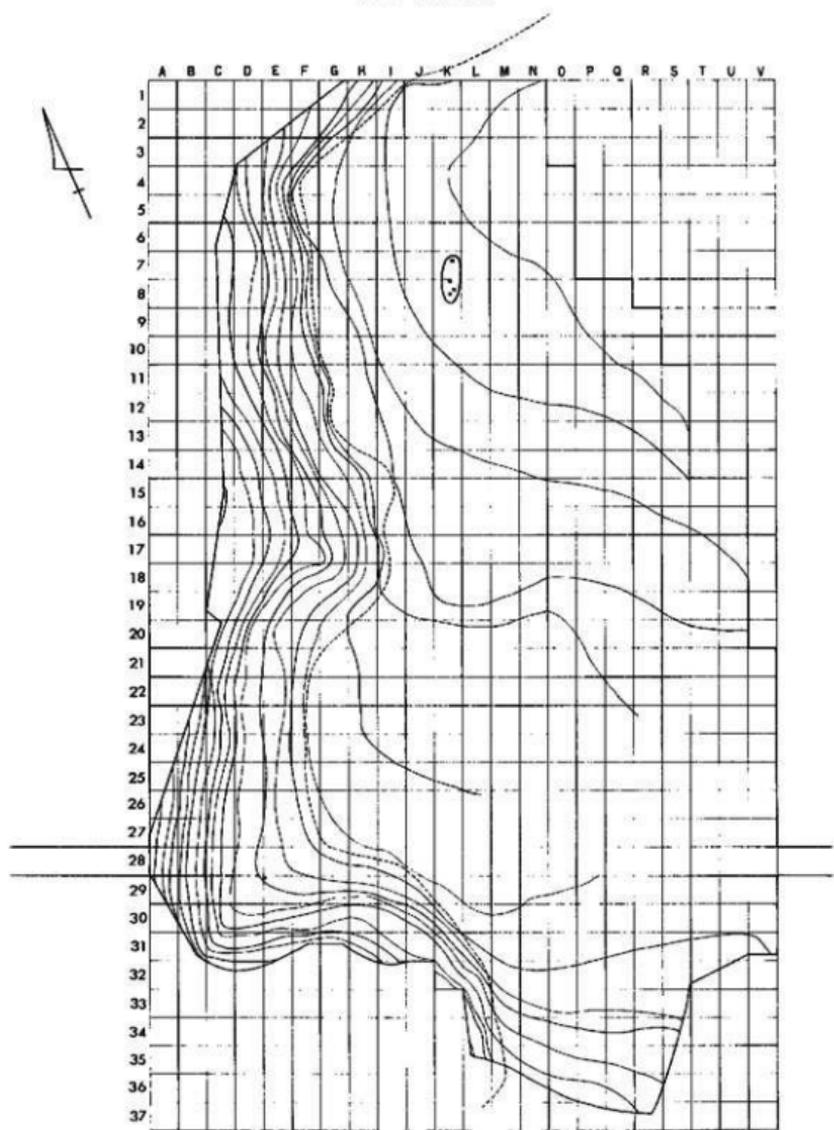
る。復原口径34.4cm、推定器高30cm。胎土には石英・長石の砂粒を含むが良質で、焼成は良い。色調は黒褐色～赤褐色をなす。器壁は大型品のわりには薄く0.6cm前後で、底部がやや厚くなる。口縁部にススの付着が著しい。外面全面に楕円文を横走施文し、口縁部内面には同一原体による長い沈線(条痕、9cm前後)を施している。

施文原体は、文様の反復が3単位ごと1.8cm前後で認められ、それより割り出した原体直径は0.57cmである。原体長について正確につかめる部分はないが、重複のない部分の最大長は3.5cmであり、少なくとも原体長は3.5cm以上が考えられる。よって、この土器の施文原体は直径0.57cm、長3.5cm以上、6条以上、3単位のものとして推定できる。

⑭押型文土器 XIV (第86、87図)

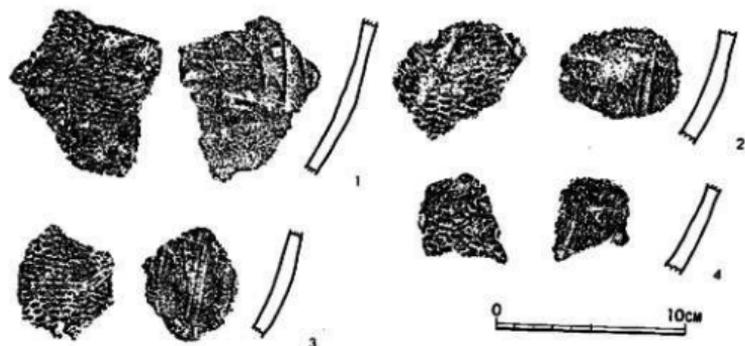
第1凹部中央部前面、12m×11mの範囲、J-8～10、K-7～11、L-5～7、M-7、O-8グリットに分布し、O-8グリットの1点のみがややはなれて分布する。

同一個体と考える土器は27点あるが、底部および胴部の小破片で口縁部片はない。器形の復原は困難であるが、大型の尖底鉢形土器になると考えられる。1～20は胴部破片、21～23は底部付近の破片、24は底部である。外面は全面に楕円文を横走施文するものである。器壁の厚さは0.6cm前後でさきわめて薄い。胎土には石英・長石・雲母の砂粒を含むが良質である。焼成は良いが、保存状態が悪いためもろくなっている。色調は外面が赤褐色、内面が黒褐色をなす。



第88図 押型文土器 IV の出土分布図

5. II層の遺構と遺物



第89図 押型文土器 XV 実測図

押型文土器XIIIときわめて類似する。

施文原体は、文様の反復が2単位ごと2cm前後で認められる。それより割り出した原体直径は0.64cmである。原体長については正確に抽出できないが、重複のない部分の最大長が4.5cmであり、少くとも4.5cm以上と考えられる。よって、この土器に使用された施文原体は直径0.64cm、長4.5cm以上、13条以上、2単位のもとと推定できる。

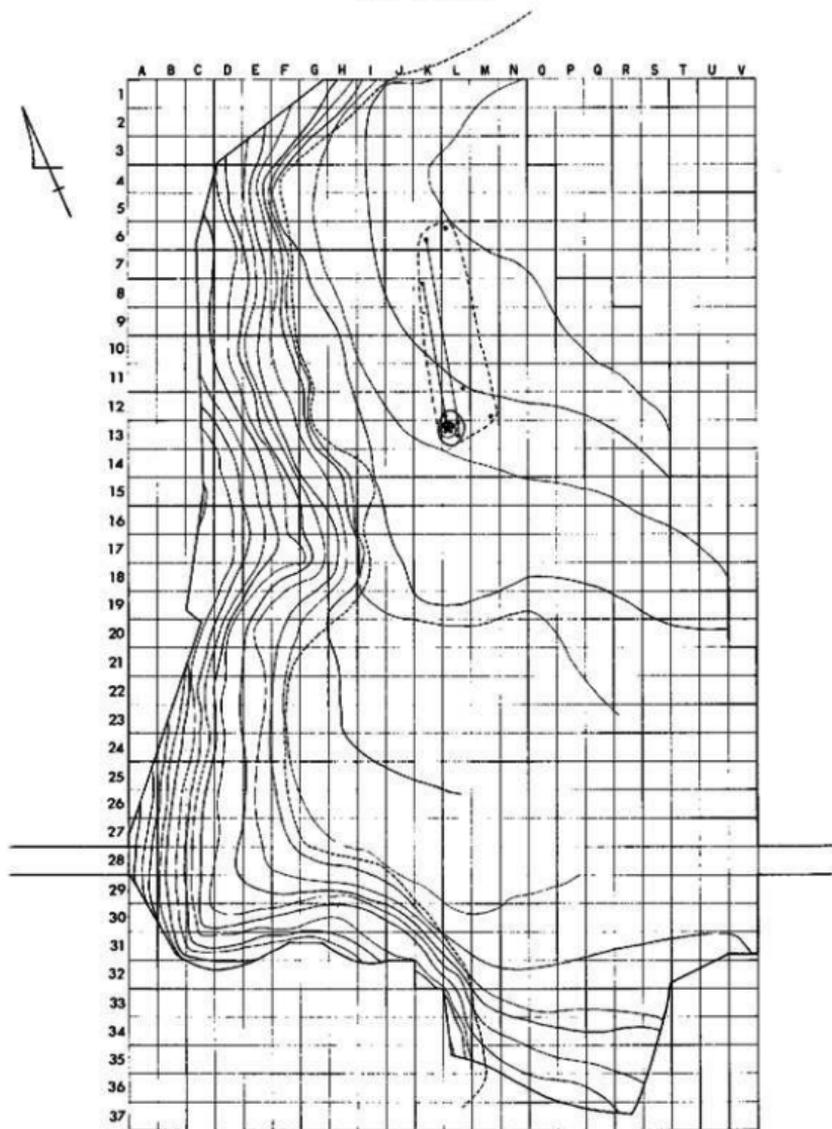
⑬押型文土器XV (第88, 89図)

第1凹部中央部前面、K-7, 8グリットに分布する。同一個体と考える破片4点がある。いずれも胴部から底部にかけての破片で器形を知ることができないが、大型の尖底深鉢形をなすものと考えられる。外面には全面に楕円文を横走施文し、内面はヘラ状工具で縦方向に粗い研磨を加えて調整する。外面に一部ススの付着が認められる。内面の一部には焦げ付きがある。器壁は1cm前後でやや厚手である。胎土には石英・長石の砂粒を含むが良質で、焼成は良い。色調は外面が赤褐色～黒褐色をなす。

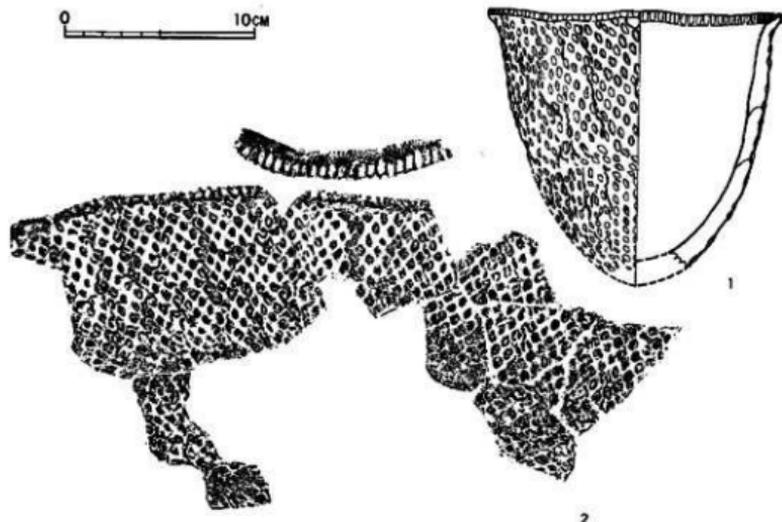
外面の押型文は浅く不鮮明である。施文原体は文様の反復が2単位ごと1.5cm前後で認められ、それより割り出した直径は0.48cm、原体長は正確に抽出できないが、文様の重複がみられない最大長が2.8cmであるので、少くとも2.8cm以上と考えられる。よって、この土器に使用された施文原体は直径0.48cm、長2.8cm以上、8条以上、2単位のもとと推定できる。

⑭押型文土器XVI (第90, 91図)

第1凹部前面の16m×4mの範囲、すなわち、K-6, 8, L-6, 11-13, M-12グリットに分布する。特にL-13グリット、第4号炉址に伴出して集中がある。接合関係は炉を中心として存在し、最も離れて接合するのはL-13グリットとK-6グリットの接合で約14m離れ



第90図 押型文土器 VI の出土分布図

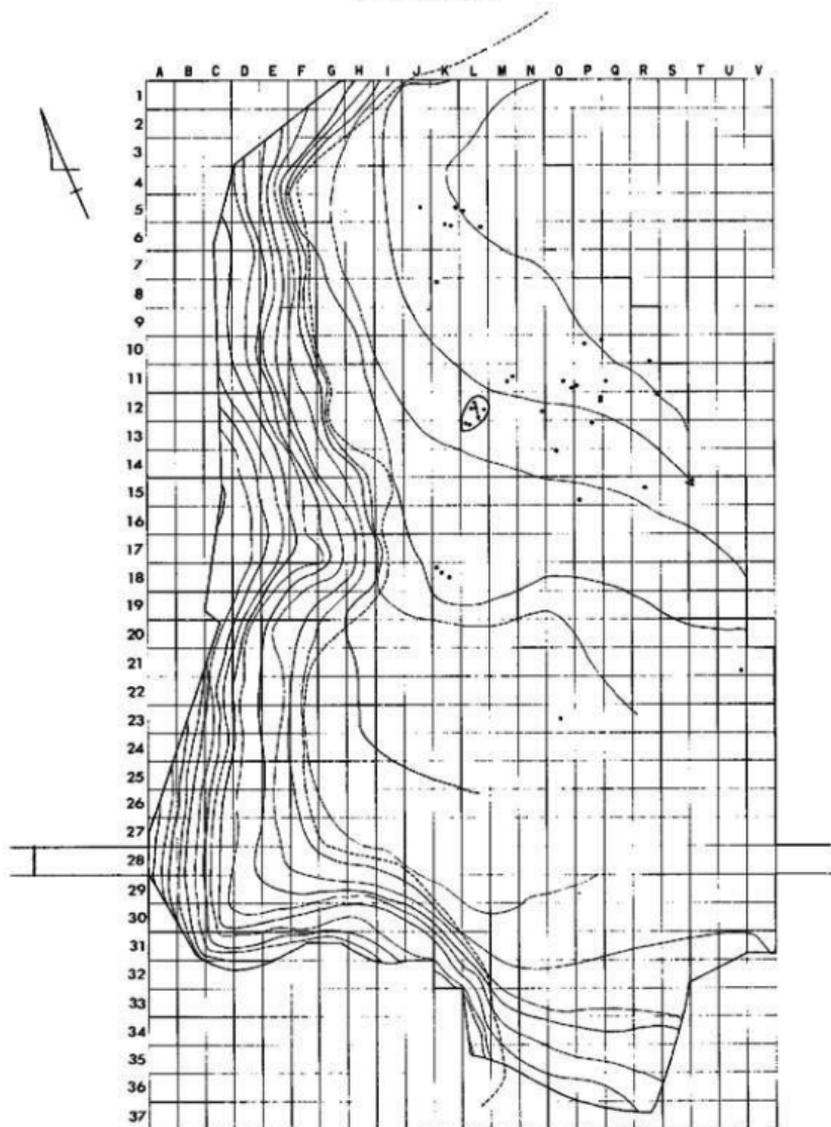


第91図 押型文土器ⅡⅦ実測図

ている。

土器は楕円押型文土器で、約半が現存し、ほぼ器形を知ることができるが、底部を欠失している。器形は91図1に示すような砲弾形をした小型の深鉢形土器である。口縁部は外反する。底部はあまり尖らず丸底に近いものになると思われる。口径15.3cm、推定器高14.5cm、ややひずみがある。胎土は石英・長石・雲母の砂粒を含むが良質である。焼成は良い。色調は外面が黒褐色～黄褐色、内面が黒褐色をなす。粘土帯の接合部が口縁下4.7cmのところと8.4cmのところに二段にわたって残っており段状のひずみをもっている。器壁の厚さは0.6cm～1.3cmで底部にむかって厚くなる。外面全面に楕円文を縦走施文し、口縁部内面には同-原体による短い沈線（条痕）を施し、口唇部には原体を押押し刻み目を入れる。内面はへら状（棒状）の工具によって縦位にナデ研磨を行っている。

この上器の施文原体を復原すると、先ず直径は、文様の反復が各所に存在し、容易に計測が可能である。文様の反復は2単位2.1cm前後で、これより割り出した原体の直径は0.67cmである。原体長は、口縁部付近にみえる文様重複部が原体端部間の重複とみることができ、また重複している間隔が1.7cmと一定しており、原体長は1.7cmとすることができる。よって、この土器に使用される施文原体は直径0.67cm、長さ1.7cm、3条2単位のものとして推定できる。



第92図 木葉文土器の出土分布図

5. II層の遺構と遺物



第93図 木葉文土器実測図

施文方法は、施文重複部等の関係より推測が可能である。先ず、上器の椀形後土器を倒立させて、底部を中心に一段目（底部より幅2.5cm）を右まわりに縦走施文し、順次二段目、三段目と同一作業をくりかえしている。施文の段は横方向にはほぼ一定している。底部から口縁部まで5段が存在する。それぞれの間隔幅は底部より2.5cm、2cm、3cm、4.5cm前後で曲線部より直線部分で施文の長さが長くなる傾向が察知できる。また口縁部に近い部分では、施文重複部と粘土接合部がほぼ一致している。外面施文後、土器を正位にもどし、内面の原体条痕、および口唇部の押圧をくりかえしていると考えられる。

⑰木葉文土器（第92、93図）

第1凹部南半部前面にある第4号炉址内に底部に木葉の圧痕のついた土器が出土しているが、これと同一個体と考える胴部破片は広く第1凹部の前面に散在している。出土グリットをあげるとJ-5、K-5、6、8、10、L-6、12、13、M-11、N-12、O-11、14、23、P-10~13、Q-11、R-10、12、15、T-15、U-21グリットである。集中、接合するのはL-12、13グリット第4号が址周辺であり明らかに押型文土器XVIと共伴関係にある。

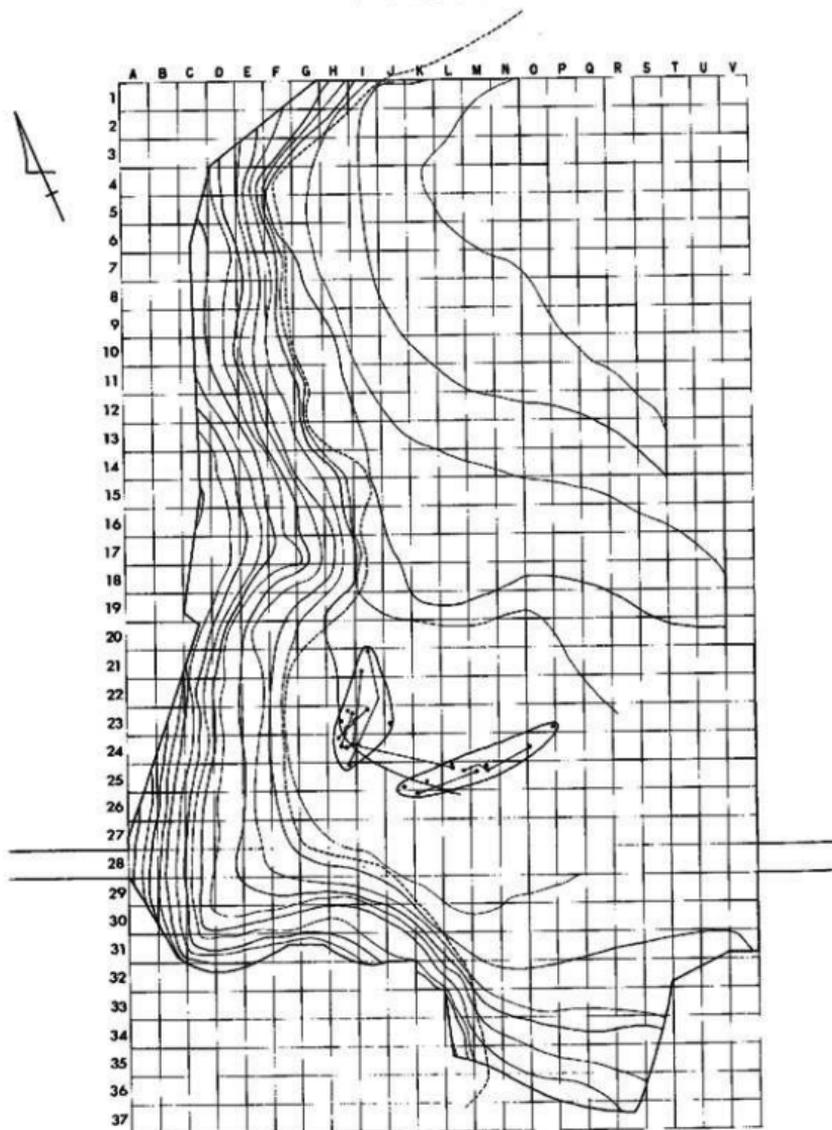
土器は同一個体と考える破片38点がある。いずれも胴部、底部破片でその全形を知ることはできないが、小型の深鉢形になるものと思われる。底部は丸底をなし、底部および底部近くに木葉の圧痕がある。この圧痕はこの土器製作時に下に敷いたものであろう。器壁は凹凸が著しく、厚さは一定しない。底部が最も薄く0.7cm、胴部は1.2cmで厚手の土器である。胎土には多量の石英・長石の砂粒を混入していて良質でない。焼成は良い。色調は外面が黒褐色、内面が赤褐色をなす。

⑱無文土器I（第94、95図）

第1凹部中央部およびその前面15m×10mの範囲、すなわち、H-23~25、I-21、23、J-23、25、K-25、26、L-25、M-25、O-23、24グリットに分布する。H-23~25、I-23、25、J-23とJ-26、L-25、M-25、O-23、24の二つの集中区に分かれるが、接合は両グループにわたっている。接合で最も離れているのは8mである。

同一個体と考える土器破片は23点あり、接合関係が良くほぼ1/2が現存する。底部付近の破片

第4章 調査の記録

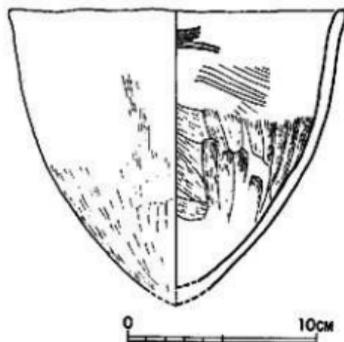


第94図 無文土器 I の出土分布図

5. II層の遺構と遺物

が多く、土器上半部の土器片はわずかであるが、ほぼ全形を知ることができる。小型の無文尖底深鉢形土器である。器形は尖底から外方へひろがり、胴上半部がやや内側に屈曲し立ちあがり、口縁部がやや外反する。口縁端部は丸くおさめる。復原口径17.8cm、推定器高15.6cmをはかる。

外面上半部は無文であるが、指による調整のため凹凸がある。下半部はへら状の工具を使用して、底部より口縁部に向けてへら削り状の調整が丁寧に施される。内面も外面同様に胴下半部から底部にかけて内底部から上方に向けてへら状工具によるへら削り状の調整が左まわりに施されているのが観察できる。胴上半部から口縁にかけて横方向の刷毛目状の条線を施し調整している。



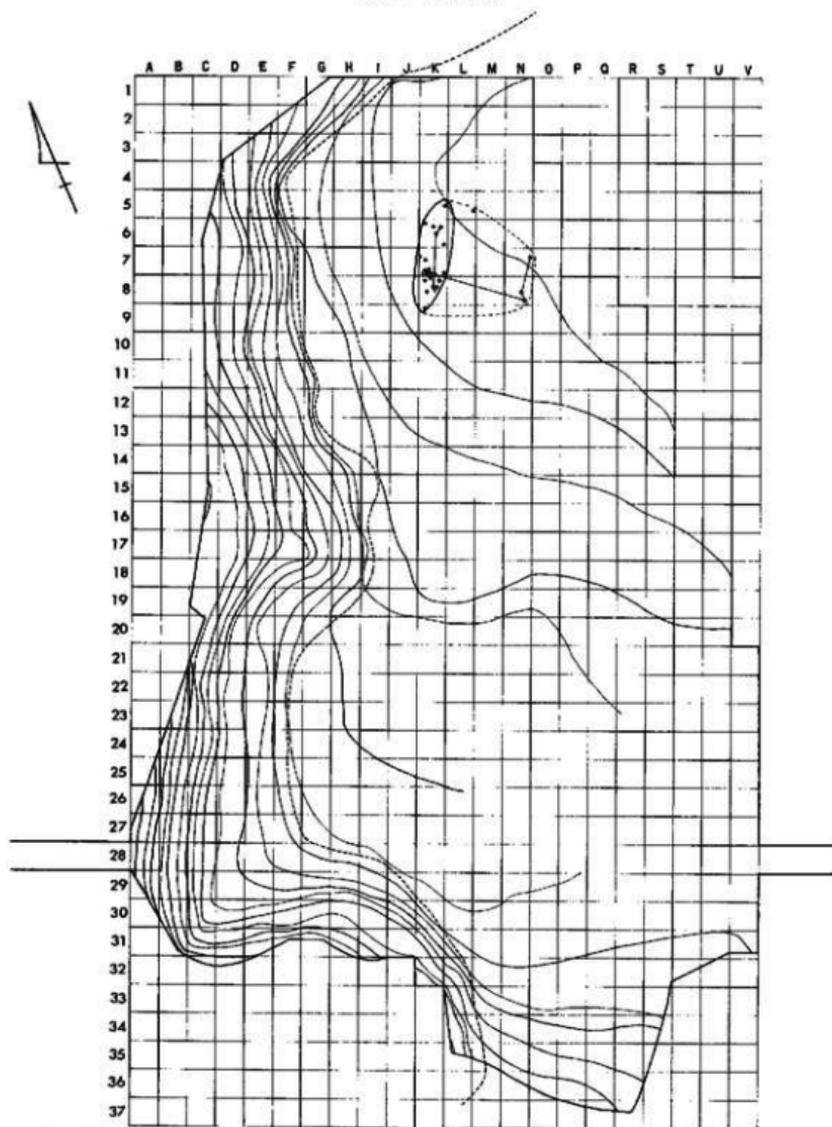
第95図 無文土器Ⅰ実測図

器壁の厚さは0.5cm前後で比較的薄い。胎土には石英・長石の砂粒を混入しているが良質で、焼成は堅緻、色調は外面が黄褐色～赤褐色、内面が赤褐色をなす。外面の底部付近にススの付着が認められる。

⑬無文土器Ⅱ（第96、97図）

第1凹部中央部前面、8m×7mの範囲、すなわち、K-5～9、I-5、N-7、8グリットに分布する。第1凹部に近いK-5～9グリットの7m×2mの範囲に集中し、他は拉散したものである。接合関係は集中区内および拉散土器との間に存在し、最も離れて接合するのは約7m離れている。

同一個体と考える土器の破片は総数24点である。約4点が現存し、底部は欠失するがほぼ全形を知ることができる。中型の尖底深鉢形土器で、器形は尖底から大きく広がり、胴下半で立ちあがり急になり直口するもので、内側に傾斜をもたせ丸くおさめる。復原口径21.3cm、推定器高18.1cmをはかる。外面は丁寧にナデ調整する。胴下半部は二次加熱を受けて変色している。口縁部付近にススの付着が認められる。内面は上半部が外面同様に丁寧にナデによって調整されるが、下半部はへら状の工具で斜方向にかきあげたへら削り状の調整が認められる。内面は焦げ付きの炭化物が著しく付着している。器壁は比較的厚く0.7cm～0.9cmで、底部に向けてやや厚さを増す。胎土には石英・長石の砂粒、花崗岩の小石を混入している。焼成は堅緻、色調は胴上半が灰褐色で下半が変色し黄褐色をなし、内面が灰褐色をなす。



第96図 無文土器IIの出土分布図

5. II層の遺構と遺物

②無文土器Ⅲ (第98, 99図)

第1凹部中央部前面, 17m×4mの範囲, すなわち, K-7, 8, 14, L-6, 7グリットに分布する。K-14グリットの1点のみが飛び離れているが, これは自然の現象とは逆で, その拡散が高い部分にあることは人為的要素の介入がうかがえる。接合関係は良好で, 最も離れているのはK-14グリットとL-7グリットの接合で約14.5m離れている。

同一個体と考える土器片は総数22点あり, 接合関係が比較的良好であるために底部を除いてほぼその全形を知ることができる。ほぼ $\frac{1}{2}$ が現存する。器形は底部

がないが, やや尖った尖底になるものと考えられ, 底部からひらき気味にたちあがり, 胴中位でゆるやかに屈曲し, 口縁部は内弯する。やや膨ぶくれの土器である。復元口径22.1cm, 推定器高25.7cm, 胴部最大径24cmをはかる大型の尖底深鉢形土器である。

器面調整は, 外面がヘラによるナデを施し, 器面には細い条線状の横～斜方向の擦過痕を施し, その上にヘラ状(棒状のものか)工具で粗い横方向の研磨を加えている。内面は胴下半にヘラ状工具によるヘラ削り状の調整が一部に観察できる以外は, 全面が横～斜方向の条痕を施し, その上をヘラでなでている。口縁部は指によるつまみが観察できる。

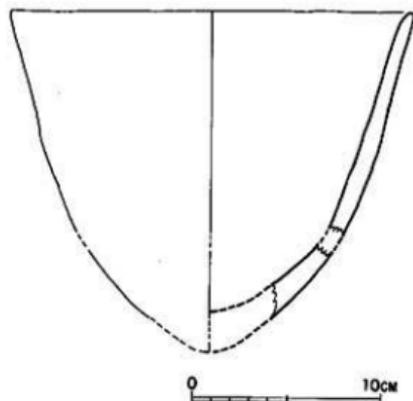
外面の胴上半部～口縁部にかけてススの付着が著しく, 胴下半部は二次加熱のために変色する。

器壁は凹凸が激しく, 厚さは0.6cm～1cm前後である。口縁部下1cmと4cm, 7.5cmに粘土接合痕が明瞭に残っていて, 一番上は外傾, 2, 3は下方が凸状になった接合である。胎土には石英, 長石, 雲母の砂粒を含むが良質で, 焼成は良好。色調は外面が黒褐色～黄褐色, 内面が黄褐色～赤褐色をなす。

③無文土器Ⅳ (第100, 101図)

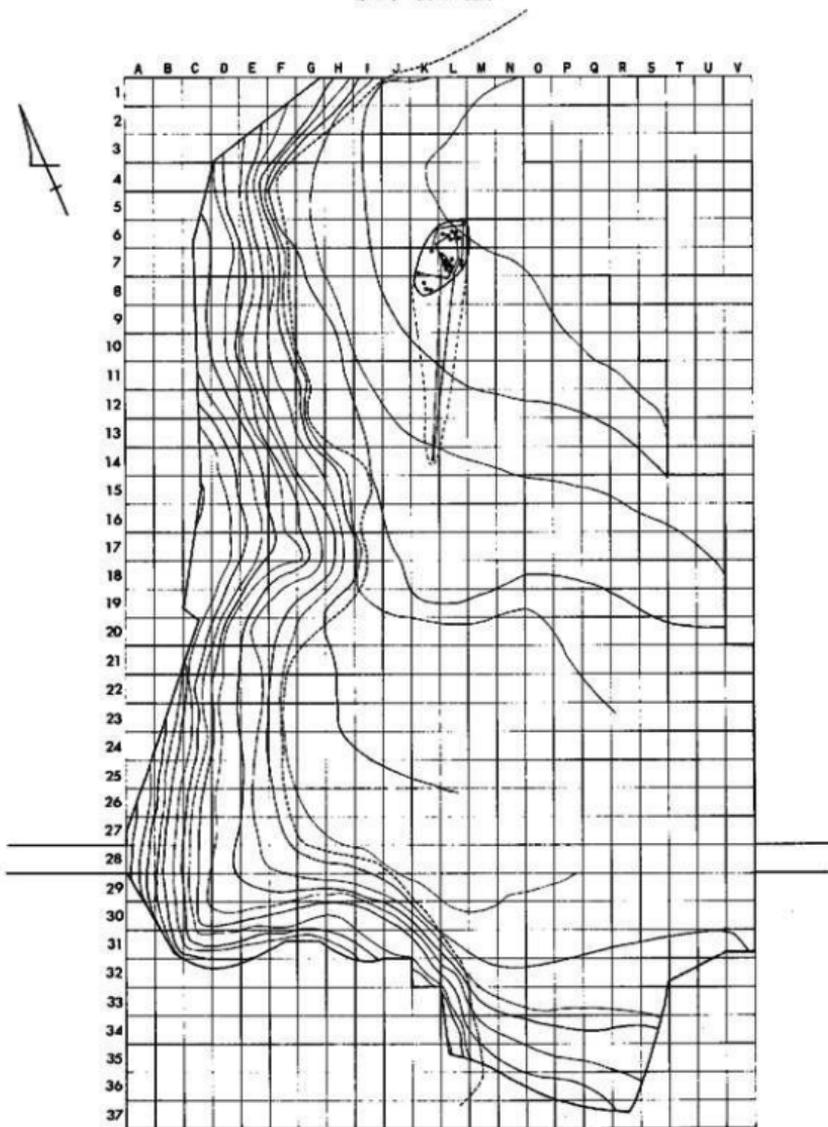
第1凹部と第2凹部の境, 岩盤の突出した部分の前面の15m×4mの範囲, すなわち, H-21, J-14, 20, K-18, L-14グリットに散発的に分布する。すべてが接合関係にある。最も離れて接合するのはH-21グリットとL-14グリットで約14m離れている。

同一個体と考える土器片は6点で, 接合により $\frac{1}{2}$ が現存し, 底部を欠失するがほぼ全形を知



第97図 無文土器Ⅱ実測図

第4章 調査の記録



第98図 無文土器Ⅲの出土分布図

5. II層の遺構と遺物

知ることができる。器形は尖底の底部からやや内湾ぎみに立ちあがる小型の鉢形（浅鉢）土器である。口縁部は丸くおさめる。復原口径16.4cm、推定器高10.5cmである。器壁は厚く1.1cm前後である。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒、花崗岩の小石を混入する。焼成は良好で、色調は外面が灰褐色、内面が灰赤褐色をなす。内外面共に指による調整痕が著しく、器面に凹凸が残る。

㊸無文土器Ⅴ（第102, 103図）

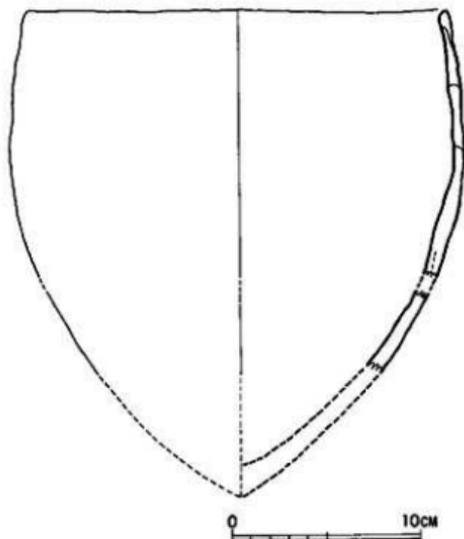
第1四部中央部前面の段丘端に近い7m×6mの範囲、すなわち、L-4, 5, M-4~7, N-4~7グリットに分布する。拡散はみられず、比較的集中している。

同一個体と考える土器片は38点であるが、いずれの破片も胴部破片で、器形が明らかになる破片はない。かろうじて接合によってその輪郭がつかめるのは図示した底部付近の破片であり、これからすれば人型の尖底深鉢形になることがわかる。器形は鋭く尖った尖底をなすと考えられる底部から外方にひろがらずに立ちあがる土器で、口縁は直口するものと思われる。器面調整は外面が縦方向の条痕を施した後に粗いヘラナデで条痕を消している。内面はナデののちヘラ状（棒状）工具で粗いナデを不定方向に施す。器壁は厚く0.8cm~1.2cmで、底部に向って厚くなる。胎土には石英・長石の砂粒、および花崗岩の小石を混入しているが良質で、焼成は良く、色調は内外面共に赤褐色をなす。

㊸無文土器Ⅵ（第104図, 105図）

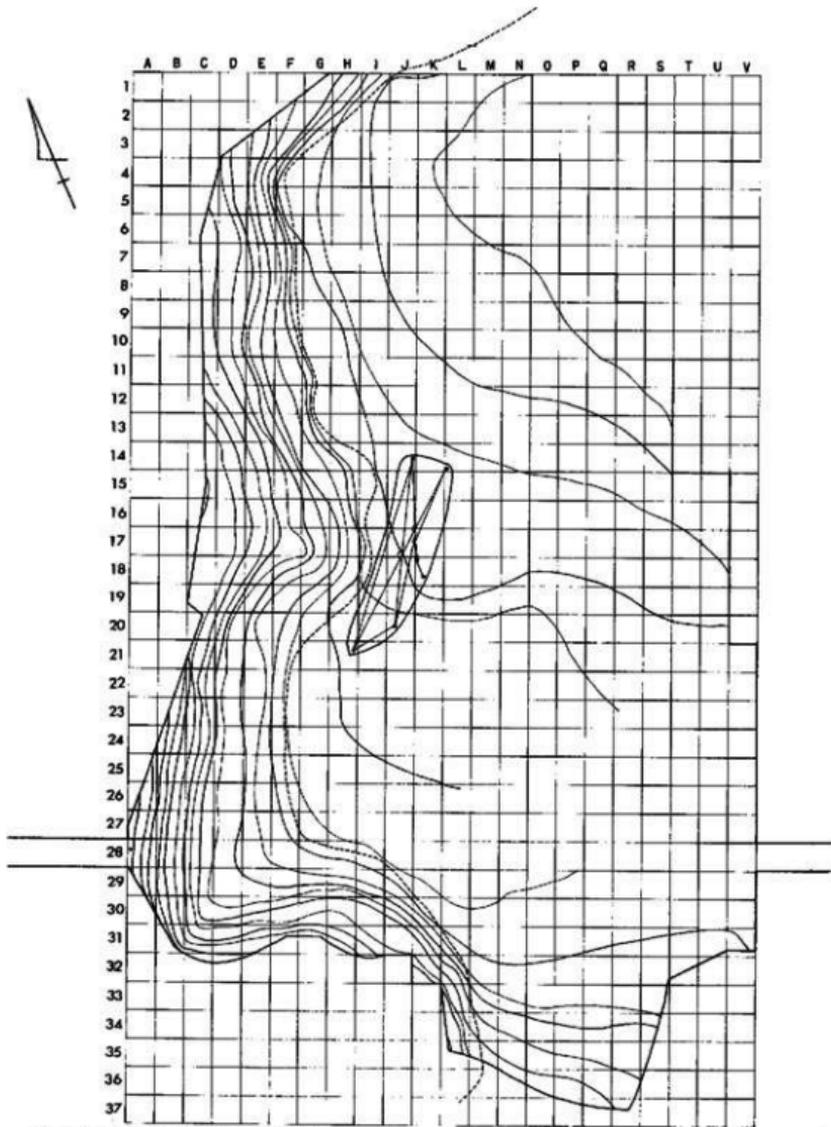
無文土器の口縁部および底部破片で9個体がある。

1は第2四部中央部のG-24, H-22, I-20グリットの8m×2mの範囲に分布する土器である。4点あり、すべて接合関係にあり、最も離れて接合するのは約8m離れている。小型の深鉢形土器の口縁部である。復原口径16.1cm、口縁は直口し、端部はやや尖り気味に丸くお



第99図 無文土器Ⅲ実測図

第4章 調査の記録



第100図 無文土器Ⅳの出土分布図

5. II層の遺構と遺物

さめる。内外面共にヘラ状工具による斜、横方向のヘラ削り状のナデを施した後、指によるナデを施している。胎土には石英・長石の砂粒を混入し、焼成は良好、色調は外面が黒褐色～褐色、内面が褐色をなす。

2は底部破片である。第2凹部北端部から第1凹部との境の岩盤の突出部前面の5m×3mの範囲、すなわちI-19、20、J-19、20グリットに分布する。

同一個体と考える土器片は4点で、すべて接合関係にある。尖底から外傾しながら直線的にたちあがる土器形で、中型の尖底深鉢形土器である。器壁の厚さは0.6cm前後で、底部はやや厚い。外面は指圧による調整で、器面の凹凸が著しい。内面はヘラ状工具で内底部から胴部に向かってかきあげたヘラ削り状の調整を加えている。胎土には石英・長石の砂粒を混入し、焼成は良好、色調は外面が黒褐色～赤褐色、内面が黒褐色をなす。

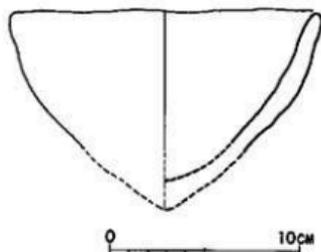
3は第2凹部中央部前面、5m×3mの範囲、すなわちK-22～24、L-22～24グリットに分布する。

同一個体と考える土器片は7点あり、底部破片。この土器はIII層出土土器であるが、図面の関係上ここで説明する。条痕文土器の底部になる可能性が強い。尖底は乳首状に尖出する特徴的な形状を示している。小型の浅鉢形土器の底部である。底部からはややふくらみながらたちあがる。外面にヘラナデが施される。内面は指による調整、器壁は厚さ0.7cm前後で小型品のわりには厚手である。胎土には石英・長石の砂粒を含むが良質で、焼成は堅緻。色調は外面が褐色～黄褐色、内面は赤褐色をなす。

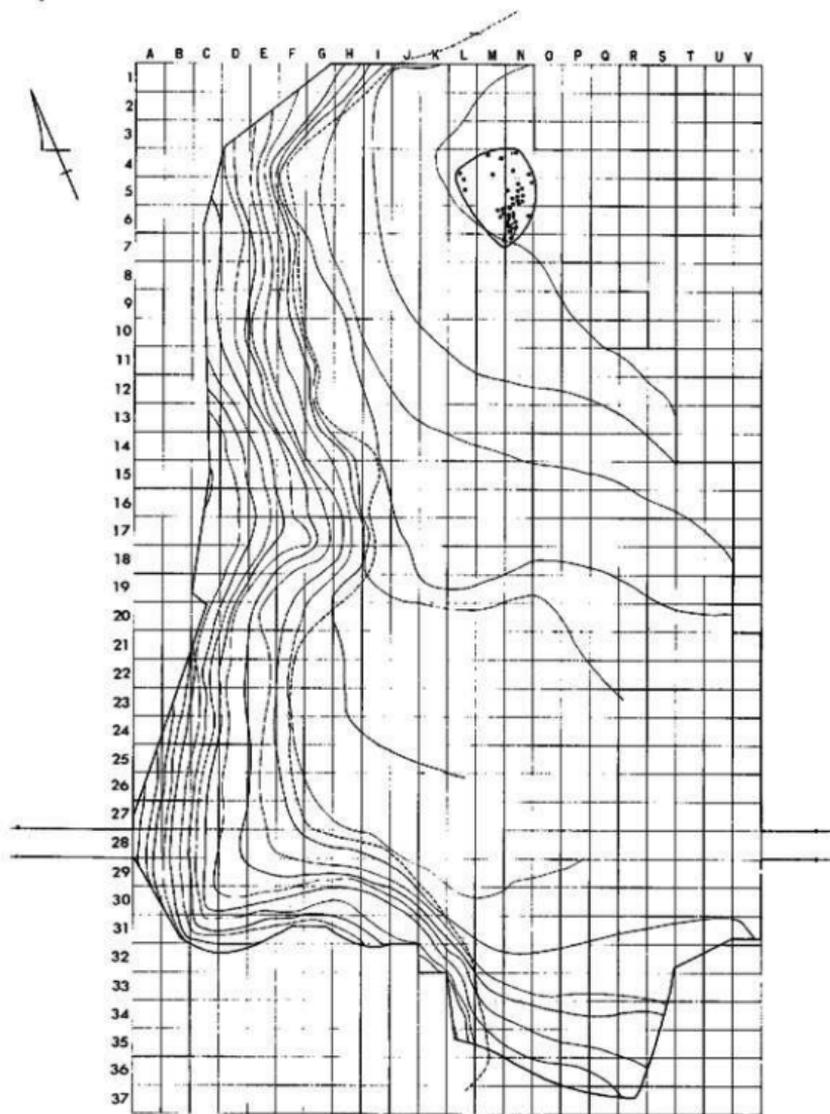
4は第1凹部中央部前面、K-6グリットの出土土器である。

同一個体と考える破片4点があり、すべて接合関係にある。底部から胴部までの器形を知ることができるが、口縁部がないため全形および大きさは決めがたい。尖底から外方にややふくらみながらたちあがり、胴中位付近から直口する器形になるものと思われる。器壁の厚さは0.5cmときわめて薄く、小型の深鉢形土器になるものであろう。内外面共に指による調整を加えていて、器面には凹凸が著しい。胎土には多量の石英・長石・雲母の砂粒および花崗岩の小石を含んでいてあまり良質ではない。焼成は堅緻である。色調は内外面共に黄褐色をなす。

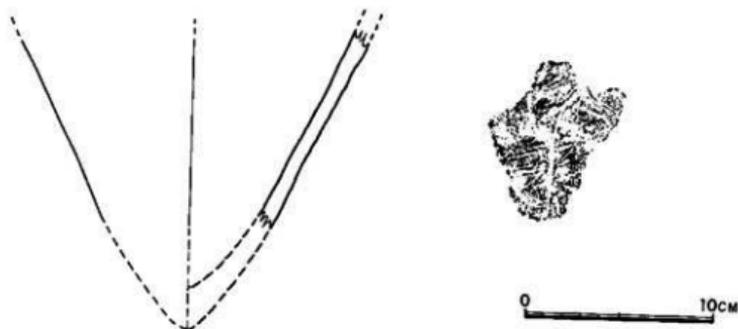
5は第1凹部前面、M-7グリットのII層上部から出土した土器である。小型品で、完形品である。口径4.5cm、器高2.5cmで、底部は尖底で、器壁は厚さ1cmできわめて厚い。全体に指の圧痕が著しく残り、内面は指によるナデがある。口縁端部は丸くおさめる。一見してミニチ



第101図 無文土器IV実測図



第102図 無文土器Vの出土分布図



第103図 無文土器V実測図

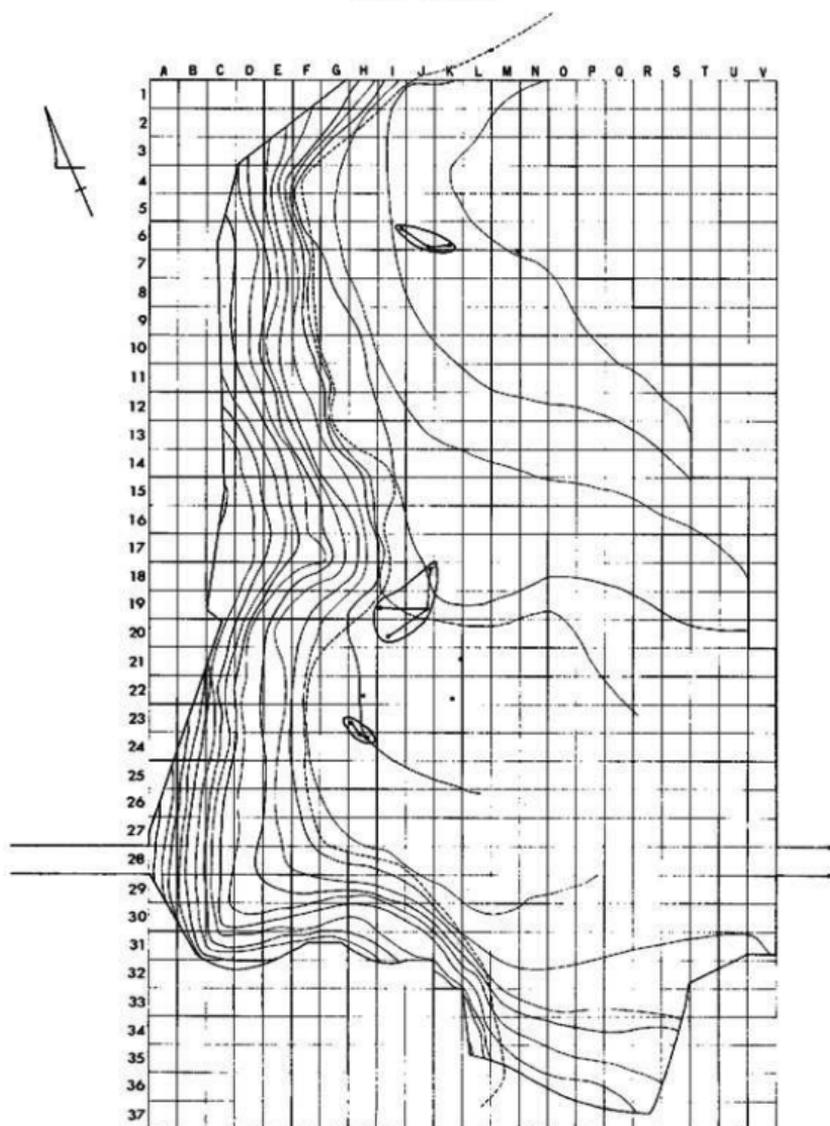
ユア土器かと思われるが、器壁の厚さ、あるいは器面に残る指圧痕等からみて土器制作時における一過程のもの、つまり、底部を形成し、乾燥させて、次の段階に進むはずの物が何らかの手違いにより焼かれ本品になったと考える方が妥当であろう。胎土には多量の石英・長石の砂粒および花崗岩の小石を混入している。焼成は良好で、内外面共に黄褐色をなす。

6は第1凹部前面出土である。尖底の底部である。立ちあがりはやや急である。外面は丁寧にナデが施されている。内面もナデ調整。胎土には多量の花崗岩の小石を混入し、良質でない。焼成は良好である。色調は外面が赤褐色、内面が黒褐色をなす。器壁の厚さは0.9cm前後である。中型の深鉢形土器の底部か。

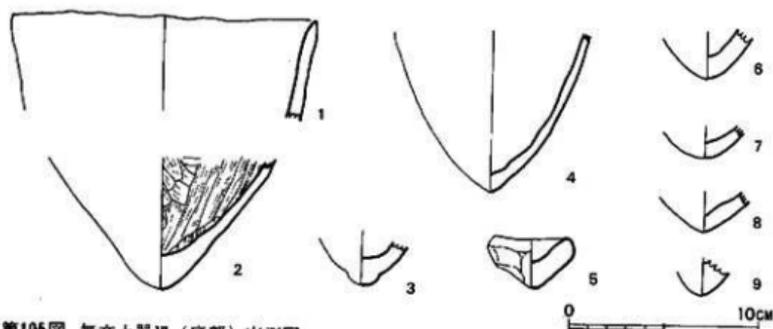
7は第2凹部前面、K-21グリット出土である。6に比較し、立ちあがり鈍く、外にふくらむ。内外面共にナデで調整している。内面には指圧痕が残る。器壁の厚さは0.6cm～0.8cmで部分によって厚さが変わっている。胎土には石英・長石の砂粒を含むが良質である。焼成は良好で、色調は内外面共に黄褐色をなす。

8は第2凹部中央のF-24グリット出土である。底部は尖り、底部からの立ちあがりは強く外反する。外面は丁寧にナデ調整し、内面は指による調整で凹凸が著しい。器壁の厚さは0.6cm前後で比較的薄く、小型の深鉢形土器の底部となろう。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を含むが良質である。焼成は堅緻で、色調は外面が黄褐色、内面が赤褐色をなす。

9は第2凹部中央部、H-22グリット出土で、尖底部のみの破片である。外面は丁寧にナデ調整をしている。胎土には花崗岩の小石を多量に含む。焼成は良好で、色調は黄褐色をなす。



第104図 無文土器VI（底部）の出土分布図



第105図 無文土器VI(底部)実測図

以上、無文土器の底部8点(うち1点はIII層条痕文土器の底部)について説明したが、これらの底部はいずれも使用等による磨耗等の痕跡は認められず、胴部等の器壁面と同じような状態を示している。尖底土器の使用法についての示唆を与えるものであろう。

⑧条痕文土器I(第106, 107図)

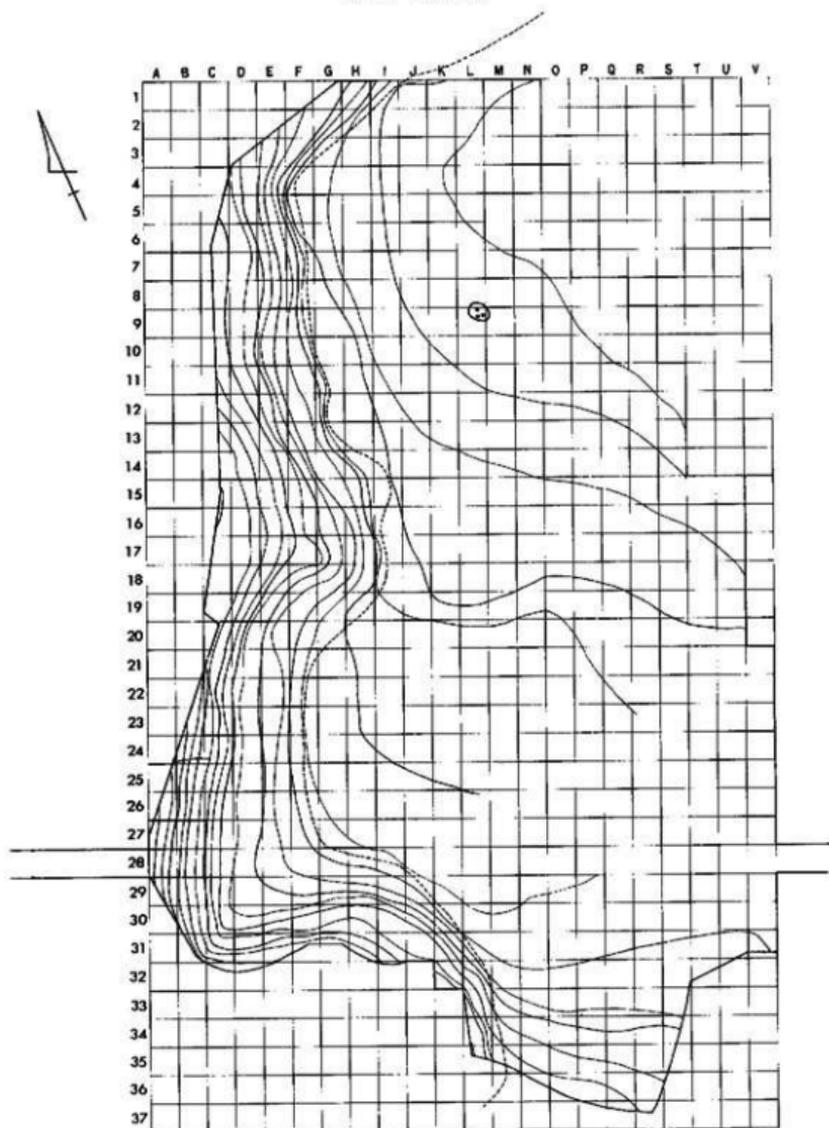
第1凹部前面、L-9グリットに分布する土器である。同一個体と考える破片3点がある。いずれも大型の深鉢形土器の胴部～底部の破片である。

1は胴部破片で外面に横方向の条痕を施すが、上よりナデ消している。内面は丁寧なナデ調整を施す。内面に一部黒斑がある。2も1同様に胴部破片であるが、底部に近い部分である。外面は左→右に斜方向の条線が0.5cm間隔で施されている。内面は丁寧なナデ調整である。3は底部破片である。外面は不定方向からの斜の条痕(条線)で調整している。内面は丁寧なナデ調整。1～3はいずれも胎土に石英・長石の砂粒および花崗岩の小石を含むが良質である。焼成は良好。色調は外面が赤褐色、内面は赤褐色～灰黒色をなす。

⑨条痕文土器II(第108, 109図)

第2凹部北端部および第1凹部と第2凹部の境の岩盤の突出部前面の段丘の縁に近い部分の18m×9mの範囲、すなわち、I-18, 19, 21, M-16, N-17, Q-18-20, R-18-20, S-19, T-20グリットに分布する。Q-18-20, R-18-20, S-19グリットにわたって集中区が認められ、他はその拡散状況とみることができるが、L-17, 19, 21, M-16グリットのようにこの集中区より斜面上位に存在する土器は自然の拡散によるものでなく人為的な要素をもったものであろう。接合関係は集中区内で大部分であるが、1点だけI-19グリットとの接合関係がある。その距離は約11m離れている。

同一個体と考える土器破片は総数42点がある。いずれも胴部破片で、口縁部・底部の破片を



第106図 条痕文土器1の出土分布図

5. II層の遺構と遺物



第107図 条痕文土器I実測図

欠いている。中型の尖底深鉢形の土器の破片である可能性が強い。やや大きい破片について観察し、この土器の特徴をみてみよう。

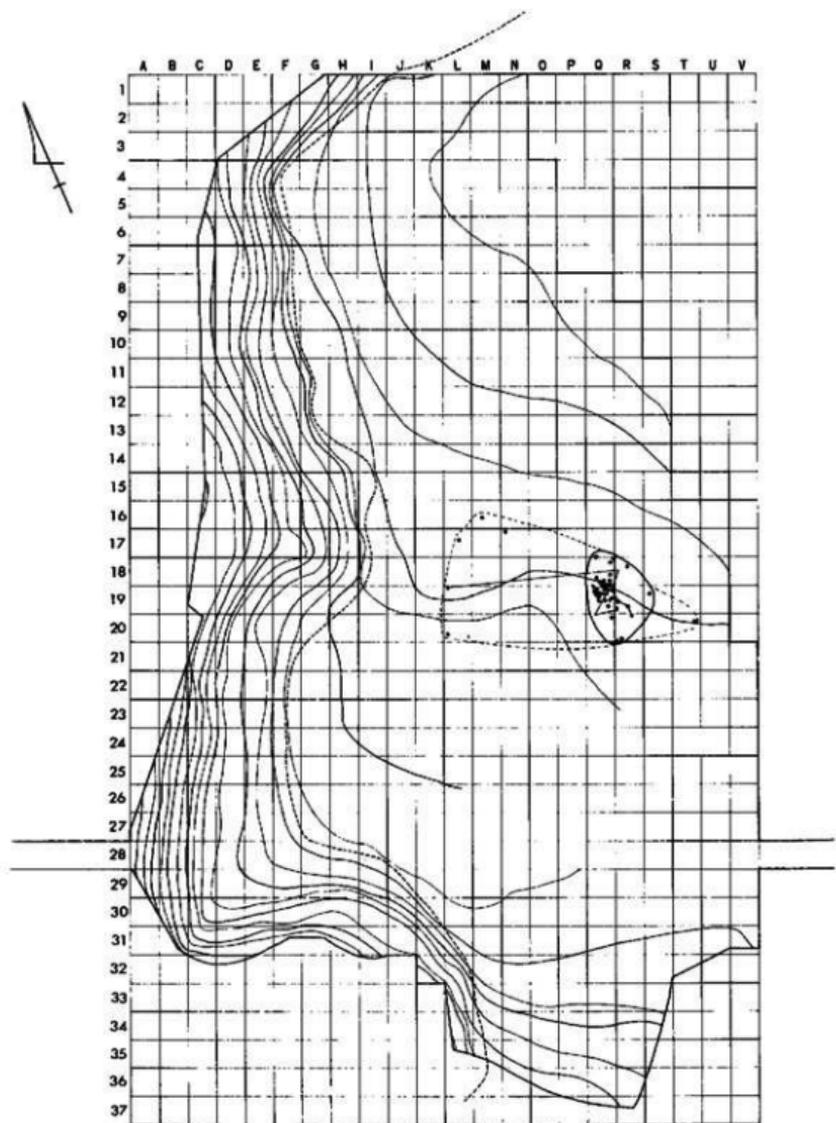
4は口縁部に近い部分の破片である。口縁に近い部分が、ゆるやかに外反している。外面は、下方から左上方へかきあげた条痕が浅く残る。条痕の幅は0.2cm前後である。内面は、同一の原体で条痕を施し調整しているが、その方向は上半部が斜方向、中が横方向、下半部が縦方向と小さい破片の中で一定していない。条痕の施文具の幅については明らかにできない。1は胴部中位付近の破片と考えられるものである。4と同様に内外面に共に条痕を施している。外面は下から左上方にかきあげた条痕で、条痕の始点には前の条痕を施した時の粘土の付着がみられ、一度に条痕を施す単位は2cm前後である。右上方には下から右上方にかきあげた条痕もみられる。内面は上半部が下から左上方、中位が横方向、下半が縦方および横方向とその条痕の方向は不定である。条痕原体の幅は2cmである。5も前二者と同様の調整痕をもっている。外面には下から左上方へかきあげた条痕を施しているが、左側の条痕が右の条痕を切断し、さらに前段階での粘土が横に付着していることから条痕の施し方は右→左へと移動したことがわかる。内面は下から左上方、あるいは縦位の条痕で、条痕の幅は2cm前後と他の破片と一致する。中には粘土接合部の凹みがある。粘土の接合は内傾である。

以上、3点についてみたが、他の破片も同様のものである。器壁は厚さ0.6cm前後で比較的薄い。整形時の指任痕が各所にみえ、器面は凹凸が著しい。器壁の厚さ、あるいは破片からみて口縁が外反した中型の深鉢形土器が想定される。胎土には石英・長石その他の粒子および花崗岩の小石を含んでいるが良質で、焼成は堅緻。色調は外面が黄褐色～赤褐色、内面が黒色をなす。外面にはススの付着がある。

⑧条痕文土器Ⅲ(第110・111図)

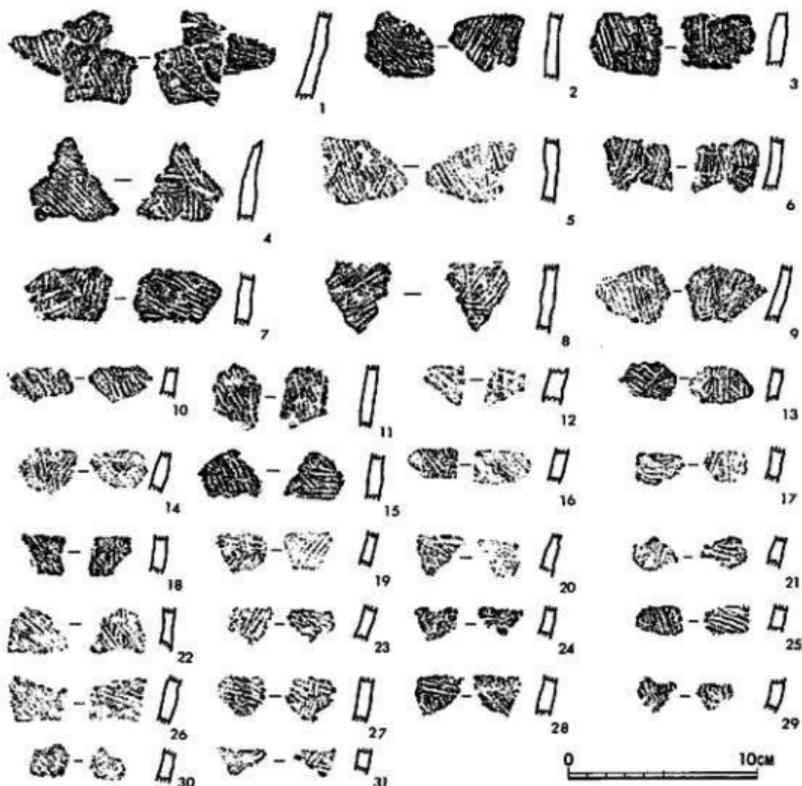
第2凹部前面、段丘の縁の12m×4mの範囲、すなわち、P-19, 20, Q-20, 21, T-20, U-20, 21グリットに分布し、U-20, 21グリットにその集中区が認められる。集中区内での接合が多く、他にT-20グリットとの接合がみられる。接合関係にあるものは近接したものが多し。P-19, 20, Q-20, 21グリットは、この土器集中区からの拡散とみられるが、斜面の

第4章 調査の記録



第108図 朱甕文土器IIの出土分布図

5. II層の遺構と遺物

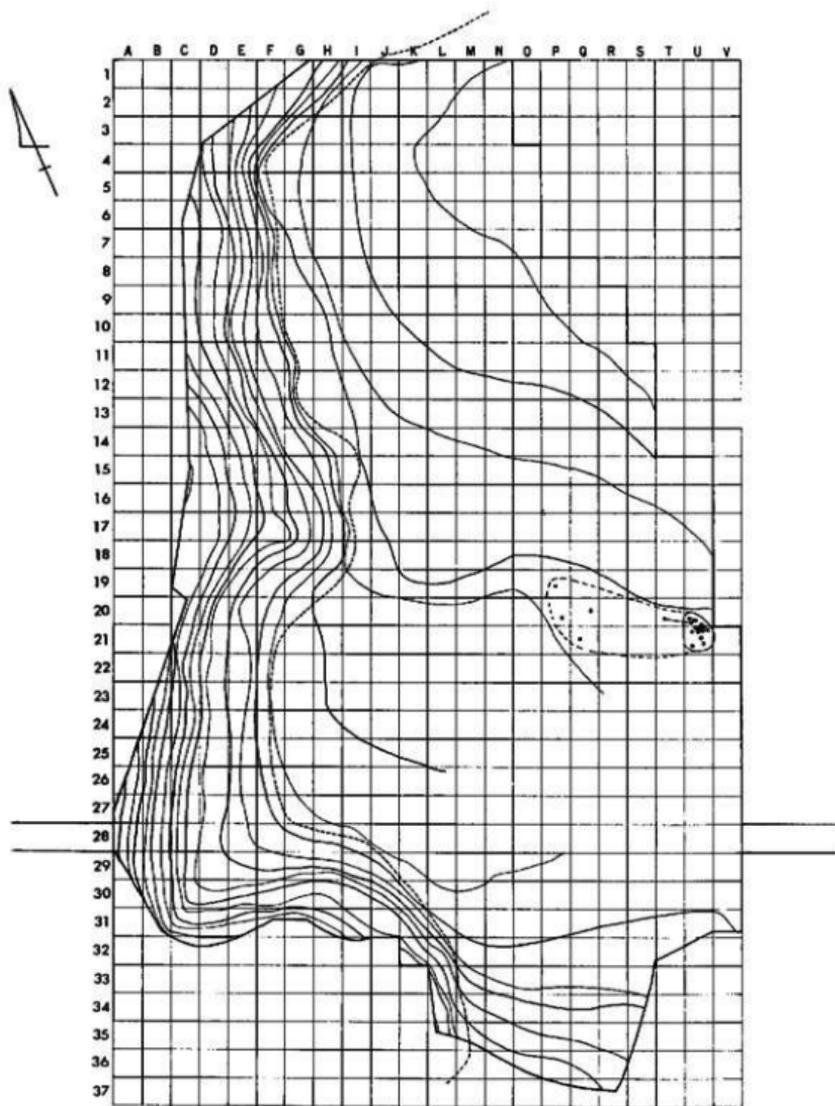


第109図 条痕文土器II実測図

高い部分にあたり、自然的な拡散でなく、人為的にその拡散がなされたものと推測される。

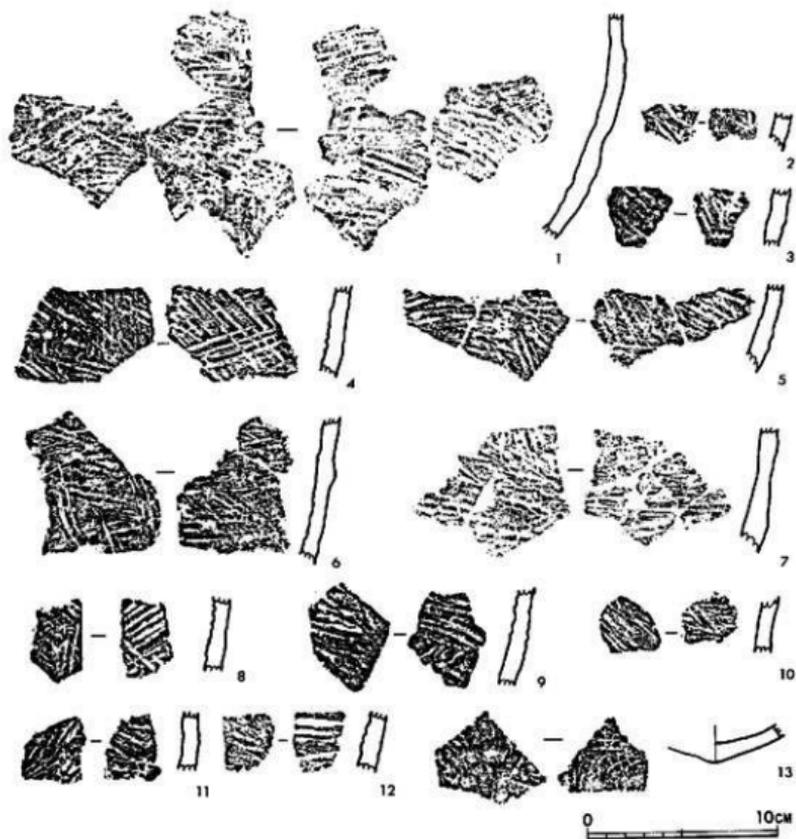
同一個体と考える土器破片は総数19点である。口縁部破片はなく、胴部、底部の破片である。土器破片の状況、器壁の厚さ等からみて、大型の深鉢形土器になるものである。

13は底部の破片で、平たい丸底になるが、底部の中心が尖底状につきでている。これからすれば底部付近がはり出した円筒状の器形をなすと考えられる。外底部は縦方向の条痕を施した後指による押圧で器面を調整しているために凹凸が著しい。内底部は不定方向の条痕で調整するが丁寧におこなわれているため滑らかである。1~12は胴部破片である。外面は縦位ないしは斜位の条痕を粗々しく施し、内面は横方向を基本とする貝殻条痕を深く施し、その上をナ



第110図 条痕文土器Ⅲの出土分布図

5. II層の遺構と遺物



第111図 条痕文土器Ⅲ実測図

デている。外面上半部にはススの付着が認められ、胴下半部は二次加熱のため変色している。内底部には焦げついた炭化物が認められる。器壁は厚さ1cm前後で器面には凹凸が著しい。胎土には石英・長石の砂粒および花崗岩の小石を混入している。焼成は良好。色調は胴上半部と底部が灰褐色、胴下半部が赤褐色、内面は黒色をなす。(山崎)

(5) 石器の出土状況と石器

Ⅲ層では発掘区のほぼ全域にわたって石器、石片が出土している。Ⅱ層には15基の炉址が確認されており、石器の分布も大概この炉に対応する形で把握することが可能である。大きく7つのブロックに分け、北から第1ブロック～第7ブロックと称する(第112図参照)。各々のブロックはその中に小さな密集区を有しており、それが複数に及ぶものもある。全体的に見れば第1ブロック3号炉址南側、第2ブロック北側の6号炉址周辺、第4ブロック、第6ブロック第5号炉址西側付近に顕著な石器、石片の集中区がある。Ⅱ層出土の石器、石片の総数は2129点であり、そのうち石器は299点で全体の約14%を占める。以下各ブロックごとに説明を加える。

第1ブロック

遺跡の最北に位置するブロックで第1～3の3つの炉址を含む。視覚的に第1号炉址南側の採合資料の集中部、ブロックのほぼ中心の石核、JFの集中部、第3号炉址南側の石鏃の集中部に区分けできる可能性もあるが、一線を画することはできない。石器、石片は第1号炉址から第3号炉址にかけての空間に長楕円形状に濃密に分布する。第2号炉址周辺、とくに南東側には大きな空間があるが、この付近は包含層が薄く、Ⅰ層の当該地の集中区の遺物がここに入る可能性もある。

石器は総数95点で、石鏃40点、スクレイパー14点、石匙1点、彫器1点、UF28点、二次加工ある剥片2点、石斧1点、砥石2点、磨石5点の内訳である。石核は11点出土した。

石鏃 (第113図63～85、第114図86～102) 石鏃は全部で40点出土した。うち完形品が12点(30%)、欠損品28点(70%)である。石材別の内訳は、ob-A-1点(2.5%)、ob-B-15点(37.5%)、ob-C-3点(7.5%)、ob-D-2点(5%)、安山岩-19点(47.5%)と安山岩が最も多く、次いでob-Bが多い。完形品の割合は安山岩が最も多く42%であるが、石材の強度より平基もしくは浅い抉りのある三角鏃が多いことなど、形態による安定性であろう。

形態的には、平基の三角鏃(73、76、77、79、87、91、101)、凹で抉りの浅いもの(63～65、68、70、71、75、84、86、90、92、94、98～100)、凹基で抉りが深く脚が細く長いもの(66、69、74、78、80、81、85、89、95、97)、凹基で抉りが内弯し深いもので一般に鋳形鏃と呼ばれるもの(67、82、102)、凹基で抉りが三角形で長い脚が広く張り出す鋳形鏃(85)等のバラエティがある。

復原した大きさでは、1～2cm×1～2cm、とくに1.3～1.5×1.3～2.0cmにそのピークがある。石材別にみると黒曜石製石鏃が平均1.64×1.41cm、安山岩製石鏃が平均2.05×1.45cmで特に長さの面で安山岩のほうが優っている。黒曜石製は長さにして2.3cmを越えずほぼ集約されるのに対し、安山岩製は2つのピークがあり、2cm以下と2.5cm以上の大小二つのグループに分けることができる。

5. II層の遺構と遺物

形態的に特徴的なものは、63、70、92、93、102のように脚部が左右シンメトリーにならず、片脚が短いものがあるが、機能・用途の違いとは考えられない。86は、最も大きな製品で現存長3.78cm、幅1.90cm、厚さ0.48cm、重量3.4gと第1ブロック山土石鏝中では突出している。また整形加工は概して表裏面の全部に施されるが、64、83、86、94、98、100のように剥片素材の周辺に僅かに二次加工を施し整形しているものもある。73と88の石鏝は、欠損品の接合例である。一部分不足して完形へは復原できていない。

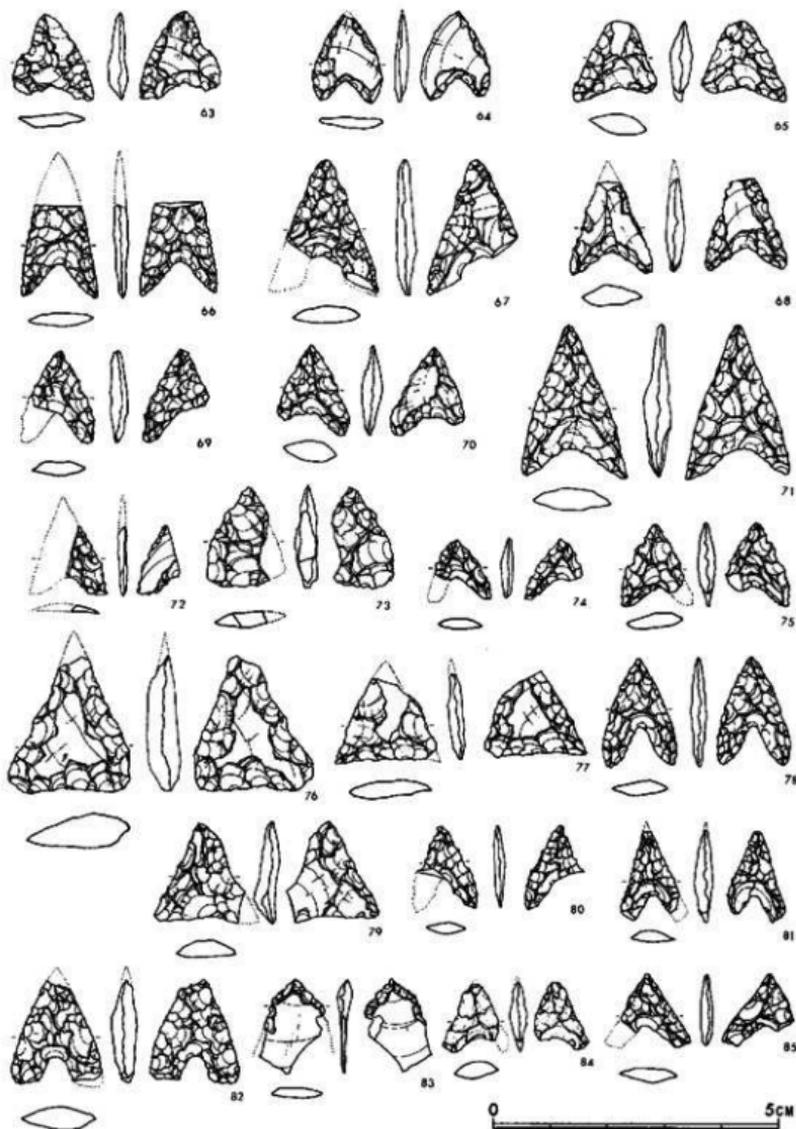
石鏝の破損状況は、欠損品28点の欠損部36箇所のうち先端部18（50%）、脚部18（50%）で、先端部と脚部の割合が同じである。

石匙〔第117図130〕 安山岩製の横長剥片を素材とした石匙で、周辺部を二次加工によって整形しており、剥離が深く及ぶことはない。抉りの加工は両面から施されており、つまみ部分が体の幅に比べて大きいのが特徴である。長さ4.6cm、幅7.0cm、厚さ1.05cmを測る。

スクレイパー〔第114図104、第115図106～108、第117図131～133、第118図134～136〕、全部で14点出土したが、完形品のみ図示した。104はob-Bの拇指状撻器である。剥片の形状は不明であるが、その主要剥離面側の約半分と背面側の各全辺を二次加工している。長さ1.65cm、幅1.90cm、厚さ0.65cm。106はob-B製の剥片を用いた小形スクレイパーで、刃部は主要剥離面側からの二次加工によってほぼ全周に作りだされている。長さ2.45cm、幅2.7cm、厚さ1.15cmを測る。107はob-A製の縦長剥片を用いたもので、その末端を主要剥離面からの剥離によって刃部にしてある。長さ2.2cm、幅1.85cm、厚さ0.70cmを測る。108は安山岩製の縦長剥片の右側辺を表裏両面からの細かいリタッチによって刃部としたスクレイパーである。長さ3.30cm、幅2.50cm、厚さ0.60cmを測る。131は安山岩製の縦長剥片を利用したもので、特に主要剥離面を中心に二次加工を施している。裏面右側辺部に細かい整形加工がある。長さ7.25cm、幅3.60cm、厚さ1.45cmを測る。132は安山岩製の幅広剥片を用いて、その端部を表裏面から加工を施し刃部を作出したものである。長さ3.35cm、幅3.60cm、厚さ1.05cmを測る。133は安山岩製の横長剥片を用いたもので、頭部に粗い加工痕を留めている。刃部は剥片の端部に主要剥離面側から細かいリタッチによって形成されており、やや内弯気味である。長さ4.30cm、幅7.65cm、厚さ1.35cmを測る。134は安山岩製の縦長剥片を使用した小形のスクレイパーで、刃部は両側に作出されている。長さ3.90cm、幅3.05cm、厚さ0.95cmを測る。135は安山岩製の縦長剥片を素材とした錯交剥離の刃部をもつスクレイパーである。左側の刃部と末端部の刃部は、主要剥離面側から、右側の刃部は背面側から剥離を施している。長さ7.0cm、幅4.35cm、厚さ0.55cmを測る。136は安山岩製の大型の横長剥片製のスクレイパーで、刃部は略全周に作出されている。背面には素材剥片の自然面を大きく残したままである。長さ9.8cm、幅7.25cm、厚さ2.30cmを測る。

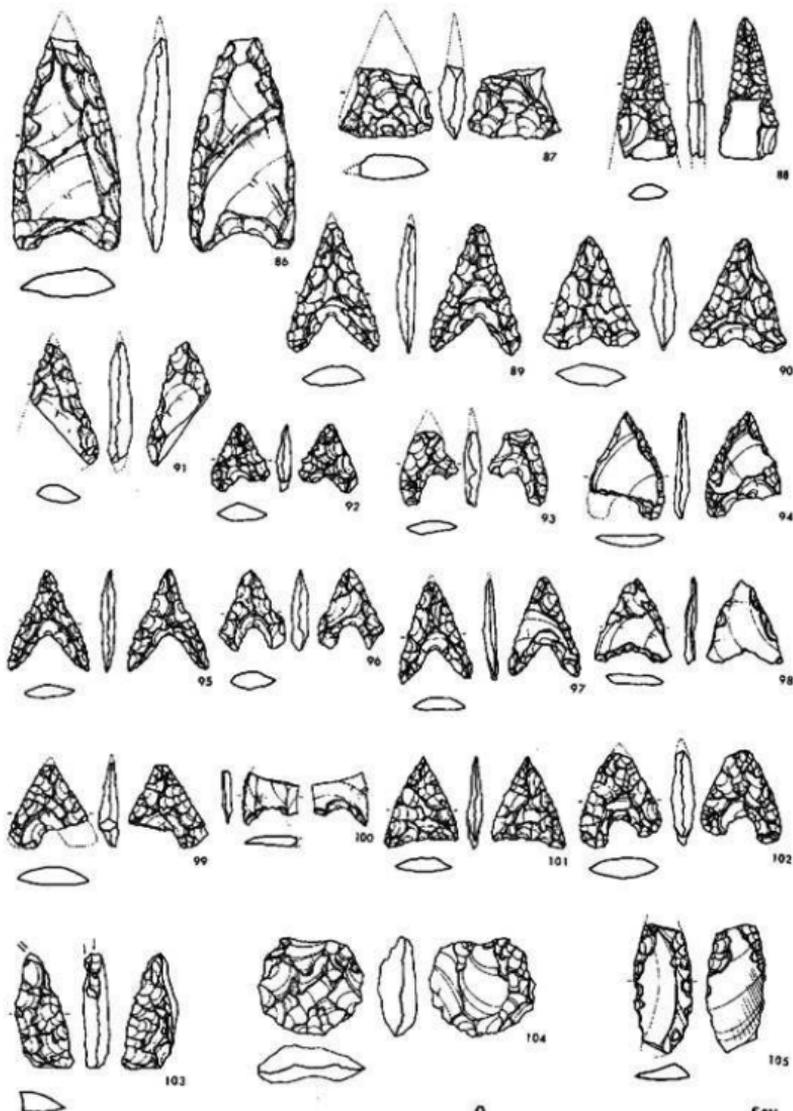
彫器〔第114図103〕 ob-C製の石鏝の半欠品を利用したものである。欠損面は石鏝先端方向からの櫛状の剥離面で、それを打面として側辺に沿って2回櫛状剥離を行っている。使用の

第4章 調査の記録



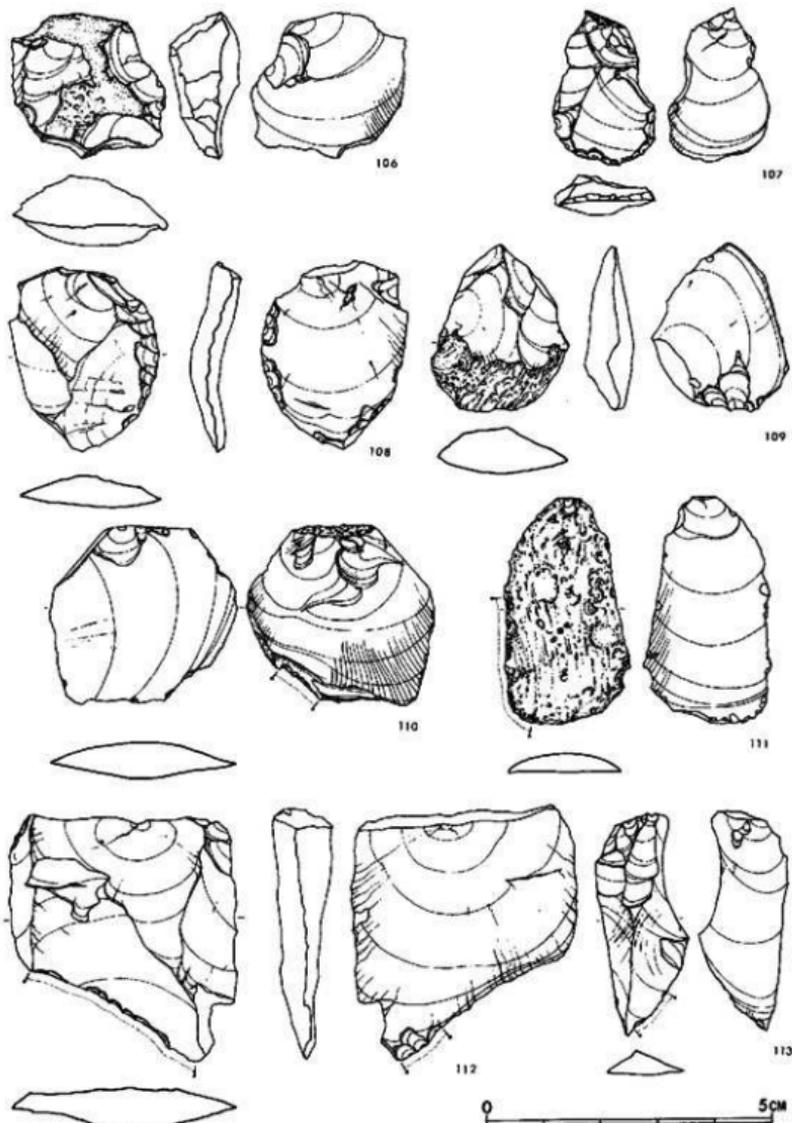
第113図 第1ブロック出土石器実測図I

5. II層の遺構と遺物



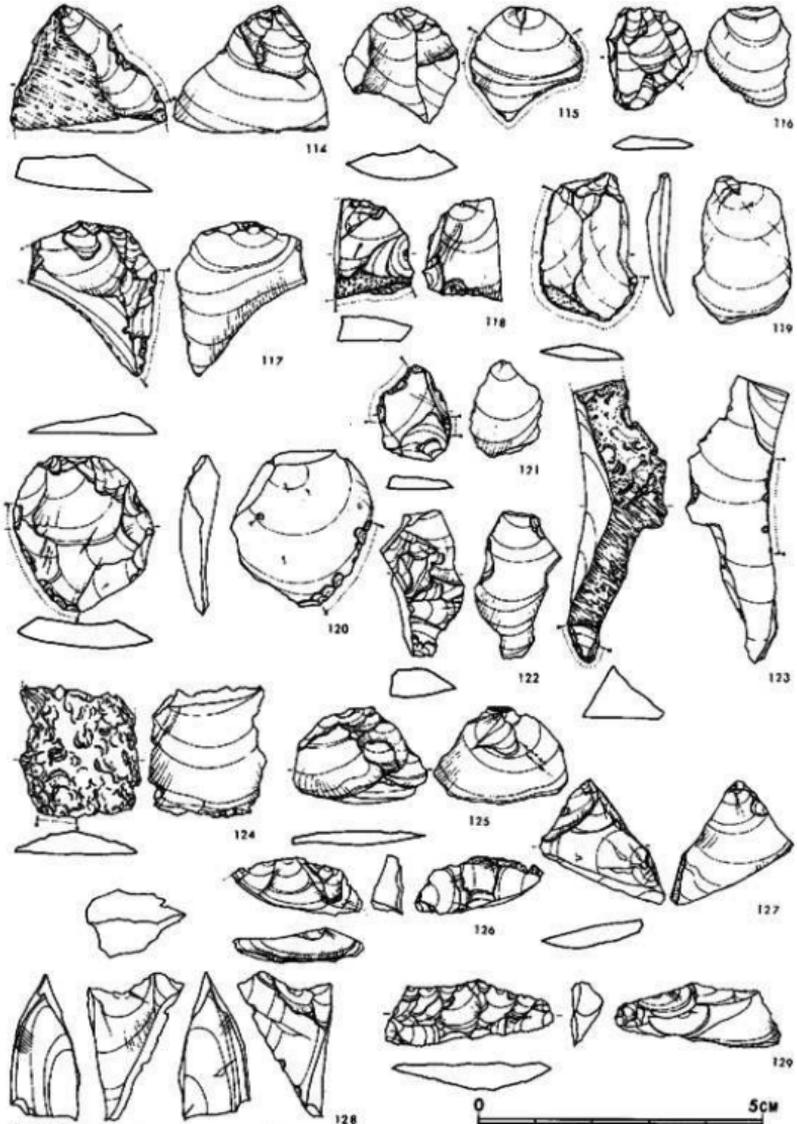
第114図 第Iブロック出土石器実測図II

第4章 調査の記録



第115図 第1ブロック出土石器実測図Ⅲ

5. II層の遺構と遺物



第116図 第1ブロック出土石器実測図IV

痕跡は観察されない。長さ2.05cm, 幅0.85cm, 厚さ0.45cmを測る。

二次加工ある剥片〔第114図105, 第115図109〕 105はob-B製の縦長剥片の両側辺の打面よりの部分に裏裏面からの二次加工を施したもので、先端部を欠損する。石錐である可能性が高い。長さ2.25cm, 幅1.05cm, 厚さ0.40cmを測る。109は安山岩製の横長剥片に2回の剥離を施したものであるが、何かの未製品であろうか。

UF〔第115図110~113, 第116図114~124〕 総計28点の出土である。一部を図示した。9割以上が黒曜石製である。112は頁岩製。119, 120が安山岩製。

石斧〔第187図446〕 安山製の石斧の頭部が出土したが、I層出土の刃部と接合した(接合資料No.12)ため詳しくは後にゆずる。

磨石〔第121図144, 145〕 全部で5点出土している。144は玄武岩製の磨石で、断面形が扁平な略三角状を呈する。図中表面にフラットな面をもつ。正面右側が厚く、左側にくにしたがってうすくなる。蛤状の形態をしている。長さ10.2cm, 幅7.6cm, 厚さ4.5cmを測る。145は正面観隅丸長方形の石輪形の磨石で、花崗岩製である。長さ12.3cm, 幅6.4cm, 厚さ3.8cmを測る。145と隣接して出土したもう一つの磨石は花崗岩製の長楕円礫を利用したもので、8.7×5.3×4.2cmの大きさである。火を受けており赤褐色を呈する。他の2点は、玄武岩製の石輪型に近い体形をもつ磨石で、いずれも半分を欠失している。それぞれ6.2cm+ α ×8.2cm×5.5cmと6.9cm+ α ×7.5cm×4.4cmの大きさである。

砥石〔第121図146, 147〕 146はブロック内の南西部から出土したもので、赤褐色砂岩製砥石の破片である。中央部に浅い5.5cm×2.5cm凹部をもつ。147は145の石斧と近接して出土したもので、全面に砥磨による平坦な面をもつ。赤褐色砂岩製。

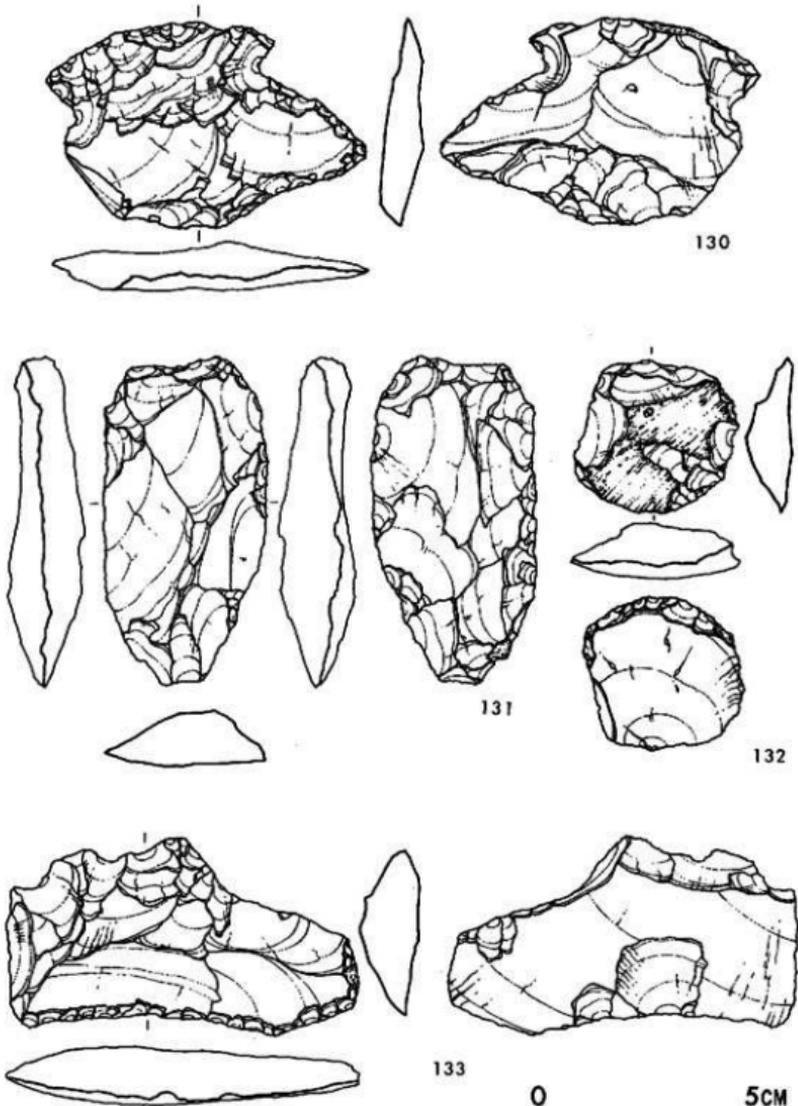
石核〔第119図137, 第120図138~143〕 119は安山岩製の大型剥片を利用し、両面から剥片剥離を行なった石核。長さ13.8cm, 幅7.6cm, 厚さ3.4cm。138, 140, 142は安山岩製の剥片素材の扁平な形状の石核である。140は打面に、他は側面に分割面がある。138は2.4cm×3.1cm×0.95cm, 140は1.95cm×2.8cm×1.2cm, 142は3.6cm×3.0cm×1.2cmである。139はob-B製の小形の石核で、素材は剥片を用いている。2.55cm×1.75cm×1.0cmを測る。141はob-B製の剥片素材石核の破片である。1.9cm×1.3cm×1.15cmを測る。143は安山岩製の石核で、119, 138~142の石核がいずれも剥片を素材にするのに対して、礫素材である点で異なっている。剥片剥離も打面を転移しながら実施されるため、立体的となる。4.85cm×4.2cm×2.35cmを測る。打面調整は認められない。接合資料No.4で、剥片2点が接合している。

第2ブロック

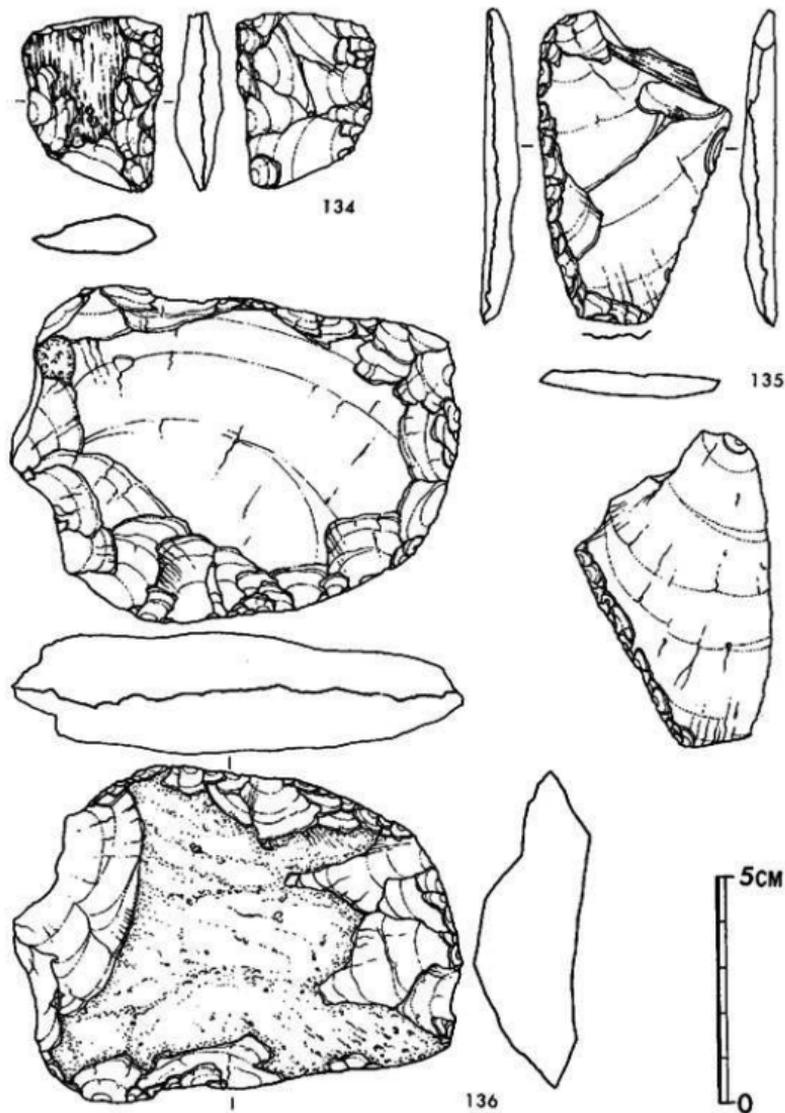
第4号・5号炉址をとりまく周辺と、これから南東部へ広がる分布域をもつブロックである。視覚的に大きく西と東の密集地域に分れる。ただしその間に剥片の接合例がある。

ブロックの西隅と第5号炉址東部には剥片、砕片の集中区が存在しており第5号炉址を囲む石器

5. II層の遺構と遺物

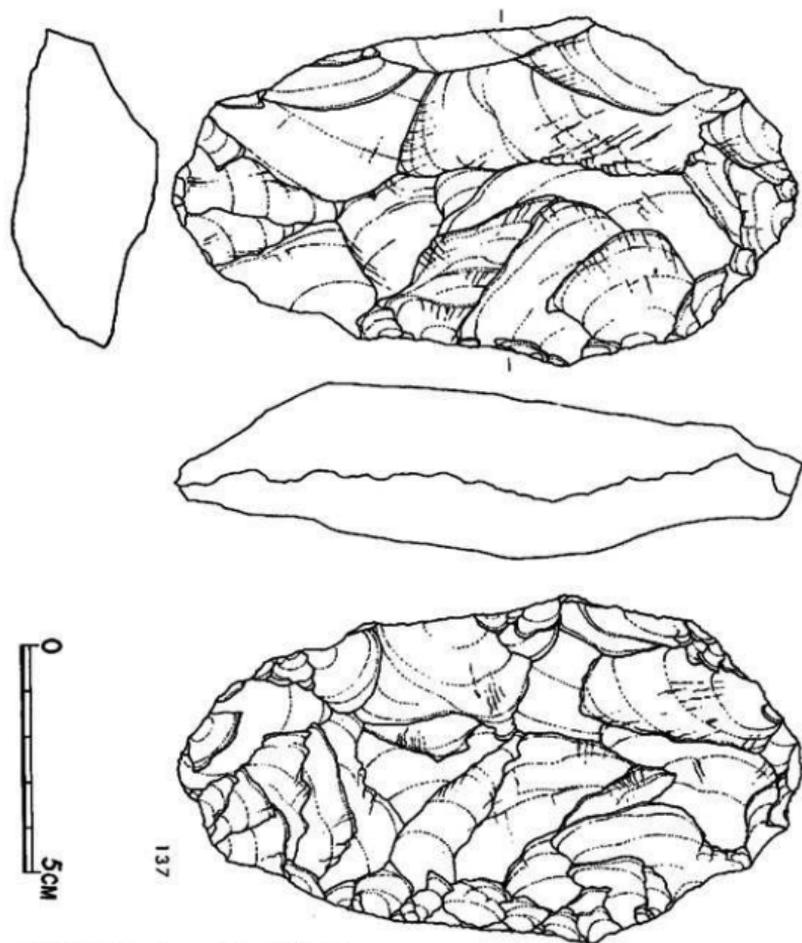


第117図 第1ブロック出土石器実測図V



第118図 第1ブロック出土石器実測図Ⅶ

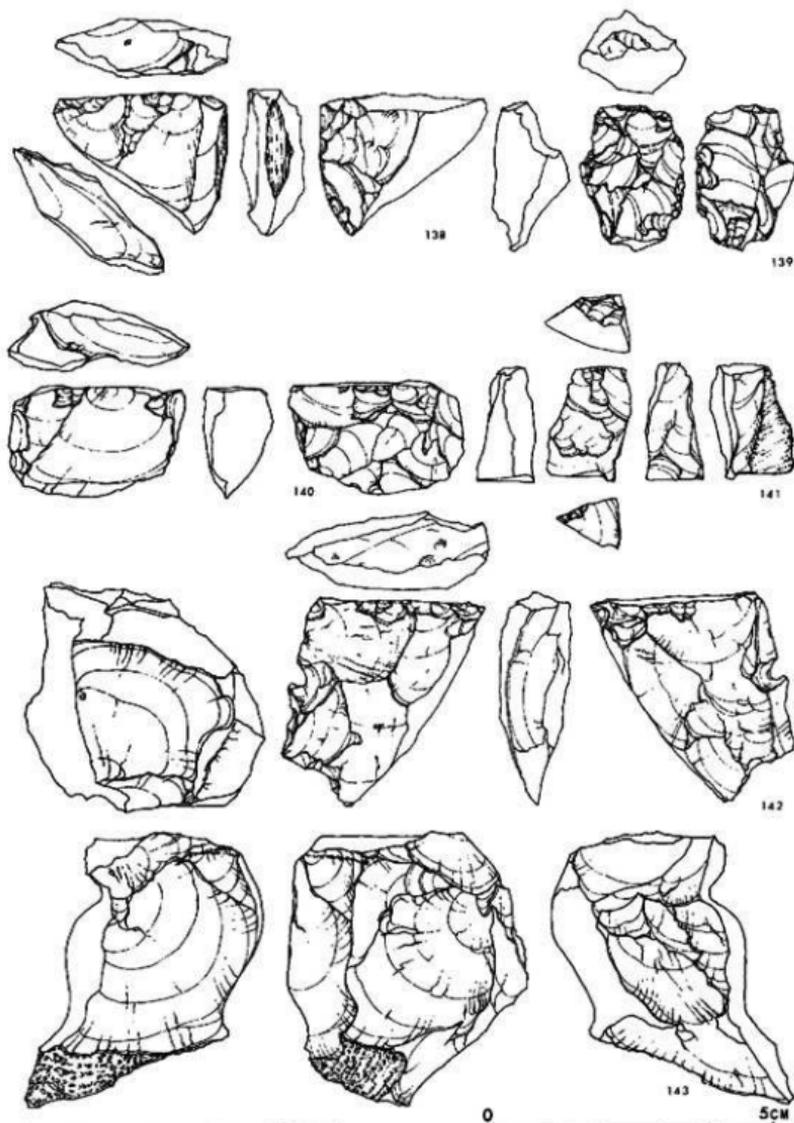
5. II層の遺構と遺物



第119図 第1ブロック出土石器実測図Ⅵ

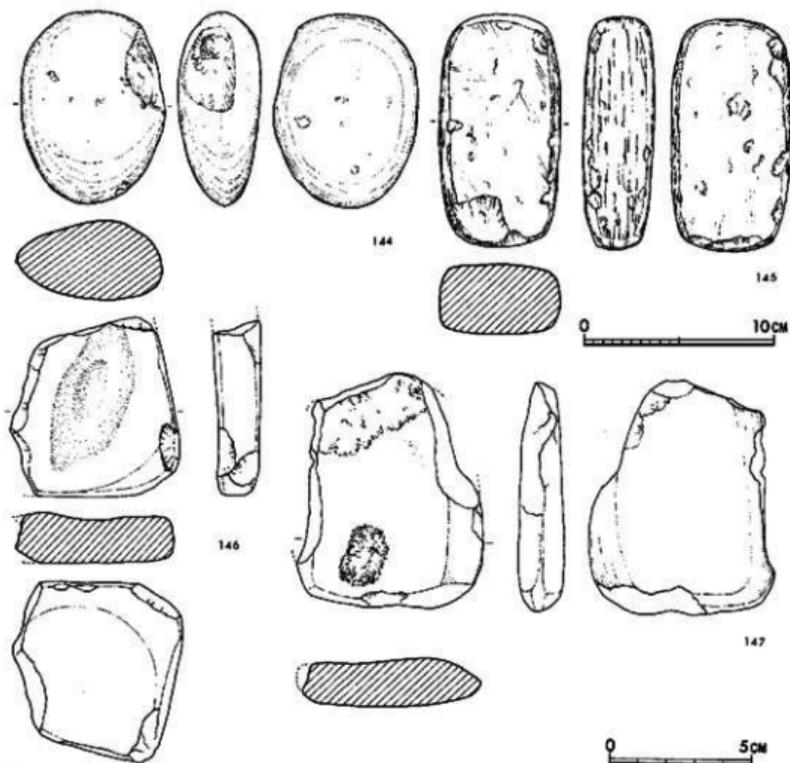
の分布域がブロックの境界を越えて広がる可能性もある。石器の総数は43点で、その内訳は石鏃14点、スクレイパー7点、石錐1点、UF17点、石斧2点、磨石1点、砥石1点である。石核は7点出土した。接合資料3つを含む。

第4章 調査の記録



第120図 第1ブロック出土石器実測図Ⅷ

5. II層の遺構と遺物



第121図 第1ブロック出土石器実測図Ⅱ

石鏃〔第122図148～161〕 14点出土したが、内完形品5点(35.7%)、欠損品9点(64.3%)である。石材の内訳はob-B-3点(21.4%)、ob-C-2点(21.4%)、ob-C-2点(14.4%)、安山岩7点(48.2%)と安山岩が略半数を占めている。完形率は安山岩が最も高い。

形態は大きく平基と凹基に分けられる。平基はほぼ正三角形を示す(152, 153, 156)。凹基は抉りが僅かで略三角形を示すもの(148, 149, 155)、抉りは深いU字形を示すもの(154, 157, 160)抉りが最も深くV形をなすもの(150, 151, 158, 159)等がある。158は後三者の中でも特異なもので入念な剥離を施した楕形鏃の逸品である。接合資料No.13で、第4号炉址西側で検出された。

復原した大きさは、長さで2cm内に収まるものが多く、1.4～2.0cm×1.0～1.7cmに集中する

傾向がある。平均の大きさは158の隕形鉄、161の未製品を除くと、1.7cm×1.5cmである。長幅指数は1.03と安山岩が最も低く1に近い値をとる。欠損品の欠損箇所別頻度は欠損数10のうち先端部5（50%）、脚5（50%）と同じである。

スクレイパー〔第122図162、第123図164、165、第125図182～184〕162はob-A製の播器で剥片末端の厚味のある部分に背面側から刃部を作出している。接合資料No 41の一つで、刃部成形の剥片と接合した。長さ3.8cm、幅2.55cm、厚さ1.0cmを測る。164はob-B製の剥片を利用して表裏両面から二次加工を行なっている。下端の剥離は背面側からのみである。長さ3.3cm、幅3.1cm、厚さ0.9cmを測る。165はob-A製の小型剥片の打面部付近に表裏両面から二次加工を施したもので、下半部を欠損する。現存長1.1cm、幅1.5cm、厚さ0.4cm。182は安山岩製の縦長剥片を素材とし、その右側辺部に裏面から二次加工を施し刃部を作出したスクレイパーである。素材剥片の原形をほぼ留めている。長さ5.5cm、幅3.7cm、厚さ1.1cmを測る。183は外表面に近い部分の安山岩製縦長剥片素材のスクレイパーで、その本端部に4～5個の剥離痕を留めている。4.0cm×3.0cm×1.1cm。184は安山岩製の大型縦長剥片を素材としたスクレイパー。刃部は本端に両面からの剥離によって作出されている。長さ8.15cm、幅5.3cm、厚さ1.7cmを測る。

石錐〔第122図163〕第4号炉址西側から出土したもので、ob-B製の縦長剥片を素材とした石錐である。素材剥片の端部に尖い先端部を作り出しているが、右側辺の加工が表裏面からであるのに対し、左側辺は裏面のみから実施されている。長さ4.0cm、幅1.45cm、厚さ0.75cmを測る。

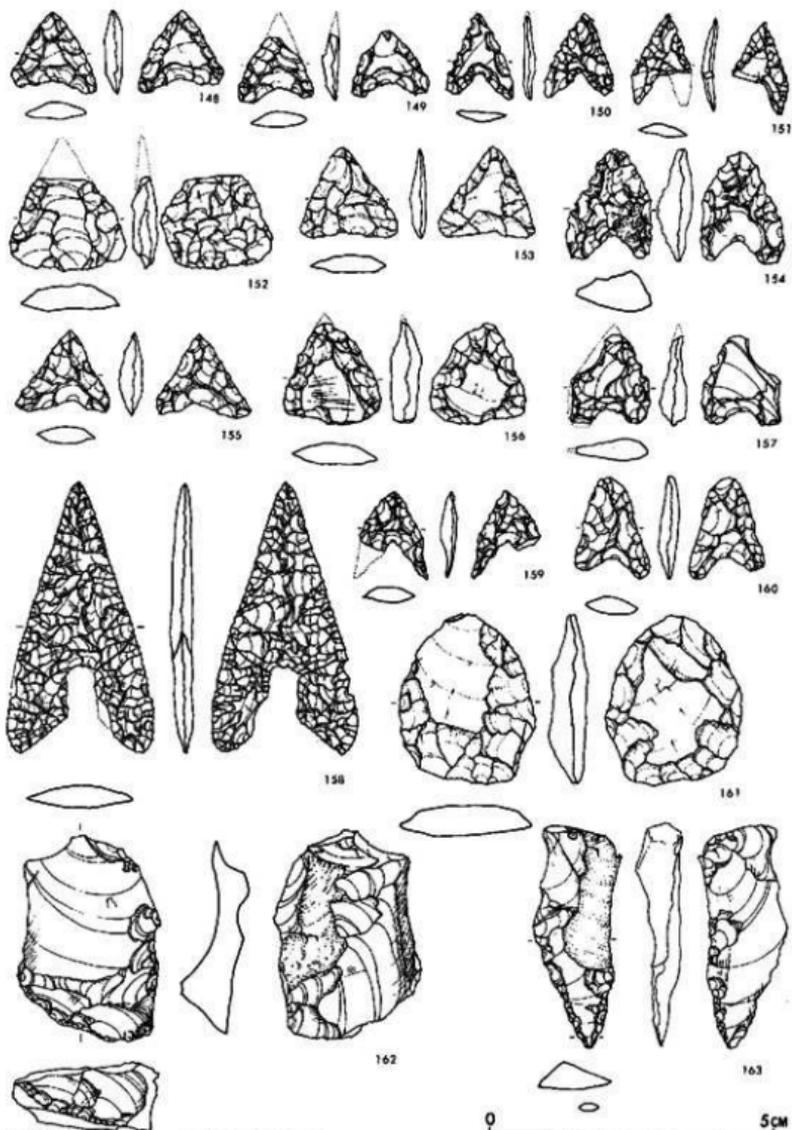
UF〔第123図166～175〕全部で17点の出土である。17点中16点が黒曜石製で安山岩製は1点のみ（174）で黒曜石製剥片の高い利用率が窺える。175はob-B製の石刃状の剥片を利用しており、全周に刃こぼれが観察される。

石斧〔第127図186、187〕186は安山岩製の打製石斧である。素材は方柱状の礫素材で、周辺より粗い加工によって整形した後、細かい剥離を加えて整えている。素材の形状をうまく利用したもので礫の自然面を表裏両面に残している。長さ10.7cm、幅4.8cm、厚さ3.4cmを測る。重量200g。187は硬砂岩製の扁平な形状の石斧で、粗い剥離を加えて概形を整えた後両面を敲打整形を行なっている。その後、刃部と両側辺と頭部を研磨して完成させる。刃部は両面からの砥ぎ出しによって直線上の平刃に作られている。長さ11.0cm、幅6.0cm、厚さ1.7cmを測る。重量160g。上半部は両面からの剥離によって側辺が快状に入り込み、有肩状を呈している。186はブロック南東隅、187は南西隅からそれぞれ出土している。

砥石〔第128図188〕淡赤褐色砂岩製の砥石で、第4号炉址西側より検出された。表面は平坦な面であるが、表面中央部に長さ約5cm、幅1.2cmの凹部を有している。周辺部も砥磨による面取りがしてある。長さ8.2cm、幅6.9cm、厚さ1.4cmを測る。

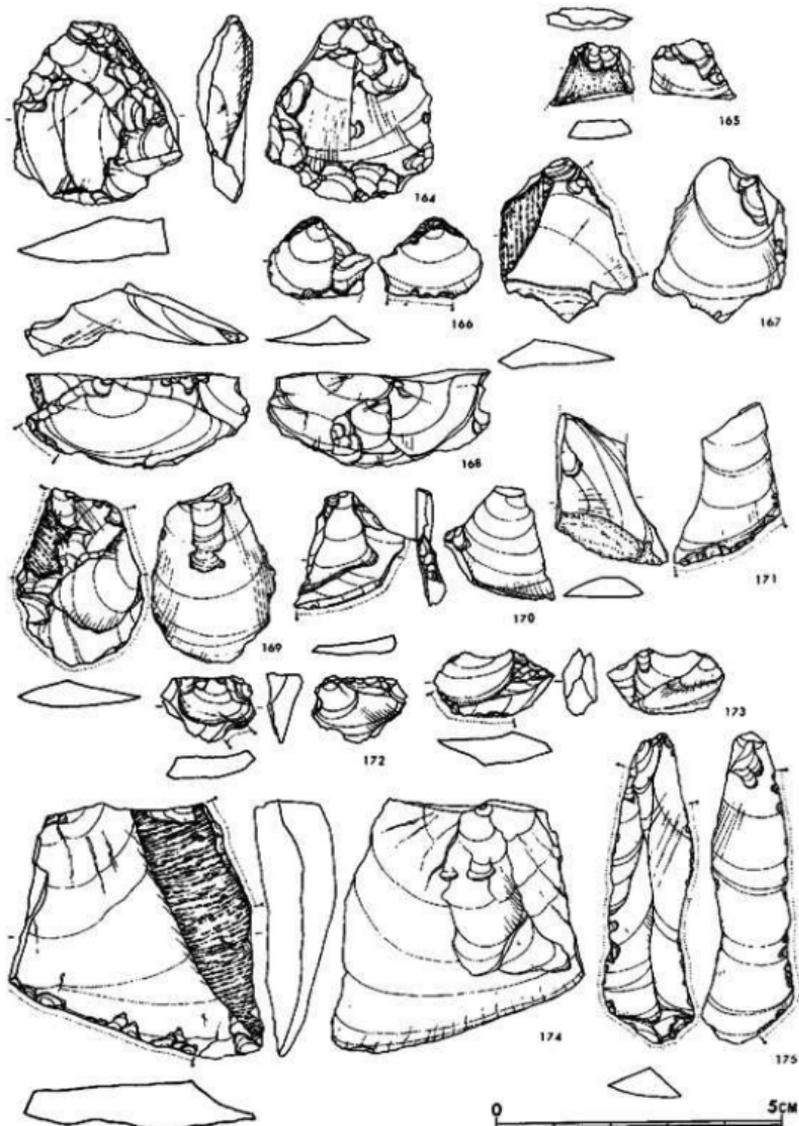
石核〔第124図176～178、第126図185〕7点出しているのが原形を留めているもののみ図示し

5. 日層の遺構と遺物



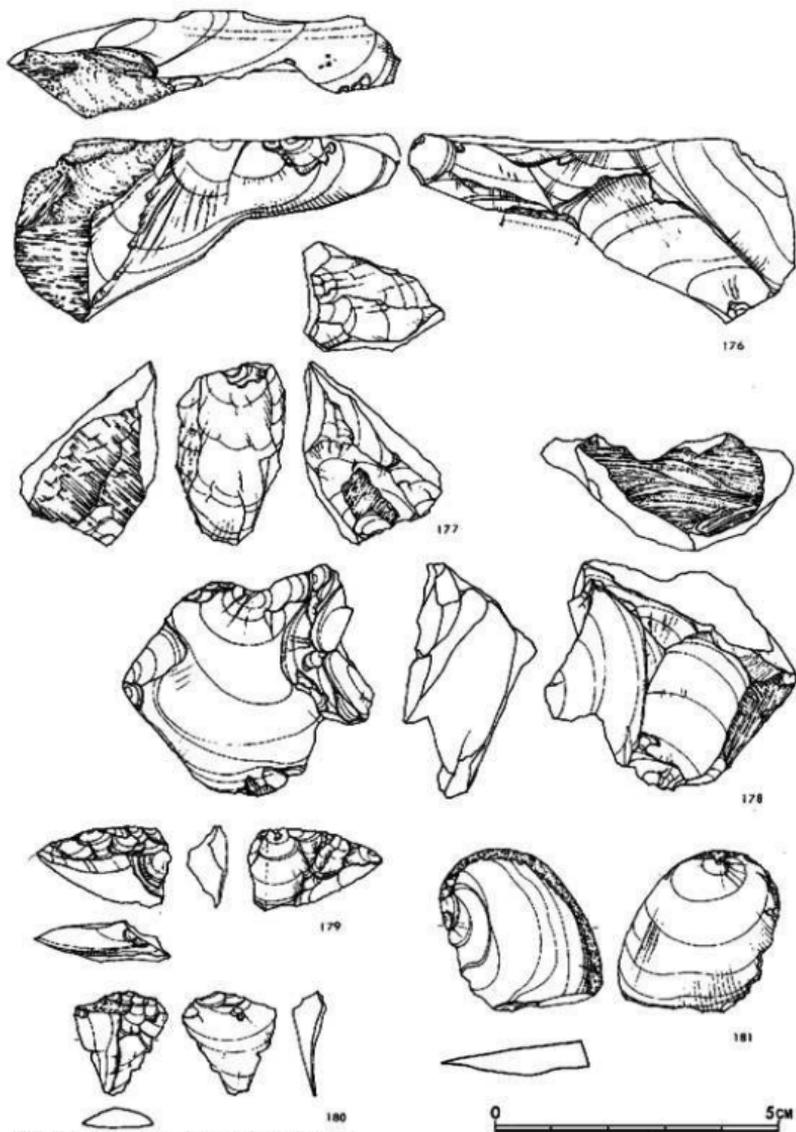
第122図 第2ブロック出土石器実測図1

第4章 調査の記録

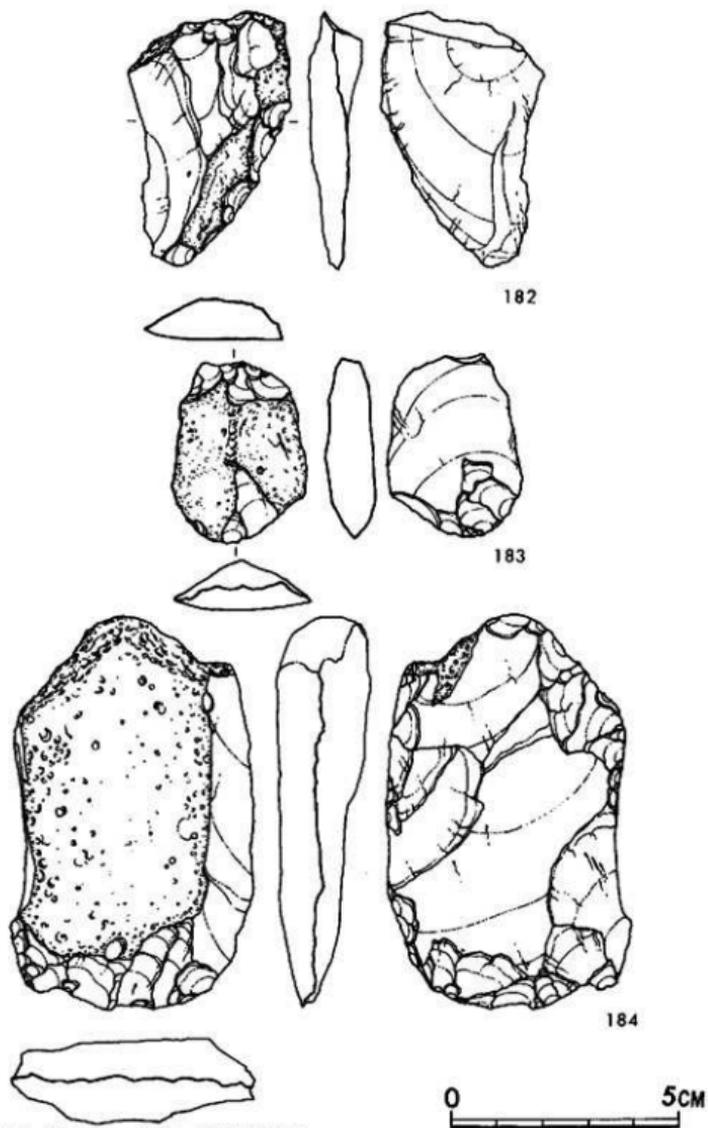


第123図 第2ブロック出土石器実測図II

3. II層の遺構と遺物

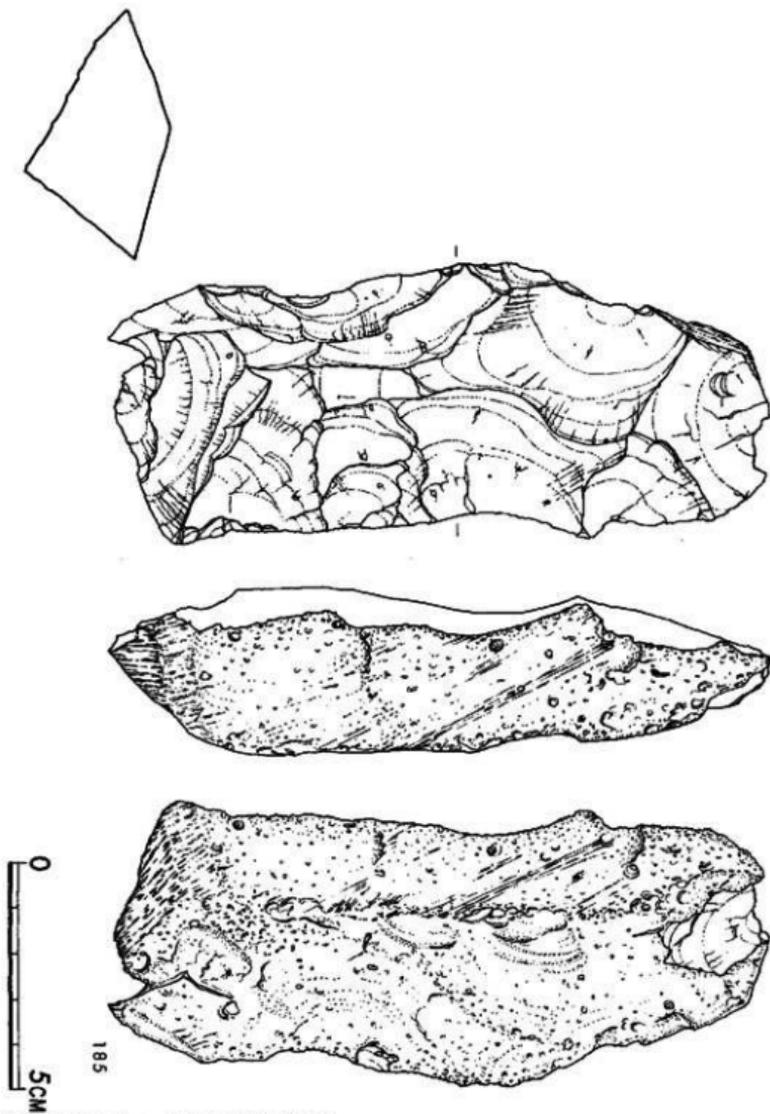


第124図 第2ブロック出土石器実測図Ⅲ

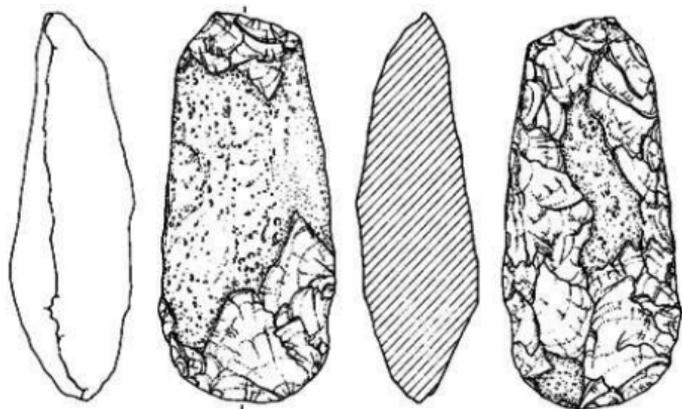


第125図 第2ブロック出土石器実測図Ⅳ

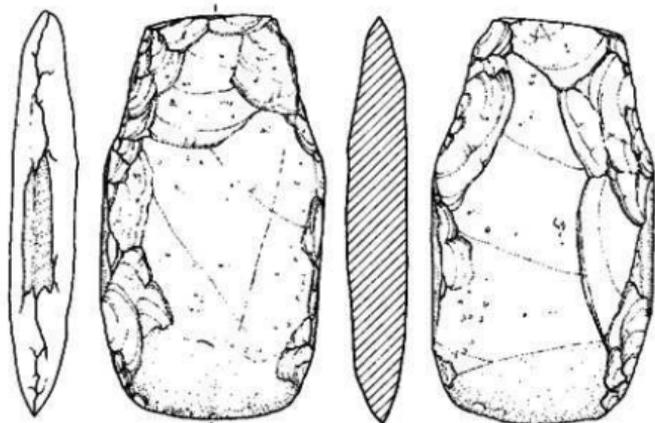
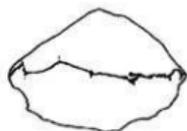
5. II層の遺構と遺物



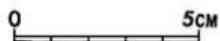
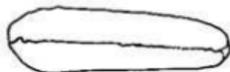
第126図 第2ブロック出土石器尖頭区V



186



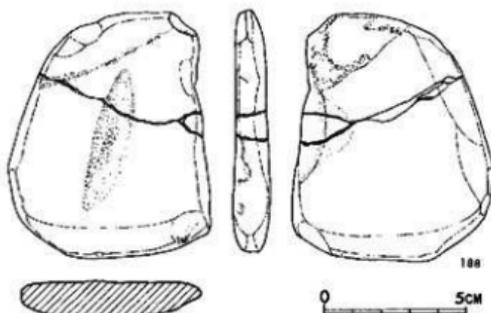
187



第127圖 第2ブロック出土石器実測図Ⅵ

5. II層の遺構と遺物

た。176はob-A製の剥片素材の石核である。正面は剥片の一方の大きな剥離面を打面として剥片剥離を行なっている。裏面側は求心的に左右の方向から剥離が実施されている。打面調整は実施していない。4枚程度の剥片が剥取されている。5.3cm×6.8cm×1.5cm。177は珪化木製の石核で、左側面、正面、打面で剥片剥離が



第128図 第2ブロック出土石器実測図Ⅶ

実施されている。打面調整の痕跡は認められず、剥離面を打面として交互剥離状に剥片を剥取していたものと考えられる。珪化木製の製品はこの石核のみで、剥片、その他の石器類は何も検出されていない。剥離面長3.3cm、打面幅1.8cm、打面奥行3.1cmを測る。右側面は節理面である。178はob-A製の石核で、素材が礫であったか剥片であったかは不明である。正面に最終剥離の一枚の大きな剥離面をもち、裏面には二枚の剥離面をもつ。最終剥離の打面は自然面である。右側辺部を欠損している。3.8cm×4.4cm×1.7cm。126は安山岩製の大型剥片を素材とした石核である。背面に自然面をもつ剥片の自然面を打面として周辺から求心的に剥片剥離を進めている。一部頭部付近と中央部に素材剥片の主要剥離面が観察できる。最も大きな剥離面で約3.2cm×5.5cmの大きさである。10枚前後の剥片が剥離された痕跡がある。長さ14.5cm、幅5.9cm、厚さ3.6cmを測る。また、接合資料No11の石核の接合例の1点はこのブロックから出土したものである。第124図179はob-B製石核の砕片である。

ブロックのほぼ中央で出土した磨石は、10.6cm×8.3cm×5.5cmの花崗岩製の礫を用いたもので、正面観隅丸の三角形である。裏面に大きな平坦面をもつ。

第3ブロック

発掘区のはほぼ中央を占める。特に第6号炉址の周辺部はII層中で最も石器、石片の集中したところで、数多くの接合資料を含んでいる。遺構としては他に、第7、第8号の炉址があるが、その周辺部には顕著な密集区はなく散漫な状況である。第7号炉付近には石器の出土があまりない。第6号が址周辺は石器のみ、石器と剥片、砕片の密集する部分が数個存在し、便宜的にまとまりをつけ、小ブロックa～小ブロックfと名付けておく(第201図参照)。接合資料の多くは、このa～fの小ブロック間で接合する場合が多く、b～c～d間接合資料No16、b～e間接合資料No18、b～d間接合資料No21、c～d間接合資料No20、No23等がある。また、接合資料No22、No25、No26は石器、石片が小ブロックdから東方向に拡散する状況を示し

ている。

石器総数85点、内訳は石鏃25点、スクレイパー12点、異形局部磨製石器2点、UF44点、磨石1点、砥石1点で、その他に石核10点、原石2点も出土している。

石鏃〔第129図189～209、第130図210～212、217〕未製品1点も含め全部で25点出土した。未製品を除くと完形品が7点（24%）、欠損品が17点（72%）と欠損品が約7割を占めている。石材別では、ob-A-7点（28%）、ob-B-9点（36%）、ob-C-1点（4%）、ob-D-1点（4%）、ob-E-1点（4%）、安山岩-6点（24%）で、他のブロックに比して、黒曜石製石鏃の多い（全体の76%）のは目立っている。

形態的には平基と凹基に分けられ、平基で略三角形を呈するものは4点（191、198、207、210）と、凹基のものが多数を占める。凹基の石鏃はI-U字形の僅かな挟りを持ち側辺が外へ湾曲した寸づまりの三角形を呈するもの（189、211）、II-挟りが浅いU字形を呈するもの（193、208）、III-長脚で挟りがU字形を呈する鍔形鏃（190、194、199）、IV-側辺が外へ湾曲し、鋭角な三角状の挟り部をもつもので、脚は尖がるもの（190、195、202、203）、両脚が外へ張り出す形をとり、挟りはゆるい弧を描き、鋸歯縁をもつものもある（196、197、209）、V-その他（200、201、212）に分けられる。201は第1ブロック出土85の石鏃と同じく長さか幅と同じかもしくは小形で、深いU字形の挟りを施した張り出す脚部をもつ鍔形鏃である。196と197はブロック南西隅で近接して出土したもので、石材、形態とも酷似している。191と198は小形の剥片の周辺を僅かに加工しただけの剥片鏃であり鋭い先端部は形成されていない。195、210は局部磨製の石鏃で、210は断形が厚く三角形を呈し研磨途上のもと思われる。195の脚部は研磨後の調整剝離によって整形されている。

石鏃の大きさは、復原形で黒曜石製1.98cm×1.45cm、安山岩製2.37cm×1.52cmとやや安山岩の方が大きい。また1.5cm～2.0cm×1.0cm～1.5cmと2.2～2.5cm×1.25～1.7cmの二ヶ所にそのピークがある。長幅指数は全体平均が1.41と長さか幅の比がほぼ3:2となる。石材では黒曜石1.41、安山岩1.56と安山岩製石鏃の方がやや細身である。

欠損品18点の総破損部数30ヶ所のうちその頻度は先端部14ヶ所（46.7%）、片脚16ヶ所（53.3%）と僅かに脚欠損の方が高い。

異形局部磨製石器〔第130図213、214〕トトロ石器と称される資料で、第2ブロック内で約7cmの距離を隔てて2点出土した。214は青灰色と白色の縞の入るチャート製で、小形の完形品である。先端部は丸味を帯び胴部がややふくらむ先細りの形態をもつ。両脚部は外へ張り出す。整形は入念に仕上げられている。横断面形はレンズ状を呈している。この種の石器には研磨による平坦な面をもつものが多いが、本品はわずかに剝離痕の稜のつぶれを観察できるのみである。全体的に滑らかな感がある。長さ6.3cm、胴部幅2.9cm、脚部幅3.5cm、厚さ0.95cmを測る。213は黒い縞の入る青灰色チャート製で、先端部を欠損している。両側辺部は214と比べて

5. II層の遺構と遺物

胴部の張り出しが弱く直線的である。両脚部の張り出しも弱い。整形は入念であるが、研磨によって剥離痕の段は不明瞭でそれが剥離面に及ぶ部分もある。全体に磨耗した感が強い。横断面形がレンズ状をなす。現存長5.5cm、胴部幅3.4cm、脚部幅4.1cm、厚さ1.2cmを測る。144が第6号炉址より東へ約6m、143が第8号炉址より北へ約4mの所でそれぞれ出土している。

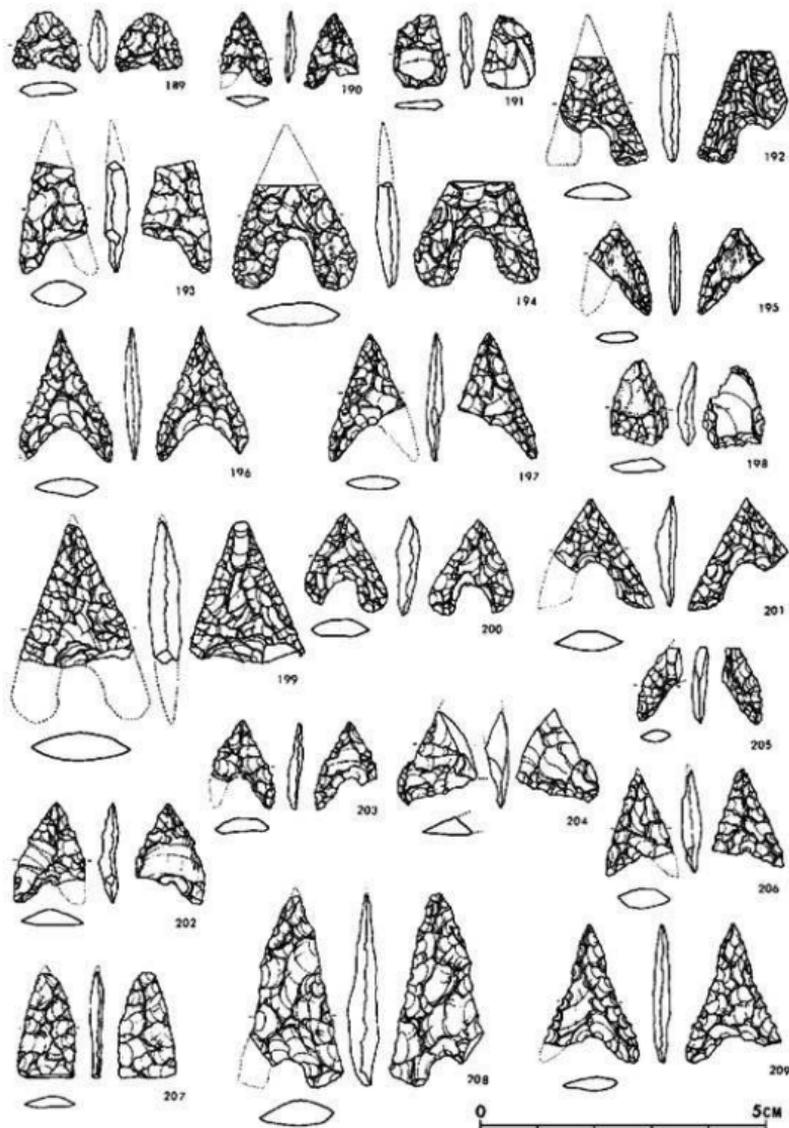
スクレイパー〔第130図215、216、218、第135図262、第136図263、264〕12点出土しているが、内6点を図示した。215はob-D製の小型の搔器である。素材剥片の最も厚味のある部分に急角度の剥離を加え刃部を形成している。長さ1.9cm、幅1.55cm、厚さ0.9cmを測る。216はob-A製の剥片を素材とした拇指状搔器である。裏面の周辺加工と裏面から背面への刃部形成の剥離が施され、刃部は左側の一辺に作出されている。長さ1.6cm、幅1.75cm、厚さ0.8cmを測る。218はob-B製の横長剥片を利用し、表裏両面からの加工によってほぼ全周に刃部を作出している。裏面中央には素材剥片の主要剥離面を大きく留めている。長さ3.5cm、幅3.25cm、厚さ0.9cmを測る。262は安山岩製の大型横長剥片を利用した大型のスクレイパーである。剥片の打面付近は粗い調整剥離が施されている。刃部は剥片の末端辺に細かい両面からの剥離によって作出されやや外側に弯曲している。刃部以外の側辺と頭部付近は研磨され滑らかに仕上げられている。素材剥片の形状にはほとんど変化がない。長さ6.9cm、幅12.4cm、厚さ1.45cmを測る。第8号炉址の北東部約5mの所で出土した。263は安山岩製スクレイパーの半欠品である。素材は幅広い横長剥片で、その末端に主に表面側から細かい剥離によって刃部を形成している。現存長5.7cm、幅5.4cm、厚さ0.85cmを測る。264は安山岩製の縦長剥片の側辺に背面からの急な二次加工を施したスクレイパーである。素材剥片の打面は平坦な無調整打面である。長さ5.1cm、幅3.6cm、厚さ0.9cmを測る。

UF〔第131図219～224、第132図225～233、第133図234～250〕全部で44点出土しており、本ブロック中で最も数的に卓越した石器である。また他ブロックと比較しても最高数である。石材別では、安山岩製剥片を利用したものが1点のみで他はすべて黒曜石製剥片である。他の石器と同じく第6号炉址に集中する傾向が認められる。UFを含む7つの接合資料が存在しており、この場で剥片の生産・使用が行なわれた可能性が高い。219と223は互いに接合する接合資料No13の資料で3点中2点が使用されている。221も剥片と接合する接合資料No21の資料である。この他に剥片と接合する例は246、248、250で、それぞれ接合資料No26、No24、No23中の資料である。また石核と接合する例は232、249で、接合資料No16、No27である。

砥石〔第134図260〕淡黄褐色砂岩製の砥石の破片である。僅かに表表面中央に凹部を有する。しかし平坦面との境はあまり明瞭でない。現存長4.8cm、幅2.55cm、厚さ0.8cmを測る。

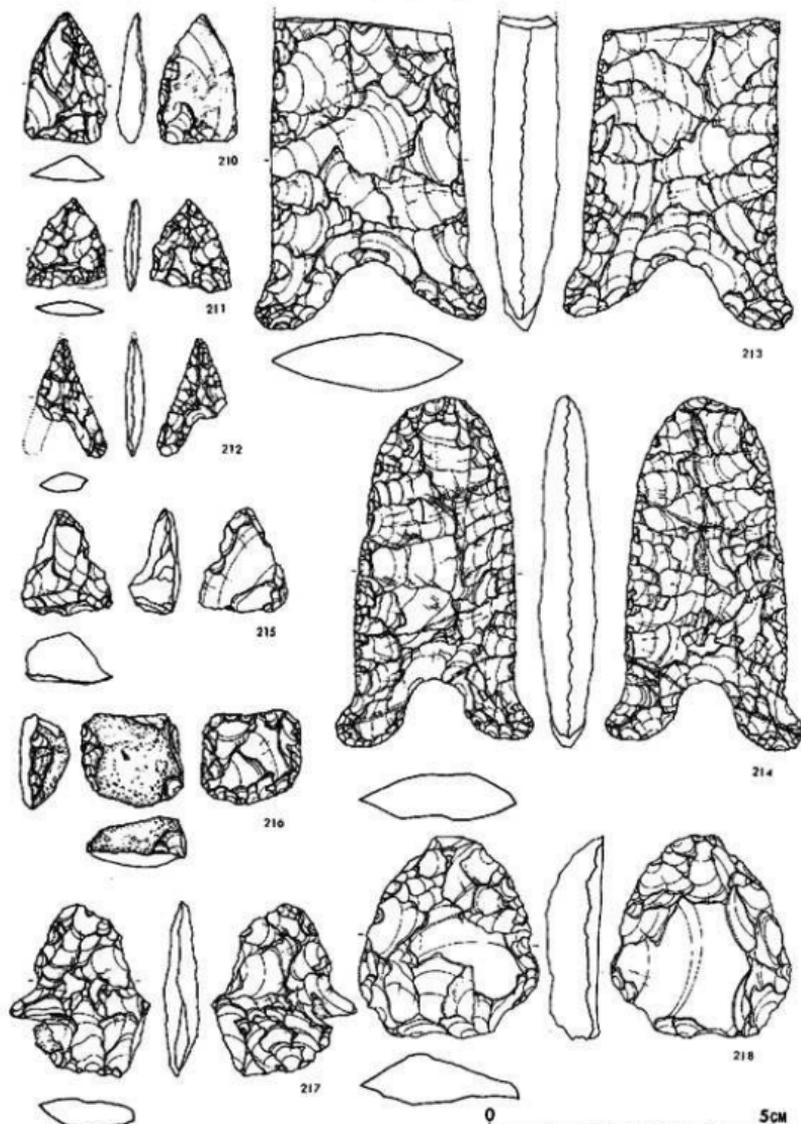
石核〔第137図266～269、第138図270～273〕266はob-B製の剥片素材の石核で、分割面で接合した例である（接合資料No25）。上面に打面状のフラットな面がある他は、全て剥離面打面で、打面調整の痕跡は認められない。剥片剥離は石核の中心に向って求心的に実施される。

第4章 調査の記録



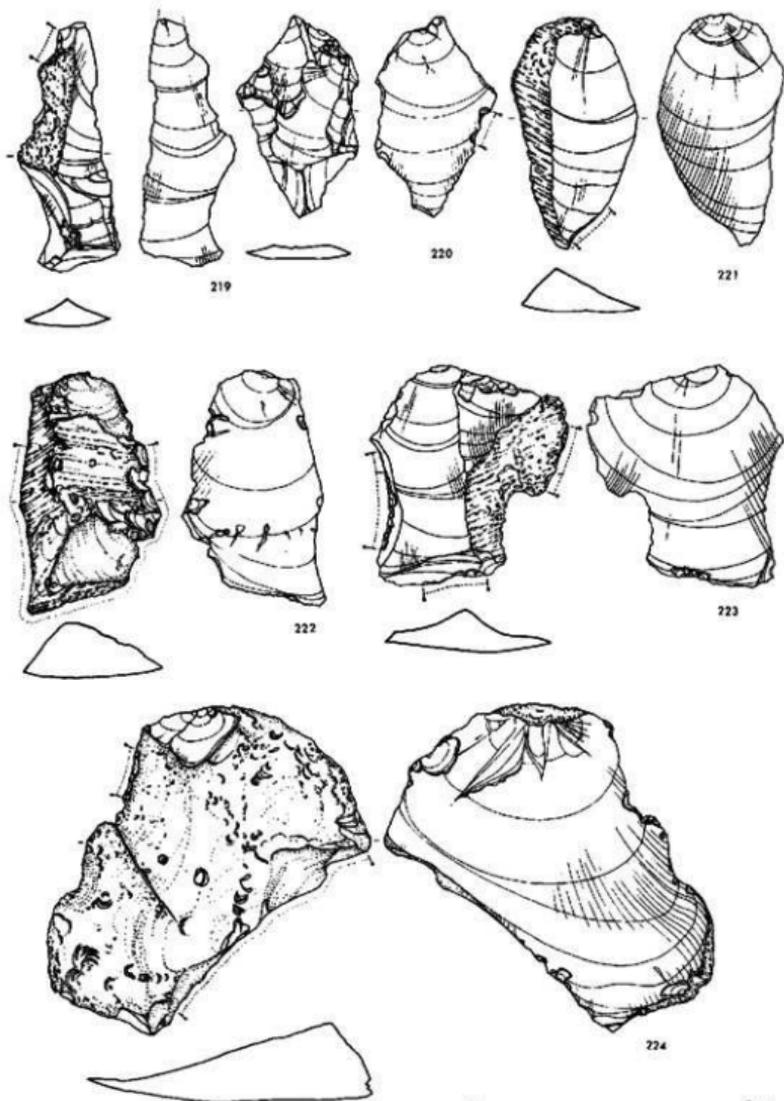
第129図 第3ブロック出土石器実測図類

5. II層の遺構と遺物



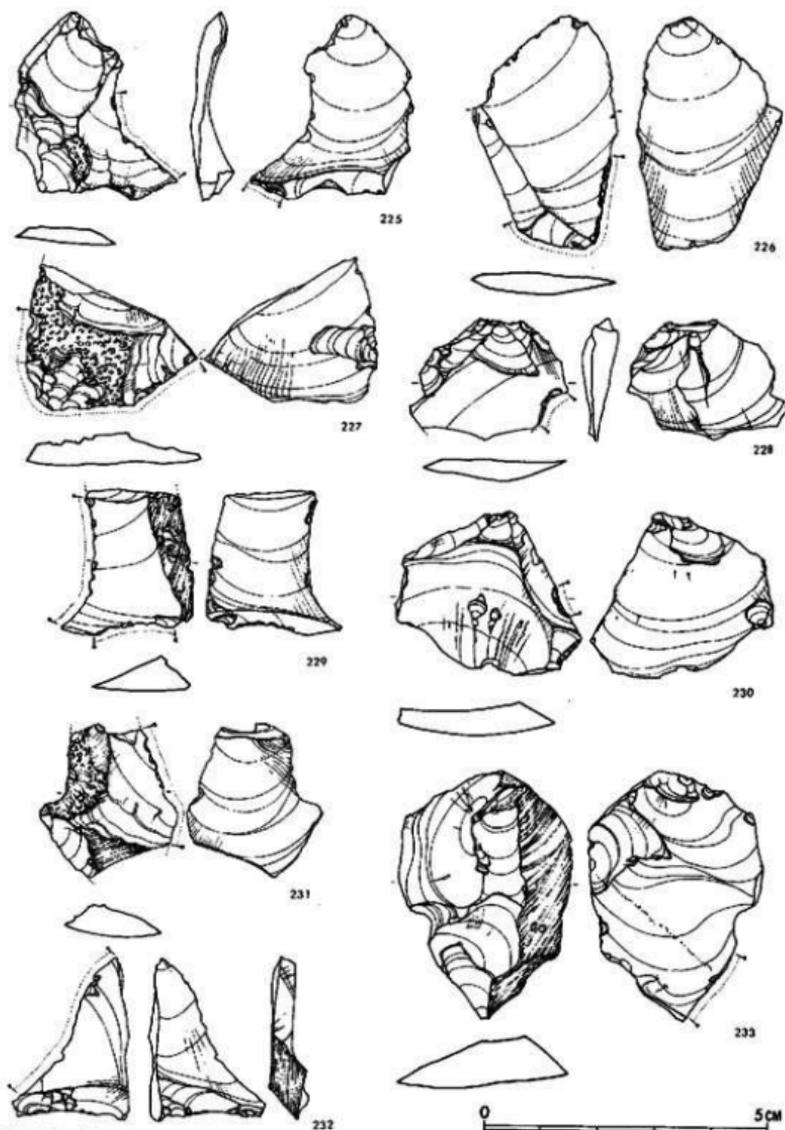
第130図 第3ブロック出土石器実測図Ⅱ

第4章 調査の記録



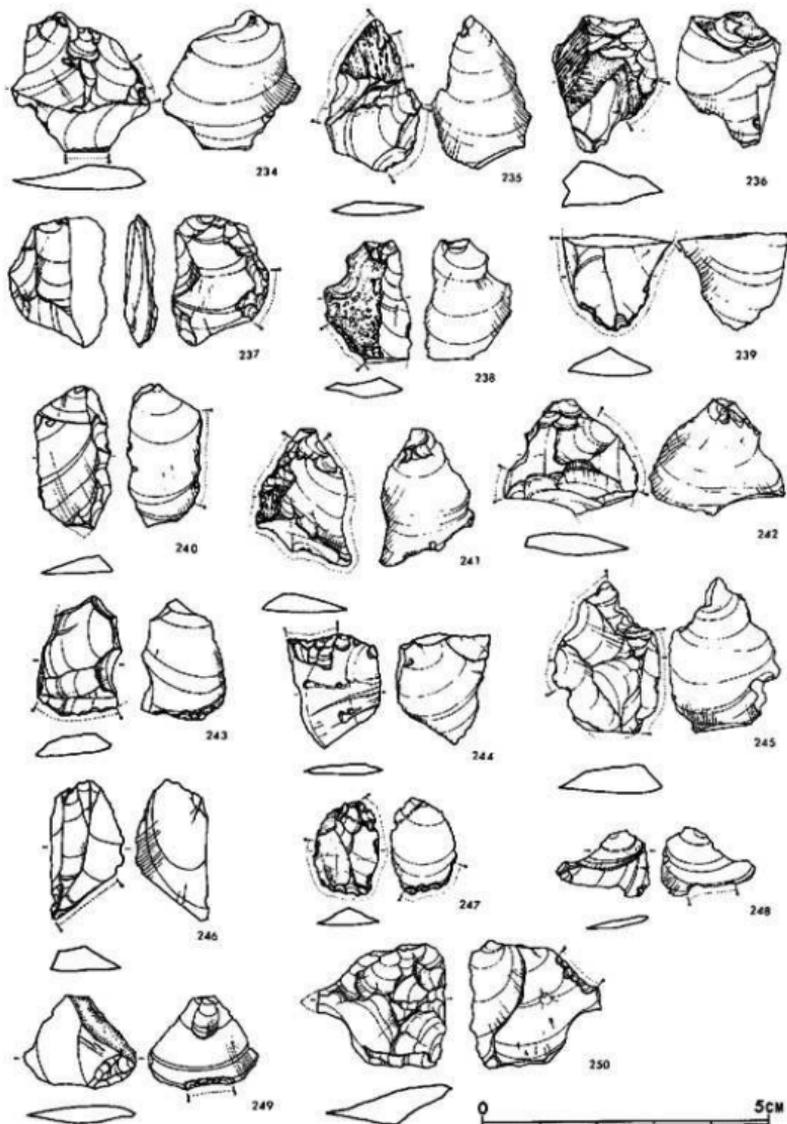
第131図 第3ブロック出土石器実測図Ⅲ

5. Ⅱ層の遺構と遺物



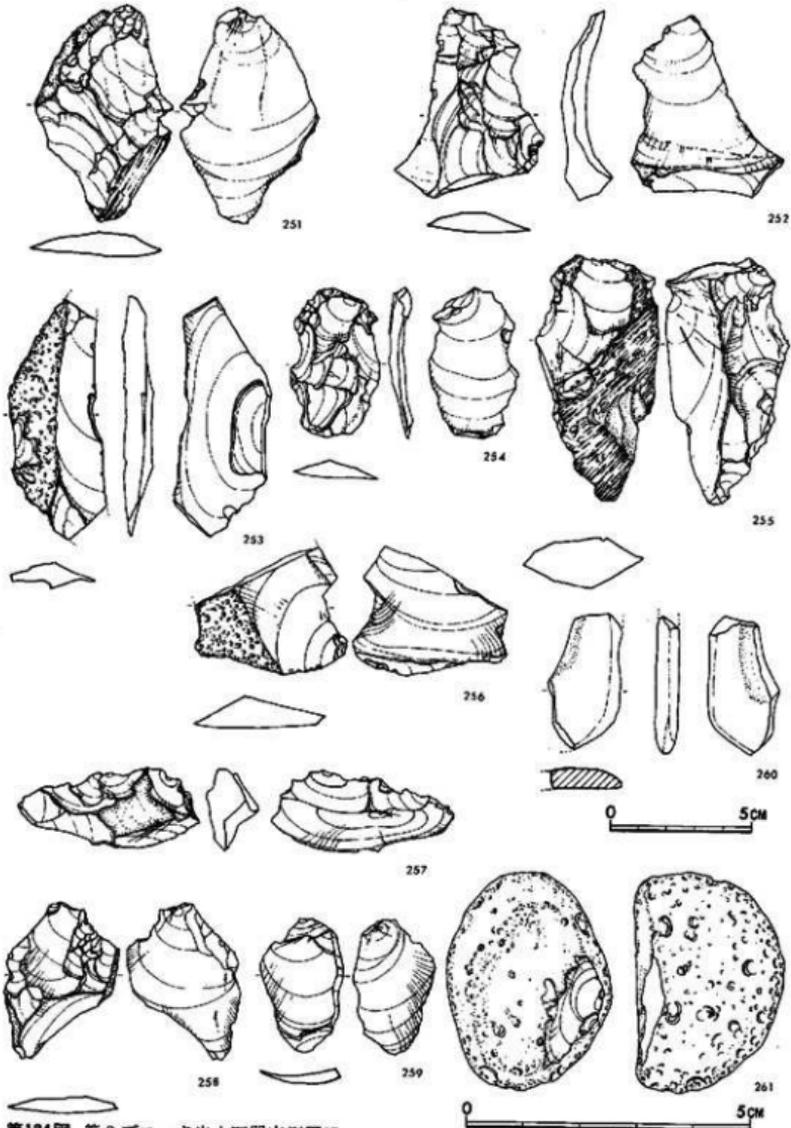
第132図 第3ブロック出土石器実測図Ⅳ

第4章 調査の記録



第133圖 第3ブロック出土石器実測図V

5. II層の遺構と遺物



第134図 第3ブロック出土石器火洲図VI

長さ2.9cm, 幅3.9cm, 厚さ1.0cmを測る。267はob-B製剥片素材の石核である。2点の剥片と接合する接合資料No17中の石核で、剥片素材石核の剥離剥離工程がよく分かる資料である。打面は全て剥離面打面で、打面調整の痕跡は認められない。剥片剥離は主に左右方向から実施されている。略半分を欠失している。両側辺とくに右側辺には細かい使用痕が認められる。長さ2.6cm, 幅4.6cm, 厚さ1.0cmを測る。268は266, 267と同じくob-B製の剥片素材の石核である。打面も剥離面打面で、打面調整も施していない。剥片剥離は側面から求心的に実施される。略半分を欠失する。長さ2.1cm, 幅3.6cm, 厚さ1.1cmを測る。269もob-B製の剥片素材の石核であるが、体形が他とやや異なっている。裏面には素材剥片の主要剥離面が認められる。剥片剥離は上方からの2回, 下方からの1回の剥離のみである。中央から分割したものが接合した例(接合資料No11)で、右半分の個体は第2ブロックから出土している。長さ2.4cm, 幅6.2cm, 厚さ1.4cmを測る。270はob-A製の剥片素材石核。266~268に類する資料である。正面に上下方向からの3枚の剥離痕が認められる。長さ2.1cm, 幅3.5cm, 厚さ1.2cmを測る。271はob-A製の剥片素材の石核で、UF232と接合する。(接合資料No16)。石核を2分割し、その分割面を打面としてUF232の素材剥片を剥取している。長さ2.6cm, 幅2.5cm, 厚さ1.0cmを測る。272はob-A製の剥片素材石核である。左側の一部を欠損している。266~268, 270, 271と同様に剥離面打面から求心的に剥片剥離を行なう無調整打面の石核である。長さ2.7cm, 幅3.7cm, 厚さ1.0cmを測る。273はob-B製の剥片素材石核であるが、剥片剥離はあまり進行していない。分割した2点が接合している(接合資料No42)。長さ2.6cm, 幅5.6cm, 厚さ1.5cmを測る。

上記の石核は剥片素材の扁平な形態をもつ石柱で、本遺跡の石核の大部分を占める。これについては後章において再考する。

磨石〔第138図274〕 第6号炉址の直西側、aブロック内から出土した。花崗岩製の扁平な礫を使用したもので、主に裏面に磨痕が顕著である。10.5cm×9.2cm×4.6cm。

原石〔第134図261, 第136図265〕 2点ともaブロック内から出土した。261はob-Cの原石で鶏卵大の円礫である。平坦面の一部に一枚の剥離痕をもち、外表面を剥いて石質を観察したものと考えられる。3.8cm×3.0cm×2.5cm。265は石材ob-Bの角礫の原石で、これも外表皮面を剥いだ痕跡が認められる。4.3cm×5.3cm×3.0cm。

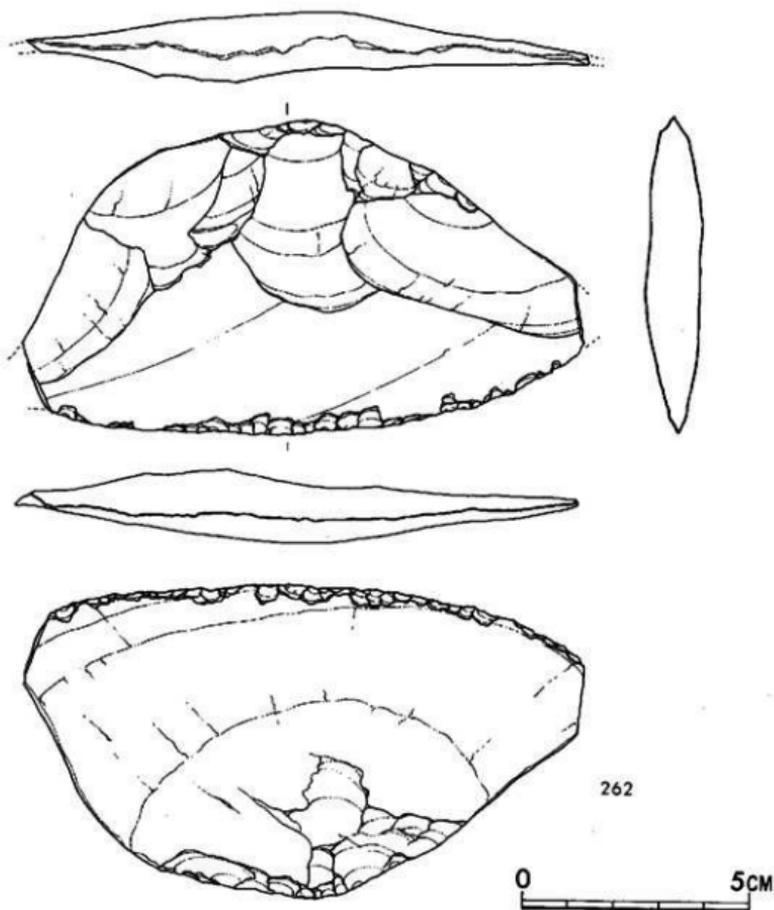
第4ブロック

第2凹部の北隅の位置に相当する箇所に分布域をもつ。ブロック内でも北部が顕著な密集状況を示すが、南部は散漫な状態である。Ⅲ層第1ブロックと重複する。Ⅲ層第1ブロック出土の砥石の破片と接合する破片を含んでいることから、このブロックとⅢ層第1ブロックの層位的分離が妥当性があるものか否か問題である。

石器は総計12点、内石鏃4点、UF4点、石核は1点のみである。砥石4点である。

石鏃〔第149図285~178〕 4点のうち完形品は277の1点のみで、他は全て脚部を欠損してい

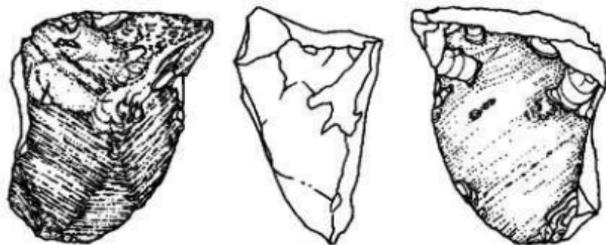
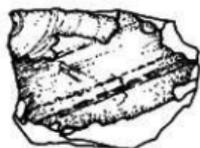
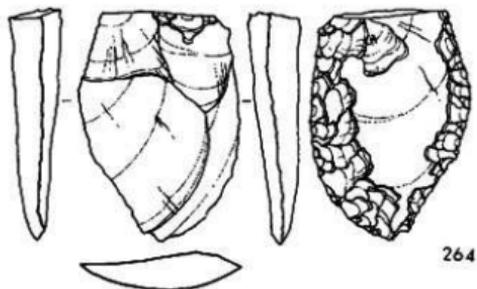
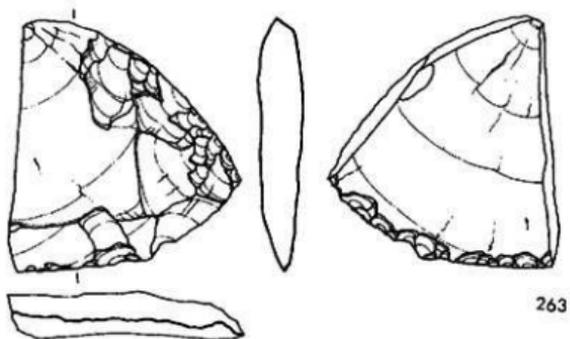
5. II層の遺構と遺物



第135図 第3ブロック出土石器実測図Ⅶ

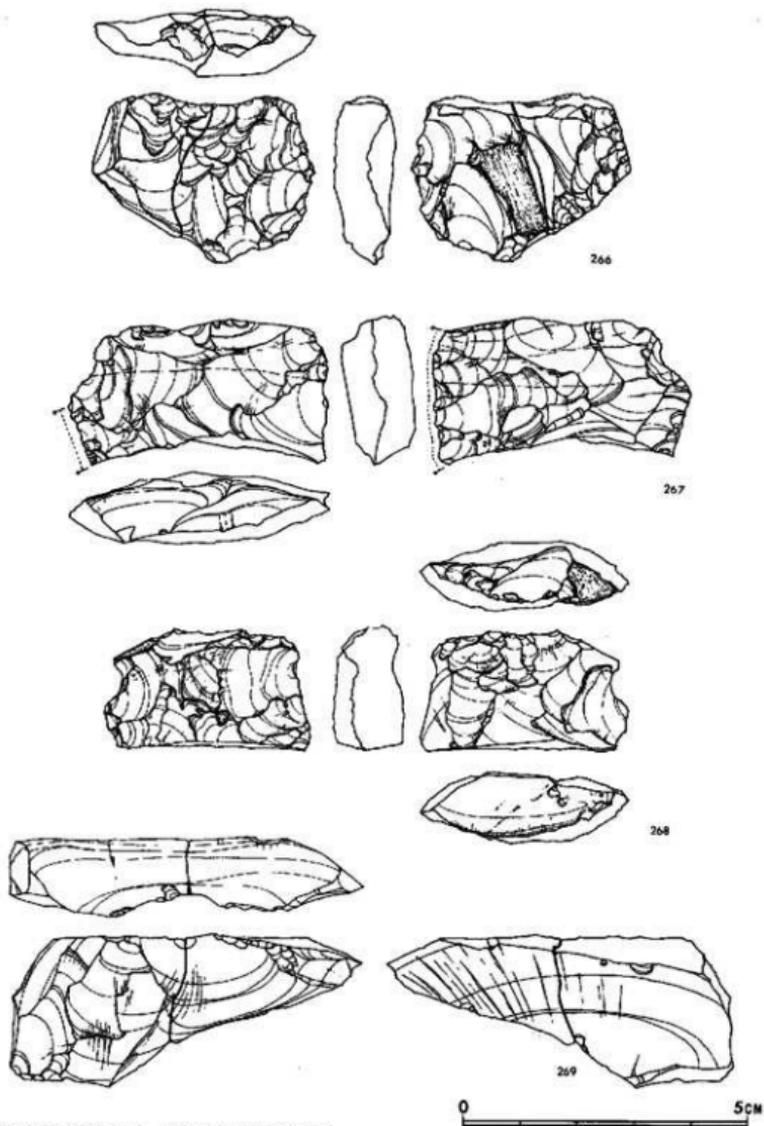
る。石材はob-B (275~277), と安山岩 (278) の二種類である。275はob-B製の剥片を利用したもので背面と裏面の一側辺に加工を施したものである。形態不明。277はob-B製の小型石鏃で脚をもつ形態に復原されるが、大きさも大きくて1cmを越えないものと思われる。裏面には大きく素材剥片の主要剥離面を残している。277はob-B製の左右対照形の石鏃である。

第4章 調査の記録

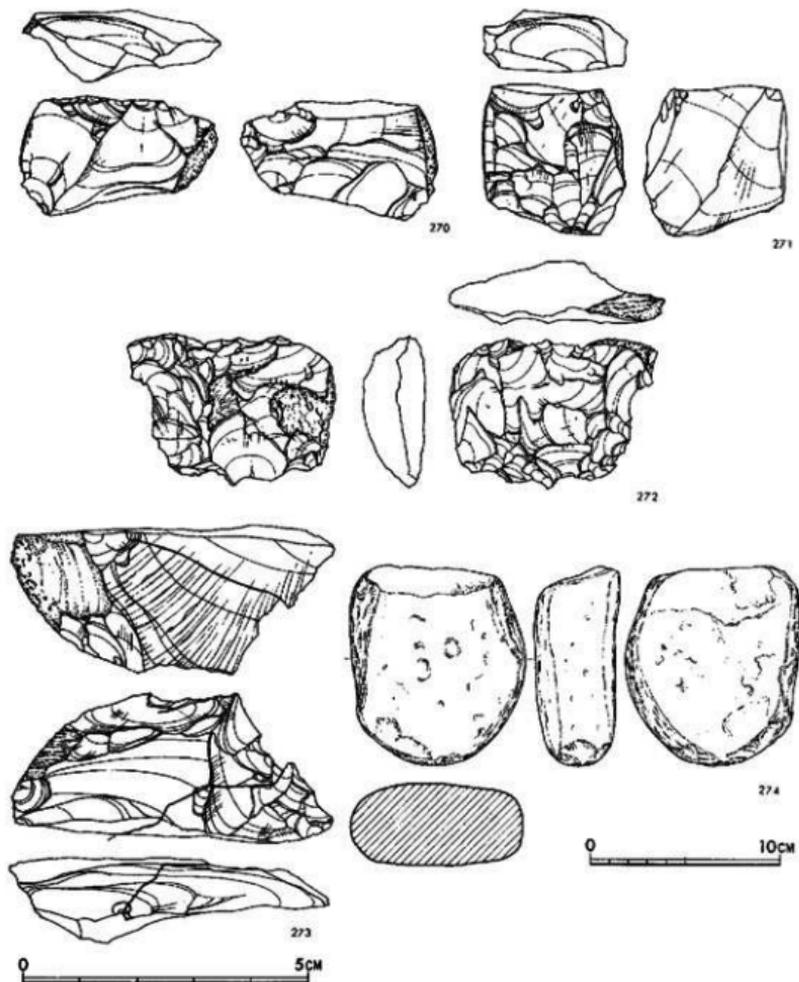


第136図 第3ブロック出土石器実測図Ⅳ

5. II層の遺構と遺物



第137図 第3ブロック出土石器実測図区



第138図 第3ブロック出土石器実測図X

剥片の周辺のみを加工しているだけで先端部は丸く整形している。右側部は素材剥片の打面部に相当し、打瘤を残しており二次加工が困難であったものと思われる。製作途上の未製品であ

5. II層の遺構と遺物

ろうか。278は安山岩製石鏃の先端部で、粗い剥片加工で整形されている。復原形態は平基の側辺がやや張り出した三角形かと思われる。

UF〔第139図279〕 4点とも黒曜石製剥片を利用している。279はob-b製の剥片の左側辺を使用したもので末端を僅かに欠損している。

砥石〔第139図282～285〕 4点が出土しているが、全て破片である。282～284はいずれも黄褐色砂岩製の砥石の破片であるが、色調や厚味の具合から同一個体であった可能性が高い。283の右側辺は砥磨面で平滑である。また284の二側辺は同じく面取りされており、方形の砥石の角部に相当する部分である。いずれも表裏面に砥磨面をもっている。285は3点の砂片の接合例（接合資料No.31）であるが、小さな破片が本ブロックから出土した。

石核〔第139図281〕 ob-A製の剥片素材の石核である。素材剥片を剥離した石核は準大の円礫であり、自然面を打面としたものである。素材剥片の背面側に周辺から剥離剥離を実施した痕跡が認められるが、端正な剥片は得られていない。素材剥片の主要剥離面が281の左側面、背面が右側面に観察できる。最終剥離は打面の方向を変え、打面を作出（打面調整か）している。最終剥片の大きさは3.0cm×0.7cmである。長さ4.3cm、幅1.8cm、奥行1.9cmを測る。

第5ブロック

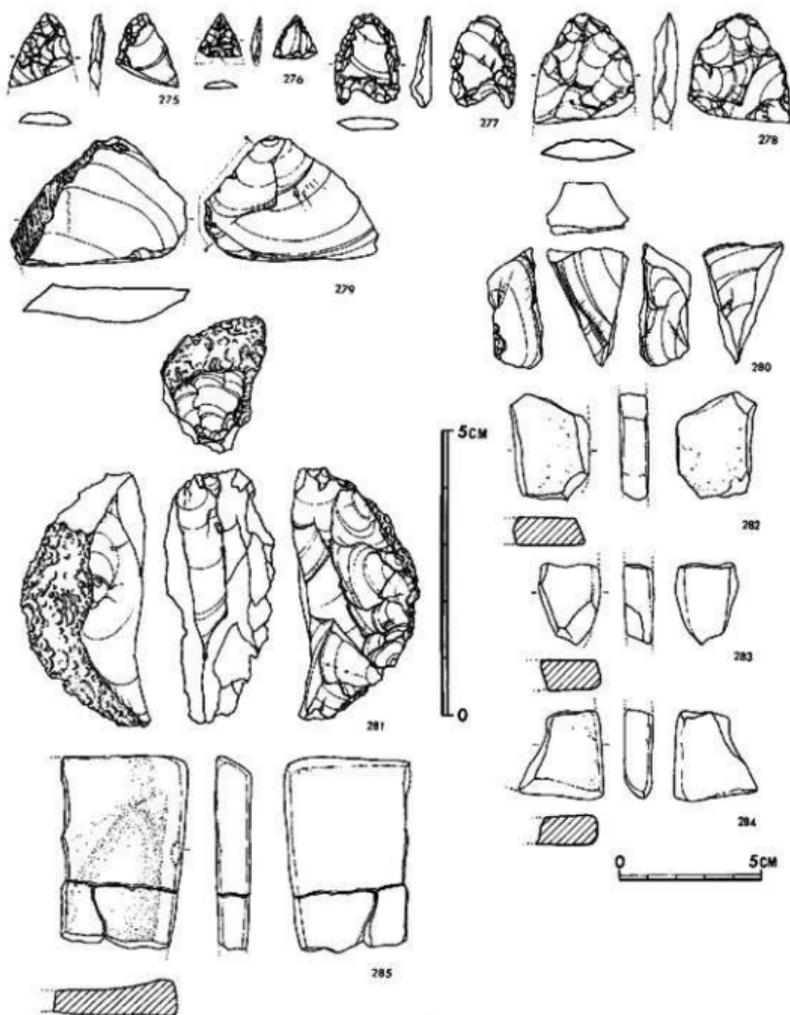
第11号、第12号炉址を中心に南、及び西へ広がりをもつブロックで、特に顕著な密集域は存在しない。第11号炉址と第12号炉址はII層内においてレベル差をもって検出されている。よって石器、石片類も二枚の生活面に分離されることが予想されるが、明瞭なレベル上の断絶も認めがたいので、一括して取り扱った。今後、精緻な分析を加えて検討しなければならない。ただし第12号炉址南側に集中するスクレイパー（第141図303、第142図304、305）とUF（第140図266）、第12号炉址に近接した石核（第143図306）、UF（第140図294）、スクレイパー（第141図302）、石鏃（第140図291）は第12号炉址の生活で出土したものであり、炉に伴うものである。また、第12号炉址西側には本ブロック出土石鏃8点中6点が集中している。接合資料はブロック内で完結するもの2例。ブロック外接合1例がある。

石器の総数は23点で、その内訳は石鏃8点、スクレイパー6点、UF7点、磨石2点である。石核は4点出土した。

石鏃〔第140図286～293〕 8点出土した中で3点が完形品（37.5%）、5点が欠損品（62.5%）である。石材はob-A製が3点、安山岩製が5点で、他の石材は使用されていない。黒曜石製の3点は全て欠損品である。復原形の大きな鏃形鏃を除くとほぼ2cm内外に集約される。復原形態の平均の大きさは黒曜石製が2.3cm×1.4cm、安山岩製が1.67cm×1.46cmと黒曜石製が長さで優る。長幅指数は黒曜石製1.66、安山岩製1.18と安山岩製石鏃の方が黒曜石に比べてすばまりの体形をとる。

石鏃の欠損部位度の頻度は、欠損品5点のべ欠損箇所数6のうち頭部3、脚部3で半分づ

第4章 調査の記録



第139図 第4ブロック出土石器実測図

づつである。

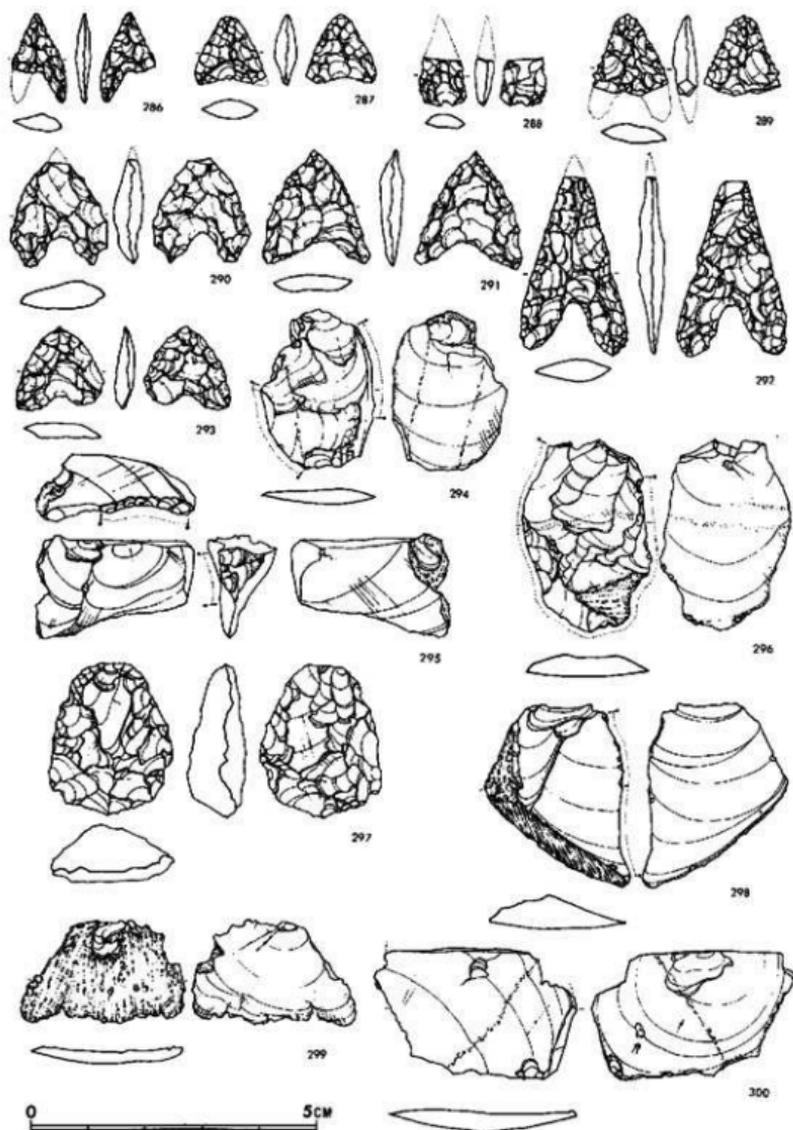
形態は平基と凹器がある。平基(288)以外はすべて凹基で大きく基部の挟りの形態で2つに分けられる。挟りが僅かであるややかなカーブを描くもの(287)、挟りがやや浅くU字形をなし、胴部がやや張り出すもの(290・291・293)、U字形の挟りで側辺が直線的なもの(289・292)、挟りが深くV字形を呈し脚部がややふくらみ加減に張り出すもの(283)等がある。289・292は鉄形鐵である。289の側辺は鋸歯状に整形されている。

スクレイパー〔第140図297, 第141図302・303, 第142図304・305〕 6点中5点を図化した。297はob-A製の両面加工の拵指状搔器である。刃部は末端の厚みのある部分であるが、側辺部の稜のつぶれも観察されることから側辺も使用されたと思われる。整形は入念に仕上げている。長さ2.7cm, 幅2.35cm, 厚さ0.9cmを測る。302は安山岩製剥片を利用したスクレイパーで末端部に裏面側からの剥離によって刃部を作出したものである。素材の形状はほとんど変えられていない。長さ6.8cm, 幅4.7cm, 厚さ1.6cmを測る。第6号炉址のすぐ西から出土している。303, 304, 305は第12号炉址の南約4mのところに集中して出土したもので、296とUFとの一括遺物である。303は安山岩製剥片を利用したスクレイパーである。剥片の末端部に裏面から加工を施しているが、刃部を僅かに欠損している。接合資料No.36で、この密集区内で安山岩の大型剥片と接合している。長さ7.2cm, 幅6.3cm, 厚さ1.25cmを測る。304は安山岩製の両面加工のスクレイパーで、刃部は両側の下半部に形成されている。刃部は両面からの粗い剥離の後細かいリタッチが施されている。素材剥片は自然打面の厚味のある大形縦長剥片で、裏面には打留、主要剥離面を残している。長さ9.2cm, 幅6.65cm, 厚さ1.7cmを測る。305は安山岩製の大型剥片の末端部に両面からリタッチを施し、刃部と形成したスクレイパーである。素材剥片は自然面打面で、外表面に近い部分の剥片である。刃部を整形加工は粗い。長さ9.5cm, 幅8.7cm, 厚さ2.5cmを測る。303～305の3点のスクレイパーはいずれも安山岩製であるが、自然面の特徴や縞文様の入り方を観察してみると異なる母岩から剥出されたものである。しかしその母岩(石核)は全く出土していない。

UF〔第140図294～298〕 全部で7点出土した。石材は7点中2点が安山岩で、他は黒曜石である。295はob-B製のすばまりの横長剥片の打面の縁辺と側辺を使用したもので、比較的大きな使用痕が認められる。296は303～305のスクレイパーと共存したもので、ob-B製の縦長剥片のほぼ全縁辺を使用している。298はob-B製剥片の側辺を使用したものである。

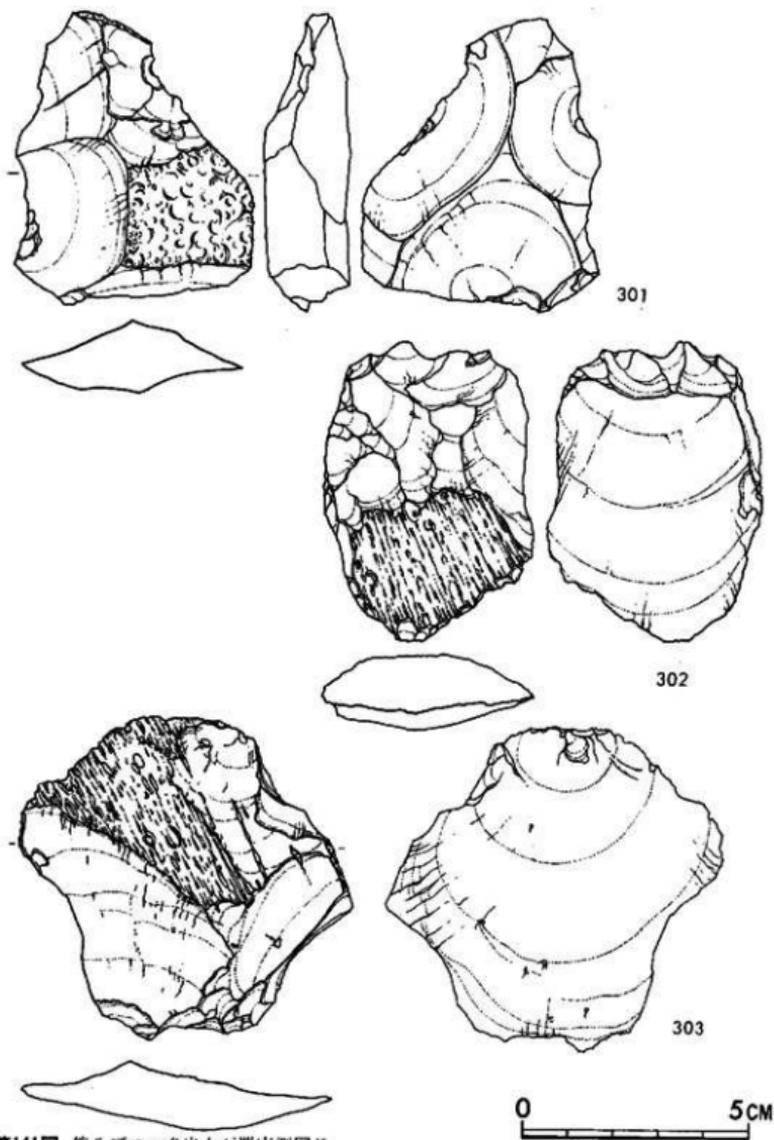
石核〔第143図306～308〕 306はob-A製の剥片石核である。背面右側から裏面にかけて一枚の剥片を剥出している。よって剥出された剥片は両面にポジティブ面を有することになる。その剥片は第3ブロックの小ブロックbから出土したUF(第133図249)で、両者は約14m離れて出土した(接合資料No.27)。その後剥片を剥取していないので石核という分類には疑問であるが、素材生産とその使用という点から石核の範疇に入れておく。長さ2.4cm, 幅4.0cm,

第4章 調査の記録

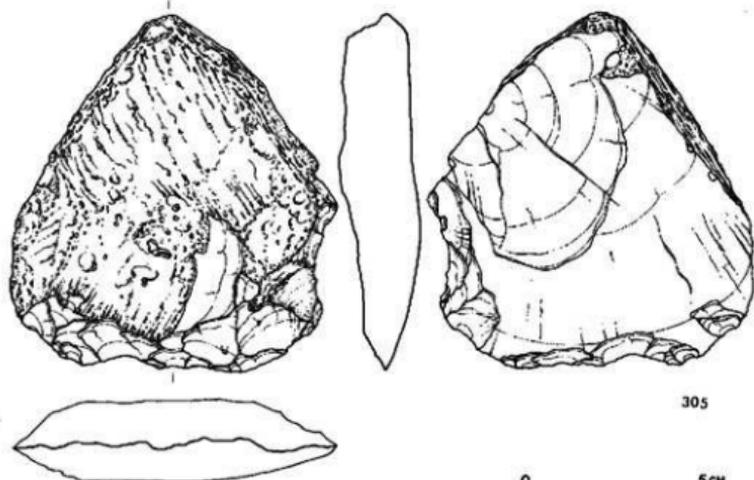
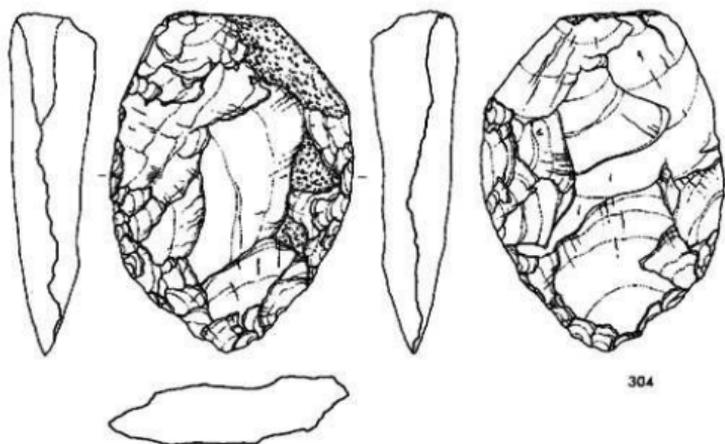


第140図 第3ブロック出土石器実測図1

5. II層の遺構と遺物

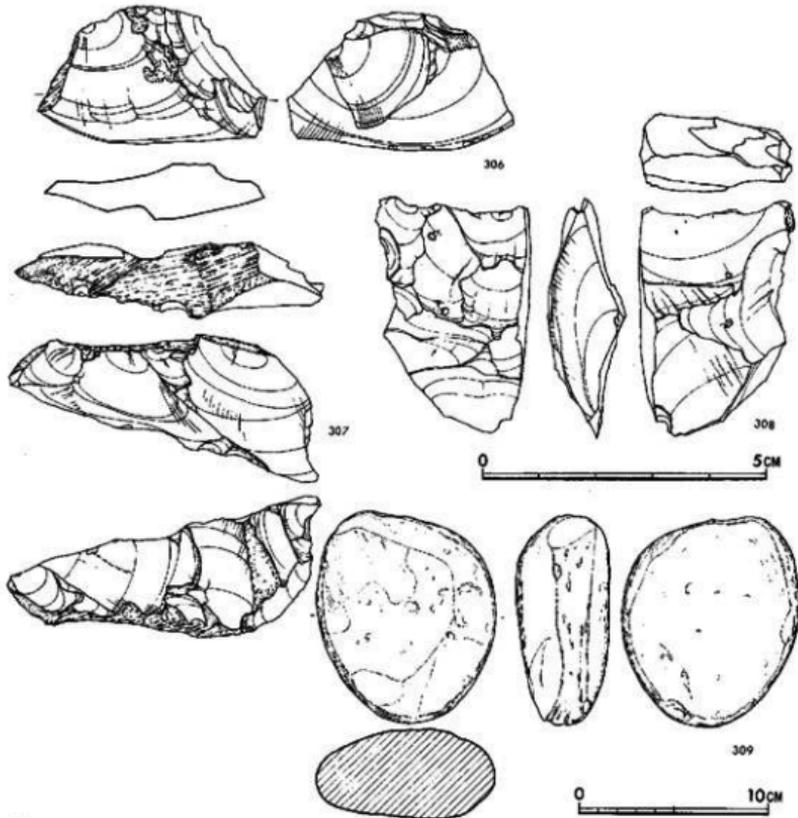


第141図 第5ブロック出土石器実測図II



第142図 第5ブロック出土石器実測図Ⅲ

5. Ⅱ層の遺構と遺物



第143図 第5ブロック出土石器実測図Ⅳ

厚さ1.1cmである。第12号炉址に近接して出土した。307はob-B製の剥片素材の石核である。表裏面に数回の剥片剥離が実施されているが、最終剥離は正面中央の自然面を打面とした剥離である。打面調整の痕跡があるが、その数は一つのみである。長さ2.6cm、幅5.5cm、厚さ1.1cmを測る。308は安山岩製の剥片利用の石核で、略半分を欠失している。剥片剥離は剥離面打面で主に上下方向から実施されている。よって縁辺はジグザグ状のエッジをもつ。長さ4.2cm、幅2.8cm、厚さ1.3cmを測る。

磨石(第143図309) ブロックの西隅の石器、石片の敷慢なところと北隅から2点出土して

上している。いずれも花崗岩製の礎を利用している。309はブロック北隅から出土したものである。扁平な形態をもつ。表面に2面、裏面に一面の磨痕をもつフラットな面が観察される。側辺部の利用はない。長さ11.4cm、幅9.4cm、厚さ5.1cmを測る。もう一方の磨石はやや厚めの礎の表裏面を利用したものである。長さ12.6cm、幅8.8cm、厚さ5.4cmを測る。

第6ブロック

第9号炉址の西側に顕著な密集域をもつブロックで、第3ブロック北部とともに比較的集約する部分をもっている。この炉西部の集中域は、Na28、Na29、Na30の3つの接合資料を含んでおり、石器製作を行なった場と考えられる。石器、石片はこの集中区を中心に南東へ拡がりをもつ。第9号炉址と第3ブロック第8号炉址の間の無遺物地帯は、F-1号墳の石室の掘り込み部分に相当し、包含層が削平された状況を示している。第10号炉址は石鏃型の磨石(第145図333)と石皿の破片(第145図334)を含むものであるが、それ以外の遺物の出土は殆どない。この上位である第一層の該当域には、比較的まとまった石器の集中区が存在し、石器の石材も均質である。これは両者を断面図で比較した場合、僅か10数cm前後のレベル差となってあらわれるため分離したが、軽量遺物の浮遊化現象によるものと考えられ、まとめて取り扱える可能性がある。よって、第6ブロック内には第9号炉址と第10号炉址を中心とした二つのグループに分けることができよう。ただし、この第10号炉址付近より出土した遺物については石皿(334)磨石(333)を除いて、I層の出土遺物の項で説明する。

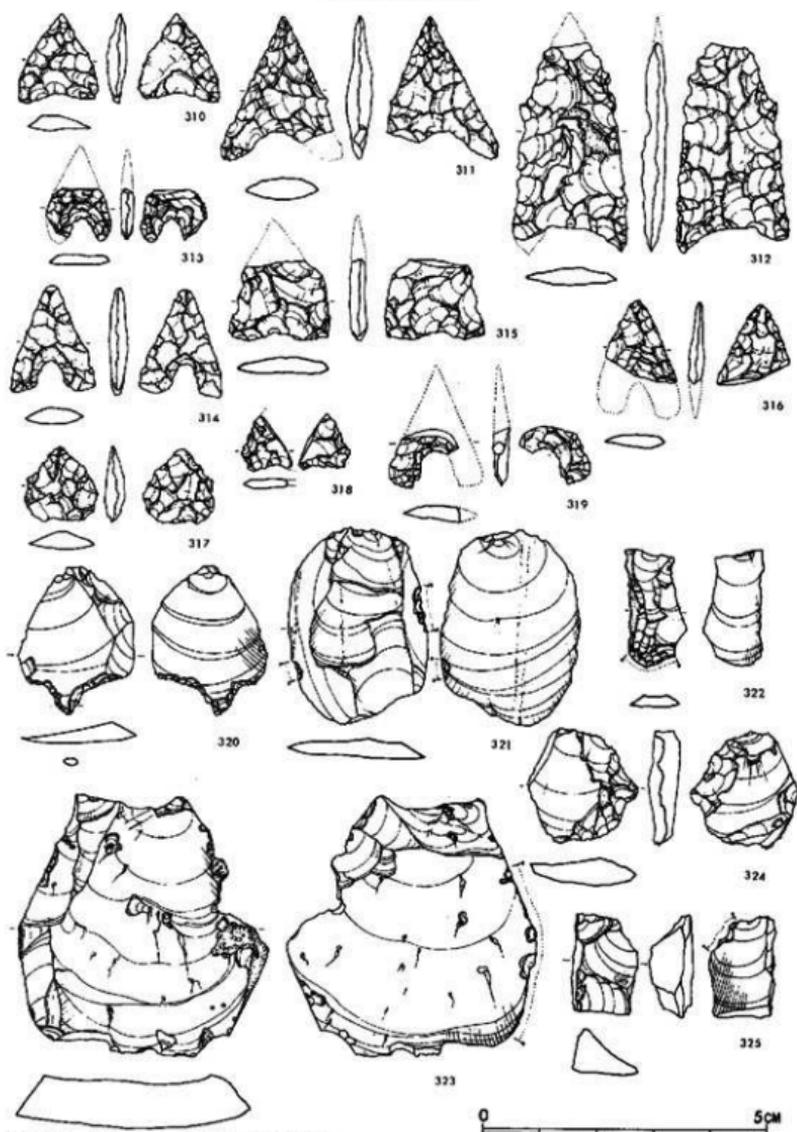
石器の総数は上記2点を除いて23で、その内訳は、石鏃10点、スクレイパー2点、石錐1点、UF7点、磨石2点、環状石斧1点である。石核は3点出土した。

石鏃(第144図310-319) 10点のうち完形品が3点(30%)、破損品が7点(70%)である。石材別ではob-B製1点、ob-C製5点、安山岩製4点と、ob-Cが半数を占めている。また欠損率もob-Cが40%と最も低い。

形態的には平基が1点(317)以外は全て凹基の石鏃である。凹基は基部の挟りが浅くゆるやかに弯曲したもの(310、212、315、318)、挟りがやや深く脚が外に張り出すもの(311)、挟りが深くU字形をなし脚が長いもので側辺は直線的であるもの(313、314、316、319)に分けることができる。313はob-C製の局部磨製石鏃の欠損品で、表裏面の一部に研磨された面をもっている。314はob-C製の石鏃であるが、全体的に摩耗しており、剥離面が不明瞭で平滑である。形態、大きさが、復原可能なのは10点中7点で、その復原長幅は、黒曜石製(ob-C)が平均2.57cm×1.38cmで、安山岩製が平均2.13cm×1.8cmと黒曜石製の方が長さの点で優っている。ただし、312の大形品を除けば20.2cm×13.2cmと長さ幅ともに安山岩の方が大きい。

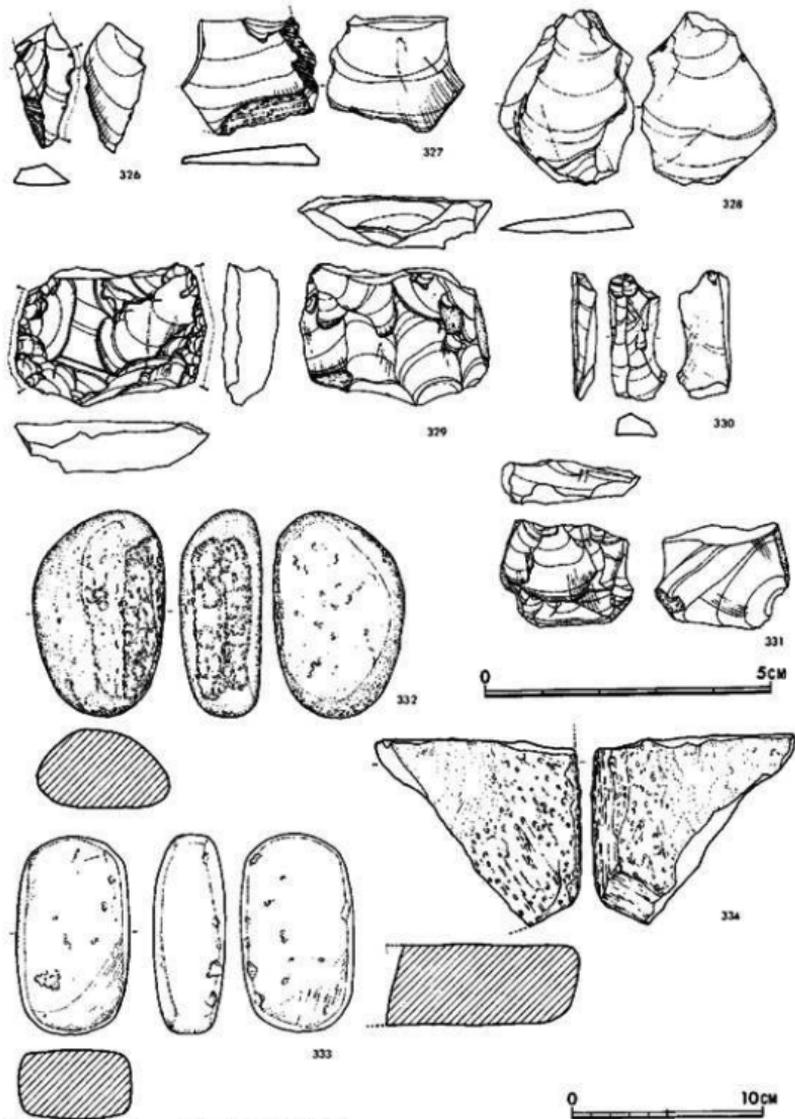
長径指数は黒曜石製石鏃が1.67、安山岩製が1.17と黒曜石製石鏃の方がその値が極めて大きく、安山岩製に比べて細身であることを示している。312の石鏃はその値が2.14と極めて大で長さか幅の2倍以上もある。

5. II層の遺構と遺物



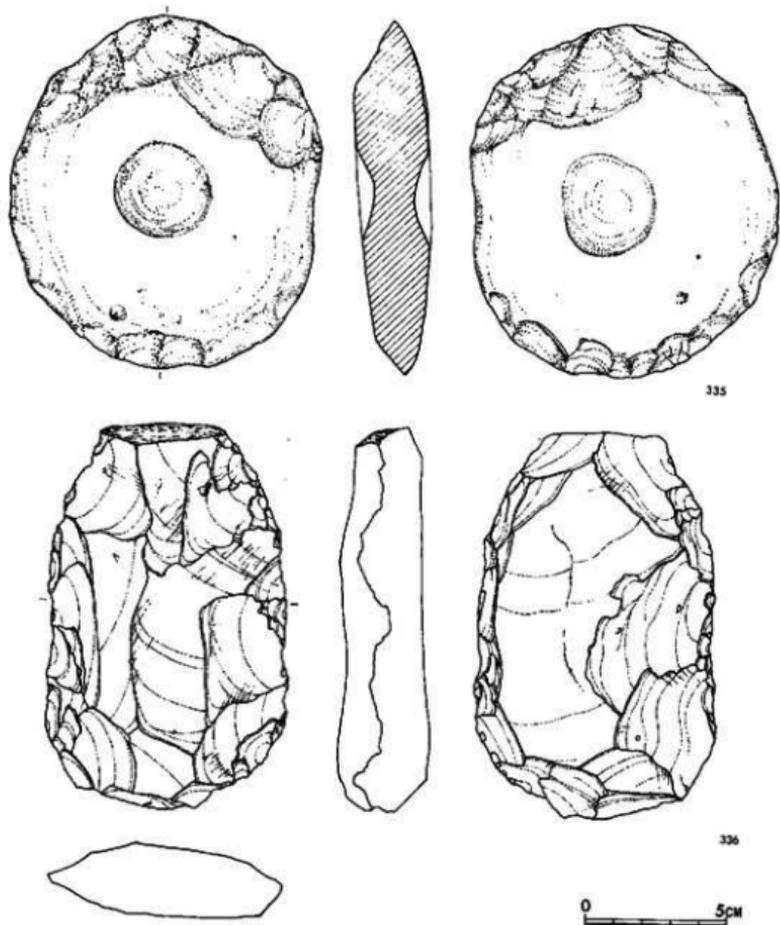
第144図 第6ブロック出土石器実測図 I

第4章 調査の記録



第145図 第6ブロック出土石器実測図II

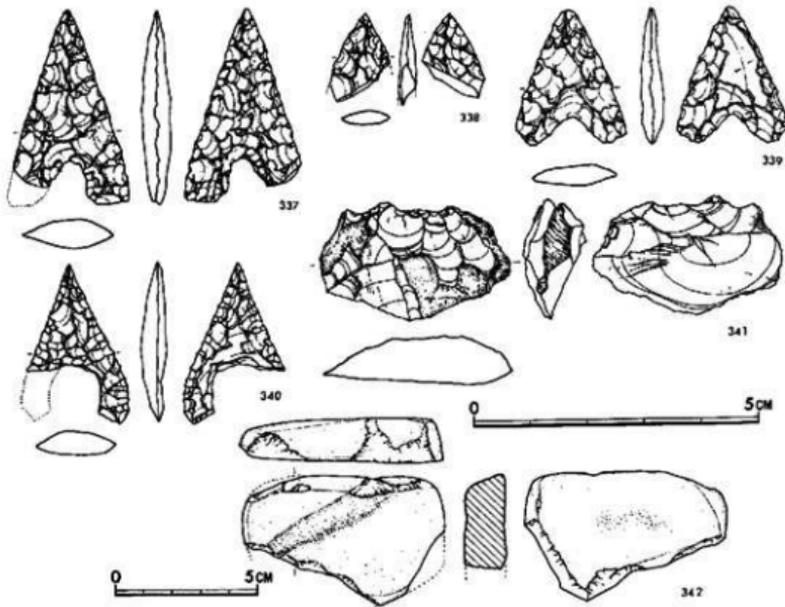
5. II層の遺構と遺物



第146図 第6ブロック出土石器実測図Ⅲ

欠損状況は、欠損品7点の総欠損箇所数9ヶ所のうち脚部6（66.7%）、先端部3（33.3%）、と脚部の欠損が多いことがわかる。

スクレイパー〔第144図324〕ob-B製の小型のスクレイパーで、剥片の一側辺に両面からリ



第147図 第7ブロック出土石器実測図

タッチを施し刃部を形成している。表裏面に素材剥片の背面及び主要剥離面を大きく残したままである。長さ2.1cm、幅1.9cm、厚さ0.5cmを測る。

石錐〔第144図320〕 第9号炉址に近接して出土した。ob-B製の縦長剥片の末端に両面からの二次加工を施し、錐刃を形成している。他の縁辺には加工の痕はみられない。その両側から30cm程離れて出土した剥片と接合した（接合資料No.28）。両者の剥片の形態は非常によく似ている。長さ2.6cm、幅2.1cm、厚さ0.6cmを測る。

UF〔第144図321～323, 325, 第115図326〕 7点ともすべて黒曜石製剥片を利用したものである。内5点を図示した。321はob-B製の端正な縦長剥片を利用したもので、側辺に部分的に使用痕が認められる。323はob-C製の人形剥片の右側辺を使用している。

環状石斧〔第146図335〕 第9号炉址の南約3mのところから出土した。石材は硬砂岩製で素材の形状は不明である。周辺部を粗い剥離で整えた後研磨している。両側辺は研磨されているが、両端部は剥離痕を残したままである。表裏面の中央部には径3.2cm程の穿孔途上の凹部が残されている。凹部面は滑らかで、磨き出しによる穿孔法を用いたと考えられる。長さ12.4cm、

5. II層の遺構と遺物

幅10.8cm, 厚さ2.5cm, 凹部の厚さ1.5cm, 重量495gである。

磨石〔第145図332〕 花崗岩製の扁平な礫を利用したもので、第9号炉址両側の密集地から出土した。裏面の左半分、及び裏面に磨痕のある平坦な面をもつ。表面右側半分と側面は粗い礫素材の表面が残されたままである。他の面はすべて滑らかな表面をもつ。長さ10.7cm, 幅6.9cm, 厚さ4.2cmを測る。炉南西部から出土した磨石は玄武岩製の正面観長楕円形扁平なものである。約劣を破損している。全面に磨痕が認められる。残存長5.2cm, 幅8.8cm, 厚さ5.0cm。

石核〔第145図329, 331, 第146図336〕 329はob-A製の剥片素材の石核で、扁平な体形をもつ。表裏面とも剥離を実施しているが、表面の両側にはその後細かいタッチが加えられている。上部に分割面をもつ。これは剥離後の分割である。長さ2.5cm, 幅3.4cm, 厚さ0.8cmを測る。331はob-B製の剥片素材の石核である。ブロック内で出土した剥片と接合した（接合資料Na30）。長さ1.8cm, 幅2.4cm, 厚さ0.4cmを測る。打面は無調整打面である。336は安山岩製の大型剥片を素材とし、その両面から交互剥離状に剥取したものである。図示した石核表面が素材剥片の主要剥離面側にあたる。得られた剥片はその剥離痕からみると幅5cm大の大型剥片も存在することがわかる。長さ13.2cm, 幅8.4cm, 厚さ2.8cmを測る。

第10号炉址出土石器〔第145図333, 334〕 333は炉西隅から出土した玄武岩製の石皿型の磨石である。表面は一つの平坦面でなく角が落ちるように磨かれている。長さ10.5cm, 幅6.0cm, 厚さ3.8cmを測る。334は花崗岩製石皿の破片で、皿の内部でつきささるようにして出土した。側面も面取りをして角を作り出している。中央部に作業面が観察される。現存長9.7cm, 幅10.4cm, 厚さ4.3cmを測る。

第7ブロック

遺跡の最南端にあるブロックで、第13～14号の3つの炉址を含む。石器の集中はそれほど密でなく、炉を離れて西側に分布している。

石器は石鏃4点、砥石1点の計5点のみである。他のブロックの境界が不明瞭であるのに対し、このブロックは単独で画然とした集中区と見做すことができる。

石鏃〔第147図337～340〕 4点中、完形品は339の1点のみである。石材別ではob-A製が1点、ob-B製が1点、安山岩が2点である。

形態的にはバラエティがあり、1点1点異なっているが、337と340は所謂鏃形鏃と称されるものである。337はob-A製で入念な整形仕上げを行なっている。脚を欠損している。337は安山岩製の剥片を横位に用いたものであるが、全体に磨耗が激しく剥離痕が明瞭でない。

砥石〔第147図342〕 赤褐色砂岩製の砥石の破片である。復原形は長さ7.1cm, 幅4.6cm, 厚さ1.6cmの正面観が隅丸の長方形で扁平なものである。表面には線状の浅い凹みが観察される。

(小畑)

(4) 小結

以上、前節においてⅡ層の遺構および出土遺物である土器、石器の出土分布と遺物について詳述したが、ここでⅡ層についての若干のまとめをして小結としたい。

①遺構

Ⅱ層の遺構は遺跡全面にわたって検出した炉址15基であるが、この中には厳密には炉址と認定できない集石も含んでいる。炉址およびその拡散状況を示すものは第1、2、4、5、6、9、10、11、12、13、14、15号炉の12基である。分布はⅢ層段階で、第2凹部が埋り、Ⅱ層の時はその使用が不可能になるために、第2凹部ではその前面に炉の築成が行なわれ、第Ⅰ凹部から第2凹部前面、第3凹部前面とほぼ並列している。しかし、この分布状況も詳細にみると、第4号炉址と第5号炉址、第9号炉址と第10号炉址、第11号炉址と第12号炉址、第13号炉址と第14号炉址と第15号炉址という具合にきわめて近接する2基以上の炉址が存在することがわかる。これら近接した炉址は最も近接する場合は1m前後で、炉を中心とした生活空間を考えた場合は同時に存在し得ないことは明らかであり、また、発掘における所見でも、その検出面の高低差は明らかであった。よって、これら近接する炉址間には当然のこととして、時間差を求めなければならない。先に指摘した近接した炉址間で、その前後関係をみると、第4、5号炉址間では炉の残存状況、検出面から第4号炉址→第5号炉址、第9、10号炉址間ではその検出面の違いから第10号炉址→第9号炉址、第11、12号炉址間では明確な検出の違いから第11号炉址→第12号炉址、第13～15号炉址では検出面の違い、および残存状況の違いから第15号炉址→第14号炉址→第13号炉址という関係が存在する。このことから言えるのは、少なくとも検出面に大きな差がない場合は、より拡散した炉址が先行するものとして把握され、また、残存状況が良好な場合は、その埋没は急激であったことが想定される。また、近接した炉址間で、その先行するものは、第4、10、11、15号炉址であるが、その形態が把握できるのは第4、11号炉址である。第4号炉址は規模が大きく、深く掘り込み、周囲に石を立て並べたもので、第11号炉址は小規模、かつ、敷石が平坦である特徴をもつ。次に後続する炉は第5、9、12、13、14号炉址であるが、その形態が把握できるものに第5、12号炉址がある。第5号炉址は大規模で残い皿状をなし、花卉状に敷石したもので、第12号炉址は大規模で、深く掘り込み、立派な石囲い炉である。以上、炉の関係から炉の前後関係をみると先行する炉の一つであった第4号炉址は後続する炉の一つである第12号炉址と類似する点が多く、第12号炉址がより残存状況が悪いものとして、一つの類型の中でおさめられるので、この2基がほぼ同時存在するとみた場合、第11号炉址は、これらに先行する類型として把握され、また、第5号炉址は後続するものとして把握され、ここに炉の形が時間差として保存状態の良好なものでいえば第11号炉址（Ⅰ類型）→第12号炉址（Ⅱ類型）→第5号炉址（Ⅲ類型）としてその変遷を追うことができる。また、これとは別に第13～15号炉址にみられるように炉址の破壊、拡散状況も、その過程が把握されるので

ある。

以上の結果をふまえて、炉の分布を見た場合、I類型としては第1凹部の中央に位置する第2号炉址、第2凹部北端部前面に位置する第6号炉址、第2凹部北端前面に位置する第11号炉址の3基があり、それぞれの間には約21mと約24mの距離を有する。II類型としては第1凹部北端部前面に位置する第1号炉址（この類型に入れることには若干の疑問点もある。）、第1凹部南端部前面に位置する第4号炉址、第2凹部南端前面に位置する第12号炉址の3基があり、それぞれの間には約20mと約28mの距離を有する。III類型は第1凹部南端部前面に位置する第5号炉址1基のみが明確であるが、I、II類型のあり方から推測すれば、第2凹部中央部前面に位置する第10号炉址、第3凹部前面に位置する第12号炉址がIII類型の拡散したものとみることができる。各炉址間の距離はそれぞれ、約19mと約22mである。このようにI～III類型の炉址は発掘区内では3基よりなる可能性が強く、それぞれの間の距離も約20m離れていて、それぞれが一定の生活空間を有し得る状況である。このように炉址の類型とその分布が一致することは、炉址のみに限って言えば、II層中に少なくとも3時期以上の生活の営みを考えることができる。（山崎）

②土器について（第148図）

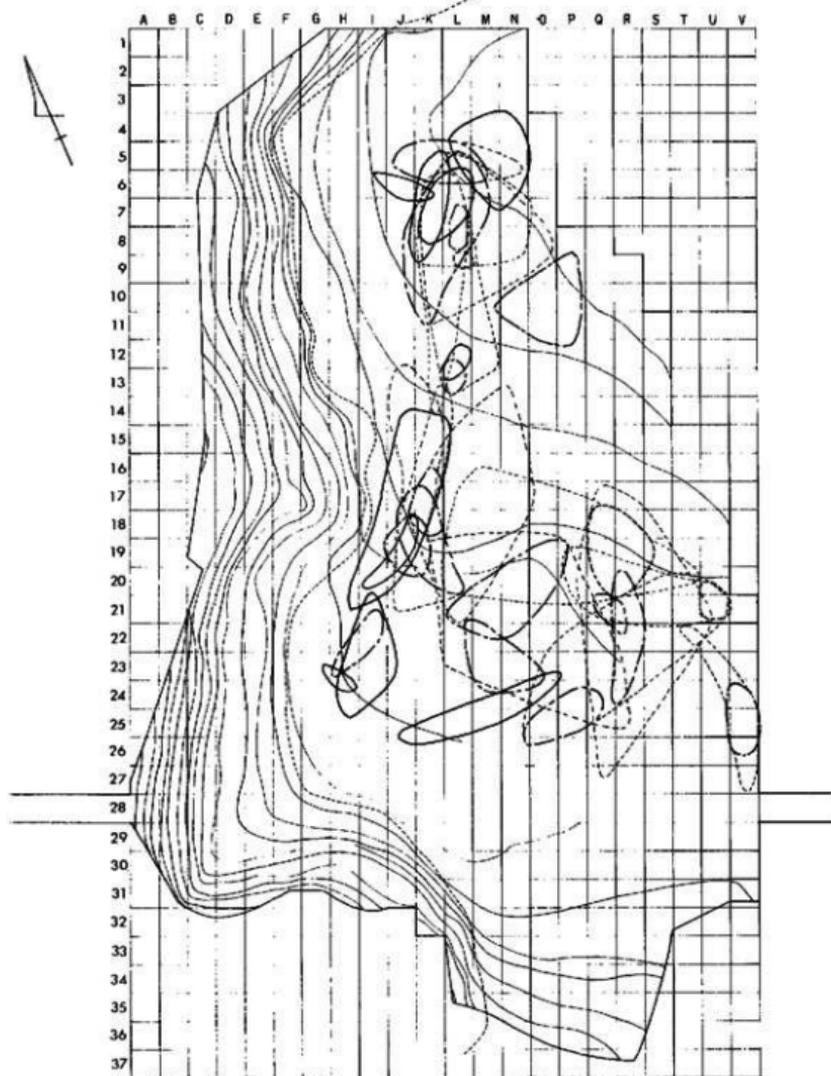
A. 土器の分布

II層出土の各個体の土器分布を重ねさせたのが第148図である。この土器分布からII層における遺跡利用のあり方をみていこう。土器の分布は主に第2凹部北半部前面から第1凹部にかけて分布し、第3凹部周辺に遺物の分布は非常に希薄である。

土器の分布は大きく3つのグループに分けることができる。第1グループは第1凹部前面の20m×13mの範囲で11個体+αの土器分布の重複がみられる。第2グループは第2凹部北半部から、第1凹部の境の岩盤の突出部前面、22m×5mの範囲で8個体+αの土器の重複がみられる。第3グループは第2グループの南東部前面17m×25mの範囲で9個体+αの重複がみられる。いずれのグループも土器の重複関係が顕著であるが、第3グループの中心部に上部に築造された古墳の墓塚が存在するため、その部分に空白部がみられるが、これは本来の姿ではない。以下、各グループの整理を行い問題点の抽出を試みることにする。なお、土器の分布と炉址との関係は第5章でふれるのでここでは省略する。

第1グループは押型文土器4個体、無文土器4個体+αの重複部である。この場所はIII層の後半から使用が開始されII層で最盛期をむかえる。この重複部で注意されるのは北側の重複部と、やや土器個体が希薄である南側の重複部との間に遺物の少ない空間が存在する点である。土器の拡散状況には東西方向に拡散した状況を示すもの2個体、南北方向に拡散した状況を示すもの6個体、面的広がりをもって拡散したものの3個体があり、それぞれの土器の拡散状況の違いが何を意味するのか興味あるところである。

第4章 調査の記録



第148図 II層出土土器の分布図

0 10M

5. II層の遺構と遺物

第2グループは押型文土器4個体、無文土器4個体+ α の重複部である。この重複部は南北に細長い分布を示している。土器の拡散状況は東西方向に拡散した状況を示すもの1個体、南北方向に拡散した状況を示すもの6個体、面的広がりをもつもの1個体があり、第1グループ同様にその拡散状況の相違が指摘できる。

第3グループは押型文土器6個体、無文土器1個体+ α の重複部で、土器の広がりとしては最も広く、第2凹部前面の段丘上全面に広がる。土器の拡散状況は、このグループでもその違いが求められる。すなわち、東西方向の拡散状況を示した土器は4個体存在し、南北方向の拡散状況を示すもの2個体、面的広がりをもつもの1個体が存在する。

このように各グループに共通して認められる、東西方向、南北方向、面的広がりとの土器拡散は、各グループに共通した要素によってその拡散が促進されたことがうかがえる。各グループに共通する要素として最も考えやすいのは自然による拡散とみることであり、この拡散が時期的要素を示しているか否かは、各土器間の層位関係、型式等、詳細に検討する必要があるが、先に検討した炉址が3時期に分かれることと符号し注意されるところである。また、土器個体は別でも、同一時期、同一型式の土器が2グループにわたってみられる場合がある。押型文土器XIIIと押型文土器XIVの場合がそれで押型文土器XVは第1グループに、押型文土器XIIIは第2グループに存在する。このことが何を意味するかは今後の検討課題として残しておく。

B. 土器の重複関係

II層内における各土器の重複関係から、その前後関係を把握するために、最も重複関係の認められる部分、つまり第1グループではI-6、J-6、K-6、L-6、M-6、N-6グリットの1列とK-7、L-7、M-7、N-7グリットの1列の2列において、第2グループではH-22~25グリットの1列とJ-16~19グリットの列、K-16~19グリットの3列において、第3グループではN-19~26グリットの1列とR-18~23グリットの1列の2列において土器の上下関係を検討してみよう。

まず第1グループのI-N-6グリットの列では8個体の押型文土器、無文土器の重複関係がある。土層堆積が斜面であるために土器の移動が激しくその上下関係をもとめるのは容易ではないが大体的傾向をつかむことはできる。最も先行するものと考えられる土器は無文土器Vで、それよりやや後続する土器に押型文土器IIと木葉文土器(?)がある。さらに、これらの土器に後続すると考えられるものに無文土器VI、無文土器III、押型文土器XIV、無文土器IIがある。以上の傾向はその上下関係を把握できるが、層内ではいずれも混在状態にある。K-N-7グリットの列では5個体の土器が重複していて、その上下関係は最も下部に無文土器Vが出土し、その上に無文土器III、さらにその上部に無文土器II、やや間をおいて押型文土器XIVが重なる傾向ができる。以上2列のグリットでその上下関係を検討したが、これをまとめると

下の関係がつかめる。しかし、この関係は一定の面をもって重なり合うものでなく、その傾向をとどめるにすぎない。古い順に記すと、無文土器Ⅴ→押型文土器Ⅱ、木葉文土器(?)無文土器Ⅲ、Ⅵ→無文土器Ⅱ→押型文土器Ⅵとなる。

次に第2グループのH-22~25グリット列では3個体の土器が重複している。いずれもⅡ層下部の出土であるがその上下関係は比較的良好な状態で把握することができる。最も下部に出土する土器は無文土器Ⅵ-1で、その上に無文土器Ⅰがほぼ南をもって重なり、そのさらに上に押型文土器Ⅳが重なる。J-16~19グリット列では4個体の土器の重複がみられる。このグリット列ではH-22~25グリット列のように明確に分離できず、やや混在する状況があるが、その傾向は十分に把握できる。すなわち最も下部に出土する土器として押型文土器Ⅳと押型文土器Ⅵがあり、この両者は共伴関係にあるとみて良い。この両土器の上部には無文土器Ⅵ-9の底部破片が重なり、それと混在する状況で押型文土器Ⅳがのっている。K-16~19グリット列では4個体の土器が重複し、最も下部から出土する土器はJ-16~19グリット同様に押型文土器Ⅳ、Ⅵであり、その上部に押型文土器Ⅳが重なり、その上に無文土器がのっているとJ-16~19グリット列と全く同様の結果が得られる。以上、第2グループの3列のグリットについて土器の上下関係を検討したが3列で共通して出土する土器がないために、その関係は把握しがたいが、H-22~25グリット列の出土土器すべてがⅡ層下部であること、J-16~19グリット列、K-16~19グリット列の最も下部から出土する押型文土器もⅡ層下部に相当し、またH-22~25グリット列の押型文土器ⅣとJ-16~19グリット列、K-16~19グリット列の押型文土器Ⅳ、Ⅵは形式的に同じであり、この三つの土器は共伴する可能性が強く、これから3列のグリット列をまとめた土器の上下関係は、無文土器Ⅵ-1→無文土器Ⅰ→押型文土器Ⅲ、Ⅳ、Ⅵ→無文土器Ⅵ→押型文土器Ⅳ→無文土器の順が確定できる。

最後に、第3グループの各グリット列について検討してみよう。N-19~26グリット列では3個体の土器の重なりがあり、最下部に出土する土器は押型文土器Ⅲで、その上のⅡ層中位に押型文土器Ⅴと押型文土器Ⅳがあるがその上下関係は明らかにできない。R-18~23グリット列では3個体の土器の重なりがあり、最下部に出土する土器は押型土器Ⅳでその上に押型文土器Ⅰが重なりさらにその上に条痕文土器Ⅱがのっている。両グリット列の土器の上下関係は両者に重複する土器がないため明らかにしがたい。

以上、各グループにおける土器の上下関係をのべたが、第5章でさらに編年的検討を加えることとする。(山崎)

5. II層の遺構と遺物

③石器について

II層から出土した石器・石片の総数は2112点でうち石器が299点(14%)、石核が36点(1.6%)、原石が1点(0.04%)である。石器・石片の分布状況は第1～15の炉を中心に密集する傾向がある。中でも第1ブロック、第3ブロック西半部、第6ブロックは数多くの接合資料をもつ密集の顕著な小さなブロックを有している。石片の多さ、接合資料などから石器の製作、使用の状況を推察させる場である。第4ブロックはIII層第1ブロックと同一時期の可能性があり、第1ブロック第2号炉址東側の空白部、第6ブロック第10号炉址南側の空白部にはそれぞれI層の当該地の石器密集域が入る可能性が高い。

石器の種類とその割合は、石鏃14点(38%)、スクレイパー46点(15.4%)、石匙3点(1%)、石鏃2点(0.7%)、彫器1点(0.34%)、使用痕のある剥片103点(34.4%)、二次加工のある剥片2点(0.7%)、石斧3点(1%)、砥石9点(3%)、磨石12点(4%)、異形局部磨製石器2点(0.7%)、環状石斧1点(0.34%)、石皿1点(0.34%)で、III層に比べ石鏃の割合が少くなり、使用痕のある剥片の割合が増加する傾向にある。狩猟用具、植物性食物加工具、生活用具別では、38%、4.35%、56.77%の割合を示す。

II層は押型文土器の型式から3つの時期に分けられる(稲荷山式、早水台式、田村式の時期)。これらはそれぞれ遺跡内において3ヶ所に展開しており、計9のグループの占置をみたことになる。1グループごとの石器の数は、石鏃12.7点、スクレイパー5.1点、石匙0.33点、石鏃0.22点、彫器0.11点、使用痕のある剥片11.4点、二次加工のある剥片0.22点、石斧0.33点、砥石1点、磨石1.3点、異形局部磨製石器0.22点、環状石斧0.11点、石皿0.11点、石核4点、剥片、チップ119点である。その個数が1に満たないもの石匙、石鏃、彫品とくに異形局部磨製石器、環状石斧、石皿などは、この3つの時期の一時期ないし単一のグループに属する可能性がある。また剥片、チップの個数が他の層に比べて多いようであるが、剥片石器、剥片、チップの数は石核1個あたり平均57.3個とIII層(109.8個)、I層(87.1個)に比べると少ない。グループ単位の石核、剥片、チップ数が少ないことは遺跡内における石器製作の効率の低さというより逆にI・III層の石核の少なさを問題として、石核の遺跡外への搬出を想定してみる必要がある。しかし、これには目的剥片と破片の量的比率の検討を加味して考え直す必要があろう。

スクレイパーは所謂指撥器と称される小型のものと大型剥片を素材としたものがあり、後者については刃部が片方から加工されるものと右側から作出されるものの二者がある。スクレイパーの形態の分化は何らかの用途の違いが考えられる。

本層出土の異形局部磨製石器は一般に「トロトロ石器」と称されるもので、西日本を中心として縄文時代早期に散見される特異な石器の一つである。その分布は中部地方を中心に関東、近畿、中国、九州に及んでおり、押型文土器と極めて密接な関係を有している。近年、この石器に対する関心の高揚、縄文時代早期遺跡の発掘例の増加に伴ない九州においてもその類例が

数多く知られるようになってきている。副島邦弘氏⁽²⁾、豊崎晃一氏⁽³⁾らの出土地名表にその後管見ののぼったものを加えると現在九州内における異形局部磨製石器の出土地は次の18箇所である。⁽⁴⁾長崎県泉福寺洞穴⁽⁵⁾、岡北側台地⁽⁶⁾、小ヶ倉遺跡⁽⁷⁾、福岡県深原遺跡⁽⁸⁾、蒲田遺跡⁽⁹⁾、法華原遺跡⁽¹⁰⁾、大道端遺跡⁽¹¹⁾、柏原下遺跡⁽¹²⁾、大分県早水台遺跡⁽¹³⁾、ヤトコロ遺跡⁽¹⁴⁾、オドリ畑⁽¹⁵⁾、熊本県中後追遺跡⁽¹⁶⁾、小川遺跡⁽¹⁷⁾、柿迫遺跡⁽¹⁸⁾、舞ノ原遺跡⁽¹⁹⁾、山ノ口遺跡⁽²⁰⁾、湯舟原遺跡⁽²¹⁾、東遺跡⁽²²⁾。これらの資料はどれも押型文土器を伴出しているが、その細かい所属時期については不明である。本遺跡では押型文土器VI類(田村式の直前)の時期に比定され、これまでこの種の石器の所属時期について述べられてきた所見とほぼ一致する。また吉田英敏氏の述べる如く鍬形鎌との関連性が強いことは、本遺跡においてII層での鍬形鎌の増加という形で認められるのである。異形局部磨製石器の用途については「石鎌」のもつ本来の効力を「皆無」にすることによる狩猟活動規則に関連した特殊な石器⁽²³⁾という指摘があるように「特殊な石器」として認識されているようであるが具体的な用途に関しては不明のままである。ただし、本遺跡で認められるごとく遺跡内で製作された痕跡がなく他から搬入されたものであること、遺跡内で遺棄されること等がそれぞれについて示唆を与えるものである。製作地の追跡、石材原産地の同定がその解明の糸口になると思われる。

(小畑)

< 註 >

- (1)津田守一 「神地遺跡出土の異形局部磨製石器について」『歩跡』第3号 1976
 (2)副島邦弘 「大道端遺跡の石器について-②異形局部磨製石器」『九州縦貫自動車道関係歴史文化財調査報告』
 XIV 福岡県教育委員会 1977
 (3)豊崎晃一 「熊本県舞ノ原遺跡発見の異形石鎌」『九州考古学』AGS3 1978
 (4)この出土地は明確でないが、熊本県立博物館陳列品、阿蘇郡西原町資料館収蔵品、福岡正文氏コレクションの
 2cm前後の小型品がある。
 (5)麻生優・白石浩之 「泉福寺洞穴の第4次調査」『考古学ジャーナル』AG101 1975
 (6)樋口隆雄・約田正哉 「平戸の先史文化」『平戸学術調査報告』京都大学平戸学術調査会 1950
 (7)福岡県コレクション
 (8)木下修信 「山陽新幹線関係歴史文化財調査報告」第8巻 福岡県教育委員会 1978
 (9)飛島重雄・宮忠司他 「蒲田遺跡」福岡市教育委員会 1975
 (10)田中幸次氏採集
 (11)八幡一郎・夏川光夫 「早水台」1955
 (12)竹田市教育委員会 「ヤトコロ遺跡」『菅生台地と周辺の遺跡』II 1977
 (13)桑原憲彰他 「中後追遺跡調査報告書」九州電力株式会社・中後追遺跡調査会 1978
 (14)熊本大学文化財研究会所蔵
 (15)松本健郎 「生産遺跡基本調査報告書」熊本県教育委員会 1971
 (16)小畑弘己 「名瀬川の縄文時代遺物」『赤れんが』創刊号 1981
 (17)上氏コレクション
 (18)片岡英治 「久木野の遺跡」1980
 (19)吉田英敏 「中瀬地方における異形局部磨製石器PART II」『岐阜県考古』第7号 1979

6. I層の遺構と遺物

(1) 遺構の位置と遺構

①遺構の位置 (第149図)

I層の遺構は、土層的に極めて判別が困難で、その大部分を把握するのは困難であった。確認した遺構は主に断面によって確認したもので、その全形を知ることはできないが、竪穴状遺構3基と土壇5基である。分布は第2凹部前面と第2凹部と第1凹部の境の岩盤の突出部の前面であるが、これは本来の分布を示すものではない。発掘所見からはほぼ全面にその分布があったものと考えられる。

②遺構

A. 第1号竪穴 (第150図1)

第1凹部と第2凹部の境である岩盤の突出部前面、K-14, 15, L-14, 15グリットにわたって検出した遺構である。断面の検討によって確認したので約半分を未確認であるが、直径2.6cmの不整形円形プランをなすと考えられる竪穴である。深さ約0.45~0.7mで、壁のちがいがりもゆるやかで皿状をなしている。床面は平坦でなく、東側が大きなビット状をなして深くなり、西側に向かって徐々に浅くなるものである。竪穴埋土中より安山岩原石、黒曜石、燃糸文土器IIの破片が出土した。II層の第5号炉址はこの竪穴の壁面に接している。

B. 第2号竪穴 (第150図2)

第2凹部北端部前面、I-18, 19, J-18, 19グリットにわたって検出した。この竪穴も第1号同様に断面観察によって確認したものであり、約半分を確認していない。直径2.7mの不整形円形プランをなすと考えられる竪穴で、深さ約0.5m。壁はちがいがりが垂直でなく、ゆるやかで断面形は皿状をなしている。底面は第1号に比較して平坦であるが、大小の浅いビットがある。竪穴埋土中よりは遺物の出土はない。

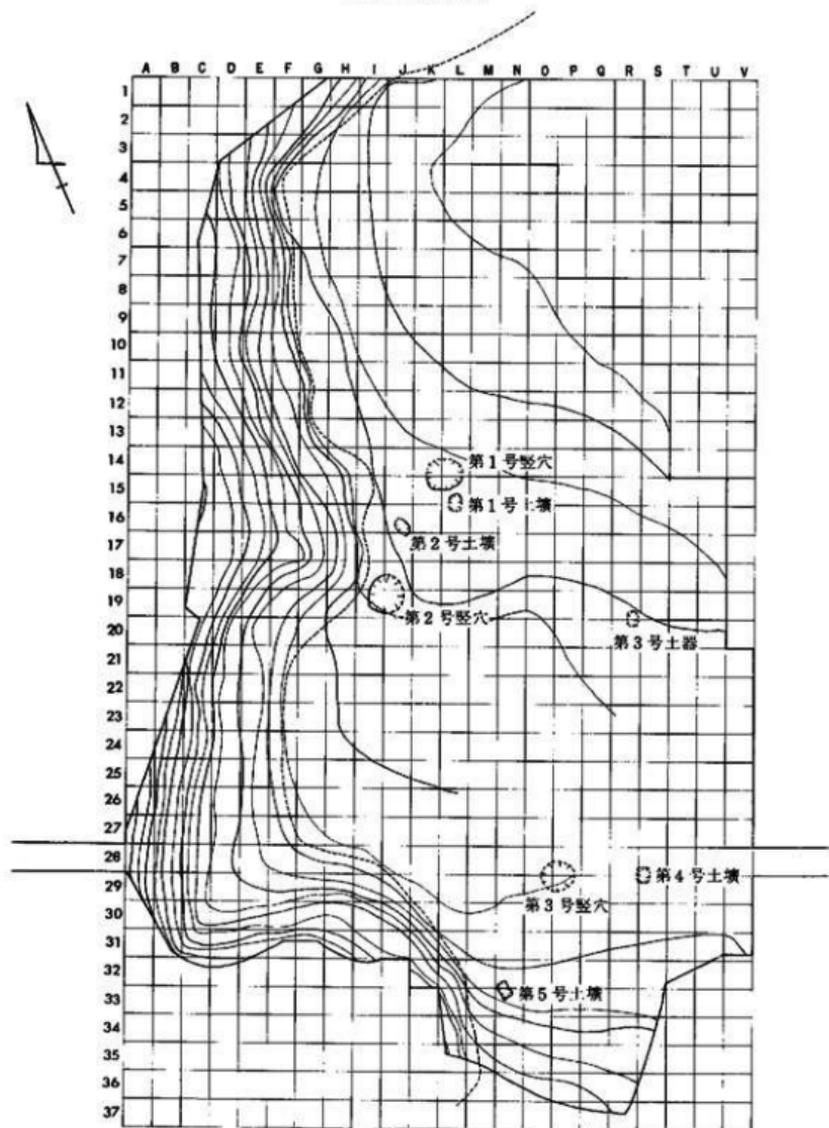
C. 第3号竪穴

第2凹部南端部前面、O-28, 29, P-28, 29グリットにわたって検出した。径2.4mの円形のプランをなすものであるが、その存在のみを確認するにとどまった。埋土中の出土遺物はない。

D. 第1号土壇 (第151図1)

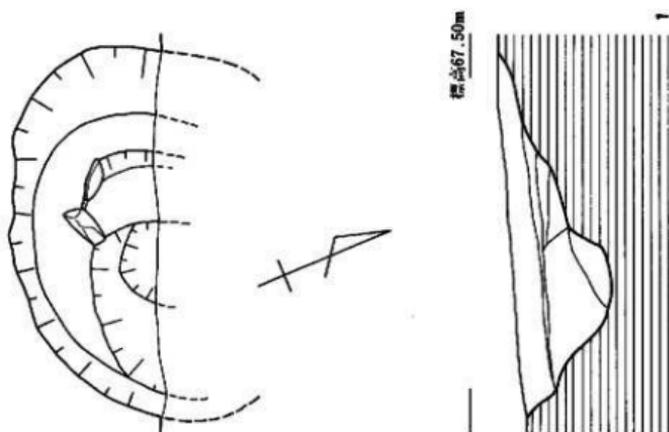
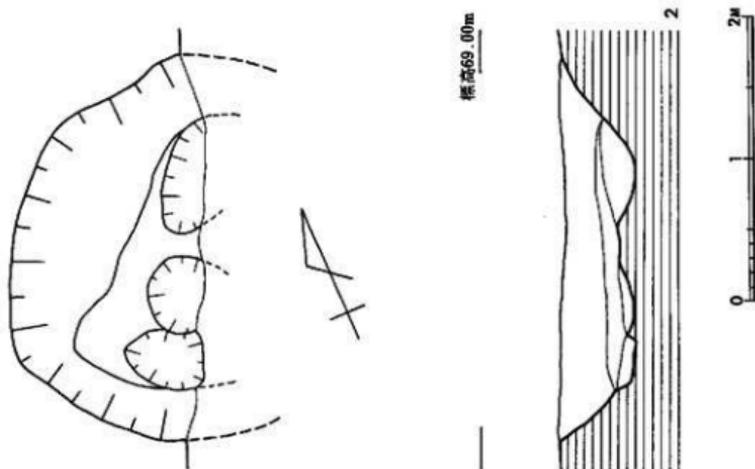
第1凹部と第2凹部の境の岩盤の突出部前面、L-15, 16グリットにわたって検出した土壇である。断面観察時に確認したので約半分を失う。第1号竪穴の南に約0.5m離れて位置する。幅0.92m、長さ0.55m+a (1.2m前後を推測できる)のやや不整の長方形プランをなす。深さ0.32mで断面形は箱形をなす。

E. 第2号土壇 (第151図2)

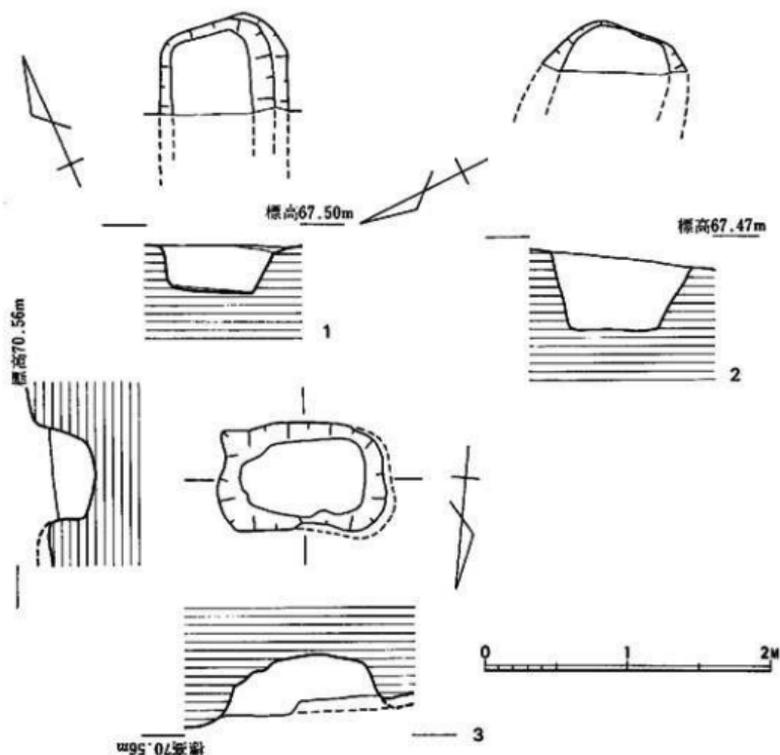


第149図 I層の遺構分布

6. 1層の遺構と遺物



第150図 1層の遺構実測図I



第151図 I層の遺構実測図Ⅱ

第1凹部と第2凹部の境の岩盤突出部の前面、J-16、17グリットにわたって検出した土壌である。第1号堅穴と約3m、第2号堅穴を約2.5m離れて位置する。わずか一部が存在であり、全形は明らかにできない。幅約1m、深さ約0.5mで、壁面のたちあがりは垂直に近く、断面形は箱形をなす。

F、第5号土壌

第3凹部前面、N-32、33グリットに検出した。長さ約1.2m、幅0.75mの長方形プランを有し、深さ0.4mで断面舟底状をなす土壌である。

なお、第3、4号土壌は図示しなかったが、それぞれR-19、20グリット、S-28、29グリットに検出したもので形状等は前三者と同様である。

(山崎)

(2) 土器の出土状況と土器

① 燃糸文土器Ⅰ (第152, 153図)

第2凹部北半部前面、段丘の中央から縁にかけて約21m×約15mの範囲、すなわち、K-23, N-21, O-19, 20, 23, P-20, 21, 23, Q-19-21, R-21, 24, S-18, 23, T-23, 24, U-17, 22, 24グリットに分布し、特にP-20, 21, Q-19-21, R-21グリットに集中がみられる。接合関係は良好で、ほぼ集中区を中心としてみられるが、最も離れて接合するのはN-21グリットとS-17グリット間で約17.5m離れている。集中部からの拡散状況は低い方ではなくむしろ高所へ移動している例が多く、この拡散状況には人為的要素を感じる。

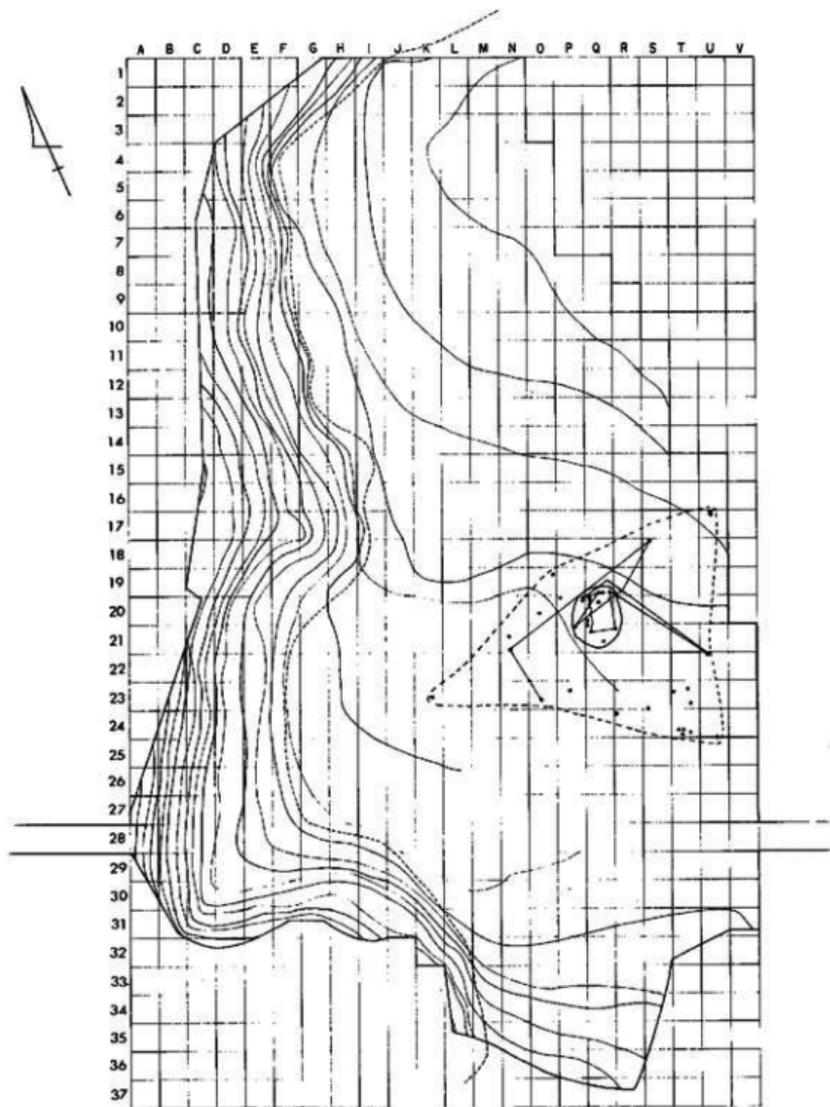
土器は燃糸文を施文したもので、土器片総数34点がある。接合関係が良好であり、胴下半部を欠くがほぼ全体の写を現存していて、その全形を知ることができる。器形は第153図1に示したように、大型の尖底深鉢形土器である。復原口径37.4cm、推定器高31.3cm。底部は尖底がやや乳棒状になり、それから大きく外へ丸味をもって広がり、胴中位でやや立ちあがり、さらに口縁部で大きく外反する特徴がある。口縁端部は面をもって、角ばった状態である。外面の文様は一段右捻りの粒の小さい燃糸を10~12条の単位(5cm前後)で縦位に施文している。その施文は全面におよんでいるが、部分的に施文しない部位もある。胴中位に竹筒状の工具で描いた沈線が横位にめぐる。口縁部内面にも同一原体によって幅5cmで横位に施文している。器壁は厚さ0.5cm~1.1cmで、底部に向かって厚くなる。底部に粘土接合部が凸面の擬口縁として明瞭に残っている。胎子には石英、長石、雲母の砂粒を多量に含む。焼成は良好で堅緻。色調は赤褐色~黒褐色をなす。外面にススが付着し、内面に炭化物の付着がある。

② 燃糸文土器Ⅱ (第154~156図)

第1凹部南半部前面、約20m×8mの範囲、すなわち、J-7, 8, K-6-8, 13, 14, 16, L-8, 10, 12-15, M-8, 9, 11-13, 15, N-13, 15グリットに分布し、その中でK-13, 14, L-12-15, M-11-13グリットの9m×4.5mの範囲に集中区が存在する。集中区には第1号竪穴も含まれ、この土器が竪穴と深い関係にあったことがうかがえる。土器の接合関係はあまり良好でなく、集中区内での接合が大部分であるが、接合関係は少ない。最も離れて接合するのは、K-6グリットとM-12グリットで約11.5m離れている。

土器は内外面に燃糸文を縦位に施文した尖底深鉢形をなすものと考えられる。同一個体と考える土器片の総数は63点である。接合関係が良好でないためにその全形を知ることはいえない。第155, 156図に土器の拓本を示した。第155図1~6は口縁部破片、7~23, 第156図は胴部上半部から胴下半部にかけての破片である。器形の復原のために各破片について若干の観察を加えてみよう。1は口縁部のやや大きな破片で、口縁上半部がやや内傾気味に外反し、端部は平

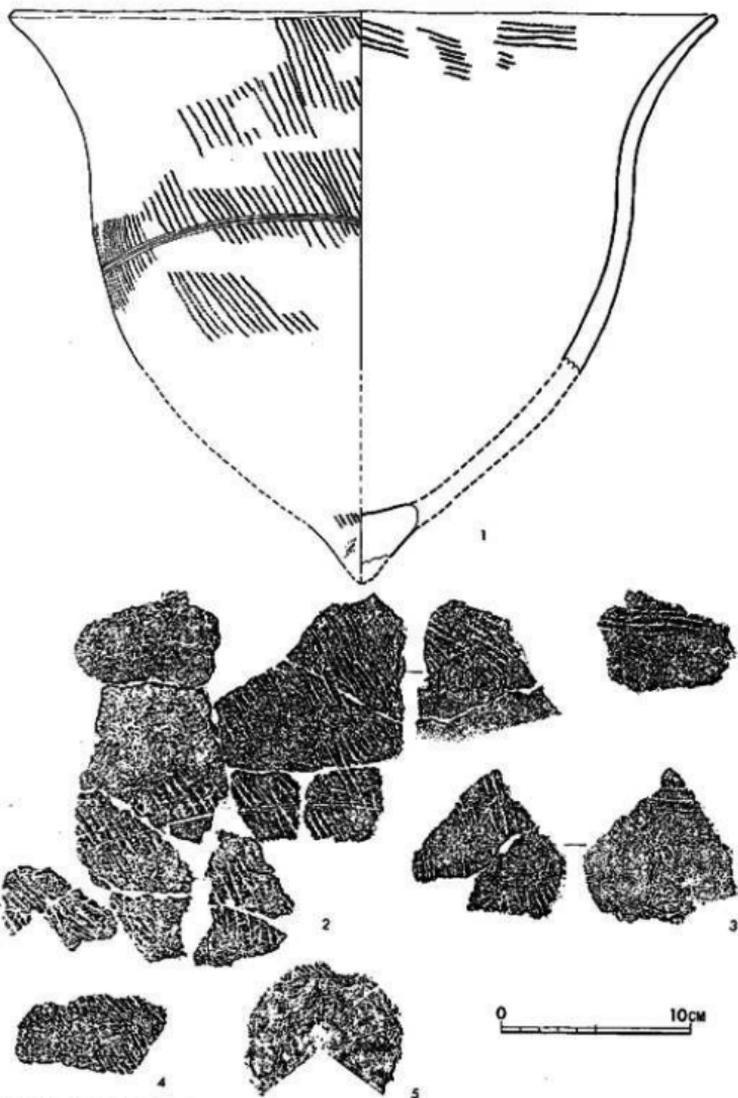
第4章 調査の記録



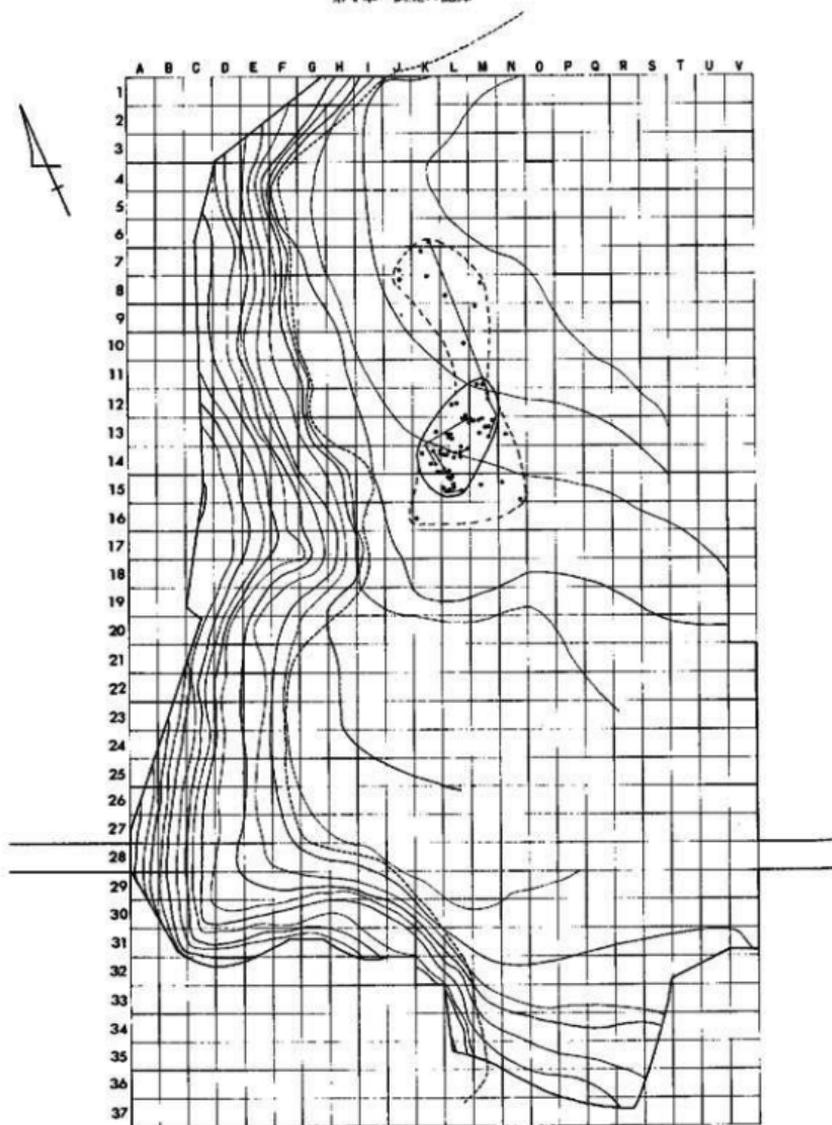
第152図 弥生土器Ⅰの出土分布図

0 10M

6. I層の遺構と遺物

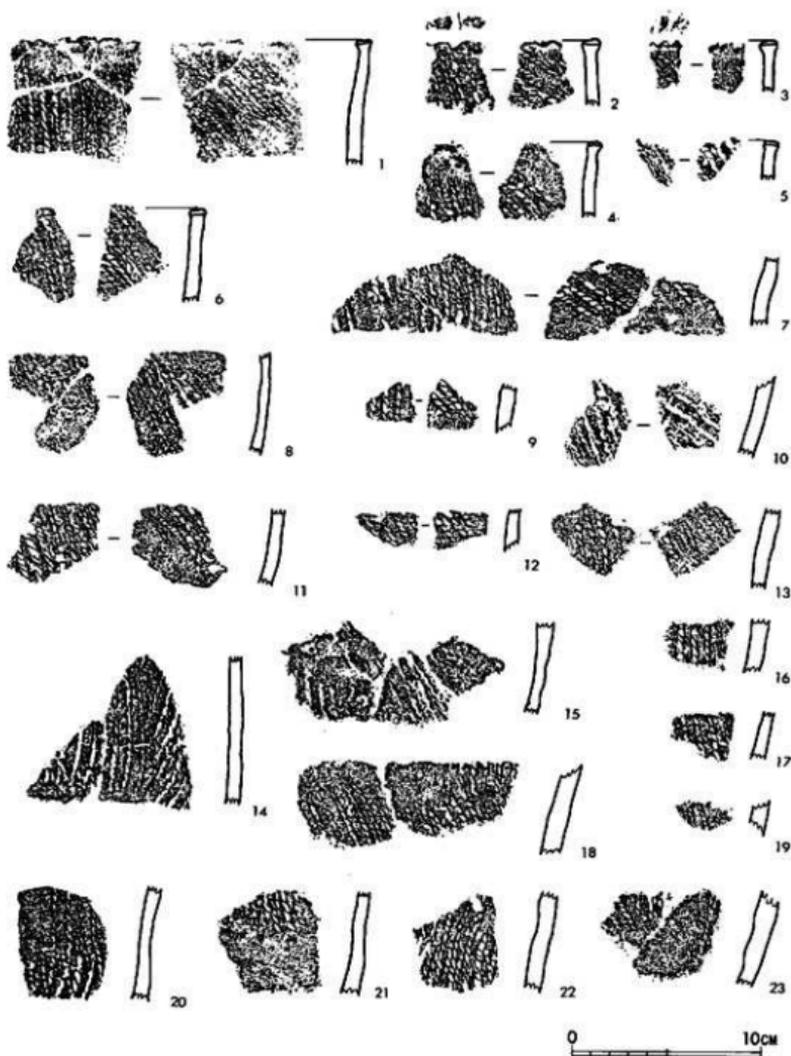


第153図 燕系文土器 I 実測図

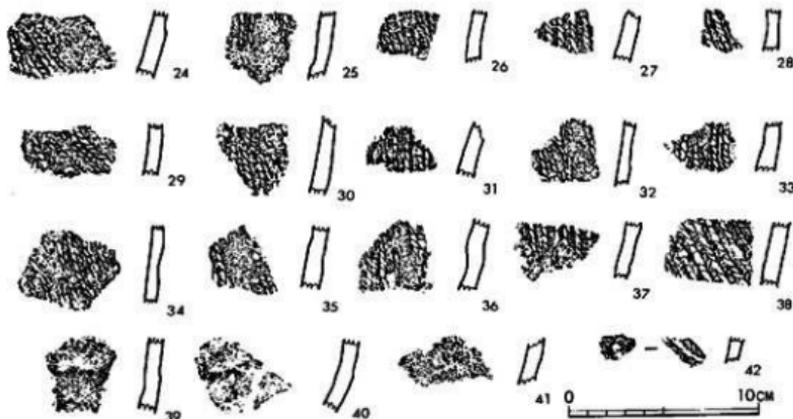


第154図 弥生文土器 I の出土分布図

6. I層の遺構と遺物



第155圖 捲糸文土器Ⅱ実測図Ⅰ



第156図 捺糸文土器II実測図II

担で、上端部を押さえるために粘土が両側に張り出している。端部にはへら状の工具で幅6.5cm～1cmの間隔で斜の刻目を入れている。外面は著しくススが付着するが、一段右捻りの捺糸文を0.5cmの間隔で縦位に施文している。内面は口縁から約5cmの幅で外面同様の捺糸文を左上から右下に向う斜位で施文している。2も1と同様であるが刻目が良く残っていて、その深さは2.5mmである。刻目と内外の捺糸文と施文の前後関係は、刻目によって内外面の捺糸文がつかぬ部分があることより刻目が最後の施文であることがわかる。3～6の破片についても同様のことがいえる。口縁径は1より算出することは無理で、かなりの大型品になる可能性がある。7～13は口縁に近い破片で、内面に外面と同様の捺糸文を斜方向で施文している。14は胴部破片の比較的大きい破片である。外面には先の土器と同一原体による捺糸文を縦位に施文しているが施文に重複がみられ、その順位と単位が明らかにできる。破片の右端の上位から施文された8条の捺糸はその始点の端部が破片下部に認められる。この施文は破片中位に終点のある5条の捺糸を切っていて、明らかに下の捺糸より新しい施文であることがわかる。また、破片の右にある左下より右上へ向う6条の捺糸も切っている。この6条の捺糸はその下部にある左下より右上へ向う4条の捺糸を切っていることが観察できる。以上よりこの土器の施文順位は、この土器の施文が押型文土器と同様に縦位で施文されたとした場合底部を中心として右まわりに一段づつまわりながら施文されたことがわかる。内面はへら状の工具によって横方向に捺痕状のへらナデで調整する。18は14の上半分と接合関係にあり、胴上半部の破片でススが付着している。捺糸の施文順位は14で観察したのと同様であるが、捺糸の施文がなく、無文のまま放置される部分がある。内面は14より上部であるためかへらナデ状の調整後、丁寧な捺痕を消して

6. I層の遺構と遺物

いる。18の破片は横に大きいためこの部分での径が明らかにできる。復原すると28cm前後となり、胴上半部である点を考慮すれば、口径はこれよりやや大きくなるものと思われる。かなりの大型の深鉢であったことがわかる。なお、14、18の破片は破片の上半が黒褐色～褐色を示すのに対し、下半部が二次的に火を受けて赤変し赤褐色をなすことから胴中位の破片であることがわかる。15～17、19～21、24、26～35、37、38、41は胴部破片で、その特徴は14、18の破片と同様である。22、23、25、36、39、40は底部付近の破片である。39、40は無文のみで放置されており底部に近いことがわかる。22、23、25、36は底部付近ではあるが、外面には燃糸文を縦位に施文し、23はその下半部が無文のまま放置されている。以上より推測し、この土器は底部付近には燃糸文の施文はなかったと思われる。また、形状については39、40よりみて、尖底に近い丸底が想定される。内面はいずれもヘラ状工具によって横方向にヘラ削り状に調整され、凹凸が著しい。

以上、各破片の観察からこの土器について復原を試みると以下のごとくであろう。口径は30cm前後で、器高も他の土器例からみてほぼ口径に近く30cm前後と考えられる。底部は尖底ではあるが、より丸底に近く、口縁部でわずかに内傾気味に外反する。口縁端部は上より押さえられ、その部分にヘラによる刻目を入れる。外面は底部近くから部分的に施文されない部分もあるが、基本的には全面に斜位～縦位の燃糸文を施文し、さらに口縁部内面に幅5cm前後に横位の燃糸文の施文帯を有する。文様の施文は底部より口縁部に向かって右まわりに行なわれ、口縁部の刻目は最後に行なっている。

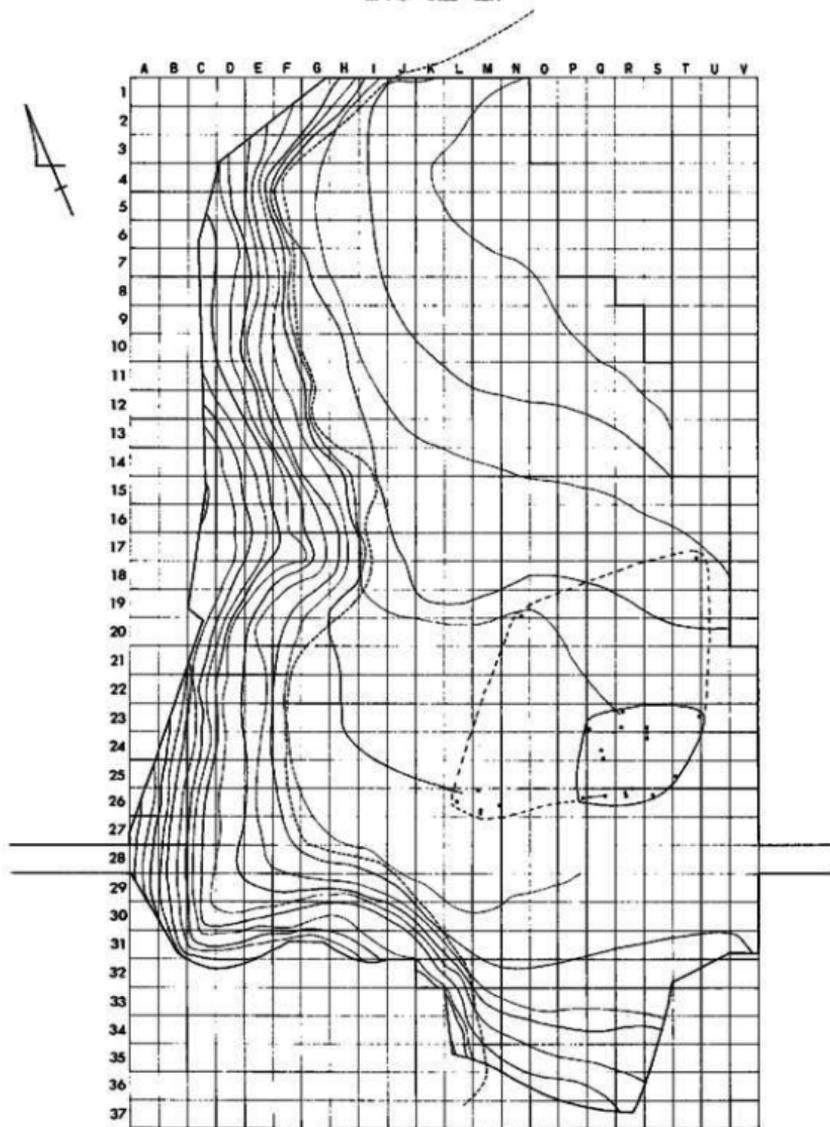
器壁の厚さは0.4cm～0.8cmで口縁部が薄く、胴部～底部はやや厚くなる傾向がある。器面にやや凹凸が目立つ。胎土には石英、長石、雲母、赤色鉱物の砂粒を多量に含んでいるが良質で、焼成は良い。色調は黒褐色～赤褐色で、胴中位が二次的に火を受けて赤変している。

①燃糸文土器Ⅲ (第157, 158図)

第2凹部前面の段丘部、約18m×16mの範囲、すなわち、L-26、M-26、N-19、P-26、Q-23、24、26、R-23、25、26、S-23、24、26、T-17、23、25グリットに分布している。特に集中する部分としてP-26、Q-23、24、26、R-23、25、26、S-23、24、26、T-23、25グリットの約8m×8mの範囲があるが、その密度割合は他と比較し低い。接合関係は良くなく、集中区の中の隣接した土器間だけに認められる。拡散状況は、集中区より高所のL-26、M-26グリットの5点、低所のN-19、T-17グリットの2点があるが、これらは集中区より10m前後も単独で離れていることからみて人為的要素による拡散がうかがえる。この部分に築造されたF-1号墳との関係も考慮する必要がある。

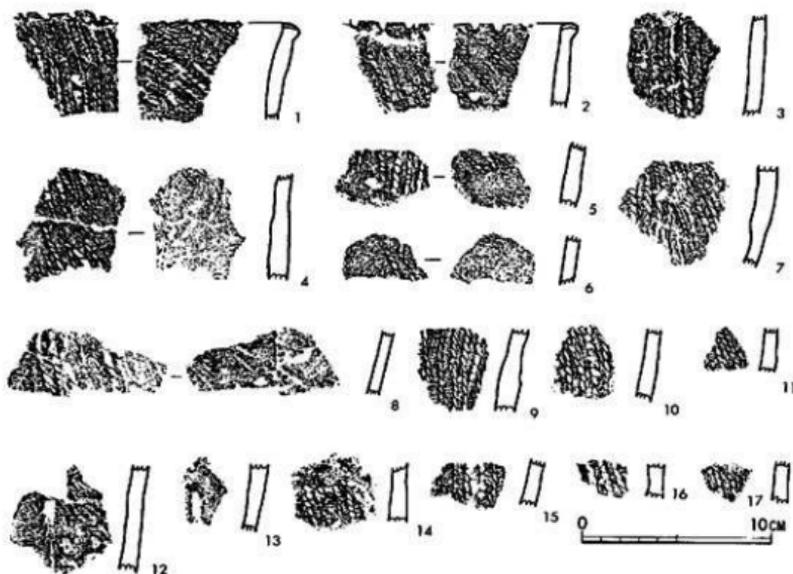
同一個体と考える土器片は22個体で量的に少い。燃糸文土器Ⅱと非常に良く似た土器で一見して区別は困難であるが、分布のちがいが、口縁端部の刻目が逆であることから、別個体である

第4章 調査の記録



第157図 弥生文土器Ⅲの出土分布図

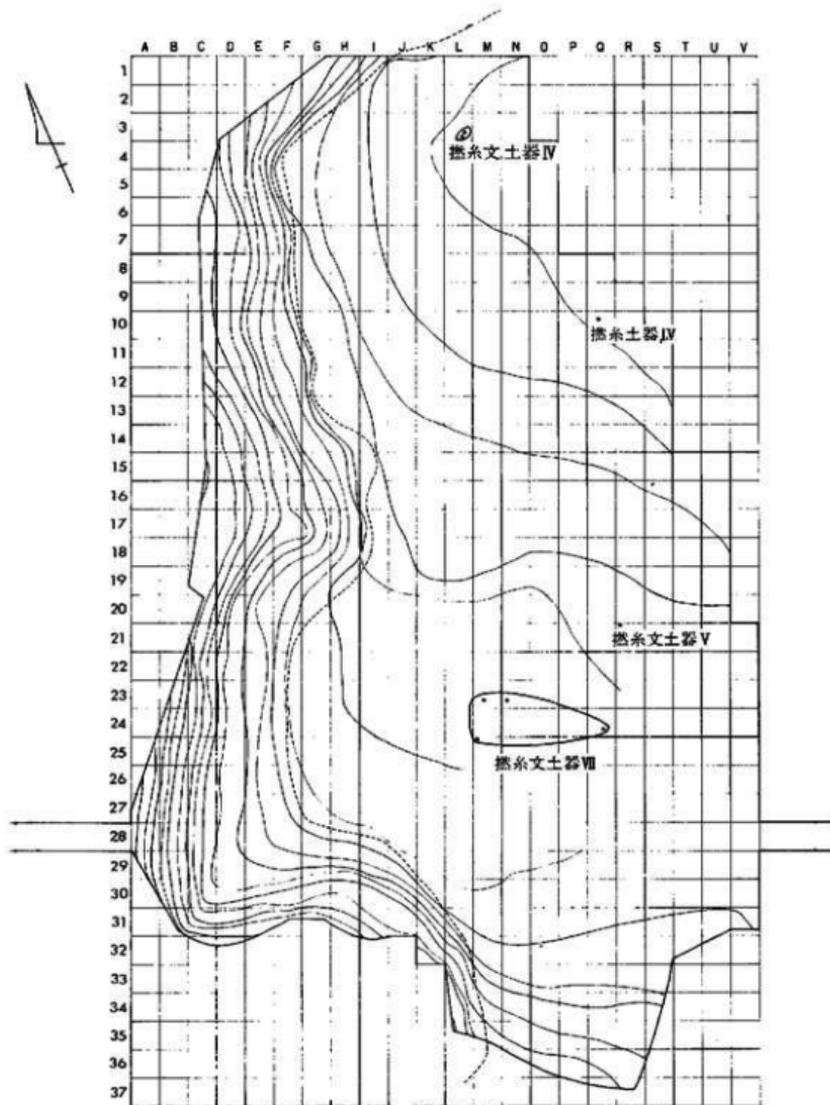
6. I層の遺構と遺物



第158図 撚糸土器Ⅲ実測図

ことが判別できる。器形、形状は撚糸文土器Ⅱとはほぼ同様と考えられる。以下、各破片の観察からみていきたいと思う。第158図1、2は口縁部破片である。1、2共にその特徴は同じで、口縁部がわずかに内傾気味に外反し、口縁端部は平坦におさえられ、その上面に間隔幅0.5cm～1.2cmで刻目を斜に施すが、その刻目の仕方は、撚糸文土器Ⅱとは逆の関係にある。外面には一段右撚りの撚糸を縦位に施文している。内面は口縁下、5cm前後の幅で左上から右下の斜位で外面と同一原体による撚糸を縦位に施文する。口縁部刻目と撚糸文の施文順位は撚糸文土器Ⅱと全く同じである。外面にススの付着が認められる。4～6、8は、内面の施文が認められ、口縁部付近の破片である。特徴的には、1、2の口縁破片と同じである。2の口縁内面の下中央部、5の外面中央部、7の右上半部、8の内面中央下端部には撚糸の結び目が明瞭に残っている。5、9～17は胴部破片で特徴的には同じである。破片が小さいために、撚糸文の施文単位、順位は明らかにできない。7は底部近くの破片、外面は他と同様であるが、内面はヘラ状工具でケズリ状の粗いナデ調整をしている。

器壁の厚さは0.7cm前後、器面に凹凸がある。胎土には石英、長石、雲母、赤色鉱物の砂粒を多量に含んでいるが、良質で焼成は良い。色調は外面が黄褐色～赤褐色、内面が黄褐色～黒褐



第159図 燃系文土器IV～VIの出土分布図

6. I層の遺構と遺物



第160図 燃糸文土器Ⅳ～Ⅶ実測図

色をなす。

燃糸文土器ⅡとⅢはその分布範囲および口縁部の刻目の違いを除けば、胎土、焼成、燃糸文原体、器形が極めて類似していて、おそらく同一人物の製作によるものと想定される。

④燃糸文土器Ⅳ（第159図、第160図1）

第1凹部の前面、段丘縁の近く、Q-10グリットに出土した土器で、1点のみで、他に同一個体はみられない。深鉢形土器の破片である。口縁付近の破片と考えられ、破片の途中で外反する特徴がある。外面にやや太目の燃糸が右上から左下の斜位で施文される。燃糸については保存状態が良くないので詳細不明、器壁は1.1cmと厚く、胎土には石英、長石、雲母の砂粒および花崗岩の小石、黒曜石チップを多量に含み良くない。焼成は良好で、色調は外面が褐色、内面が黄褐色をなす。

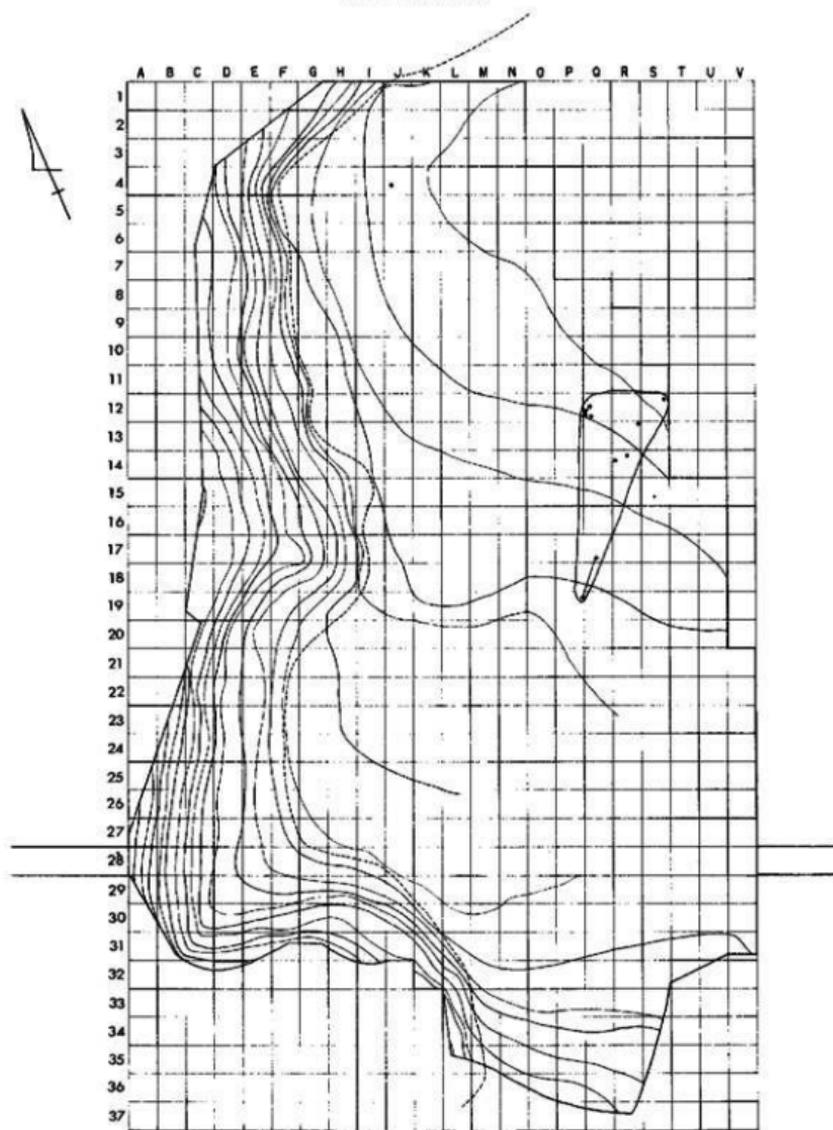
⑤燃糸文土器Ⅴ（第159図、第160図5）

第2凹部北端部前面、段丘縁の近く、R-21グリットに出土した土器で、1点のみで他に同一個体はみられない。深鉢形土器の底部付近の破片である。外面に横走する目の細い一段右捻りの燃糸文が深く施文される。内面はへら状工具でナデ調整され凹凸が著しい。器壁の厚さは0.8cm前後。胎土には花崗岩の小石を含む。焼成は堅緻で、色調は内外面共に黒褐色をなす。

⑥燃糸文土器Ⅵ（第159図、第160図2、6）

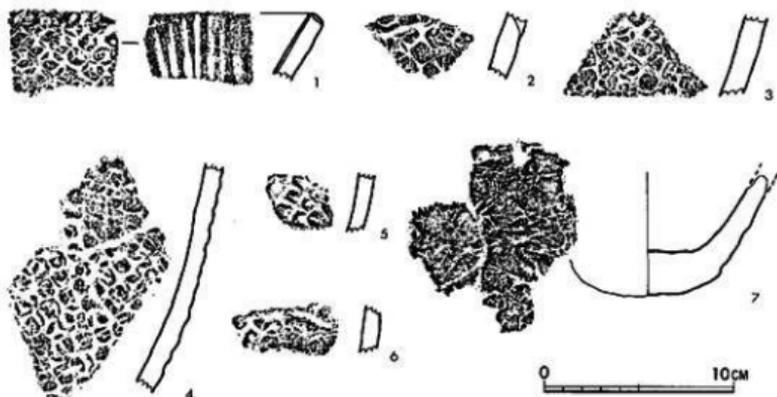
第1凹部前面、L-3グリットに出土した土器である。同一個体と考える土器片2点がある。2は胴部破片、6は底部近くの破片である。共に外面は目の細い燃糸（一段右捻り）を横走施文する。ベルト状の施文である可能性があるが、器面やや荒れていて判別は難しい。内面は丁寧なナデ調整によって仕上げ3、6は炭化物の付着が認められる。器壁は厚さ0.8cm前後。胎土には花崗岩の小石を含むが良質、焼成は良好、色調は外面が赤褐色、内面が黄褐色～褐色をなす。

⑦燃糸文土器Ⅶ（第159図、第160図3、4、7、8）



第161図 埴輪型文土器 I の出土分布図

6. I層の遺構と遺物



第162図 押型文土器I実測図

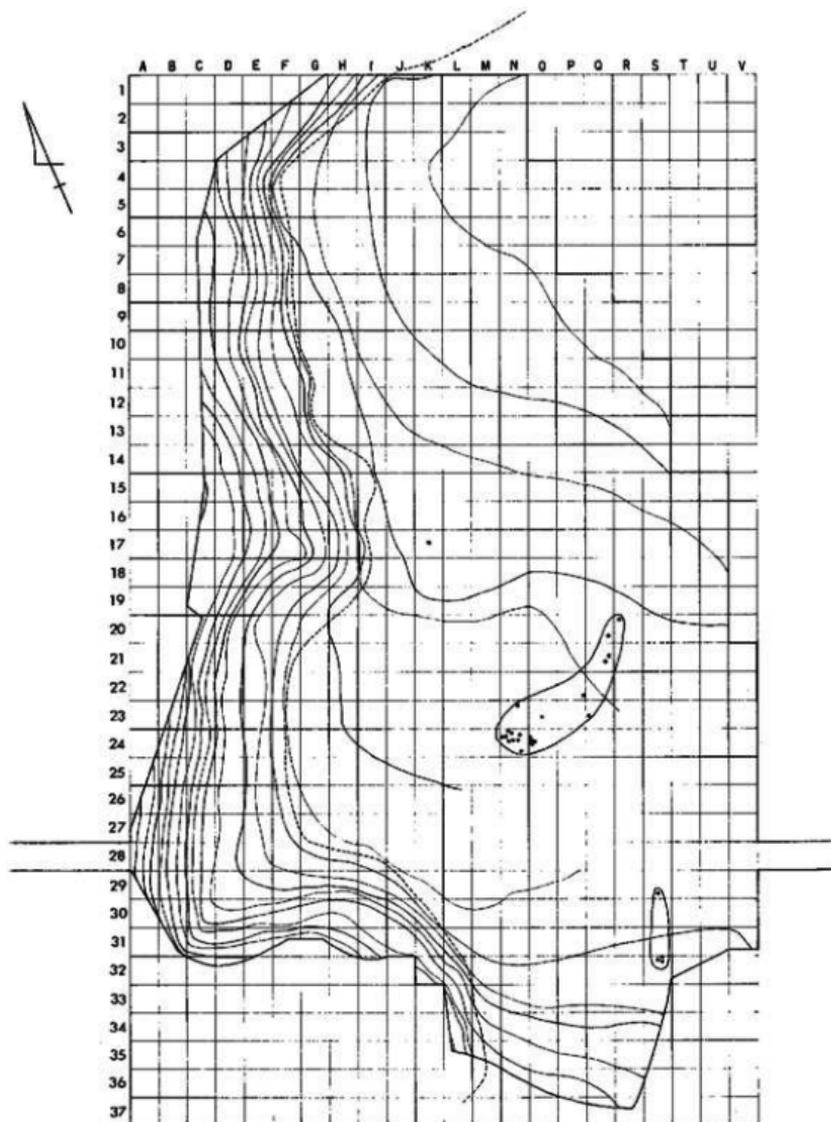
第1凹部中央部前面、L-23, 25, N-23, Q-24グリットの10m×4mの範囲に分布する。同一個体と考える破片は4点ある。いずれも胴部の小破片で、器形等については明らかにできない。外面には一段右摺りの襷糸文をベルト状に縦位に施文している。3の外面にススの付着が認められる。内面はへら状工具で横ナデ調整、3の破片には炭化物の付着がある。器壁は厚さ0.6cmと比較的薄い。胎土には石英、長石の砂粒を若干含むがきわめて良質である。焼成は良好。色調は外面が赤褐色、内面が黄褐色をなす。

①押型文土器(第161, 162図)

第1凹部と第2凹部の境の岩盤の突出部前面、段丘縁近くの約15m×6mの範囲、すなわち、P-19, Q-12, 17, R-13, 14, S-12グリットに分布し、1点のみ第1凹部前面のJ-4グリットに離れて出土した。

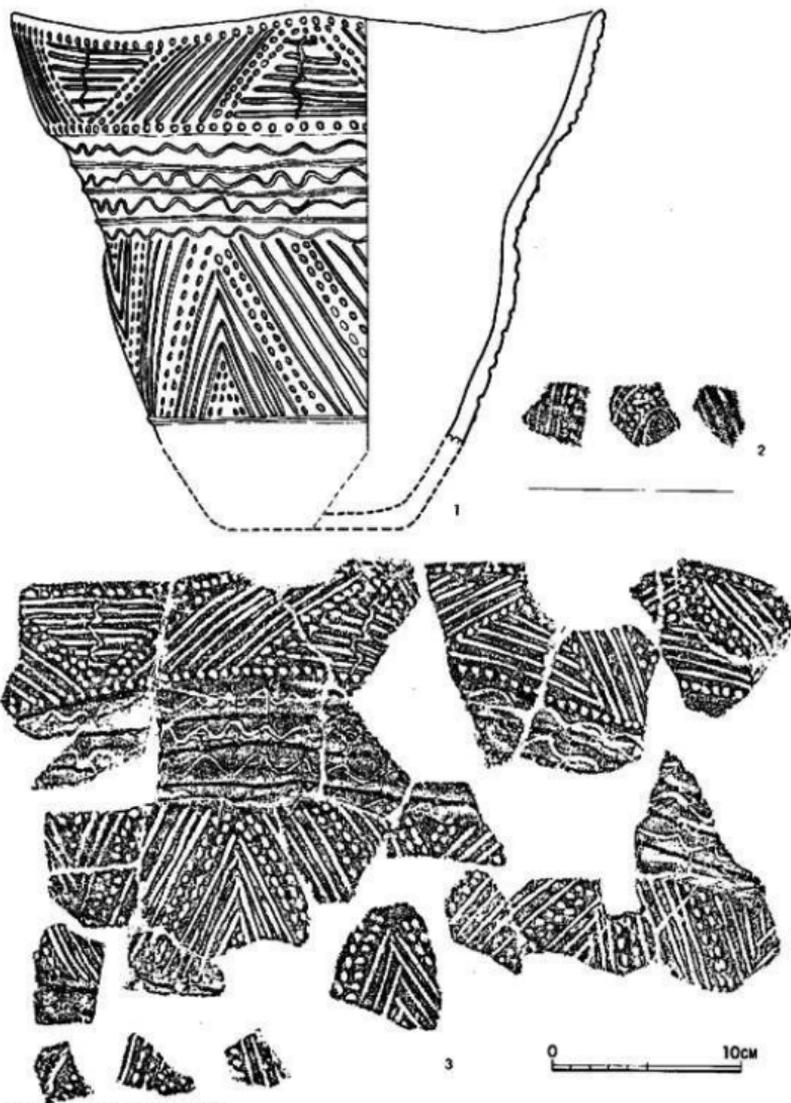
同一個体と考える土器片は11点である。第162図1は口縁部破片、2～6は胴部破片、7は底部破片である。1はかなり外反する口縁で、口縁端部は施文原体で押さえ平坦にして刻目を入れる。外面には隅丸方形に近い大きめの楕円文を横走施文する。内面には縦に沈線(原体条痕)が施される。2～6の胴部破片も1と同様に同一原体の楕円文が施文される。7は底部破片で尖底に近い丸底をなす。外面は楕円押型文が施文されるが明瞭ではない。器壁の厚さは1cm前後と厚い。胎土には石英、長石の砂粒を混入するがきわめて良質である。焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、内面が黒色～黒褐色をなす。

以上よりこの押型文土器を復原すると、底部が尖底に近い丸底をなし、口縁部が大きく外反し、外面に大きめの楕円文を全面施文し、口縁内面に沈線(原体条痕)を縦位に入れる大型の



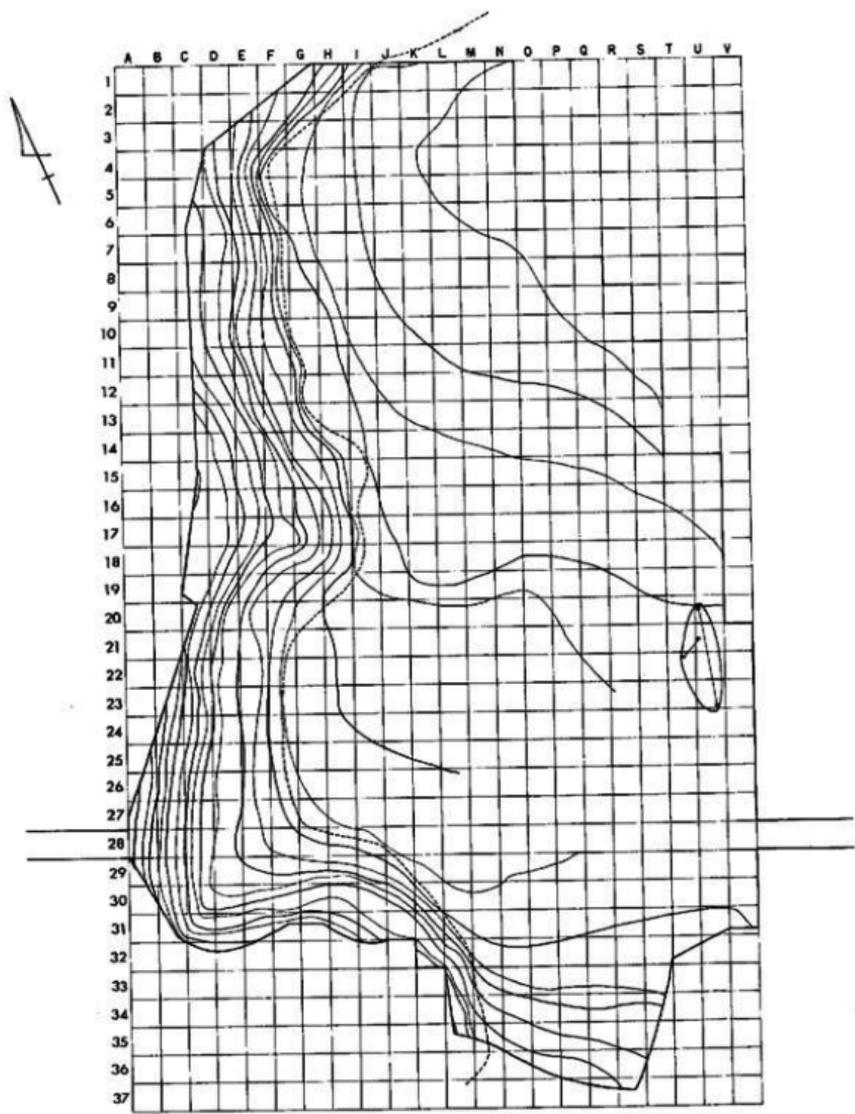
第163図 平椀式土器の出土分布図

6. I層の遺構と遺物



第164図 平樽式土器実測図

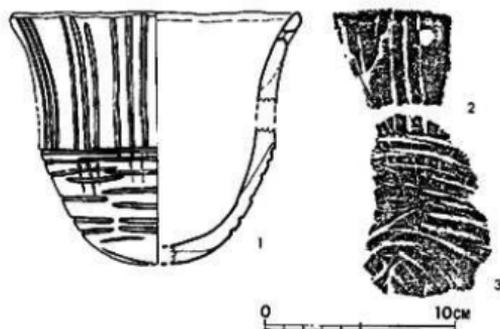
第4章 調査の記録



第165図 沈線文土器の出土分布図

0 10M

6. I層の遺構と遺物



第166図 沈線文土器実測図

深鉢形土器が想定できる。

この土器に使用された施文原体を復原してみよう。施文文様はすべてが2～3回重複して、一見複雑であるが、施文原体は一種類である。文様の反復は2単位2.85cmごとに認められ、それより割り出した原体直径は0.9cmである。原体長については施文重複のない最長5.8cmとよりも長いと考えられる。よって、この土器

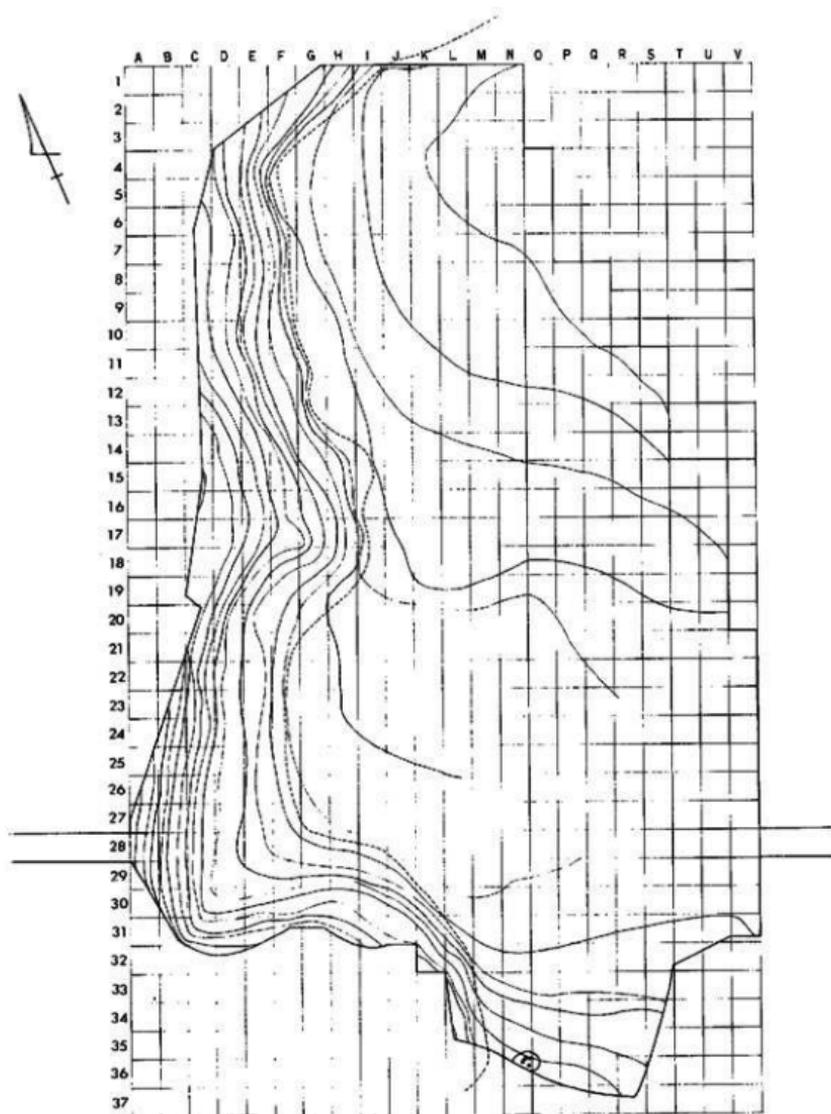
の施文原体は直径0.9cm、長さ5.8cm以上、4条以上2単位の横刻原体と推定できる。なお、2、7の土器には粘土接合部が擬口縁として残り、2は外傾、7は凸部を示し、特に2では接合部にも押型文が施文されていて、文様施文が土器の粘土接合のために部分的に行なわれた可能性を物語り、かつ、文様重複の原因ともなったことがうかがえる。

④平筒式土器（第163、164図）

第1凹部北半部前面、13m×3mの範囲、すなわち、N-23、24、O-23、24、P-22、Q-20、21、23、R-20グリット（I）と、第3凹部前面、6m×1mの範囲、すなわち、S-29、32グリット（II）の2ヶ所に分布している。I、IIは別個体の土器である。

Iの同一個体と考える土器破片は22点あり、接合関係が良好で約2/3を現存し、その全形を知ることができる。器形は第164図1に示したようになる。文様は3に拓影を示した。底部を欠損するが、他例よりみて平底であることは間違いない。胴中位でくびれ、口縁部で再び広がる器形を有し、口縁部にはゆるやかな突起が4ヶ所にあり山形口縁をなす。外面の文様は口縁部と胴下半部では直線と刺突文を混じえた文様構成で、口縁部は斜方向と横方向の沈線を配し、その間を2列の刺突文で埋め、口縁と文様交換部に1列の刺突文をめぐらす。山形の突起部と谷には縦方向の曲部が配される。胴中位には3本のミミズ彫れ状の粘土紐を貼り付け、4区画に分割し、その間に曲線山形文を沈線で施文する。胴下半は斜方向の沈線を山形に配し、その間を2列の刺突文で埋める。文様下端には1本のミミズ彫れ状の貼り付突帯1条をめぐらす。外面にススの付着が認められる。内面は横方向のヘラナデ調整、口径31.3cm、推定器高27.5cm。胎土には砂粒を混入するが良質で、焼成は良い。色調は外面が黒褐色～黄褐色、内面が黄褐色をなす。

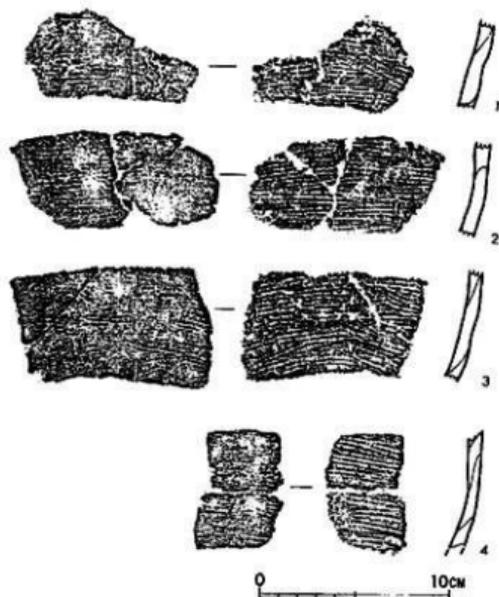
IIは同一個体4点があるが、いずれも小破片で、器形は不明、2にその拓影を示した。文様



第167図 条痕文土器Iの出土分布図



6. I層の遺構と遺物



第168図 条痕文土器I実測図

接合が不明であるが、作図復原すると、ほぼ全形を知ることができる。復原口径15.4cm、推定器高13.3cmをはかる小型の深鉢形土器である。器形は底部が丸底で、胴部はゆるやかに立ちあがり、胴中位で屈曲し、口縁部は外反し、口縁端部は丸くおさめる。外面にはへら描き沈線で全面に文様を施す。文様構成は屈曲部より上が縦位の沈線3本を単位として、幅1.5cmの無文帯の間隔をとって反復し、屈曲部より下半は横方向の短沈線を平行に底部の底まで描き、底部は曾畑式の底部ときわめて類似する。沈線の施文順位は上半部が先で、下半部は後である。外面にススの付着が認められる。器壁は厚さ0.8cm前後、胎土には花崗岩の小石を混入し、焼成は良好、色調は外面が黒褐色～黄褐色、内面が灰褐色をなす。

①条痕文土器I (第167, 168図)

第3凹部前面、N-36グリットに分布する土器である。同一個体と考える土器破片は4点である。いずれも大型の深鉢形土器の胴下半部から底部付近の破片である。器形については不明であるが、3の底部付近の破片からみれば、底部は丸底のものである。外面には丁寧な横方向の貝殻条痕を施し、その後、ナデによって貝殻条痕を消す努力をはらっている。内面は外面と

構成等はIと同様であるが、一部曲線を混じえるところがIと異なる。胎土は石英、長石の砂粒を混入するが良質、焼成は良好で、色調は外面が黒褐色、内面が黄褐色である。外面にススの付着が認められる。

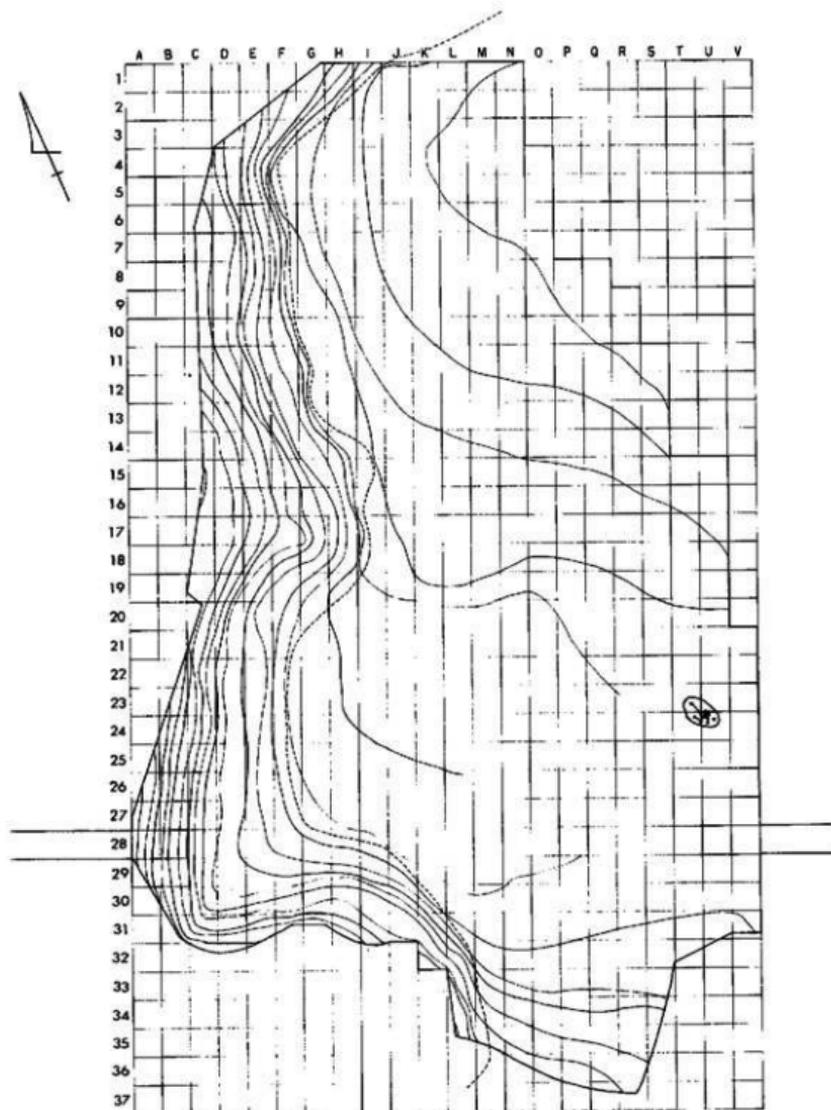
②沈線文土器

(第165, 166図)

第1凹部中央部前面の段丘縁に近くの7m×2mの範囲、すなわち、T-22、U-20, 21, 23グリットに分布する土器である。分布範囲は第7号炉址に近接している。土器は互いに接合関係にある。

同一個体と考える土器破片は4点ある。胴中位での

第4章 調査の記録



第169図 条痕文土器Ⅱの出土分布図



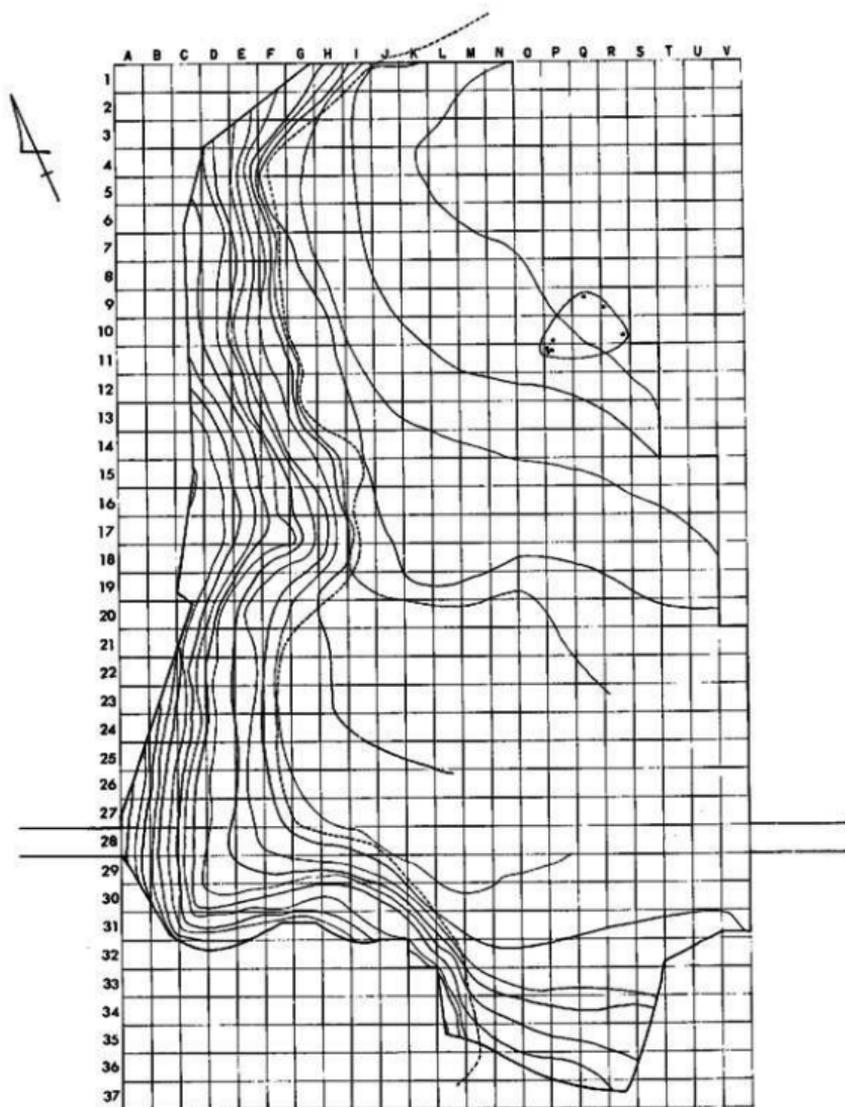
第170図 条痕文土器Ⅱ実測図

同様の原体で横方向に貝殻条痕を丁寧に施すが、外面とは違いナデ調整は認められない。3には内部に一部ススの付着が認められる。1～4はいずれも粘土の接合痕が良く観察できる。1では下端と上端に内傾する接合痕があり、下端部は擬口縁をなす。2は上端近くに内傾する接合痕、3は下端、上端にやはり内傾の接合痕があり、上端のものは擬口縁をなす。4は上、下端に内傾する擬口縁、その中間に2ヶ所の内傾する接合痕が観察できる。以上よりこの土器の製作にあたっては、幅3cm前後の粘土帯を接合しながら整形し、2～3段の積みあげ後、乾燥させたことがわかる。器壁は0.6cm前後で比較的薄い。胎土には石英、長石の砂粒を混入するが良質で、焼成は良い。色調は外面が赤褐色、内面は黄褐色をなす。

⑬条痕文土器Ⅱ（第169、170図）

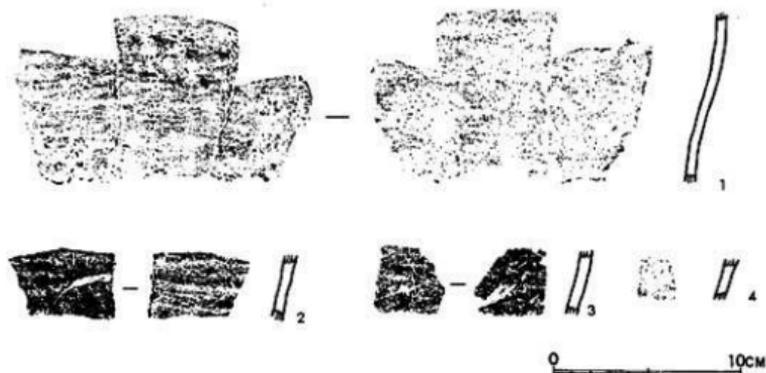
第2凹部中央部前面の段丘縁に近い、T-23、24、U-23、24グリットにわたって1.5m×1.5mの範囲に集中して分布する土器である。

同一個体と考える上器破片は13点がある。接合関係が悪く、また口縁部、底部の破片がないため器形は明らかにできないが、中型の深鉢形土器になるであろう。5点を図に示した。いずれも胴部破片である。胴部破片はたちあがり傾きがみられず、垂直近くたちあがるものがほとんどであることからみれば、円筒形の土器になる可能性が高い。外面には竹管状工具による2本単位の沈線が縦に約2cm間隔で描かれるが器壁の凹凸が著しくその効果は低い。ススの付着が著しい。内面には1、4は斜方向の荒いへう削り状の調整で、2、3、5は棒状工具による擦痕がはいる。内側には炭化物の付着がある。全面に器面の荒れがあり、詳細には明らかにできない。器壁の厚さ0.7cm前後、胎土には石英、長石の砂粒、および花崗岩の小石を含み良質で



第171図 無文土器の出土分布図

6. I層の遺構と遺物



第172図 無文土器実測図

はない。焼成は良好で、色調は外面が黄褐色～黒褐色、内面が黄褐色をなす。

⑬無文土器（第171、172図）

第1凹部南半部前面の段丘縁に近い6m×4mの範囲、すなわち、P-10、11、Q-9、R-9、10グリットに分布する。

同一個体と考える土器破片は7点で、いずれも胴部破片である。器形は明らかにできないが深鉢形土器であることは破片の観察から推測できる。1は口縁部近くの破片であり、上半で外反し、ふくらみ、口縁は内傾気味である。この部分での径は29cm前後であり、口縁部径も30cm前後になるものと思われる。外面は横方向のヘラナデ状の調整で、細い擦過痕がついている。ススの付着が著しい。内面は整形時の指の圧痕が顕著で、その上に外面と同様のヘラナデの調整を加え、さらにその上からナデ調整を行っている。内面に炭化物の付着がある。他の破片もほぼ同様のものである。

この土器を最も特徴づけるのは胎土に混入された滑石である。この滑石混入土器は前、中期～後期を特徴づけるもので、曾畑、阿高系土器に顕著に認められる。（ただし、福岡県深原遺跡では押型文土器に滑石混入のものが数点存在する。）

本土器は文様がなく、器形が不明なためにその所属時期を明確に判別できないが、その製作技法等からみて、中～後期土器とみることができる。また、底部に同時期と認定できる平底（滑石は混入しない）があることから認定できるものと考えられる。器壁は0.6cm前後で薄く、胎土には滑石を多量に混入し、ぬめぬめとした感じがある。焼成は堅緻。色調は外面が黒褐色。内面が赤褐色をなす。

（山崎）

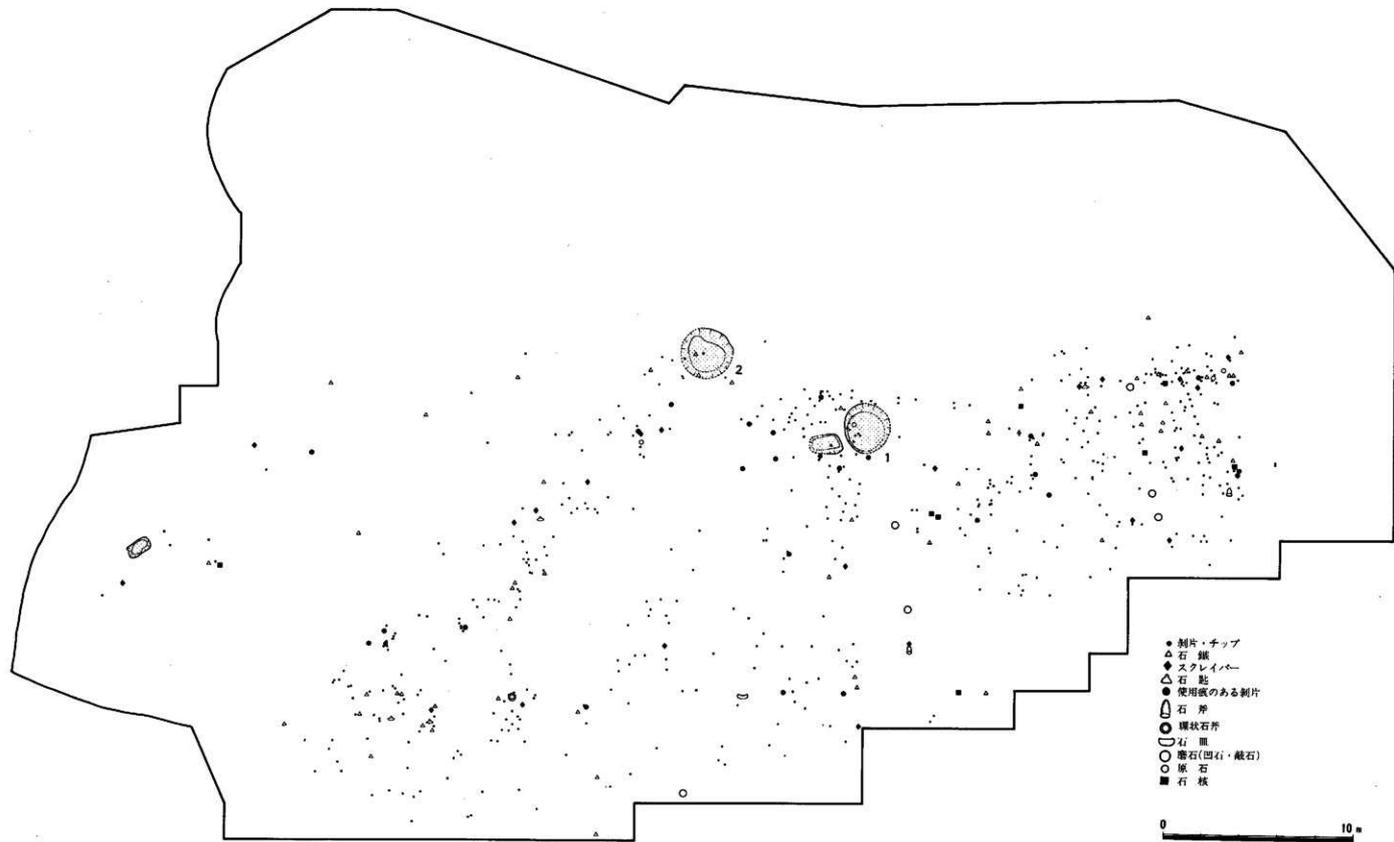
(3) 石器の出土状況と石器

I層から出土した石器、石片の総数は、732点で、そのうち石器が121点(16.5%)である。石器の出土状況は明瞭な密集区として把握し難く、散漫な分布状況を示している。ただし巨視的に見れば、II層第1ブロック付近、第1号竪穴状遺構付近、発掘区南東部に分布の中心があるようである。総じて、石器の出土状況からみれば、III層からII層、I層へかけて、生活空間が東へ、より低いところへ移動、展開していったことが窺える。

石器の内訳は、石鏃57点、尖頭状石器1点、石匙4点、スクレイパー24点、UF25点、石斧2点、環状石斧1点、磨石6点、石皿1点、石核8点、原石4点である。

石鏃〔第174図343～366、第175図367～384、第176図385～400〕全部で58点出土している。ただしその中で354はIII層第5ブロック出土品との接合例であり、本来III層のものと思われる。よって、I層出土石鏃の総数は57点である。その中で、完形品が24点(42.1%)、欠損品33点(57.9%)とやや欠損品の方が数的に優位である。完形品の中でも安山岩製石鏃が多く64%を占める。黒曜石製石鏃はその72.7%が欠損品で高い破損率を示すのに対し、安山岩製石鏃は34.7%とその値は低い。形態からくる強度の違いであろうか。石材別ではob-A-19点(33.3%)、ob-B-9点(15.7%)、ob-C-3点(5.3%)、ob-D-2点(3.6%)、安山岩-23点(40.3%)、青灰色チャート-1点(1.8%)である。

石鏃の形態は、大別して基部が平基のもの(349, 359, 364, 367, 374, 376, 378, 395, 397, 400)と凹基のものに大別できる。平基のものは、剥片の周囲を加工しただけの小形のもの(349, 359, 364)、側辺部が外へ弯曲したすずまりの形態をもつもの(367, 376, 378)、胴部がややふくらみ鋭い先端部をもつもの(374)、二等辺三角形を呈し細身で側辺は直線的なもの(377)、大形で三角形を呈するもの(395)、厚味で粗い加工で整形されたもの(400)等に分けることができる。凹基は基部に抉りの特徴、側辺部の形状などから11類に分類できる。a類-基部中央に僅かに抉りを入れるもの。すずまりで先端部はあまり尖らない(396, 357, 368)、b類-aに類するが長身で先端が尖るもの(370)、c類-基部が抉りの浅いゆるやかな曲線で構成されるもの(343, 355, 361, 362, 363, 379, 389)、d類-抉りは浅いがV字形で側辺が直線的なもの(347, 365, 394)、e類-抉りがU字形で深く、やや脚部が開くもの(350, 351, 353, 356, 358, 360, 377, 380, 391)、f類-薄身で深い抉りをもつもの(381, 383)、g類-浅い抉りをもち裏面からの急角度の剥離で整形されたもの(344)、h類-U字形の深い抉りをもち細身で両側が鋸歯状を呈するもの(369)、i類-深いゆるやかなカーブの抉りをもち、尖った脚が張り出すもの(390)、j類-いわゆる鍬形鏃で深いU字形の抉りとやや内折する脚部に特徴づけられる。大形で長身のもの(346, 348, 352, 371～373, 382, 385～388, 392, 393, 398, 399)、k類-同じ鍬形鏃でも抉りが深く脚部が開き幅に長いもの(366, 375)等である。このjの鍬形鏃の中には、鋸歯状の側辺をもつものがある(346, 352, 371, 372)。389はob-A製



第173図 I層の石器出土分布図

6. I層の遺構と遺物

の局部磨製石鏃である。384は尖頭状石器ともいふべき形態と大きさを備えている。cタイプの中の355, 361, 363の3点やdタイプの3点, jタイプの346と399の2点や391と392の2点はそれぞれ各タイプの中でも形態的に酷似するものであるが分布上のかたよりはほとんど認められない。391と392が最も距離的に近く、その距離は約3.5mである。

復元可能な資料49点(黒曜石製26点, チャート製1点, 安山岩製22点)をもとに、その大きさを復元してみると、黒曜石製石鏃の平均が $2.04\text{cm} \times 1.55\text{cm}$ 、安山岩製石鏃の平均は $2.09\text{cm} \times 1.67\text{cm}$ とそれほど差は看取できない。長幅指数を計算すると、黒曜石製石鏃の場合平均1.33、チャート製石鏃が1.45、安山岩製石鏃1.26とチャート製、黒曜石製、安山岩製の順で細長い傾向を示す。

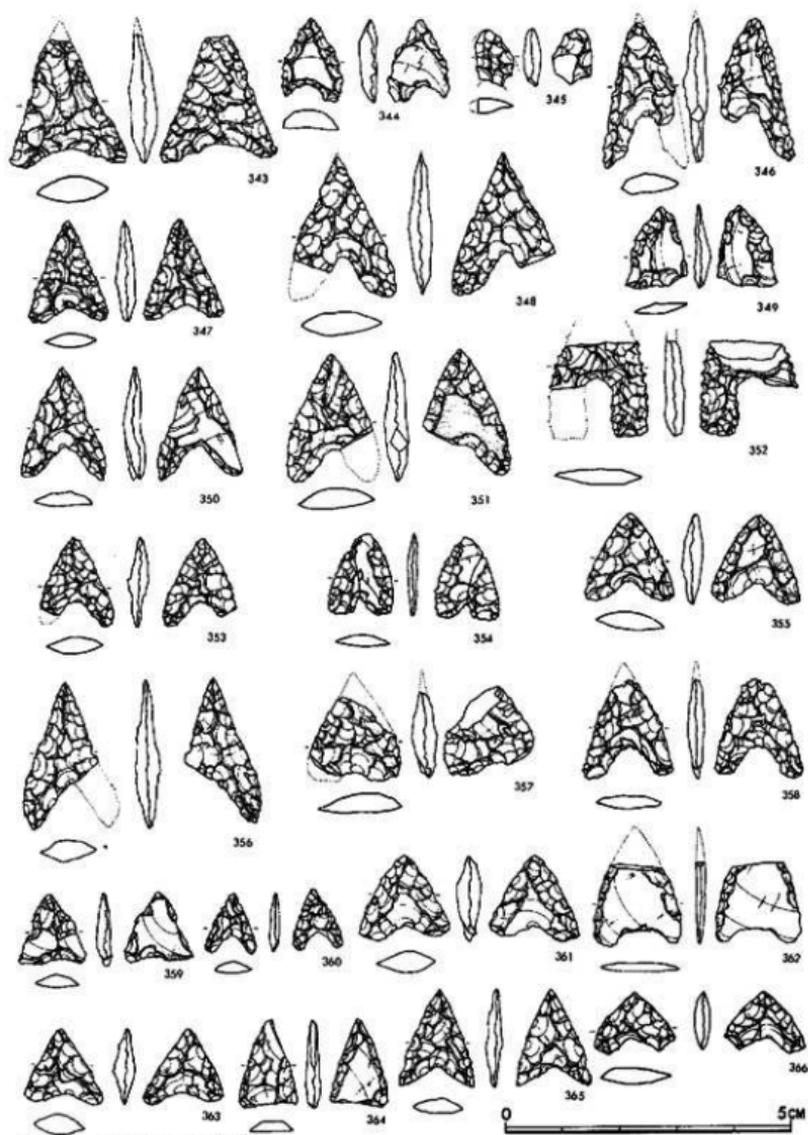
石鏃の欠損部位別の頻度は、欠損品33点の総欠損箇所数49箇所のうち、先端部18(36.7%)、脚部31(64.3%)で、脚部を欠損する率が極めて高い。

尖頭状石器〔第177図401〕 安山岩製の厚手の剥片を素材としたもので、粗い加工によって全体形を略三角形に整えている。右側辺下部には素材剥片の打面部を僅かに留めている。先端部は鋭角に整形されておらず、周辺への仕上げ加工は加えられていない。断面形はレンズ状をなして厚い。長さ2.0cm、幅2.14cm、厚さ0.9cmである。

石匙〔第181図433, 434, 第182図437, 438〕 433は安山岩製の横長剥片を使用した横形の石匙である。つまみは体部に比べて大きい。整形加工は入念で全周を巡っているが、表裏面とも素材剥片の第一次剥離面を残している。刃部は両面から交互剥離によってジグザグに形作られている。長さ3.6cm、幅6.7cm、厚さ0.85cmで、つまみの大きさは幅2.8cmを測る。434も433と同様に安山岩製の横形の石匙であるが、縦長剥片を横位に用いる点で異っている。整形加工、刃部作出も両面からの剥離で行なわれている。433が左右対称形を意識しているのに対し、434はつまみの扱っても浅く、左右非対称形をなす。長さ3.95cm、幅6.7cm、厚さ0.71cm、つまみ部の幅は3.0cmを測る。437は流理の入った安山岩製の横長剥片を素材とした横形の石匙である。つまみの扱いは両面からの剥離によって形成されているが、刃部の作出は左が裏面→表面、右が表面→裏面という方向で実施されている。長さ4.2cm、幅5.35cm、厚さ1.17cm、つまみ部の幅1.9cmを測る。438は安山岩の縦長剥片を素材とした縦形の石匙である。刃部は素材剥片の主要剥離面側からの連続する細かい調整剥離によって形成されている。左側辺部は欠損しているが、側辺の上部に刃部が残されていることから、両側辺に刃部が作出されていたことが窺える。扱部は両面から加工されており、それ程深く及んでいない。長さ9.5cm、幅5.4cm、厚さ0.7cm、つまみ部の幅2.9cmを測る。

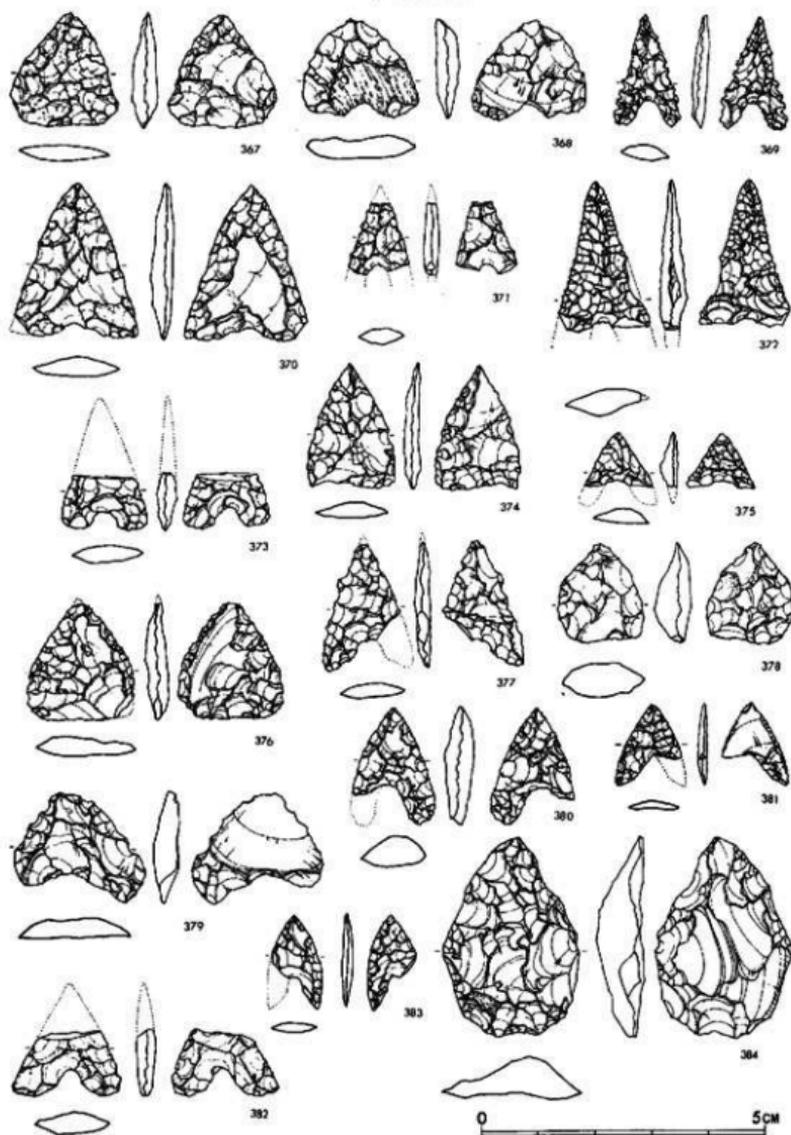
433, 434の石匙は形態的に極めて類似するが、出土地点はS-26グリット、S-27グリットで約20cmのレベル差をもって出土している。また437はJ-8グリット、438はN-23グリットよりそれぞれ検出されている。438は他の3点の石匙が横形で、刃部も両面加工の交互剥離によ

第4章 調査の記録



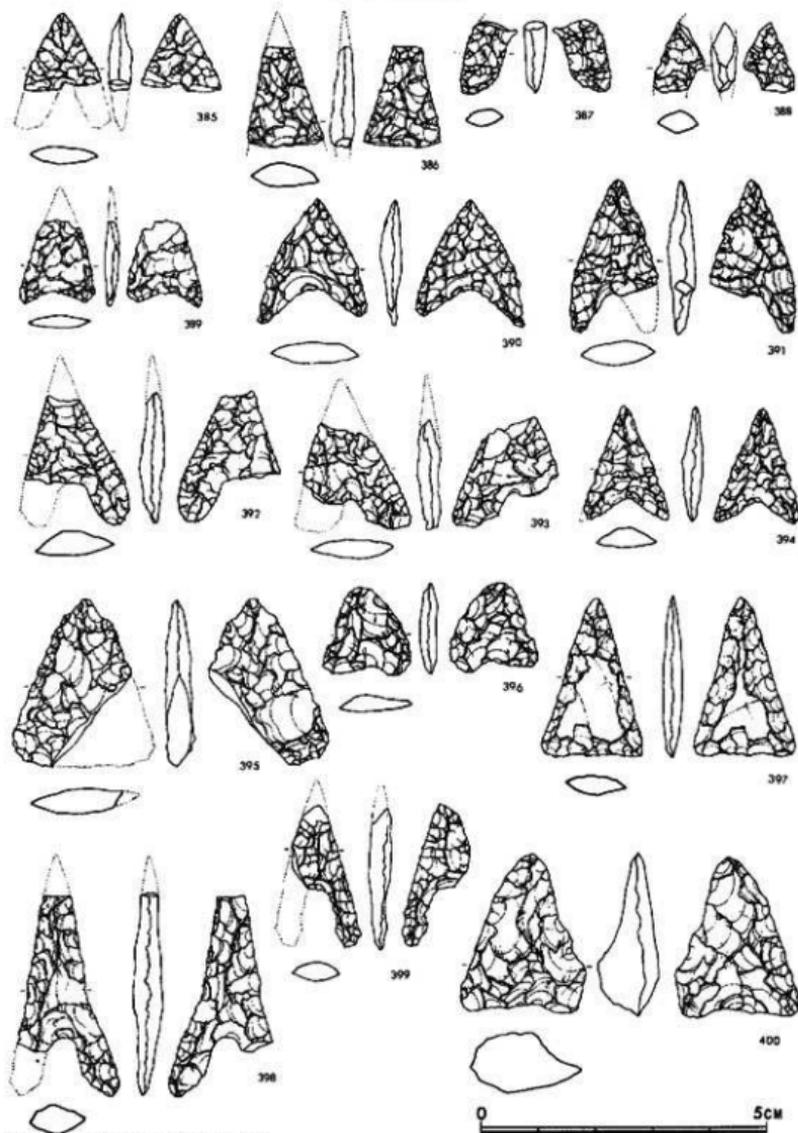
第174圖 I層出土石器実測図I

6. I層の遺構と遺物



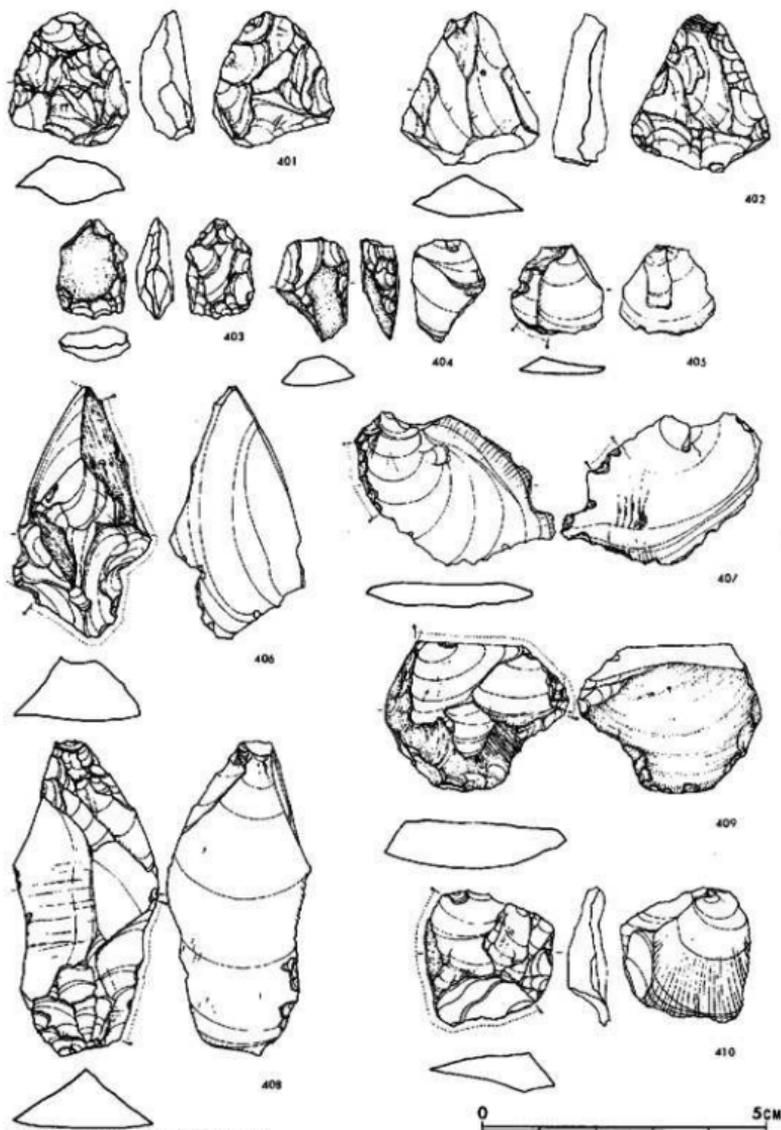
第175図 I層出土石器実測図II

第4章 調査の記録



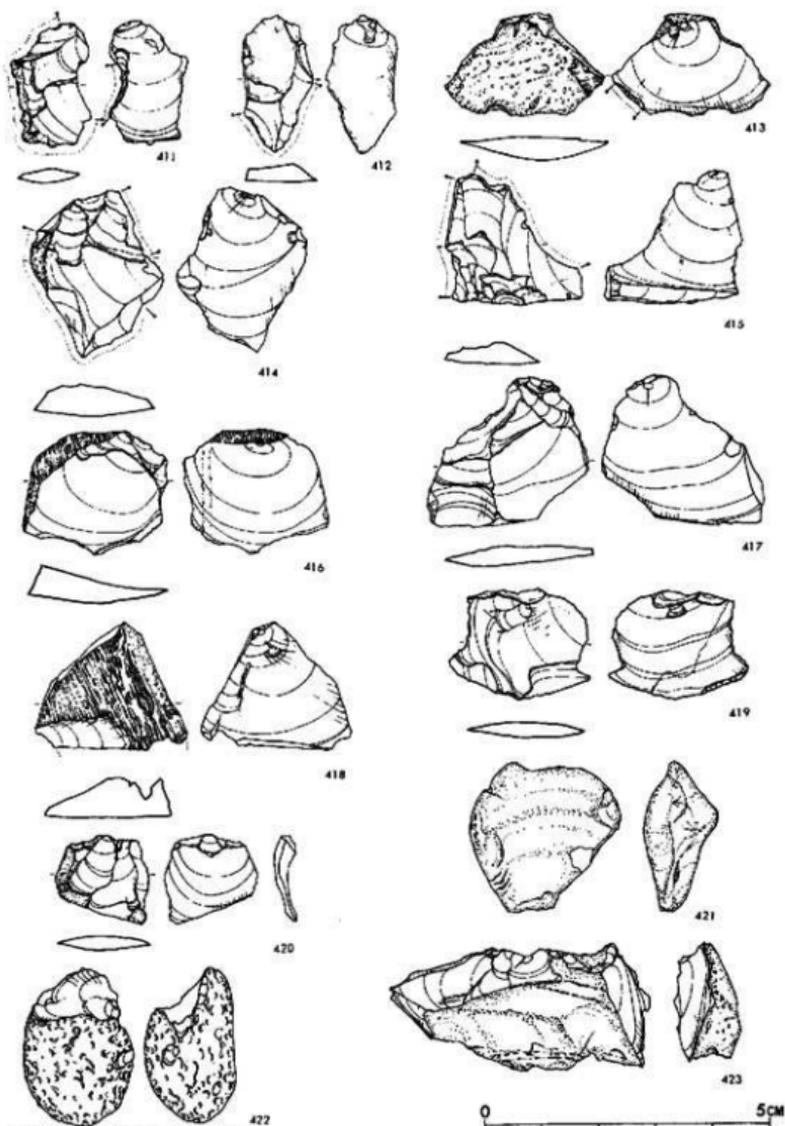
第176図 I層出土石器実測図Ⅲ

6. I層の遺構と遺物



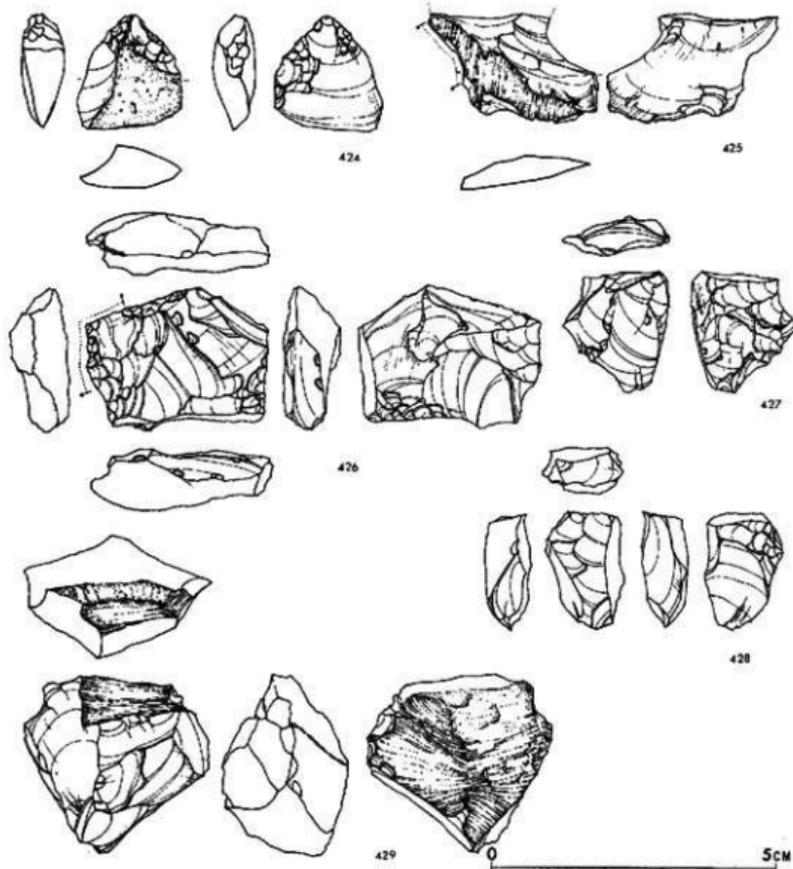
第177図 I層出土石器実測図Ⅳ

第4章 調査の記録



第178図 I層出土石器実測図V

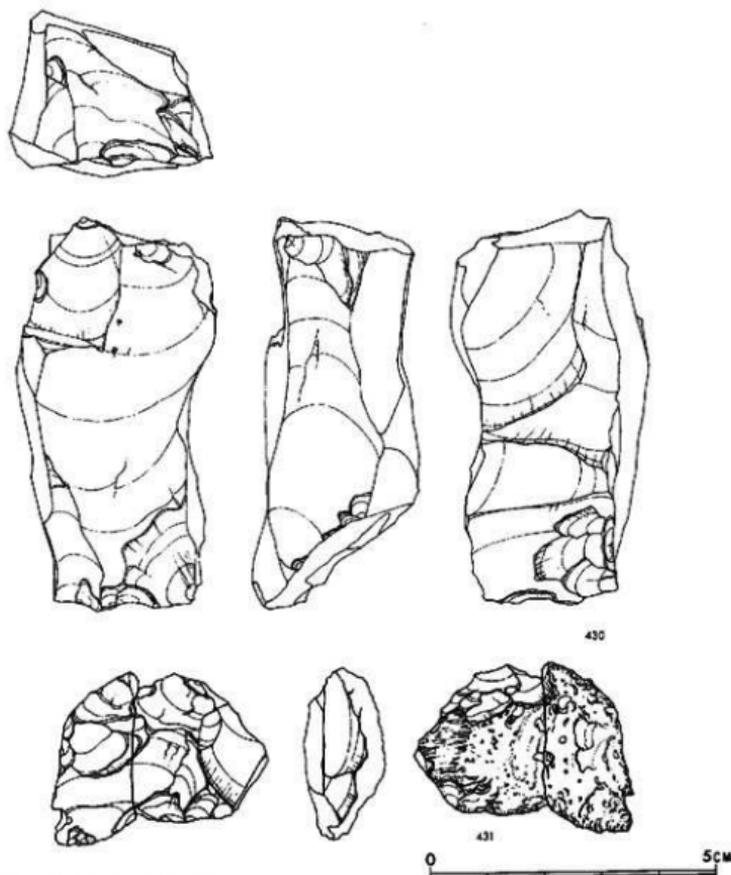
6. I層の遺構と遺物



第179図 I層出土石器実測図VI

るものであるのに対し、縦形で一方からの刃部整形剥離である点で特異である。

スクレイパー〔第177図402～404、第179図424、第181図432、435、第182図436、第183図439～442、第184図443、444、第185図445〕 24点中15点を図示した。図示していないものは破片及び刮片である。402は安山岩製の不定形剥片の両側辺に刃部を作出した小型スクレイパーである。刃部の整形剥離は背面から裏面にかけて施されている。先端に素材剥片の自然面を留めて



第180図 1層出土石器実測図VI

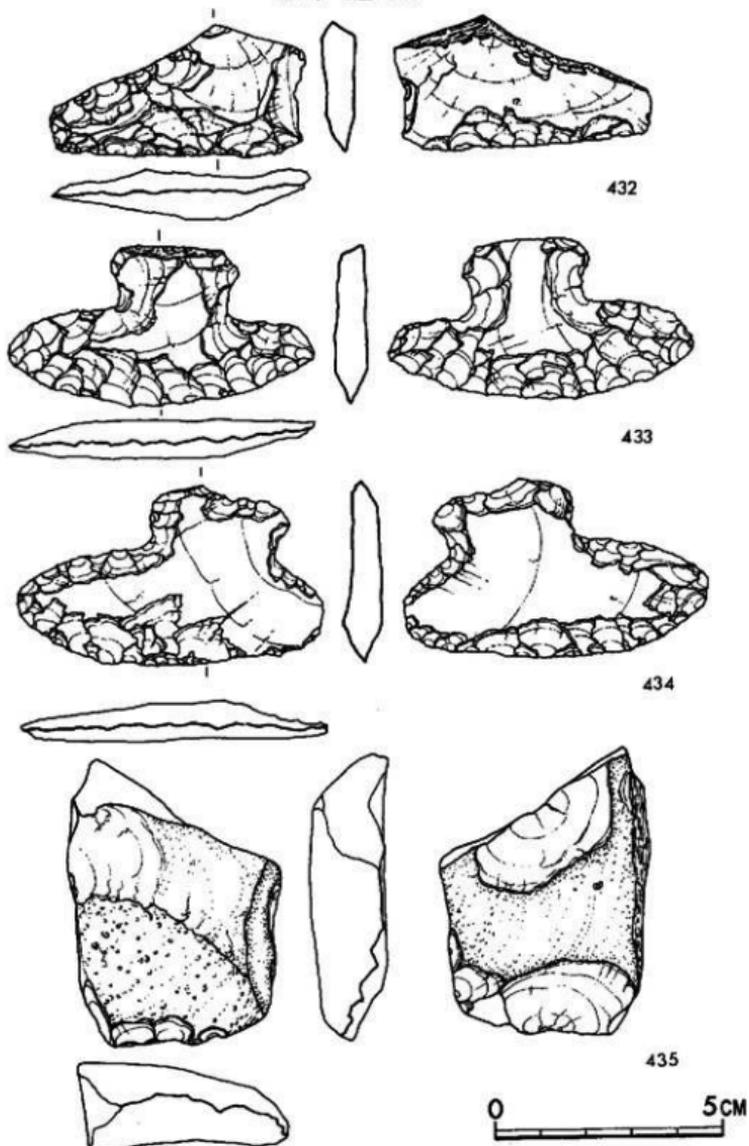
いる。長さ2.8cm、幅2.4cm、厚さ0.9cmを測る。403はob-D製の小型剥片を用いた拇指状搔器である。素材の主要剥離面に裏面が周辺部に剥離を施した後、末端部を中心に刃部を形成している。背面には大きく素材の自然面を残している。長さ1.8cm、幅1.2cm、厚さ0.6cmを測る。404はob-A製剥片の右側縁に裏面から6回の急角度の剥離によって刃部を作出した小形の搔器である。背面に自然面が残る。刃部表面には使用痕らしきものは認められない。長さ1.8cm、幅1.3cm、厚さ0.6cmを測る。424はob-A製の小型の搔器で、素材剥片の上半部に両面から二次加

6. I層の遺構と遺物

工を施して刃部を形成したものである。背面側にあらわれる剥離は急角度に実施されている。長さ2.0cm、幅1.9cm、厚さ0.8cmを測る。432は安山岩製の横長剥片を利用したスクレイパーである。素材剥片の打面は無調整の自然面である。刃部は剥片の末端に両面からの整形剥離で作出される平刃である。他の部分への調整剥離は認められない。長さ2.9cm、幅5.8cm、厚さ0.95cmを測る。435は安山岩製の扁平礫の一边に粗い数回の剥離によって刃部を作出したスクレイパーである。略半分を欠損している。現存長6.4cm、幅4.8cm、厚さ1.5cmを測る。436は安山岩製の横長剥片を利用したスクレイパーである。素材の末端に両面からのリタッチを施して刃部を作出しているが、主要剥離面側からの剥離方向が主である。刃部の左側はノッチ状に加工されており直線的な刃部ではない。長さ4.0cm、幅5.8cm、厚さ0.8cmを測る。439は安山岩製の横長剥片を利用した両面加工のスクレイパーである。素材剥片の打面は石器の上端に残されている。刃部は末端辺及び左側辺に細かい整形加工の剥離によって形成されている。後述するIIa類の石核の可能性もある。長さ3.9cm、幅6.3cm、厚さ1.5cmを測る。440は安山岩製の横長剥片の末端辺に、主要剥離面側からリタッチを施し、刃部形成したスクレイパーである。素材剥片の形状はあまり変えられていない。左側辺上部と頭部に僅かに整形剥離の痕が観察される。長さ5.5cm、幅6.1cm、厚さ1.1cmを測る。441は青い稲文様の入る安山岩製の石刃状剥片を利用したスクレイパーである。素材の左側辺に主要剥離面側から細かいリタッチを施して刃部を形成している。長さ8.9cm、幅2.9cm、厚さ0.6cmを測る。442は440と同じく安山岩の横長剥片を素材としたスクレイパーで、素材剥片の末端辺に刃部を作出したものである。刃部の整形加工は主要剥離面側からのみ入念に施されている。他の部分への加工は認められない。長さ3.3cm、幅6.1cm、厚さ1.2cmを測る。443は安山岩製の大型剥片素材を用いたスクレイパーである。素材剥片は自然面打面をもつ。刃部は末端辺に両面からの剥離によって形成されている。刃部の整形は入念に仕上げられている。他の部分へのリタッチはない。長さ9.0cm、幅10.5cm、厚さ1.6cmを測る。444も安山岩製横長剥片を素材としたスクレイパーである。石質は他と比して粘性が少なく色調も青味がかっている。刃部は末端辺に主要剥離面側からのみの剥離によって作出されている。他の部分への整形加工はみられず、素材剥片の形状をあまり変えてはいない。長さ4.5cm、幅9.4cm、厚さ1.7cmを測る。445は安山岩製の横長厚手の大形剥片を素材としたスクレイパーである。素材剥片は自然面打面より剥取されたもので、打面部付近を欠損している。図示した表面側が素材剥片の主要剥離面である。刃部は裏面から主要剥離面方向への丁寧な整形加工によって作出されたものである。頭部裏面と刃部表面の一部とに数回の剥離痕を留めている。刃部はやや外弯する。長さ5.6cm、幅12.2cm、厚さ2.1cmを測る。

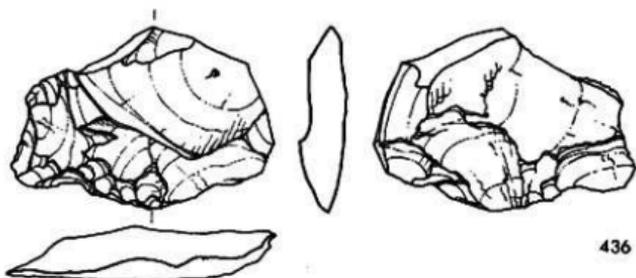
上記の14個のスクレイパーは、I類一拇指状の搔器(403, 404, 424)、II類一剥片の側縁に一方のみから刃部整形の剥離を行なったもの(402, 440, 441, 442, 444, 445)、III類一刃部が両面からの剥離で作出されるもの(432, 435, 436, 439, 443)に分類できる。各々の出土

第4章 調査の記録

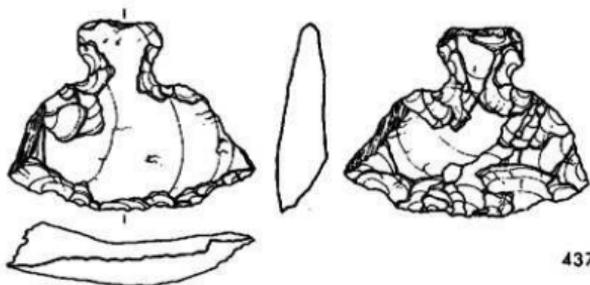


第181圖 I層出土石器実測図Ⅶ

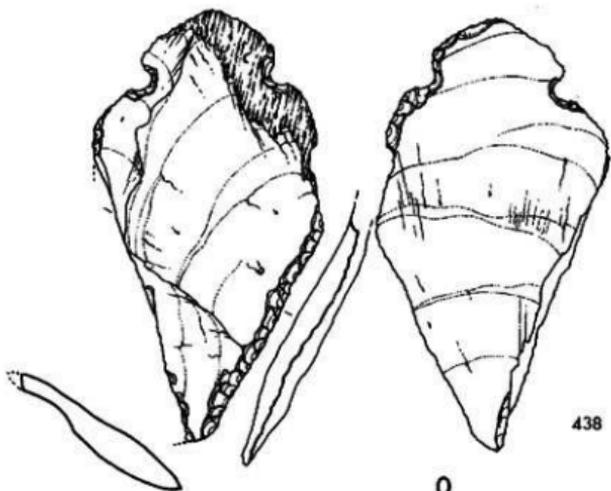
6. I層の遺構と遺物



436



437

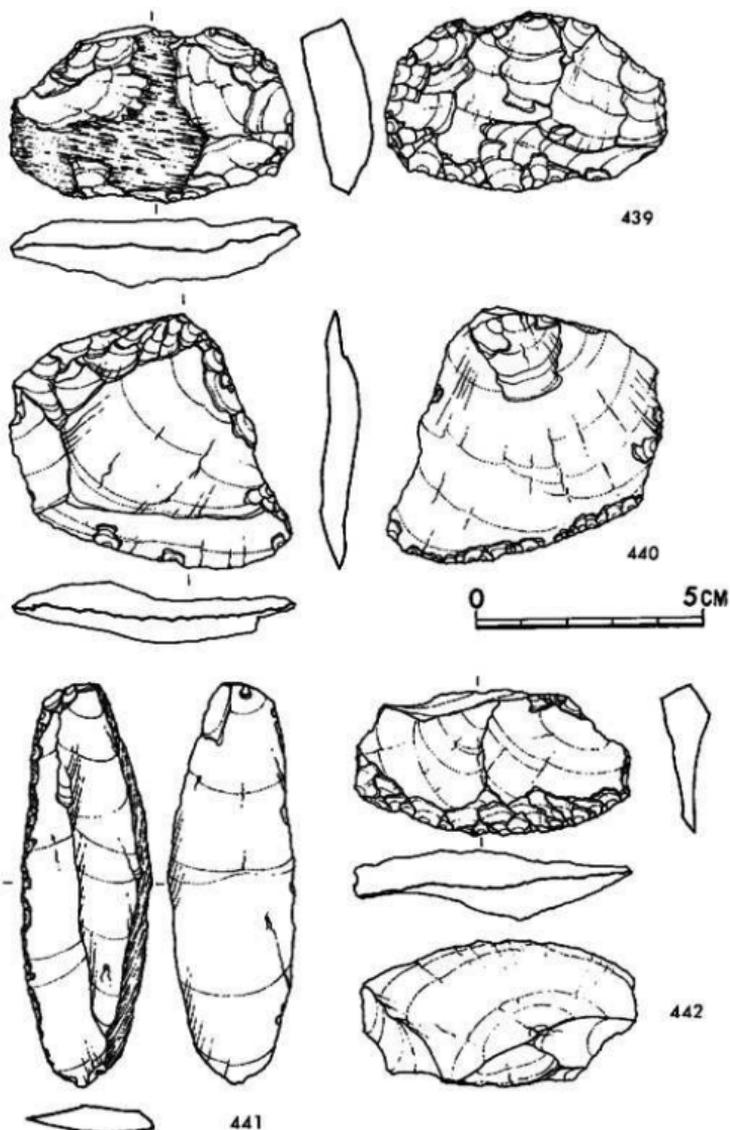


438



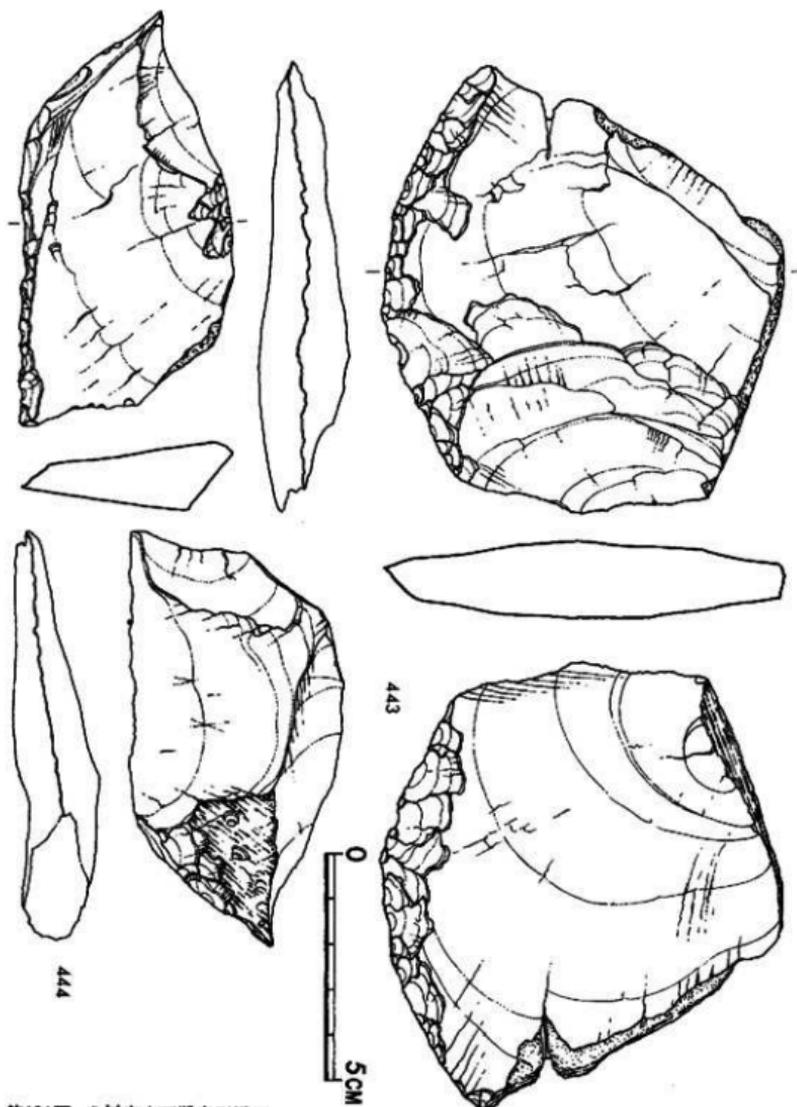
第182図 I層出土石器実測図Ⅱ

第4章 調査の記録

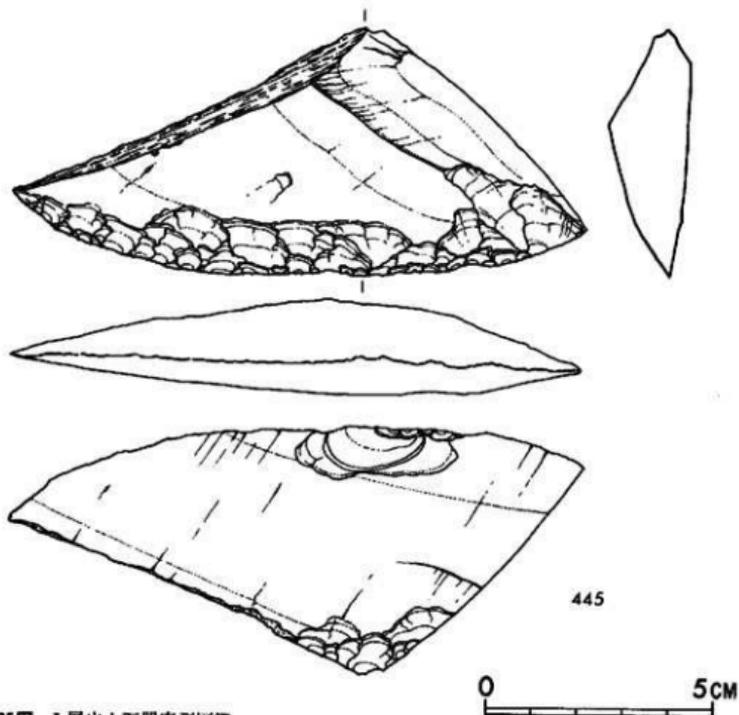


第183図 I層出土石器実測図X

6. I層の遺構と遺物



第184圖 I層出土石器実測図Ⅱ



第185図 I層出土石器実測図

グリッドは、402 (J-9), 403 (S-15), 404 (O-15), 424 (N-24), 432 (M-22), 435 (N-23), 436 (L-6), 439 (J-5), 440 (J-6), 441 (J-6), 442 (O-6), 443 (S-24), 444 (P-34), 445 (Q-13)で、タイプごとの分布上の偏りは認められない。

UF (第177図405~410, 第178図411~415, 第179図425) 出土した25点のうち安山岩製剥片を使用したものは4点で全体の16%を占める。他は全て黒曜石製剥片である。出土状況は散慢で特に密集する部分はない。使用痕は剥片の縁辺に微細な刃漬れとして観察されるが、407のように大きな連続する刃漬れをもつものもある。

石斧 (第186図446, 第187図448図) 446は安山岩製の局部磨製石斧である。三点に破損分割したものが接合したもので、接合資料No.12の資料である。刃部がI層、頭部がII層第1ブロックより各々出土し、胴部は表面採集資料である。礫素材を粗い剝離で形を整え、その後研磨

6. 1層の遺構と遺物

を施している。表表面の中央部に研磨痕が観察できる。ただし、刃部には粗い剥離痕が認められ、製作途上のものであるか使用による刃潰れかは判断し難い。ただし、その研磨の具合からみて局部磨製石斧の可能性が高い。胴部と刃部の接合状態は端正であるが、胴部と頭部の接合部分には不整合な面がある。これは頭部破損後に修復のための剥離を施しているためである。これは本体である胴部側のみ整形のための剥離が加えられていること、そしてその剥離が研磨面を切っており時間的に新しいこと等から類推される。長さ13.2cm、幅5.4cm、厚さ2.8cm、重量270gである。

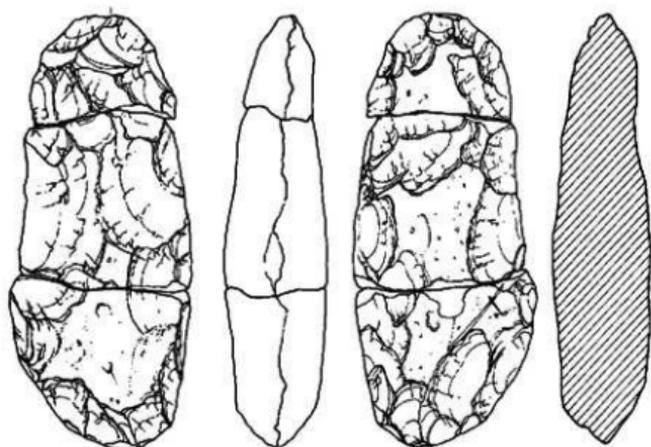
448は油性のある安山岩製の局部磨製石斧である。Q-13グリットで第186図445のスクレイパーと並んで出土した。全面に粗い剥離を施し形を整えた後、研磨を行なっている。研磨仕上げは刃部以外に表表面、側面、頭部にまで施されているが、剥離痕の稜上のみでその内部まで達せず剥離面を大きく残したままである。体形は裏面が平坦で背面が亀甲状に膨んだ丸盤状をなす。刃部も裏面の平坦面よりで、断面形で中心軸上をはずれる。頭部を僅かに欠損している。刃部には刃潰れ痕が認められ、表表面の刃部付近には擦痕状の傷が観察できる。長さ15.2cm、幅5.9cm、厚さ3.4cm、重量390gである。

環状石斧〔第186図447〕 S-24グリットより出土した。硬砂岩製の環状石斧の完形品である。両面からの粗い剥離によって周辺部を整形した後研磨仕上げを行なっている。刃部の研磨は周辺の刃に沿って回転方向に行なわれている。裏面には一部表面が剥落した部分がある。刃部周辺には刃部と直角方向の擦痕状の傷が無数に認められる。中央部の孔も両面から回転研磨によって穿たれている。全径15.5cm、厚さ3.2cm、中央孔の径2.1cmを測る。重量は740gである。

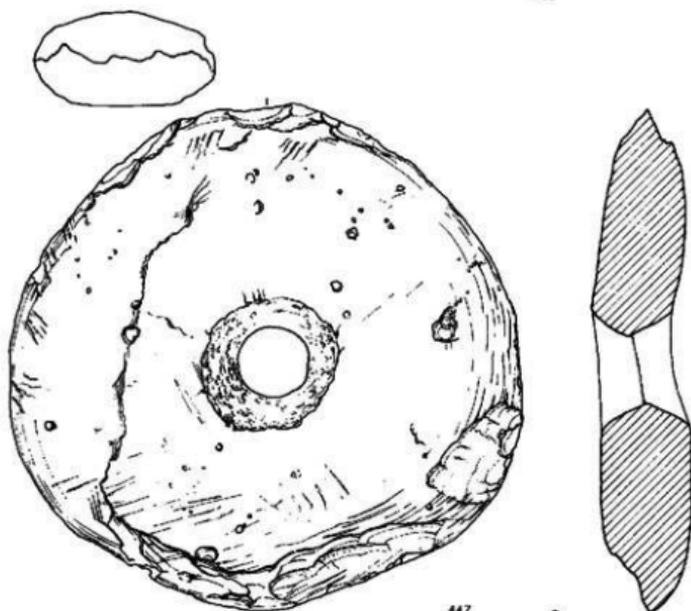
磨石〔第188図450-452〕 450はやや丸味を帯びた石鹼型の花崗岩製磨石（凹石）である。一面の中央に凹部を有する。長さ10.3cm、幅6.6cm、厚さ3.7cmを測る。N-7グリット出土。451は花崗岩製の角礫を利用した磨石（敲石）で、一面に敲痕を有している。長さ11.9cm、幅6.6cm、厚さ6.0cmを測る。N-14グリット出土。452は玄武岩製の磨石で扁平な長楕円を呈する。表表面ともに磨痕をとどめるが平坦でなく角部を落とすように研磨が行なわれている。長さ11.5cm、幅9.3cm、厚さ3.9cmを測る。U-19グリット出土。他に玄武岩製の小形磨石（6.3cm×4.5cm×3.1cm、J-8グリット出土）、玄武岩製磨石（9.9cm×7.1cm×5.9cm、P-13グリット出土）、花崗岩製磨石の半欠品（3.7cm×6.4cm×5.4cm、M-7グリット出土）がある。

石皿〔第189図453〕 花崗岩製の大型礫を利用したもので、中央部に磨痕をもつ。略隅丸の長方形をなす。S-18グリットより出土した。

石核〔第179図426-429、第180図430-431〕 8点のうち6点を図示した。426はob-B製の剥片素材の石核で、石核の中心に向かって求心的に剥片剥離を実施している。二側縁に分割面を留めている。2.1cm×3.2cm×0.9cm。K-10グリット出土。427、428は426と同じくob-B製の剥片素材の石核で、側面に分割面を有している。大きさ及び出土グリットは各々2.2cm×1.6



446

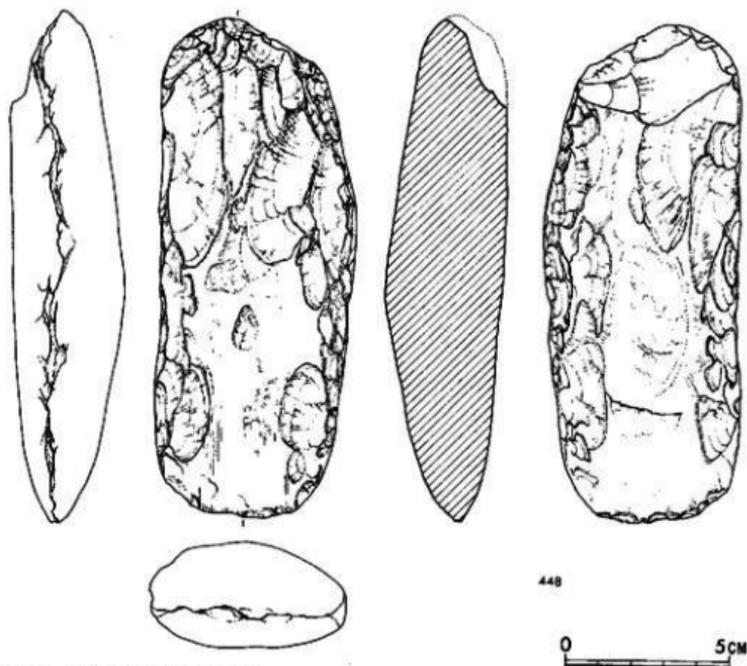


447



第186図 I層出土石器実測図 XIII

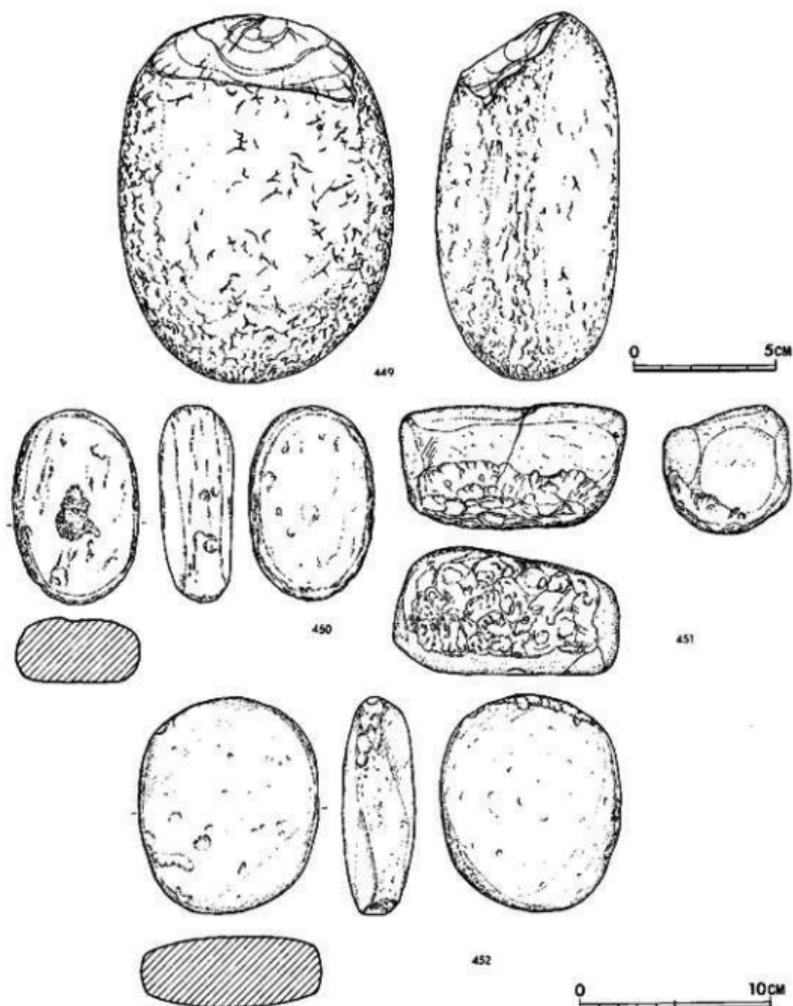
6. I層の遺構と遺物



第187図 I層出土石器実測図 XIV

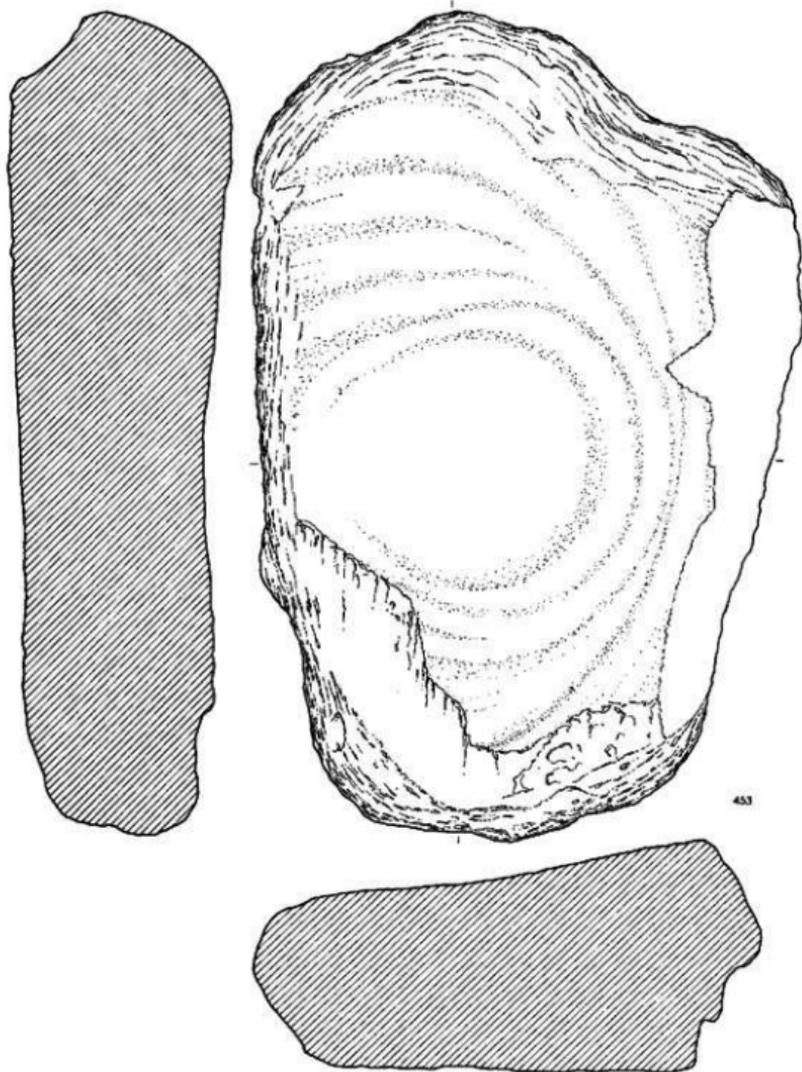
cm×0.6cm, S-12, 2.1cm×1.4cm×0.9cm, N-13である。429はob-A製の石核であるが、素材の形状は不明である。正面中央の稜上から剥片剥離を実施している。3.0cm×3.3cm×2.0cm, N-12グリット出土。430は安山岩製の角柱状の体形をもつ石核で、J-7グリットより出土した。剥片剥離は上下の打面上から実施され、打面には調整痕が認められる。6.9cm×3.4cm×2.2cm。431はob-A製の剥片を利用した石核で、中央部で分割したものが接合している。剥片剥離は石核の中心に向けて背面の自然面を打面として実施されている。剥片1点が接合している。(接合資料No.1)。2.9cm×4.0cm×1.2cm。

原石〔第178図421～423, 第188図449〕 421はob-Dの扁平な小礫で、422と同じくJ-5グリットより出土した。2.9cm×2.6cm×1.3cm。423はob-Aの小形円礫である。2.7cm×2.0cm×1.5cm。423はob-B製の扁平な角礫で、L-20グリットより出土した。2.2cm×4.5cm×0.8cm。449は安山岩の大形円礫で、第1号竅穴状遺構中より出土した。剥離面以外は滑らかな自然面で



第188圖 I層出土石器実測図 XV

6. I層の遺構と遺物



第189図 I層出土石器実測図 XV

0 10cm

ある。13.0cm×9.8cm×6.4cmである。これらの原石は421を除いてすべて礫面の一部に剥離痕を留めている。(小畑)

(4) 小結

前節においてI層の遺構および出土遺物である石器、石器の出土分布と遺物について前述したが、ここでI層について若干のまとめを行い小結としたい。

①遺構

I層より検出した遺構は竪穴状遺構3基と土壌5基である。その分布は、発掘時の失敗もあり、断面図作成のために残したベルトにおいて断面観察の結果、判明したものが多く、本来の分布を示すものではなく、実際にはさらに多くの遺構が存在したものと考えるが明らかにできないことは発掘における反省としたい。本遺跡における竪穴状遺構、あるいは土壌についてその全形を知ることができず、その使用目的が何であったかを検出するにはあまりに例が少く、今回はふれない。本遺跡の下流に存在するE遺跡、あるいはK遺跡で同様の遺構を多数検出しているため、検討はE遺跡ないしはK遺跡の報告において行うこととする。(山崎)

②土器について

A. 土器の分布(第190図)

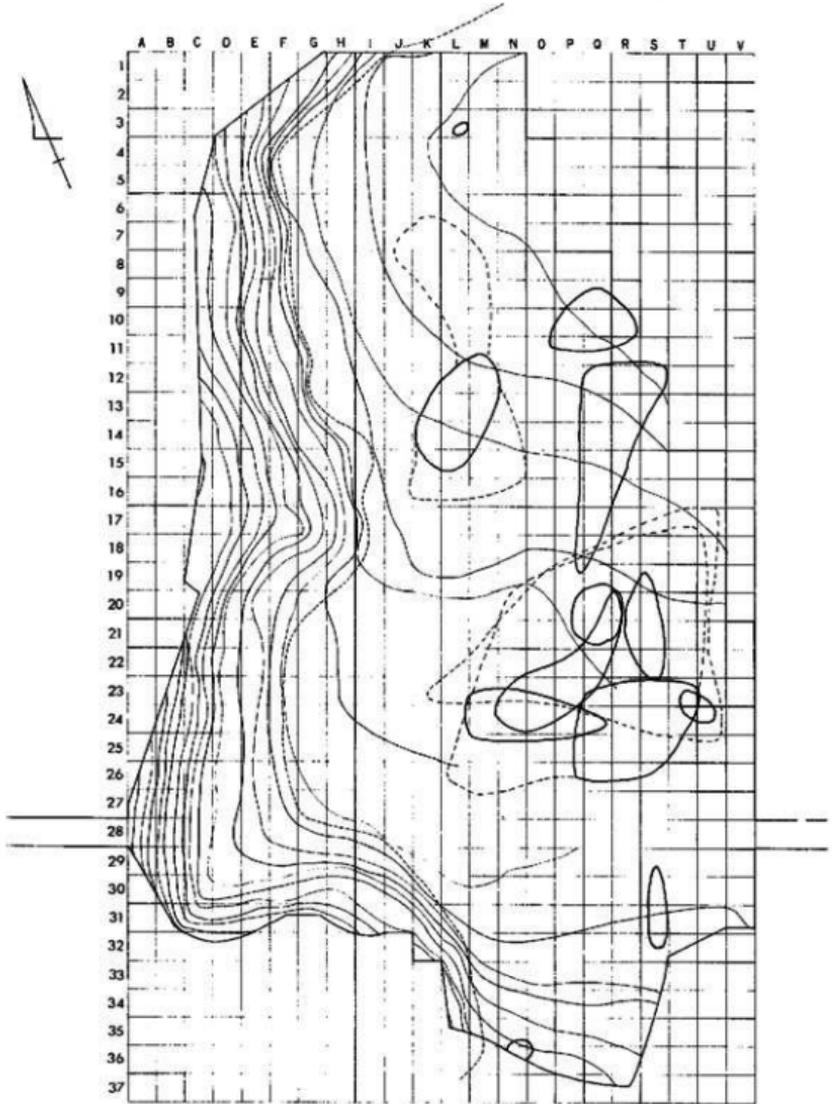
土器の分布はⅢ、Ⅱ層ほどのまとまりはなく、土器個体も少ないため充分にその傾向を把握することは困難である。土器の分布は大きくは第1凹部の前面(第1グループ)、第2凹部の前面(第2グループ)、第3凹部の前面(第3グループ)として把握される。この中で第2グループが一定のまとまりを示すのに対し、第1グループでは第1凹部南半部前面のより凹部に近い部分(第1グループA)と第1凹部南半部前面のより段丘縁に近い部分(第1グループB)と第1凹部北半部前面(第1グループC)に細別でき、第3グループもより第3凹部に近い分布(第3グループA)と遠い分布(第3グループB)に細別できる。

第1グループでは互いに重複関係はみられず、第1グループAでは摺糸文土器Ⅱ、第1グループBでは摺糸文土器Ⅳ、押型文土器、無文土器、第1グループCでは摺糸文土器Ⅳがあり、第1グループでは計5個体以上が存在する。第2グループは、摺糸文土器Ⅰ、Ⅲ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、平櫛式土器、沈線文土器、条痕文土器Ⅱの8個体以上が重複関係で存在するがⅡ層の重複関係ほどではない。第3グループは、第3グループBの平櫛式土器、第3グループAの条痕文土器Ⅰの計2個体以上の土器が存在する。

この三つのグループの中で最も土器の重複がみられるのは先に指摘したように第2グループであり、I層の中での中心となるグループである。以下第1グループから、その問題点を整理しておく。

第1グループはA～Cの3つに細分されるが、A、Bの土器を除いて、まばらな分布を示し、

6. I層の遺構と遺物



第190図 I層出土土器の分布図

また土器が小破片である。第1凹部の前面I層のみの下面において、礫が多量に分布し、一種の礫層を形成していたが、この礫層を土器の分布が無関係ではないことを、この分布が示していると推測できる。このような礫の分布はさらに同一場所でも認められることから、これら土器の分布が希薄であるのは自然災害の結果によるものと推定され、居住するに不適当な時期が存在したものと思われる。第1凹部の細分化した土器はそれによって流出堆積したものと想定できる。このグループではIII層の時と同様に生活の一時的停止があったものと考えられる。

第2グループは6個体以上の土器の重複があり、I層段階での居住の中心となっている。土器の分布は第2凹部前面、段丘の縁に近い部分であるが、上部に古墳が築造されるため擾乱を受けてその傾向はつかみがたい。土器の拡散傾向は南西より北東の方向で、各土器が一致している。

第3グループは、土器類がきわめて少く、本来的に居住区としては使用されなかった可能性が強い。以上の3グループの中で、土器の個体は別でも、同一時期、同一型式の土器が2グループにわたって存在するものがある。燃糸文土器II、IIIは同一人の製作によったのではないかと考える土器であるが、燃糸文土器IIは第1グループに、燃糸文土器IIIは第2グループに分布し、平椀式土器は第2グループと第3グループに分布している。このことは、これらの土器が使用されていた時の居住空間を示唆するものとして注目される。すなわち、燃糸文土器II、IIIの時期に居住空間は第1グループと第2グループの間に存在する空間が想定され、平椀式土器の時期の居住空間は第2グループと第3グループの間に存在する空間が想定されるのである。

B. 土器の重複関係

I層内における各土器の重複関係から、その前後関係を把握するために、重複関係がみられる第2グループ、P-21、Q-21、R-21グリットとI-23、M-23、N-23、O-23、P-23、Q-23、R-23、S-23、T-23グリットとL-24、M-24、N-24、O-24、P-24、Q-24、R-24、S-24グリットについて検討を加えてみる。

まず、P-21、Q-21、R-21グリットでは、燃糸文土器IIと平椀式土器の重複関係がみられ、非常に近接はするものの、明確に燃糸文土器Iが平椀式土器の下層に出土している状態が把握され、その前後関係としては燃糸文土器I→平椀式土器が明らかである。

L-23、M-23、N-23、O-23、P-23、Q-23、R-23、S-23、T-23グリットにおいては平椀式土器、燃糸文土器III、燃糸文土器VII、沈線文土器の重複関係がみられ、それらの関係は、最も下部に燃糸文土器IIIが存在し、その上部に平椀式土器、燃糸文土器III、VII、沈線文土器が存在し、その中で平椀式土器が若干下部に出土する傾向にある。隣接するL-24、M-24、N-24、O-24、P-24、Q-24、R-24、S-24グリットでは燃糸文土器VIII、平椀式土器VIII、平椀式土器の重複関係があり、その中で燃糸文土器IIIが最も下部から出土し、続いて平椀式土器がその上部にのり、燃糸文土器VIIIは最上層の出土である。以上、L~T-23、L~

6. I層の遺構と遺物

S-24の2列のグリットからみた土層内での先後関係は燃糸文土器→平椀式土器→燃糸文土器Ⅶ、沈線文土器が把握できる。第2グループの先後関係は各土器間の重複が少く、相互の先後関係を把握するのは困難であるが、以上を相互すると燃糸文土器Ⅰ、Ⅲ→平椀式土器→燃糸文土器Ⅶ、沈線文土器が把握できる。しかし、I層ではこの他、押型文土器、無文土器の出土があり、その関係はさらに複雑なものとなる。燃糸文土器Ⅰ、Ⅲでは平椀式土器との土層関係、器形を考察した場合、燃糸文土器Ⅰは燃糸文土器Ⅲに先行する可能性がある。また、押型文土器との関係は判別する材料がないが、底部の形からみて、平椀式土器に先行する可能性があるが燃糸文土器との関係は不明といわざるを得ない。燃糸文土器Ⅰ、Ⅲのいずれかと共伴するか、あるいはその間にはいるものと推測できる。また、燃糸文土器Ⅶと沈線文土器の関係も明らかにできないが沈線文土器は丸底を呈し、小破片で明らかではないが、燃糸文土器Ⅶの文様構成からみて、沈線文土器が先行する可能性が強い。無文土器は先に指摘したごとく、中～後期に下る可能性が強い。以上をまとめると、I層の出土土器は燃糸文土器Ⅰ、(押型文土器)→燃糸文土器Ⅲ→平椀式土器→沈線文土器→燃糸文土器Ⅶ→無文土器の序列が把握できる。(山崎)

③石器について

I層出土の石器、石片の総数は721点で、うち石器が110点(15.3%)、石核が8点(1.1%)、原石4点(0.55%)を占めている。石器、石片の分布は散漫な状態で、判然としたブロックを形成しない。土器の分布から考察すると発掘区北側の第1凹部付近の石器はII層以降のもの可能性がある。この部分は包含層が薄く、接合資料に認められるようにI層とII層間の接合もあることからI層出土であるという明瞭な判断は下し難い。今後充分な検討が要求される。

石器の種類とその割合は、石鏃48点(43.6%)、スクレイパー24点(21.8%)、石匙2点(1.8%)、使用痕のある剥片25点(22.7%)、石斧2点(1.8%)、環状石斧1点(0.9%)、磨石6点(5.5%)、石皿1点(0.9%)で、II・III層に比べてスクレイパーの割合が増えている。使用痕のある剥片の割合は逆に減少している。磨石はIII層で約10%近くを占めるが、石斧、石皿、環状石斧などの理製石器が添加したII層以降はそれらも含めて同じ割合である。狩猟用具、植物性食物加工用具、生産用具別では44.5%、9.1%、46.4%で各層を通じて同一の割合を示しており、各時期の基本的なセットの関係として把握できよう。

III、II層で分析したようにグループ別の石器個体数を算出すると、石鏃12点、石匙0.5点、スクレイパー5.75点、使用痕のある剥片6.25点、石斧0.5点、環状石斧0.25点、磨石1.5点、石皿0.25点、石核2点、剥片・チップ147点となる。これをIII・II層と比較してみると、各層に共通な石器である石鏃、スクレイパー、使用痕のある剥片は各層ごとの個体数に大きな違いを示すが、石鏃・磨石はほぼ近似した値をとる。石鏃9.6～12.7個、磨石1.3～2.0個である。これは第一次生産用具である石鏃と磨石が時間幅を越えて同じ比率で組成の内に組み込まれていたことを示すもので、他の石器の消長を知る際の基準となる。しかしこの石鏃・磨石を基準として他

の石器を検討してみると、II—I層にかけてのスクレイパー・使用痕のある剥片・石斧の増加、砥石の減少を窺い知るのみであり、遺跡内で展開した調理・道具製作に関与する石器の増減のみで、直接的な生業に関わる問題にまで発展しない。また、再三述べるようにその数が1個に満たない石器に関しては、使用頻度（消耗度）より単一時期の使用の結果を想定する方が妥当であるし、逆に石皿や環状石斧のようにIII、II層から同数出土しているものでも計算上では異なる数値を示すという計算上のあやによるものであり注意をしなければならない。加えて、一つのグループの規模および遺跡における占居期間を勘定に入れれば問題は尚一層複雑になってくる。以後、他の遺跡を含めて検討したい問題である。

本層およびII層に出現する環状石斧は一般に弥生時代に属する資料であるが、近年、縄文時代にも僅かであるが出土例が徐々に増加している。木下修氏によれば深原遺跡での発掘当時、縄文時代に属する資料が22遺跡で確認されている（註1）。縄文時代早期に遡る例として長野県榑場遺跡、福岡県深原遺跡、宮崎県岩土原遺跡の3例があげられている。鈴木道之助氏によると岩手県大波野町遺跡、北海道クニネトウ遺跡、青森県長七谷地遺跡でも縄文時代早期後半の例が知られるという（註2）。その後も九州においては熊本県中後追遺跡（註3）、大分県新生遺跡（註4）で発見されており、柏原下遺跡を含めて九州における早期に遡る環状石斧は5遺跡6点となる。ほとんど硬砂岩製で研磨されたものである。（小畑）

〈註〉

- 註1 木下修他 『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第8集 福岡県教育委員会 1978
 註2 鈴木道之助 『石器の基礎知識III 縄文』 1981
 註3 桑原彰他 『中後追遺跡調査報告』九州電力株式会社・中後追遺跡調査団 1978
 註4 栗田勝弘 『新生遺跡』『野津川流域の遺跡II』野津町教育委員会 1981

※ II層第10号が並付近出土の石皿9点、石匙2点を差し引いた数値

7. その他の石器

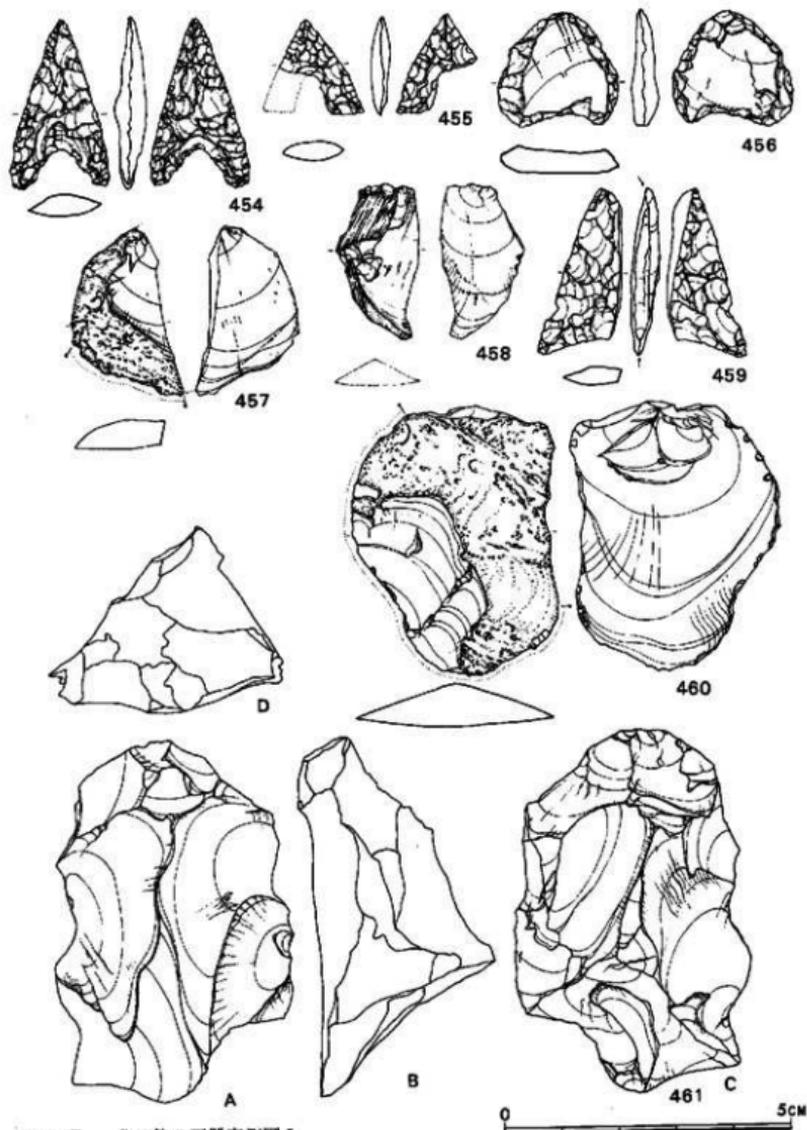
前節で取り扱わなかった、表面採集資料および、F-1号墳の墳丘中や周溝内より出土した石器を取り扱う。出土位置については不明である。石鏃3点、UF2点、スクレイパー2点、石核2点、意味不明石器1点、剥片1点を図示した。

石鏃〔191図461、～456〕 454はob-A製の長身の楯形鏃である。側辺は少し外弯し、刃部の尖りもゆるやかである。挟りは他の楯形鏃に比べて浅く、脚部もあまり内折しない。整形仕上げは入念である。455はob-B製の短身の楯形鏃である。胴部が段目をもってやや張り出す。脚部は内折し、他のII類が外へ張り出し気味なのに比して張り出しが弱い。片脚を欠損している。456は安山岩製の剥片鏃で、整形加工はあまり入念でない。リタッチは周辺部のみで素材の第一次剥離面を大きく残したままである。胴が外へ張り出し、先端部の尖らない浅い凹基の石鏃である。

UF〔第191図457、460〕 457はob-A製の剥片の末端部を使用したものである。使用痕は背面側に残っている。剥片は略半分を欠損している。260はob-B製の大型剥片を使用したもので縁辺の約子を正在している。使用痕は表裏両面に観察できる。

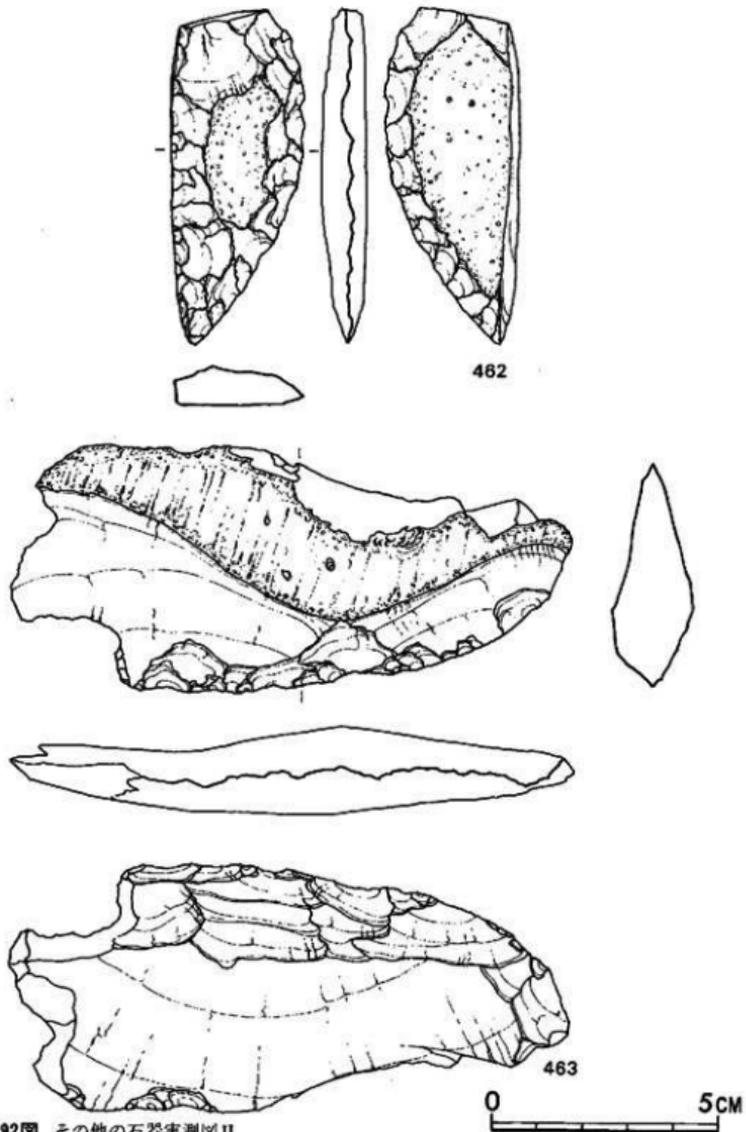
石核〔第191図461、第193図464〕 461は安山岩製の舟形を呈する石核である。図示したA面図を甲板面とすると、それより垂直方向の剥離が主に行なわれている。その後その甲板面に水平方向の剥離が実施される。よってA面にあらわれた剥離痕は他のB、C、D面の剥離を切っている。ただし、C面上部の剥離はA面の剥離を切っており、A面の剥片剥離実施後もう一度垂直方向の剥離を実施したことを窺わせる。打面はすべて他の剥離面を利用したもので打面調整の痕跡は認められない。剥片剥離に応じて転移している。6.4cm×4.1cm×3.0cm。464はob-B製の扁平な体形をもつ石核で、素材は剥片である。両面加工品を整形するように石核の中心に向かって求心的に剥片剥離を実施している。打面は剥離面打面である。表面の最終剥離面に剥片が接合した（接合資料No.40）。剥片は切断され完形を留めないが、最終剥離面の大きさは7.5cm×3.3cmで、形状は縦長である。2.7cm×4.7cm×1.1cm。下面に分割面をもつ。分割後の剥片剥離は行なわれていない。

スクレイパー〔第192図462・463〕 462は安山岩製の厚さ1.0cm前後の板状礫を分割した素材を用いたスクレイパーである。図の裏面右側にその分割面が残る。その分割面を打面として表面側に整形剥離を施している。刃部は両面から交互剥離状に剥離を行ない作出している。弧状に形成され、刃部の稜線はジグザグである。長さ7.4cm、幅2.9cm、厚さ1.0cmを測る。463は安山岩製の大型横長剥片を素材としたスクレイパーである。刃部は素材の打点側の縁辺を両面からの剥離によって整形して作出している。末端辺（図中の頭部側）には裏面からの数回の剥

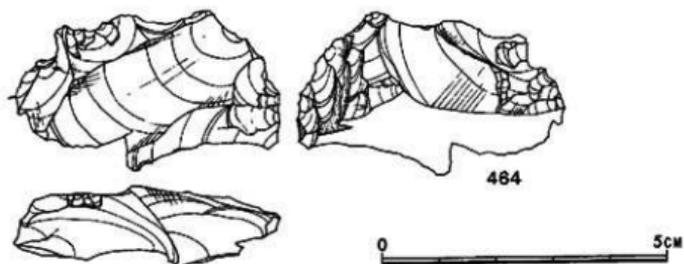


第191図 その他の石器実測図 I

6. I 層の遺構と遺物



第192図 その他の石器実測図II



第193図 その他の石器実測図Ⅲ

磨痕が認められ、この側辺も刃部が作出されていた可能性があるが、ガジリによって欠損して不明である。また左側辺部も破損している。現存長5.4cm、幅12.4cm、厚さ1.8cmを測る。

458はob-C製石鏃の半欠品であるが、その切断部に上下方向からの槇状剥離の痕を留めるものである。彫器とも考えたが下方向からの槇状剥離は上からのそれより新しく、石鏃欠損後下方向からの力が加わったものである。刃部が存在せず明らかな用途は不明である。（小畑）

第5章 遺構・遺物の分析

1. 土器の編年の検討

本遺跡より出土した土器破片は約4,000点の多量にのぼるが、それらは接合作業によって破片点数から考えて、以外と少い個体数であることは前章で説明したとおりである。ちなみに、各層より出土した土器個体数を示すとⅢ層では17個体+ α 、Ⅱ層では26個体+ α 、Ⅰ層では11個体+ α の合計54個体+ α でその数は予想以上に少ないことがわかる。土器は接合によってほぼ全形を復元できるものが多い。これに加え遺跡の包含層は約2.5mと非常に厚く、かつ三枚の遺物包含層に分離できること、あるいは、包含層の土層堆積が速く、出土遺物が同一層内においても上下関係を有して存在すること、さらに遺構を伴い、その生活面が追求できること、出土土器の大部分が縄文時代早期のものであること等、土器の編年を考える上で好条件を有している。しかし、一方では、本遺跡がどのような生活パターンの中に位置づけられるか、あるいは、居住期間の問題、土器が本遺跡に残された要因等によって土器のセット関係が正確に反映されているか否かの問題を含んではいるが、時間的変遷に対称した土器の変遷を把握することがより可能であるので、一応、F遺跡において、土層関係と土器型式を基本として早期土器の編年を試みることとする。ただし、今回はF遺跡のみの土器変遷にとどめ、F遺跡の出土土器の空白部はそのままにして、柏原遺跡群の他の縄文早期遺跡の整理、報告の終了時点で再度、北部九州縄文時代早期の編年を試みたいと思う。

先ず、土層関係からその前後関係の大略を示しているのが、Ⅰ層出土土器→Ⅱ層出土土器→Ⅲ層出土土器という関係図で、この関係は基本的大きな尺度として利用できる。また、各層の堆積における各土器個体の先後(上、下)関係は各層の小結で詳細は提示しておいた。ここでは、それを総合し、各土器型式の関係を概観したい。

Ⅲ層出土土器

Ⅲ層出土土器は型的に、捺糸文土器、刺突土器、条痕文土器の三種類がある。

I類土器

F遺跡で最も古く位置づけされる土器である。器形は丸底をなす深鉢形土器で、器壁は厚い。外面に斜方向に $F > L$ の密接した捺糸文を施文する。

II類土器

大型と小型のセットがある。丸底の深鉢形土器、器壁は厚い。外面に横方向～斜方向の条痕を施し、口縁部下に刺突文(棒状のもので下から突き刺し、下方に引いたものと真横から押し

1. F遺跡土器の概年

たものがある)を一条めぐらし、その下方に、3~4ヶ所コブ状の貼り付けがある土器、I類土器とII類土器は粘土が非常に類似していて、多量の砂粒を含んでいる。

III類土器

大型と小型のセットがある。丸底あるいは乳房状の底部を有する深鉢形土器、器壁は比較的薄い。内外に縦方向(一部横方向)の条痕を施す。大型器は胴部が円筒状にやや長い。

II層出土土器

II層出土土器は押型文土器と無文土器によって占められる。形式的、層位的に3型式に分類できる。

IV類土器

外面に山形文、細い栴円文を横走施文し、口縁部内面に帯状に外面と同様の原体で横走施文した押型文土器、中には内面の文様帯のないものや口唇部に押型文を施文したものがあ。施文文様は山形文が多い。尖底で砲弾形の器形をなす。東九州の稻荷山式土器に対比される。

V類土器

外面に山形文を横走施文し、口縁部内側にIV類土器同様に同一原体によって横走施文した文様帯があり、上部に縦方向の沈線(原体条痕)を施文した土器、尖底で砲弾形の器形を有する。東九州の早水台式土器に対比できる。

VI類土器

大型と小型のセットがある。外面栴円文を縦走施文し内面には縦方向の沈線(原体条痕)を施文する。底部は尖底あるいは丸底あるいは丸底に近い尖底で口縁部は外反する。東九州の下菅生B式土器に対比できる。

I層出土土器

I層出土土器は押型文土器、捺糸文土器、沈線文土器、平格式土器、条痕文土器、無文土器とその種類は多彩である。6型式に分類できる。

VII類土器

外面に粗大な栴円文を重複施文し、口縁部内面に縦の沈線を入れる。丸底に近い尖底で口縁部は強く外反する。器壁が厚い。東九州の田村式、幸の前式土器に対比できる。

VIII類土器

大型の深鉢形土器、やや突き出した尖底で器壁は比較的薄い。胴部が張り口縁部が強く外反する器形を有する。外面縦走する $r < L$ の目の細い捺糸文を施文する。口縁部内面には同一の捺糸文を横走施文する。

IX類土器

大型の深鉢形土器、器形は明らかにしがたいが、口縁端部が押さえられ、やや外側へ張り出し、端部は平坦で、へらによる刻目を入れる。外面には $r > L$ の捺糸文を縦走施文し、内面は

同一の捺糸文を斜位に帯状に施文する。

Ⅹ類土器

平椀式土器、平底の底部で胴部が中位で屈曲し、口縁部が外反する。口縁部はゆるやかな方形口縁をなす。胴中位と下半にミミズばれ状の貼り付け突帯がめぐり、沈線と刺突文で文様構成を行う。平椀式土器の範疇で把握できる。

Ⅺ類土器

小型の深鉢形土器で底部は丸底、胴中位で屈曲し、口縁部が外反する。胴上半部に縦の沈線、胴下半～底部に横方向の短直線を施し文様構成をなす。

Ⅻ類土器

後続する土器として条痕文土器、捺糸文土器、無文土器がある。これらはすべて破片でありその全形が明らかなものはなく、時期判別困難であるので、一応、Ⅻ類土器として一括しておく。

以上、Ⅻ類型に土器を分類したが、これらは古いものから順にならべたものであり、それぞれに問題を含んでいる。例ば、Ⅲ層出土のⅠ～Ⅲ類土器は石鏡が共存するために早期として説明しているが、Ⅰ・Ⅱ類は他の地域にない新出の土器であり、その内容も不明点が多い。また、Ⅲ層とⅡ層の間には時間的空白の存在が予想される。Ⅱ層で最も古く位置づけられる土器に無文土器があるが、この土器については十分に把握していないために省略した。Ⅰ層出土土器は数型式にわたる土器があり、その共存関係等は明確に把握していない。今後、その空白や諸関係を解決する遺跡として、A・E・K遺跡の調査があるので、今後の整理に期したいと思う。

(山崎)

2. 剥片剥離と石鋸の分析

(1) 剥片剥離技術

本遺跡における石核は形態的に分類すると次のとおりである。

I類—体形が立方体もしくは三角錐状をなし、剥片剥離は打面を転移しながら実施される。打面は他の剥離面を利用する石核。(第120図143, 第124図177, 178, 180図430, 第191図461)

IIa類—扁平な板状の長方体を呈し、大きさは3×5cm程である。素材に剥片を利用し、両面加工品を製作するような工程で剥片剥離を行なう。分割面をもつことが多い。(第37図34, 第40図59, 第120図138~142, 第137図266~268, 第138図270~273, 第143図308, 第145図329, 331, 第179図426~428, 180図431, 第193図464)

IIb類—IIa類と同じく剥片素材の石核であるが、素材剥片に残された大きな剥離面もしくは自然面を打面としているもので体形が正面視長三角形を呈する。(第124図176, 第137図269, 143図307)

IIc類—板状の剥片を素材とし、その側縁部から両面加工品を製作するような工程で石核の中心に向けて求心的に剥片剥離を実施する。(第119図137, 第126図185, 第141図301, 第146図336)

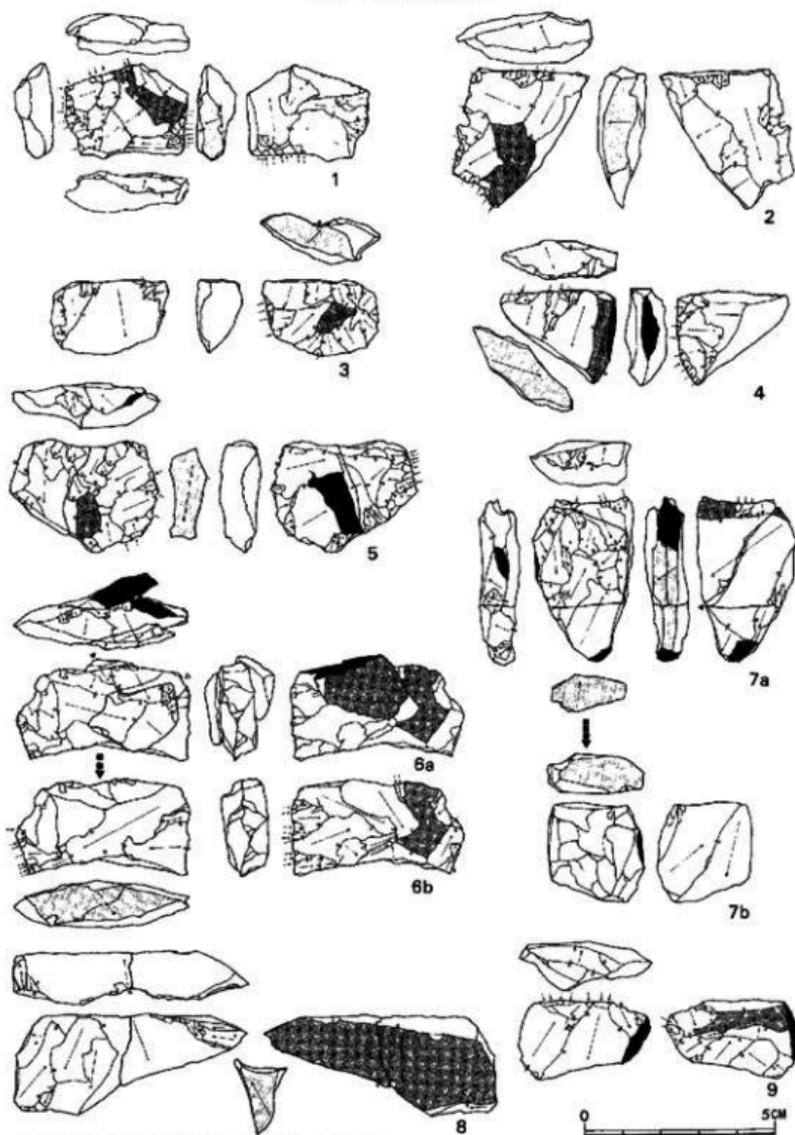
IId類—剥片素材の石核でIIa~IIc以外のもの。(第139図281, 第143図306)

III類—主に円礫を素材とした石核で自然面を打面として後退するように剥片剥離を実施する。背面に自然面を留める。(第40図58, 179図429)

これらの石核はI・III類が礫素材、II類が剥片素材である。このII類については本遺跡中最も出土量が多く、かつ特異な形態をもつためその石核の特徴と剥離技術について若干の考察を行なってみた。

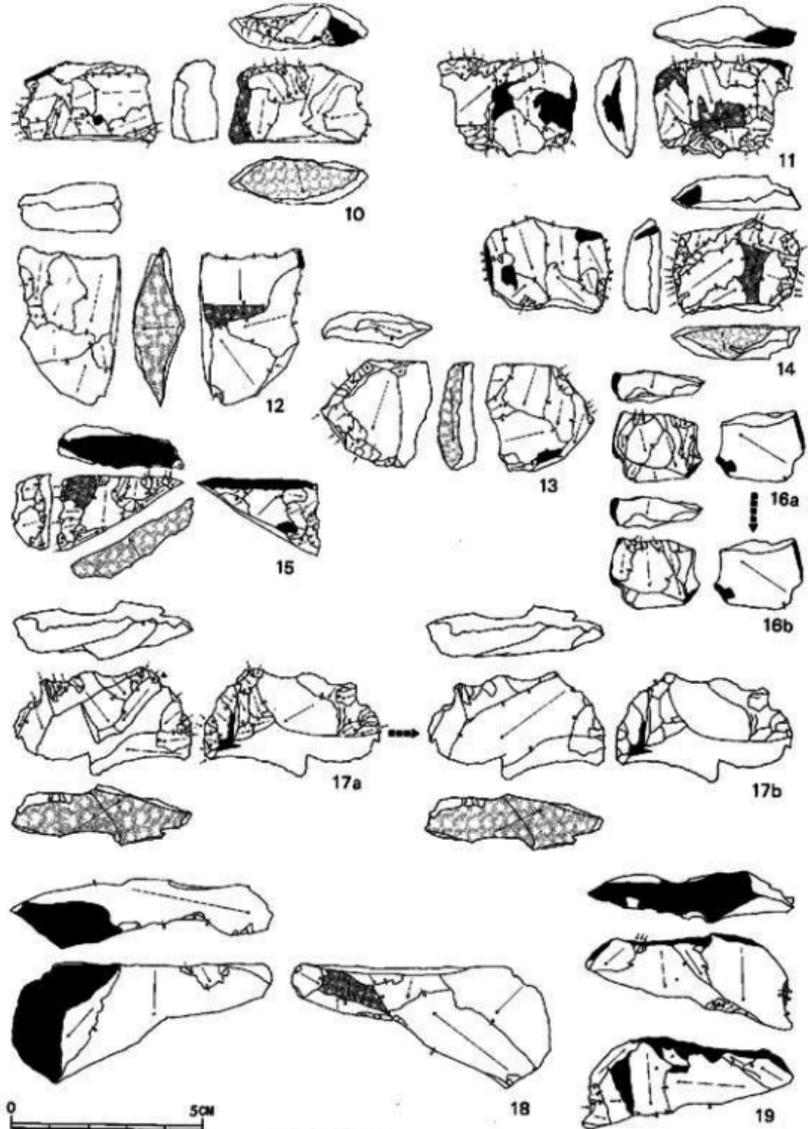
第195~197図に示したのがII類石核の剥片剥離の方向とその切り合い及び面構成である。1~7, 9~17がIIa類, 8, 18, 19がIIb類, 20~23がIIc類に含まれる。図中黒色部が自然面、濃いアミのかかった部分が素材剥片の主要剥離面、薄い部分が切断面を表わしている(剥片24~33の場合は濃いアミの部分が石核の素材剥片の主要剥離面、薄いアミの部分が打面となった裏面のネガティブ面を表わす)。図示した石核・剥片の石材は2~4, 12, 13, 20~23が安山岩製で、他はすべて黒曜石である。これを観察すればわかるように、石核の殆どがその表裏面のいずれかに素材となった剥片の主要剥離面を残している。(1~12, 14, 15, 18~23)また主要剥離面を残さなくても素材背面の大きな剥離面を石核の打面にもつ場合がある(13, 16, 17)。

IIa類の石核を観察すると分割面をもつかもしくはその面で接合した例が多い。18点IIa類の石核の中で16点までが分割面を有している(約90%)。この分割面をもつ資料の中でも、僅かではあるがこれを打面として剥片剥離を実施している例がある(1, 3, 7)。このIIa類の剥離の

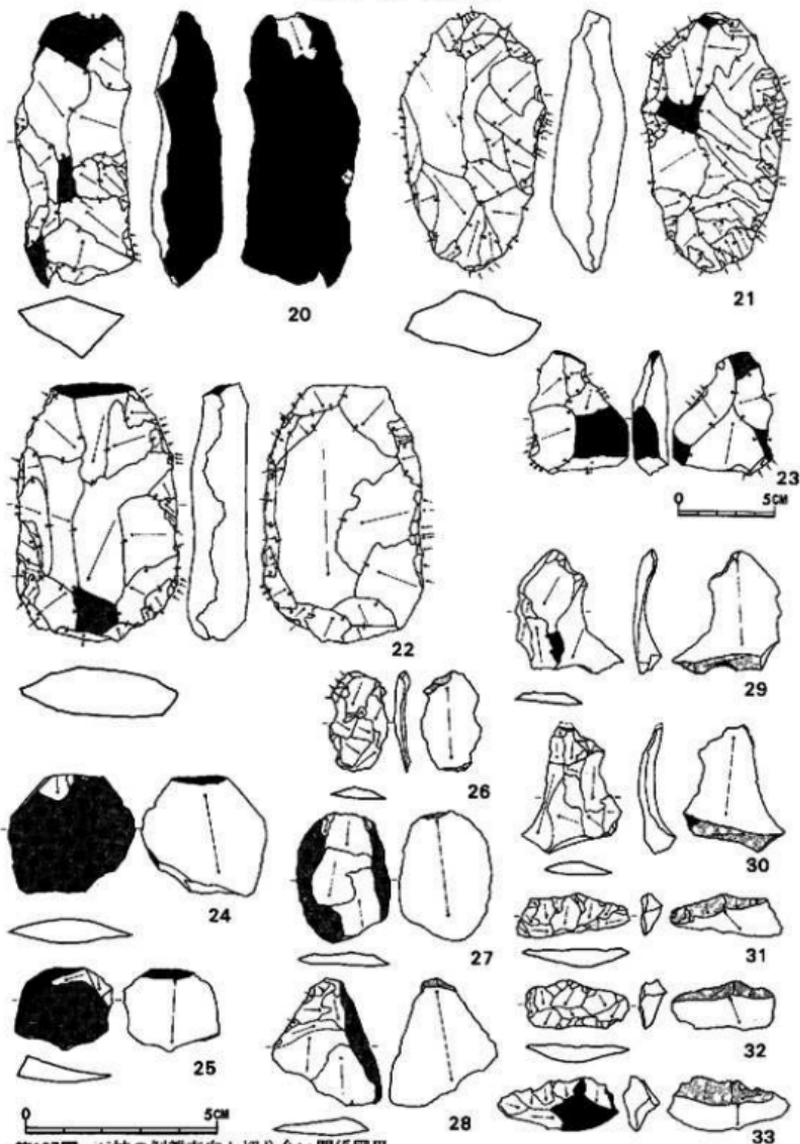


第195図 石核の剝離方向と切り合い関係図Ⅰ

2. 剥片剥離と石鏡の分析



第196図 石核の剥離方向と切り合い関係図II



第197図 石核の剝離方向と切り合い関係図Ⅲ

2. 剥片剥離と石核の分析

進行する状況を説明する好例として6, 7, 17の例がある。これは接合資料No17, No16, No40から復元された。6の石核は大きく素材の主要剥離面を残すが、6はまずその剥片の頭部の自然面部分から石核の背面方向へ2回の剥離を実施した後、その剥離面を打面として表面へ向けて接合資料No17の剥片17bを剥出している。その後もう一度その剥離面を打面として石核の背面へ向けて剥離を行なっている。そして打面を側面に移し、水平方向の剥離を実施しはじめるがその剥片の一つが接合資料No17の剥片17cである。石核はその後も側面からの剥離を実施され、最終的に錯交状に細かいタッチを側面に加えている。削器として利用された可能性がある。7には素材剥片の主要剥離面と左側面に打面をもつ石核で右側面は分割面である。背面には右側上部からの大きな剥離の痕がある。上部の打面からの剥離はヒンジフラクチャーを惹起しており、これ以上の剥片剥離は困難である。7aは2個に分割されるが、その分割面を打面として剥片剥離を実施している。それが7bの石核である。また2個に分割された7b以外のもう一方も細かい剥離痕の一つ有している。17は素材の主要剥離面は残していないが、裏面側の剥離を実施した後、その面を打面として表面右側上部から大きな剥片を一枚とっている。この剥離がこの石核に施された最終剥離で、その後石核は分割されている。剥離方向は石核の中心を向いている。この7aの石核に認められる分割面を利用して剥片剥離の困難性を打開した例は、IIa類石核の分割面の高い保有率の理解に対する積極的な解答を与えてくれるものであるが、すべての例に演繹できるか否かについては問題がないとも言えない。ただし、分割されたもう一方の石核の不在は、そのすべてが遺跡外に運び出されたと解するよりも、接合不能の状態まで剥離作業を実施し、その形を変えたものと考えの方が自然である。この点については、IIa類石核の分割片とも言うべき第116図126, 128, 第124図179, 第133図237, 第139図280のような剥片が多数出土しており、これがその残核片と考えられるが、今後これらとの個別別分析・接合を通じて検討しなければならない。

以上総合して、IIa類石核の特徴を述べる。

1. 剥片素材である。
2. 剥片剥離は素材剥片を両面加工するように実施される。打面は剥離面打面が無調整である。そのため剥離進行に従って打面は転移され、交互剥離状の剥離痕をとどめる。
3. 剥離の打撃方向は、石核の中心に向かって求心的である。
4. 残核形状は3×5cmの扁平な長方形の板状を示し、断面形は薄い長方形である。
5. 石核の一面が分割面で構成される率が極めて高い。

このIIa類石核から得られた剥片については、接合例を除いて、その背面の剥離痕の状態、打面を構成する面、全体の形などから窺い知ることができる。第197図に示した模式図は、図示した剥片、UFの中から選んで模式化したもので大きく3つのタイプに分類できる。

- a-24・25のように背面が石核、素材剥片の主要剥離もしくは背面の大剥離面で構成される。

第133図244, 第139図279, 第140図300, 接合資料No27bなどがその代表である。

b-26~28のように背面に数多くの上下方向もしくは水平方向の剥離を留めるもので、その打面は裏面の剥離面(ネガティブ面)で、打面は狭い。第123図169, 第131図220, 第134図251, 258, 第145図328, 接合資料No28の剥片とドリルの素材剥片等がこの典型である。

c₁-c' 剥片の末端部に裏面の剥離面(ネガティブ面)の一部を残して剥離されるもので、側面観がL字形を呈する(29, 30)。この他第132図225, 第178図415, 接合資料No16b等がある。

c₂-裏面頭部, 打点付近に裏面の剥離面(ネガティブ面)を留めるもので、その面積が大きいもの。(31~33) この剥片は上位からみるとジグザグの稜線をもつ。第38図50, 116図129, 第123図172, 173, 第134図257, 第147図341, 第178図420等が典型例である。

a型の剥片の剥離例は接合資料No17(第209図)の17bの剥片剥離やNo27(第212図)の27bの剥片剥離の工程に認められる。また、b型やc₂型の剥片の場合は接合資料No17の17cの剥片剥離やNo40の40aの剥片剥離工程に認められる。c₁型剥片は石核が剥片剥離の進行によって小型化した段階の剥片である。これは接合資料No16の16bの剥片剥離工程に認められるように剥離が石核の打撃方向の他端まで及んだために、他端の側縁の稜をもつ形態をとることによる。よってこれらのa~cの剥片はIIa類石核の剥片剥離作業の進行途上の各段階に生みだされた各々の形態であり、時間的変遷を示している。その順序はa→b・c₂→c₁(c₂)である。

次にIIc類石核の剥離工程を分析する。IIc類石核の特徴は、素材・剥離工程等極めてIIa類石核に類似している。ただし、素材剥片が概して大きく、これは素材の安山岩礫の大きさに起因するものと考えられる。

このIIc類石核の剥片剥離工程は、奈良県桜ヶ丘第1地点遺跡(註1)の縄文時代早期の土坑1から一括出土した石核のそれと類似している。ただし復原されたI類石核の石核素材生産工程に関しては、柏原F遺跡の場合IIa類石核の打面は第197図21のごとく自然面でないものもあり、原礫の分割が実施されたか否かは疑問である。しかし、柏原F遺跡でもこれらの素材剥片を剥離した石核は発見されていない。目的剥片生産の工程に関しては極めて類似する。打製石斧や大型のスクレイパーとして分類されている資料中にこのIIc類石核のような剥片素材の石核が存在する可能性がある(註2)。

IIa類石核については僅かではあるが、長崎県岩下洞穴(註3)、鷹野遺跡(註4)、百花台遺跡(註5)福岡県深原遺跡(註6)で類例が知られる。

IIa類の大半とIIc類石核はいずれもII層に含まれ、おおよそ縄文時代早期中~後業に比定される。これは他遺跡の所見とほぼ一致している。しかしこれらの剥片生産の技術が時間・空間を限定した一つの技術的伝統として把握できるか否かはいまま少しの検討を要するところである。この剥片素材を用いた目的剥片の生産を行なう技術によって、打端部の厚味の少ない薄い幅広の剥片を生産することが可能となった。この種の剥片は石礫などの小型剥片石器の素材として利

2. 剥片剥離と石鏃の分析

用されており、合理的な剥片剥離技術であったことが解る。

(小畑)

<註>

- 註1 古森政次 麻柄一志 「土坑1の剥片生産技術—縄文早期の石器群の分析—」『二上山・桜ヶ丘遺跡』奈良県立橿原考古学研究所編 1979
- 註2 福岡県深原遺跡出土の大型削器がIIc類石核の可能性がある。
木下修徳 「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」第8集 福岡県教育委員会 1978
- 註3 麻生優 「岩下洞穴の発掘記録」1968
- 註4 副島和明他 「西輪久遺跡・磨野遺跡」地域振興整備公団・長崎県教育委員会 1981 長崎県教育委員会文化課副島和明・福田一志両氏の御厚意により遺物を実見させていただいた。
- 註5 長崎県教育委員会及び同志社大学考古学研究室の白花白遺跡採集品の中に認められる。後者の遺物については、同志社大学松藤和人氏の御厚意により実見の機会を得た。
- 註6 削器として分類されたものの中にこの種の石核が含まれている。

(2) 石鏃の分析

本遺跡で出土した石鏃の数はⅢ層29点、Ⅱ層105点、Ⅰ層57点、その他3点の計194点である。この資料をもとに層位ごとの層性を分析したのが第198図のグラフである。(1)、(2)のグラフについては、完形品と復原形態の類推可能なもの23点(Ⅲ層)、89点(Ⅱ層)、48点(Ⅰ層)をその分析対象とした。石材別の大きさにみられる偏りはさほど顕著なものではない。ただし各層とも小型石鏃は概して黒曜石製であることが窺える。細かい加工を施しやすいという加工時の適性の違いによるもので、意図的な石材の選択があったことを意味している。またⅡ層にみられる黒曜石製石鏃の大型品はそのすべてが長脚の楕形鏃で、この種の石鏃の整形も人念である。これも上記のような理由によるものであろう。層位ごとにもみると、Ⅲ層→Ⅰ層へと大型品が増加している。これは石鏃の大型化というより、例えば楕形鏃等の大型品の添加という形であり、依然Ⅱ・Ⅰ層においても小型の石鏃は存在している。石鏃の機能・狩猟対象獣の違いによる石鏃の分化、変遷を物語るものである。

石鏃の先端部の鋭鈍はほぼ長幅指数(長/幅)の違いに反映される。この偏差を図化したのが(2)のグラフである。これを見るとⅡ層においては先端部角が鋭角なものに黒曜石製が多く、鈍角になるにつれて安山岩が使用されている。これは安山岩製の平基の三角鏃が増加した結果であり、形態ごとの石材選択を意味している。層位的にもⅢ層においては長幅指数が1.0以上であったのに対し、Ⅱ・Ⅰ層では1.0以下の鈍角ものが増加する傾向がある。全体として1.0～1.5が最も多く、先端角38度～54度に集中している。

第1表 石緻計測表

種目	No	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	欠損部位	石材	備考	
36	3	26.0	10.5	4.5	1.0		and		
	4	10.0+ α	13.2+ α	2.0	0.3 1 α	頭・両脚	ob-C	局部磨製	
	5	8.0	7.8	2.8	0.15		ob-A		
	6	28.4	24.0	4.2	1.9		ob-A		
	7	17.0	9.5	3.0	0.3		ob-A		
	15	13.5	8.2+ α	1.2	0.2 + α	脚	ob-B		
	16	20.0	15.5	4.0	0.9		白褐色ナット		
	17	18.0	13.5	5.8	1.1		and	パティナ・磨耗	
	18	16.7	9.1+ α	2.8	0.3 + α	脚	ob-A	擦 痕	
	20	15.0+ α	10.6- α	1.8	0.2 + α	両 脚	ob-B	局部磨製	
37	21	10.0+ α	12.0- α	1.8	0.2 + α	両 脚	ob-B	局部磨製	
	22	11.0+ α	6.8- α	1.8	0.1 + α	側半・脚	ob-B	局部磨製	
	23	19.1	12.4	2.0	0.3		ob-B	局部磨製	
	24	11.2+ α	8.5+ α	2.0	0.2 1 α	両 脚	ob-B	パティナ・灰白色化	
	25	14.5+ α	9.2+ α	2.5	0.2 + α	両 脚	ob-B	青灰色化	
	26	14.0 1 α	10.2 1 α	2.0	0.3 + α	頭・脚	and	and	
	27	28.0	11.0 1 α	3.0	0.5 + α	脚	ob-C	ob-Bの青灰色化?	
	28	19.1	13.5+ α	2.6	0.6 + α	脚	and		
	29	13.2+ α	10.0	1.3	0.2 + α	脚	ob-H		
	30	13.2	11.1	2.1	0.3		and		
38	31	15.5+ α	12.5+ α	3.3	0.6 + α	脚	ob-C	パティナ・白色化	
	33	34.1 1 α	23.2+ α	4.7	3.0 1 α	頭・脚	ob-A		
	38	11.9 1 α	11.7+ α	3.0	0.3 + α	両 脚	ob-C	磨面(片側辺)	
	39	21.0	17.8	5.3	1.5		and		
	40	19.0	17.5	5.0	1.0		and		
	41	9.8+ α	12.5+ α	3.3	0.3 - α		ob-B	胴下半のみ	
	42	17.5	11.5	2.0	0.3		and		
	43	25.8	19.5	8.0	3.4		and	尖頭状石群	
	113	63	15.0	14.3	3.5	0.4		ob-A	
		64	16.0+ α	12.5	2.0	0.4 + α		and	
65		14.0+ α	15.5	3.5	0.6 + α	頭	and	腰部グジリ	
66		26.0+ α	14.0	2.5	0.5 + α	頭	and		
67		23.2	16.7+ α	3.2	0.8 + α	脚	ob-B		
68		16.0+ α	14.5	3.5	0.6 1 α	頭	and		
69		16.1	11.3+ α	3.0	0.4 + α	脚	ob-A		
70		15.5	13.0	4.0	0.4		and		
71		26.8	18.7	4.7	1.2		and		
72		12.0+ α	7.5+ α	2.0+ α	0.15+ α		ob-B	脚部	
114	73	18.0	11.5+ α	2.5	0.6 + α	脚	ob-C	接合資料・基部欠損	
	74	10.8	10.2+ α	2.1	0.2 + α	脚	ob-B		
	75	14.5	11.5+ α	2.7	0.35+ α	脚	ob-C		
	76	24.1+ α	21.2	6.0	2.3 1 α	頭	and		
	77	15.0+ α	17.2 1 α	2.9	0.7 + α	頭・脚	and		
	78	19.0	12.2	3.0	0.4		and		
	79	17.7	13.6+ α	4.2	0.65+ α	脚	and		
	80	14.3	9.9+ α	2.0	0.2 + α	脚	ob-B		
	81	16.0+ α	10.2+ α	3.5	0.3 1 α	頭・脚	ob-B		
	82	18.2+ α	16.0 1 α	4.2	0.9 + α	頭・脚	ob-B		
114	83	16.8+ α	12.0 1 α	1.8	0.25+ α	脚	ob-B		
	84	12.7	9.8+ α	3.0	0.25+ α	脚	and	パティナ・白色化・磨耗	
	85	12.5	12.2+ α	2.8	0.3 + α	脚	ob-H		
	86	37.8- α	19.0	4.8	3.4 + α	頭	and		
	87	13.0- α	16.0- α	4.9	0.9 + α	頭・脚	ob-C		
	88	25.0+ α	10.5- α	2.8	0.7 + α	両 脚	ob-B	接合資料	
	89	22.8+ α	16.0	3.8	0.7 + α	頭	and	ほぼ光彫	
	90	19.5	17.0	4.0	0.9		and		
	91	21.0 1 α	11.0+ α	4.0	0.6 + α	頭・脚	and		
	92	13.5	10.0	3.5	0.2		ob-B		
114	93	13.0+ α	10.5+ α	2.0	0.3 + α	頭	ob-D		
	94	18.4	13.1+ α	2.9	0.4 + α	脚	ob-B	パティナ・青灰色化	
	95	17.8	14.2	2.5	0.3		and		
	96	14.0	11.5	3.2	0.3		and		
	97	18.0	13.0	2.9	0.3		ob-D		
	98	14.0	13.5	1.8	0.3		and		
	99	14.5+ α	14.0+ α	3.0	0.5 - α	頭・両脚	ob-B		

第1表 石鏡計測表

群号	No	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	欠損部位	石 材	備 考
114	100	9.0+α	10.0+α	1.8	0.2+α	頭・脚		
	101	16.0	13.0	2.5	0.3		ob-B	
122	102	17.0+α	14.0	4.0	0.7+α	頭	ob-B	
	148	14.5	15.2	3.0	0.5		and	
	149	11.5+α	13.8	2.5	0.3+α	頭	and	
	150	14.8+α	12.0	2.0	0.3+α	頭	ob-A	ほぼ光形
	151	15.8	10.0+α	2.5	0.2+α	脚	ob-B	
	152	16.3+α	20.5	4.5	1.5+α	頭・脚	ob-A	
	153	16.0	17.0	3.0	0.6		and	パティナ・着色化・腐蝕
	164	19.5	15.2	6.9	1.1		ob-C	
	155	15.0	17.0	3.0	0.6		and	
	156	17.2+α	17.0	5.5	1.4+α	頭	and	
157	15.0+α	13.2+α	4.8	0.75+α	頭	ob-C		
158	47.2	26.0	4.0	4.0+α	脚	ob-B	複合資料	
159	14.9	12.1+α	3.0	0.4+α	脚	ob-B		
160	18.0	14.5	3.0	0.6		and		
161	30.0	24.0	5.0	4.2		and	未製品	
129	189	11.0	11.8	2.5	0.2		ob-A	
	190	12.8	8.7+α	2.0	0.2+α	脚	ob-B	
	191	12.7	9.2	2.8	0.2		ob-E	
	192	19.0+α	15.2+α	3.0	1.7+α	頭・脚	ob-A	
	193	19.5+α	12.0+α	4.8	0.9+α	頭・脚	ob-D	
	194	18.0+α	22.0	4.0	1.2+α	頭	ob-A	
	195	15.0	11.3+α	1.8	0.3+α	脚	ob-B	パティナ・灰色化・局部腐蝕
	196	23.0	16.2	3.5	0.6		and	腐蝕
	197	22.0	13.3+α	2.0	0.4+α	脚	and	
	198	15.0	10.5	2.0	0.4		ob-A	
	199	25.2+α	19.0+α	5.0	2.0+α	頭・両脚	ob-A	
	200	17.0	14.5	4.0	0.6		ob-B	
	201	19.5	17.2+α	3.6	0.7+α	脚	ob-B	
	202	17.5	12.0+α	3.0	0.4+α	脚	ob-B	
	203	15.7	11.2+α	2.2	0.2+α	脚	ob-C	
	204	17.0+α	14.0+α	3.5+α	0.6+α		ob-B	脚部
	205	13.2+α	7.2+α	2.3+α	0.2+α		ob-B	脚部
	206	17.8+α	12.0+α	3.8	0.4+α	脚	and	頭部ガシリ
	207	18.5+α	10.5	2.0	0.5+α	頭	and	ほぼ光形
	208	33.2+α	12.2+α	4.7	1.8+α	脚	and	
209	24.0	16.5+α	2.5	0.6+α	脚	and	腐蝕	
130	210	23.0	14.0	4.8	1.4		ob-B	パティナ・灰色化・局部腐蝕
	211	15.0	14.0+α	2.5	0.4+α	脚	ob-B	
	212	30.8+α	12.0+α	3.7	0.5+α	頭・脚	ob-A	
	217	29.5	24.5	5.0	3.05		ob-A	未製品
139	275	12.7+α	10.8+α	2.0	0.25+α	両脚	ob-B	
	276	7.8+α	7.8+α	1.5	0.1+α	両脚	ob-B	
	277	16.0	11.8	3.5	0.5		ob-B	
	278	19.5+α	18.5+α	3.8	1.5+α	脚	and	
140	286	16.0	9.5+α	3.0	0.2+α	脚	and	
	287	12.5	12.8	3.5	0.4		and	
	288	8.2+α	8.0	3.5	0.2+α	脚	ob-A	
	289	14.5+α	13.9+α	3.0	0.55+α	両脚	ob-A	腐蝕
	290	17.3+α	17.1	4.9	1.3+α	頭・脚	and	
	291	20.0	18.0	3.0	1.1		and	
	292	31.3+α	19.0	4.0	1.8+α	頭	ob-A	
	293	14.8	15.5	3.0	0.6		and	
144	310	16.0	14.5	3.0	0.5		and	
	311	24.7	19.8+α	4.1	1.2+α	脚	and	
	312	36.0+α	19.6	4.1	2.5+α	頭・脚	ob-C	
	313	9.0+α	11.0+α	2.0	0.3+α	頭・脚	ob-C	局部腐蝕
	314	28.9	15.0	3.0	0.6		ob-C	パティナ・腐蝕
	315	14.5+α	18.0	3.0	0.8		and	
	316	14.2+α	12.7+α	2.2	0.3+α	両脚	ob-C	
	317	14.8	13.0	4.0	0.4		ob-C	
	318	9.3+α	8.8+α	1.8+α	1.5+α		ob-C	頭半分
	319	10.0+α	12.0+α	2.8+α	0.3		ob-B	脚部
147	337	34.5	20.5+α	5.5	2.3+α	脚	ob-A	
	338	15.6+α	10.5+α	3.2	0.4+α	両脚	and	

第1表 石鑑計測表

押印	No	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	欠損部位	石 材	備 考
147	339	23.6	19.8	3.9	1.4 + α		and	パティナ・濃純
	340	28.0	18.1 + α	4.7	1.2 + α	脚	ob-B	
174	343	22.5 + α	20.8	5.0	1.3 + α	頭	ob-A	
	344	14.5	11.0	3.2	0.4		and	
	345	9.5 + α	7.0 + α	3.3 + α	0.2 + α		ob-A	脚部?
	346	25.0 + α	13.0 + α	3.0	0.8 + α	脚	ob-C	頭部はガジリ
	347	17.5	13.9	3.6	0.5		ob-B	
	348	24.3	18.0 + α	4.5	1.1 + α	脚	and	
	349	14.5	11.0	1.8	0.3		ob-A	
	350	19.8	14.8	2.8	0.6		and	
	351	22.8	15.0 + α	4.0	0.9 + α	脚	ob-B	
	352	16.5 + α	17.5 + α	2.5 + α	0.7 + α	頭・脚	ob-A	遺物
	353	15.8	13.0 + α	3.0	0.4 + α		ob-C	毛彫・頭部はガジリ
	354	14.3	11.5	2.0	0.3(0.1+0.2)		ob-B	接合資料
	355	15.2	15.2	3.0	0.4		and	
	356	25.0	13.6 + α	4.0	0.8 + α	脚	and	
	357	15.0 + α	16.0 + α	3.5	0.8 + α	頭・脚	ob-A	
	358	17.0 + α	16.0	3.0	0.5 + α	頭	and	
	359	12.5	12.0	2.5	0.3		ob-D	
	360	11.0	8.5	2.2	0.15		ob-A	
	361	15.2	16.2	4.0	0.7		and	
	362	20.0 + α	15.2	1.5	0.4 + α	頭	and	
	363	13.5	14.0	4.0	0.5		and	
	364	15.9	10.2	2.0	0.35		and	
	365	17.0	13.0	3.0	0.4		and	
	366	10.1	14.3	2.9	0.3		ob-A	
175	367	20.1	19.0	4.4	1.3		and	
	368	17.3	20.1	4.5	1.3		and	背面に遺材断片の自然面あり
	369	20.2	12.0	3.5	0.35		ob-B	遺物
	370	27.2	23.0 + α	3.9	1.85 + α	脚	and	
	371	12.7 + α	11.0 + α	3.0	0.35 + α	頭・脚	and	
	372	26.5 + α	16.0 + α	4.8	1.1 + α	頭脚・側面	ob-B	遺物
	373	10.0 + α	15.0 + α	3.0	0.4 + α	頭	ob-A	
	374	22.0	15.5	3.0	0.8		ob-B	
	375	10.0 + α	12.0 + α	3.0	0.2 + α	脚 脚	ob-B	
	376	21.0 + α	18.2 + α	3.5	1.4 + α	頭・脚	ob-B	
	377	22.0 + α	14.2 + α	2.5	0.5 + α	頭・脚	ob-C	
	378	16.0	14.7	6.8	1.4		and	
	379	19.5	22.8	4.2	1.3		and	
	380	20.3	14.8 + α	6.0	1.0 + α	脚	ob-A	
	381	14.1	11.7 + α	1.6	0.2 + α	脚	ob-A	パティナ・白色化
	382	11.8 + α	18.3	3.8	0.65 + α	頭	and	パティナ・白色化・濃純
	383	16.2	8.6 + α	2.0	0.3 + α	脚	ob-B	透明に近い
	384	35.1	23.8	8.0	5.4		ob-A	尖頭状石群?
176	385	14.0 + α	13.8 + α	3.0	0.6 + α	頭 脚	ob-A	
	386	18.0 + α	13.8 + α	4.5	0.85 + α	頭・脚	ob-A	
	387	13.0 + α	7.2 + α	3.0 + α	0.4 + α		ob-A	脚部
	388	12.2 + α	8.0 + α	4.0 + α	0.4 + α		ob-A	脚部
	389	15.0 + α	13.8	2.0	0.3 + α	頭	ob-A	局部磨製
	390	22.0	19.0	3.8	1.0		and	
	391	26.5	15.0 + α	4.8	1.25 + α	脚	ob-A	
	392	22.5 + α	19.0 + α	4.5	1.3 + α	頭・脚	青灰色キート	
	393	17.5 + α	14.5 + α	3.0	1.0 + α	頭・脚	ob-A	
	394	19.5	15.0 + α	3.8	0.69 + α	脚	ob-D	ほぼ完形
	395	28.8	20.4 + α	5.0	2.2 + α	脚	ob-B	
	396	16.0	14.8	3.3	0.7		and	
	397	27.5	18.0	3.7	1.35		and	
	398	35.2 + α	17.8 + α	5.0	1.8 + α	頭・脚	and	
	399	24.8 + α	12.7 + α	4.0	0.8 + α	頭・脚	ob-A	
	400	28.2	21.8	11.0	3.9		and	尖頭状石群?
191	454	30.0	17.5	5.5	1.5		ob-A	
	455	17.1	14.3 + α	3.4	0.5 + α	脚	ob-B	
	456	20.5	21.0	5.0	1.9		and	

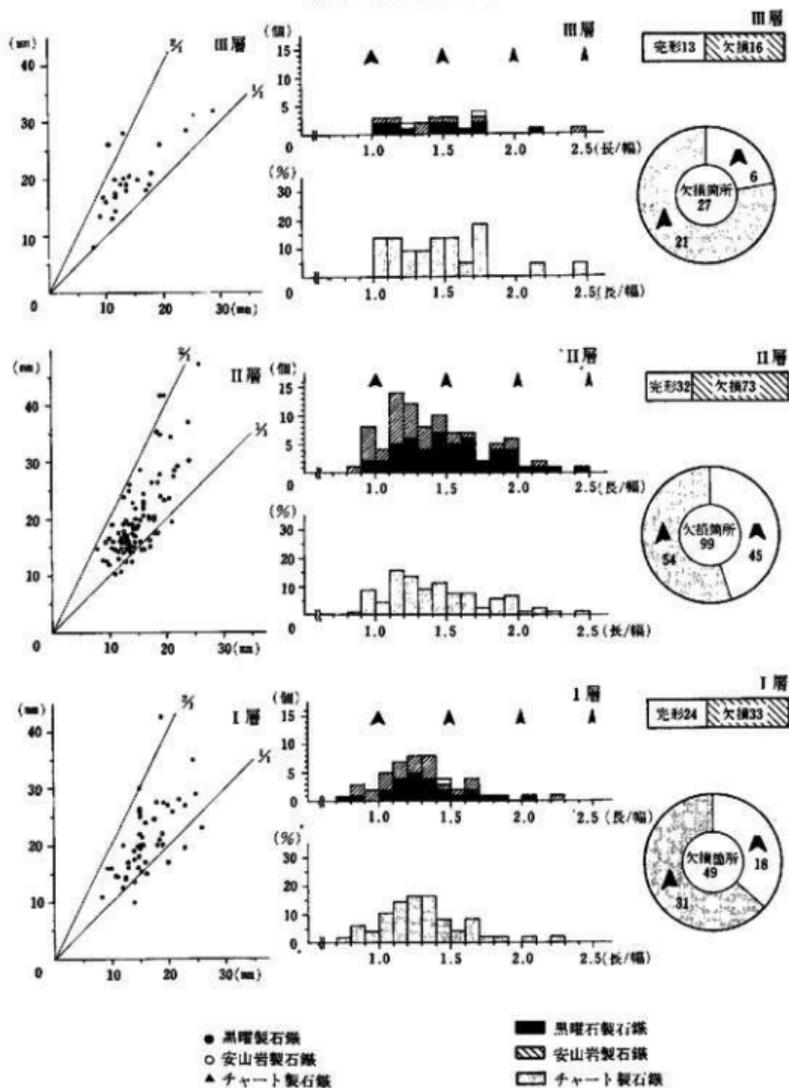
2. 割片割離と石鏃の分析

石鏃の欠損率はⅢ層52.2%、Ⅱ層69.5%、Ⅰ層57.9%とⅡ層が最も高い値を示す。部位別の頻度は各層を通じて脚部の欠損率が高いことを示している。欠損のある石鏃総計は191点中122点で全体の半数以上にも昇っている(註1)。この高い欠損率については接合例No.8、No.9、No.10、No.13を除いて全て使用時の破損を考えねばなるまい。それは製作、装着、その後の他の原因による破損が遺跡内で展開したものである以上、本来欠損部分が出土し接合例のように接合しなければならないからである。欠損した石鏃が遺跡内で高い頻度を示すのは石鏃の再加工のための石鏃本体の回収、矢柄の回収、刺殺された獲物の遺物(生活の場)への搬入等の要因によるものであろう。ただし石鏃の数は遺跡内に残された各層出土の土器数で概算してみると、土器一個あたりⅢ層3.6本、Ⅱ層2.5~3本、Ⅰ層2.6本と極めて少ない。土器1個に対し3本、遺跡内で時期別に10本前後の石鏃が考えられる。一見多量に出土したように見受けられる石鏃の数は土器個体別、時期別に分解するとその数は極少である。これは他の石器に関しても同様である。この結果から石鏃の欠損率の高さよりみて遺跡に残される石鏃は使用目的を完結し、利用価値を失ったものと考えられることも可能である。

層位ごとの形態及び技術的特徴について概観してみよう。Ⅲ層は局部磨製石鏃と挟りの深い小型の石鏃、平基の二等辺三角形鏃に特徴づけられる。また、細身の長脚鏃形鏃、大型の三角形鏃も存在する。これらを正当に評価するならば、石鏃の大小は機能、用途の違いとして理解せねばならない。Ⅱ層の段階になると小型の挟りの深い鏃はもとより、大型の鏃形鏃の増加が目につく。これに対し、局部磨製石鏃は僅かに2点のみで減少している。また挟りが浅くゆるやかでほぼ正三角形を呈する安山岩製の石鏃や大型長身でU字の挟りをもつ石鏃なども特徴的である。依然として小型と大型の二者がある。Ⅰ層の時期になると、鏃形鏃の割合が減少する傾向がある。これを整理してみると柏原F遺跡における石鏃の変遷は、Ⅲ層における局部磨製石鏃の隆盛、Ⅱ層における鏃形鏃、三角形鏃の隆盛、局部磨製石鏃の減少、Ⅰ層における鏃形鏃の減少に特徴づけられるであろう。これは本遺跡の土器型式に対比すると、局部磨製石鏃が摺糸文土器、刺突文土器、条痕文土器の時期から押型文土器(稻荷山~下菅生B式)に、鏃形鏃が主に押型文土器(稻荷山~田村式)に対比できる。

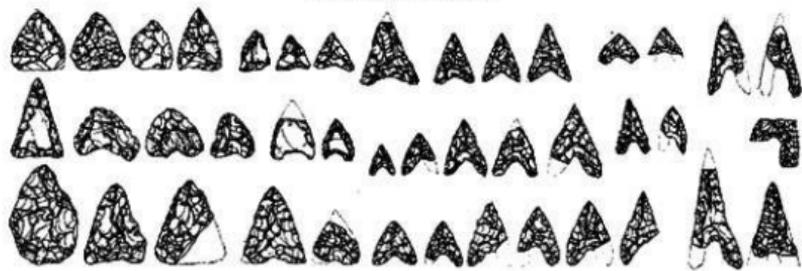
九州における縄文時代早期の石鏃については、これらの局部磨製石鏃、鏃形鏃が特徴的なものとされてきた。局部磨製石鏃は西北九州を中心とした濃密な分布域を有するが、樋沢遺跡等の中部地方の諸遺跡、北陸、関東にも一部出土している。樋沢遺跡では押型文土器でも古相の異方向帯状施文の樋沢式土器と伴出する(註2)。九州においても、洞穴遺跡を中心とした層位的な所見から所属時期についてはある程度判明している。岩下洞穴(註3)はⅠ層からⅣ層まで局部磨製石鏃の出土をみた。前・中期の混入もあるがⅤ層(押型文、条痕文、無文)、Ⅵ層(押型文、条痕文、爪形文)に卓越し、無遺物層(Ⅶ層)を挟んでⅧ層(押型文、無文、爪形文)に進昇する。また二日市洞穴(註4)の調査では押型文(早水台・稻荷山式)土器の下層の第

第5章 遺構、遺物の分析



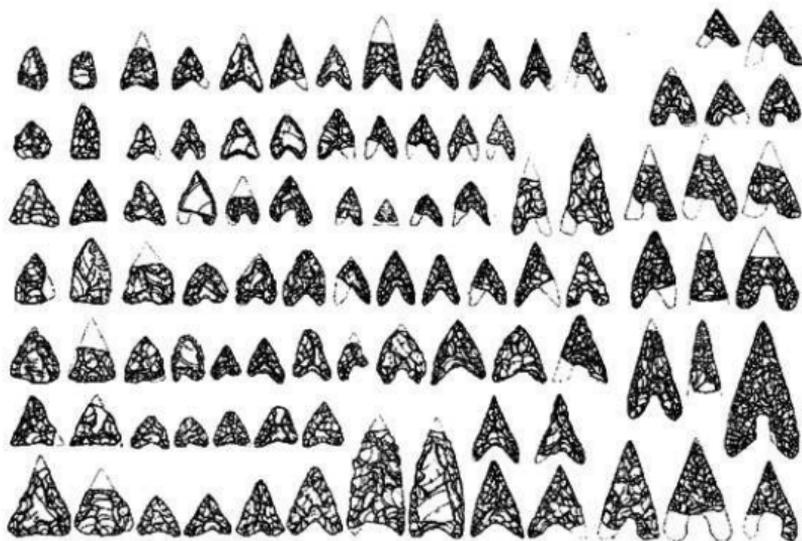
(1)石鏃の石材別相関図 (2)石鏃の石材別長幅指数のヒストグラム (3)石鏃の欠損率と欠損部位別頻度
第198図 石鏃の分析図

2. 剥片剥離と石鉄の分析

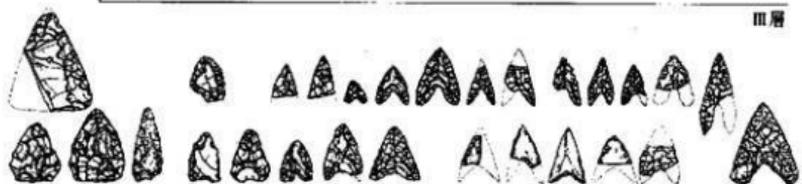


I層

II層



III層



第199圖 石鉄の層位別形態変遷圖

6文化層（無文土器）の段階でサヌカイト製の局部磨製石鏃が一点出土している。また鷹野遺跡（註5）西側丘陵では尖底無文土器に伴い全磨製に近い局部磨製石鏃が多数出土している。柏原F遺跡Ⅲ・Ⅱ層の成果を合わせて、局部磨製石鏃の初現・発達が縄文時代早期の古い段階であることを示すものである。これは、深原遺跡（註6）、政所馬渡遺跡（註7）、白蛇山岩陰遺跡（註8）、平草遺跡（註9）が本遺跡Ⅱ層段階以降の時期にあたり、局部磨製石鏃を出土していながらその数は僅少で、それに比して鍔形鏃の数が卓越していることも土器型式からすればその傍証となろう。ただ本遺跡例は九州における局部磨製石鏃の中でも最も古い状況を示すものであり、類例の増加が待望される。

鍔形鏃は局部磨製石鏃とともに押型文土器に伴う特徴的な石鏃の一つである。早水台遺跡（註10）、川原田洞穴遺跡（註11）等の東九州の諸遺跡の成果から早水台式～田村式の段階に盛行することが知られていた。しかし二日市洞穴では第4文化層（早水台式、稲荷山式）からの出土があり、早水台式以前の段階に出現することが判明している。これは柏原F遺跡においてもⅡ層段階における鍔形鏃の盛行という形で追認できる。ただしⅢ層より長脚の鍔形鏃が1点出土しており、この取り扱いには慎重に行なわなければならない。

また、Ⅲ層出土の重厚な三角形の石鏃は従来尖頭状石器なる名称で呼ばれていたものであり、早水台遺跡、岩下遺跡等の所見から押型文土器に伴出する石鏃とされるが、これが古相の土器に伴うか否かも今後注意していかねばならない。（小畑）

〈注〉

註1 縄文時代早期に属する石鏃の欠損率については詳細な分析がなされている資料が少ない。長崎県金柑茶屋第2遺跡では採集品も含めた109点のうち98点が欠損している。また熊本県中後追遺跡ではⅤ・Ⅵ層出土石鏃40点のうち28点が欠損している。このような高い頻度での欠損状況の表われは、この時期に限らない一般的傾向なのか、遺跡の性格、時期による違いなのか詳査してみる必要があろう。

吉留秀敏 「石鏃」『金柑茶屋第2遺跡』 平戸市都市開発公社・平戸市教育委員会 1978

桑原憲彰 他 「中後追遺跡調査報告」九州電力株式会社・中後追遺跡調査団 1978

註2 極沢遺跡発掘調査団 『概報・極沢遺跡』 岡谷市教育委員会・塩尻市教育委員会 1982

註3 麻生優 「岩下洞穴の発掘記録」 1968

註4 橋昌信 「大分県二日市洞穴発掘調査報告書」別府大学付属博物館 1980

註5 副島和明 他 「西輪久追遺跡・鷹野遺跡」地域振興整備公団 長崎県教育委員会 1981

註6 木下修也 「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」第8集 福岡県教育委員会 1978

註7 賀川光夫 他 「政所馬渡」別府大学付属博物館 1982

3. 石器の接合とその分布

- 註8 森醇一郎 『白蛇山岩陰遺跡』 佐賀県立博物館 1974
註9 栗田勝弘 『平草遺跡』 天瀬町教育委員会 1982
註10 八幡一郎・賀川光夫 『早水台』 1955
別府大学文学部 『続早水台』 別府大学文学部考古学研究報告3 1965
註11 賀川光夫 『大分県川原田洞穴』 『日本の洞穴遺跡』 日本考古学協会洞穴調査委員会
1967

3. 石器の接合とその分布

本遺跡の出土石器（石片）で現在まで確認できた接合資料は42例、96点である。このうち発掘品と表面採集品との接合、あるいは接合した石器（石片）相互の位置が不明なものが3例含まれるので、その位置関係が明確なものは39例、90点である。

接合の種類には次の二種類がある。

I類一人為的な剥離作業によって剥離された石核及び剥片の接合

II類剥離面の接合でなく、分割面（切断面）の接合で、これは石斧や石鏃などのような製品の破損したものの復原例も含む。剥片・石核などについては製作途上のものと限定できないので、分割面接合ということでこのII類に含めた。

I類の接合例については、製作・使用及び遺棄・廃棄時に限られず、遺跡埋積中の自然作用によるアクシデントも考慮されねばならない。なお、接合の関係分布図では、I類は実線で、II類は破線で表記し区別した。

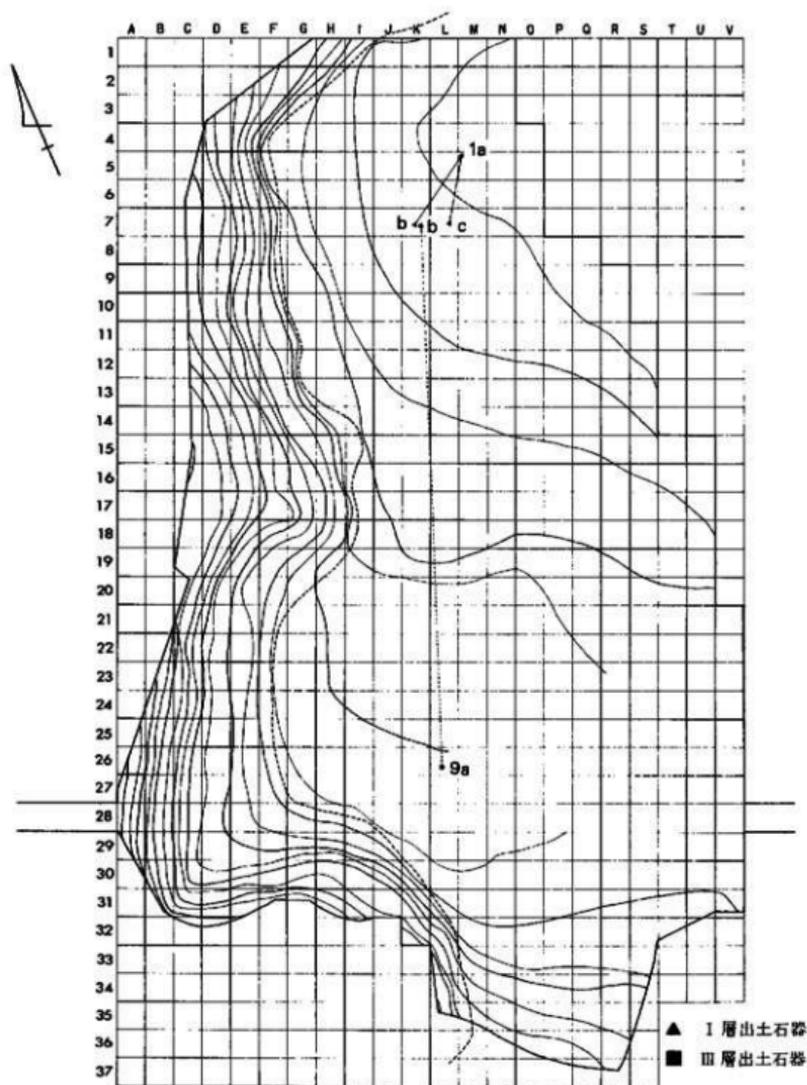
層別別の接合状況は、おおむね同一層位中で接合するが、7例各層位間で接合するものが存在する。層位ごとの例数は、I層中が1例（I類）、I層-II層が3例（I類-1、II類-1）、I層-III層が1例（II類）、II層中26例（I類-17、II類-9）、II層-III層が3例（I類-1、II類-2）、III層中が5例（I類-4、II類-1）であり、II層中が最も多い。接合した資料間の距離は平面直線距離にして、最も離れているもので38m（接合資料No.9）、最も近接したもの（接合資料No.6）で20m程である。以下個別に詳述する。

I層（第200岡）

接合資料No.1、半割した石核2点（1a、1b）と剥片（1c）の接合例である。I層の北部で約6mと約5m離れて接合した（I類）、石核は背面に自然面をもつ剥片素材で、素材の主要剥離面を留めている。剥片剥離は自然面を打面として石核の中心に向かって求心的に実施されている。

接合資料No.9 石鏃の欠損部分が接合した（II類）。I層（9b）とIII層（9a）の接合である。その距離は38mと接合例中最も遠い。

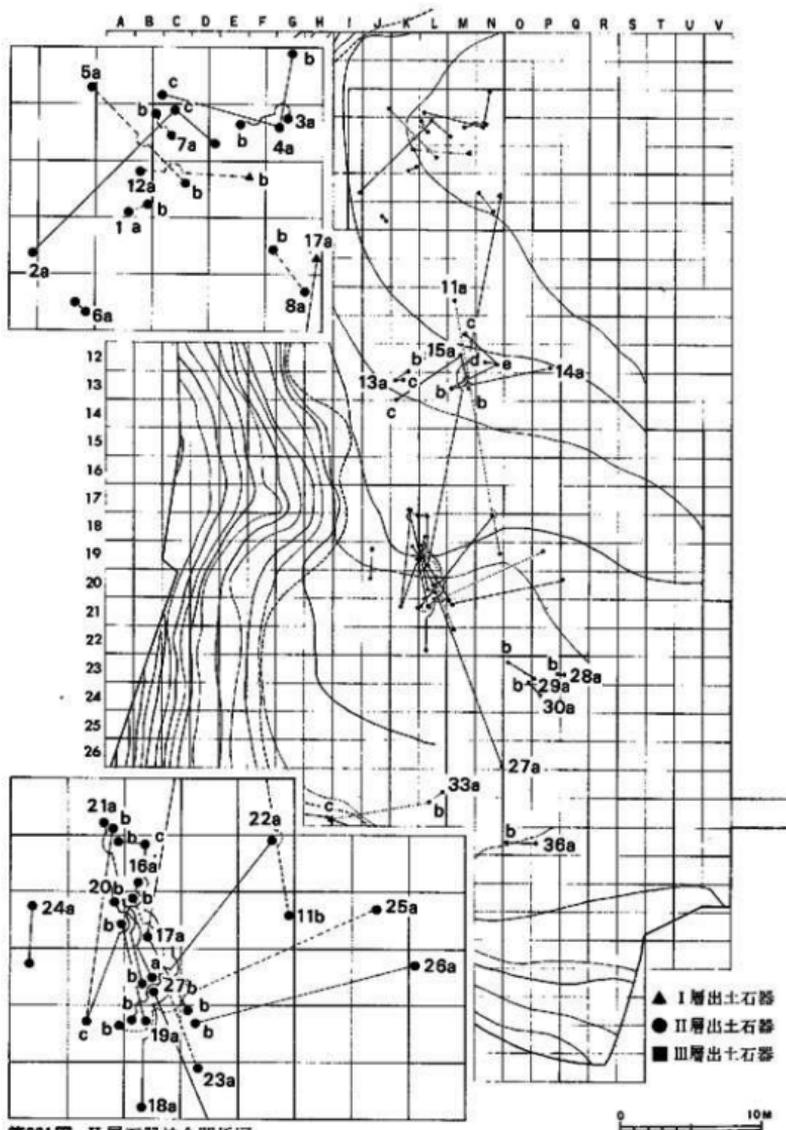
第5章 遺構、遺物の分析



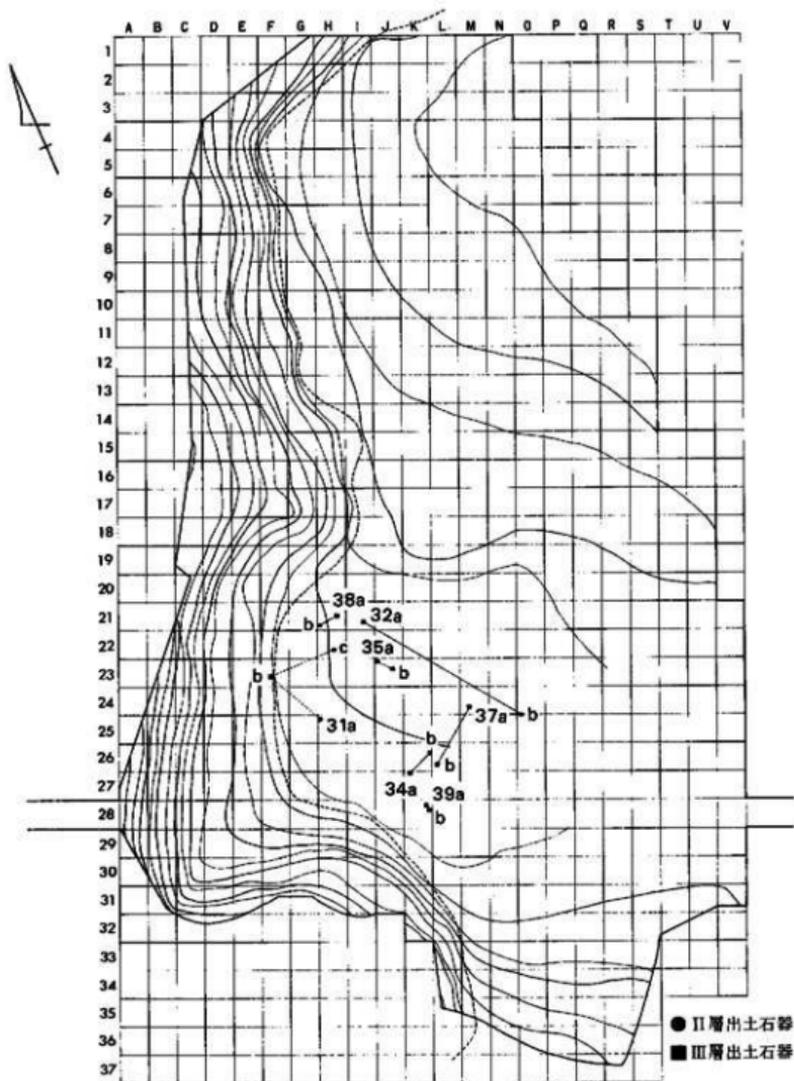
第200図 I層石器接合関係図

0 10M

3. 石器の接合とその分布



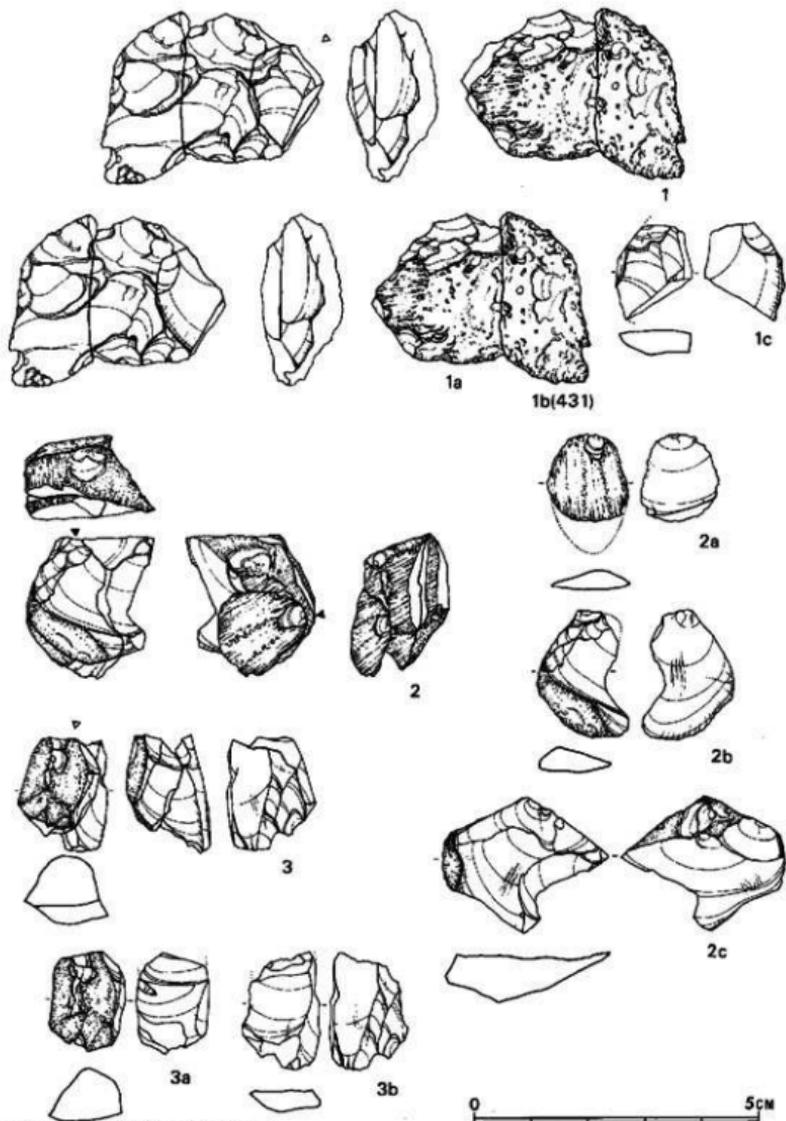
第201図 II層石器接合関係図



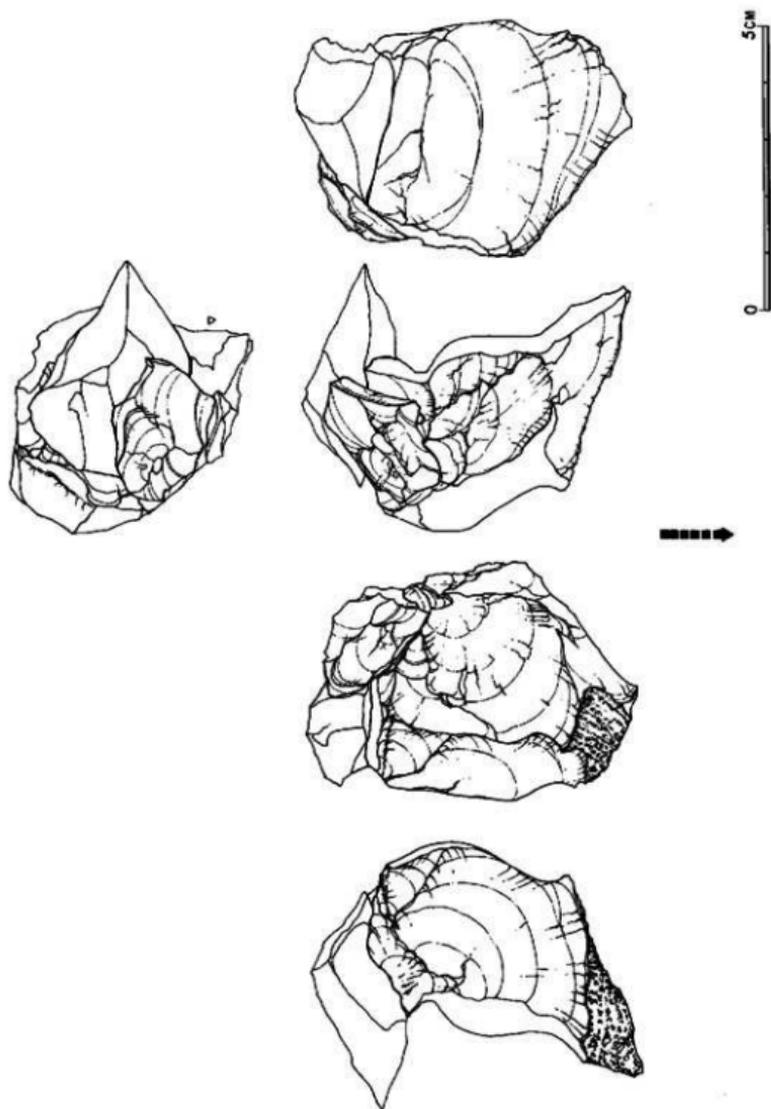
第202図 II層石器接合関係図

0 10M

3. 石器の接合とその分布

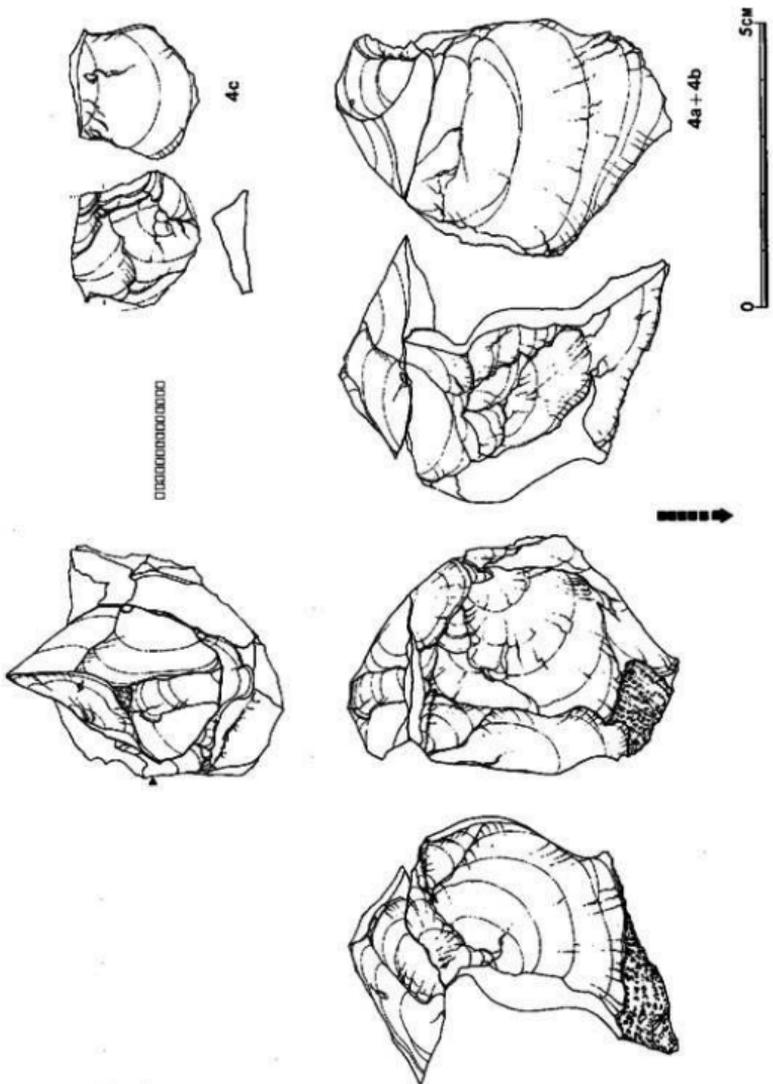


第208図 石器接合関係実測図1

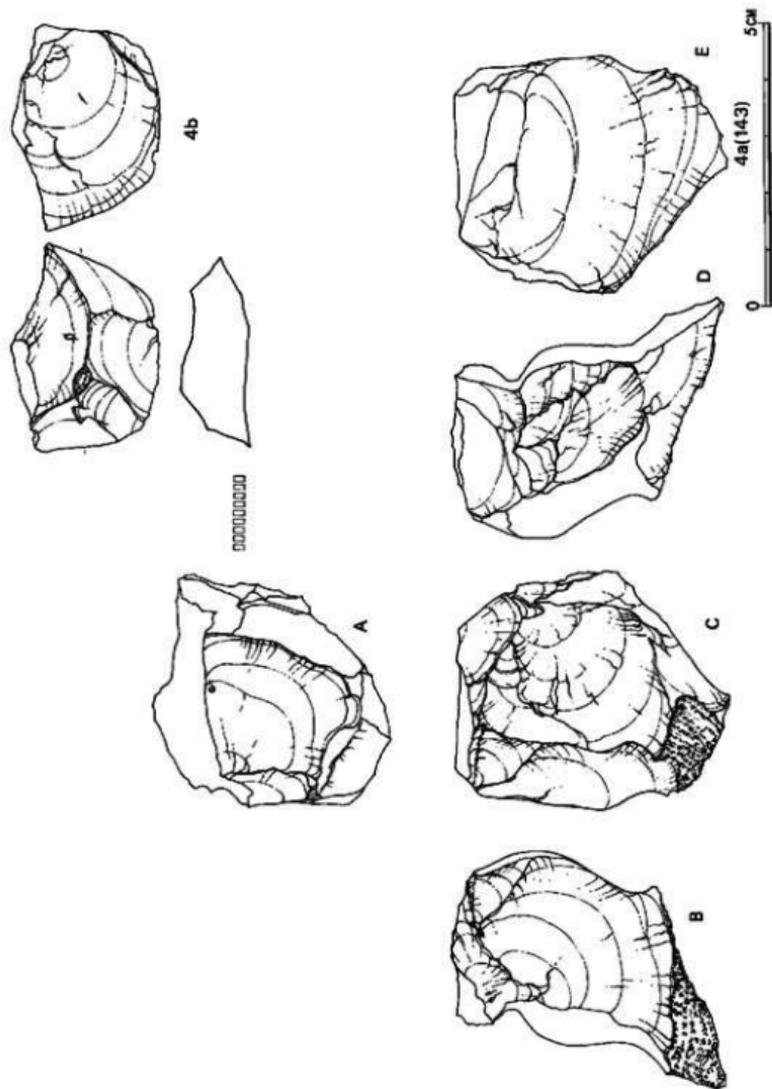


第204図 石器接合関係実測図II

3. 石器の接合とその分布

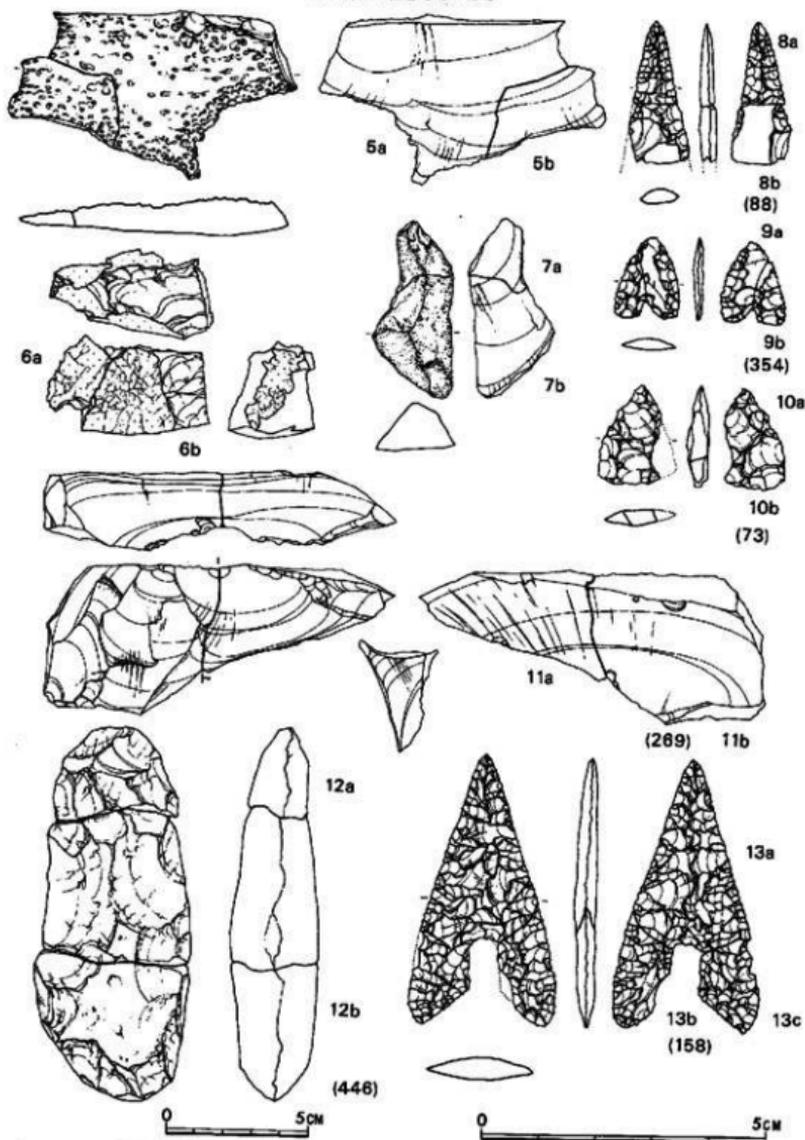


第205図 石器接合関係実測図Ⅲ



第206図 石器接合関係実測図Ⅳ

3. 石器の接合とその分布



第207圖 石器接合関係実測図V

II層 (第201図)

接合資料No 2 ob-D製の剥片3点が接合した(I類)、第1ブロック内の接合。扁平な長方形の石核から剥取されたもので、自然面を打面として打面を移動させながら剥離されている。剥離順は2a→2b→x→2cである。

接合資料No 3 ob-E製の剥片2個の接合例(I類)。第1ブロック内で、約2m離れて接合した。

接合資料No 4 安山岩製の石核(4a)と2個の剥片(4b, 4c)の接合例(I類)。第1ブロック内で、石核4aを中心に北に2.5m(4b)、西に4.5m(4c)分散したものが接合した。剥片剥離の順序は、第206図の展開図をみてもわかるように、まずB、C、D面にあらわれた垂直方向の剥離の後、水平方向の剥離(4b, 4c)を実施している。4bと4cの剥離にあたっては水平方向90度の打面移動を行なっている。その後E面の剥離を実施している。

接合資料No 5 安山岩製の第1次剥片の分割したものが接合した(II類)。先端部を欠失する。約5m離れて接合した。

接合資料No 6 火熱を受けた黒曜石製剥片の割れたものが接合した(II類)。第3号炉址付近で、20cm程離れて接合したもので、炉の火を受けたものと思われる。炉の中心との距離は約1.2mである。

接合資料No 7 ob-E製の第1次剥片の分割したものの接合(II類)。3と同一母岩と思われる。約1mの距離がある。

接合資料No 8 ob-B製銀形錐の先端部と胴部の接合例(II類)。脚を含めて略半分を欠損する。接合資料No 10 ob-C製三角錐の接合例(II類)。

接合資料No 11 11aは第2ブロック、11bは第3ブロックより出土し、ブロック間、約18mを隔てて接合している。両資料の分割後の剥片剥離が実施された痕跡は認められない。

接合資料No 12 石斧の分割したものの接合(II類)。12a(II層)、12b(I層)。

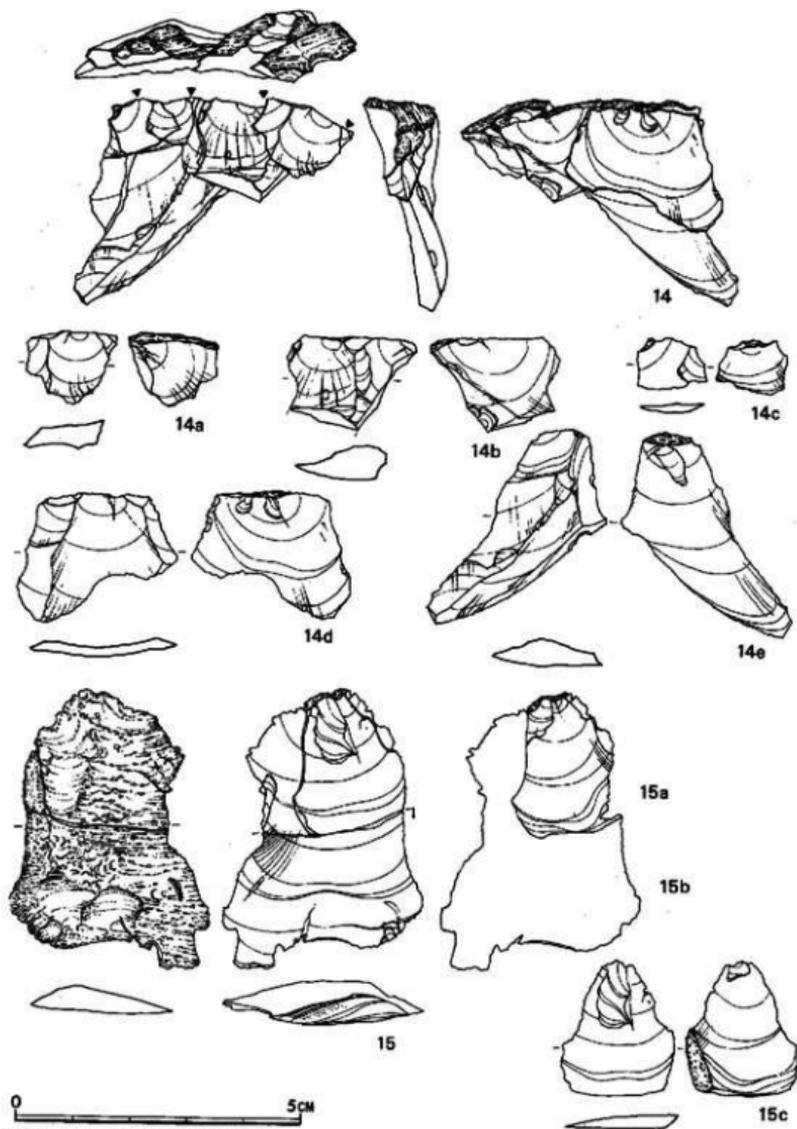
接合資料No 13 第2ブロック第4号炉址に隣接して出土した銀形錐の三分割されたものの接合例(II類)。ただし、炉址とは僅かにレベル差をもって出土した。3点は比較的同時な状態で検出され、その距離は1mと0.5mである。ob-B製。

接合資料No 14 II層中第2ブロックよりの4点とI層よりの1点の剥片で構成される接合(II類)。剥片作業は自然面を打面として、連続的に14a→14b→14c→14d→14eの順に行なわれている。接合距離は14dと14eが最も近く約0.8m、14aと14bが最も遠く約7mである。石材はob-A。

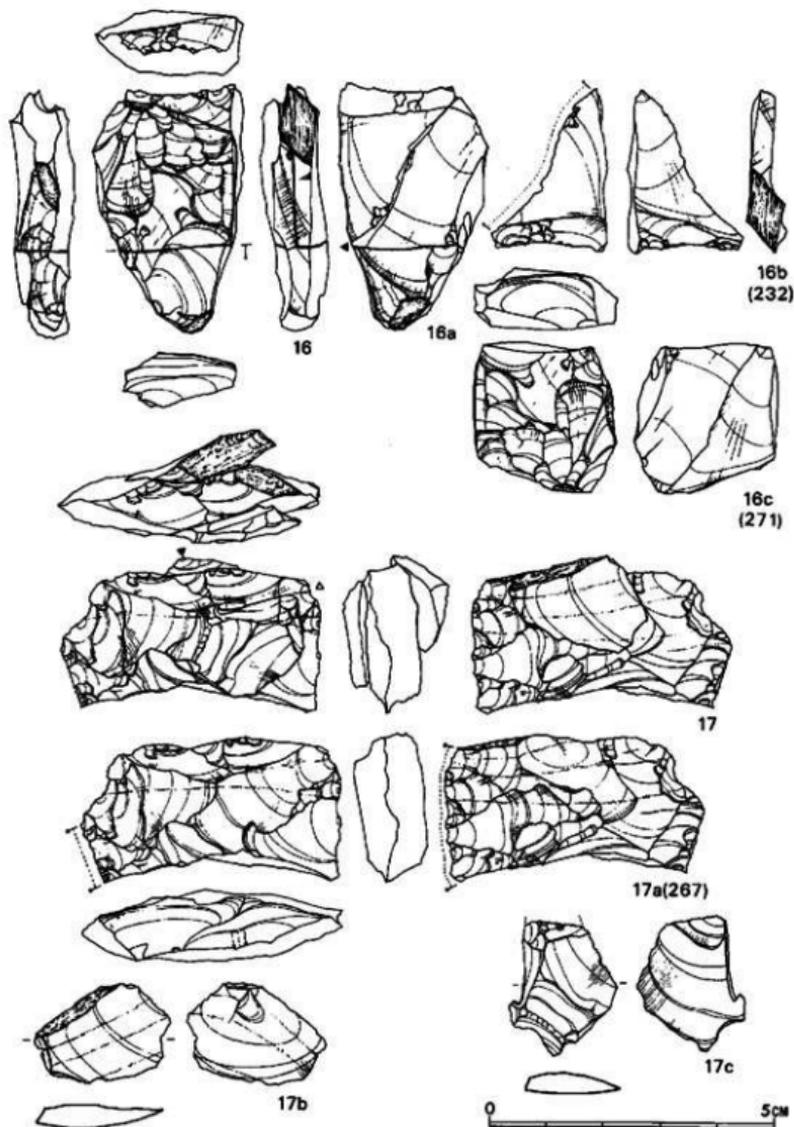
接合資料No 15 ob-B製の剥片の接合例であるが、その接合状態から剥片剥離の際分割したものである。3点とも第2ブロック内5.5m、2.5mの距離を隔てて接合した。

接合資料No 16 石核(16b)とUF(166)の接合例(II類)。16の個体自体が表面上部と左

3. 石器の接合とその分布

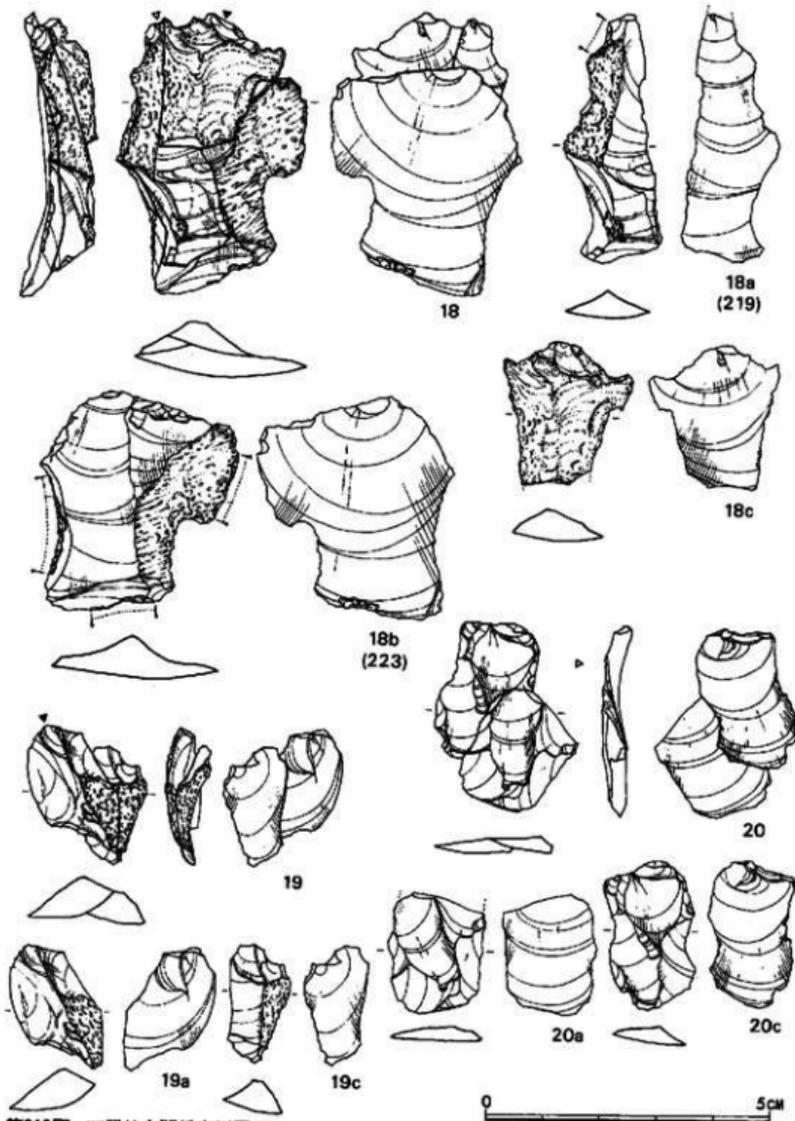


第208図 石器接合関係大測図Ⅵ

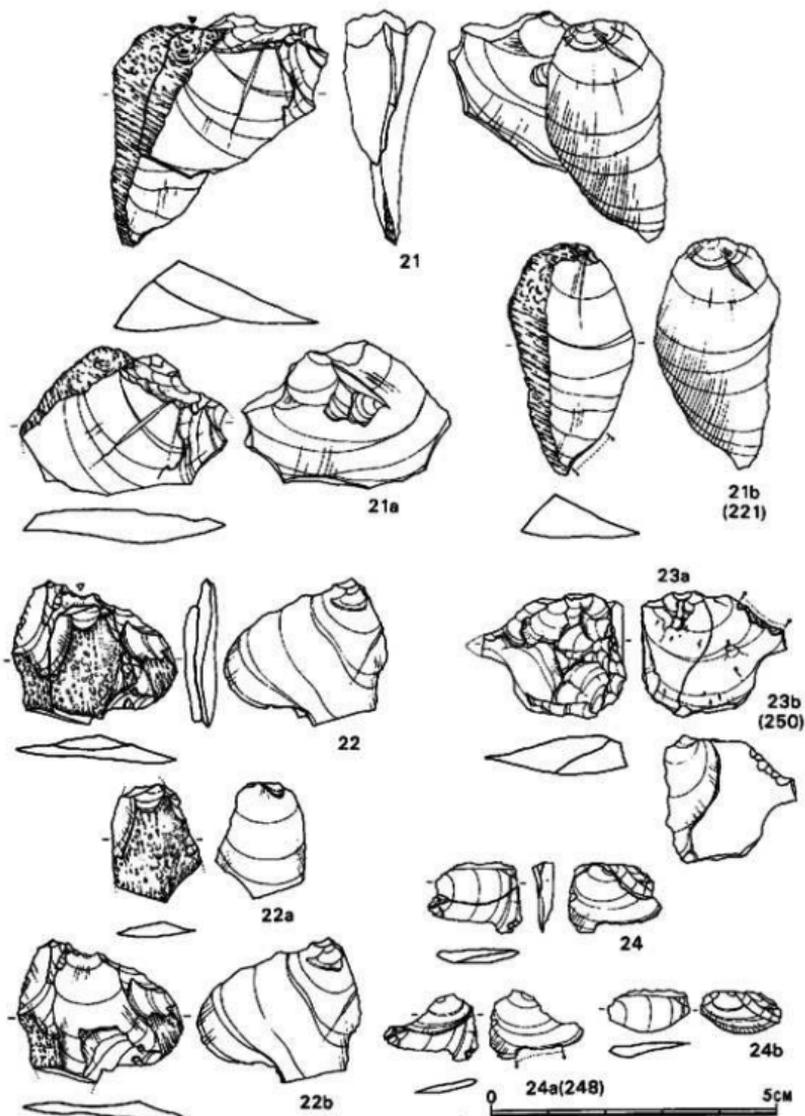


第209図 石器接合関係実測図Ⅵ

3. 石器の接合とその分布

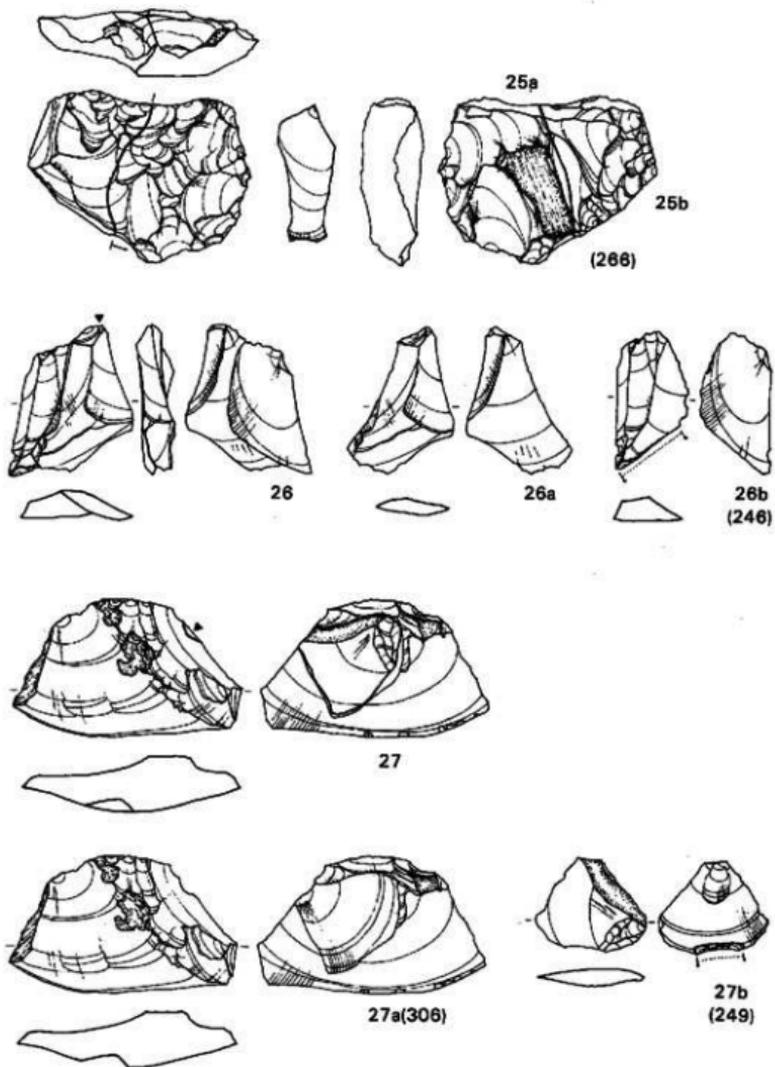


第210圖 石器接合関係実測図種



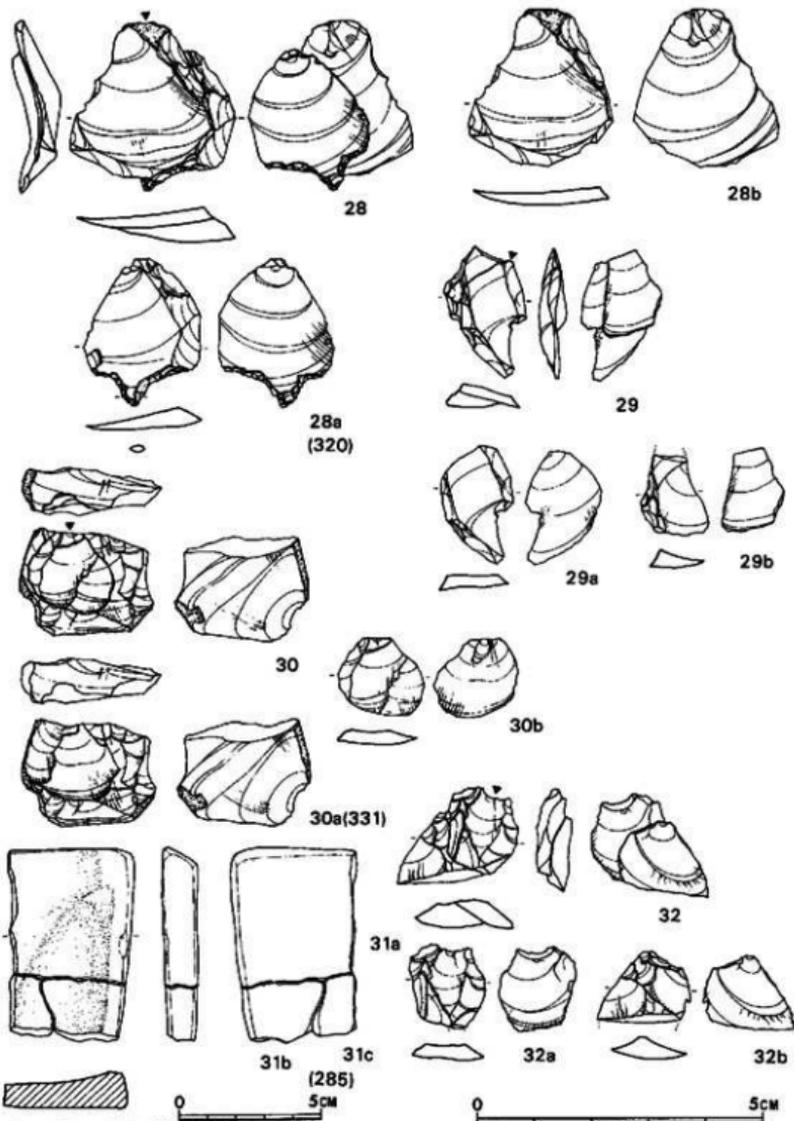
第211圖 石器接合關係実測図区

3. 石器の接合とその分布



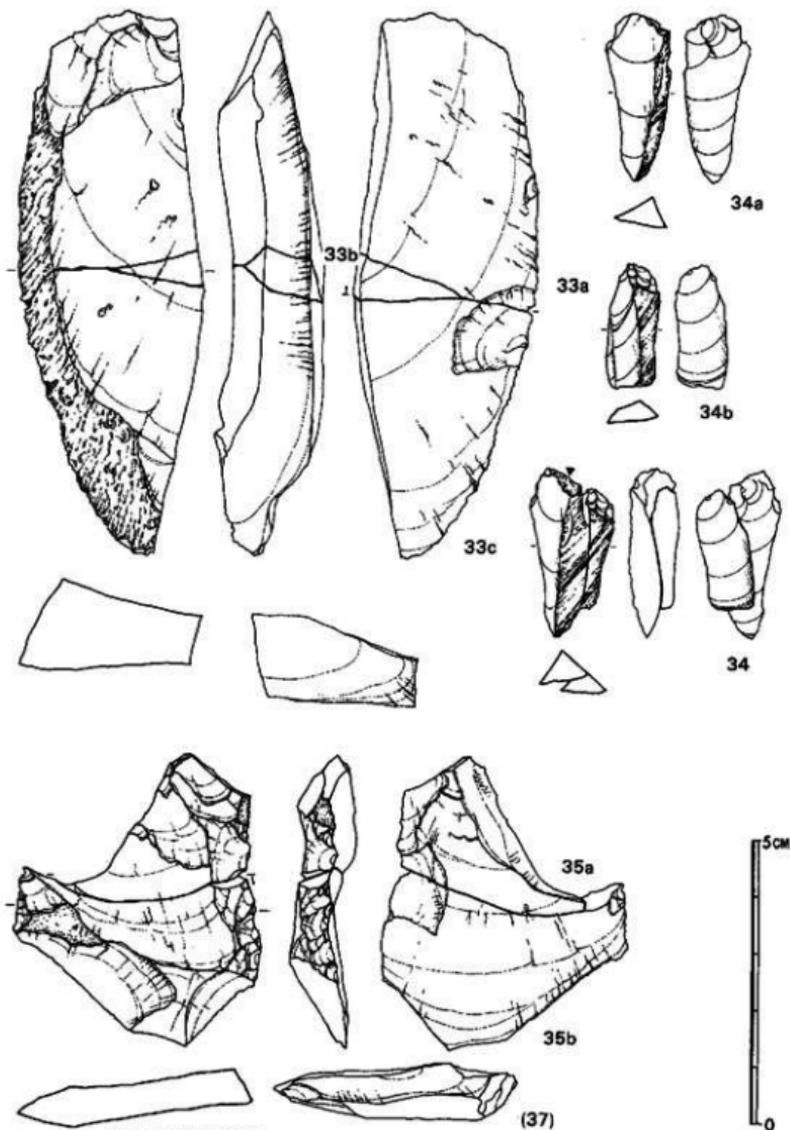
第212圖 石器接合関係実測図 X

0 5cm



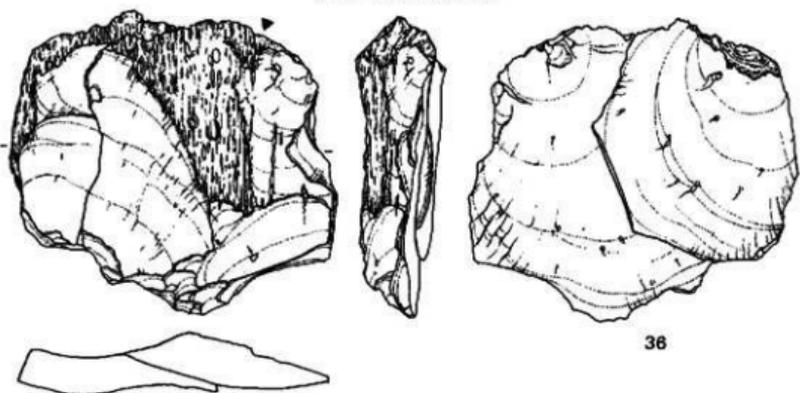
第218圖 石器接合関係実測図 XI

3. 石器の接合とその分布

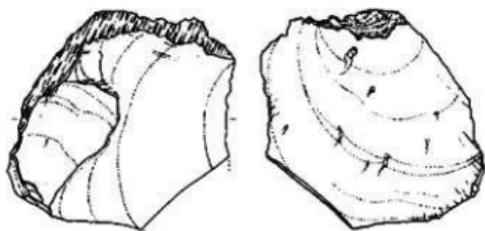


第214圖 石器接合関係実測図Ⅲ

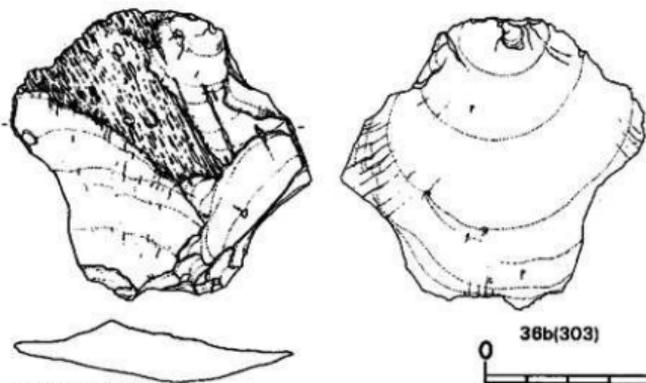
第5章 遺構、遺物の分析



36



36a



0 38b(303) 5CM

第215図 石器接合関係実測図Ⅲ

3. 石器の接合とその分布

側面に打面をもつ石核である。また裏面は右側辺上部方向から大きな剥片が剥取されている。石核16は16aと16b+16cに分割され、その後その分割面を打面として16bの剥片が剥離されている。第3ブロック内で7mと5m離れて接合。ob-B製。

接合資料No17 ob-B製の石核1点(17a)と剥片2点(17b, 17c)の接合例(I類)。石核17aは裏面に素材の主要剥離面が認められ、剥離素材であることを窺わせる。剥離は17b→n→17cの順で行なわれている。その後も数回の剥片剥離が実施され、両側縁部分には連続する細かい剥離の二次加工が施されている。第3ブロック内で3m離れて17aと17bが接合。17cは第1ブロックのI層から出土しており17aとの距離は約26mである。

接合資料No18 ob-B製のUF2点(18a・18b)と剥片1点(18c)の接合例(I類)、剥片剥離は平坦打面上から18c→18a→18bの順で実施されている。第3ブロック内でそれぞれ約9mと9.5mの距離をもって出土した。

接合資料No19 ob-B製剥片2点の接合例(I類)。素材は円礫製の石核である。打面は無調整打面である。第3ブロック内で約3.5m離れて接合した。

接合資料No20 ob-B製剥片2点の接合例(I類)、20aは上半部を欠損するが、20bの打面は平坦な無調整打面である。接合資料No18, No19にも観察されるように、これら剥片の打面は、他の剥離面を打面としており、その角度も鋭角であることから、これら剥片は接合資料No17のような石核から剥出されたものと考えられる。第3ブロック内で約3m離れて接合した。

接合資料No21 ob-B製のUF(21b)と剥片(21a)の接合例(I類)。打面は自然面である。第3ブロック内で約3m離れたものが接合した。

接合資料No22 ob-B製剥片2点の接合例(I類)。第3ブロック内で約8m離れて接合した。

接合資料No23 ob-C製のUF(23b)と剥片(23a)の接合例(II類)。第3ブロック内で約6.5m離れて接合した。

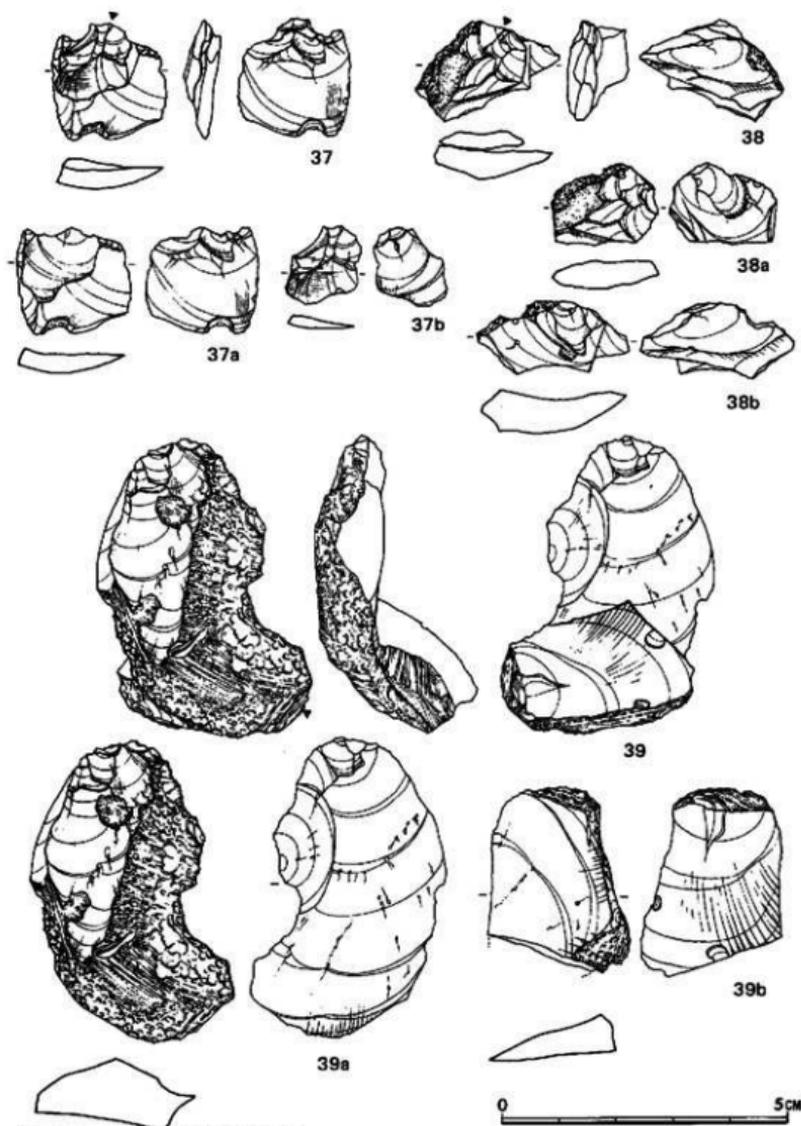
接合資料No24 ob-B製のUF(24a)と剥片(24b)の接合例(I類)。第3ブロック内で約2m離れて出土した。

接合資料No25 ob-B製の2個の分割された石核の接合例(II類)。石核25は剥片を素材とした石核で石核の中央に向かって剥片剥離が実施されている。第3ブロック内で約10m離れたものが接合した。

接合資料No26 ob-B製のUF(26b)と剥片(26b)の接合例(I類)。第3ブロック内で約8mの距離をもって接合した。

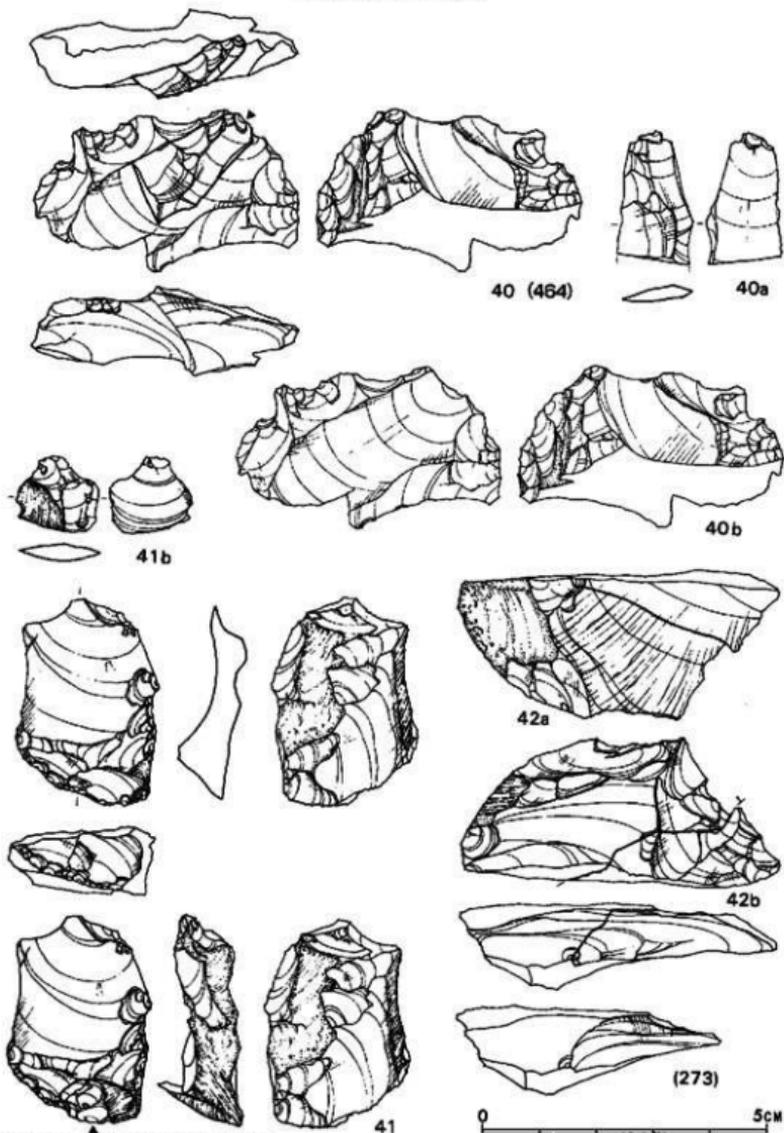
接合資料No27 ob-B製の石核(27a)とUF(27b)の接合例(I類)。27aは剥片素材で、その背面の側縁部付近を打面として27bを剥離している。得られた剥片は27bのみで、その他の剥片と剥離した痕跡は認められない。27bが第3ブロック、27aが第5ブロックの第12号炉址付

第5章 遺構、遺物の分析



第216圖 石器接合関係実測図 XIV

3. 石器の接合とその分布



第217図 石器接合関係実測図 XV

近から出土し、その距離は約15mである。

接合資料No28 ob-B製の石錐(28a)と剥片(28b)の接合例(I類)。両者は第9号炉址の北側から近接して出土し、その距離は約0.3mである。この資料は石錐(28a)があらかじめ準備されたものではなく、必要に応じて作業直前に素材剥片の剥離、石器の製作が実施されたことを示している。28aの素材剥片と28bは形態的に類似しており、その末端を簡単に加工して刃部が作り出された状況が認められる。

接合資料No29 ob-C製の剥片2点の接合例(I類)。両者は第6ブロック内の炉西側の集中区で約2m離れて出土した。

接合資料No30 No28, No29と同じく第6ブロックが西側の集中区から約1m離れて出土したものの接合例(I類)。ob-B製の石核(30a)と剥片(30b)の接合。石核(30a)からは30bを剥いだ後も2枚程の小型の剥片が剥取されている。

接合資料No33 安山岩製剥片の分割されたものが3点接合した(II類)。33cがIII層より出土している。その距離は約7mと1mである。剥片の右側略半分は出土していない。

接合資料No36 安山岩製のスクレイパー(36b)と剥片(36a)の接合例(I類)。第5ブロック12号炉址南約4mのところ出土した。両者とも自然面を打面とした剥片で、36aはその末端に刃部を形成している。約2m程離れて出土している。

III層(第202区)

接合資料No31 砂岩製の砥石の分割したものが3点接合した(II類)。31aと31bは第1ブロック、31cはII層第4ブロックから出土した。それぞれは直線にして約5mずつ離れている。

接合資料No32 ob-B製の剥片2点の接合例(I類)。第1ブロック(32a)と第3ブロック(32b)でそれぞれ出土したものである。その距離は約13mである。

接合資料No35 安山岩製スクレイパーの分割されたものが2点接合した(I類)。第2ブロック内で約1m離れて出土した。一部を欠損したままである。

接合資料No38 ob-B製剥片2点の接合例(I類)。第1ブロック内で約1.5m離れて接合した。

接合資料No34 ob-B製剥片2点の接合例(I類)。打面は自然面で、背面の右側にも自然面を大きく残している。第3ブロック内の密集区で約2m離れて出土した。

接合資料No37 ob-B製剥片2点の接合例(I類)。第3ブロック内で約5m離れて出土したものが接合した。

接合資料No39 ob-A製剥片2点の接合例(I類)。剥離作業初期の剥片である。両者の剥離は約90度の打面の転移がある。39aの裏面左側にはこれらの剥片に先行する剥片剥離の痕跡が認められる。第3ブロック内約0.3m離れて接合した。

この他接合資料の位置が不明確なものと接合した例がある。

3. 石器の接合とその分布

接合資料No40 ob-B製の石核(40b)と剥片の接合例(I類)。40aは第1層出土。

接合資料No41 ob-B製のスクレイパー(41a)とその二次加工剥片(41b)の接合例(I類)。41aはII層第2ブロックの出土である。

接合資料No42 ob-B製の石核の分割したものの接合例(II類)。42aはII層第3ブロックから出土している。

接合資料の分析を通して石器の散布状況を見てみると、II層第3ブロックの第6号炉址付近のように、いくつかの小ブロックに分けることが可能である(第112図参照)。II層においてはどのブロックにおいても炉に対応するような石器、石片の散布(小ブロック)があり、その小ブロック内もしくはブロック間での接合関係が認められる。これは炉址をかこむようにして石器の製作及び使用が行なわれたことを類推させるものである。微視的にこの小ブロック内における行動の復元も可能である。II層第2ブロックにおいてはとくに小ブロック間を越えた石核と剥片、剥片と剥片の接合関係が多く、剥片の使用及び石器製作が頻繁に行なわれたことを暗示している。また距離を隔ててブロック間で接合する例(接合資料No27)は第6号炉から第12号炉への移動であり、人為的剥片の運搬、使用の結果と思われる。また第3ブロックの小ブロックaから北東方向への移動は石器の散布状況とも類似しており、石器・石片の拡散状況を示しているものと考えられる。

石核の分割したII類の接合例No8, No10, No13はいずれも各個体が近接して出土しており、その場における破壊、分散の状況を示している。これに対し接合資料No9の石核はIII層第3ブロックとI層(その距離38m)に分かれ出土しているが、本米III層にあったものがI層の北部へ運ばれた結果を示している。これは条痕石器の接合状態も同様の結果がでていることから裏付けられよう。

いずれにせよ、今後各ブロックの単一時期である可能性の精度をもっと高めねばならない。そのためには剥片+石核の接合例や剥片+剥片の接合例などの個体別資料を正確に把握することが肝要である。現在本遺跡において明らかに搬入品と解る石器は、チャート等の特殊な石材を用いた石錐(第36図16, 第37図26, 第176図392)、異形局部磨製石器(第130図213, 214)であり、普遍的な安山岩・黒曜石製の石器については遺跡で製作されたものか他から搬入されたものかは判断し難い。これらの製品については、石器製作の実施されたブロック内に素材剥片があるか否か、二次加工石片があるか否か等の細かな検討を踏まえた上でその俊別を行なう必要がある。(小畑)

4. 各時期の遺構・遺物の分布と生活空間

第218～220図は本遺跡における遺構分布と土器分布を各時期ごとに示したものである。石器は土器型式に対応してその所属時期を明確にできないので、本図には省略した。

以下、時期ごとに遺構と土器分布から、当時の居住空間とその変遷の概略をみていきたいと思う。

①は本遺跡の最古の土器の分布であるが、その分布は遺構とは大きく外ずれ、第2凹部南端部～第3凹部前面に広がりを見せることより、その居住空間は未発掘部の第3凹部が求められる可能性があるが、この土器の拡散状況が第2凹部からその前面一帯にわたってみられることが何を意味するのかは明らかにできない。

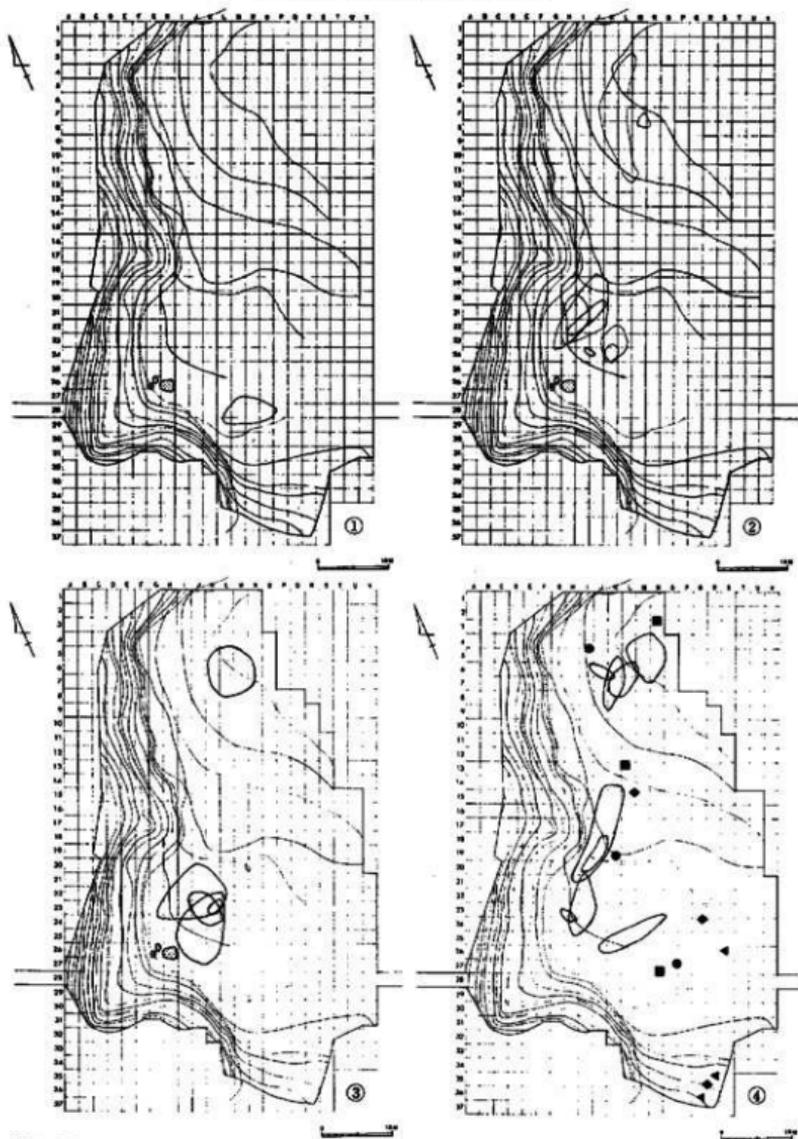
②は①よりやややくれるものの時間的差異があまりない段階の突刺文土器の分布である。土器の分布は主に第2凹部北半部からその前面にかけて分布し、第2凹部南半部にその居住空間が求められる可能性が高い。第2凹部Ⅲ層下面に検出した堅穴状遺構と土壌はこの段階の遺構であることは①の段階での土器分布や、②段階の土器分布と居住空間の変移からみてほぼ間違いないところである。

③は条痕文土器の分布と遺構の関係である。②の突刺文段階の土器分布とほとんど変化はないが、刺突文土器の分布より第2凹部の高所への土器分布移動が認められる。このことは先にも指摘したように、この第2凹部の土の堆積とは無関係でなく、土層堆積につれて、居住空間がやや上方へ移動したとみることができる。また、第2凹部北半部に検出した自然流路にその多くが出土したことも考慮する必要がある。

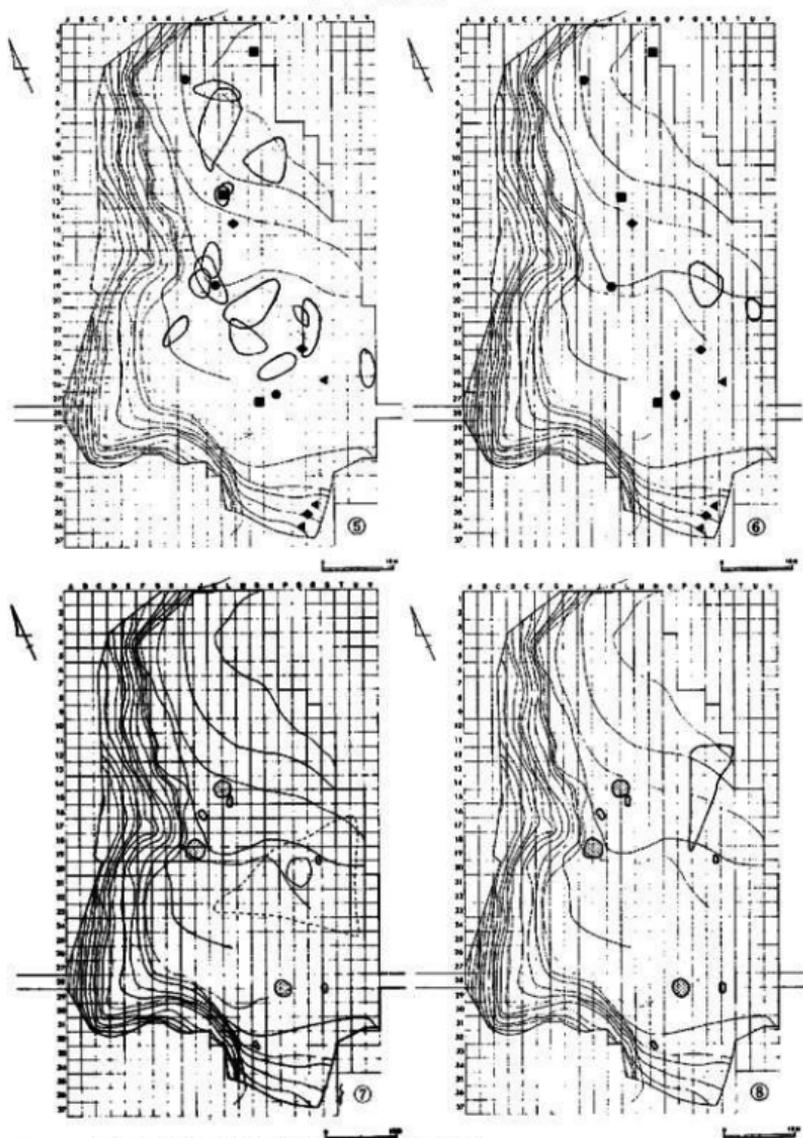
④はⅡ層の無文土器の分布と遺構（炉址）の分布を示したものである。炉址は先に分類した如く、Ⅰ類型を丸型、Ⅱ類型を方形、Ⅲ類型を菱形、不明を三角形で示した。土器の分布は大きく、第1凹部前面、第2凹部北半部から第1凹部との境、第2凹部南半前面部の3ヶ所に分けられ、Ⅰ類型の炉址との対応が認められる。ただし無文土器の中には押型土器に先行するものと共存するものがあり、この対応関係がそのまま無文土器と対応するとするよりも、無文土器～Ⅳ類土器との対応としてみた方が良く考える。この時期の居住空間はそれぞれ第2・6・11号炉址を中心とした空間が予想される。前段階まで1ヶ所の居住空間の存在であったものが、この段階で3ヶ所の居住空間に増えることに注目する必要がある。炉址は全てが屋外炉であるが、Ⅱ層中には炉址以外の遺構は検出していない。

⑤はⅡ層の押型土器の分布と炉跡の分布である。押型土器は3型式に分けることは先に指摘したが、Ⅳ類土器は無文土器の関係が考慮されるので、ここでの対応関係はⅤ・Ⅵ類土器とのものである。押型土器の分布は大きく2ヶ所に分けられる。すなわち、第1凹部中央部

4. 各時期の遺構・遺物の分布と生活空間

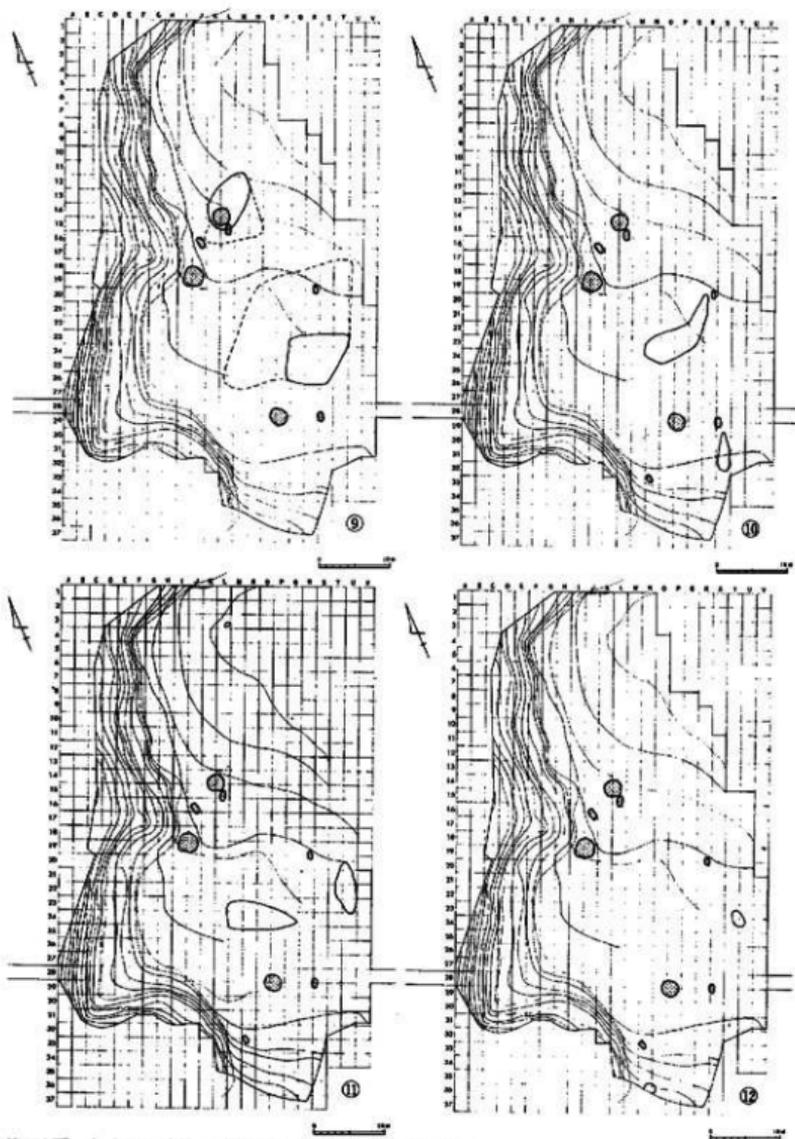


第218図 各時期の遺構・遺物の分布と生活空間関係図 I



第219図 各時期の遺構・遺物の分布と生活空間関係図II

4. 各時期の遺構・遺物の分布と生活空間



第220図 各時期の遺構・遺物の分布と生活空間関係図Ⅲ

前面と第2凹部北半部前面であり、これに対応する居住空間としては第4・5号炉址を中心とした空間、第11・12号が跡を中心とした空間が考えられる。ただし、未発掘の第3凹部の前面に存在するが址の空間もこの時期の居住空間として把握でき、廃棄された土器の分布が未発掘部に存在する可能性もある。この段階の居住空間も④段階同様に3単位でその空間が維持されたと推定できる。

⑥はⅡ層出土の条痕文土器の分布を示したものであるが、この段階ではすでに炉址との対応関係があるとはいえず、前段階までのあり方と大きく異っている。

⑦はⅠ層出土のⅦ類土器の分布と遺構の分布であるが、上部に古墳が築造されているため、削平され遺構との対応関係は認められない。居住空間のあり方は⑥段階と同様である。

⑧はⅦ類土器と遺構の分布を示したものであるが、これも⑦同様に遺構との対応はみられなく、Ⅷ類土器が単独に存在するのみである。

⑨はⅧ類土器の分布と遺構の分布を示したものである。この土器は2ヶ所に分布するが、いずれも一団の存在であり、そのあり方としては前段階と変わらない。ただし、第1凹部北半部の土器分布は、竪穴状遺構と対応し、この段階での遺跡のあり方を示唆するものである。

⑩はⅧ類土器の分布と遺構の分布を示したものである。2ヶ所に土器の分布がみられるが、いずれも1団の分布である。

⑪はⅧ類土器と遺構の分布を示したものであるが、やはり同様のあり方が把握できる。

⑫はⅧ類土器と遺構の分布を示したものであるが、⑪と同様のあり方を示している。

以上、各時期における土器分布の変移をみてきたが、ここで若干の検討を加えて討を加えてみよう。まず、これらの図より居住空間あるいはそのあり方に大きな違いが3回あることに注意したい。それぞれのあり方の違いは層の違いと深いかわりをもっている。このことは土器においてもその空白部分の存在が指摘できたところである。Ⅲ層の居住空間のあり方は第2凹部を中心とした1単位であるが、土器個体は複数の存在を示し、ある一定期間の居住を意味している。Ⅱ層では、一変し、炉を中心とした居住空間が存在し、この遺跡の中で3単位のあり方を示している。Ⅰ層では、竪穴状遺構との対応がみられるが、土器個体は1～2個体ときわめて少く、居住のあり方もまちまちであり、居住期間の短かさを感じる。

以上、Ⅲ～Ⅰ層の居住空間の変遷から想像をたくましくして考えれば、Ⅲ層段階では単位の集団が小さく、1ヶ所の居住空間でよかったのに対し、Ⅱ層では単位の集団が大きくなり、少なくとも3単位（家族か？）に広がりを見せ、Ⅰ層ではキャンプ地としての利用があったものと思われる。

（山崎）

第6章 まとめ

柏原遺跡群F遺跡の調査報告は前に述べたとおりであるが、時間的な関係で充分なる整理、分析を行なうことができず、中途半端な報告に終始したが、今後、さらに整理、分析を進め後日この欠を補いたい。

本遺跡で特に注目される、あるいは新たに整理した問題を簡略に示しまとめたい。

先ず、本遺跡の立地のあり方は、従来あまり目を向けなかった場所であったことが注目される。本遺跡は小さな谷のテラス状をなした小規模な段丘であったが、発掘の結果は洞穴、岩陰と同様の性格を有する遺跡となったことである。

次に、押型文土器に先行する土器の一群および押型文土器を層位的に明らかにしたことがあげられよう。押型文土器に先行する土器群として無文土器・条痕文土器・刺突文土器・捺米文土器があるが、無文土器・条痕土器については他遺跡でも明らかにされていたが、それを再確認し、地域を越えて普遍的に存在することが判明した。刺突土器、捺米文土器は本遺跡においてはじめて判明した土器であり、今後の類例の増加をまちたい。

早期土器に伴出する石器においても特筆すべきものがある。早期における石鏃の変遷の把握、あるいは、環状石斧の類列を増加し、さらにその穿孔にあたって回転手法による穿孔具の存在を示唆したこと、異形局部磨製石器の類例増加とその所属年代が明らかになったこと、剥離剥片技術において一定の法則性をもった技法が存在することを予想させるものがあり、特殊な石核の存在が判明した(IIa型石核)。他に類例があり、この石核を一応「柏原型石核」と仮称しておきたい。

柏原遺跡群には、他に同時期と考える早期遺跡が存在し、その遺跡間の関係等明らかにしなければならぬが、今後の問題としておきたい。

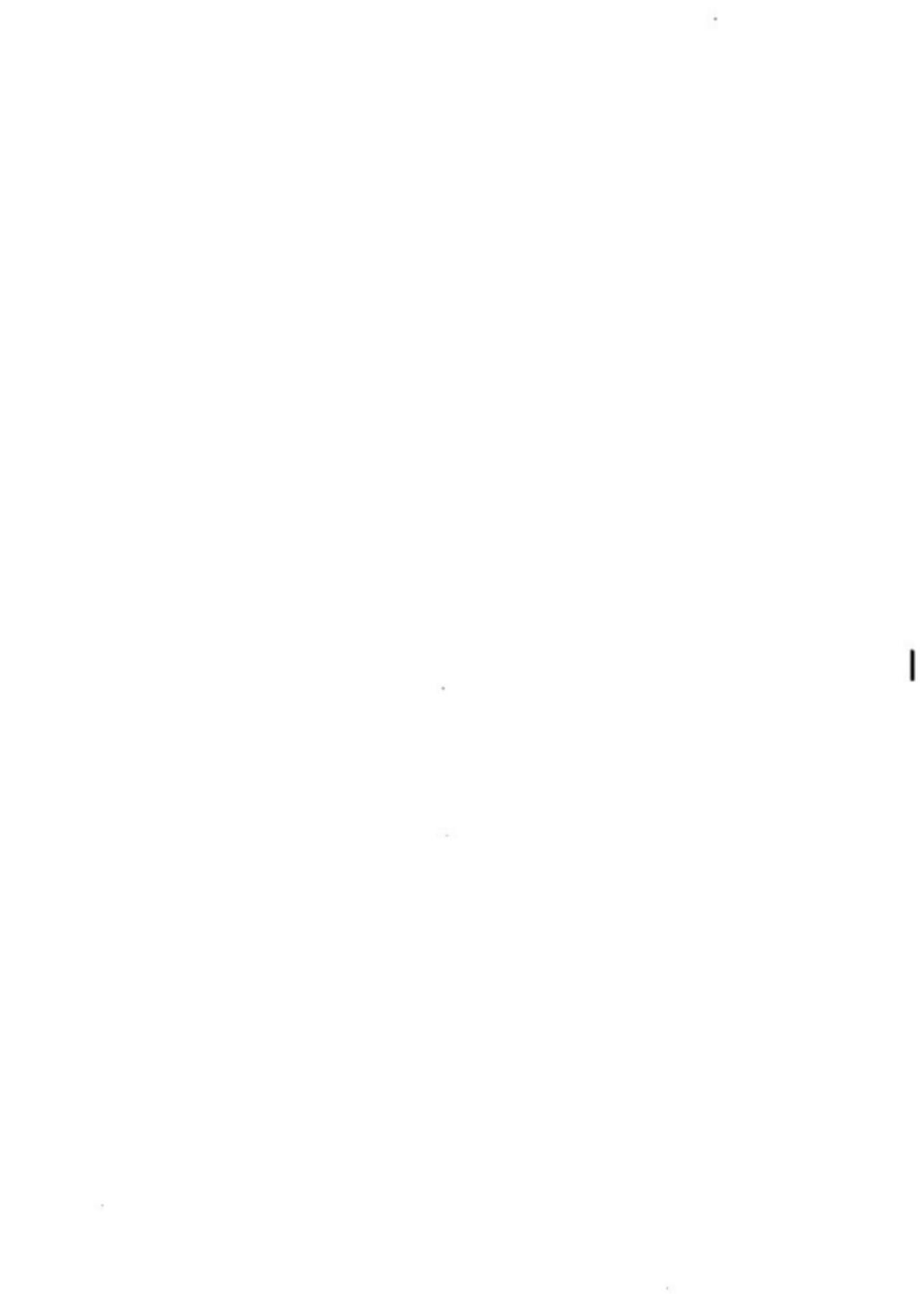


圖 版

PLATE



(1) 調査前の遺跡全景（北から）



(2) 遺跡全景（東から）

図版 2



(1) 調査後の遺跡全景（西から）



(2) 調査後の遺跡全景（西から）



(1) 第1凹部近景 (南から)



(2) 第1凹部近景 (北から)



(1) 第2凹部近景 (東から)



(2) 第2凹部近景 (北から)



(1) 遺跡全景（北から）



(2) 土層断面



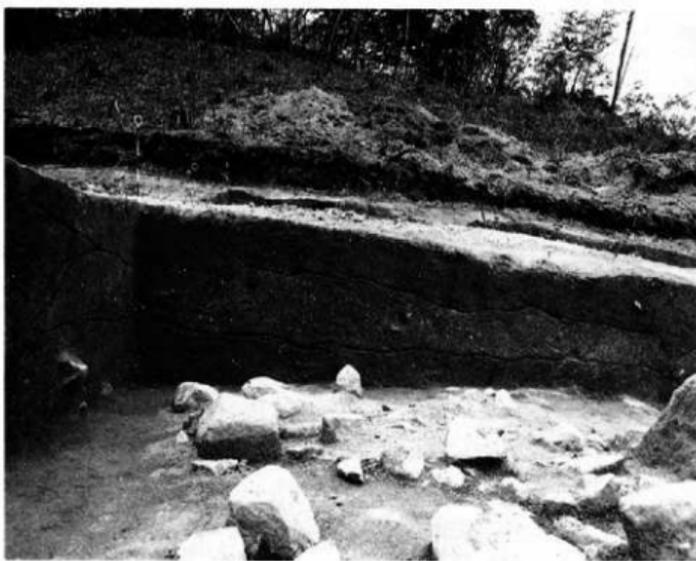
(1) 第2凹部L列西側土層断面



(2) 第2凹部J列西側土層断面



(1) 29列北側土層断面



(2) 7列南側土層断面



(1) 第1号堅穴



(2) 第2号堅穴



(1) 8号炉址



(2) 2号炉址



(1) 9号炉址



(2) 3号炉址



(1) 4号炉址 (檢出狀況)



(2) 4号炉址 (投棄磔除去後)



(1) 6号炉址



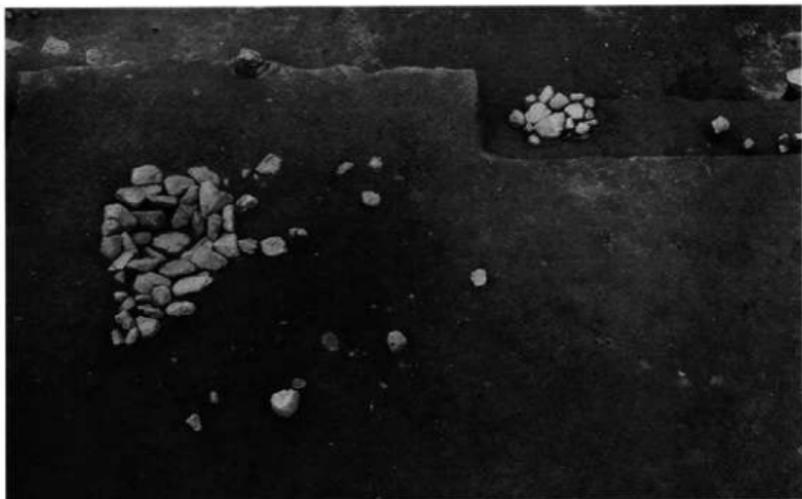
(2) 5号炉址 (檢出狀況)



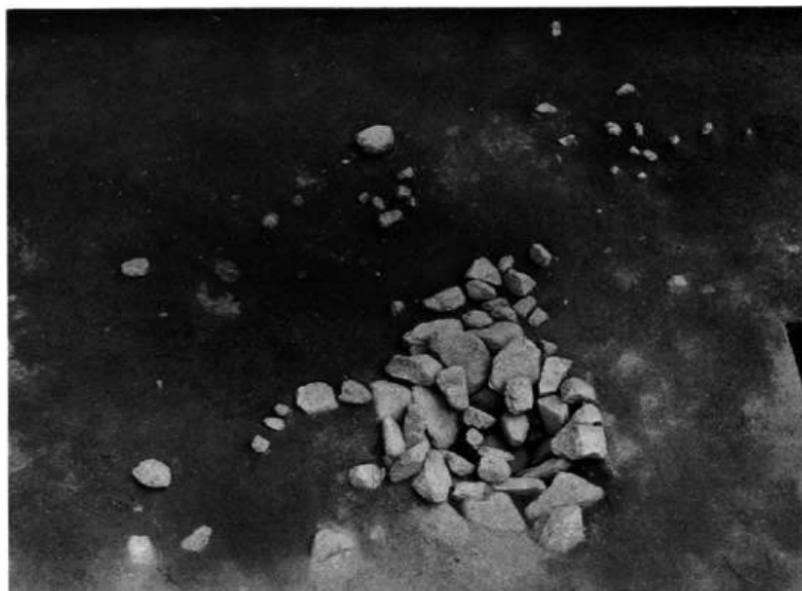
(1) 11号炉址 (上面より)



(2) 11号炉址 (側面より)



(1) 11·12号炉址



(2) 12号炉址



(1) 13号炉址



(2) 14号炉址



(1) 遺物(土器)出土状況I



(2) 遺物(土器)出土状況II



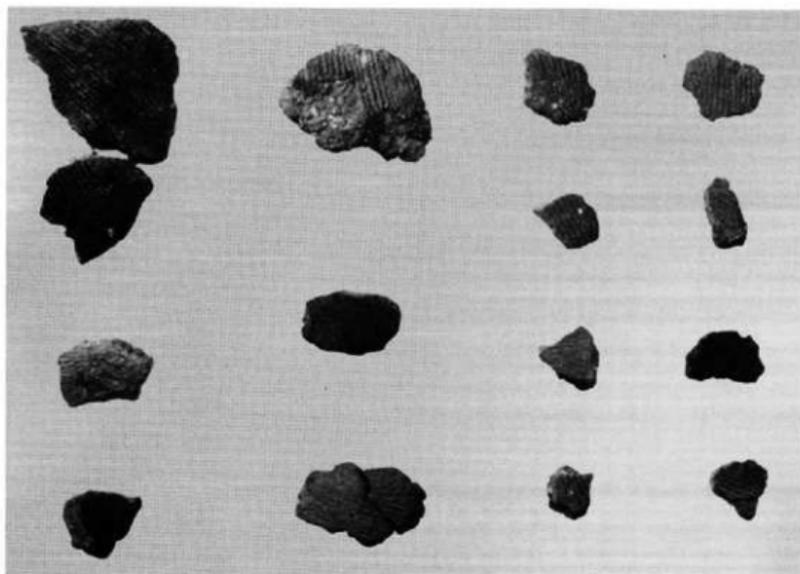
(1) 遺物（石器）出土狀況 I



(2) 遺物（石器）出土狀況 II



(1) 遺物(石器)出土状況Ⅲ (2) 遺物(石器)出土状況Ⅳ
(3) 遺物(石器)出土状況Ⅴ



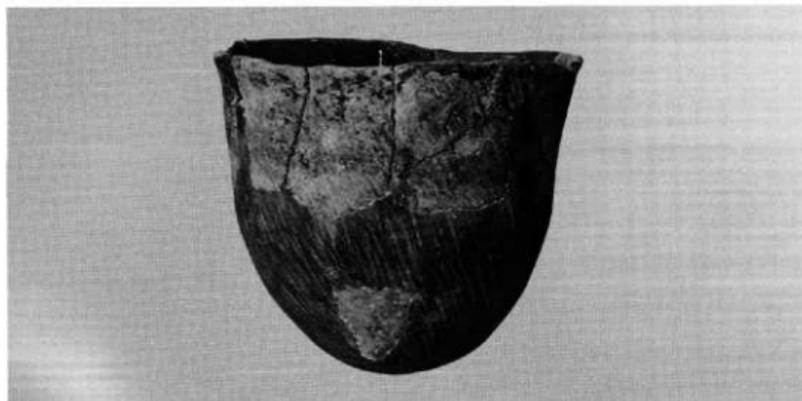
(1) 捺糸文土器



(2) 刺突文土器Ⅱ-X



(1) 刺突文土器 I



(2) 条痕文土器



(1) 条痕文土器



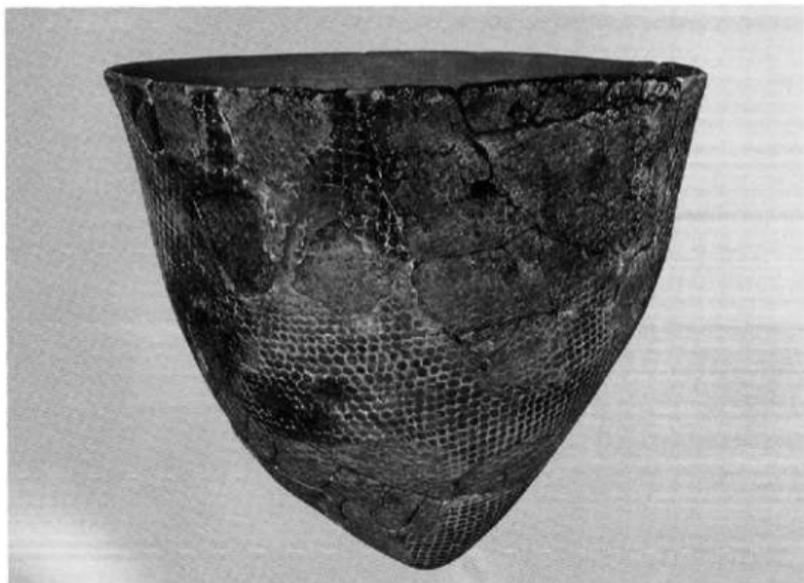
(2) 条痕文土器



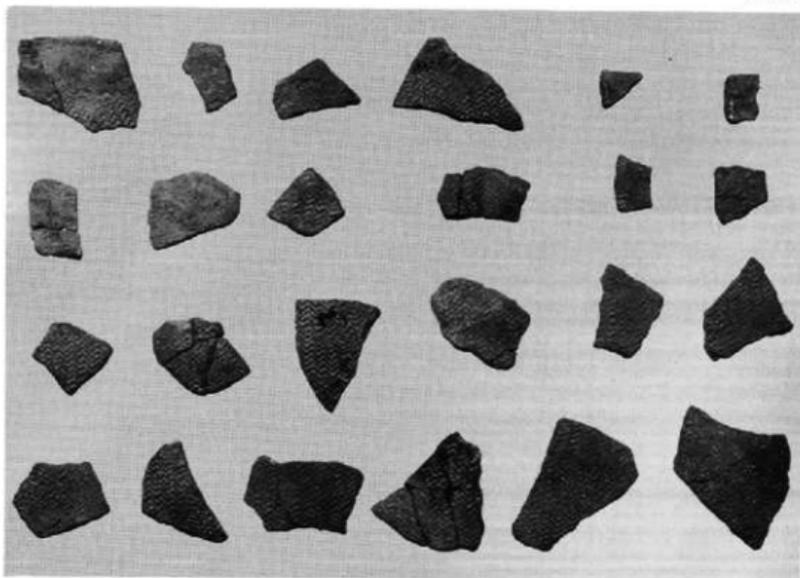
(1) 押型文土器



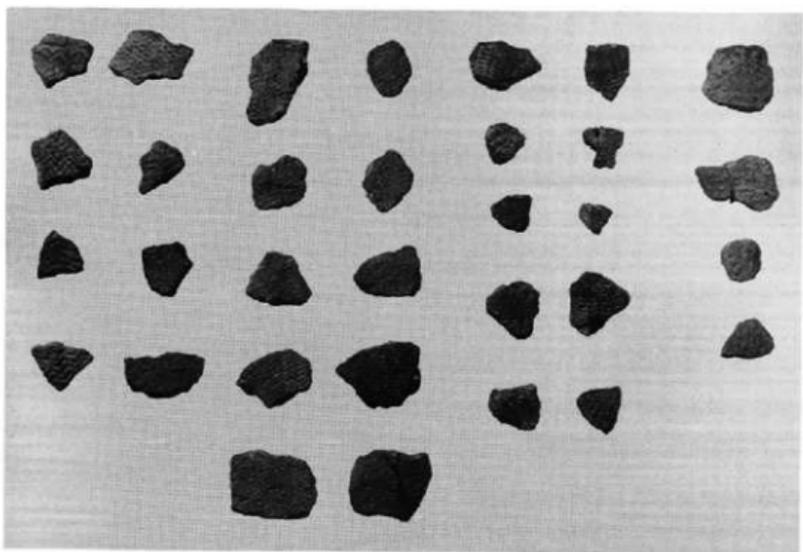
(2) 押型文土器



(3) 押型文土器



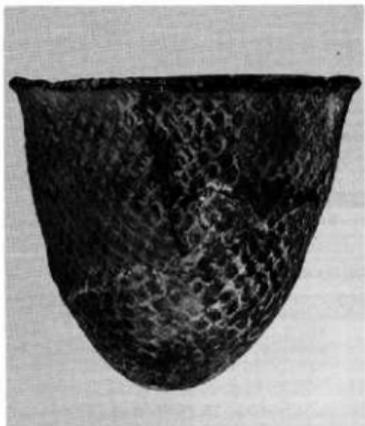
(1) 押型文土器



(2) 押型文土器



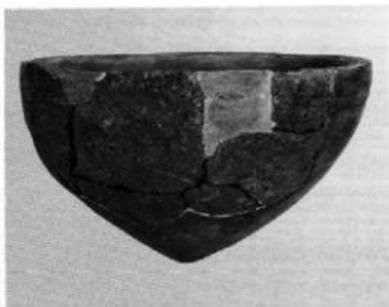
(1) 押型文土器



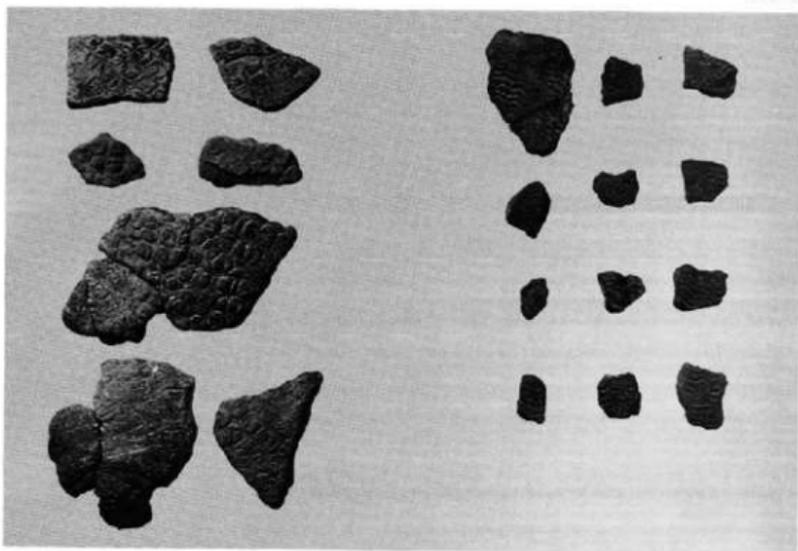
(2) 押型文土器



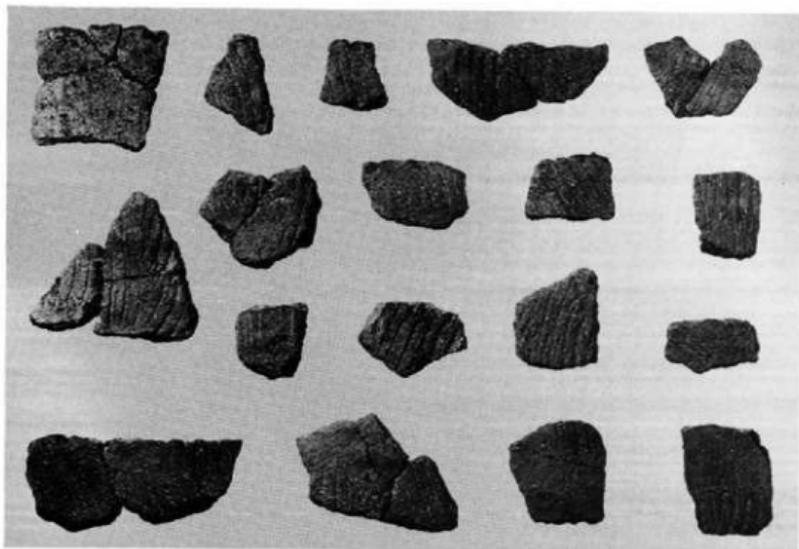
(3) 無文土器



(4) 無文土器



(1) 押型文土器



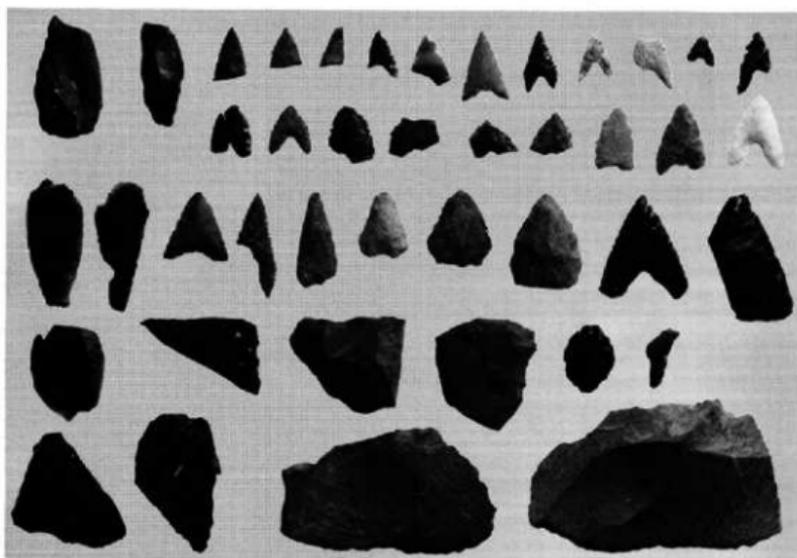
(2) 捺糸文土器



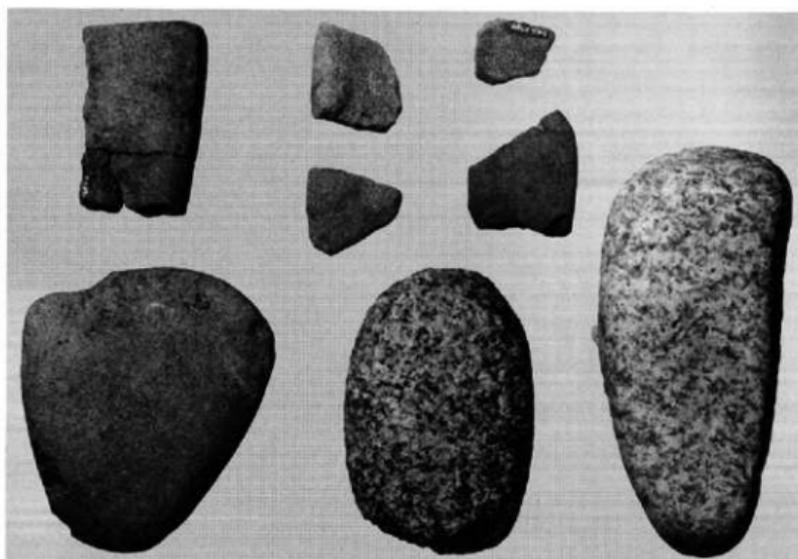
(1) 平栉式土器



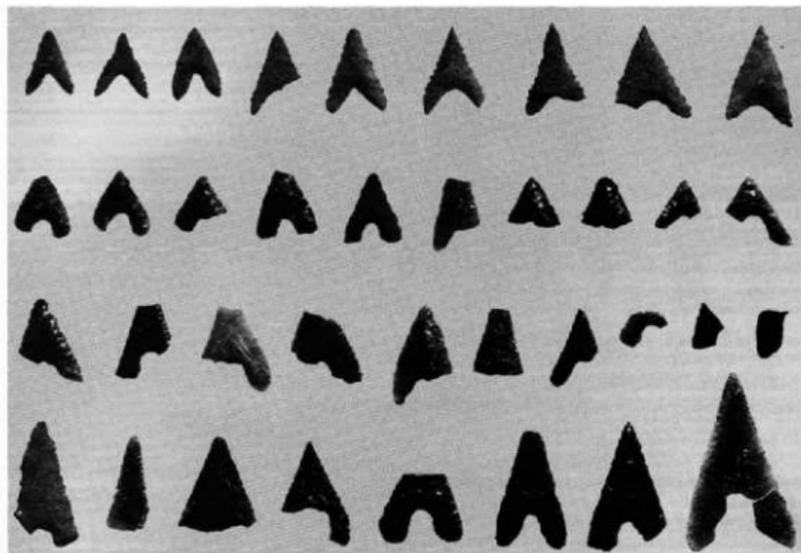
(2) 摺糸文土器



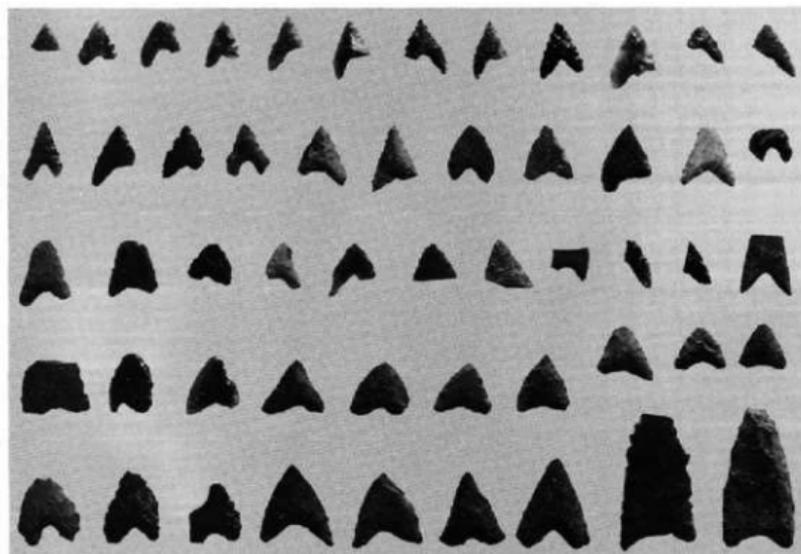
(1) ナイフ形石器およびⅢ層出土石鏃、スクレイパー、UF、石核 (各)



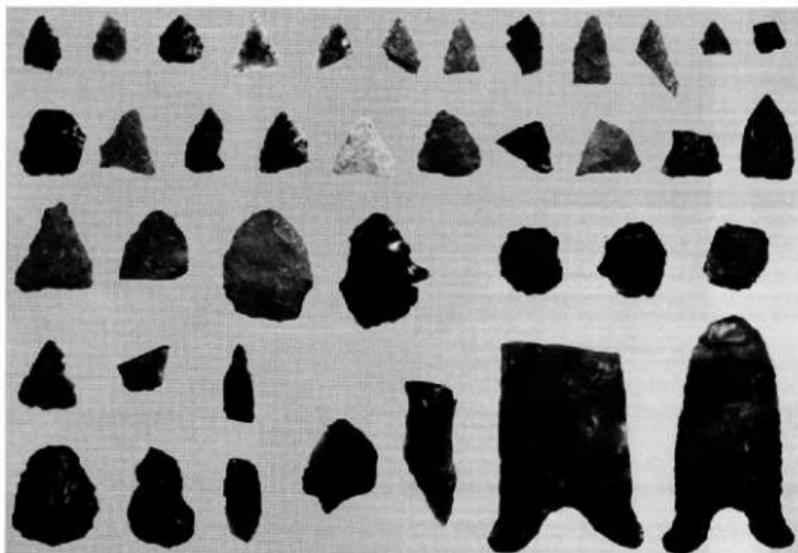
(2) Ⅲ層出土砥石、磨石 (各)



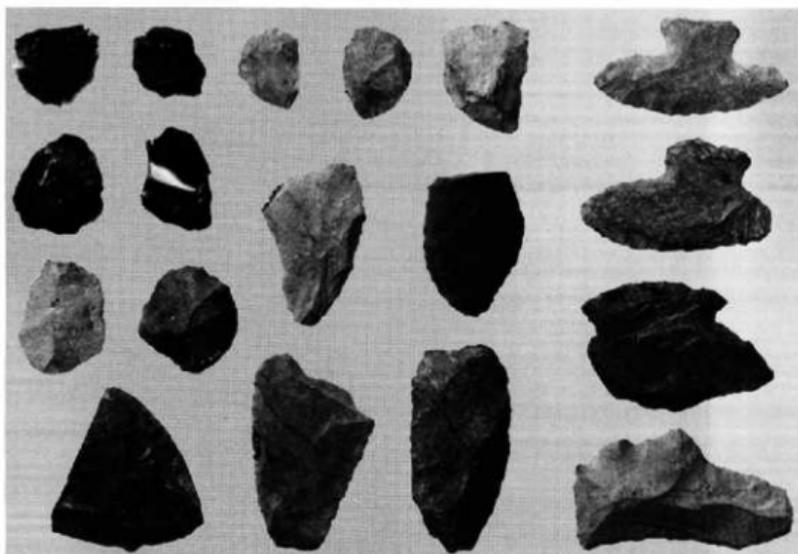
(1) II層出土石鏃I (子)



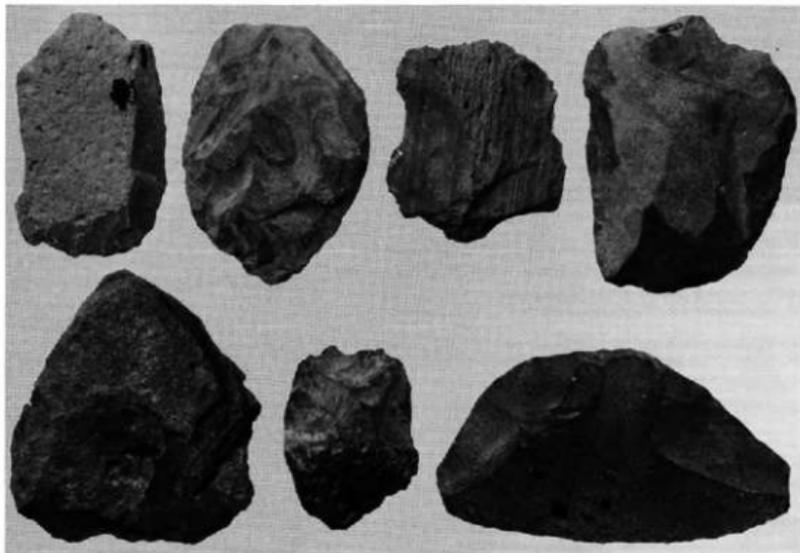
(2) II層出土石鏃II (子)



(1) II層出土石鏃、スクレイパー、石錐、異形局部磨製石器 (号)



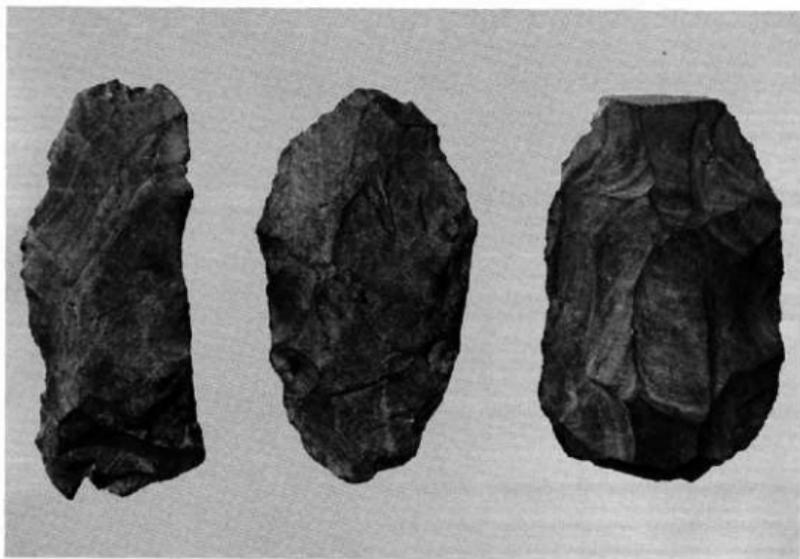
(2) II層出土石匙、スクレイパー (号)



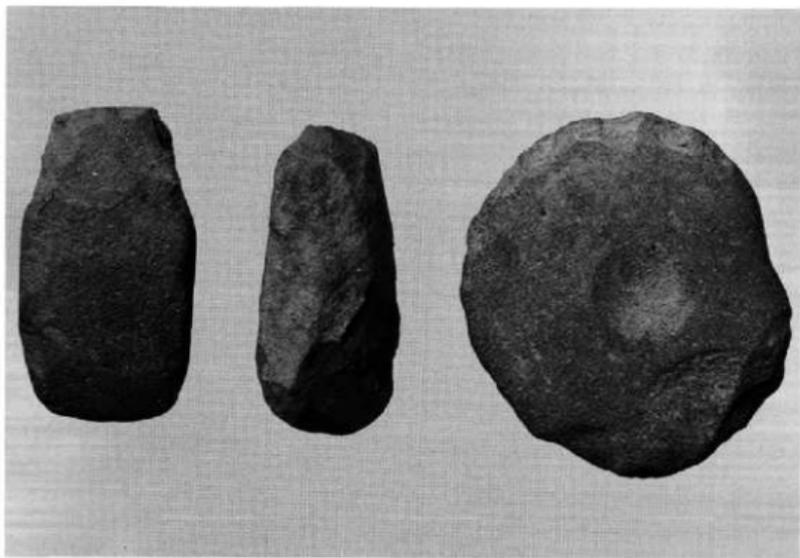
(1) II層出土スクレイパー (1/4)



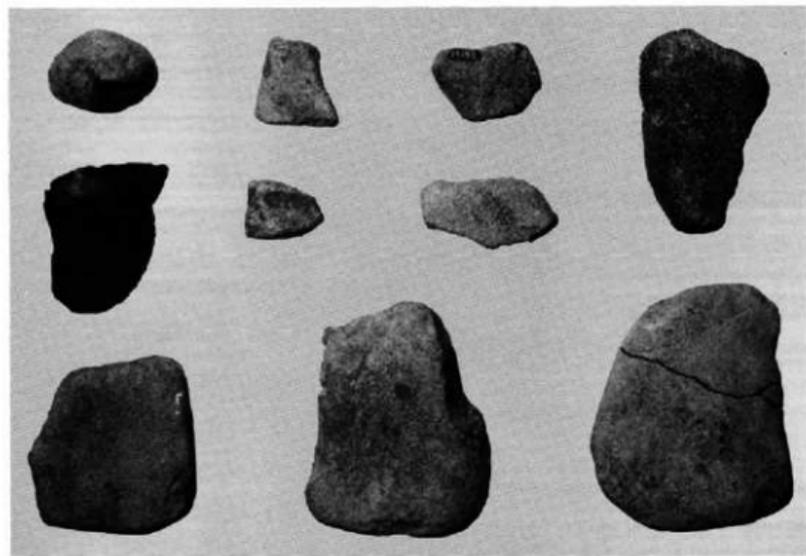
(2) II層出土石核 I (1/4)



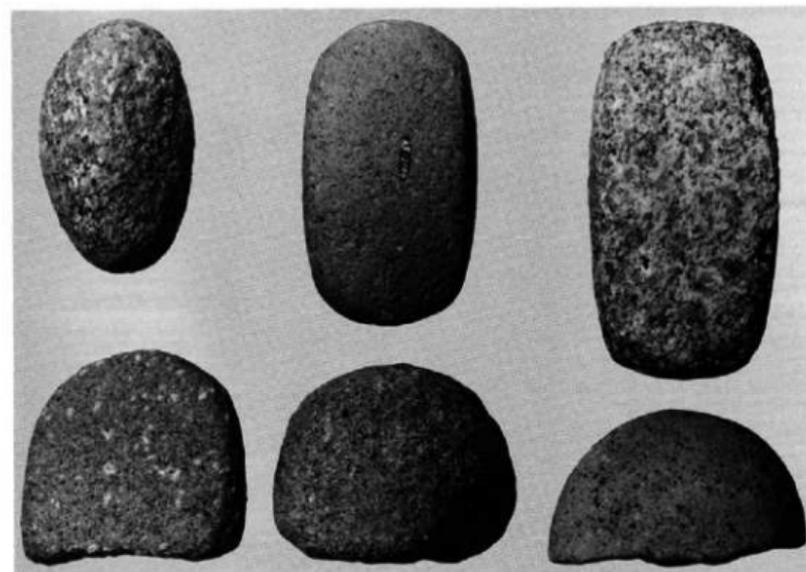
(1) II層出土石核II (1/4)



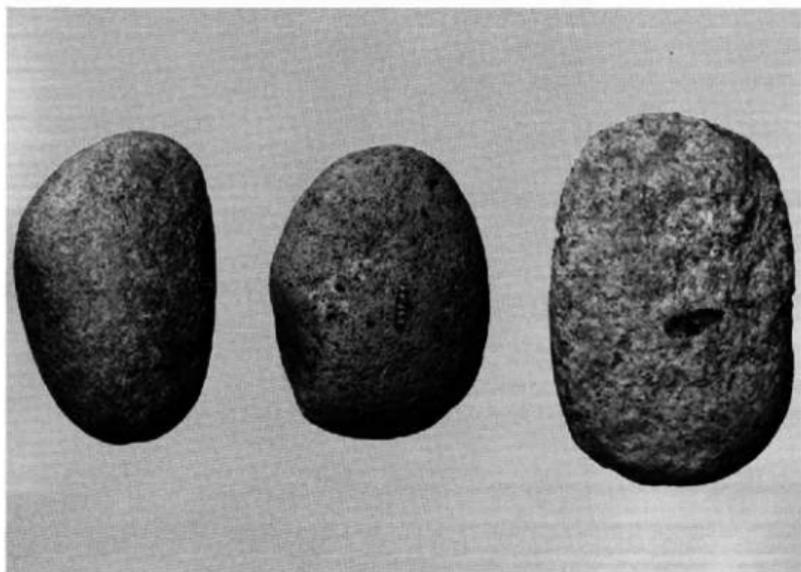
(2) II層出土石斧・環狀石斧未製品 (1/4)



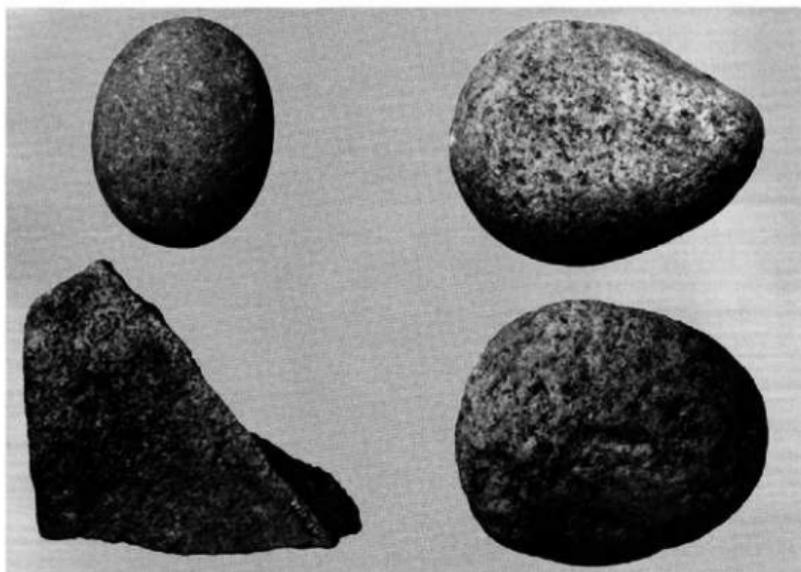
(1) II層出土原石・砥石 (寸)



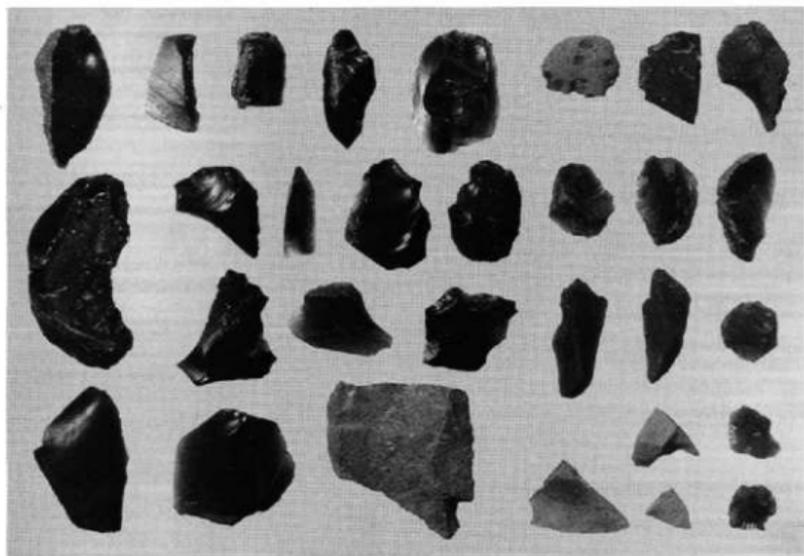
(2) II層出土磨石 I (寸)



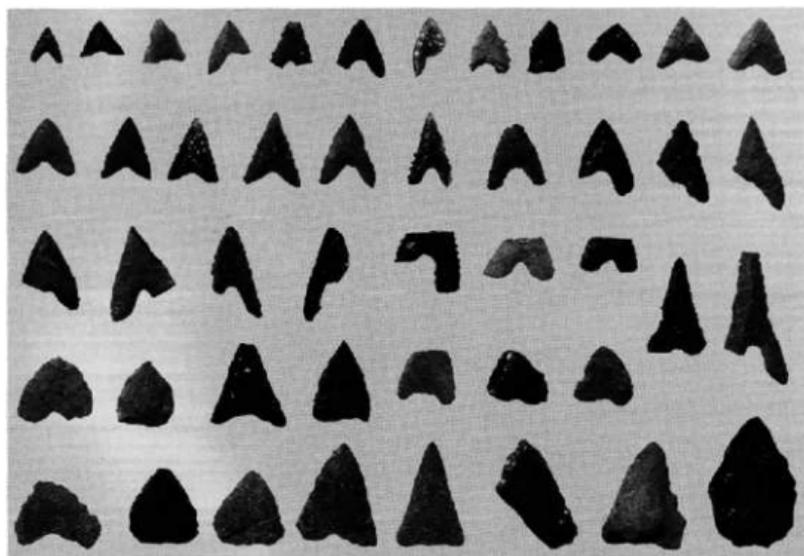
(1) II層出土磨石II (1/4)



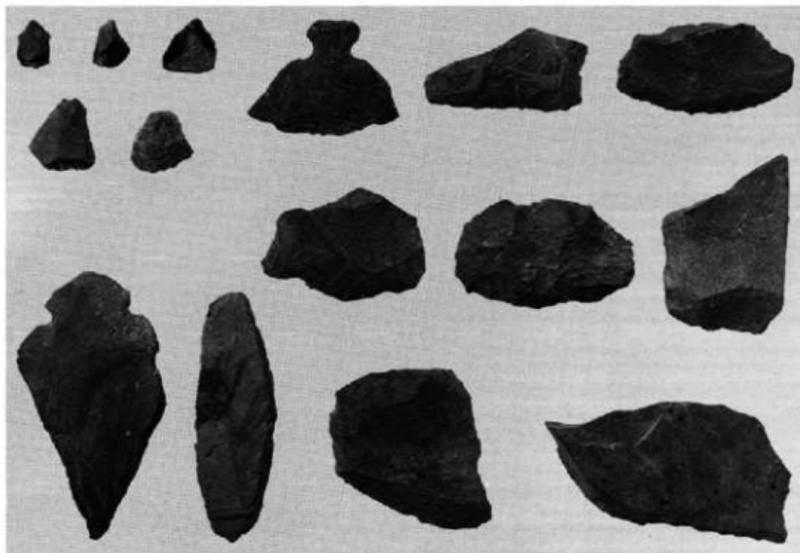
(2) II層出土磨石・石皿 (1/4)



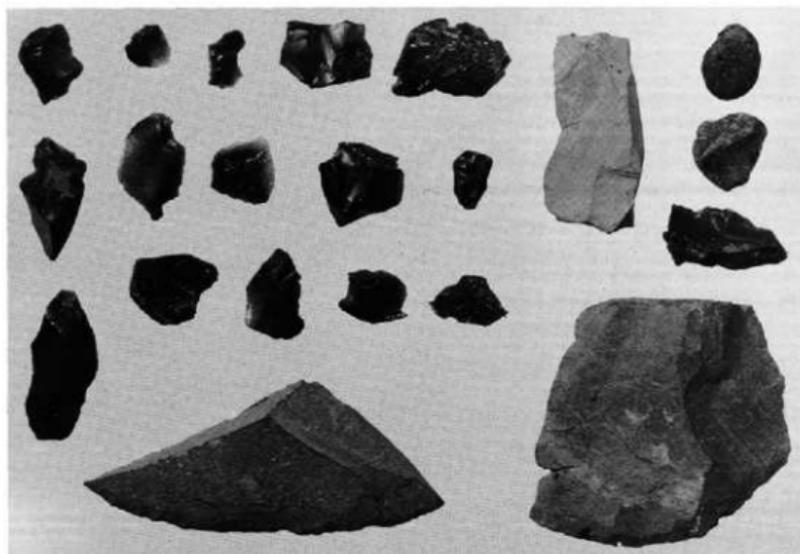
(1) II層出土剝片 (各)



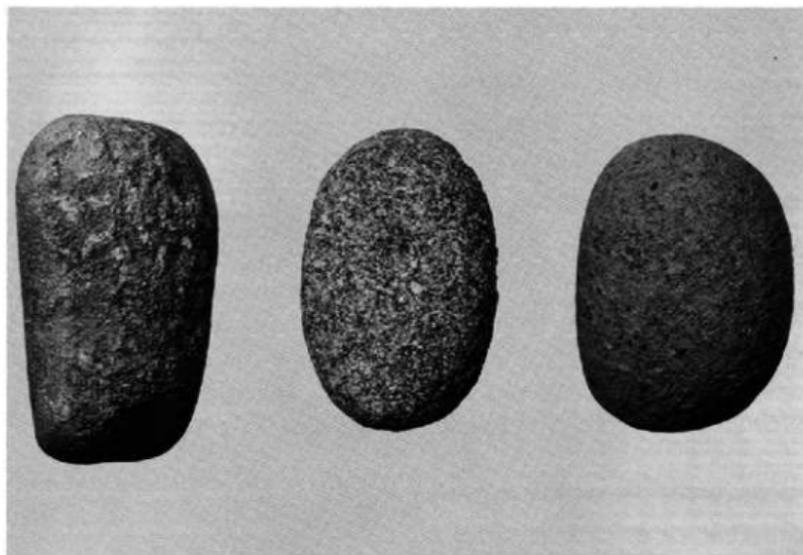
(2) I層出土石鏃 (各)



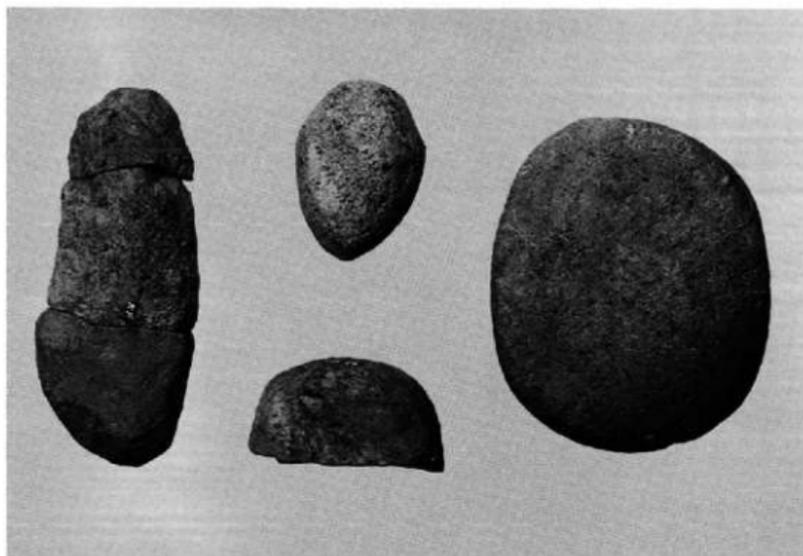
(1) I層出土石匙・スクレイパー (±)



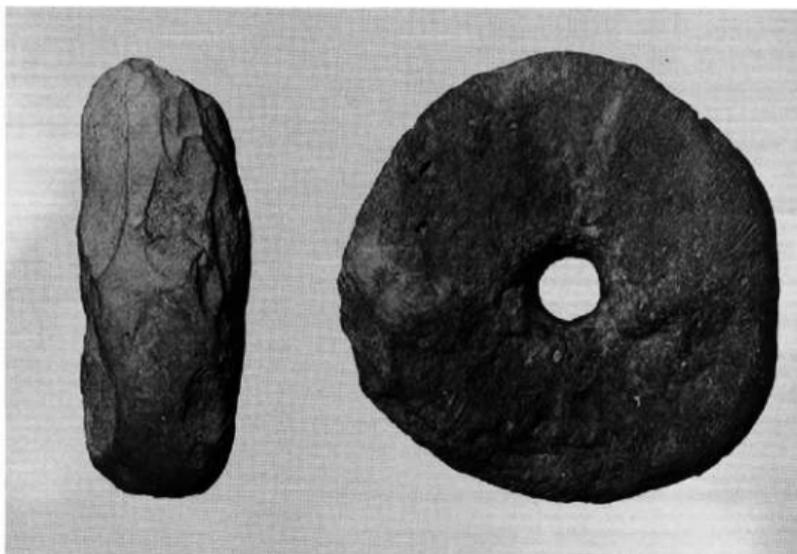
(2) I層出土スクレイパー・石核・原石・UF (±)



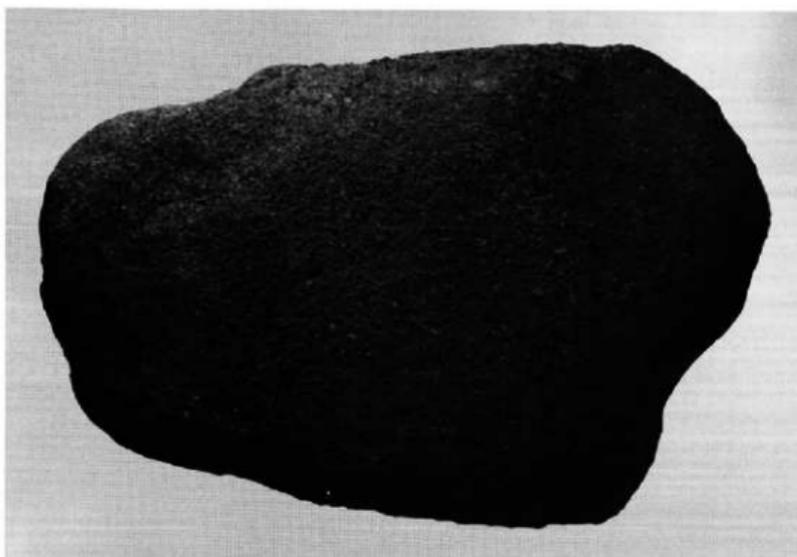
(1) I層出土磨石 (±)



(2) I層出土磨石・石斧 (±)



(1) I層出土石斧・環状石斧 (1/2)



(2) I層出土石皿 (約3/5)

縄文時代遺跡 F 遺跡

柏原遺跡群 I

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第90集

1983年4月28日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1
印 刷 株式会社 西日本新聞印刷
福岡市中央区天神1-4-1

柏原遺跡群 I

福岡市埋藏文化財調査報告書 第90集

1983

福岡市教育委員会